大正三年八月十八日印刷
大正三年八月廿一日發行

有朋堂文庫
脚本傑作集上
（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

猿曳門出諷 終

て立つて居ろ、本釣鐘、蟲の聲、忍び三重。

傳兵衛「お俊、外に言ひ遺す事はないか」お俊「アイ母さんのお顔、一目見たればモウ此世に思残す事はござんせぬ」傳兵衛「兄貴の深切、此世で言はれぬ禮のありたけ、未來から言はうワイの」お俊「サア一時も速う」傳兵衛「南無阿彌陀佛」お俊「南無阿彌陀佛」ト刀振上ぐる所へ、友七扇屋井筒屋の男大勢、弓張提灯を持ち、代官一軸を持ち、九平太に縄かけ引立て出る。友七「これ二人とも死ぬるに及ばぬ、待つた〱、官左衛門は一軸の盗賊、殺され損と左内様の訴へ」代官「誠の一軸受取つたれば、傳兵衛殿は再び歸參」傳兵衛、お俊「エ、忝ない」代官「この九平太も悪人の加黨人、邸へ引立て諸事はお上の御裁許次第」友七「めでたく此場はお立ち〱」

ト打出し　幕

きおとす、與次郎こなし、チョン〱にて道具一面に後へ引く。

造物、黒幕松原になる、本釣鐘うつ、ト橋懸より友七弓張提灯を持ち、傳兵衞を探ぬる意にて花道へ行きかゝる、ト向より九平太儀助萬八奴二人ついて出て。

九平太「なんと兩人はくたばつたで有らうなア」儀助「左樣で御座ります、彼奴らが相死すればマア片づくといふもの」萬八「厄病の神で、敵討をなされたも同然で御座ります」九平太「さうともさうとも、シテ彼の一軸の儀は」萬八「河原でちよろまかして摺替へた誠の一軸」ト出して九平太に渡す、九平太押戴き。九平太「出來した、鷹の一軸が無事にあるとも知らず、くたばつて終うた大馬鹿、是さへあれば歸參の種」萬八「わたし共も金儲け」三人「味いワ〱」ト友七ずつと出て。友七「扨こそよい事を聞いたワイ」九平太「ヤア汝は」萬八、儀助「友七か」友七「オヽ友七ぢや、聞くとも知らず汝們が口から、手め上げさした誠の一軸、こつちへ渡せ」九平太「面倒な野郎め、たゝんでしまへ」萬八、儀助「うぬ」ト雷電車軸になり、皆々を相手に大立の中、九平太一軸を隕す、友七取上げ。友七「扨こそ一軸」九平太「それを」トかゝる、此人數つかみ合ひながら橋懸へ入る、チョン〱黒幕きつておとす。

造物、奥深に聖護院の森の體なり、よき汐にお俊手を合はせ覺悟の體、傳兵衞刀を拔きかけし見得に

そんなら先刻にからの樣子を」母親「オヽ親子一世の別ぢやもの、知らいでこれがならうかいの、是まで幾世の世話になつた傳兵衞殿の身の難儀、見捨てゝは女の道立たず、一緒に死なうと思ひこんだ貞節、それには引かへ傳兵衞殿に、怨つらみ退去狀と無理に勸めた無得心、密々咄の一部始終、聞けば聞く程身も世もあられず、與次郎が孝行無にせまいと、悲しい淚を胸へ呑込み、悅び勇む水盃、わつて言はれぬ切なさ苦しさ、推量して下されノウ」淨『わつとばかりに泣入れば、與次郎は元より傳兵衞お俊、今更何と詞なく。傳兵衞「この期に及び何事も申しませぬ」お俊「不孝の段々堪忍して下さんせいなア」母親「いや〳〵詫所ぢやない、暫時も早う立退いて、生らるゝだけは生のびてたも、とはいふものゝ」與次郎「親子一世の逢ひ納め」お俊「思へばはかない」皆々「成行ぢやなア」ト大いに泣き、七つ半の鐘を打つ。與次郎「南無三、夜が明けては心づくしも水の泡、きり〳〵此夜を猿廻し」母親「まさるめでたう何時までも、命全うしてたもや」お俊「おさらば」母親「さらば」淨『あすの噂となりふりも、窶す姿の女夫づれ、名を繪草紙聖護院の、森をあてどに。ト三重にて傳兵衞お俊表へ出る、與次郎母親をつれ門口へ出て、捨白にて見送る、兩人見返り〳〵花道へ行く、三重上る時兩人つか〳〵と戾る、與次郎母親を內へ入れ、兩人に行けというて內へ入り、表をしやんと閉める、兩人科あつてツイと向へ入る、母泣

俊へ茶碗を戻す。お俊「お前も御無事で」與次郎「さうぢや〳〵、そこでお俊が、イヤそこでお俊が、イヤそこでお初が」お俊「これが此世の」ト泣かうとする、傳兵衛お俊が口を抑へる、母親嬉しき科あり。與次郎「戴いたものぢや、これ戴くノウ盃を、さんな又有らうかいな」ト三味線の合、此間に早うと目配して傍にある脚絆、菅笠、旅の用意といはうとして氣をかへ下を叩き。「くるりと反りて立つたりな、立つてくれ、これ立たしやませ、序に日和も見てたもれ」トこの中傳兵衛、お俊を下手へつれて行き、右脚絆三尺帶などして旅などする用意。母親「それそれ日柄を見て眉をおろしや、あゝこの目が自由にならば、眉下しやつた顔が見たい、こればつかりが殘り多いワイなう」與次郎「いや器量はよし、眉を剃つて帽子を著せて、前帶にして立たして見たい、よい女房ぢやあらうぞい、よい女房ぢやに〳〵、ノウ有らうかいな、さんな又有らうかいな、日和を見たらば落ちてたも〳〵」ト早う行けと仕方する、兩人泣く〳〵表へ行きかける。「さうぢや〳〵お猿はめでたや」トお俊泣かうとするを、與次郎下を叩いて母親を教へ。「めでたやな、ハヽヽ、まさるめでたう盃を此邊で納めませう」ト手酌にて飮み。傳兵衛「おふくろ」お俊「かゝさん」傳兵衛「お暇申します」トお俊をつれて表へ出ようとする。母親「娘待ちや、思ふ夫と死出三途の旅、此世限の母が顔、とつくりと見やつたか」與次郎「母者人、

コリヤと竹にて舞臺を叩きまぎらす、是より床の三味線一挺にて、與次郎猿を遣ふ。「これ徳兵衛さん、あんまり來やうが遲い故、お初さんが顔眞赤にして、腹立てゝ居やんすワイなう、サアサア祝言の觴ぢや、さいて遣らんせ、サア〱祝言の盃ぢや、さいて機嫌直して盃を戴かんせ、これ〱」トお俊泣いてゐる。「さりとは〱ノウあらうかいな、また有らうかいな」ト謳ふ、三味線の合あつて納まる、傳兵衛泣いてゐる。「これはしたり、足で盃をさすといふ事があるかいなう、それでは嫁御樣が戴かんせぬワイなう、ほんまに盃をさいて遣らんせ」ト傳兵衛氣を取直して茶碗を前方へ差出す、與次郎茶碗を取次ぐ、お俊が傍へやり。「さうぢやさうぢや、ほんまに祝言の盃ぢや、機嫌直して盃を戴かんせ」ト矢張りお俊泣いてゐる。「これこれ戴くノウ盃を、さんな又有らうかいな」ト謳ふ、お俊飲む。「嫁御の晝寐もころりとせい、〱」トお俊傳兵衛兩人泣いてゐる。「ナこれ、エ、ノウあろかいな、さんな又有らうかいなア」ト謳ふ、始終母親に氣をかねてゐる科、始終三味線の合引てゐる。「さかさまな事ながら母者人へ」ト母親に暇乞の盃をせいといふ心にて、與次郎顔にて敎へる、お俊母親の傍へ茶碗を持つて行て。お俊「そんなら母樣、上げませう」ト母親茶碗取上げ、傳兵衛酌する。母親「オヽ嬉しうござる、隨分聟殿と間ようして、幾千代かけて連添うて下されや」トお

オさうだ〳〵、じたい彼の傳兵衛といふ奴は、大抵惡者ぢやない、あゝいふ奴に關係つて居つては、お俊が身の爲にならぬ、ノウお袋、さうだの」母親「左樣で御座りますとも、娘々、そこに居やるか、何故ものを言やらぬぞいの、田舍のお客樣へ行末を頼みやらぬか、但し未傳兵衛に心が殘つてあるか」お俊「何のマア退狀をやるからは、心殘りは御座んせぬ、いつそ心がわつさりとなつたワイなア」ト隱して泣く。與次郎「さうぢや〳〵、田舍へ行けば何處もかも納つて慶たい〳〵、母者人、何とめでたいぢやないか」母親「オヽめでたい段ではない、これ與次郎、とても物事に二世まで變らぬ祝言のまねび、一寸盃を出すまいかいのウ」與次郎「これも有理、母者人は尉も姥も二人前、俺は仲人かいぞへは、商賣の猿、イヤ祝言に猿はわるい、謠のかはりに舞をまはせば猿まひといふ喜縁もよし、酒樽は先刻に打明けて時の用には土瓶のこの茶」ト蓋を明けて見て。「南無三水ぢや、暑さの時は水も可からう、サア〳〵壻さん、そこへ出やしやりませ、嫁御も爰らあたりへ直つたり、おつとよし〳〵、まづ座も改まつた、サア〳〵是からが祝言、四海波のかはりには猿に舞を舞はして」ト此中母親を上の方へ、傳兵衛お俊もよき所に坐らせ、捨白いろ〳〵有つて、猿を泊屋より出し。「祝言なり門出なり、めでたいぢやないかいなう、母者人そんなら始めますぞえ」「お猿はめでたやな」ト謳ふ、お俊泣かうとするを、

の聲がしたが、誰方ぞお人でもあるかいの」與次郎「ア、イヤそりや何で御座んす、オ、それ〳〵妹がお客で御座んす」母親「何といやる」與次郎「サア妹を身請せうと、田舎のお客様が、こなさんや俺に會ひにお出なされたのぢや、それで先刻の離縁狀お目にかけたれば、きついお悦びで、直に身請せうとおつしやるワイの」母親「あの田舎のお客様が、シテモウお歸りなされたかや」與次郎「イエイエ、今爰で談合最中ぢやワイの、もしお客様〳〵」ト傳兵衛が肩を叩く、こなしあり。「今の談合、母者人を落つかす樣に、田舎のお客様になつて、イヤサ田舎へ連れていぬると、ナア、田舎のお客様」トいろ〳〵呑込ませ、母の側へ寄る、傳兵衛こなしあり。傳兵衛「是はお袋、わつちは遙か遠國者でござんす、始めて逢ひやんした」ト訛つていふ、お俊隱して泣く。母親「エエ貴方が田舎のお客様かいなア」傳兵衛「アイさうでござんす、上方を見物に登りやんしたが、不圖お俊殿に馴染みやんして」ト與次郎色々仕方する、傳兵衛張臂して。「そこで彼の身請して、國許へ同道すべいと思うた、それであの談合に來申したのさ」ト始終訛つていふ、母嬉しがるこなし、お俊泣く、この時與次郎庭の石取つて財布へ入れ持つて出る。與次郎「時に身請の金は丁銀にしてこれこの通ぢや」ト母の側へどつさりおく。「此金を親方へ渡せば妹が身の片づき、京に置かずと田舎へ遣るも、惡者の傳兵衛に鼻あかす思案の天上ぢや、ノウお客様」傳兵衛「オ

死ぬるにも死なれぬ命、私も死ぬる事は思ひとまりまするワイなア」與次郎「すりや聞入れてくれるか」お俊「お前もながらへて下さりますか」與次郎「さういうて欺すのぢやないかえ」二人「何の僞り申しませう」與次郎「そんなら眞實、エヽ忝ない、アヽ嬉しや、其一言を聞いたのでとつと落ついた」傳兵衞「お詞に隨ひ、一先こゝを立退いて、折を見合せ母御へも詫をしませう、したが始めて逢うた兄御に、よい事は聞かしもせず、言譯もない此身のしだら」與次郎「ハテ言譯所ぢやない、ぢやが京を立退いたら便のない妹、見すてゝやつて下さりますなえ」お俊「心がかりは母さんの御病氣、御無事な便を折々は聞かして下さりませえ」與次郎「母者人には俺がついてゐる、何にも案じる事はない、わが身も落ついたら、達者な便りを」傳兵衞「兄弟夫婦とからみながら」お俊「一緒に居る事のならぬといふは」與次郎「これも前世の約束事か」傳兵衞「思ひまはせば」お俊「傳兵衞さん、兄さん」傳兵衞「お俊」與次郎「是非もない世の」三人「有樣ぢやなア」淨『三人手に手を取交し、保ちかねたる溜涙、落ちて流れて堀川の、水に淵なすばかりなり、母は夜さへの目も合はず。母親「娘どこへ往きやつた、與次郎まだ寐やらぬかいノウ」淨『いひつゝ出る母親に、泣く目を包む目配と仕形。與次郎「アヽイヤ何で御座んす、妹は暑うて寐られぬと言うて爰で涼んでるやんすワイの、お前も寐られませぬか」母親「サア／＼何やら窃々と物音、さうして聞きつけぬ殿達

も日を閉がつしやつたら、面白さうに猿廻し、何たのしみに商賣せうぞ、モウ餘命もない母者人、悲しい事を聞かさず、めでたう見送りたいと思ふ俺が願ひ、わが身とても其通り、今死んで終うたら、其身の道は立ちもせうが、孝行はどこで立つぞ、爰の所を聞分けて死なうといふ無分別は、さつぱりと罷めてくれよ、よ、合點がいたか、傳兵衛さん、お前様も親御様が御座りますか、親の心といふ者は、人間はおろか」淨『たとへ鳥類畜類までも、子の可愛さに變りはないげな。「それに今情死して死んで終うて、明日は憂世の笑草」淨『お俊傳兵衛といはす氣か。「もしやお前が死にやしやつたら、親御様達が聞かしやつたら、悲しうて〳〵身も世もあられう、親御への孝行に思ひかへて、死ぬる思案はしかへて下さりませ、此様にいうたとて、二人の間を引分け、離縁て下されと言ふではない、ハテ想ひあうた二人が間ぢや、連立つて京を立退き、何處へなり、國の果山の奥にも身を忍んで、どうぞ命全うして下さりませ、義理ある親と妹に、責めからまれし胸の裡」淨『マアこゝの道理を聞分けて。「この與次郎が一生の頼ぢや程に、「妹傳兵衛さん、こればかりは何卒聞入れて下さりませ、これ拜みます、拜みますワイなう」

淨『意見の詞後や前、眞實見えてあはれなる、二人は何と詞さへ。傳兵衛「兄御の志を聞いては、生存へるがせめてもの氣休、お俊そなたも其意で有らうがの」お俊「母さんのお歎を思ひませば、

とはなる程男ぢや、尤ぢや道理ぢや、お前も道理ぢや、お俊も道理ぢや、道理ぢや〳〵、とこんな事ばつかり言うてゐては、根つから葉つから分らぬ道理ぢや、今更いふではないが、もとこのお俊と私は血を分けぬ兄弟で御座りまする、此與次郎が五年以前、十死一生の大煩、なさぬ間の母者人が身にかへての艱難、看病介抱に愚はなけれど、人參を盛らねばならぬ命の瀬戸、貧苦の中で調へる事も叶はぬ、母者人の心一つで、娘のわが身を祇園町へ勤奉公、その精力で間もなう本腹、わが身の事を跡で聞いて吃驚をせいまいか、義理ある妹が身を賣つた人參代で、本腹したてゝ何の本望、あゝひよんな事ぢやと悔んでも後の祭禮、立金せうにも大枚の才覺がどうして出來よう方便もなし、せめては母者人を大切に、妹と二人の孝行竭さうと思込んだが初一念、何一つ不自由をさせず、貧乏を押つゝんで、無い金をある樣に、贅のあり傑をいひ並べてかいてのく嘘八百、眼の見えぬ一得には、それを誠と思うて、ほたほた〳〵して悦ばしやる機嫌のよい顔を見るのが、朝夕の俺のたのしみ、其中でも唯案じさつしやるはわが身の事、俺が手前は隱し包んで言ひこそさつしやらね、案じ〳〵たおどもりが積り〳〵てあの病、ひよつとわがみに若もの事があつた時には、唯さへ病疲れてゐやしやる母者人、そんな事など聞かしたら、忽ち其座で死んでしまはつしやるツイやい、憂い辛い渡世をするも母者人がある故、今に

前が今更に、獨り死のとは胴欲な」浄『聞えませぬと夕露の、袖にあまりし怨泣、此場の手には傳兵衞が、詞なければ。「一緒に死んで心が濟まずば、わたしが先へ」ト傳兵衞が脇差に手をかける、與次郎止めて。與次郎「これはあぶない、こりや何するのぢや」傳兵衞「そなたより此傳兵衞が」ト腹切らうとするを與次郎とめて。與次郎「是は何事ぢや、待つた〳〵」お俊「やつぱり私が」與次郎「さりとては危ない」傳兵衞「イヽヤ俺が」與次郎「ハテ扨短氣な」ト揉合ふ。「妹、待ちをらぬか、傳兵衞樣も待たんせ〳〵」傳兵衞「それぢやというて」與次郎「さりとてはこれ奧へ聞える、待たんせと言うたらマア〳〵待たんせ」トいろ〳〵双方を靜める。「ヤイおどれ、今死んで傳兵衞さんの爲になるか、母者人に歎をかけて、それで汝本望かい、死なす事はならん、死にをんな、死にくさるな、とサア呵りや呵るものよ、お山の生張とやらはそこらぢや、尤ぢや道理ぢや、傳兵衞さん、面目次第も御座りませぬ、是まで妹がお世話になつた其恩も義理も辨へず、一途に間を引分けうとしたは、皆こつちが惡かつた、まだ其上に最前から色々の惡口、さぞ腹が立つたで御座りませう、怺へて下さりませ、了簡して下さりませ、この兄には引かへ、道を道と立て通す妹が心底、よう死なうというた、出來した、尤ぢや道理ぢや、傳兵衞さん、お前も人を殺したからは所詮助からぬ命、人手にかゝつて見苦しい死をせうより、いつそ死んでしまふ

聞く、又讀む。「祈り參らせ候ふ所に、二世もといひ交した傳兵衛樣の思はざる此度の御難儀、根を尋ぬれば皆我ゆゑにて候へば、今更見すて候うては女の道立ち申さず、不孝とは思ひながら、共に覺期を極め參らせ候ふ」與次郎「ヤアどうやら材木が間違うた樣なぞ、さうしてどうで御座ります」傳兵衛「覺悟を極めまゐらせ候ふ、せめて名殘にお顏を拜したく、最前戻り候ふ折から、譯立てゝくれいと段々御申しなされ候ふ故、是非に及ばず退狀と僞り、かくは書遺しまゐらせ候ふ、何事も前世の定り事と御あきらめ下され候ふ、申上げたき事數々は筆に盡しがたく候へども、心せくまゝあら〳〵申しのこし參らせ候ふ」與次郎「ヤア〳〵」お俊「傳兵衛さん、さらばで御座んす」浮『身を沈めんと立寄る井の元、吃驚あける門の口、妹を抱止め引入れて、傳兵衛も共に溜息の、涙はさらに分ちなし。傳兵衛「日頃の心は知りながら、疑うたは惡かつた、了簡してたも、この傳兵衛は人を殺し、剰へ預りの一軸は失ひ、とても生きては居られぬ身の上、そなたが死んではお袋や兄御の歎き、生存へて亡き後のとひ吊ひ、必ず共に頼んだぞや」浮『いへばお俊は泣出し。お俊「そりや聞えませぬ傳兵衛さん」浮『お詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる初より、互に胸を明しあひ、何の遠慮もないしやうの、世話しられても恩にきぬ、ほんの女夫と。「思ふもの、大事の〳〵殿御の難儀、命の際に振捨てゝ、女子の道が立つものか、それにお

入變つたのぢや、さうとは知らいで宵の約束を違へず、うか〳〵と戻つたが悔しいワイ、口惜しいワイ」浄「齒をくひしばる男泣、怨を聞くも隔たる戸口、心はさうぢやないじやくり。お俊「傳兵衛さん、腹の立つは道理ぢや、道理で御座んす、氣を鎮めて其狀をとつくりと讀んで見て下さんせいなア」與次郎「サア〳〵可いワイ、わりや默つて居い、傳兵衛、イヤ傳兵衛殿、其狀俺が讀んで聞かしたいけれども、俺は何、ソレ、オ、祐筆ぢやワイ、おどれ其處できり〳〵讀めいやい」浄『つき付けられて目にたまる、涙を拂ひ。傳兵衛「ナニ書遺の事」お俊「ア、これ傳兵衛さん、お前ばかり窃と讀んで下さんせ、兄さんコ、爰明けて下さんせいなア」トあせる科。與次郎「ならぬ〳〵、突合はしては怪我の基ぢや、何ぢや書遺ぢや、えらい嘘ぢや、嘘を吐く奴ぢやなア、俺が無筆といふ事を悟りくさつて、書遺の點違ひを食はして、お俊をちよいと突かうでな、さうはさゝぬワ、なる程おりや無筆ぢやさかい物はえう書かん、えう讀まぬけれど、聞く事は無筆ではないワイ、ほんまの通り讀めやい」ト傳兵衛讀む。傳兵衛「誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へ難き親の御恩、殊更御不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤を脱れ、世を樂に過させまし候はゞ、兄さんの御肩助け、せめて少しの御恩報じ、孝行の片端にもなり候はんと、それのみ朝夕祈りまるらせ候ふ所」ト讀んで科あり、お俊表で泣く、與次郎は合點のゆかぬ科にて

ぶないぞ、扨は聞及んだ傳兵衛ぢやなア、汝悪い奴ぢやなア、妹を殺しに來たのぢやなア、ひよんな事して取違へた」ト言はうとして。「ひよんな事ぢやないワイ、故意と取違へてこましたのぢや」ト手拭を鉢巻にして。「傳兵衛何ぢやい〳〵、汝が傳兵衛ならおりや與次郎ぢやワイ、恐らく京中を股にかけて歩く猿廻しの與次郎ぢや、さる程與次郎手並見せうか」ト傍にある枴を取つて。「寄るな〳〵、寄つたら卑怯ぢやぞ」ト枴の先にて三尺手拭を取り是ぢや、汝が何ぼう脇差を持つても、此方にはこの手覺のある枴で、汝を偉う擲いてこまして、此三尺手拭でがんじがらみに括つてこます、汝が働いたとて、どつこいそつこい動かす事ぢやないぞ」

與『いふもがた〳〵胴震ひ。お俊「これ兄さん、傳兵衛さんはそんなお方ぢや御座んせぬ、こゝ明けて下さんせいなア」傳兵衛「兄御に逢うては言譯もない此身のしだら、たとへ如何樣なりましても手向は致しませぬ」與次郎「いふないやい〳〵、そのしほ〳〵見せても、お俊を突かうと思うて、其手はくはぬワイ、オヽ忘れてゐるワイ」ト腰さげより最前の狀を出し。「悪者のおどれに繋がつてゐては妹が難儀をする、そこで先刻に退狀を書かした、お俊はモウ否がつてゐるのぢやこれ讀んで見いやい」ト狀をほふる、傳兵衛取上げ。傳兵衛「ナニお俊が退狀とな」與次郎「オヽ母者人や俺が眼の前で書かしておいたのぢやワイ」傳兵衛「お俊、こりや何ぢやなア、今の間に心が

きの、聲を寐耳に與次郎悔り、起きると明くる門の口、娘が姿も暗紛れ、捕へる袖のふり合はせ、お俊と心得傳兵衛を、無理に引込み取違ひ、戸口を内からびつしやり引立てしめ。與次郎「そりや突きに來た、來居つたぞ、お俊氣づかひすなよ、傳兵衛は外へ突出して終うた、お俊じつとして居よ、エヽこれ時も時と火が消えてある、お俊〳〵、それ釜の前に火打箱がある、火を打つて行燈へ點せいやい」ト戸を押へながらあせる、傳兵衛うろ〳〵する、お俊表より戸を叩く。「エヽわりや勝手を知らぬか〳〵」トお俊しきりに叩く。「喧しいワイ、なんぼう叩いたて明けるものかい、かう懸鍵をかけておけば滅多に入る事はならぬ、お俊、彼方は死身でゐるぞよ、ずつと其方へ寄つてゐよ」トこんな事をいひ〳〵、附木に火をつけ持つて行て、ふとして傳兵衛に行當り火消ゆる。「エヽ何するのぢやぞい、そつちへ寄つて居よ、あぶないといふのに」ト附木に火をつけ。淨『さぐる手先に火打箱、隔てられたる關の戸口、二人はうろ〳〵與次郎が、がち〳〵震ふ附木の光。トこの中捨白にてまた附木に火をつけ、行燈へ火をともし。與次郎「お俊、何にも案じる事はない、俺が居る、是からおのれどうするぞ」トいひ〳〵傳兵衛と顏見合せ吃驚して、そんなら今取違へたかといふ思入あつて門の戸を明ける、トお俊入らうとするを、突出して戸をびつしやり閉め、吃驚して思入。「こりや今度は内へ入るな、あ

淨『打ちつれてこそ立歸る。ト皆々捨白いうて入る、ト四つ時太鼓、わり竹鳴子の音する、いろいろある。與次郎「オヽ四時を打つて來た、母者人、お前寐やんせんかいノウ」母親「思はず夜が更けた、母も寐やう、そなたも休みや」與次郎「アイ儕も寐やんす、サアごんせ〳〵」ト手を引き障子の中へやり。「お俊はお前の傍に寐さしてやつて下さんせ、母者人、暑くと裾に物を置いて、風ひかんすなや」トいひ〳〵そこにある蒲團枕を障子の裡へ入れ、表をしめかけ鍵をかけ、いろ〳〵あつて。「どりや臥せりませうか〳〵」ト寐所枕を直し、著物を脱ぎ、裾よりはき、帶をする事有つて思入あり。「まづ是でよいワ、時に悪者の傳兵衞は退かして終うたし、かうつと明日は川東の方を廻つて、いや〳〵斯ういふ事をいうて居る間に、早う寐てよい夢でも見ませう、誠にかうした所は機嫌上ちや、ヤツトコナア」ト横に寐る。
淨『横にころりと氣散じは、如何なる夢を結ぶらん、頃しも秋の月さえて、宵の手筈に傳兵衞が、戻りかゝりし門の口、合圖の小石ばら〳〵と、聞くにお俊が飛立つ思ひ、上る枕も打外す、與次郎は傍に高鼾、心も共に行燈の、燈火吹消しさし足に、心せく程明けかねる、戸口の垣鍵表には。傳兵衞「お俊ぢやないか」お俊「傳兵衞さん、待ちかねて居たワイなア」傳兵衞「暇乞が濟んだら一時も早う」お俊「サア然うと思へど、ねつから表の戸が明からぬワイなア」淨『あせる二人が呼

間にそれへ差上げませう」古手屋「これは御苦勞」米屋「おさへの上げませう」家主「時にモウとめにせぬかいの」與次郎「とり際が悪う御座りまする、マア一つお上りなされませ」ト與次郎つぐ、家主捨白ある。與次郎「左樣ならモウお預りにしませう」家主「ア丶思ひなしか醉うた樣な、是がほんの茶かもりといふのぢや、ハ丶ハ丶丶丶」ト無性に笑ふ。米屋「これ〳〵お家主、此方は可笑しいか知らぬが、お袋をあれ程迄に大事にする與次郎が心根を、思ひまはせば廻すほど、おりやモウ悲しうて〳〵身も世もあられぬワイのう」ト泣く。母親「ハア丶米屋樣は泣上戸と見える」古手屋「何ぢやい〳〵、笑うたり泣いたり、人を曲るのかい忌々しい、腹が立つぞ、氣體が悪いのぢやぞ」家主「何ぢや腹立てるか、こいつはをかしい、ハ丶丶丶」米屋「おりやモウ悲しうてならぬ、去んで泣きませう」古手屋「是から去んでから夫婦喧嘩ぢや」家主「笑ふをしほに去なう、峠の孫嫡子、サア皆連立ちませう」米屋「懸聲變じて酒機嫌」古手屋「いぬる道々のたやして」家主「釣鐘屋の權兵衛樣と」米屋「輪ちがひ屋の八兵衛樣と」古手屋「井筒五郎が頬被」淨「迯げさんす追ひかける、つかまへて叩き合ひ。ト三人一寸ふりあつて皆々顔見合はせ。三人「ハ丶丶丶醉はぬ足許千鳥足」母親「是はマア早々の仕合」與次郎「さしてもの酒もりで、誰方も〳〵きつい醉やう」家主「イヤモウ怪しからぬ御馳走で」米屋、古手屋「酒には醉はねど」三人「とんと茶に醉うたやうな」

貴方がたの御深切、さうしてマア折角のお出、御酒でも上げましやらぬか」家主「イヤ〳〵世話やかしやんな、爰な家に酒氣の有らう筈がない」トいふのを與次郎打消し。與次郎「いや〳〵酒がある、御座りまする、爰に到來の名酒が御座りまずる」ト大和風爐にかけし土瓶を持つて出る。家主「何をいふやら、是は茶」與次郎「サア茶、茶に似た山吹といふ名酒、皆さん、母者人の馳走ぢや、一つ上つて下さりませ」家主「エヽ成程〳〵名酒承知致した、何と皆の衆、馳走にあひませうかい」米屋「こゝろざしぢや、一つたべませうかい」古手屋「お袋も參りませぬか」母親「マアお上りなされませ、兄、お下物はあるかや」家主「イヤ下物氣はなんにも」ト與次郎いろ〳〵仕形、家主いろ〳〵あつて。「アヽなる程〳〵、何ぢや鯛のはま燒、目の內八寸、こいつは偉いワ」米屋「硯蓋は蒲鉾に生貝、ふつさりと切つたノウ」古手屋「何ぢやあちやらかあちやらの樣な事ぢやなア、時に始めませう」ト茶碗とる、與次郎酌をする。「おつと有るぞ〳〵」ト飮んで。「是は結構な御酒ぢや、八兵衛殿上げませう」米屋「お戴きませう、五郎兵衛殿、あがりませぬか」古手屋「まづ〳〵」トいふ中米屋飮んで。米屋「誠に怪しからざる名酒ぢや、まづ順盃に仕りませう」古手屋「お戴き申しませう」ト飮んで。米屋「えらい〳〵、イヤお家主へ差上げませう」家主「ちよつと抑へうかい」米屋「おあひしませう」家主「こりや話せるワイやい」ト米屋飮んで。米屋「此

朝の猿廻し、兩方合して二十五孝」米屋、古手「もらひ涙を」三人「こぼしましたワイなう」ト皆々泣くと内より。母親「お人があるさうな、其處へ往て挨拶しませう」ト此聲に三人吞込ます科、三人著物を與次郎に著せてやり、ひそめく科にてしか〲あり、母親さぐり出る、ト介抱して。與次郎「オヽ母者人、お前に知らさうと思うた所ぢや、爰に御座るはお家主樣や米屋樣古手屋樣で御座んすワイの」母親「これは〱誰方もようお越しなされましたなァ」ト與次郎は目配する、吞込むこなし、家主輕蔑笑して。家主「ハヽヽヽイヤお袋や、孝行な息子を持たしやつて、アヽ此方は幸福な人ぢやワイな」母親「ハイ〱、いやモウ貴方がたが深切におつしやつて下さりますと、影ながら悦んで居りまする」米屋「それ〱、いや又悦ぶ事は悦んだがよい、與次郎、この間おこした近江の上白米、モウ切れたであらう、俵でおこすと邪魔であらう、こちでツイ仲衆共に持たしておこさう」與次郎「それはお世話樣で御座ります」古手屋「與次郎、お袋の著物がよつぽど垢づいたぞや、古著はほい〱と捨てゝ終うたがよいぞや、新しいのを著かへさしたがよいぞや、店の手代共を廻らさう程に、遠慮なしに吩咐きや〱」與次郎「ハイ〱」家主「物は談合ぢやが一向この家を買はぬかいの、帳切も家賃も俺さへ吞込んだらよいぢやないか、家持になつて猿廻をしたら面白いではあるまいかい、ノウお袋」母親「ハイ〱、イヤモウ何を申すも

家主わき目する。「米屋さん、古手屋さん、どうぞ今暫くの所」ト兩人脇目する。「御了簡といふも皆此方の勝手ばかり」ト一寸思案して、片側にある猿の著物二つ程持つて出で、其身も裸體になり、著物を一つにして眞中におく。「わづかの著そげも殘らず代なして、これだけが私が身上、借錢のかたと申すでは御座りませぬ、ほんのお前樣方のお心ゆかし、腹癒ぢやと思召しても、ちつとの所を何卒御宥免なされて下さりませ、もし拜みまする〳〵、お情で御座ります、お慈悲で御座ります、男に生れたといふ名ばかりで、一人の母者人を養ひ兼ねる不甲斐ない身の上、力わざにも才覺にも叶はぬ、金に憎まれた私が切なさ、御推量下さりませ」ト涙を流す。淨「お情お慈悲と手を合はせ、拜んでまはる孝行の、誠は詞にあらはれし、家主は眼をすり赤め。家主「與次郎、扨も〳〵汝は孝行な者ぢやなア、皆どう思はつしやる、今の心底を聞いては、おりやモウ家賃を取る氣は御座らぬが、こなた衆はどうさつしやる」米屋「權兵衞樣のおつしやる通りに、私も一人の母者人が御座るが、誰しも孝行にはしたいものぢや」古手屋「それ〳〵今の一言を聞いては、催促どころでない、俺も古手代を」米屋「こつちの米代」家主「家賃の帳面もすつぱりと消ぢや〳〵」與次郎「エヽ、そんなら聞入れて下さりましたか、エヽ忝ない」家主「ハテ扨禮には及ばぬワイの、又とあるまい孝行者」米屋「唐土にては二十四孝」古手屋「我

諸道具渡さにや家賃算用」米屋「こつちの米代」古手屋「俺が古手代」家主「今こゝで算用するか」三人「與次郎どうぢやぞい」ト三人趺坐かいて下にゐる、與次郎奥へ聞えんかと案じる科あつて。與次郎「サア何を申しまするも母者人の病氣、一口の煙さへ立て兼ねる身貧な生計、私が身一分なら諸色を賣つても御損をかける氣は御座りませぬ、今でこそ斯ういふ樣なれ、親父樣の生涯には、室町通りでともかうも暮した身の上、商賣にしもつれて來ると、親父樣は死なつしやる、詮方つきて身代を疊み、この堀川の裏家住ひ、猿廻を渡世にして、纔の煙を立つる中に、樣子あつて妹は勤奉公、間もなう母者人の大病、其中で風眼とやらを煩らはれて、それからの、胤腹わけぬ義理ある母者人、病氣の中に内所の不自由なを聞かせとむないと思うて、氣遣さんすな、懇意な旦那衆から米も木も、小遣澤山に續けて下さる程に、案じる事はごんせぬと、貧しい生活を隱し包んで、今日が日まで機嫌よう樂々と暮させましたも、それと申すも皆お家主樣、米屋樣、古手屋樣、あなた方のお情で、今日まで快うおつしやつて下さつたに依つて、母者人の手前を繕うておきました、それに今お腹を立てられまして、聲高におつしやつて下されますと、扨はさうで有つたかと氣を取詰めて、どんな悲しい事が起らうやら、さうなりましては是迄竭しました心遣が水の沫、こゝの所をお聞分け下さりまして、もしお家主樣」ト

忘れはせまいなア」古手屋「古手商で小口も利く井筒屋五郎兵衞、見知つてゐるかい」米屋「ハテマア此方から言はして下され、イヤ與次郎、今日が日まで仕送つた米代、斯う延々にする因緣はなけれども、あの猿廻の與次郎は、親に孝行な者ぢやと世間の評判、若いに似合はぬ奇特なと思うたが商ひの仕初、賣かけのしやりを三文も拂はぬこそ、菩薩の樣な米屋樣を踏倒し居つたなア」古手屋「イヤそればかりぢやない、母者人が仕著ぢやというて、生活にそぐはぬ絹物の賣まはし夏ものから、仕送つておいた利足さへそこ〳〵、孝行ごかしに迷はされ今での後悔、逢うた時に笠を脫げぢや、何でも今夜はめつきをするのぢやぞ」家主「はて扨四も五も要らぬワイなう、家財かざいを賣立てゝも、四五貫には足るまいが、せめてもの腹癒ぢや、建具から鍋釜を引さらへ、分取にしませう」米屋「それ〳〵」家主「マア疊から上げさつしやれ」ト三人立ちかかる、與次郎皆々を宥め。與次郎「御尤ぢや、お道理で御座ります、御三人ともマア〳〵お待なされて下さりませ」ト宜しく宥める科あつて。「段々の不埒、お斷の申し樣も御座りませぬ、何を申しても母者人の病氣、奧へ聞えませぬ樣に仰しやつて下さりませ」家主「ア、これ〳〵、婆樣が煩ひぢやとて俺們は損をする筈はない、そんなで行くのぢやない、ノウ皆の衆」米屋、古手屋「さうぢや、是でも非でも取りむしらにや措かんのぢや」家主「佛の顏も三度や四度の催促ぢやない、

に何かの相談、サアお倅おじや」お倅「アイ」浄「あいと泣目を押包み、親子隔ての破障子、伴ひてこそ入る後へ、家主先に懸乞ども、門口から聲高に。ト家主小提灯持ち、米屋古手屋連立ちて出て。家主「與次郎宅に居るか、皆連立つて來たぞよ〳〵」皆々「あけぬかい〳〵」ト口々喧しういうて戸を叩く、與次郎お倅が詮議かと思うて心遣あり、二枚屛風を立て、奥を見せまいとする、この内皆々喧しういふ。家主「どうぢや明け居らぬかやい」與次郎「ハイ〳〵今明けまするで御座りまする」トしか〴〵ありて表をあける、と家主轉け込む、與次郎吃驚する。家主「エエ明けるなら明けると斷つてから明けたがよいワイ」與次郎「御家主樣、米屋樣、古手屋樣、そんなら今の詮議では、あゝ嬉しや」家主「何ぢや嬉しい、家賃も拂はず嬉しいとはどうぢやぞい、與次郎マア下に居い、俺も下に居るワイ、イヤ貴樣は〳〵見かけにもよらぬのぶとい者ぢやぞよ、尤も宿を變へて來た當座は、相應に家賃もおこしたが、いつぞの程から滯りだして、サアそれからといふものは、すつたのもぢつたのと、へらばかり遣うて、來る節季も〳〵斷りだらだら、常來れば外を家として、たんまりと會うた事がない、そこで今日は皆言合して、夜に入つて仕かけたのぢや、この堀川で人も知つたお家主、鐘屋の權兵衛さんを、よう權兵衛こんにやくにし居つたなア」米屋「イヤ與次郎、おとがひを養うておいた輪ちがひ屋の八兵衛ぢや、見

場を脱けて其上でと、心ひとつに思案を極め。お作「母さん兄さん、お二人のお詞よう合點致して居ります、つい一通りのお客、深い義理のあるでもなし、退いて心の濟む事なら、どうなりとするワイなア」與次郎「そんなら退いてくれるか、母者人、退くといの〳〵」母親「オヽそれ聞いて安堵しました、したが何ぼう其方が退く氣でも、彼方が退かねば詮ない事、とてもの事に傳兵衛殿へ譯立つる退狀をツイ一筆、兄、その硯箱を取つて遣りや」與次郎「さうで御座んす、わが身が離別狀を書いておくと、母者人の氣が慥ぢや、さら〳〵と書いてたも」浄「詞に否と泣顔を、隠す硯の海山と、重なる思ひ延紙に、筆の立所も後や先、涙に墨のにじみ勝なる胸の裡、書遺すとは露知らぬ、與次郎は傍から。與次郎「エヽ其樣に長たらしう書かずとも、ツイ退きますぞやと一筆書いても分る事ぢや」母親「いや〳〵さうぢやない、先にも納得さつしやる樣、とつくりと書いてやるがよいぞや」與次郎「ムヽそこもある、おりや無筆ぢやさかいで、狀の書きやうは知らぬが、彼方さへ得心さへしをれば可いぢや」ト此中文を封じる事あつて。お作「此文を見せさへすれば、否應はいはれぬ、兄さん、こりやお前から渡して下さんせ」ト狀を與次郎に渡す。與次郎「よし〳〵、是さへ持つて居れば千人力ぢや、したが傳兵衛が去がけの駄賃に、汝を突きに來をらうも知れぬ、マア〳〵母者人をつれて奧へ行きや〳〵」母親「どれ〳〵今夜は夜と共

みがないか」お俊「エヽ」母親「イヤ〳〵隱しやつても知つてゐる、人殺の傳兵衞に恩を受けた友七といふ者が、河原の喧嘩は私で御座ると名告つて出て、其場は濟んだげなが、天命脱れず、人殺は傳兵衞と極つた、今詮議最中との噂、合方の女郎はお俊といふ事を、お上にもよう御存じとあつて、色々御吟味があるとの噂とり〴〵、どうかかうかと案じる折から、先刻に肝煎衆が見えて、お俊がゐぬとの付屆け、彼や是やと聞くたびに、母の案じはどの樣にあらうと思ふぞいやい」浄「怨まじりの繰事を、聞くほどせまるお俊が胸。お俊「なる程、傳兵衞さんとは譯ある間、したが其夜の時宜は皆わたしから起つた事、段々の樣子もあれど、明けてはどうも言はれぬワイなア」與次郎「ム、此間河原の喧嘩は俺も聞いて居る、人を斬るほどの傳兵衞、なみや大抵の惡者ぢやない、そんな奴は退くがよい、退いて終へ〳〵」母親「さうとも〳〵、繋がつてゐては兄まで難儀がかゝらうも知れぬ、ふつつりと念斷つてたも、母は元より兄が心を休めてたもや、娘、返事をしやらぬは退く事は否か、これ返事しや、娘、どうぢやぞいノウ」與次郎「こりやゝい、泣いてゐて濟むかい、義理もへちまも去いて終やあかの他人ぢや、母者人の氣休ぢやと思うて去いてたも、こればかりは兄が賴ぢやヤ、これどうぞ思ひきつて去いてくれいやい」浄「わつつ口說いつ親子が意見、勿體ないとは思へども、斷るに斷られぬ胸の裡、所詮死なねばならぬ身の、此

お俊「私が爲には義理ある兄さん、どうぞ何事も聞かせとむないワイなア」傳兵衛「それ〳〵、この傳兵衛も顏を合はしては左や右とむづかしい、其方が暇乞しやる中、おりや此邊をうろついて居よう」お俊「そんならちつとの間待つてゐて下さんすかえ」傳兵衛「よい時分に來て合圖せう、必ず其時後れぬやう」お俊「そりや合點で御座んす」ト傳兵衛元の道へ、お俊一寸とめて。「現在の母さんの所へ、夫婦一緒に行れぬといふは」ト顏見合せて泣く。唄『顏と顏とを見合せて、一度にわつと嘆くにぞ、一足づつに消えて行く。ト傳兵衛氣をかへ。『はや寺々の鐘もつき、闇夜はしら〳〵と、鳥部野山にぞ著きにける。ト是にて傳兵衛向へ入る、お俊門口の方へ來て、表をそつとあけ。お俊「兄さん〳〵」トおづ〳〵いふ。與次郎「誰ぢや、用があるなら此方へ入らしやりませ」お俊「わたしや俊で御座んすワイなア」與次郎「妹か、ようおじやつたノウ、母者人〳〵、妹が來ましたワイなう」ト内より。母親「ナニお俊が來たとは、どれ〳〵往て逢ひませう」淨『といひつゝ出る母親の、手を引くお絹が。お絹「お客あるさうな、お師匠さん、モウお暇申しませう」淨『よそに哀をしら齒の娘、表をさして出でて行く。ト是にてお絹橋がかりへ入る、この中與次郎捨白にてお俊が著物を見る事いろ〳〵有つて。與次郎「妹、見りや人も伴れず、夜夜中わが身はマア何しにおぢやつた」お俊「アイ今夜きました樣子といふは」母親「親方の家を驅落して、たゞす

極樂の、淸水寺の鐘の聲、はや初夜も過ぎ四時もつげ、九つ心の闇路をば、照すや否や稻妻の、ひかりし後の暗きこそ、われら二人が身の上に。トこの中與次郎竈突の下を燒つけゐる、右の唄を假つて向よりお俊傳兵衛こしらへの形にて走り出で、花道に立どまり、兩人あたりを見て。お俊「傳兵衛さん、今のは追人では無かつたかいなア」傳兵衛「今のはわうらいぢやあつたさうな」お俊「ア丶嬉しや、わしや追人かと思うて、はつとしたワイなア」傳兵衛「この傳兵衛は人を害め、そなたは親方の家を亡命、とても助からぬ身の上、是非もない身の成行ぢやワイの」お俊「わたしとても其意で、二人つれ立つ死出の晴著」唄「女肌には白無垢、上に紫藤の紋、中差紅紗綾に黑繻子の帶。お俊「せめては堀川の母さんに、外ながら暇乞がしたいと思うて」傳兵衛「サアそれ故爰まで連立つて來たのぢや、シテ親御の所は」お俊「あの前方の井戸の傍ぢやワイなア」傳兵衛「よそながら聞いて見やう、サアおじや」唄「早う御座れと手に手を取りて、行けど步めど目に見る如くに、今を初の終より、追人の者や來らんに、サア〱最期を急がんと、鳥部の露と消えて行く。ト是にて二人とも本舞臺へ來て傳兵衛内を覗く、與次郎を見て、誰やらんがあるといふ科、お俊入替つて覗いて見て、あれは兄樣ぢやといふ科にて花道へ立戾り、お俊もついて行く、唄の中なり。傳兵衛「兄貴が居らるれば迂濶にも入られず、どうしたもので有らうなア」

いぞや、此間弟子入した米屋の父御から、永々お母の煩ひ、嘸かし勝手も惡からうというて、雪か花かといふ樣な上白米の仕送り、方々の旦那衆からは、何なと用があるなら言うて遣せ、もし又出養生でもさせますなら幸ひな隱居所があるというて來るお方も有り、見舞の贈物に羊羹饅頭生肴、近所隣へ配分もしられねば、鯛や赤貝の類、橫町の鮨屋へ卸賣にする積りぢや、何にも不自由な事はない程に、喰ひたい物があるなら遠慮なしに言はんせ、これ世間に鬼はないぞいノウ」浮『せい八百さへ一貫に、足らぬ節季の斷りを、いふ下稽古やこれなるべし。ト橋懸より町娘お絹出て來て。お絹「お師匠樣お宅にかえ」與次郎「うたてや又稽古かいの、モウ今日は休まんせ〳〵」お絹「アイ今日は休ぢやけれど、明日は瑞龍寺前の料理茶屋で溫習講がある故、此間習うた鳥部山をマア一遍さらへて貰はうと思うて、遲々ながら參じたのぢやワイなア」母親「それなれば晴の座敷、奥へ行て彈合しませう」與次郎「これ氣合が惡くば廢にさんせ、お絹さん、奥は風吹きぢや、障子をさして下んせや」お絹「アイ〳〵、サアお師匠樣」浮『手を引き奥へ入相の、鐘の數さへ哀そふ、世にも侘しきくらしなり。トお絹母を伴立ち西の家體へ入る、障子しめる、暮六つの鐘鳴る、與次郎捨白にて行燈に火を點し、表の戶をさしよせしかゞ〳〵あり。〇與次郎「母者人、用があるなら呼ばんせや、どりや夜食の茶でも沸さうか」唄『ひとり來て、二人つれ立つ

ウ七つ下り、母者人が待兼ねて居られう、汝も休ますワ悦べ〳〵」ト始終在郷唄、本舞臺へ來て。「母者人、戻つたぞや」母親「オヽ兄戻りやつたか、暑かつたであらう、茶も沸いてある、膳も其處にしてある筈ぢや」トいふ中猿の傍へ往て撫でて見て。「オヽ徳よ戻つたか、今朝から子猿めが尋ねて喧ましい、ちやつと傍へ遣つてやりや」與次郎「さうで御座んせうとも、そりや乳を呑まして遣れ」ト猿を戸屋の内へ入れる。「母者人、お前飯も食はんしたか、藥も服まんしたか」母親「オヽ何にも隣のお三殿の世話で御座つた、そりやさうと言はねばならぬ事がある、祇園町に勤めて居る娘のお俊がの」與次郎「妹がどうぞしましたか」トこなし。母親「サアどうもしはせぬが、あのお俊といふは俺が身腹を分けた實の娘、其方は又過去つしやつた親父殿の惣領、俺とはなさぬ間、義理ある親子、孝行にして給るにつけても、長の病に目かひは見えず、貧しい生計の其中に、介抱に疎かもなう、大事にしてたもると思へば、先の知れた母が、早う此世を助りたう御座るワイの」與次郎「これ〳〵母者人、そりや何を言はんすぞいの、なさぬ間でも小いから手汐にかゝつたれば、眞實の母者人同然、大事にせにやなりませぬ、其お前が煩ひの中で、三味線の稽古廢めさんせといへば、いや〳〵結句氣はうじぢやといはんす故、氣に逆ふまいと、身代がいかぬの、内所が不自由なといはんすけれど、これそんな密やかなア生計ぢやな

せませう、マア〳〵お歸りなされて下さりませ」儀助「そんならいよ〳〵戻つては來ぬか」母親「何の僞を申しませう」ト儀助九平太顔見合はせ、うそ〳〵と見廻はす事あり。九平太「何さま、間所もない家、隱してある體も見えぬ、しかし是非こゝへはたよらにやならぬ、其時かくすと親子とも身の上だぞよ」母親「ハテ御念には及びませぬ」九平太「よい、其儀ならば又外々を尋ねて見よう、サア儀助參れ」儀助「かしこまりました」九平太「與次郎とやらが歸つたら此事をいやれ、きつと詞を番うたぞ」淨「詞詰して門の口、何か囁く底だくみ。ト表へ出て九平太囁く、打つれてこそ立歸る。ト兩人入る、母案じるこなし、咳入り弟子介抱する。弟子「お師匠樣、お氣色が惡いかえ」母親「イエ〳〵どこも惡い事は御座んせぬ、咳入るはいつもの持病、今日はモウ稽古は休みませう、おさん樣も壁どなり、用があれば呼ばう程に、お前も休んで下さんせ」お三「アイアイ、したがお俊さんの事なら案じぬが可いぞえ、與次郎さんが戻つてゞあつたら、談合次第でどうなりと成る事ぢやワイなア」弟子「おみきさん、連立ちませう」おみき「左樣いたしませう」二人「又明日參じませう」お三「どりや歸りませう」淨「二人は町へ雇ひ駕、ちよこ〳〵走り立歸る。ト兩人は橋懸へ、お三は隣家へ入る。淨「跡には母のとつおいつ、思案に日脚も闌けにけり。ト在郷唄になり、向より與次郎猿廻の拵へ、猿を肩に載せ出る。與次郎「ホヽ早いと思へどモ

辛氣な事ではある」お三「與次郎様の孝行は長屋での評判、稼ぎの中はわしらを雇うて御病人を介抱、ほんに〱そこ〱へ氣の注いたお方」トこなし。「オヽそれで思出した、お藥の二番、煎じて上げませう」淨『いひつゝ茶碗藥鍋、長屋の世話やき深切の、折から來かゝる横淵九平太、儀助を伴うて門の口。ト九平太、儀助をつれて立出で、儀助内へ入る。儀助「與次郎家に居るかい」お三「與次郎さんは留守ぢやが、お前は誰さんぢやえ」儀助「イヤ俺は祇園町の肝煎儀助といふ者ぢや」母親「これは儀助さん、ようお出なされました」儀助「オヽ母さん、與次郎が不在ならわり様にせりふせう、イヤ九平太様こつちへお入りなされませ」ト九平太ずつと入る。九平太「儀助、家内の様子は」儀助「今吟味します、イヤ俊は昨夜驅落をしましたぞや」母親「エヽ何と仰しやります、お俊が親方様の家を出ましたかな」ト科。九平太「お俊が事は身共が兄官左衛門が心をかけし所、傳兵衛といふ町人とくさり合ひ、剰へ兄官左衛門を害め立退いた傳兵衛、それ故身共とても國元の首尾悪しく、お暇を戴いたからは、兄官左衛門が遺恨を、お俊傳兵衛兩人とも、ぶちはなさねば、この九平太武士が立たぬ」淨『頭からゆすつて問ひかゝれば、母ははつとは思ひながら、さとらぬ體に。母親「それはマア大きなお心遣、今にも來ましたら意見して歸しませうが、此家へは來ぬが定、今にも與次郎が戻つたら、とも〲に探さ

下卷

造り物、舞臺先まで一面に二重舞臺、操り仕立の世話場、見附惣鼠壁、納戸口なし、西折廻り、此家の緣先竹垣、空地の意にて手水鉢朝顔などあり、橋懸り長屋井戸堀際にあり、上り口に土竈大和風呂、猿の泊屋の所にあり、すべて裏貸家侘びたる見得、弟子娘二人、三味線の連彈してゐる、母親眼病の體にて唄を聞いてゐる、右の見得にて雑子の連彈よき程に幕明くる。

淨瑠璃『同じ都も世に盡きて、田舍が勝の薄煙、堀川邊に住居して、後家のみさほも經つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手纏れ氣纏れの、保養がてらの藥風呂、眼さへ不自由な生計なり。』

母親「オヽ二人とも稽古はそれまで、ちと休んだが可いワイなア」弟子「アイ〳〵」ト三味線を下におく。お三「イヤお二人とも、物覺のよい器用な事ぢやワイな、したがお師匠樣は病氣の上目は惡し、毎日の稽古も聞きづらう御座んせうなア」母親「イヤさうも御座んせぬ、何所の浦でも生計といへば樂にあらう筈はない、悴與次郎が猿舞渡世も、此母を安樂にくらさせたいと、世間にも勝れた孝行者、せめては彼が手助にもならうかと、近所の娘達を集めて、三味線の指南といふも嗚呼がましけれど、本の與次郎が肩助け、したがマア此病は何時本腹をする事やら

一腰拔き、萬八お松も薪雜木にて一時にかゝる、傳兵衛立廻りに箱提灯を切落す、是より忍び三重になり、暗がりの立にて都べて無茶立にて皆々同士討いろ〳〵あり、十南首匕を拔き官左衛門を斬る、辰内官左衛門に斬られ、辰内十南を斬る、ト傳兵衛官左衛門を斬倒し止めを刺す、所へ友七走り出で。友七「傳兵衛樣ぢや御座りませぬか」ト傳兵衛腹切らうとするをとめて。「まつた、こりやお前何で死ぬるのぢや」傳兵衛「お俊は盜まれ、大切な一軸は破られ、是非に及ばず」友七「ばらさつしやりましたか」傳兵衛「それぢやに依つて」ト又死なうとするをとめて。友七「これ河原の人殺は幇間の友七」傳兵衛「ヤなんと」友七「ハテマア放さつしやりませ」ト脇差を取る。萬八「うぬ傳兵衛」ト傳兵衛にかゝる、友七萬八起上りにげて入る、お松も跡より迯げて入る。友七「跡かまはずと此場を早う」傳兵衛「イヽヤそれでは」友七「ハテさて」トせり合ふ所へお縫富田屋といふ弓張提灯持ち、お光の手を引き向へ出る、お俊も橋懸より出て、この燈火にて皆顏見合はせ科あり。お俊、お光「ヤア傳兵衛さん」お俊「よい所で」トいふ中、友七傳兵衛をお俊の方へ突遣り、この中お縫は皆の死骸を見て。お縫「ヤア人殺し」ト驚くト。友七「これ」ト抑へる、お縫は提灯吹消し。お縫「しぢや」ト震ふ、皆々とたんよろしく。

幕

こつちへ引揚げたれば」辰内「彼方はすかたん此方は上々吉」官左「あの大馬鹿めが」傳兵衛「お俊といひ一軸といひ、モウどうも」ト蒐らうとするを十南とめて。十南「サア〳〵可い、若いに依つて腹立つるも道理ぢやが、今荒氣を出すと、アレ一軸に疵がつくぢや」ト傳兵衛ぎつくりする。「サア〳〵そこがあるによつて長袖のこの十南が挨拶、一軸は其方へ返して遣らうが、なんと一筆書かんせぬか」傳兵衛「書けとは何を」十南「お俊を斷念つた、この後申分ないと、官樣への一札書かんせ」萬八「こりや可い序ぢや、おれも惚れてるお光を遣らうといふ去狀を一本貰はうかい」お松「但し一札書きなんすか」皆々「傳兵衛返事はどうぢやぞいノウ」傳兵衛「揃ひも揃うた人畜奴ら、汝等がたくみでお俊は勿論、お光を取られたと言はれては、この傳兵衛男が立たぬ、斯うなつたら命づく、お俊も一軸も受取らいで措かうか」十南「ヤア身體より大きな事をまき出したぞよ」官左「如何程泣いても、此世でお俊にはモウ逢はれぬと思へ」傳兵衛「マア何よりは其一軸」ト寄らうとするを皆々かこひ。皆々「さうはならぬ」官左「この一軸が欲しいか、望なら呉れうが汝にはかう〳〵、かうしてくれうかい」ト引裂いて打付くる、傳兵衛驚き傍へ行て引裂きし一軸を取上げ。傳兵衛「ヤア〳〵こりやこれ大切な一軸を」皆々「引裂いて終うたのぢや」傳兵衛「モウ絕體絕命ぢや」ト官左衛門が脇差を引拔き斬附ける」辰内「ヤア お旦那を」ト辰内

左内様のお志、必ず悪う思はぬがよう御座ります、そんならお太儀ながら、いざお出なされませ」お鶴「そんなら私們はお縫様の傍で」お鹿「お松の戻るまで」のしほ「酒のんで」三人「待つてゐるぞえ」友七「更けぬ中に往てござりませ」トお政走り出て。お政「申し／＼友さんや、皆がお俊さんを無理に駕籠に乗せて、どつちへやら往てゞあつたぞえ」友七「ヤア／＼シテ行先は」お政「河原の方へ」傳兵衛「そんなら河原へ」友七「程は行くまい傳兵衛様」傳兵衛「道を分つて」友七「ござりませ」ト傳兵衛橋懸へ、友七は向へ分れて走り入る、お政捨白にて藝子三人つれ奥へ入る、トチョン／＼。

返し

造り物、四條河原納涼の體、高小屋假橋茶屋など、すこし遠見に宜し、楊弓の音にて道具とまる、ト橋懸より萬八、傳兵衛と一軸をせり合ひ出て。

傳兵衛「大切な一軸をそちや何にする」萬八「サア其大切な物故、此方でまいて金にする、渡せ」ト奪ひあふ所へ辰内箱提灯持ち、官左衛門、十南、お松もつき出で、官左衛門後から窺ひより一軸引奪り、傳兵衛それをと寄る、皆々隔へて支へる。官左「まづ一軸を取上げた」お松「其上お俊、

合した事も、無茶苦茶になつた」お光「イヤ何よりはマァあ前の身請の手附が治まつて、わたしや大體嬉しい事ぢやないワイなア」お縫「何事も納つた祝酒でも、奥でわつさりと飲み直しませう」お筱「それがよう御座んせう、サア皆奥へお出いなア」傳兵衞「みな見や、こりや何に似たものであらう」ト敵役を指ざす。お縫「悉皆師直が館の夜討の翌日、みな此樣に斬られてある其中に、門番一人縛られてゐるといふ身あんばいぢや、ホヽヽヽ」傳兵衞「なる程、こりや可いワイなア」お縫「サア〱お出なされませ」ト騷唄になり皆々奥へ入る、跡合方になり敵役皆々起上り。十南「官左衞門樣〱」辰左「お旦那樣」官左「知らんワイ、奴等よく何もかも喋舌つたな」お松「折角味ようやりつけたものを」トいひ〱萬八が繩を解く。十南「犬骨折つて何の役にも立たぬ此鷹の畫ぢや」トほふる、萬八取つて。萬八「所を又かうしては」ト十南が官左衞門に囁く。十南「こいつ妙ぢや」官左「おつてお俊を引擔げて」十南「とめ所はいつもの膳所うら」辰内「合點ぢや」官左「みな來い」ト踊三味線になり、この人數皆々入る、ト奥より傳兵衞、友七、藝子三人出て。藝子「傳兵衞さん、何處へ往かしやんすぞいなア」傳兵衞「イヤ何處へも往かねど、この一軸を改めて左内樣へお渡し申さねば心が濟まぬ、私しや一走り先斗町まで往てこうかいなの」友七「いか樣、それが肝心で御座ります、私も先程から始終の樣子、奥から覗いて居りました

通り、外ならず存ずるから、申難い事も申す、氣にかけて下さるな、又折角言ひかはした事も、女房が出來てはさうはなるまい、添ふに添はれぬなどと無分別はおこすまいぞ、手かけめかけは世間の通用、それを左に右申す妹ならこの左内に言やれ、直に鉢坊主尼にする、妹もさう心得、又世上の義理も傳兵衛が身の善惡も、此上ともにお俊、其方を賴んだぞよ」傳兵衛「段々の御意見、一々此身にあたりまして」お俊、お光「何にも申しませぬ」三人「あり難うござります」左内「いやモウ口不調法な身共が意見も、合點がいて重疊」蔦平「シテ此奴等はどう致しませう」左内「國へ引けば縛首打つ奴なれどもそれも殺生、其儘にして萬八おのれ番を致せ、心得たか」萬八「エヽ、ハイ」左内「飼いかふ犬に手をくはるゝとは汝が事、どいつも此奴も畜生の寄合ぢやなア」蔦平「お旦那、最早お立あられませう」左内「オヽ歸らう、亭主、お縫ゐるか」お縫「ハイ〳〵是に居りまする」ト此間奴蔦平箱提灯ともしゐる。左内「アヽ今日は段々世話になりました、些少ながら座敷料」ト金一包出す。お縫「申し是はよつぽど」左内「ハテ可いワさ、取つて措きやれ」お縫「エヽありがたう御座ります」左内「然らば傳兵衛」傳兵衛「左内樣」左内「後刻逢ひ申さう」ト科あり。「提灯やれ」ト唄になる、奴に箱提灯持たせ向へ入る。お縫「アヽ嬉しや、どうなる事かと案じたが、何にもかも圓ういたぢやないかいなア」お光「折角お光さんと寐さしませうと言

掛地を引出し十南を當てゝ。お松「アヽこれこちの人を」ト寄るを同じく當てる。左内「ハテ痛い目せいでもよい事を、ハヽヽヽ、それ誠の一軸ぢや」ト渡し。「取つておきやれ」傳兵衛「エヽ有難うござります」左内「後程身が旅宿へ改めて持參しやれ、合點か」傳兵衛「心得まして御座ります」才兵衛「イヤモかゝつた事ではない、ドリヤ火の廻らぬ中歸りませう」ト行かうとする。左内「こりやこりや親方、お俊が身請は此方より致す、それ傳兵衛、その百兩親方へ渡しやれ」傳兵衛「すりや此金をお俊が手附に」左内「早く渡しやれ」傳兵衛「それ親方、お俊が手附」才兵衛「エヽ忝ない、慥に受取りました、取る物取つたら長居は恐れ、誰方も是に、やれ怖や忝なや」ト走り入る、奥よりお縫お俊お光出て。お光「兄樣、最前からの樣子殘らず承りました」お俊「わたしが身請の手附もすみ」お縫「傳兵衛さんのお身の明りも首尾よう立つて」三人「エヽお嬉しうぞんじます」傳兵衛「左内樣、何とお禮を申しませうやら、お光が手前、貴方の思召し、面目次第も御座りませぬ」左内「傳兵衛、今日の所爲で何もかも合點をしやれ、人は盜人火はしやうもん、そなたが正直なればとて、人も正直なと思ふが不覺、何事も愼みに愼みを重ねゝば、得ては爲損じの多いものぢや、今日のしだらが惡しく上へ聞えれば、其方が埒もないものになると、御親父の恥ばかりか、一家一門諸親類の顏汚し、身共が儀はくど〳〵いふに及ばず、最前妹が申した

ぢや」ト左内と顔見合はせ、ちやつとすつこむ、官左衛門こなし有り、左内が傍へ來て。官左「左内殿、何ぞ用でも御座るか」左内「イヤ外の儀では御座らぬ、出さつしやれ」官左「出せとは何を」左内「國元で盗ましやれた鷹の一軸を」官左「默れ左内、いはせて措けばずわら〳〵と、何がどうしたといふのぢや」辰内「お旦那を盗人だとゆつたぞよ」左内「盗賊といふ證據を見せうか」二人「面白い、證據見よう」左内「蔦平、萬八を是へ引けやい」蔦平「かしこまりました」ト萬八に繩かけ引立つる。十南「ヤア貴様は萬八、そんなら何もかも口上たか」萬八「白狀せぬ中は時代めくと、痛い目せぬ中言うて終うた」十南「天晴官左衛門樣の片腕ほどあるて、オヽ賴もしい〳〵」左内「サア斯ういふ確な證據ある上は、たつて爭論はゞ此事殿のお耳に達し、貴殿に繩打つて國元へ引かうか」官左「サアそれは」左内「一軸渡すか」官左「サア」左内「國元へ引かうか」官左「サア」左内「サアサア〳〵どうだ」官左「モウ斯うなつたら」ト拔いて左内に斬かける、左内も斬つて蒐るを、双方一度に立廻あつて當てる、ト傳兵衛、官左衛門が懷を探し。傳兵衛「申し紛失せし鷹の一軸」左内「イヤそりや贋物」傳兵衛「エヽ何んと」左内「一軸詮議は盗賊の本人を知らん爲ばかり、誠の掛地はそれに居る十南とやら、サア一軸を出せ、受取らう」十南「イヽヤそんな覺は」ト萬八を見てこなし。「といふたてゝ慥な證據、こりやモウ爰には」ト迯げうとする、左内立廻つて

善い證跡、サア改めぬか、なぜ改めぬ」十南「サア改めますワイなア、こりやつまらぬものに成つた」トこなし。「お松、今改めるのぢや、其金出しや」トお松かぶり振つて段々後へよる。「モウ叶はぬ出しやいの、エヽ出せといふに」ト金を改める。左内「どうぢや一兩／＼菱竹の極印があらうが」十南「違なし／＼」左内「あればやつぱり此方の金だ、傳兵衛、妹が志、この金使うてやりやれ」ト引たくり傳兵衛へやる。傳兵衛「エヽ有り難うござります」辰内「こりや御旦那、何事でござります」官左「イヤモウ一向やくたい、論がないワイ」ト才兵衛そろ／＼出て。才兵衛「申し官左衛門様、お前きつうそらんじた顔ぢやが、どうで御座んす、身請は出來ませぬか、何の事ぢやいな阿呆らしい、イヤ傳兵衛さん、お前にも言分があれど、きつうホン／＼浪が悪い、モウお暇申しませう」官左「コリヤ待て／＼」ト才兵衛小戻して。「とめたばかりで金はなし、可い／＼、寶は身のさし合せ、マア金の代にこれなりと遣るワ」ト掛地を出さうとする、十南慌てゝ。十南「アアこれ滅相な、そりや悪い／＼」官左「ぢやといふて時のよくにはなぢや」十南「なんぼうはなでも鼻の先にソレ」官左「それでも渡さにや」十南「イヤサ悪いワイなア」ト左内へこなし、左内と顔見合はせ、ちやつとすつ込む、官左衛門心づき、ちやつと掛地を懐へ匿す　ト見得よろしく左内　科あり　左内「官左衛門殿、ちよつと御意得たい」官左「アノ身共にな」十南「慥に今の

り、所に粗うけたまはれば、其一軸所持する者當所へ入込み居るとの噂、其眞僞をさぐらんため、先達てより罷越しまして御座るてや」ト此臺詞の中、官左衞門びく〳〵する思入あつて十南を見る、十南大事ないと懐を敎へる思入、官左衞門いろ〳〵仕形し。「官左衞門殿、官左衞門殿、これさ官左衞門殿、貴殿は何をきよろ〳〵めさるゝ」官左「アイヤそれは、御太儀千萬な儀で御座ります」左内「ハヽヽ、香を盗む者は香に現はれ、酒を盗む者は其酒氣に現はるゝと、身に覺ある者は自然とあらはす詞の轉顚」官左「ヤア」左内「官左衞門殿、この盗人は何者で御座らうの」官左「さア誰で御座らうやら」ト底氣味わるい思入、この中十南お松顏見合はせ、つかつかと左内が兩方へ行てとんと坐る。お松「これお客さん」十南「イヤひが左衞門」お松「そちに珍糞漢な詮議がありや」十南「長袖のこの十南」お松「か弱いこの姫御前を」十南、お松「何で投げなんしたのぢや」左内「傳兵衞が金を無體に取り、無實をいひかけ打擲致す騙同然の其方達ゆゑ、ぶちのめしたが過か」お松「イヽエ此金は官樣から私が預つた金」十南「これが又どうして傳兵衞の金ぢやといふ何ぞ證據でも御座りますか、證跡でもあるかいの」左内「證跡がある」十南「なんと」左内「身共が金子は一兩〳〵菱竹といふ極印が打つてある筈だ、幸ひぢや十南とやら、汝早く改めい」十南「エヽ」左内「何を驚く、菱竹の極印がなくば餘人の金、あれば此方の金ぢや、イヤ

金を早う渡しや」お松「アイ〱、サア官さんからの手附の百兩、才兵衛さん受取らしやんせ」ト渡さうとする、傳兵衛取つき。傳兵衛「イヤ其金は」ト取りに懸る、お松アレエと飛退き、十南さゝへ。十南「盗人があばれる、皆押へて下さりませ」辰内、官左「合點ぢや」ト兩人傳兵衛を苛責まうとする所へ、左内二階より下りて官左衛門辰内を突退ける、お松十南これはと來るを見得よく投付ける。傳兵衛「ヤア貴方は」左内「これ〱若い人、詞多きは品少し、マア控へて居たがよい」ト傳兵衛ぢつと控へる、官左衛門辰内、左内を見て吃驚する。官左「ヤア此方は瀧口左内殿、何時の間に、ハレよく御座つたなう」トこなし、十南お松もしりごみ、辰内も屈む。左内「横淵官左衛門殿、貴殿と拙者、殿の要用に付き上京つかまつる砌、遊所へ參る事かたく御はつせき仰付けられ、友吟味致すやう家老中より内意を受けながら、貴殿此所へ何用あつて御越しなされた」官左「イヤサこれは」左内「これはとは」官左「ムヽ過りました、が左内殿、人の批點を打つ貴殿は、富田屋へ何用あつて來召れた」左内「殿樣近頃御重寶あそばされる狩野の幽齋が鷹の一軸それなる井筒屋傳兵衛國元へ參りし折柄、拜見仰付けられ暫時お預りなされし内故なく紛失、それ故百日の詮議猶豫仰付けられ、傳兵衛は歸國、はや百日の日限相迫る故、貴殿某上京せしも、右の一軸傳兵衛が手より受取るか、さなくば傳兵衛を國元へ引立て伴歸らんが爲ばか

と云うては言譯暗い」お松「さアちやつと戻して下さんせ」十南「但し盜まぬといふ證據があるか」
傳兵衛「サアそれは」官左「證據があるか」傳兵衛「サア」辰内「但し汝がいがめたか」傳兵衛「サア」
十南、辰内「サア」皆々「サア〳〵」官左「大盜人めが」ト散々に打擲する中、傳兵衛懐より最
前の百兩の金おちる、お松取つて。お松「ヤア傳兵衛さん懐から百兩の金が隕ちたワイなア、
これ盜まれた金が出たワイなア」十南「何ぢや金が出たか、官左衛門樣、金が出た、出ました出
ました」傳兵衛「ア、これ其金は許嫁のお光から來た金ぢやワイの」官左「どこへ許嫁、最前出せば
よい事を、匿しだてして何と太い代物ぢやないかい」傳兵衛「十南殿」トけしきしていふ。十南「何
ぢや」ト傳兵衛十南を襟締にして引付け、屹相かへ。傳兵衛「エ、口惜しい〳〵」ト泣く、十南
傳兵衛を突倒し。十南「見なんせ、盜人たけ〴〵しいと謂ふのは此事ぢや」官左「イヤモウ人は表面
からは見えぬものぢや」辰内「しやつ面には似ぬ、ハテ恐しい性根玉ぢやなア」お松「あれが本の
盜根性といふのぢやワイなア」トこの中才兵衛親方の形にて出で。才「おゆるしなされま
せ、オ、官左衛門樣、先程お目にかゝりました扇屋才兵衛で御座ります、抱へのお俊が身請
をせうと仰しやりましたが、どうで御座ります、どうなります」官左「よい所へ親方才兵衛、お俊
が身請はこの官左衛門が致す、ソレ十南、今傳兵衛が隕した金子親方へ」十南「ソレお松、今の

土佐雪舟呉道士も照覧あれ、繪師冥加、拙者へ疑念なし、それを女子といふものは、物事に仰山な姦しいもので、ハヽヽサア〳〵戻して下され、これ手を合して拜むワイなア」傳兵衛「是は又迷惑な、貴公約束でお松も爰に居る事も知らず、勿論百兩の金とやら、この傳兵衛は知りませぬぞ、滅相な事をいふ人ぢやワイの」十南「ハテじやら〳〵いはずと出して下されいの」傳兵衛「ハテ座興でない、眞實知りもせんもの、埒もない事いはぬが可ハワイの」十南「ム、さう言はんすと、酷う事がやかましうなりますぞえ」傳兵衛「やかましう成らうがどうせうが、知らぬ事はどうも爲樣がないわいの」十南「その知らぬ貴公が何て又、俺がいひかはしたお松が寐所へ入つて御座つた」傳兵衛「エ、」十南「アノお松は俺が女房ぢや、その女房の寐間へ入つて、松が帶は何で解かした」傳兵衛「サアそれは」ト十南、傳兵衛を引附け。十南「それはとは爰な大盜人めが、サア盜んだ金出しやアがれ」傳兵衛「サア其金は」お松「これ傳兵衛さん、官左衛門樣に言譯がない、どうぞ戻して下さんせいなア」傳兵衛「それでも盜んだ覺は」官左「無いといふのか、其方なぜお松が寐間へ忍びこんだ」辰内「其上財布に入れてあつた旦那の金に、手や足が生へましたか、どうして空虚になつてしまうた」お松「たしか儕が懷へ手を入れさんすと思ふに、モウなかつた」十南「金のある事勘づいて、盜みにうせたに違はない」傳兵衛「ぢやというて其金は」十南「知らぬ

をお前と思ひて、帯紐解いて肌をゆるしたれば、最前官さんから預つた百兩の金が無い、これこの通り財布をば空になつたワイなア、ちやつと取返して下さんせいなア、こちや〳〵」ト空泣する。傳兵衛「ア、これ滅相な事いふまいぞ」お松「それでもお前より外、この寐間へ入つた人はないもせぬもの」傳兵衛「面妖な、お縫が慥に寐所はお光ぢやといやつたが、面妖な」官左「イヤ十南、あのお松はお身が情人の事なれば、お身同然に思うて預けおいた金子、それを盗まれたと許では、この場が濟みそむないもの、ノウ傳兵衛、左樣ではないか」傳兵衛「ハテ左樣な事は存じませぬ、ハテ面妖な」十南「イヤ傳兵衛さん、一寸お目に懸りたいが」傳兵衛「あの儕に」十南「如何にも」傳兵衛「何ぞ御用かな」十南「イヤ外の儀ではない、今お聞の通りぢや、あの官左衛門樣には是迄度々お世話にもなり、殊にお邸へお出入もするこの十南故、金子もお預けなされたといふもの、定めて貴公が御座興でお匿しなされた、サある事ぢや、それをお松が口善惡なう、盗人ぢやの騙者ぢやのと申した故、貴公もそこが味いないものになつて、出しにくい事も御座らうが、何のモウ日比心易う致す拙者なり貴公なり、內輪の事も同然ぢや、サア出して遣はされ、畢竟これが金銀づくでなければ何事もなけれど、何をいうても百兩といふ大枚の金なれば、ついした事もむづかしい、サア〳〵この十南へお返しなされ、何の貴公が金をお盗みなされう、

て、傳兵衛さんと寐さすと、お縫さんやお俊さんが言はしやんした、ドレこの樣子を知らして來うか」トさぐり入る、お松萬八に囁く、帶を解きそろ〳〵寐間へ入る、所へお縫、お光の手を引き出てお光に囁く、あの寐間へ行けといふ、お光いや〳〵と恥しがるを無理に突遣り探り入る。お光跡を伏拜み〳〵」お光「お縫さん、この御恩は一生忘れおきませぬ、エ、忝なう御座んす」ト萬八この聲を知方に探りあたり、お光が手を執る、お光萬八を撫でて見て。お光「傳兵衛さんか」トいふ、萬八シイ〳〵と抑へ、お光を中二階へ伴れて無理に行きかゝる、トお縫傳兵衛が手を引き出で囁く、傳兵衛いや〳〵といふ仕方するを、無理に寐間へ突遣る、この間双方知らぬ暗がり怪しき仕組、傳兵衛屏風へ入る、ト萬八お光を二階へ伴れて上る、トお俊屏風へ聞耳立てて、物音せぬ故辛氣なといふ思入あつて入る、ト中二階の内ばた〳〵にて障子開く、瀧口左内前に手燭を直し、萬八が手を捻上げてゐる。お光「お前は兄さん」ト左内、萬八をぐつと引付け」左内「默つてゐやれ」ト障子ぴつしやり鎖す、トばた〳〵にて平舞臺の屏風を開く、トお松傳兵衛を捉へて、片手に空の財布を持つてゐる。お松「盜人ぢや〳〵出て下さんせいなア」トばた〳〵にて官左衛門、十南、辰内、手燭もち出。官、辰、十「何ぢや盜人とは何處に居る〳〵」お松「これ十南さん聞いておくれ、最前お前へ約束の通り、この寐間を幸ひに爰へ入つて、傳兵衛さん

ア其百兩の工面はあれは買論の時ひけてはならぬ」トこなし、萬八思案して。萬八「イヤ〳〵けうとい事を思出した、アノ私が惚れてゐる此方のお光、此間から百兩ほしいというて居たが、今日爰へ來たは確か百兩調うたと見える」官左「オヽ何ぢやしらぬが、お俊が身請の手附をうつと、可愛らしい娘が金を持つて來たは、ハヽアそんならありや左内奴が妹のお光であつたか」萬八「お俊を身請せうといふも、傳兵衛への心中立、エヽけたいの悪い」十南「よい〳〵、其百兩こつちへしてやる分別がある」官、萬「分別があるか〳〵」十南「その分別はこれ」ト兩人咡く。官左「こりや味い相談なれば、お俊が身請も調ふといふもの」萬八「おれもお光が手に入るとは」官左「福德の三年目」十南「なんとえらい思案が出ようがな」官、萬「イヤモウこちの幕内、孔明ぢや」十南「イヤ孔明ぐらゐと一口にいうてもおくれな、さよあらしぢや」三人「ハヽヽヽ」お松「エヽ氣のわるい、私にもちつと聞かしておくれいなア」十南「イヤわが身には、一ち言はにやならぬ事ぢや」官左「しかし何をいうても爰は端近」萬八「壁に耳」十南「畫師の物いふ窃かな所で」お松「こつそりと聞しておくれ」官左「諸事の密事は奥の二階で」十南「可ござんしよ、いきなんせ」ト唄になり三人奥へ入る、ト跡合方、お政枕持ち出で、平舞臺へ蒲團敷き、枕直し屏風ひき、燭臺の火を消して闇がりになる、ト奥より萬八お松さぐり咡き合ひ。お政「この寐間へお光さんを入れ

公が睦じきを見るにつけてもあのお俊、どうしたら身が手に入らうなア」十南「ハテどうといふたらお俊は賣物、身請さへすりや、お前の自由自在」萬八「サアそりや知れた事ぢやが、宮様もちんけいとうぢや」宮左「まだも頼むはこれ此一軸ぢや」ト懐よりいだす。お松「宮さん、そりや何の掛物ぢやえ」宮左「この掛地は狩野の幽齋が鷹の畫、則ち殿の重寶、仔細あつて身が手に入りある、これを賣つたら二百兩やそこらには成りさうなものぢやて」十南「どれお見せなされませ」ト取つて見て。宮左「萬八、邊りへ意をつけてくりやれ」萬八「畏りました」トそこら見廻してゐる、此中十南一軸を篤と見て」十南「こゝらぢや」ト科あり。「アこゝぢや」トこなし。「エヽよう描きくさるなア、俺もこないに描きたいなア、宮左衛門様、こりや幽齋に違ひはないか、そりやお前しよなめ物ぢやな」宮左「コリヤ〳〵大きな聲致すない」十南「イヤしよなめ物でも大事ない、隨分わたしが手筋からばらしたら、二百兩やそこらになりまする、こりやマア下拙に預けなされ」ト懐中より同じ掛物出し。「幸ひこれもさる所から頼まれて書認め、我等が點違へにお前が持つてござりませ」ト宮左衛門へ渡し、正眞の一軸をば懐中する。宮左「なる程、こりやよい分別ぢや」ト贋物を懐中する。十南「時にお俊が身請は三百兩、二百兩は調うても跡百兩の工面が出來ぬと、お俊はこつちの者にならぬが、その工面もなりますか」宮左「サ

お政殿を捉へてぢやら〳〵と何ぢやいなア、ちつと私に遠慮もしたが可いワイなア、昨夜もぜぜ浦のお紋さんの所で、お前何といはしやんした、その私が見る前で、外の朋輩や藝子さんを、何のかの言はしやんすと、私しやモウ腹が立つ〳〵、癪の蟲がひよこ〳〵をどるワイなア〳〵」ト膝にもたれて泣く。十南「これはひよんな代物ぢや、何のそないに泣くことはないワイの、俺ぢやとて晝の道は附たり、年が年中辨慶ぐらしの事なれば、その鱗や首は手にまはらぬ吾身なれど、盆屋入りもふんだくにしてくれる通例の女子なら、何の俺にこゝろよう物を言うてくれうぞ、モウ〳〵此恩は死んでも忘れぬ、お松、嬉しい忝ないぞや」お松「そんなら私が心底、お前は嬉しく思はしやんすか」十南「嬉しい涙が目より出で、忌々しい涙が鼻より出るならば、いはずとも俺が心底知れうものを」お松「ソリヤ十南さん、ぼんまかえ」十南「嘘に涙が出るかいのウ」お松「エヽ嬉しう御座んすワイのウ」ト取つく、十南變な顔する、この中萬八、官左衛門出かけて。官、萬「よう〳〵やつしの開山め」十南「ヤア何時の間に官左衛門樣」お松「萬さんも悪いお方ぢやワイなア」ト恥しき思入。官左「最前から二人が居ぬ故、大方こんな事であらうと思うて、悪がらしに來たのぢやてや」万八「寐る迄を待兼ねて、わつそりと契るとは、二人ともに近餓ではあるワイの」ト お松が脊中を叩く。お松「オヽ好かん、私しや忌いなア」官左「十南、今貴

なれば、兩方よかれと引請けて、引込の富田屋が引請けて世話するも、弓も引きかたお俊樣、お光樣とも此上ながら懇意にして下さんせえ」お俊「エヽ滅相な何のマア、懇意にするのせんのといふ事があるものかいなア、モア斯う解合ふからはお光樣、是迄の事は大和橋へ流して下さんせ」お光「二人一緒に傳兵衛さんを」お俊「御大切に」二人「致しませうワイなア」傳兵衛「マアざつとぐしはさばけた、サア二人とも爰へおじや〳〵」お縫「オヽ好かん、あの口聞くワイなア」お俊「そしてマア今夜は雜魚寐などせざなるまい」お縫「サアそりやなア」トお俊に囁く、傳兵衛聞きたい科あつて。「ぢやワイなア」お俊「そりや可いワイなア」傳兵衛「何ぢや、俺にも少許聞かしやいのウ」お俊「アイ、どうでお前にも隱してゐられぬ譯」お縫「マア何ぢや有らうとお前は奥へ」ト傳兵衛の手をひく。お俊「お光さまもマアお出」トお光が手を引く。傳兵衛「萬事よろしく〳〵」お光「そんならお前を」俊、縫「ハテ何にもいはずとマアお出いなア」ト唄になりお縫傳兵衛が手を引き、お俊お光の手を引き奥へ入る、ト跡合方、引違うて奥よりお松、十南が手を引いて出て。お松「サア御座んせ〳〵」十南「譯も言はずに腹立てゝ、人の手を引きまはつて何とするのぢややい」お松「何とする所かいなア、あた忌らしい今のは何の態ぢやぞいなア」十南「何の態とは何の態ぢや」お松「わしがよう見てゐたワイなア、又しても〳〵儕がちつと油斷するが最後、あの

なか一通りの事ではない、五年以前朋輩の讒言に因つて、お暇の出た折から、傳兵衛樣の親御傳右衛門樣、兄弟ともに引取つて段々とのお世話、其効あつて三年以前歸參の折から、此度のお禮、不束な妹ながら其元へ進上致す、如何にも貰ひませうと契約は武士の金鐵、今更變改ならぬ、何を汝が小差出だとお叱りにも逢ひましたり、又傳兵衛樣が別に忌なと思ふ殿御で御座りませず、お側にゐれば夜に增し、日に增し、お愛しいと思ふ傳兵衛樣、苦にさしやんすはお前の事、アヽどうぞして身請の金を調へ、お俊さんもお側におきましたら、よう身請してくれたと傳兵衛樣が譽めて下さんすで有らうと、そればつかりを樂みに、兄樣左内樣に譯いうて、今日爰へ參じましたも、身請の事も何もかも、皆お縫樣のいかいお世話、お俊さま、斯ういふ入譯ぢや程に、必ず呵つて下さんすなえ」お俊「あのマア勿體ない事いうて下さんす、御本妻のお前を差退けて、大事の傳兵衛樣を寐取らうとした私が、憎い奴とも思はずに、よう可愛らしい事言うて下さんしたなア、これといふもお縫樣の多いお世話」お縫「何のいなア、もと傳兵衛樣とお前と、斯うならしやんした世話も私が、オヽどうぞして身請をさせ、添はしやんすやうにと思はぬ日とては無いワイなア、所にこのお光樣が何もかも打明けて、お前の身請の世話を私へ賴み、ほんに殿御思ひといひ志のかはいらしさ、殊にお前の身の爲にも惡うない相談

次第で、ゐひが廻ると棄てられて、茶碗や鉢に見かへられ、そこは女子は悲しいもので、理を以つても非の一倍、御不承にもあらうけれど、斯う縺れた盃は、一遍洗ひ濯ぐまではお待ちなされて下さんせいなア」お光「萬事を任したお縫様、左右そこをよい様にして下さんせ」官、友「シテこの縺れの納りは」お縫「建仁寺の陀羅尼の終とは陳いやつ」官左「イヤ言人が新しい、夜中まで待たうワイ」友七「したが其刻限になりし時は」お光「お俊様の身請の手附」官左「身共が打つか」友七「わたしが立金するか」辰内「マアそれ迄は」官左「幇間の友七」友七「お大盡の官左衛門様」官左「奥へ來い」友七「マア御座りませ」ト騒唄になり、官左衛門、友七、辰内、お政、藝子三人奥へ入る、跡合方、傳兵衛、お俊、お光、お縫殘りゐる。お縫「サア傳兵衛さん、此子の志とつて措いてあげさしやんせ」ト最前お光が持つて來た百兩を傳兵衛に渡す。お俊「エヽそんなら此お子は」傳兵衛「わしが許嫁のお光ぢやワイの」お俊「エヽそんなら日比お前の噂のお光様かいなア」お光「扨はお前は傳兵衛様と深う言交して居やしやんすお俊様で御座んすか、私が今日こゝへ來たは、必ず悋氣嫉妬では參りませぬ、お前の事は、私と傳兵衛様といひ約束のない前から、深う馴染んで居やしやんすとの事、其様な所へ嫁入は、どうやら罪にもなりさうな事と、逢つて辭退も致しましたけれども、兄様のいはしやんすには、汝を井筒屋へ嫁入らすは、なか

ア銚子かへに勝手へ立つて、一ぺん銅壺の湯を通し、酒の燗を見た上で鍋へ移さねば、座敷へも滅多には出られぬ、丁度お前が今お俊さんの身請の、手附の金を出さうにも、心當といふは御懐中の其巻物、百兩と二百兩の高値な物なら、定めて結構なもので御座んせうが、其かはりにツイ白粉や紅買ふ様には相手のないものでござんす、そこがかの湯を通したり燗したり、暇の要る中金の才覺が出來て、そこで請出す三百兩、マア金の調ふ迄は待たしやんす方がよからうと、官左衛門様、私は思ひますワイなア」官左「ム、さう言へば汝が理窟だ」ト後へよる。

お縫「時に友七様、この土盞こりや則お前の身の上、かう言へば侮つていふと必ず腹立てゝ下さんすな、この土盞といふものは、初手はお客の顔見ると、やれ土盞に盃よと、何より先へ座敷へ出て、眞中に出て大事がれど、酒の長じるに随うて、酒のしたみを投げられたり、肴のたべさし海老の頭、サア其類しれぬ人にもよしなに交際はにやならぬお前の商賣、お客を大事と思うて、身請を競合はしやんす所はお前の有理なれど、相手もやつぱりお前のお客、スリヤ此場は一旦私に預けて下さんせ、ハテお前の心底、諸事知つてゐるこのお縫、悪いやうにはするまいぞいなア」友七「なる程、理のわかつたお縫様の挨拶、友七得心致しました」お縫「またお光様は此盃、盃といふものは随分おとなしい人にも敬はるゝものなれども、その飲む人の心

れた構事」辰内「こんな事をして旦那を化さうとは、同じ穴の狐ども、尾の見えぬ中出直せ〳〵」お縫「イヽエ出直す事微塵も御座んせぬ、お俊様の深い客、身請の手附は彼のお娘より打たしやんすワイな」トお光懐より金百兩出して。お光「嘘でない證據、手附の百兩、お侍さまこれ御覧じませいなア」ト官左衞門懐より袱紗包の一軸出しかけ、ちやつと隠して邊りを見て。官左「見たか此一品、賣拂へば百兩や二百兩何時でも調ふ、殊にお俊が身請は身共が先役、外へ身請はなるまいぞよ」ト此中友七思案して。友七「イヤお俊様の身請は、この友七が致しますぞ」辰内「何といふ、あの幇間もち風情の汝が、見事お俊が身請をするか」友七「ハイお俊さんの立金して、傳兵衞様と添はさねば、ひよつとしたら命づく、それを見捨てゝどうも默つては居られませぬ、たとへ貧乏を質に入れても、此身請は私が致しまするぞ」お光「イヽエ身請は私がするワイな」官左「イヽヤ身請は此官左衞門」友七「イヽヤ此友七が」お光「お俊さんを請出して」三人「見せうワイなア」ト此中お縫思案して。お縫「お三人とも待たしやんせ、縺れた身請の挨拶を、このお縫が致しませう」傳兵衞「そんなら此場の挨拶を」お俊「あのお前がして下さんすか」官左「面白い、この官左衞門は先役だ、見事さばきをつけて見るか」トお縫そこらを見まはし、燗鍋を持出し。お縫「官左衞門様、私が貴方への返事はこの燗鍋、サア此燗鍋といふものは、マ

た今吐いたでないか」友七「サア言うたは言うたけれど」辰内「まだそれでも愛想を盡かさずば、贋狂氣のゑぢかり股、お兼の眞似をせいと云つた」友七「サアそれは」官左「千も萬もいらぬ身が心をかけたお俊、傳兵衛思ひきつて身共に呉れい、貰うたぞよ」辰内「否と云や傳兵衛、この辰内が魂の切味見せうか」傳兵衛「サア、ぢやというて」官左「お俊、身が意に隨ふか」お俊「エ、忌ぢやワイな」官左「ム、すりや傳兵衛に心中立てゝ」お俊「イヽエ傳兵衛さんとは一通りの交際、わたしやまだ外に可愛いお客が御座んすゾイなア」辰内「ム、すりや傳兵衛よりまだ外に」官左「可愛い客の其名は何と」お俊「サアそりや」トこなし。「滅多にいうて可いものかいなア」辰内「いはずばやつぱり傳兵衛か」官左「たゞし外に有らば言へ」辰内「サア其客の名は何と」ト向より。お縫「其お客、縫がそれへ伴れまして往かう、見なされいなア」藝子「ヤアあの聲はお縫さん」お縫「サア〳〵お出なされませいなア」ト又祇園囃子になり、向よりお光、振袖の娘、跡よりお縫茶屋の嬶の形、僕ついて出る、傳兵衛見て。傳兵衛「ヤア其方は」お光「傳兵衛さん」ト寄らうとするをお縫とめて。お縫「これ申しお前はお大盡樣、お俊さんを身請のお客、サア道々もいうた通り、かう成つたれば互の買論、ナア、必ずひけを取らしやんすなえ」お光「合點ぢやワイなア」官左「誰かと思へば此家のお縫、お俊が身請の客といふは、可愛らしい町の娘、みす〳〵知

せんほをあがく」お政「ほんに其樣な事、屋敷で言うたら、一つも合點はせまいぞいなァ」友七「其上むかふへ行たらば身持が第一、まづ洗ひみがきを罷めて仙人の樣にしてゐるのぢや、朝手水を遣はず、かけ香の代に、こいからしの新しき革足袋を、かの臍の下へ入れてゐるぢや、それでは溫盛に隨うてほつぽ〳〵たまらぬ臭氣がするぢや、それでも無理に抱れて寐ようといふなら、饑うなつた、蒟蒻が煮いてほしいと云うて、淺漬なればにしんの昆布卷で茶漬かける、其後があばれ喰、鰌のすつぽんの、鰒の吸物七八杯も更へて見せる、それで如何なひが左衛門も愛想を盡かしさうなもので御座りますぞえ」お袋「ても恥かしい、其樣な事がどうなるものぢやぞいなァ」友七「其樣にしても愛想を盡かさずば、思案の底狂氣ぢや、晝中に裸體になつて、何處も彼處も見せちらかして、えぢかり股で歩行いたがよい」お政「そりや大阪で見た色情狂のお粂ぢやぞえ」友七「おかね八目、そこら迄いたら、愛想つかしさうなものぢやぞえ」お袋「こりや一ちよい思案ぢや」トこの中官左衛門、辰内をつれて出かける。官左「イヽヤさうはなるまい、樣子は一々聞屆けたぞ」皆々「エヽ」辰内「ヤイ幇間奴、汝よく傳兵衛と馴合ひ、身共が旦那を馬鹿にひろぐな」友七「ハテ扨こりやお前方の事ぢや御座りませぬ、間違で御座ります」官左「叶すな、身請しられて邸へ往たら、臍の下へ革足袋を挾んでゐるよ、すつぽんの暴喰せいのと、たつ

るゝ所を、傳兵衛様の御贔屓、お金の威光で命を助つた御恩返し、お力になる身の冥加、どうぞマア身請もさゝず、傳兵衛さんと末長う添す思案が有りさうなものぢやが」小鶴「サアちやと思案を」皆々「さしやんせいなア〳〵」友七「オット騒ぐまい〳〵、出たぞ〳〵」皆々「出たかえ〳〵」友七「マア何ぢやあらうと、一旦彼方へ身請をしらるゝぢや」傳兵衛「ヤアあのお俊を彼方へ遣るのか」友七「マア一旦遣つておいて取戻すのぢや」お俊「さうして其思案はどうぢやえ」友七「マア身請しられて先方へ行き、愛想つかされて戻るのぢや」小鶴「テモ見ぬ戀にさへ憔れて居る侍客」鹿路「お俊様首を見せたら」のしは「猶愛想を盡そまいぞえ」友七「所を盡さす大祕密口傳があるぢやて」お俊「その祕密口傳は」皆々「どうぢやぞいなア」友七「マア何かなしに先方へ行くと、祝言とやりかけるワ、其時土器を手に取つて、爰が祕密ぢや、お前が言ふには、オヽ好かん、わしや生れてからつひど伏見燒の盃で、きすほやいた事がないと、そこらに狗兒たゝきがあるなら貸しておくれいなア、といふのぢや」お俊「そのゑのころたゝきとは何の事ぢや」友七「もし先の女中が尋ねたら、お前が心得て茶わん〳〵」皆々「オヽ笑止、何云ひぢやいなア」友七「さうして外の挨拶はせぬが可い、イヤきつしりぢやの、なへそへぢやの、一向するぢやなどと、今流行る事ばかりいうて、折に雨が降ると、たろこが引付けの、やつかいとうぜん助右衛門なぞと

友七「サア其譯といふは、お俊樣の身請の事で御座ります」傳兵衛「ヤアそりや官左衛門樣が身請せうと言はしやんすのか、その金の調はぬ中、此方で工面すりや可いぢやないかいの」友七「イヤサア身請せうといふは、官樣ぢや御座りませぬワイな」お俊「エ、あの官樣でなしに、外に私を身請せうといふ客があるかいなア」お政「奧へ來てゐる田舍の、しかも立派なお侍が、お前の事を聞及んだというて、一言から身請の相談」小鶴「金は何程要つても構やせん」座頭「今日中に身請の埒明けんというて」野汐「たしか才兵衛さんを呼にやらしやんした筈ぢやワイなア」傳兵衛「ヤアそりや近年の大事ぢや」お俊「傳兵衛さん、もし此相談が出來ると、豫てお前にいうておいた通り、わしや生きては居やせぬぞえ」傳兵衛「わが身を外へ遣つては、俺も生きては居やせぬぞ、二人が身の切なさ、せつぱになつた、皆とも〴〵に思案してたも〳〵」友七「この樣な思案は、爰のお縫さんが大將、手の物ぢやワイの、一走り先斗町へ往て、お縫さんを呼んで來うかい」お政「イエイエ、お縫さんも奧のお客と咡いて」藝子皆々「それ〳〵、たしかお縫さんも彼方の味方」お政「そんな危い事よりは友七さん、早う思案を」皆々「さしやんせいなア」友七「エ、其樣に口々いうてもこの友七、其樣に早う思案が出る位なら、幇間やめて芝居の作者になるワイなア、したが私は元新町に居た時、酒の上で喧嘩を仕出し、相手の手傷にむし打つて、すでに下手人にも取ら

けて、瀧口左内樣と同道にて來てゐる彼の官左衞門、其方に惚れてゐるこそ幸ひ、取りなし言うて貰はう爲、斯う〳〵せいと萬八が勸によつて今日の時宜」お俊「サア何ぼうさうぢやと云うて、あの官樣の傍にどう居られるものぢやぞいなア」傳兵衞「サア其かはりに、官左衞門さへ無事に去したら、どうなりとして其方の身請を」お俊「あのお前がして下さんすかえ」傳兵衞「ハテ誰憚らずするワイのう」お俊「サアさう成つたら私しやお前の女房ぢやなア」傳兵衞「オヽ知れた事女房ぢや」お俊「イヽエさうはならぬワイなア」傳兵衞「何故にいの」お俊「ハテお前にはお光樣といふ許嫁があるぢやないかいなア」傳兵衞「サアそれもやけ無茶ぢやワイの」お俊「イヽエそれでは私が濟まぬワイなア」傳兵衞「ハヽアさういうて俺を退いて、扨は官左衞門に改宗するのぢやなア」お俊「滅相な何のマア」傳兵衞「サアさうで無けねば中直に」お俊「あの爰でかいなア」ト奥より友七、お政、藝子三人出て。友七「サア大事ぢや〳〵」皆々「ほんにこりや大事ぢやワイなア」トいひ〳〵二人が眞中へ入る、二人とび退き。傳兵衞「エヽ誰ぢやと思や牽頭の友七」お俊「皆さん吃驚したワイなア」友七「イヤ又是を吃驚せいで何を吃驚する者ぢや、大事ぢや〳〵」皆々「大事ぢやぞえ大事ぢやぞえ」お俊「大事とは何のこつちやいなア」友七「大事とは大きな事ぢや、大佛の火傷よりまだぐつと大きな事ぢや」傳兵衞「友七、そんな事いはずと、其大事の譯をいうて聞かしやいの」

傳兵衛さん、わしやお前の何ぢやえ」傳兵衛「何ぢやとは何ぢや」お俊「サア何ぢやいなア」傳兵衛「エエいろ〳〵の事を言ひ出すワイの」お俊「サアそのいろ〳〵ぢやないかいな」傳兵衛「知れた事ぢやワイの」お俊「さうして深い間ぢやぞえ」傳兵衛「サアそれも知れた事ぢや」お俊「サア其知れた間の私をなぜあの官さんづらに、應といへの抱かれて寐いのといはしやんす、そりやお前あんまり胴慾ぢや〳〵〳〵」ト泣く。傳兵衛「サア〳〵尤ぢやがそれに譯が」お俊「イエ〳〵聞きやせぬ聞きやせぬ、此頃聞けば堀川に居やしやんす母様、お眼の不自由な上に御病氣との事、常から孝行にして下さんす兄さん、與次郎さんがついて居やしやんすれば、案じる事はなけれど、勿體ない事ぢやが、わたしやお前の事ばかり思うて音信さへ碌々に得うせぬワイなア、それといふも日外やお前が失はしやんした掛物とやら、さうして彼りやどうなつたぞいなア」傳兵衛「さいのう、日外や國許へ親父様の御名代に行たれば、殿様御機嫌の餘り、狩野の幽齋が筆の鷹の一軸拜見仰付けられ、御前で見るも慮外と、暫時お次へ下りて、傍においた一軸が、箱と共にかいくれ見えぬ、殿様の御立腹を、あの左內様といふお方が取なしで、詮議の間百日の御猶豫を願うて戻つたけれど、どの樣に吟味しても、今に行方が知れぬワイの」お俊「そりやお前、ひよんな事ぢやぞえ」傳兵衛「それ故其一軸を詮議し出したらば、受取つて立歸れと殿様から仰せを受

モウお俊さま、粋に似あはぬ愚癡なぞえ〱、シタガこれで官様の御機嫌が直り山、この勢にわつさりと、飲めや謳へとはどう御座りませう」萬八「ハテよう飲みたがる代物ぢや」友七「飲食とすりおろすが、私の商業でござりますワイ」官左「いか樣、飲物がよからうか、何をまた今日は肝心の主人の縫が、ちよつとも顔出せぬが、どうしたものぢや」お政「お縫樣は中二階のお客の妹御が、先斗町まで來て御座るを、お迎ひに往てゞ御座んしたワイなア」十南「ハテなア、斯ういふ色町へ妹を呼びにやるとは、こいつ餘程の無粋な者と見えるワイ」お松「人の七難よりわが身の十南樣、大阪で誰が肩を並べる者もない繪師の親玉、風雅なお方と思ひの外、悪性者の色事師、ほんに私が癪の種ぢやワイなア」ト思入。「オヽお政どん、おだてゝおくれないなア」友七「ヤア座敷が陽氣になつたぞ、サア此勢に官大盡樣」官左「お俊もおじや」ト手をとるを振はなし。お俊「マア先へ往かしやんせ」皆々「さア〱奥へ御座んせいなア」ト騒唄になり、一件皆々奥へ入る、跡より友七、喧ましう騒ぎ入る、跡合方になり、傳兵衛殘り。傳兵衛「それそこへ御機嫌を取つて下されや、十南先生、萬八も賴むぞや、あゝ心遣ひでほつとしたぞ」ト莨盆さげて向へ出で、莨呑んでゐる、お俊奥より引返し傳兵衛に取つき。お俊「傳兵衛さん」傳兵衛「オヽ吃驚するワイの、さうして跡も先もいはずに、何を泣くのぢやぞいの」お俊「何をとは

にあふといふも、傳兵衛お手前が待遇がよいから、禮は重ねて申す所で必然申そ、辰内供せい、モウ歸らうワイ」辰内「左樣がよく御座りませうワイ、いざお歸りなされませい」傳兵衛「ア、申し申し、それでは私がどうも濟みませぬ、エヽこれお氣に入りのお縫は留守なり、十南先生、そこへよいやうにお執成を」十南「サアそれは取つてゐるけれど、何をいうてもお俊の君がぴんしやん、傳公、何というておき給ふぞい」傳兵衛「サアとつくりと樣子は言うておいたけれど」トくど〳〵いふ。友七「いや是は斯うで御座ります、お俊さんも萬更官樣を嫌といふでもなけれど、此樣に大勢が取まいた中で、小忌らしいじなつきもなるまい、そこで負惜みのぴんしやんで御座りませう、ナア傳さん」傳兵衛「ほんにさうぢや、何のマア斯う寄つたものは皆内輪、たとひどの樣な事が有つても、さア誰も何ともいふ者はない、此度の儀に就いてはお執成を賴みませにやならぬ貴方樣、萬更いやと申すお俊を、無理に座敷へ出しましたので御座りませぬ、ノウ友七」トお俊に呑込ます。お俊「サア私もさうは思うてゐれど、ひよつとまた」ト思入。「あつかましい、あた忌らしいと呵られうかと、サアお前に呵られうかと思うて、それで今の樣に言うたのぢやワイなア」ト官左衛門に言うて傳兵衛に呑込ます、官左衛門ぐんにやりとなる。官左「ハテ扨それは要らざる遠慮だ、悦びこそすれ何の呵つてよいものかいやい」友七「イヤ

そこで此十南も傳兵衞公のお頼によつて、大阪よりお供して、今日の趣向は傳兵衞公が官樣をお振舞ぢやないか」萬八「所で日比お俊ぬしに上つて御座る官左衞門樣、そこで若旦那にも呑込まして、お俊主に逢はすといふが第一の御馳走、スリヤ今日のお俊主がお客といふは官樣ぢやないかいなア」お政「そこで官樣の夫は〳〵忌らしい、一向傍では見られんヷイなア」お俊「それぢやに依つて」兩人「エヽつゝとモウ」傳兵衞「これ〳〵お俊、そりやどうぢやいノウ、今日は常と異うて、彼方の御機嫌が損ねてはどうも濟まぬと、最前も篤りというておいたぢやないかいの」友七「それ〳〵、町の處女ではあるまいし、櫂がこたへろなら、そこが受けつ流しつ、諸事長刀をお遣ひなされ、これ傳樣もそこは水車〳〵」小鶴「お俊樣も傳樣も、あの樣に言うてぢや、お前も肝癪を起さずとも、ヤの字とナの字で居やしやんせいなア」鹿路「さうこそ言へ、お俊さんに無理もない、見る〳〵からイの字とデの字がわるさうで」お政「其癖にナとメとクとサとリぢやワイなア」野汐「肝にさはるも無理ぢやない」ト諷ふ。官左「ヤア措き居らう、何だやら唐音でイの字だのロの字だのと、此方は一切その意得ぬ故、疳にはさはらねど、しんに障るぞ〳〵」友七「と腹をお立てなさるゝ所が、コの字にレの字に縁がない」辰内「ヤア默れ〳〵、寄つてかゝつてお旦那を、嘲齋坊にひろぐがな〳〵」官左「橫淵官左衞門ともいはるゝ武士が、女輩に弄物

毎もの所に門口、富田屋といふ掛行燈、一面に軒釣燭臺あまたあり、幕の内より官左衛門田舎大盡の扮裝、腹立てゝ居るを、十南畫師がくはへ天窓、居士衣、唐扇を持ち、お松仲居の形にて止めてゐる、上の方にお俊、女郎のこしらへ、顔そむけ煙草呑んでゐる、下の方傳兵衛、羽織袴、萬八手代の形、仲居お政、藝子小鶴、鹿路、野汐、皆々氣の毒なこなし、奴辰内反打ち喧しういうてゐるを、友七幇間の形にて宥めてゐる、土盞、盃、硯蓋、肴取散らしあり、祇園囃子ばた／＼にて幕開く。

官左衛門「ヤア了簡ならぬ、放せ／＼」十南「これは官左樣、どうで御座ります」お松「粋の樣にもない、マア／＼待たしやんせいなア」友七「辰内樣もおんなし樣に、マア／＼可うござりますワイなア」萬八「若旦那、官左衛門樣の御機嫌が損ねましたが、御挨拶をなされませぬかいなア」

傳兵衛「それでも根つからどうもならぬもの」トお俊を敎へいふ。小鶴「官さん、腹立てずとモウ堪忍さしやんせいなア」官左「イヤ了簡ならぬ、お俊奴をお俊奴と思へばこそ、盃さそうといへば、忌だの汚いのとひせうばかり」辰内「お旦那の恥辱は奴めが一生懸命、あの女郎奴、討果さでおかうか」友七「さりとては情ない一文樣、旦那の腹立を宥めうとはせず、けしかける樣な事ばつかりいふワイの」十南「一體こりやお俊、ぬしが悪い、なぜと云はんせ、今度お國から此官左衛門樣がお上りなされたは、傳兵衛樣の事に就いて、何ぢややら難かしい御用ぢやげな、

猿曳門出諷

一猿廻し與次郎
一弟子娵おみき
一同おきぬ
一同おまん
一藝子のしほ
一奴たつ内
一藝子鹿路
一横淵九平太
一仲居お政
一横淵官左衛門
一畫師十南
一女郎お俊
一與次郎母お吟
一家主權兵衛

一古手屋五郎兵衛
一扇屋才兵衛
一雇嚊おさん
一代官彌藤二
一肝入儀助
一仲居おまつ
一藝子小鶴
一手代萬八
一左内妹おみつ
一井筒屋傳兵衛
一幇間友七
一米屋八兵衛
一富田屋おぬひ
一瀧口左内

上卷

造り物、正面長暖簾、兩方葭襖、奧坪口中二階、障子家體、橋懸堀石垣、柳の大木、釣枝見事に、

有つて突込みし刀を引抜き。貢「すりやこれが」トきつと見る奥より左膳、萬次郎を伴れてつかつかと出で、貢が持つたる刀の手を持添へ、きつと見て。左膳「刃物は正しく砂流し」萬次郎「これこそ青井下坂の」貢「スリヤ是が、エヽ忝ない」伯母「そんなら御兩所様」左膳「歸りし體にもてなし、裏路より忍入り委細は聞いた」萬次郎「此刀を疾に下坂と知るならば、貢に切腹はさせまいもの」ト左膳、貢が疵を見て。左膳「急所にかゝらぬ此傷口、養生なさば命に別條よもあるまじ、氣遣致すな」伯母、喜助「エヽ忝ない」ト思入、此時物置より次郎助窺ひ出で。次郎助「萬次郎、奴を」ト蒐る、喜助引捉へ貢の方へ投げつける、起上つて蒐るを貢持つたる刀にて胴斬にする。皆々「あつぱれ見事」貢「下坂の切味」喜助「二つ胴の正銘」貢「お二人様」トたぢ〳〵となる、皆々介抱して。皆々「これ心を確に」若い衆「おむかひ」ト下座より若い衆三人、奴にて出る。貢「サヽお立ちあられませう」　今日はこれぎりと。　打出し

伊勢音頭戀寐刃　終

表へ、やれ人殺し盜賊と、所の者共立騷ぐを漸々切拔け古市を立退く所へ、神領に血をあやす穢を流す大夕立、烈しき雷も構はゞこそ、是へ參つたは伯母者人、所詮運命つきたる某、申譯には腹かつさばき、死ぬる覺期でござつたワイのウ」ト泣く、向ばた〳〵にて喜助走出で、貢が體を見て。喜助「ヤア貢樣、はやまつた事をなされましたなア」ト貢に取付き泣く、貢喜助が首筋を取つて。貢「おのれ能うも皆々馴合ひ、贋物を渡しをつたな〳〵、それ故に身が切腹、主殺の大罪人め」ト取つて拔る。喜助「エヽ、情ない、この岩次が刀が則ち下坂の刀でござりますワイのウ」貢「ヤヽ、なんと」喜助「申しお前樣に預つた下坂の刀を、岩次めが盜出して、己が刀の身を入れかへ、又彼奴が刀の身は下坂と爲かへ居つた事を、一寸見つけました所で、預けた刀遣せとおつしやつた故、どうも彼奴等が傍で譯は言はれず、取違へた顏で岩次が刀を渡しました、拵は岩次が刀、中の身は青井下坂でござりますワイのう」伯母、貢「ヤア、」ト驚く。喜助「其事を申上げうと、跡から追つかけましたれど、間違うてお目にかゝらず、後へ戻つて見れば家内の騷動、コリャ何でも鳥羽の伯母御樣へと飛んで參りましたが、今一足遲かつたばつかりで、大事の〳〵御主人樣に御切腹をさせました、不忠者はコヽこの下郎めだ、こいつがこいづが〳〵」ト泣く〳〵握拳にて我が手にて顏をさん〴〵に叩き、色々悶き泣く、貢こなし

けまいといへば歸れといふ、是非萬次郎樣を待合さねばならず、所へ料理人の喜助が出て預らうといふ、此者は親人の家來筋ゆゑ預けおいた所に、彼の萬野め、阿波の客に賴まれ、お紺と貢が手を斷らせ身請をせんと、お鹿といふ女郎と馴合ひ、この貢が金子を騙つたと無體をいひかけ、其事よりお紺と緣を斷るやら、腹立に預けた刀を遣せと引手繰つてぼつこみ、萬次郎樣をあちこち搜す中、ふと見れば腰の物が變りある、南無三寶と立歸つて、喜助と萬野をさがせども二人とも行方は知れず、何でも客の腰の物ともしや取違へはせぬかと、一々吟味する中、これ此通り、こりやお紺が手管を以て騙取られた折紙を取返し、則ち德島岩次といふは、伯父大學殿へ出入の町人藍玉屋喜多六、又今まで喜多六というたは誠の德島岩次、兩人入替つて伊勢路に逗留せしも、下坂の刀折紙とも奪取つて、明日は國へ出立の樣子、告知らせしはお紺が働、それも其狀に委しく認めござります」　ト此内伯母狀を讀んで悔りのこなし。「所に萬野めを見つけ、サア最前預けた刀を出せといへども、知らぬと爭論ふ故、是非なく持つたる刀にて打すゑる機に、鞘は碎けて只一刀に萬野が最期、それより彼の岩次喜多六兩人ともに腕を斬おとし、眞額きり割、家内の者はさせじとよけるを狼狽へ、先方から肩先肋指脊中、みなかすり傷ながら夜中の騷動、さわぐ間に家内を殘らず詮議すれども、口惜や下坂の在所しれず、詮方つきて

る、伯母すぐに差副を引たくり。伯母「この差副も親の魂、穢す事はマアならぬ」ト貢いろ〳〵口惜しきこなしにて泣く。「不忠者の貢、萬次郎樣へ申譯、伯母甥の緣斷つた」ト件の大小を抱へズッと起ち。左膳「某とても主從でない」ト萬次郎を引立て門口の方へ行く。伯母「御兩所樣」左膳「さらばだ」ト貢兩手にて左膳と伯母の裾を引張り、兩人の顏を見て。伯母「出て行きをらう」ト刀の鞘にて手を拂ひのける。左膳「人外め」ト蹴飛す、獨吟になり伯母暖簾口へ入る、左膳萬次郎思入ありて向へ入る、貢跡にこなし有つて硯箱を取出し、書遺かき、獨吟一ぱいに書終ひ、覺期極めたるこなし、以前の刀を取出し、眞中へすわり拔身を左の腹へ突立つる、納戸より伯母走出で貢に取付き。伯母「ヤア貢腹切りやつたか、そなたに凶事をさせまい爲、大小を取上げて勘當したも、まこと色に耽ける所存があらば、勘當受けたを幸に立退くであらうと思の外、此刃物は何處に有つたぞ、エヽ情ない事して給つたノウ」ト取付く、貢こなしあつて。貢「伯母者人、大切な下坂の刀、萬次郎樣へお渡し申さうと思うて、二見の知音に行たれば、萬次郎樣は折紙の詮議にお出なされお目にかゝらず、大方古市の油屋へと此四五日が間、往て見ても〳〵間違うて跡へんばかり、やう〳〵昨夜油屋へお出なさるゝ事聞いたに依つて待合はす內、仲居の萬野といふ女、廓の慣なれば腰の物を預らうといふ、大切な下坂の刀ゆゑ預

ういふ仔細で奪取られた、サア眞直にいへ、サアどうだ〳〵」ト突放す、伯母貢に詰かけ。
伯母「今あなたの仰しやる通り、國の騷動萬次郎樣のお身の上、それ知らぬそなたでもない、伯母が苦勞をして買求めた事は是非がないが、どういふ事で其方ほどの人が、あの大事の刀を奪られた事ぢや、サアちやつと譯を云うてたも、譯はどうぢやいノウ」ト貢は俯首いてぢつとこなし。左膳「ムウ斯程まで尋ぬるに一言の言分せぬは、扨は噂に聞及ぶ古市の遊女に性根を奪はれ、茶屋狂の金子に手づかへ、大切な刀を賣拂うたな」貢「イヤ全く左樣では」左膳「左樣でなくば刀を出せ」貢「サアそれは」左膳「出さねば汝が放埒ゆゑ、なくしたに相違ない、見下げはてた不屆者、遖れ事を爲損ずまじき者と思ひ、大切の儀を申付けたは某が一生の不覺、ハテ是非に及ばぬ」伯母「藤浪樣が今の樣におつしやつても、言譯をしやらぬからは、そんなら愈遊所の拂に」ト貢が胸倉をとつて。「エ、そなたは見下はてた人ぢやのう、兼々人の噂にも、古市へ通ふのおやま狂するのと聞いても俺は聞流し、若い中は誰しもありうちと、何を聞いても知らぬ顏、よもや其樣な大膽な事は有るまいと思の外、エヽマア淺ましい心ぢやノウ」ト突放し、貢いろ〳〵こなし有つて親の刀に手をかける、左膳これを止めて。左膳「刀で切腹とは武士の行義、不忠不義の身でのぶとい奴め」ト引たくる、貢こなし有つて又差副にて死なうとす

左膳取つて見て。左膳「なる程正眞の折紙、シテ下坂の刀は」貢「サア其刀は」左膳「其刀は其方が所持致して居るではないか」貢「サ其刀は」萬次郎「コレちやつと出して給いのう」貢「サ其下坂は」左膳「どう致した」萬次郎「コレあの折紙と一緒にして國へ歸にたいワイの」貢「サアその」トうぢ〳〵いふ、伯母傍からあせるこなし。伯母「これ〳〵貢、今其方がいやるには、下坂の刀は先達つてから萬次郎様へお渡し申しておきやつたぢやないか」萬次郎「イヤまだわしや受取らぬ」伯母「エヽ」ト左膳思入あつて貢が傍へ寄つて。左膳「貢、下坂の刀はドヽどう致した、今聞けば萬次郎へ渡しおいたと、何とやら紛はしい、下坂は何と致した」貢「サア其刀は」伯母「どうしたぞいやい」貢「サア」萬次郎「早う出してたもひのウ」貢「サア」左膳「出さぬか」貢「サア」伯母「どうしやつた」萬次郎「出して給ひの」左膳「なぜ出さぬ」皆々「サア〳〵〳〵」ト三方より取巻き。左膳「又候や奪取られたか」トきつといふ、貢三人の顔見てこなし有り。貢「ハアア」ト俯首く、三人顔見合せ。三人「ホイ」ト當惑、左膳貢を引付け。左膳「こゝな狼狽者めが、騙取られし折紙を取返しても、肝心の下坂なくては役に立たうか、阿波淡路兩國の騒動、殿の瑕瑾、萬次郎は切腹といふ所へ氣が注かぬか、女ながらそれなる伯母が、古主の爲といひ樣々と心勞致し、買求めしと聞及ぶ、女すら古主を大切に思ふ志、それに一旦請取りし刀、ドヽど

と思うて大抵案じた事かいなッ」貢「左様ならば直様出立つかまつりませう」伯母「太儀ながら然うしやく〱」ト向ばたく〱にて左膳萬次郎に案内させ出て、直に門口へ入る。萬次郎「ヤア貢、爰に居やるか」貢「萬次郎様。左膳様」左膳「貢、さて〱出來した〱」ト兩人上へ通る、此時表の物置より次郎助そつと出で、戸口に立聞する。「夜前古市に於いての樣子、委細聞届けた、よくも徳島岩次、藍玉屋喜多六、兩人共に討つて捨てた、併し今一人次郎助といふ奴、迯失せしとの事、奴等三人伯父大學がまはし者、一人にても國へ歸り註進させては、家老今田九郎左衛門の忠誠も水の泡、さるに依て次郎助めは身が家來に申附け、見つけ次第に討放す手配」ト次郎助聞いてぎよつとして物置へ迯込む。萬次郎「コレ貢、下坂の刀がそなたの手にある樣子、お岸に聞いたに依て、藤浪様と御同道申したワイの」左膳「下坂の義につき心勞致した伯母とは汝であらう、いまだ對面はせねども某は藤浪左膳、女ながら古主へ忠義を立つる志、過分〱」伯母「これはマア有難い御意に預りましてござります、これといふも貢、そなたの忠義ゆゑ、オ、出來しやつた〱」左膳「イヤモウ國へ對して大功ある福岡貢、萬次郎が爲には氏神も同然、貢が事は仇おろそかに思はぬがよいぞよ、貢オ、太儀〱」ト扇にて扇ぎ立つる、貢術なきこなし。「シテ岩次を手にかけ取返した折紙は」貢「則ちこれが折紙でござります」ト

を見て吃驚のこなし有つて、貢に見せぬ樣に疊み、片側へよせて。「オヽそれで可い／＼、ても扨も親子とて能う似合うた事ワイの、それにつきそなたに見せる物がある、待ちや／＼」ト上の障子家臺をあける、內に毛氈を布き、此上に刀掛に大小かけ、其前に本膳燒物つけ供へ有つて。「コレ爰に飾つてあるは、そなたの父御の差料、昨日は五月四日、祖父樣といひ其方の二親の祥月命日の精進日、今日は又武家方に祝ふ端午の節句、ひとりの下女は親の許へ二三日私用あつていぬる、せめて心ばかりの祝日と思うて、七時起して私が手づから御膳の拵、所がらとて生鰹の燒物、この如く大小を飾り御膳をすゑたも、其方の武運、勝つて鰹の首途よし、夜の內におじやつたれば朝飯もまだで有らう、祝うて此膳に坐つて行きや、給仕は伯母がしませう、サア／＼早う／＼」ト右の膳を取つて貢にすゑる。貢「左樣なれば私が自由に仕ります、モウお構ひ下されますな」伯母「イヤ大事ない、遠慮しやんな、お汁が溫うなつたで有らう、盛かへて來て遣りませう、サアちやつと食べかけやいのウ、どれ／＼」ト汁椀を持つて入る、貢跡見送り。貢「なんにも知らずと。伯母者人、御赦されて下されませ」トちやつと手を合せ拜み。「親人のお差料とは幸ひ／＼」ト飾りある大小を取つて差副をさし、刀を傍におき膳にすわる、伯母丸盆に汁椀をのせ持出で。伯母「サア／＼お汁も煖まつた、ちやつと食べや」貢「ハイ

つた様子は」ト貢ぎつくり塞り、こなし有つて。貢「イヤお案じなさるゝ事ではござりませぬ。めでたい事でござります」伯母「何ぢや、めでたい事ぢや」貢「左樣でござります」伯母「ヤレ〳〵嬉しや、今日は五月の節句、朝早うからめでたい事とは嬉しい、さうしてめでたい事とは何のやうな事ぢやぞ、ちやつと聞かしてたも〳〵」貢「サアその慶たいとまうすは彼の何、オヽそれ、先日あなたより請取りました下坂の刀、萬次郎樣のお供仕りますは、それ故一寸お暇乞に参りましてござります」伯母「それは誠にめでたい、めでたいが貢や、見れば其方の衣服はびつたり濡れて有る、さつきの夕立に雨具の用意もなしに滅相な、其樣な物著てゐるはきつい毒ぢや、幸ひ〳〵」ト簞笥へかゝる、貢件の拔身を見られうかと心遣のこなし、伯母引出より貢が紋附の單物、帶ともに出して。「コレ貢、この單物は其方の父御の定紋、そなたへ送つた記念の中で、せめて此單物一つは私が方にとゞめ置いたは、朝夕兄樣のお顏を見る意、紋も幸ひ同じ事、サア是を著更へてめでたう萬次郎樣のお供しや、ドレ〳〵私が著せて遣りませう」貢「それはお慮外、左樣ならばお借り申します」伯母「オヽ借るの貸すのと、親の物は子の物ぢやないかいノウ」トいひ〳〵著せかける、貢は帶を解く、此時懷より折紙とお紺が狀おちるを、ちやつと隱し、著更へて帶をしめる、伯母貢が脫いだ袷を取上げる拍子に、血の著きある

所にて鷄の聲、向ふより次郎助棧俵をかづき走出で、花道よき所へ來る、夕立やみ俵を脱ぎ。
次郎助「ヤレ／＼恐しい夕立で有つた、雷の烈しさ、ヤレ恐しや／＼、シタガそれより恐しいは貢の跡から追つかけてうせる樣に思はれて、滅多無性に逃げて來たが、爰は何處ぢや知らぬ、アア任よ何處でも大事ない、夜通に逃げたに依て、からだが斑枝花の樣になつた、何處へなりと入つてちつとの間寐たいものぢや」トいひ／＼本舞臺へ來て物置を見つけ。「可いワ、こいつ物置さうな、暫く爰へ入つてぐつたりと遣らかさう、よし／＼」ト戸をあけ入る、合方本釣鐘にて曉六つ鳴る、所々にて鷄の聲する向ばた／＼にて貢右の形にて拔刀ひつさげ走出で、本舞臺門口へ來て立止り、こなし有つて拔身を下に置き、草井戸の釣瓶を取り水を汲上げ、刀の血を洗ひ、腕に著いてある血汐を洗落し、頰被にしたる汗手拭にて刀を洗ひ、右拔身を拭き腰にさし、門口を窃と明け内へ入り二重舞臺へ上り、件の拔身を隱さうとする中、納戸より。伯母「誰ぢや誰ぢや」ト是にて貢、そこにある簞笥の引出へ拔身をいれる、所へ伯母「誰ぢや／＼」と云ひ／＼ずつと出る、貢手早に簞笥をしめて伯母と顏見合せ。貢「伯母者人」伯母「貢、おじやつたか」貢「ハイ」伯母「今やつと夜が明けたが、夜路をおじやつたは何ぞ過急な事で有らう、氣遣な事ぢやないかや」貢「イエ／＼何にも氣遣な儀ではござりまぬ」伯母「それに又夜の中におじや

體、此道具止る、ト お鹿ひつしごきの女郎にて、客 袴を穿いたる 侍 にて、手を引合ひ迯げ出て捨白にてうろ〳〵してゐる、始終この内斬つた〳〵の掛聲、竹五郎裸體にて棒を振つて迯げて出る、跡より貢 血刀を提げ追つかけ出る。

お鹿「ヤア貢樣か」ト聲立つるを眞額を斬わる、お鹿倒れる。客「ありや斬つた〳〵」ト云ふを振返つて又斬る、客仕掛にて空竹破になる、竹五郎打つてかゝるを、是も一刀にする、竹五郎胴切になる、貢あたりの手水鉢の水を汲上げ息をつぐ、此時お紺お岸迯出る、貢振返つて刀を構へる、二人こは〴〵顔を見て。お紺お岸「ヤア貢樣か」貢「お紺、今一人はお岸か」二人「アイこりやマアどうせうぞいなア」貢「下坂の刀を失うたれば言譯がない、モウ敗れかぶれ、怪我すれば悪い退いてゐろ」二人「ぢやというて」ト よき時分、岩次ふるひながら窺ひゐて。岩次「うぬ」ト後より抱止める、立廻つて見事に斬つける、岩次血紅にて顔を切られ見事に倒れる、お紺お岸貢に縋る、貢二人が顔を見て急度思入、よろしく拍子、（幕）　幕の内大雷 雨車の音、これにてつなぎ早幕にて引かへす。

本舞臺三間の間二重舞臺、上の方折まはり障子家體、向ふ押入赤壁、納戸口橋懸、塗垂入口あり物置の體、いつもの所に門口、舞臺先ひら井戸、二重よき所に簞笥、右大 雷 大 白雨にて幕開く、ト所

てはふ〳〵傷をかゝへて、障子を明けて向へ迯げて入る、始終この内すて鉦、貢血刀を提げ障子を明けて、一間より客の刀を掛けし刀掛を取出し、舞臺の行燈にて一々改める事あつて、然でないといふ思入にて二階へかゝる、岩次うかゞひ居て貢を後抱にする、立廻つて、岩次が顋を切落す、岩次顋を抑へ倒れる、此内二階より喜多六、下の樣子を見てぶる〳〵震へてゐる、貢二階へ上る、喜多六夜著を被つて。喜多六「あゝ助けてくれ〳〵」ト震へてゐる、貢夜著を引取る、喜多六聲立てながら顏を出す、貢首を打落す、仕掛にて喜多六の首おちる、此内始終川崎音頭の鳴物、貢二階より下りて來る、三階若い衆殘らず客の仕出にて、狼狽へて向へ逃げる、貢二階より奧の方へ往かうとする、佐助夜著を被て迯出で、貢を見て隱れうとする、貢引捉へる、佐助聲立ながら顏を出すを、貢見事に首を打落す、此時釘貫の股引繻袢の男、棒を持出で貢に打つてかゝる、立廻つて此棒を打落す、男逃げて鴨居へ手をかけ飛上るを足を摑まへ、此足を見事に切落し、血刀を振つて奧へ入る、やはり川崎音頭にてチョン〳〵。

返し　　此道具引く

奧庭の體、萩垣所々に石燈籠、植込手水鉢、卯の花さかりの體、向ふ美麗なる障子を閉てし緣先の

つた、是からは下坂の詮議、腹立紛れ氣のせく儘、そこへつけ込んで外の刀を渡し居つたは、大方萬野めが所業と極つた」 ト貢こなし、此時向ばた〳〵にて南の口より萬野走出で内へ入る。萬野「ヤア此刀を」 ト貢が刀へ手をかけるを止め。貢「萬野此方の腰の物も返さず、よう贋物を渡したなア、サア身が刀を出せ〳〵」 萬野「オヽ何をいひぢやいな、お前の刀は喜助が預つたぢやないかいな、其刀はお客様のぢや、此方へおこさんせ」 ト取にかゝる、兩方刀を引ぱり。貢「俺が刀から出しをれやい」萬野「知らぬワイな」貢「知らぬとはのぶとい奴の」 ト持つたる刀の鞘ぐち叩く。「出しをれ〳〵出しをらぬか」 ト散々に叩き据ゑる、仕掛にて鞘われて思はず萬野が脊中に傷の付きたる思入、萬野脊中を撫でて見て恟りして。萬野「ヤア斬つた〳〵斬つた〳〵貢が斬つたワイな」 ト貢傷口を見て。貢「エヽこれ思はぬ大怪我、怪我ぢやワイの怪我ぢやワイの」ト思入。萬野「斬つた〳〵」トこれにて貢性根をすゑ、ト萬野を一刀きる、萬野腕を切落されア、と倒れる、此時次郎助奥より羽織を被て、うか〳〵と出て來る、貢刀を探しに奥へ行かうとする、次郎助萬野が死駭につまづき恟りして。次郎助「ヤア斬られて居るワ」 ト聲を立てる、貢振返つて斬付ける、次郎助上の二階へ逃げ、貢羽織の裾を捕へ引下さうとする、次郎助階下にしがみつく、貢後よりあびせる、仕掛にて羽織ちぎれて脊中を斬られ、見事に落ち

し。貢「すりやこの」トお紺びつしやり障子をさす、貢行燈の燈にて篤と見て。コリヤ先達て騙取られた誠の折紙、エ、忝ない」ト懐へ入れ右の狀を取上げ。「人目繁く候ふ故、退狀と見せ認め參らせ候ふ、先程はお鹿づらと譯有る樣に申し、其上金まで欺取りなされ候ふ樣申し候ふへども、更々お前に覺のない事は私が能う存じ居り參らせ候ふ、皆これは萬野とお鹿と馴合、お前に惚れたといふも金を遣つたといふもみんな嘘にて、誠の事は阿波の客に頼まれ、お前に無實をいひかけ、顏の立たぬ樣にして、私に愛想を盡かさせ、お前と手を斷らせ、國へ伴れて歸なうといふたくみにて御座候ふ、その事推量致し候ふ故、態とお鹿づらが事を云募り、其上俄に侍は忌ぢやと難題をいひかけ、わざと緣を斷つた樣に見せかけ候ふ故、阿波の客も心をゆるし、日外萬次郎樣の騙られなされた德島岩次といふ侍は嘘にて、誠は藍玉屋喜多六といふ者にて候ふ、又喜多六と申す者は德島岩次と申す侍にて、皆國元の伯父御のまはし者とやら、態と町人と侍が入替つて居たのに候ふ、御心得の爲にもなり候はんと存じ申上げ候ふ、眞實緣を切る心にては御座なく候ふまゝ、必ず御心變らせ下さるまじく願上參せ候。ム、すりや彼奴等が身の上を聞いて報さうため、まつた此折紙を取かへさうばかりにすげなう云うたか、お紺、さうとは知らず恨んだは俺が過り耐へてくれ、汝が志過分なぞよ。マア折紙は手に入

よとな」ト刀をさし尻をからげ、花道の眞中まで行き舞臺を見返り、皆々の顔を見て舌を出し、につこり笑ひ、癡呆めといふこなしにて向へ入る、萬野思出したるこなしにて。萬野「ア、鈍な事をしたワイなア／＼」三人「何ぢや／＼」萬野「よう思へばあの喜助はモト貢が家來筋と、ちらりと聞いたワイなア」三人「ヤア」萬野「下坂の刀と知つて、取違へた顔で貢に渡しくさつたワイの」三人「ヤア丶」萬野「よい／＼、コリヤ私が行て取返して參じませう」岩次「如何樣、此方の顔出しては後日の邪魔」喜多六「追つかけうにも足も腰もふぬけ玉のやうになつた」萬野「お前方は思ふ色樣を抱いて寐て待つて居なさんせ」岩次「そんなら喜多六」喜多六「われらは先へ御免／＼」次郎助「萬野、一刻も早う／＼」萬野「合點でござんす」ト萬野は花道より中の間の歩道を南の口へ入る、喜多六は二階へ、岩次次郎助奥へ入る、是より川崎音頭になり、向より貢走出で、つかつかと内へ入り。貢「喜助、萬野、萬野／＼」ト方々を呼びわめき。「ムウ此樣に呼んでも二人ながら出て來ぬは。扨は二人共、件の奴等と一つになり、此方の心の急くまゝに、贋物を掴まし居つたのぢやワイ」ト此内お紺二階の障子を明け。お紺「貢樣、ござんしたか」貢「お紺」ト下よりきつと見上げる。お紺「私やどう有つても侍は厭でござんす、書いておいた此退狀、コレ取つておいて下さんせ」ト巻紙の中へ折紙を入れて上より放る、貢取上げ折紙を見て恟り

んせぬか」ト是を聞いて喜多六大きに仰天のこなし、岩次次郎助悦び、岩次刀を取り見て。
岩次「なる程コリヤ身共が刀とは相違、スリヤ貢奴が取違へ、此方の刀を差いて青井下坂を置いてうせたか」次郎助「折紙といひ下坂まで手に入るといふは」岩次「これも萬野が働」萬野「えらからうがな」岩次、次郎「えらいワイ〳〵」萬野「祝うて一つ拍うかな」三人「ヤアしやん〳〵〳〵」ト是にて喜多六皆々を突退けて。喜多六「エヽ違うたワイやい〳〵」トもがく。三人「何が違うた」喜多六「さつきにお前方の知らぬ間に、貢奴が預けた下坂の刀と此方の刀と、二腰とも窃と盗んで出て、恰然寸尺が合うたを幸ひ、貢が下坂の刀の身を、此方の鞘へはめ、又此方の刀を貢奴が其の鞘へはめて置いたれば、其刀の身は矢張り此方ので、貢奴が取違へて差して去にをつたが誠の下坂ぢや」三人「ヤアヽ」ト恟り。喜多六「折角物した物を又元へ戻してのけた」岩次「エヽ忌々しい」ト持つたる刀を打つける。萬野「大事ござんせぬ、これ喜助どん〳〵」喜助「オイ〳〵」ト出る。萬野「コレ此方も大概な事をしたが可いワイの」喜助「何ぢやいの」萬野「コレ岩次様の刀と貢の刀と取違へて渡したぞや」喜助「エ」萬野「行て取返してごんせ〳〵」喜助「ようござります、私が一走り行て取返して参りませう」岩次「コリヤ此貢が刀を持行き、汝が麁相で御座るというて、此方の刀を取かへて戻りをらう」喜助「ハイ〳〵畏りました」皆々「早う〳〵」喜助「オツトまかし

多さん、わたしや請出される事は否でござんす、女房に成りやせぬぞえ、變改でござんす程に、さう思うて下さんせ、こんな所にゐると一倍腹が立つ、こちや二階へ往てドリヤ寐ようか」ト行かうとする、喜多六抱止め。喜多六「コリヤ待つてくれ、テモ扨も女郎に似合はぬ悋氣深い奴、大事の物なれども其方の疑ばらし、袱紗ぐち渡す程に、爰で披けると若し萬一外の者が見ては大事ぢや、二階へ持つて往て密と明けて見やいの」ト渡す。お紺「そんなら二階へ往て」喜多六「あけて見て疑はらしや」お紺「待つてゐるぞえ」喜多六「早う往きや」お紺「アイ」ト唄になり右の袱紗を持ち二階へ上る。岩次「時に喜多六、アノ折紙が有つても肝心の下坂がなくては、明日の出立もならぬ、今夜中に貢奴を害して、下坂を奪受る手短な思案をせずばなるまい」喜多六「オツトそこは抜らぬ、吾等が味ようして措いた」岩次、次郎「味よう出來たか／＼」喜多六「文殊が智慧をふるうた／＼」兩人「出來た／＼」ト萬野奥より大小を取つて來て。萬野「コレしてやつた／＼」三人「何ぢや／＼」萬野「先刻にお紺樣と貢と口說の跡が喧嘩になり、何が去ぬるというて預けた腰の物を遣せといふ所へ、喜助が持つて出て渡したは岩次樣のお刀、貢はうろたへ眼で、岩次樣の刀を差いてツイと去にをつたワイな、跡に殘つたはコレ此刀、こりや貢が差いて居た下坂の刀、何と手もぬらさず此方へせしめたは、めでたい事ぢや御座

お前にまだ問いたい事がござんすワイなア」喜多六「何なりと問うたり〳〵」お紺「外の事でも御座んせぬが、お前の懐に入れて大事さうにして居やしやんす袱紗包、アリヤマア何でござんすえ」喜多六「ヤ。あれか」お紺「何やら書いた物さうな、一寸私に見せて下さんせぬかえ」喜多六「イヤありや女子の見る物ぢやない、オヽさうぢや金毘羅様の守ぢやワイの」お紺「ても甚い嘘々」喜多六「なんで〳〵」お紺「あの様に肌身はなさず、大事にかけてゐやしやんすからは、アリヤどうでも色様の起請とわしや思ふワイなア」喜多六「ハテ滅相な」お紺「さうでなか一寸見せて下さんせ」喜多六「デモこれはどうも」お紺「見せさしやんせにや、矢張り起請ぢやな」喜多六「何のマア」お紺「見せともむ無かおかしやんせ、ようござんす、其様にお前の心にかけごが有りや、私が何程誠をつくしても何の役に立たぬ事、エヽ辛氣な事では有るワイなア」ト腹の立つこなし、此内喜多六眞面目になる、岩次次郎助氣の毒がり。岩次「これさ喜多六、お紺が彼の様に誠をつくすに、なぜ物を隱すぞい、其懐中な袱紗包を出して見せて遣りやいの」次郎助「心の變らぬうち、ちやつと出したく〳〵」喜多六「エヽ二人ながら喧しい、コレ此懐な袱紗包はかの折紙」岩次、次郎「ヤア」喜多六「ヤサア折ナア紙、をり〳〵かみ〴〵様のお守ぢやワイの」岩次「オヽそれなれば迂濶に出されぬも理かい」お紺「よいワイなア、見せられぬ物を見ようといふは私が無理ぢや、喜

は上首尾、殿は不首尾、其過りで萬次郎めはレコさ、併し伊勢の支配藤浪は萬次郎とは緣者、もし氣どられては伯父御のお身の上、そこで阿波淡路と隔て、まだ萬次郎が岩次樣を碌々に見知らぬを幸ひ、道中から入替つて此喜多六が岩次樣になりおほせ、まんまと伊勢路へ入込んだ所に、萬次郎が身の上を世話する責め、こいつぐるめに仕舞うてくれうと樣々と手をまはし、大方十が九つ二人ながら命はないワ、時にアノ責めを此樣に、意趣意恨を含む元はといへばお紺汝ぢやて、逗留の中フト此油屋へ來て、汝を見るとえらう惚れたに依て、とつくりと萬野に聞けば、汝と深い馴染ぢやげな、それはモウ〳〵けたいが悪うて、うぬ責めを片づけて、汝を女房にせうと思うた願が叶うて、此樣な有難い事はないワイ」トお紺に抱付く。お紺「とんとそれで樣子が知れたワイなア、そんならいよ〳〵私を國へ連れていんで、女房に持つて下さんすかえ」岩次「そりや喜多六、お紺が方から女房に持つてくれるかと詞詰だぞよ」次郎助「今迄ぴんぴんしたとは引替へて、お紺が方からせきが來たぞや〳〵」喜多六「コリヤモウどうも耐へられぬワイやい」ト紺を抱しめて。「岩次樣、この悅に金はいくらでも續けます、お前ちお岸を請出さつしやりませ」岩次「そりや過分な、是迄段々世話になる其方故、身共も遠慮いたし居つた、さうして給れば身が戀も叶ふといふものだ」お紺「イヤア喜多六樣え」喜多六「ヤア〳〵」お紺「私しや

かとさうぢやぞよ」お紺「オヽくど」ト岩次喜多六顔見合せ。喜多六實は岩次「喜多六戀が叶うて嘸
滿足に有らうなア」岩次實は喜多六「岩次さま、お紺がアノ心底を見ては、コリヤモウ化の皮をあら
はさねばなりませぬ」岩次「オヽ町人ならば女夫にならうとは、よい壺へ持込んだ汝が幸運、身
共が差圖の通り、よく岩次になりおほせた、出來した〳〵」喜多六「此褒美には國へ歸りましたら
藍玉を買込んで、ずつしりと儲けます、このお願お前宜しう頼み上げます」岩次「氣遣しやるな、
伯父御大學殿は身共次第、其願は聞達けて遣はさう」喜多六「エヽ有りがたう御座ります」岩次「お
紺、汝が望の通り喜多六は町人」喜多六「藍玉屋の女房にお紺とは、きつしり嵌つた」岩次「エヽ爰
な畜生め」お紺「マア〳〵待つておくれいな、私しや頓と合點が行かぬワイなア、藍玉屋喜多六
樣といふはお前ぢやないかいなア」岩次「されば藍玉屋喜多六と、町人に成つてゐたには深い樣
子の有る事さ」お紺「ム、そんなら阿波の御家中德島岩次というたは」喜多六「誠はお出入の町人、
藍玉屋喜多六ぢや」お紺「何の爲に其樣に入替つてゐやしやんしたのぢやえ」喜多六「これには段々
いはれ因緣、藍玉屋喜多六が岩次樣と入替つて、此伊勢に逗留する其譯は、アノ貢が古主今田
萬次郎、殿の仰を受けて青井下坂の刀を求めて此伊勢へ出立、又俺們は伯父御大學樣に頼まれ、
其下坂の刀を横合から引奪り、國へ歸んで伯父御の手から武將へ差上げさつしやると、大學樣

私を欺した譯立てさんせ」ト貢に取つく。貢「エ、知らぬワイ」ト鹿を突倒して羽織を引裂き舞臺へ打つける、唄になりつか〳〵と向へ入る、喜助門口へ出で後を見送り、マアあれで可いといふこなし有つて捨白にて奥へついと入る。萬野「ほんにマア酷い短氣者ではあるぞ」お鹿「とうとう私をさゝほさにしくさつた」竹五郎「サア〳〵お鹿さん、マア奥へお出」お鹿「わしも奥で酒なと飲も」萬野「よいワイな、私がせりふして遣るワイな、サアござんせ」ト蹈地になり、お鹿、萬野、竹五郎奥へ入る、跡合方、岩次そつと起き三人顔見合せ、お紺が傍へ來て。岩次「お紺出來した、よう貢を退いてくれたなア」お紺「そんなら今の樣子を」岩次「寢た顔で殘らず聞いた」喜多六「貢と今の詞づめ」次郎助「えらいものぢや」岩次「貢とさへ手を斷つたら、身共が請出し國元へ伴歸り、コリア德島岩次樣といふお侍樣の奥樣だ、悦べ〳〵」お紺「オヽ辛氣、今いうたを何と聞かしやんしたぞいな」岩次「ナニ聞いたとは」お紺「わしやアノ侍は大嫌でござんすワイなア」岩次「サアそれは貢と手を斷る爲の謔事ではないか」お紺「イヽエ」岩次「そんなら眞實侍は嫌か」お紺「アイほんまに侍は嫌でござんす、申しお前も私を請出して女房にせうと思うてなら、侍を罷にして」岩次「ハテ變つた物好、お紺スリヤ此岩次が武士をすてゝ町人にならば、いよ〳〵そちや女房になるぢやまで」お紺「町人にならしやんしたら女房になるワイなア」岩次「し

罷めさせまして町家住居、町人と女夫になれば父様のお詞も立つ、わたしや侍は嫌ひ、町人が可いワイなア」ト貢こなし有つて。貢「ムウ鍋屑もいへばいはるゝと、出來ぬ事をいふはコリヤなんぞ急に思案が變つたな、そんならいよ〳〵女房になる事は忌ぢやな」お紺「イヽエ忌ぢやないぞえ、ハテ侍を罷め町人にならしやんしたら、たとひ貧しい生活でも得心でござんす程に、町人になつて下さんせ」貢「ぢやというてそれがマア」お紺「ならぬかえ、お前がならにや私も忌でござんす、ナア岩次樣、さうぢやないかいなア、これ寐た顔せずと起きいなア」ト岩次に靠れかゝつてこなし有り、貢これを見て。貢「可いワ、汝が侍きらひなら俺も町人は嫌ぢや、忌な侍に今まで能う附合うてくれた忝ない、禮はゆるりと言はう」トずつと立つ。お紺「そんならいよ〳〵是限でござんすぞえ」貢「念に及ばぬ勝手にしをれ」ト紺が傍へ寄らうとする、萬野とめ。萬野「これ大事のお客の附いたお紺樣、指でもさして貰ひますまい、こなたの樣な無法者はモウ客にはせぬ、きり〳〵去んで貰ひませうぞ」貢「オヽいぬる、假令居いというても爰にはゐぬ、先刻に預けた腰の物を遣せ」ト喜助刀を持つて出で。喜助「オツトお預り申したは此喜助、ちやつと差してお歸りなされませ」ト岩次が刀を貢に渡す、貢腹立まぎれに引奪る。萬野「エヽ歸ぬるものならきり〳〵歸んだが可いワイの」ト表へ突出す。お鹿「これ

鹿様を可愛ほがらしやんせ、なんぼ私への面當ぢやというて、同じ家の女郎を捉へ、何の態のとまだ其上に金の無心、眞に見下果てたといはうか、殊に女郎は互に張のあるもの欺されたの騙られたのと、大勢の中で聲山立てゝ、傍で聞いてゐる其辛さ、ほんに餘りさもしい事さしやんしたと思や、口惜しいやら恥しいやら、わたしや今爰へ消えたう御座んしたワイな」ト科ありて泣く。貢「イヤサたとへどの樣な事が有つたとて、女を欺し金を取るやうな貢と思ふかい」お紺「イエ〳〵モウ何にもいうて下さんすな、聞きたう御座んせぬ、お前の方から隔てゝおいて、今更何いはしやんしても、私が耳へは入らぬワイなア」貢「サヽヽ其腹立も有理ぢやが、コリヤ正しうアノ萬野めが所爲、というて女の事、云へば云ふ程馬鹿になる、何にもいふ事はない、追つけ國へ歸ると元の身に立かへる、其時其方を請出して武士の女房」お紺「いやでござんす」貢「ヤア」お紺「お前國へ歸んで侍になると云はしやんすが、私しや其侍はきつい嫌ぢやワイなア」貢「ナニ侍はきらひぢや」お紺「アイ私が父樣も元は侍、朋輩の讒言とやらで永々の浪人、常々いはしやんすには、コリヤ必ず侍と二世の約束すなと、呉々とのお詞、それぢやに依て私しや侍は忌でござんす」貢「そんなら初からなぜさう言はぬ、今となつて何で侍が忌になつた」お紺「ハテ初から云はうにもお前は御師、何時なりと私が身儘になつたら、御師を

郎を欺すとはアノこゝな茶臼男めが」ト貢を睨みつける。喜多六「ハヽヽ皆聞いたか、俺們は阿波の田舎者なれど、藍玉を商ふおかげで、三人で金も澤山に持つてゐる、此方が國でいふには、伊勢といふ所は無性に金を欲がると聞いたが、お山を欺し金を奪るとは、ハテ伊勢といふ所は變つた事が流行るなア」次郎助「取分け御師の中でうすい奴等は、錢金を見ると、びり〳〵と震ひさらす、大方あれが伊勢乞食といふので有らうぞい」竹五郎「いかさま、金儲がないでもござりませぬ」皆々「ハヽヽヽ」ト貢を見て笑ふ、合方止む。貢「身不肖なれども福岡貢、女を騙り金を奪る所存はない、馬鹿な奴の」トお鹿を取つて突放す。お紺「イヽエ滅多に潔白には云はれますまい」貢「そりやなぜに」お紺「お鹿樣と譯もなし、金も借らしやんせぬお前が、何で今夜お鹿樣を呼ばしやんした」貢「それもアノ萬野が」お紺「さいなア、今夜お鹿さんを呼ばしやんしたばつかりで、お鹿さんと譯の有る無心狀を遣らしやんしたも、金を取らしやんしたも皆お前ぢや」貢「ヤ」お紺「とサア斯ういふ私から思ふもの、外のお方は猶の事」貢「デモ」お紺「それ程手詰の金ならマア私にいうてくれたがよい、僅な金をあた見とむない、シタが所詮わたしに云うても埒は明くまいと思うての事かえ、そりやモウ不がひない私でござんすに依て、さう思はしやんすも理でござんす、忝なう御座んす、よう隔てゝおくれた、急度禮いふぞえ、是から隨分お

萬野、そなたを頼んだは今や此頃の事ぢやないぞや、先の月の差入、マア文を遣れと云やつたに依て、恥しながら書いて遣つたら直に返事が來て、其次へコレ〱此五兩の無心狀、それから後へ二兩三兩、いうて來る度々に、皆そなたに渡したが、其金はどうしやつた〱」萬野「コレコレお鹿さん、何をうか〱した事をいひぢやぞいな、お前から受取つた金は、殘らず貢さんに渡したワイなア」貢「やい〱萬野、どこに金を受取つた」萬野「ソレお前に」貢「ヤ」萬野「エヽぢやら〱と云ひないなア、お前があれ程受取つておきながら、アヽ聞えた、お紺樣が彼處にゐなさるに依て、それで其樣にとぼけかいなア、そりやお前無得心ぢやぞえ、折角お鹿さんが上げなさんした金を、取らぬとは實にあんまりな白賢ではあるワイの」貢「覺もない貢に、汝等いひかけするのぢやな」お鹿「覺もないものが此無心狀は」貢「こりや俺が手跡ぢやないワイ」萬野「サイノお前の方で人に書かして遣さんした事、私が知らうかいなア」ト貢むつとして。貢「なんと」ト思入。萬野「ホヽお前の言譯がないとて私が知らうか、サア腹が立つならどうなとさんせ〱」ト貢に身體を突付ける、貢つかみつかうとして色々こなし有つて氣を變へ。貢「女を相手にするは大人氣ない、此禮は重ねていふ、萬野さう心得てゐい」ト胸を鎭めすわる。お鹿「萬野、今の一言でそなたの疑は晴れた、ほんに女郎が客を欺すはお定り。それに女

お鹿「イヽエ譯をいはうより、慥な證據はお前からおこさんした文を見せうかえ」貢「オヽ見やう」
お鹿「今取つて來る、待つて居さんせ」ト奥へ走入る。岩次「アヽ爰で又飲まうと思うたら、しゆんだ臺詞で理に入つた、コリヤ其枕を遣せ」竹五郎「アイ〳〵」ト枕を持つて行く、岩次横になる、お鹿狀三本程持ち出て來り」お鹿「慥な證據、今讀んで聞かすぞえ」ト文を披き讀む、此內お紺岩次に靠れ煙草のんでゐる。「ようぞや御文下され、淺からぬ御心もじの程うれしく存じ候ふ、左樣に候らへば、ちと〳〵手支へ候へば御無心ながら、金子五兩御遣し下され候はゞ山々悅び申し候ふ。此文には五兩、又此文には三兩、又二兩と、ほんに文の來る度々に、無心をいうて遣さんせぬ事はないぞえ、其度々に一兩も斷いうた事はないワイな」ト此文を讀むうち、貢お紺が顏を見る、お紺ツント顏を背け莨のんでゐる、貢いろ〳〵こなし有つて。貢「どれ」ト文を取つて殘らず見て。「コリヤ俺が筆ぢやない、贋筆ぢや」お鹿「エヽ」貢「もとより金子の無心いうた覺はない、一體コリヤ誰を賴んだのぢや」お鹿「この仲介は仲居の萬野でござんす」貢「萬野を爰へ呼べ」お鹿「呼ばいぢやいな、萬野々々」皆々「萬野々々」萬野「アイ〳〵」トいひ〳〵出る、貢萬野を引つけ。貢「萬野マア下に居や。コレ汝が媒介でお鹿から文の來た覺もなし、まして金を取つた覺はないが、何であんな事を云はすのぢや」トお鹿萬野を引つけて。お鹿「コレ

聞いて下さんせ、私しや此お方に惚れました、アイ文つけました、其時貢様、なぜ否ぢやと云うて下さんせぬ、生中そもじの志うれしいの、イヤ近い中に逢うてしつぽりと咄せうのと、可愛らしい返事しておきながら、今更知らぬ、覺がないとはそりやお前卑怯でござんす、さもしいワイなア」貢「ほんにマア正々しい事をいふワイ」お紺「如何にわたしに當つけぢやというて、お鹿様を呼ぶとは、ほんにあんまりの事で、皆様可笑しいぢやないかいなア」喜多六「いかさま、蓼食ふ蟲もすき〲といはうか」次郎助「よつぽどのへち物喰ひ」竹五郎「ほんにコリヤ可笑しうござります」皆々「ハヽヽ」ト笑ふ、鹿腹立てズッとお紺が傍へ往き、とんと坐り。お鹿「お紺様、お前の眼からは成程をかしう御坐んせう、アイ私が顔が皆様も可笑しからう、したが何ぼう不器量でも、みん事人並に商もして通る、又きれる事も切れやんす、こりやコレ此首で商するぢやない、寐間へ入つて肝心肝文、いふに云はれぬ所がある故、つひぞお客に一度でもはかれた事はないワイな、其大勢のお客様方へ、無心のたら〲いひさがし、身著の著がへ櫛笄まで、工面のなるだけ爲つくして、ほんに今迄は私や貢様ゆゑに、大抵不自由な目をしてゐる事ぢや無いワイなア」ト貢鹿を引まはして。貢「コレお鹿、大概な事は女子と思ひ聞捨にもせうが、大勢の中で貢に金を遣つたとは、コリヤ何時どういふ事で金を遣した、聞捨ならぬサア其譯いへ〲」ト急いていふ。

そりやお前の心からぢやワイな」貢「おれが心からとは」お紺「この間は爰にござんすお客様で、間違うて逢はぬを幸ひ、ちやんとモウかはりを呼んで、實に殿達ほど水くさいものは無い、岩樣お前もさうで御座んせうなア」岩次「ハテ滅相な、身共はあんな無茶はいはぬて」喜多「さうともさう共、此方らが樣に一人を此樣に守つてゐるものは少いて」次郎「ちよこ〳〵顔を代へるも、亦面白からうかい」竹五郎「イエ〳〵あれも是も、掃歩くと箒客ぢやと異名をつけます」三人「何ぢや箒」ト貢が顔を見て。「ハヽヽヽ」ト貢むつとして又こなし有り。貢「イヤコレお紺、このお鹿は俺が方から呼んだのぢやない、此間から汝身に一寸逢はねばならぬに依て、毎晩〳〵來て見れど、流連客で逢はれぬ故、今夜待合して逢はうと思うて、萬野を頼み奥の舞を見せてくれといへどならぬといふ、酒一つ飲まうといや誰なと呼べといふ、呼ばねば今夜は去んでくれいと、逐出す樣にいふに依て、是非なう誰なと酒の相手に呼ばうといつたら、此お鹿を遣した、何にも譯のある事ぢやない、わが身に逢はうと、ホンノ詮事なしに呼んだのぢやワイの」トお鹿むつとして。お鹿「これ貢樣」ト貢が胸倉を取つて。「お紺さんの前ぢやと思うて、そんな事言はしやんすと、皆樣の聞いてぢや手前でなりと有樣にいはにやならぬワイな〳〵」ト振まはす、貢お鹿を又突退け。貢「有樣にいふとは何をいふのぢや」お鹿「云はいぢやいな、コレ皆樣も

なし、此方から返事した覺はないぞや」お鹿「エヽ」ト驚きたるこなし有つて氣をかへ。「ホヽ、ホオ、笑止、私とした事が何のマア、今改めてせりふせいでも可い事を、お紺樣と譯をつけて私に逢うて遣らうというて下さんした時の嬉しさ、どうなりとしてお氣に入らうと思うて、云うて越しなさる度毎に、一度もたゞの返事を上げなんだは、少となりと可愛がつて貰ひたさで御座んすワイなア」貢「とんと合點が行かぬ、一體そりや何をいふのぢや」お鹿「何を云はうぞいなア、一體お前に私が云うて上げた事、得心しておくれたぢやないかいなア」貢「何をいの」お鹿「いえ〳〵其樣にしら〴〵しう云はしやんすな、お前の方から返事を遣さしやんしたぢやないかいなア」貢「何日いの」お鹿「たしかな返事を遣しておいて、今更そんな事いはしやんすとは、そりや酷い胴慾でござんす、胴慾でござんすワイな」ト貢が膝に取付き泣くを突退けて。貢「さまざまの事をいふワイ」ト此時奥より。岩次「サア來やれ〳〵」ト岩次お紺が手を引き、跡より喜多六次郎助竹五郎ついて出て來る、これを貢見て。貢「お紺」お紺「貢樣、痛うはでな事ぢやなア」岩次「ハテそれを汝が構ふ事か、サア爰で飲まう〳〵」竹五郎「サア〳〵おひとつお上りなされませ」ト皆々上の方にて酒もり。貢「そんなら吾儕は家に居たか」お紺「知れた事いなア」貢「ムム家に居る者を、まだ戻らぬと、何の爲に萬野に嘘をつかすのぢや」お紺「わしや知らぬワイな、

ちらへ廻つても金が欲しさに脊腹を揉みやす、萬次郎に逢はす事はならぬ。といふ所ぢやが、金貰へばすこしの中は知らぬ顔、舞の稽古のどさくさに、一寸逢うてござんせ、ちつとも早う」トお岸を門口へ突出す。お岸「そんならこな樣得心して」萬野「ハテ私も粋のあがりぢやワイな」お岸「そりや眞實かえ」萬野「これ人の來ぬまに」お岸「萬次郎樣に」萬野「會うてござんせ」お岸「嬉しうござんす」萬野「ハテそれも金だけ、長うはならぬぞえ」お岸「合點ぢやワイなア、萬野殿」萬野「行かしやんせ」ト蹈地になりお岸向へ走入る、萬野金を數へながらいそ〳〵奥へ入る、上の方より貢出で。貢「この又萬次郎樣はモウ見えさうなものぢやが」トいふ内奥よりお鹿、女郎のこしらへ、きつけしごきの形、手に紙を持ち出で。お鹿「貢樣どこへ行きぢやいな、マア下に坐りいなア」ト貢の手を取り下におき、莨盆引寄せたばこ喫む。貢「お鹿、變る事もないか」お鹿「アイようこそ問うて下さんした」ト吸付けた煙管を貢に遣る、貢取つてのむ。「貢さん、きつと嬉しいぞえ」ト貢合點の行かぬこなしにて。貢「ム、そんなら萬野がこなたを」お鹿「アイお紺樣といふお馴染のあるお前に、何の恁のというたはみんな私が惡性なれど、どうも思斷られぬ故、度々あげた文の御返事、見る度毎に私が嬉しさ、推しておくれいなア」ト貢又合點の行かぬ科にて。貢「何ぢややらどぎ〳〵とをかしい物のいひ樣、こなたの方から狀の來た覺も

なア」　トお岸を引付ける。お岸「こりや萬野殿、どうしやるぞいの」萬野「どうしやるとは、そりやお前の心に問はんせ、あの喜多六樣が身請せうといふ今夜になつて、お前亡命せうとは、ほんにほんにづぶとい根性、此事が親方の耳へ入つて見さんせ、江戸か長崎へ直に鞍替ぢや、そこを私が云はぬのは、誰しも女子は相互ぢやと思ふから、サアあの若衆めが事は念斷らんせ〳〵、聞入れぬとお前、女郎衆とはいはさぬ、親方に代つて私が斯う〳〵」トお岸を慘く抓りたゝき色々あつて。「サア念斷らんせぬか」お岸「これ萬野殿、こな樣その譯知つてならば、何しに隱しはしやんせぬが、コレ何卒少しの中、知らぬ顏して下さんせ、情ぢや慈悲ぢや、どうぞこな樣の心一つで」萬野「イヽエなりやんせぬ、お前方を預つた私、生馬の眼を拔かうとは、そりやなりやんせぬ、喜多樣の方へ御座んせ、身請があれば自と私等も祝儀にありつく、慈悲も情も德を取らうが爲、サア思斷つたといはしやんせ〳〵」トこづきまはし。「エヽ情の強い、コリヤ寧そ親方樣の前へつれて行て臺詞せう、サア御座んせ」ト引付けるを、お岸振切つて萬野を突飛し、又起きてかゝるを、お岸懷より包金の入りし楊枝差を出して、萬野が顏へ打付ける。「アイタヽヽお岸樣、お前コリヤ投打さんしたのお前」ト立かゝりながら金を拈り見て。「ヤアこりや金かえ」お岸「これ少時の中ぢや、聞分けて私を遣つて下さんせえ」萬野「なる程、ど

貢が腰の物と兩手に持ち、うかゞひ出る、跡合方。岩次「まだな事をいふ奴ぢや、此刀の寸尺が丁度合うたが幸ひ、身を入替へておきや可い事を、馬鹿〳〵しい」ト兩方の目釘を拔き刀の身を入替へる、此時喜助そつと出かけ、此體を見て恟りして又ちやつとすつこむ、岩次刀を入替へて元の樣にして兩手に持ち。「貢めが去にをる時、其の先刻に預けた刀を吳れいと吐すワ、吾が物ぢやに依て取つて差しをるワ、去に居つた後で、殘つたこれこの俺が刀の身は靑井下坂、うまい〳〵」ト唄になり、こなし有つて岩次二腰を持つて奧へ入る、ト引違へて奧よりお岸出で。お岸「先刻に貢樣に逢うて、萬次郎樣の事賴んでおいたなれど、今奧で彼の喜太六が、今宵中に私を身請するとの事、コリャ所詮この家を密と脫けて、萬次郎樣に逢うて何かの噺、それそれ確か主は大林寺の方に待つて居やしやんせう、さうよ〳〵」ト身ごしらへしてそろ〳〵迯支度する、此内うしろへ萬野出かゝり窺ひゐて、此時門口に立塞がり。萬野「お岸樣、こりや何處へござんす」お岸「エヽこりや萬野殿か、そんならこな樣さつきにから」萬野「何も彼も後で大概聞きました、コレお岸樣、お前アノ萬次郎が事を忘れかね、亡命して行く氣ぢやの」お岸「アアこれ滅相な、そんな心ぢや無いワイの」萬野「いえ〳〵さうで御座んせう、女郎衆のよしあし目利するが仲居の役、お岸樣爰へお出」トお岸うぢ〳〵する。「お出いなア、エヽ來なんせい

若しやと思ふはアノ」ト呟き。「ぢやて」喜助「そんならアノ」耳「コレ大事の詮議、ひそかに〳〵」喜助「申し奥で一つあがりませぬか」耳「いかさま飲まうか」喜助「サアお出なされませ」ト賑やかなる所作の切になり両人奥へ入る、やはり右の鳴物にて、奥より萬野、喜多六、次郎助うかがひ出で。萬野「申し今の樣子お聞きなされましたか」喜多六「貢が差して居る一腰が青井下坂、是を盜めといはぬ許の今夜の首尾」次郎助「この次郎助が盜んで、國元へ高ぶけりと出かけうか」喜多六「いや〳〵それでは詮議の足がつく、どうしたもので有らう」萬野「そりや斯うせうワイな、私が盜んで爰を亡命、ハテ二三日も影を隱すワ、その中にお前方は國へお歸りなさんすワ、そこへ私が下坂を持つてお渡し申したら、何とよいぢやないかいなア」喜多六「さう手番がいけば可いぢやて」次郎助「萬野あぢよう遣るかよ」萬野「やらいでワイな、申し味よう遣つたらずつしりとおくれるで有らうな」喜多六「そりや知れた事いやい、内外の事まで打明けて置いた汝が事、此方の望が成就したら褒美どころぢやない、汝も阿波へ引取つて一生樂々と暮さすワイ」萬野「エヽ、有難い、それ聞いたら一倍精を出さねばならぬワイな」次郎助「そんなら貢奴が去なぬ中」萬野「イヤ滅多に去ぬ事ぢやござんせぬ、奥の舞のどさくさ紛に遣りかけうワイな」喜多、次郎「早う〳〵」萬野「合點でござんす」ト所作の切にて、三人こなし有つて奥へ入る、ト入違うて岩次わが刀と

「ござります」貢「俺にか」喜助「どうぞ一寸あれへ」貢「オヽ」ト合方になり兩人向へ出て。「喜助何の用ぢや」ト萬野出で後にそつと立聞してゐる。喜助「ハイ、今改めて申上げますは如何なれど、私が親共は貴方の御親父樣に中間奉公、親旦那のお供して阿波より志州鳥羽へ御逼塞、それ故親共も奉公を退き、此伊勢にわづかの生活、老病の枕許へ私を呼寄せ、今福岡孫太夫の御養子、貢樣は吾々親子が古主の若旦那、隨分かげながら意を注けて忠義を竭せと親父の遺言、此事は貴方にも能う御存の儀、申出しましたは及ばずながら、此樣に毎日毎晩遊所へお出なされましては、お身の禍を招く道理、もしひよつと貴方樣の失策にもならうかと、古主を大切に存じますから、猪口才な私が御意見、貢樣、必ずお心に觸へられて下されますな」貢「下ざまに似合はぬ古主を忘れぬ汝が意見、惡う聞かぬ忝ない、其心を存じ居る故、それ其一腰も汝に預ける、何を隱さう其一腰は、此度本國阿州より今田萬次郎樣へ、殿より御意を以て、求歸れとある靑井下坂の刀」喜助「エヽあのこれが」ト萬野聞いて悔りしてツイと入る。貢「伯母者人の志を以て、貢が手に入れた此刀を萬次郎樣に持たせ、本國へお供申さうとは思へども、刀の折紙を騙取られ、此詮議をせう爲に毎晩〳〵是へ來るのぢや、必ず放埓ではない程に、心遣は無用〳〵」喜助「ムウそんなら其折紙を騙つた奴等が此油屋に」貢「サア確とは知れねど

物は滅多には預けられぬ」萬野「そんなら歸になされ」貢「ヤ」萬野「ハテ伊勢の茶屋で腰の物を預るは昔よりの事、それに預けられぬとあれば、此方もお客には爲難うござんす程に、早うお歸りなんせ」貢「イヤサちつと爰に」萬野「用が有るなら腰の物を預りませう」貢「デモこの」萬野「預ける事が忌ならお歸り」貢「サア」萬野「預りませうか」貢「サア」萬野「お歸りなさるか」貢「サア」萬野「サア／＼／＼、エヽ埒の明かぬ、きり／＼歸んで貰ひませうぞ」ト慳貪にいふ、貢ぎつくり思案のこなし。喜助「イヤ其お腰の物、私が預りませう」貢「オヽ料理人の喜助」喜助「貢樣、毎晩お出なさるゝさうなが、私も此間は流連のお客樣で、一向急がしうてえお目にも懸りませぬ」萬野「これ喜助殿、そんなら此方が預るか」喜助「ハテ貢樣も今でこそ藤浪の御家來なれ、元はお歷々のお侍樣と聞及んでゐる、ぢやに依て輕卒に女子のこなさんへお預けなさるまいと推量して、身こそ卑しい料理人の喜助なれども男の端くれ、俺が預かる、ハイ私がお預り申しますからは、お氣遣はござりませぬ」貢「ムウ然らば其方に預ける、大事の一腰、麁相の無いやうに頼むぞよ」喜助「しつかりと預りまして御座ります」萬野「ドレそんなら小口の茶の間へやり申す樣に、喜助どん跡から連れましてごんせ、お紺樣の代に私がよい女郎樣を世話してあげうか」ト奥へ入る、喜助こなし有つて。喜助「いやア貢樣、憚りながら一寸申上げたい事が

野、どうぞ吾儕はたらいてくれぬかい」萬野「そりやモウお馴染のお前様の事ぢやに依て、どうぞして上げたいけれどな、お客は阿波のお侍、モウ〳〵ねち客で粋といふものは是程もござんせぬ、所詮一寸の首尾もなりますまい、マア今夜はお歸りなさんせ」貢「サアそんならお紺は、逢はれずば逢はいでも大事ないが、一寸こゝで待合はさねばならぬ事もある、コレ萬野、何と奥の舞の會を見ても大事あるまいか」萬野「イエ〳〵そりやなりませぬ、奥のお客はせきせばいお方で御座んすに依て、外のお客と座敷をひとつにしたら、大抵喧しい事ぢやござんせぬ、舞の場へ顔出しやなどしておくれなえ、私らが迷惑するワイな、お前今夜中待つたとて、所詮お紺樣には逢はれませぬ程に、ちやつ〳〵と去になされ、一文にもならぬお客に附合つてゐるのも鬱陶しいものぢや」ト貢ムツとするこなし。「ホヽヽ、私とした事がひよかすかと、貢樣必ず氣に觸へておくれなえ、シタガ其樣に爰に居たか、誰ぞ代の女郎さんを呼ばしやんせ」貢「そりやモウ如何なりともせうが」萬野「ムヽ代を呼びなさるか、オヽ能うお出たなア、そんならマア酒でも出そワイな」ト奥より銚子盃を運ぶ、踊地になり向より喜助出で門口に窺ひゐる。「貢樣、お遊びなさるゝならお腰の物を預りませう」貢「アノ腰の物を」萬野「オヽ此里の習を知らぬ者か何ぞの樣に、ドレお預り申しませう」ト貢の一腰に手をかけるを突退け。貢「イヤ腰の

喜多六、この者共密に此伊勢路へ入込み、萬次郎様に害をなし、殿より仰附けられし下坂の刀を奪取り、萬次郎様の落度より殿を罪に取つて落し、阿波一國を押領せんと伯父御の謀計、折紙を騙取つたも皆この手筋、引捉へて詮議とは思へども、何をいうても岩次といふ侍、喜多六といふ町人、兩人共に人相格好、藤浪様より聞いたとは抜群相違、何にもせよ是には仔細のありさうな事、其上お岸お紺兩人共に身請して、明日は本國へ歸るとの事、もし彼奴らが伯父御大學殿の廻者ならば、國へ歸しては、先達てより騙取つたる折紙を、伯父大學へ渡すは必定、さすれば折角手に入つた此下坂の刀も、折紙なくては何の詮ない鈍刀同然、其折紙は正しう阿波の岩次といふ侍が。コリヤ今夜は爰を動かれぬワイ」萬野「なんぢや貢が來た、どれ〳〵私が會うて斷いはうワイなア」トいひ〳〵奥より出て。「オヽ貢様お出なされ」貢「まんの、此間は逢はぬの」萬野「毎晩〳〵お出る噂は聞いたれども、此間は阿波のお客でとんと座敷が離れられぬに依て、ようお目にかゝりませぬが、貢様あゝお氣の毒や、今夜もお紺様はなりませぬぞえ」貢「ム、そんなら矢張り阿波の客で」萬野「アイ、今日は芝居の初日で、お客と連だつて見物に往かしやんしたが、戻に大阪屋でたてゝぢやといなア」貢「そんならお紺はまだ戻らぬか」萬野「アイ、まだで御座んす」トこなし有りていふ。貢「エヽ一寸お紺に會ひたいものぢやが、萬

ぞ」お岸「そりや道理でござんす、わたしも大抵氣のもめる事がござんす、貢さん聞いて下さんせ、あの奥へ來てゐる阿波の客がな、私もお紺さんも身請して明日は國へ伴れていぬるといふて、大抵煩い事ぢやないワイな」貢「ム、すりやあのお紺も其方も身請して」お岸「アイな」貢「明日は本國阿波へ出立といふか」お岸「アイ、どうぞ私もお紺樣も、いかぬ思案はあるまいかいな」貢「ハテかてゝ加へて身請沙汰、ムウ」ト手を組み思案する、奥より佐助走出で。佐助「モシモシお岸樣〳〵、奥で舞が始るといつて、あの喜太六樣がお前をつれて來いと喧しくいうてゐられます、仲居衆は大取込、サア〳〵早くお出なされませ〳〵」ト無理に引つぱる。お岸「エヽ今行くワイな」貢「ム、そんなら今夜は舞の稽古とやらが有るか」佐助「ハイ左樣でござります、阿波のお客がお好で奥座敷は大取込、サア〳〵早くお出なされませ」お岸「そんなら私しや行かねばならぬ程に、必ずあのお方が見えなさんしたら、今の身請の事を話して、よい樣にして下さんせえ」貢「ハテ何もかも私が呑込んでゐる、客の氣に違はぬ樣に、マア〳〵奥へ早く行かしやれ」お岸「そんなら貢樣、必ずえ」貢「ハテ承知致してゐるて」佐助「サアお出なされませ」ト唄になり、お岸佐助奥へ入る、跡合方になり、貢跡見送り思入あり。貢「先達て藤浪樣のお心添を以て、仰下されし本國阿州の伯父御大學殿の謀反に加擔の武士德島岩次、城下の町人藍玉屋

次郎様はどれへ御座つたやら、若ひよつと今夜あたり、此油屋へござつたも知れぬ、何でもあのお岸に會うて、さうぢや〳〵」ト内へ入る、あちこち窺ふ、奥よりお岸出て來り。お岸「貢さん、能う御座んしたなァ、お前萬次郎さんに會うてかえ」貢「イャ今にあはぬが、シテ萬次郎様は」お岸「アィたつた今ござんしたワイなァ」貢「シテ何處へござつた」お岸「あいなァ、もそつと先刻がた御座んした故、此間からの荒ましを掻摘んで咄す中、アノ意地悪の萬野が來て、それ故主の姿を見せまいと、大林寺の裏門の方へ少との間、遣り申しておいたワイなァ」貢「ムヽそんならアノ大林寺の裏門へ」ト行かうとする。お岸「待ちいなァ、まだ何やかや言殘した事もあり、萬次郎様も私に用の有る様子、是非〳〵おつつけ戻つてござんせうワイな」貢「ハテ其様に便々とした事ぢやない、知つての通り下坂の刀手に入つたに依て、早うお渡し申さうと、此様に捜して歩くのに、エヽ此方の思ふ様にもないお方ぢや、マァ一走り大林寺まで往てきようワイの」お岸「イエ〳〵お前が行かしやんした跡へ、萬次郎さんがござんして、私が折よう逢へばよし、又間違うたら却つて跡ばかり追うて居にやなるまい、まちつとの間待つて見やさんせ」貢「いかさま、そこも有るワイ」お岸「どの道私に逢ひにござんす程に、ちつとの間待つて居てあげなさんせいなァ」貢「そんなら然うせずばなるまいが、アヽこれ氣をもませる事ではある

す、岩次むつとして。岩次「ヤイ身が手をなぜ振きつた」お岸「ハテ是はどうでござんす、お前程な粋様が、何をマア其様に顔色かへて、ソレ萬野どん、お腰の物預らんせ。萬野「ほんに然うであつた、お腰の物は私がお預り申しませうワイなア」ト岩次が大小へ手をかける。岩次「デモあまりたび／＼」お岸「ハテお紺さんも酒機嫌さうな、常の氣質を知りながら、エヽマアお前も機嫌直しなさんせいなア」岩次「お岸が挨拶、野暮と見らるゝも殘念、ソレ萬野、大小預けたぞ」ト岩次大小を萬野に渡す。萬野「ハイ／＼確りとお預り申しました」喜多六「何だか氣の爲かして、一座の三人がみんな振られる樣に見える、こいつ女郎共が言合せて、田舍客だと思うて馬鹿にするな／＼」お紺「ハテ喜多六さん、又お前酒が過ぎたぞえ、何ぞと云うと氣短に、お前も野暮を罷めさんせ」次郎助「あれさ、どうでも手前たちは言合せて嬲ると見えるよ、ねエ岩次樣」岩次「ハテ嬲られても可いワ、此方は又大金を撒散らして見附けて遣るワイ」亭主「イヤ其大金とは有りがたい、時に踊も始まりませう、サア／＼大座敷へ御來臨／＼」次郎助「イヤ又おだて居るか」亭主「サア／＼お出なされませ」ト花やかなる所作の切になり、此人數殘らず奥へ入る、此鳴物を假りて向ふより貢、黒き紋付の袷小袖、黒縮緬の單羽織、件の下坂の刀を差して足早に出て來り、門口へ來て内を窺ひ。貢「ハテ此樣に毎日毎晩尋ね歩くに、如何に若いというて、彼の萬

イな」岩次「何のマア、客が女郎と手を引合うて行くを誰が笑ふものか、殊に夜に入つてあれば、誰も笑やせぬ、遠慮なし〳〵」お紺「それぢやというて、わしや恥しいワイな」トつんとして舞臺へくる。岩次「コリャ〳〵待つてくれ〳〵」トいひながら兩人矢張り鳴物にて内へ入る。お岸「ヤアお紺さん、戻らさんしたかいな」お紺「舞の稽古が始らうと思うて、急いで歸つたワイな」喜多六「オヽ岩次樣か」次郎助「今お歸りなされましたか」岩次「オヽサ舞とやらの稽古があると聞いた故、急いで戻つて來た、有樣はお紺とこつそり大阪屋でしけらうと思うたワイな」萬野「イヤモウ油斷のならぬ岩さんの惡性、お前の打込ましやんしたも理、お紺さんが他所行の前垂姿、女子の私らでさへ耐へられぬ、コレお紺さん、お前マア岩さんの傍へお出いなア」お紺「コレ萬野どん、岩さんの傍へ行てよければ私が行く程に、あんまり指圖して下さんすなえ」萬野「オヤどうせう、どの女郎さん方も氣儘には困るワイな」岩次「時に亭主、今夜その舞とやらの稽古が始るといふか」亭主「いやモウ始る段ぢやござりませぬ、何ぢややら江戸の藝者衆が大勢見えられて、面白い事が有るげにござりまする、其後が例の伊勢音頭、今夜は甚う賑かな事でござりまする」岩次「イヤ身共は其の伊勢音頭が望ぢや、國元への土産にコレお紺、汝が手で文句を書いてくれぬかいやい、サア〳〵一緒に奥へ往かう」トお紺が手を取る、お紺すげなう振放

や御座んせぬ、憚りながら慮外ながら油屋の岸で御座んす、モほんに親方さんの意見でも、遣手衆の小刀はりでも、いやな客衆を振るのは女郎の常、身貧なお方を合點で、色戀するのも勤のならひ、お前の身請は、アイ私しや忌でござんすワイなア」喜多六「その忌といふのを大金で身請するワ」お岸「アイ、わたしや必と忌ぢやぞえ」喜多六「エヽ此奴は」ト立ちかゝる、三木藏萬野止めて。亭主「マア〳〵お靜かになされまし、身請とあれば私が福徳の三年目、何しに否を申させませう」萬野「ハテマア仲居の私が圓うしやんす、圓い序に大盃でおはじめなさんせ」喜多六「是からは寧そ振られ序に暴飮と出かけべえ、丼を持つて來い〳〵」次郎助「それ〳〵暴飮に家體骨へ連尺をつけて飮むが可い、俺はいつそ水瓶で飮むべい」喜多六「サア〳〵飮むぞ〳〵」亭主「あばれのみとはチト亭主は迷惑でござりまする」喜多六「喧しい、サアつけ」萬野「サア〳〵酌しやんせうワイなア」ト踊地になり、向よりお紺はでなる前垂衣裳、古市女郎よそいきの形にて出てくる、跡より羽織大小國侍のこしらへにて岩次出で來り、花道にて。岩次「オヽイ〳〵、マアお紺靜に行きやいのウ」お紺「イヽエ私しや早う歸んで、舞の稽古が見たうござんす」岩次「サア見たくば一緒に見るワイの、そなたばかり行かうとは胴慾な、なぜ手を引合うてはくれぬぞいやい」トお紺が手を取る、お紺ふりきり。お紺「それぢやといふて、往來の人が見て笑ふワ

ら、今迄暇どつてゐたのか」お岸「アイ岩次さんの座敷で大きに酒を過して居たワイなア」喜多六「はんに岩次様の座敷なら可いが、俺は又ならず者の萬次郎めと、どこぞ密そりどれ合うてゐるで有らうと思つた、彼の萬次郎といふ奴は、二本差しても風來者、この藍玉屋の喜多六様は、町人でこそあれ阿波一番の大金持、應とさへいへば直に身請だ、なんと次郎助さうぢやアねえか」
次郎助「さうとも〳〵、其金持に請出されるとは其身の出世といふもの、其出世は手前はいやか」
お岸「いやで御座んす、此岸はアイ嫌で御座んすワイなア」喜多六「その忌といふのが矢張り萬次郎奴への心中か、小胸が悪いワ、コレあんな奴にくつ附いてゐるとナ、どうで仕舞は碌な者にやアならねえワ、彼奴は高が素浪人、浪人者の女房になればお主も袖乞、人の門へ立つて一文二文貰はにやアならねえ、俺はそれが不憫だからよ」次郎助「いか様、乞食をするは見るやうだ、そんな可危い奴にくつついて居ようより、金持に請出され、御新造様奥様といはれる方が、俺はマア可からうと思ふよ」お岸「これ次郎助さん、喜多六さん、お前方は何といはしやんす、あの萬次郎さんは浪人ぢやに依て、このお岸をも袖乞ぢやの乞食ぢやの謂はしやんすのかえ、そりやモウ愛しい男のためなれば袖乞非人は愚な事、命にかゝるも色の習、なんぼ果敢ない古市の女郎ぢやというて、京大阪のお山さん方と心は同じ事、女郎が金で自由になるものぢ

になるとまい〳〵と人の門口へ飛んでうせて、女郎の甘味を吸ひにうせると、引つかまへて踏みにじりつけくれるぞよ」ト萬次郎腹立つこなし、お岸もこなし。「何をびこしやこする、おれが又引つかまへて」ト行かうとする、お岸萬野をとめて。お岸「これ萬野どん、モウ螢は飛んで行たワイのウ」萬野「エ」お岸「先刻の時飛んで行けばよい事を、ちやつと大林寺の方へ飛んで往て、又後に爰へ飛んで來たが可いワイのウ」萬次郎「ホツ」ト溜息、時の鐘になる、頰被して悄と入る、お岸そつと門口を窺ひ見て。お岸「オヽ嬉しや螢は飛んで行たワイなア」萬野「コレお岸さん、お前螢の飛んだが嬉しいかえ」お岸「アイ可愛らしいあの螢、門口を飛歩いて、ひよつと悪戯な子供衆に捕へられ難儀せうより、高飛が可からうとわしや思ふワイなア」萬野「それであの螢が」お岸「おいのう」萬野「なる程、役にも立たぬ彼の螢、まごついたら其身の難儀、こがれこがれて今の螢が」お岸「ヤ」萬野「命冥加な螢めぢやなア」ト踊地になり、喜多六町人の形、少しくだけたるこなし、次郎助三木藏ついて奥より出て來り。喜多六「これ萬野、先刻から座敷を明けて、あの岸は何處へ行つてゐるのだ」萬野「さいなアお岸さんは、今爰で碌でもない螢を見て、コレお岸さん、あんな螢に構はずと、早う喜多六さんの側へ行かしやんせいなア」トお岸を喜多六が方へつき遣る」お岸「喜多六さん、私しや今戻つたワイなア」喜多六「そんなら芝居見物か

分け貢様の色々と御苦勞、鳥羽の伯母御様の働で、下坂は主の手へ渡つて、早うお前に悦ばさうと、大抵探ねてぢやないワイな」萬次郎「エヽそりや忝ない、それに就いても騙られた折紙が」お岸「サアそれも主を頼んで詮議して貰ひなさんせいなア」萬野「お岸様〳〵」ト奥にて呼ぶ。お岸「アレ〳〵悪い所へ萬野が聲、お前の姿を彼に見せては」萬次郎「何處ぞへ隠れうかいの」お岸「お前を見つけたら又喜多六に悪う告げるで有らう程に、斯うしなさんせ、お前は大林寺の裏門に廻つて居て、もそつとしてから來て下さんせ」萬次郎「そんなら行く程に、貢殿がおじやつたら待しておいてたもや」お岸「合點ぢやワイなア」ト又奥より。萬野「お岸さん〳〵」トいひながら出て來る、是にて萬次郎門口へ出で行かうとして行きかねて門口に彳みゐる、萬野ちよつと是を見つけ思入。「これお岸さん」ト大きな聲にて呼ぶ。お岸「エヽ萬野どん、悑りしたワイの」萬野「エヽお前爰にマア何してぢやいなア」お岸「サア私しやあの、オヽそれ〳〵螢が飛んで來てぢやに依て、あんまりしほらしさに詠めてゐたワイなア」萬野「ムウ螢が來たかえ」お岸「アイ」萬野「なる程、晝は顔出がならぬ身の上、夜になるとうろ〳〵して飛んで來る螢めが」ト萬次郎を尻目にかけて。「コレお岸さん、あんな蟲を見ずとちやつと内へ入らしやんせ、女郎の甘味を吸ひにうせる螢めが」ト萬次郎憤とする、お岸顔にて抑へる。「何ぢや〳〵、其面何ぢや、夜

しやんしたか一寸便を聞いて來ようか。イヤ〳〵貢さんの所へ行かうと思うても、あの奥に來てゐる喜多六が、身請せうの何のというて、それが染々わしや煩さい、身請の沙汰を眞實聞くが辛いに依て、今日も一日無理酒で、心で心を散らして見ても、どうも彼の萬次郎さんの事が苦勞になつて、身請の事を知らせたいにも主の在所、エヽモウ辛氣な事ではあるワイなア」ト辛氣なるこなし、しめやかなる唄になり、向より萬次郎著流し一本ざし、頰被にてうか〳〵と出で來り、内を覘いて。萬次郎「ヤそこに居やるはお岸ぢやないか」お岸「ヤ萬次郎さん、今も今とてお前の噂、能うマア來て下さんしたなア、サア〳〵こゝへ御座んせいなア」ト萬次郎内へ入る。萬次郎「イヤモウ俺も其方に會ひたうは思へども、日外や別れてから今に貢の世話に成つてゐるワイの」お岸「何を嘘ばつかり、この四五日は何處へ行かしやんしたやら、お行方が知れぬと云うて、貢樣は大抵案じてぢや御座んせぬ、そしてマアお前、彼の刀の事を知らずで有らうな」萬次郎「刀の事とは、アノ下坂の事か」お岸「アイ、それが貢樣の手に入つたワイなア」萬次郎「ヤアそりやマア忝ない、俺が四五日二見村へ戻らぬも、騙られた折紙と下坂の事について、鳥羽三界まで往て今歸がけ、シテマアどうして刀が手に入つたぞいのウ」お岸「さいなア、四五日以前、あまりお前の便がない故、貢樣の所へ訪ねて往て、始めて遇うた主の伯母御、其日は取

ういふ色みでもてる客があるに、俺ばかりは振のめされる、コレお岸ばう、そもじは追つけあの喜多六が身請して國へ行くとの事、何と嬉しいか」お岸「エ、それが何の嬉しからうぞいな」次郎助「いよ〳〵ひぞるのめ〳〵、ハヽヽ、時に岩次さんにお紺ばうは、まだ芝居から歸らぬか」萬野「アイ芝居茶屋の大阪屋で飲んで居やしやんすとの事ぢやワイなア。次郎助「ハテもう歸りさうなものぢやの」亭主「イエモウ今にお歸りで御座りませう、取分け今夜は江戸から登つた藝者衆が、今夜は面白い舞の囃子がござりまするから、モウ今にお歸りでござりませう」次郎助「それは珍らしからう、機嫌直しに其江戸の囃子を聞召して、喜多六が座敷で酒にせう」佐助「それが可うござりませう」次郎助「そんならお岸の君も俺と一緒に」お岸「マア先へござんせいなア」次郎助「アレどうでも俺には女の相性が悪いさうな」皆々「サアお出なされませ」ト踊地になり次郎助、萬野、三木藏、佐助、竹五郎、わや〳〵いうて奥へ入る、お岸殘つて跡合方。お岸「ほんに此萬次郎さんは、何故ござんせぬ事ぢややら、貢さんが折角尋ね索めさんした下坂の刀とやら、お渡しなされたう思召しても今に來て下さんせず、こりや寧そ萬次郎さんの所へ一筆書いて遣るが可からうワいな」ト硯箱卷紙を取出し書かうとして。「ほんに萬次郎さんは二見村に居やしやんすとの事、文は折角認めても、何處を的所に遣られもせず、いつそ貢さんの所へ行て、會は

こへ又隣座敷の客衆がつけこんで、サア一座が殖えたと思はんせ、翌の日まで飲續けても果しがつかぬと思ふから、今宵舞の稽古があるを幸ひ、喜多六殿に幕を通して、旦那さんからの迎ぢやとやう〳〵拔けて來やんしたが、次郎助さん、何でマア聲高に腹立てさんすのぢやぞいなア」次郎助「ハテこれが腹を立てずに居られるものか、相方のお絹めが、何だか惡しく僞やアがる故、俺ァ歸るといふのよ、サア〳〵歸るぞ〳〵」萬野「イヤモウお絹さんは例の持病で寢てぢやワイなア」お岸「それ見やさんせ、持病の癪で寢る事は彼子ばかりぢや御座んせぬ、この私でも今にも癪が起つて見やしやんせ、上のお客と有らうが、親方の御意で有らうが、ハテ病には勝たれやせん、客に逢うて癪を起すは女郎の常、あの子に於いて作病ぢやござんすまい、アイ此岸が證人に立つワイなア」次郎助「そもじがそれ程に云ふものを、俺だといつて遊ばで歸らうといふものか。併し又斯ういつたら旦那が俺を、のろく見るで有らうの」お岸「何のマア、誰がお前を野暮ぢやといはう、お前は粹の骨頂ぢやワイナ」次郎助「ナニ梅漬ぢやあるめえし」竹五郎「何を仰しやります」お岸「しかし御機嫌が直つて、私もマア落つきました、ノウ萬野殿」萬野「アイナ、主に腹を立てさしまして、私しや大抵案じた事ぢやござんせぬ、シテお岸さん、喜多六さんは御寢なつてかえ」お岸「おいの、喜多六さんは酒が過ぎて御寢なつてぢやワイの」次郎助「それ〳〵さ

しまする、どうぞ御了簡なされて下さりませ」佐助「モシ旦那、御機嫌直して一つあがりませ」次郎助「イヤモウ家内中が其様に止める事なら了簡もしやうが、いつも〳〵お絹が癪も久しいものだよ」佐助「ハテ御持病なら致方がござりませぬ。次郎助「したが俺は斯う言出しては、ちつとでも言ひじやうも立てにやならぬ、マア〳〵今夜は帰してくれ〳〵」亭主「ハテマアお機嫌をお直しなされませ」次郎助「イヤ帰るぞ〳〵」ト向へかゝる、捨白にて皆々次郎助を止める、花やかなる出の唄になり、向よりお岸古市の女郎の拵へ、酒に酔ひたるこなし、若い者竹五郎の肩に凭れ、駒下駄を穿き、花やかなる模様の前垂をしめ、花道中程まで来り、次郎助帰る〳〵の捨白にて、これに行逢ひ。次郎助「ヤアお岸ぢやアねえか」お岸「次郎助さん、門中をわや〳〵何でござんす」萬野「お岸さんお聞きいな、次郎助さんが又例の帰る〳〵で、私が止めるを聞かず、振切つて行かしやんすのぢやワイなア」お岸「ハテ又毎度の野暮を云はしやんすのかえ、マア〳〵私と一緒に帰つておくれいなア」次郎助「イヽヤ俺ア帰る〳〵」ト行くを止める。お岸「ハテマア来て下さんせいなア」ト鳴物の切にて此人数皆々本舞臺へ来る。萬野「こりやお岸さん、例の酒機嫌ぢやな」竹五郎「お岸さんは今迄、岩さんやお組さんと芝居帰に、何時もの茶屋で大酒さ」お岸「それそれ私しや今迄松坂屋の奥二階で、岩さんに交際うて、さいつ抑へつ飲んだと思はんせ、そ

一女郎お岸　　　　一徳島岩次 實ハ藍玉屋喜多六
一同　お紺　　　　一藤浪左膳
一同　お鹿　　　　一料理人喜助
一福岡貢　　　　　一伯母お峯
一若い衆大ぜい

本舞臺三間の間、上の方に中二階、障子たてきり、正面平舞臺にて美麗な障子をたて、伊達染の長暖簾をかけ、所々に油屋といふ掛行燈、障子の裡には引戸の戸棚、この中に刀掛、刀大分掛けてあり、門口にも家名を記せし掛行燈、すべて古市女郎屋の體、こゝに次郎助町人の形、萬野仲居のこしらへ、三木藏亭主の形、佐助若い者にて次郎助を宥めてゐる、所々に燭臺銚子盃を取散らし、此模樣よろしく踊地にて賑やかに幕明く。

三木藏、佐助「マア〳〵旦那、お靜になされませ〳〵」次郎助「いやだ〳〵、俺を田舍者だと思つて馬鹿にしをる、俺が合方のお絹が一向座敷に居をらぬ、さう惡しくされては一座の前へ顔が立たぬ、モウ〳〵歸るぞ〳〵」萬野「ハテ其樣にお腹をお立てなさんすな、お絹さんの癪は大抵強い癪ぢやござんせぬ、それ故ちつとの中、内所で鍼してゞ御座んす、お客を宥めるは仲居の役、私がおわび申しまする。マア御了簡なさんせいなア。」亭主「それに亭主の私までが出てお謝申

せうが、亡者の價は金百兩」彥太夫「アノ死んだ男を百兩とは、そりや又あんまり」伯母「高くばやつぱり火葬〳〵」彥太夫「アヽこれ氣の短い、きなかも値切らずそれ百兩」ト金を渡す伯母受取り。眞「それで死骸に言分ない」彥太夫「イヤモしがいお世話でござりました」□○△「然らば私等も用はあるまい、コリヤとんだ太々にあつた事だ」金兵衞「サアそつちの所持がついたなら、俺が刀の代金は」伯母「それ刀の代金百兩」ト百兩投出す、金兵衞取つて。金兵衞「ヤレ嬉しや」お岸「其お刀が手に入れば、萬次郞樣の歸參も叶ふ」伯母「片時も早う此刀を」眞「萬次郞樣へお渡し申して」伯母「詮議の目的は德島岩次」庄太夫「エヽこれ伯母めが」ト立かゝる。伯母「蘇生つたら密書の文體」庄太夫「ヤ」伯母「一々讀んで詮議をせうか」庄太夫「そんなら又死んだ」トばつたり倒れる。眞「甚いたわけな」彥太夫「思へば〳〵」伯母「彥太夫樣」彥太夫「エ」伯母「いかい御馳走」幕

三幕目

古市油屋の場
返し伯母內の場

一若イ者半次　一亭主三木藏
一同竹五郞　一客次郞助
一同佐助　一藍玉屋喜多六　實ハ德島岩次
一仲居萬野　一今田萬次郞

夫はたつた今死んだ、くたばつた」貢「何がどうだ」彦太夫「脾腹の當身で正氣を失ひ、アレ彼の如く目を見つめて死んで終つた、密書の宛名が死んだれば、外へ詮議はかゝらぬ筈」貢「ハテ死んだとあれば是非に及ばぬ、御師を害めた言譯は、此密書を持つて、後の事は俺がする、穢れた亡者は土地に置かぬが所の作法、イヤナニ禰宜達、庄太夫が彼の死骸、國境の山へ持行き火葬にさつしやい」ト庄太夫悔り。禰宜「それが可い、幸ひ我等は白帳で」皆々「葬禮を立てませう」講頭「裃は則ち施主」皆々「サア〳〵葬禮を始めませう〳〵」ト皆々立かゝる、庄太夫慌てゝ彦太夫が裾を引きいろ〳〵こなし、彦太夫いろ〳〵あつて。彦太夫「ア、これ〳〵滅相な、たとひ死んでも二十四時は見合すがお定、火葬も土葬も外ではさせぬ、伯父ぢやワイの、一家ぢやワイの」伯母「イエ〳〵なんぼ御一家でも、法式は破られまい、コリヤ矢張り火葬が可うござんせう」ト庄太夫術なきこなし、彦太夫うぢ〳〵する。貢「ハテ亡者に未練はかけぬもの、一刻も早く持出した〳〵」皆々「心得ました」貢「氣の毒ながら所の作法、ドレ其死骸を」ト立寄るを彦太夫とめて。彦太夫「アアこれ待つた、彼の死骸買ひませう」貢「なんと」彦太夫「サア死骸さへ買取れば火葬も土葬も此方の勝手、ぢやに依て買はう」伯母「なる程コリヤ有理なお詞、死骸さへ買取れば密書の詮議にも及ばぬ道理、とかく浪風立たぬ様に、この佛は賣るが可からうワイの」貢「いかにも佛は賣りま

二物もナニ有るものか、名さへ正直庄太夫」伯母「その正直なこな樣の懐中から、落散つた此手紙」ト手紙を出す。お岸「女郎の文か知らねども、私が拾つて伯母樣へ」庄太夫「南無三それを」ト取にかゝる、貢引廻して當る、庄太夫たぢ〳〵として上の方へウンと倒れる。彦太夫「これは」伯母「貢早う讀んで見や」ト手紙を渡す、貢取上げ。貢「密書を以て申入れ候ふ、かの青井下坂の刀所持致す山田の町人、國遠致し行方相知れず候ふ間、見合ひ次第かの刀を奪取り相渡さるべく候ふ、首尾なり候ふ上は、國許の伯父大學殿へ申し達し、武士に取立申すべく候ふ。庄太夫殿へ岩印。ム、先月二見の浦にて手に入つた文體。ム、國許の伯父御大學殿、コリヤ詮議の蔓に取付いたワイ」ト此内庄太夫心づき顔を上げこれを聞いて、ちやつと又氣のつかぬ思入、金兵衛うぢ〳〵する、彦太夫こなし有つて。彦太夫「下坂の刀返しませう」伯母「御得心が參りましたか」彦太夫「密書の譯は知らねども、縺の來さうな此刀、元へ戻せば出入は五分〳〵、ぢやに依て賣らうといふのぢや」伯母「さう無うては叶はぬ所、サア紛失の百兩」ト彦太夫金を取り刀を渡して。彦太夫「かうすれば彦太夫に言分は有るまいな」金兵衛「金が濟めば下坂は俺が刀」ト取にかゝる、貢引まはして。貢「イヽヤ此場の落著、詮義のかゝつた庄太夫、何も彼も彼奴にはざかせ」ト庄太夫目がけかゝるを彦太夫隔て。彦太夫「イヽヤ庄太夫に詮議はない」貢「ヤなんと」彦太夫「アノ庄太

といふものだ」彦太夫「コレサ庄太夫、お祓の三つや四つ遣つて仕舞やれ」庄太夫「ハテ扨こなたが何にも知らぬワイの、此お祓の中には最前の百。エヽこれ鈍な事で術ない〳〵、どうも此お祓は遣られぬ〳〵」伯母「達てならぬと仰しやるからは、此お祓に申分でもござりまするかえ」庄太夫「サアそれは、アヽこれ申分はなけれども、どうもこれは遣られぬ〳〵」伯母「是はしたり、お名さへ正直庄太夫様、よもや胡亂もござりますまい」庄太夫「何の胡亂が」伯母「サアそれぢやに依て持つて歸るので御座ります」庄太夫「サアそれぢやに依て渡されませぬ」伯母「ハテお渡しなされまし」庄太夫「イヤ遣られぬワイの」トいろ〳〵揉合ふ拍子に、お祓の中よりみだけ小判ばらばらとおちる。伯母「ヤお祓の裡から多くの金が」庄太夫「それを」ト蒐るを伯母支へる、貢手早く金を集め。貢「こりやこれ凡百兩餘、此裡に入れて有つたは」ト庄太夫に目を注け。「はてなア」彦太夫「そんなら先刻の金を彼の中へ、エヽ」ト肝を潰し、庄太夫いろ〳〵術なき科、貢金を紙に包み伯母へ渡す。伯母「これも矢張り伊勢の神隱し、金子が出れば太々を買取るにも及びませぬ、彦太夫様、唯今の刀改めて此方へ質請致しませう」彦太夫「イヤこれは」庄太夫「伯父貴一旦買取つた刀、戻す事はなるまいぞ」彦太夫「オヽ戻す事はならぬ〳〵」貢「金にかへて下坂の刀を欲かる庄太夫、汝が胸にも一物がなけりやかなはぬ」庄太夫「ハヽヽ我が心に引較べ、一物も

に相違はござらぬワイの」伯母「左様ならば此刀」金兵衛「これそれを」ト心遣ひ、伯母制して。伯母「すこしの中お待ちなされて下さりませ、お渡し申しませう」彦太夫「たしかに受取つた」ト刀を受取り。伯母「斯様に致しますれば、アノ貢に盗賊の悪名はござりませぬぞえ」彦太夫「何の有らう、疑は晴れました」お岸「伯母様のお世話で貢様の悪名は霽れたなれど、萬次郎様のお身の上が案じられて、私しやどうもそれが」金兵衛「案じるは此方も同じ事、アノ刀を質に置き其代金はどうするのぢや」伯母「サア唯今と申しては御座りませぬ、先程も申す通り二三日の所をどうぞ」金兵衛「イヤハヤ惘れた女だ、俺が方へ金も濟さず、見る前で質におき、そつちの勝手は可らうが、こつちの勘定が合はぬ、モウ破れかぶれだでんどへうせろ」伯母「いづれへなりとも參りませう」金兵衛「ハテふてくさりな女だ」彦太夫「こつちに居ては係あひだ、サア〳〵早く歸らつしやれ」伯母「イヤモウお差圖なくとも歸ります、左様ならばドリヤお暇申しませう」ト正面に飾りおきし金の匿してあるお祓を取り行かうとする、庄太夫うろたへ伯母を引とめ。庄太夫「アヽこれこれそれをどうするのぢや〳〵」伯母「ハテ太々を譲受けました上からは一萬度のお祓、私が申受けて歸ります」庄太夫「エヽ滅相な、それを遣つて耐るものか」伯母「ホヽヽ、太々の施主がお祓を持つて歸るのに、又遣るまいとはコリヤどうで御座ります」庄太夫「イヤサ有理な事だが無理

されて下さりまし」ト色々金兵衛を宥める、金兵衛不承々々控へる、伯母刀を彦太夫が傍へ持行き。「彦太夫様、ちつとお目にかゝりたう御座ります」彦太夫「ナニ俺にか」伯母「御苦勞ながら」ト庄太夫片側へ寄る、彦太夫前へ出で。彦太夫「何で御座るな」伯母「唯今お聞なさるゝ通のしぎ、主人孫太夫様よりお留守を預かるお前様、スリヤ主人も同然、紛失の百兩たんぞく致す間の質物をお取なされて下さりまし」彦太夫「ナニ質物とは」伯母「此刀は則ち青井下坂の正銘、判金五十枚の打紙、お聞もあらんが彼のお方より所望して申請けまする刀、大切なる品なれど、寶は身の差合せ、どうぞ此刀を質物にお取りなされて、今日の太々をお讓りなされて下さりまし」貢「アイヤ伯母者人、其刀を渡しましては」ト金兵衛もハア／＼と思入。お岸「萬次郎様の歸參も叶はず、といふて此場の手詰」貢「ハテ身に覺なき悪名受けても、其品ばかりは」伯母「ハテ悪い合點、マア控へて居や。彦太夫様、どうぞ此刀を」彦太夫「なりませぬ、名作は大名道具、社人の家に要らぬ物、百兩の質に取る事は否でござる」ト庄太夫聞きつけ。庄太夫「コレ／＼伯父貴、青井下坂とあれば、アノ岩印から頼まれた註文、ナア、明いた口へ持込んで來た代物、コリヤ太々を賣る方が可からうぞえ」ト彦太夫思入あつて。彦太夫「ムヽさうぢや、下坂に相違がなくば質物に預り、太々を賣りやりませう」伯母「いよ／＼此方へ讓受けまするぞえ」彦太夫「ハテ此方

此家の跡とり、父様の金は貴様の金も同然、わが物をわが遣ふに盗人といふ法はないワイの」庄太夫「如何さま是は道理、もつともな」彦太夫「これさ何も其様に脆くなる事は無いワイ、此家の留守中は俺が預つた此彦太夫が主人も同然、貢めが聟約束が有らうが、盗人と知つて親類の俺が聟には取らぬ、四も五もいらぬ榊は俺が預つた、きり〳〵呵責め」庄太夫「合點だ」ト彦太夫は榊を引つけゐる、伯母拾ひし手紙を下の方にて見てゐる、庄太夫貢を引つける。伯母「マアマア待つて下されまし」トとめる。庄太夫「コリヤ伯母御、俺を止めて言譯でもあるか」伯母「サア申譯はござりませねど、緣に繫がる貢が惡名、此場の明を立てたう存じまするから」庄太夫「そこで止めるか」伯母「アイ」庄太夫「シテ惡名を消す仕樣があるかえ」伯母「アイ賣つて下さんせ」庄太夫「賣れとは何を」伯母「サアもとの起は太々執行、此方へ買取れば金の行端も盗人の吟味も及ばぬ道理、ぢやに依て今日の太々を私が方へ賣つて下さんせといふ事でござります」庄太夫「コレ〳〵お伊勢樣の奉納の太々、端金ではいかぬ事、しかも今日は六貫目の太々、小判で百兩、こなたの方へ買取らうといふ金があるか」伯母「なる程其金辨へませう」庄太夫「アノ百兩の金をや」伯母「ハイお目にかけませう」ト袱紗より刀を取出しこなし、金兵衞肝を潰し、此刀に手をかけ。金兵衞「コレ〳〵此刀どうするのぢや」伯母「サヽ、何事も惡い樣には致しませぬ、少の間御了簡な

る、庄太夫貢を引付け。庄太夫「サア百兩の有所をぬかせ」金兵衛「騙つた刀を戻さぬか」庄太夫「在所をぬかせ」金兵衛「刀を戻せ」ト兩人して伯母貢を散々にこづきまはす、此時上の障子を明けお岸出ようとするを貢見て。貢「アこれ出ては惡い、思ひがけなき災難に此場のしだら、それに其方が爰へ出ては何かの妨げ、此場には御座らねど萬次郎樣のお爲にも惡い程に、必ず〳〵知らぬ顔して爰へ出まいぞ」ト是にてお岸障子の蔭に窺ふ。庄太夫「サア是からは金の詮議、血筋の伯母にも疑がゝつた、二人なから詮議は俺が」ト伯母貢を引きつけ、有合ふ棕梠箒にて散々に打つ、お岸耐へかねて此間へ驅出で、庄太夫を止め。お岸「マア〳〵待つて下さんせ」庄太夫「ヤアわりや先刻の伯母が妹と云つた女、まだ歸らずにうせ居つたか、汝も血筋だ疑が三分一かゝつて有るぞ」お岸「どうしてマア私がそれを」庄太夫「知らざア退いて見物しろ」お岸「ぢやというて此難儀をどうしてマア」庄太夫「エヽ面倒な」ト突退け貢へかゝる、此時庄太夫懐中より以前の手紙隕ちる、お岸拾ひ。お岸「庄太夫殿へ、岩印」ト思はず讀む、伯母聞いて。伯母「コレ」ト抑へてお岸が持つたる手紙を取り懐中する、庄太夫これを知らずに貢へ蒐る、此時榊走出で庄太夫に縋り。榊「コレ庄太夫、貢樣は盗人ぢやないぞ」庄太夫「何を娘子供の知つた事ぢやない、退いてござれ」榊「イヽヤ退くまい、貢樣は父樣の養子、末々は妾と女夫の約束、スリヤ貢樣は

うして持つて居さつしやる」貢「サアそれは」庄太夫「金盗んだか」貢「全くもつて」庄太夫「シテ此錠はどうして」貢「サアそれは」庄太夫「サア〳〵〳〵どうだ」ト貢當惑する。「ハヽヽ外の者を欺すとは違ふ、何もかも早う白狀して終はつしやれ、爰な大盗人め」ト貢伯母が方へ心遣あつて。貢「ハテ思がけもない此場の災難、これといふも子孫迄も刀の祟り」彥、庄「ナニ刀」貢「ハテ是非もないものぢやなア」金兵衛「イヤハヤ思ひよらぬ所へ來て怖い事を聞いた、それ程盗をする貢が、騙の伯母の仲人に入らうとは確かな請人、騙の請に金盗人、こんな確な事もあるまい、イヤモあんまり悃れて物が云はれぬ」彥太夫「これ〳〵お主は何處から來た、何者だ」金兵衛「ハイ儕は金兵衛といふ山田の町人、こゝに居る貢が伯母に百兩の刀を騙られ、此お家へつけこんで詮議に參つた所、今の金の紛失を聞いて、いやモウお氣の毒に存じます」彥太夫「アヽそんならアノ伯母めが百兩の刀を騙り、それを尾けこんで來たといふのか」金兵衛「左樣でござります」彥太夫「扨々かさね〴〵のぶとい奴等、騙をして此家に落込み、後を託つた俺にまで、どんな難儀をかける相談にうせ居つたも知れぬ、思へば〳〵恐しい事、これ〳〵庄太夫、其貢めを呵責んで金の有所を吐かせろ、金兵衛とやらは其伯母を何處へなりと連れて行け、此家の關係合になつちやならぬ、サア〳〵早く連れて行け」金兵衛「合點で御座ります、サア女奴うせろ」ト伯母を引立て

しやい、俤は又貴樣の爲を思うて下から出て此樣にいふのぢや、よう御座る、是からは親でも子でも兄弟でも、蛇の目を灰汁で洗うた樣に詮議して見せう、其時後悔さつしやるな」貢「何しに、俤も身晴、どの樣な事でもして見せませう」庄太夫「その詞反故にさつしやるな、貢殿、コリヤ貴樣の所持の品ぢやござらぬか」ト懐中より以前の紙入を出して見せる。貢「如何にもそれは俤が紙入でござるが、それがどうぞしましたか」庄太夫「これが貴樣の紙入なれば、こゝな貢の大盜人め」貢「ナヽヽなんと」庄太夫「サア斯う恥をかゝすまいと、物事圓ういへば乘上のした盜人根性、簞笥の錠を捩斷り百兩の紛失、其簞笥の傍に落ちてあつた此紙入、餘り古風の樣なれど詮議は詮議、持主の貴樣に疑がかゝる、ハテ神は見通し、太神宮樣がないと思ふか、天命は遁れぬもの、サア百兩の金爰へ出せ」貢「スリヤ其紙入が奥の間に落ちて有つたに依て、貢を盜人ぢやといふのか、ハテ貴樣も淺はかな詮議の仕樣、紙入が落ちて有らうが、盜みさへせにや此身は潔白」庄太夫「イヽヤ潔白とはいはれまい、コレ此紙入の中に捩切つた錠が入つて有つた、これでも貴樣は潔白か」貢「ナニ捩切つた錠が其紙入の中に、ドレ」ト寄らうとするを庄太夫突廻し。庄太夫「どつこい滅多に寄るまい、捩切つた錠持つてゐる此方、盜人というたが過か、但し盜まぬといふ證據があるか」貢「サア證據は無けれども全く此身に」庄太夫「デモ此錠はど

がござるか」ト庄太夫が傍へ來る。庄太夫「貢殿、今聞かつしやる通りぢや、伯父彦太夫殿が、金の見えぬで大勢へ疑かけて御座る、マア第一甥の俺からして疑がかゝつてある、濟む事なら是なりに濟さうと思つたが、共吟味とあれば是非がない、サア荒立てぬ中に早ういうて終はつしやれ。貢「コレ言うて終へとはソリヤ何をいふので御座る」庄太夫「ハテ斯う和かにいふからは何の隱す事はない、惡氣ではあるまいがコリヤ誠に間違といふもの、太々の百兩、定めて貴樣が側へ仕舞つたので有らう、伯父貴の氣休、有所をいうて終はつしやれ」貢「是さ庄太夫殿、スリヤ見えぬといふ百兩の金を、儕が盗んだといふのか」庄太夫「これはしたり何盗まうぞいの、貴樣今日は此樣な取込ゆゑ、其方が側へ仕舞はれたと見える、それぢやに依つて仕舞處を早ういうて、皆に落つかせるが可からうといふ事いの」貢「庄太夫殿、ハテ扨こなたは味な物の言ひ樣、百兩の金の行場、一向存ぜぬ貢に、無理に此方は仕舞處を知つてゞあらうとは、コリヤ物和かにいひかけて儕を盗人にするのか」庄太夫「是はしたり勿體ない、さういふ事では微塵もない、面々の身晴故、いひ難い事も此樣に打わつて」貢「默らつしやれ、知つた事なら何しに存ぜぬと申さう、其樣に疑はるゝなら可うござる、儕も身晴ぢや、どの樣な誓言でも立てませう、ハテ扨味な物のいひやうをする人ぢや」庄太夫「ハテ腹が立つなら堪忍さつ

詮議でもさつしやるがよい」今「さうとも〳〵、彦太夫殿早く吟味して、此方共の身の垢をぬいて下され」皆々「さつしやれ〳〵」彦太夫「ハテ此方衆より、孫太夫より留守を預つた此彦太夫が潔白を立てにやならぬ、其吟味の仕様は」ト茶碗に水を入れ持つて來り。「これからは此茶碗の水へ、御鬮を灰にして一人づつ飲んで貰はにやならぬ、盗んだ者は忽ち血を吐くと、コリヤ言はいでも知れた事、まづ差詰俺が甥の庄太夫、御鬮を燒かば汝から先へ飲さにやならぬぞ」庄太夫「エ」ト悔りして。「コレ伯父御、お前マア無理をいはんせ、それを俺が飲んで可いものか、知らぬ事ではなし、お前もソレ先刻にあれ程」彦太夫「コレ〳〵何をうか〳〵といふ、ハテお主に先へ飲さねばならぬ程に汝から飲め、俺が甥の庄太夫に飲せるからは、最屓偏頗の沙汰はない、誰にでも飲せる、爰へ來てゐる客人でも、貢は勿論飲さにやならぬ、汝一人疑やせぬ、此座に居る衆は皆々疑がかゝつて有る、ぢやに依て面々の身晴、共吟味にナアそれ、急度ナア合點か」ト目顔で知らせる、庄太夫呑込み。庄太夫「なる程飲みませう、どの樣な事でもして見せませう、ハテ名さへ正直庄太夫、曇霞のない俺ぢや、シタガ人一人落すは罪ぢやけれど、大勢の人に疑かける位なら、アヽせう事がない、小の蟲を殺して大勢を救はずばなるまい、アヽこれ嫌ながら共吟味せざなるまい、コレ貢殿、一寸爰へ來て下され」貢「アノ貢に何ぞ用

う」金兵衛「ナニ金濟す」貢「如何にも、アノ下坂の刀質に取つたあやの拔けぬ山田の町人、必然詮議を。というてはサア物がない刀の代金、この貢が遣はさうが、それも今というては出來ぬ、一兩日中にきつと調達して渡さう程に、今日の所は了簡して」金兵衛「コレ／＼貴樣の顏で一兩日は愚、半日でも待たれぬワイの、帶刀はして居てもこな樣の身分はこゝの食客同然、殊に此女の甥といふこと、伯母とぐるで大金になる彼の刀を騙るのか、エヽ爰な相盜奴」ト貢むつとして立ちかゝる、伯母とめて「何ぢや／＼、耳くじり拈くつて此金兵衛を切る氣か、面白い何處を斬る、サア斬れ、斬らぬか、なんぼ御師でも町人を騙つて、其上に人を斬るといふ事が神道の法にごんすか、それとも金濟すならサア百兩今受取らう」貢「サアそれは」金兵衛「金がなくば代物返せ」伯母「サアそれは」金兵衛「サア／＼／＼どちらへなりとも返事を叶せ」ト此時奥ばた／＼にて。彦太夫「サア／＼大事ぢや／＼、太々の金が紛失した、家内の者一人も動くまいぞ」ト奥より云ひながら出る、跡より庄太夫禰宜大勢、講頭も一緒にわや／＼と出で。講頭「そんなら先程差上げた百兩の金子が紛失したかな」彦太夫「そこ許から受取つた太々の百兩、奥の簞笥へ入れて置いた所、此取込に何奴か盜みました、何だか今日は怪しい奴が入込む故、こんな事が出來やうと思つた。」口「役目で來た此方等も、金紛失と聞いては各人の身晴、どの樣な

聞けば此方様、この女子を伯母ぢやといふが、そんなら伯母甥いひ合して此金兵衛を衒るのか」貢「何で私が」金兵衛「何ぢや〳〵顔に筋ばらんすな、もと彼の刀はさる侍から質に取つた代物、日限がきれたに依て刀は流物、賣渡に持つて往たを、聞けば俺を逃げたのふけつたのと云ふげな、ナニ盗物ではあるまいし、質物の流を賣るに何處から點のうちては無い筈、鳥羽の城下で求めたい者があるといふ故、尋ねて往て相談極め百兩に値が出來て、それ〳〵其女が百兩で買はうといふたが女の事、コレ怪しいと思つた故、近所で聞けば鄕士の家筋、相違もあるまいといふ人も有る故、如何樣とはまつて大枚な代物を預け、あくる日どうぢやと往て見た所、家内の奴等が留守ぢやといふ故、それから五六度も足を運び、揚句の果は亡命同然、何でも此處らに緣者があると聞いた故、御師の家を一軒づつ嗅ぎ歩いた所が、見つけたは俺か幸運、サア金渡すか但し代物返すか、どうするのぢや」伯母「サア有理ぢや道理ぢやが爰を能う聞いて下さんせ、兄樣は死なしやんしても家を絶さぬ鄕士の家筋、何の非道な事しませう、鳥羽の家へ歸つてから、衣類著そげを代なしても此方樣には損はかけぬ、腹は立たうが其處を偏に了簡して、私が歸る迄待つて下さんせ、コレ拜みます、拜みますワイなア」金兵衛「いやぢや〳〵待つ事ならぬ、でんどへうせろ」ト引立てる、貢金兵衛を退け。貢「コリヤ金兵衛とやら、金濟まさ

んすワイなア」貢「なる程一合も取つた身が浪人するも此刀」お岸「立身出世も此刀」伯母「まことに持つ人に」三人「よるものぢやなア」トかすめたる以前の神樂になり、向より金兵衛、合羽町人の形にて出で。金兵衛「オヽたしか向の家ぢや、オヽあれぢや／＼」ト門口へきて。「ハイ少とお頼み申しませう／＼」ト慌たゞしくいふ、是にて貢お岸へ囁き、上の障子屋體へいれる、伯母刀を袱紗に包み片脇へ隠す、金兵衛表を叩く。貢「ハテ仰山な、誰ぢや」ト云ひながら門口を明ける。金兵衛「ハイ私はちと爰なお家に尋ぬるものが有つて」トいひながら伯母を見つけ。「ヤア見つけたぞ／＼」トこれにて伯母迯げうとするを捉へ。「コリヤ逃さぬワ、俺を見て逃げうとは然うはさせぬ、大騙の衒妻め、でんどへ引摺つて汝」ト伯母を引立つるを貢さゝへて。貢「コリヤ何するのぢや、伯母者人を騙者ぢやのイヤでんどへ連行くのと麁相をいふな、コリヤ大方人違であらう、それならば了簡して遣る、事によると汝ゆるさぬぞ」金兵衛「コレ／＼コレ滅多に麁相いふ様な男ぢやない、山田では人も知つてゐる胴脈の金兵衛、騙といふは外でもない、下坂の刀を彼の女に賣つた所が、刀は彼方へ捲上げ代金を濟さぬワ、それで騙者というたが過か」貢「スリヤ何といふ、あの下坂の刀は」ト伯母へ思入。伯母「なる程、騙といふに無理はない、其方に忠義が立てさせたいばつかりに此刀を」ト貢こなし。金兵衛「コレ／＼今

死ぬる事、不思議と思ふ氣が注いて、刃物の合性見る人に刀の目利を賴みし所、祖父樣も父樣も同じ水性、刀は砂の流燒、土剋の水と相剋する故、以ての外の不吉の刀、これを其儘持つならば子孫まで祟るとの鑑定、力及ばず捨賣に代なし、其方は此家へ養子となし、まはりまはりて十七年、古主の爲に此刀を探ぬると聞きしも幸ひ、心をつくして買求め、持つて來たは伯母が寸志、靑井の血筋は代々祟る此刀、手に觸れるとはや、些細なれども今の難儀、親祖父の命を絕ち、子孫まで零落れしは皆これ故と、科ない刀に怨がかゝり、折つても捨てたい心なれど、今では古主へ忠義の刀、善ともなり惡ともなり、吉凶は持つ人にもよる刃物の因緣、此身の讖悔、樣子といふは此通りでござるワイのう」ト貢お岸思入あつて。貢「アヽ家に祟る刃物の由來、承つたは唯今が始て、とはいふものゝ祖父の魂籠められし此刀、今此所で祖父親人にも御對面を致す樣に存じられて」ト刀をつくぐと見て愁のこなしあつて。「伯母者人のお志、エヽ忝う存じます」お岸「今あなたのお話で始めて聞いた刀の譯、其樣な怖い物を、もし萬次郎樣の手に渡つて、彼方のお身に凶事が有るまいかと、私しやそれが案じられますワイな」伯母「ハテわつけもない、其萬次郎樣も御主よりのお差圖で、刀を詮議のお役、今もいふ通り持つ人に依て又立身出世の方も有る、誠に性に合へば其身の德になる事もまゝ有るとの噂でござ

十石もお取りなされたお方、同家中濱田十平といふ千石取の籏頭、祖父様とは無二の入魂、ある時他所より賣に來りし此刀、疑もなき下坂故、祖父様のお目に止り買求めたい志、かの十平も望を懸け、代物を問へば判金五十枚の折紙、當座の興とは云ひながら、十平が麁相の一言、小身者の青井刑部、其方が風體にて此刀を求むるかと、ふと云ひしが互の運の盡、苦笑して其場は濟みは濟んだれど、取沙汰は國一ぱい、いはれぬ刑部が齒も立たぬ刃物好、高知の十平と張合うて、人中で恥辱を受け、あれでも武士か侍かと、口々譏るを祖父様のお耳に入り、此刀買はいでは一分立たぬ武士の意地、武具馬具衣類夜の物まで代なして、極の價に買求め、青井の名前を其まゝ、青井下坂とこれを號け、明れば五月四日の朝、登城の道に待受けて、十平やらぬと聲をかけ、尋常に討課せ、邸へ歸つて祖父様娘子供に暇乞、命にかへし此下坂、必ず人手に渡すなと、腹へぐつと押立てゝ、右の脇腹一筋に唯一言の義によつて、お身の上を果されたワイのう、サア汝の父が俺の爲には兄様、其節よりお暇たまはり、志州の鳥羽に緣を求め、鄕士となつて暮す中、兄様の御病氣、貧苦には迫れども遺言なれば此刀、飢死ぬるとも放さじと、藥も飮まず祖父様の三回忌、五月四日の月日も變らず御臨終、悲しいとも辛いとも、情なやお袋様も又泣死、後に殘るは伯母と其方、まだ九歲の頑是なし、三年に三人まで、同じ月日に

になり彦太夫庄太夫思入あつて奥へ入る、跡合方、貢こなしあり。貢「伯母者人、久振でお目に懸り、様々の事に御苦勞かけました、何を隱しませう此女中は左膳樣から頼まれました若旦那、モウ身に引受けてお世話申す萬次郎樣の相方、古市の」お岸「油屋に勤しやんす岸といふ女郎でござんす、久しう其萬次郎樣にお目にもかゝらず、貢樣に遇うて委細を聞かうと、此家へ來る事は來たけれど、古市の女郎が貢樣と懇意に話するにも人目へ遠慮、それ故主の伯母ぢやというて居いと仰しやる故、お前のお名を騙り、疑受けて今の難儀、誠の伯母樣に逢うて私しや面目なうござんすワイなア」伯母「何のマア其言譯には及びませぬ、兼々聞いた萬次郎樣とやらのお相方、お岸樣とはお前かえ、今日私が爰へ來たも外の事ぢやござんせん、コレ貢ちやつと其方に見せる品があるコレ」トずつと立ち門口を閉る、合方になり、持つて來たる刀を貢の前に置き。「コレ貢、此刀見知があらう、改めて見や」ト貢袱紗を取り一寸見て。貢「縁頭目貫まで世の常ならぬ拵へ」ト拔かけ。「ム、燒刃は則ち砂流、無銘なれども疑もなきコリヤこれ青井下坂の刀、先頃山田に於て左膳樣より仰渡され、尋索むる此刀、伯母者人にはどうしてお手に入りました」ト鞘へ納める、伯母刀を取り思入あり。伯母「此刀につき悲しい話の一通り、お岸殿も聞いて下され、吾々は元阿波の家中、先祖は青井刑部とて貢が爲には大祖父樣、百五

はマア姉の顏を見忘れてか、不調法な子ではあるぞ」ト色々思入する、お岸呑込みたるこなし。お岸「アイほんに姉樣でござんしたもの、頓と見忘れ申しましたワイなア」彦太夫「妹ぢやといふのか」伯母「アイお聞きなされまし、鳥羽を出ました時は妹と二人連、往來の衆の仇口にも、どうでも彼は親子ぢやと申しました、謂うたも道理、此子と私は腹異の姉娣、年は十五の相違、貢が僞には伯母なれど、年は甥より五歳下、伯母甥の好とて親しう咄すを知らぬ目では、アリヤ大方古市の女郎であらう、其萬次郎樣とやらの相方か、但しは貢が深間の女郎か抔と思はしやんすも無理ぢやござんせん、全くコリヤ間違ひ、私が妹に違ござりませぬワイなア」庄太夫「ハテもつて廻つて姉娣の、いはれ因縁故事來歴を初て聞いた、ノウ伯父御」彦太夫「なる程潔白な言譯、マアそれならそれにもして遣らう、モシ萬次郎とやらの相方の女郎なれば、先刻に阿波から手紙、ノウ庄太夫、この儘捨てゝは措かれまい」庄太夫「ハテあれ程にいふものを聞入れぬも無得心、僞いへば、神の御罰、ハテ神は見通しでござります、ノウ伯母御」伯母「なる程左樣でござります、そんならお疑は晴れましたかえ」庄太夫「オヽ貴樣の言廻しで疑は晴れた、貢に用があるならば、爰でゆるりと咄さんせ、サア伯父御奧へ往かうぢやないか」彦太夫「如何樣さうしませう、無駄な事に氣を揉んだワイの」伯母「左樣ならばお二人樣」庄太夫「伯母御咄して行かんせ」ト歌

うせるげな、其様な放埒者を此家の娘に妻はせ、跡式を遣らうとは、アノ孫太夫様も大きなうつそり、取分け今日は太々のある大切な日に、女郎を引込む貢、サア此女はお岸とやらであらうがな」貢「アイヤ全く其お岸とやらでは御座らぬ、滅多な事をいふまいぞ」庄太夫「お岸でなくば汝が馴染んでゐる油屋のお紺か、それなれば猶以て座敷を穢す天罰しらず、神道の法に行ふ、サア女め此方へ來い」お岸「アヽ是私しや貢と譯のある者ぢやない、成程こな様のいはんす通り、私しやアノ古市の」貢「アヽこれさ、いうては却て萬次郎様のお身に。マア〳〵何事も控へて居さつしやれ」彦太夫「何ぢややら貢が怪しい言譯、殊に太々の取込、コリヤ大方こんな怪しい女を引込み、講中の懸金でもしよしめる目算であらう、庄太夫、奥へ連行き急度吟味しやれ」庄太夫「心得ました、サア二人共にうせろ」トこの時伯母中へ入り二人を圍ひ。伯母「マア〳〵お待ちなされて下さりまし」庄太夫「エヽ邪魔な、女の知つた事ぢやないぞ」伯母「アイヤ〳〵譯は存じませぬが、其處にゐる女子は何も怪しい者ぢやござりませぬ、アリヤ私の妹でござります」庄太夫「ヤ」お岸「アこれどうして私が」伯母「ハテ其方は儕が妹のお雪ぢやワイの、どうしてマア爰へはおじやつた、モシお二人様、麁相なされますな、此子は私が妹でござりますワイなア」庄太夫「ナニ貴様の妹だ」伯母「ハイ妹でござります、ハテ妹ぢやといふに、此子とした事が何を浮々とそなた

相の木像か、ハレ面妖な」伯母「なんと仰しやります、私より先へ貢が伯母ぢやというて參つた者がござりますかえ」彦太夫「あるとも〳〵、そんなら先刻の伯母奴は衒であらう、ドレ奥へ往て此詮議を」ト奥にて。庄太夫「イヤ其衒の伯母、私が詮議して進ぜう、女奴うせろ」ト障子の裡より庄太夫お岸を引く。「ヤイ賣女め、汝貢が伯母ぢやとアノ伯父御を騙し、貢奴に會ひにうせたは、大方萬次郎とやらが事を頼みにうせたので有らう、彼奴が事は阿波の大學樣からお頼みで、けちを附けねばならぬ調市め、マアそれは扨おき、あのマア年寄つた伯父御を何で伯母ぢやと僞ぬかした、サアそれ吐して終へ」お岸「エヽこれ滅多な事さんすな、わしや貢が伯母に違はないワイなア」庄太夫「まだぬけ〳〵と、吐さにや汝を」ト立かゝる、後より貢つか〳〵と出で。貢「コリヤ庄太夫殿、伯母御を捉へて何とさつしやる」彦太夫「コリヤ貢、お主も同じ樣に俺等が目を拔くのか、誠貴樣の伯母といふは志州の鳥羽、其伯母が來てゐるワイやい」貢「ナニ鳥羽の伯母御が」お岸「アノ來て居やしやんすかえ」伯母「そこに居るは貢ぢやないか」貢「ヤ伯母者人、マア思ひがけない能うござりました」ト當惑。庄太夫「どうぢや貢、汝が伯母に違あるまい、それに此女を伯母ぢやの何のと、伯父御や俺を明盲にするのか、これ此女は萬次郎とやらが馴染んでゐる古市のお岸といふ女郎、汝も同じ樣に古市へ通うて、お紺とやらいふ賣女奴とどれやつて

い者の掴食とは今この時ぢや、味い〳〵」ト悦ぶこなし、門口より。伯母「ちとお頼み申しまする」庄太夫「どうれ」ト仰山にいふ。伯母「ハイ孫太夫様は御在宿でござりますかな」庄太夫「イヤ孫太夫は江戸へ往かれて留守でござりまする、何の用で何處から御座りました」伯母「ハイ私は志州の鳥羽に居ります貢が伯母でござります、この通りお取次なされて下さりまし」庄太夫「エヽあた面倒な、可い、取次いで遣りませう、待つて御座れ」トいひながら二色を持ちうろ〳〵して、手紙は懐へ入れ、それより一萬度のお祓を見て、思入して包金の封印を切り、みだけ小判の儘お祓の中へ隱し、捨白にて元の所へ直して置く、伯母門口にて此樣子を見てゐる、庄太夫このお祓に色々心遣の思入してゐる」伯母「お早うお頼み申します」庄太夫「ドリャ取次いで遣りませうか」ト奥へ行く。伯母「心得ぬ今のそぶり、正しうあれなるハテなア」ト思入、奥より彦太夫出で。彦太夫「ハア、貢が伯母御が來たとは合點が行かぬ、先刻にも來たが、又伯母が來たさうな、ハテ今日は能う伯母のとれる日ぢや」トいひながら門口へ來て。「マアマア是へ入らしやりませ」伯母「左樣なら御免なされまし、承れば孫太夫樣はお留守との事、シテ貴方樣は」彦太夫「拙者は孫太夫が弟彦太夫と申す者、合點が參らぬは先程も貢が伯母というて女中が見えられ、アレ彼の一間で今噺最中、又候伯母が見えたとは、葛の葉吹きかへる菅丞

と妻はせて、汝が望を叶へて遣らうと思ふ所へ、志州の鳥羽から養子にうせたアノ貢め、彼奴が有つては何かの邪魔、彼奴に落度を拵へて此家をぼいまくつて仕舞へば、その跡式は心の儘」庄太夫「それに就いて此程德島の岩次といふ阿波の侍が、この伊勢路で質物に入れてある青井下坂、詮議して手に入れてくれいとの賴、その褒美には直に侍に取立てうと賴んで遣した此手紙」ト懐より一通を出して見せる。彦太夫「それなら其の下坂の刀を手に入れて渡しさへすりや」庄太夫「御師の跡式取らうより、一足飛に知行取」彦太夫「どうぞ其刀を手に入れたいものぢやなア」ト此時庄太夫、貢が落し置きし紙入を見つけ取上げ」庄太夫「コリャこれ貢奴が紙入、もし百兩の詮議があれば、その盜人を彼奴にぬり附くる、この紙入がよい品玉」彦太夫「なる程コリャ出來た」トこの時奥にて神樂始まる。「アリャかへし申しの神樂の音」庄太夫「あのどさくさに何かの手番」彦太夫「ぬかるまいぞ」庄太夫「合點ぢや」と思入あつて彦太夫奥へ入る、庄太夫殘りこなしの中、この鳴物をかへて向より伯母お峰、著流し抱帶綿帽子にて、袱紗に包みし刀を持ち出來り、直に本舞臺へ來て門口に窺ひ、此中庄太夫紙入を懐に入れ、件の狀と百兩の金を兩手に持ち。「此狀の文言の通り、刀さへ手に入れば出世の小口、こちらの手には百兩、手紙の通りにさへ行けば大きな出世、これが正眞の兩の手に味

ナニあるものか」お岸「今日この伯母が來やんしたはアノ萬次郎樣。サア孫でもなし、ホンニ甥、其甥のあの人に會うて聞きたい事もござんす、そして爰の親御樣へ禮も言はうと、それで態々寄つたので御座んす。でござるワイの」彦太夫「ようぞや〳〵、シタガ折惡い兄孫太夫の他行、會はつしやれいで殘念でござらう、ハテ伯母御にしては花やかな形でござるワイの」貢「いやモウあの樣に見ゆれど、年は六十七でござります」彦太夫「ハテ年よりは若い事でござる、幸ひ今日は太々でござる、コレ貢、伯母御を奥へ伴ひ御酒でも上げやいの」貢「イエ〳〵伯母御はモウ下戸でござります」お岸「アイ酒より何より、わたしや萬次郎樣に會ひたう御座んす」彦太夫「ナニ萬次郎」貢「アイヤ伯母御は下戸ぢやに依て、酒よりは饅頭がよいと言はつしやるので御座ります」彦太夫「ハテ下戸といふものは、然らば煮花でもしかけさつしやれ」貢「畏りました、サア伯母御」お岸「貢樣」貢「これはしたり。マアござれ」ト合方になり、貢お岸を伴ひ上の障子家體へ入る。彦太夫「扨あの伯母奴は六十七には若い事ぢや、七十になる此伯父も、あれを見て謀叛が萠して來たワエ」ト正面の襖を明け、庄太夫百兩の包を持ち窺ひ出で彦太夫を見て。庄太夫「伯父御爰にござりましたか、今奥で講頭の油斷を窺ひ、してやつた太々の百兩」彦太夫「コリヤ靜にしやれ、俺が兄なれど爰の孫太夫が有德、其跡式を俺が甥の其方に繼がせ、娘の榊

自由なお身の上、お前の所へ中々通はつしやる事も出來ぬは有理、したが其刀が出れば其時は、私が世話して女夫にします、必ずきなく思はぬがよい、勤をする者の樣にもない、アア野暮な子ではあるワイのハヽヽ」お岸「そんなら必ず世話して下さんせえ、ならう事なら今日その二見村へ伴れて往て逢はせて下さんせ」貢「ハテ忙しない、今日は太々で大きに取込んでゐるワイの」ト此内奥より。彥太夫「貢どこへ行て居やるぞ、貢々」ト呼びながら出來り。「オオ爰に居やつたか、扨今日はめでたう太々も納り、こんな悅しい事はない、悅に一つ奥で飮みやらぬか」貢「ヘエそれは有難うござります、私はちと是に用事がござります」彥太夫「ナニ用がある」トお岸を見て。「こな樣は何方から御座つたお女中ぢや」お岸「アイ私しやアノ古市の」貢「ア、これ伯母御、なアそれ今いうた通り、私が伯母ぢや程に、ソレ伯母御をわすれまいぞ」ト思入にて知らせる。お岸「アイ成程、わたしや伯母ぢやさうに御座ります」彥太夫「ハヽア伯母御でござるか」貢「なる程兼々お前へもお噂申した鳥羽の伯母でござります」彥太夫「其又伯母御が何用あつて御座つたのぢや」お岸「サア私が。サア此伯母が參りましたは」彥太夫「何用でござる」お岸「サアその用は」ト支へる。貢「イヤ伯母御が見えましたは、アノそれオヽ鬼の腕が見たいと言つて」彥太夫「ハテ羅生門ではあるまいし、卵のうでたは有らうが、鬼のうでたが

となさいまし」お岸「アイ太儀でござんした」幸八「ドリヤ往て參りませうか」ト合方になり、幸八は引返して向へ入る。貢「サア〳〵マア此方へ入らんせ〳〵」お岸「誰も呵人はないかえ」貢「誰も呵る者はないが、折惡う今日は太々があるに依つて大勢の人ごみ、萬一又お前を俺が合方のお紺とはき違へて、惡う氣取らねば可いが。オヽよい事がある、俺が伯母御は鳥羽に居らるゝ、それを幸ひ、お前を誰ぞ問うたら俺が伯母ぢやといふ程に、其通り口を合せておくがよいぞや」お岸「それなら私しやお前の伯母樣になつて話するのかえ」貢「左樣〳〵、サア〳〵お煙草、よう御座りました、サア〳〵此方へ通らつしやりませ」ト上へ通し煙草盆出す。お岸「エヽ其樣に慇懃にいうておくれないなア」貢「ハテ伯母貴ぢやものハヽヽヽ、シテ今日は何の話でござつた」お岸「さいなア、私が今日爰へ來やんしたは、アノ萬次郎樣の事、久しう便音信もなし、主の事はお前が身に引請けて世話なさんすに依て、お紺樣と相談してお前を賴みに來やんした、何卒萬次郎樣に會せて下さんせ、主に逢はねば私しや死んでなりと仕舞ふワイなア」貢「これはしたり滅相な、お前も荒增譯を知つてゞはないか、萬次郎樣が尋ねさつしやる刀も漸う手に入つたる所、若氣の至り惡者に欺されて、質に置いた靑井下坂、預つた奴が今に行方が知れぬ故の御逼塞、仔細あつて主の事は左膳樣から預り、二見の浦にお匿ひ申して置くものゝ、今では不

まい、殊に今日はアノ御師殿の所に、太々があると聞いたに依て、そこでお前の形を然う拵へて、私も黒鴨の形をしてお供をして來ました、何でも若旦那の事を主に會つて篤りとお頼みなさいまし」お岸「そして貢樣のござんす所は爰邊かえ」幸八「アイ慥に向の家でござりました」お岸「そんなら幸八樣」幸八「ハテ家來に樣は御無用さ」お岸「眞にさうぢやワイな」幸八「サアお出なさいまし」ト矢張右の鳴物にて兩人舞臺へ來て、幸八内を窺ひ。「もしチトお頼み申します〳〵」貢「オイ〳〵誰ぢや〳〵」ト奥より著流し一本差にて出。「御案内とは誰人でござります」幸八「さうおつしやるは貢樣かえ」貢「汝はいれかたの幸八ではないか、何と思うて」幸八「ハイ用があつて參りました、その用と申すはお前さんのお世話なされます萬次郎樣の深まのアノ」貢「エ、お岸殿を連れて來たといふのか」幸八「ハイ左樣でござります」貢「シテ何處に來て居らるゝ」お岸「貢樣、此間は久しうお目に懸りませぬ」貢「オヽよう御座りました、見れば一廉のお内儀風、イヤ又萬次郎樣の御新造というても恥しからぬ姿ぢやワイの」お岸「エヽ又弄らんすかいの」幸八「時に貴方のお目に懸つて私も落著きました、定めて若旦那の事でお頼もござりませう、私は出直して又お迎に參りませうかい」お岸「ほんにさうして下さんせ」貢「なる程此子も俺に會うて話もあらう、俺が預る程に後方迎に來てたも」幸八「ハイ左樣致しませう、お岸樣ゆるり

伯父御樣がお呼なさるゝ、庄太夫樣〳〵」ト呼ながら出て來る、庄太夫捨白にて榊を追まはし、取違へて禰宜をおつ伏せる、此内榊は遁れ奥へ逃込む、兩人跡にて色々揉合ひ、禰宜ややうやう跳返し起きるを、庄太夫又抱附き禰宜を見て吻り。庄太夫「ヤア榊樣だと思つたら汝であつたか、エヽ忌々しい」禰宜「これ庄太夫樣、人に得心もさせずおつ轉ばしてとんをいく氣か、私も昔は情しりぢやワイな」庄太夫「エヽ忌々しい、汝ば何時迄も居ろ」ト踏付け奥へ入る。禰宜「エ何も知りもせぬものを、能う惨い目に逢はせたな、念者になる氣かコレ庄太夫樣、色よい返事をせう、庄太夫樣オヽイ〳〵」ト腰を擦りながら奥へ入る、ト三味線入の神樂になり、向よりお岸、著流し抱帶日傘をさし、幸八紺看板を被て一本差にて從き出で。幸八「申し〳〵お岸樣、さうお仕立なされた所は、いやモウ町の御新造はそこのけ、古市の女郎衆とは見えませぬ」お岸「サア其樣に見えればよいが此間中からこな樣も知つての通り、萬次郎さんは何かお身の過が有つて二見村にお忍びなさんすとの事、主を世話なさんす貢樣に逢うて、萬次郎樣の安否が聞きたさ、家の首尾は仲居衆に賴み、斯うした姿で忍んで來る事は來たけれど、どうぞ貢樣に會うて萬次郎樣のお身の上が聞たうござんすワイなア」幸八「イエモウそれは氣遣は御座りませぬ、日頃からお前と中のよいお紺樣と深う言交して御座る貢樣、何しに袖にもなされます

く。彦太夫「是はしたり、皆鎭まらぬか、鎭まらつせえ〲」ト續いて奥へ入る、正面の唐紙を明けて榊迯げて出る、庄太夫おはへ出で、舞臺を追廻はし榊に取付く。榊「エ、あたしつこい、惡戯しやると父樣に告げて、聞く事ぢやないぞや」庄太夫「サア其告げるといはんす親御孫太夫殿は、江戸へござつた留守の中、留守事に此正直庄太夫が惡い事はしませぬ」榊「エ、モウつつと忌ぢやといふに」庄太夫「ハテ惡い合點ぢや、何程俺を嫌うても、あの貢殿はお前を忌がつて居るぞえ」榊「そりやマア眞の事かいなア」庄太夫「それ〲貢が事といふと、忽ち顏色が變るも無理ぢやない、こゝの親御がアノ貢を此家の養子にして、お前と妻はす積、あの貢殿は元阿波の侍、零落れてから鳥羽の親戚へ引取られ、今では此家の養子、なんぼお前が女夫になりたう思うても、古市のおこんといふ女郎に深う馴染んでゐるワイの」榊「エ、そりやマア眞かいの〲」庄太夫「眞の嘘のと何僞をいふ者か、それに彼の貢、心安うする萬次郎とやらいふ侍の落零、是も古市のお岸といふ女郎と、死ね殺せといふ間、貢と萬次郎二人連立つて、古市へ毎晩〲通ふ事、お前知らんせんかいの」榊「ほんまに然ういふ事ならわしやどうせうぞいなア」庄太夫「どうもかうも要らぬ、あの貢めが面當に俺が女房になりなさい、マア一寸手附に爰でちよこ〲と」ト取付くを榊ふり放し。榊「ア、又かいの忌ぢや〲」ト迯歩く、奥より。禰宜「庄太夫樣〲、

る。貢「これ榊殿、此方も晝中に庄太夫殿を捉へて、チト愼んだがよいワイの」ト舞臺へ來うとする袖を控へて。榊「コレ貢樣、あの庄太夫とじやらつくとは、ソリヤお前聞えぬワイなア」貢「それを今いふ事か、マア／＼放さつしやれ」榊「イヽエ云はにやならぬワイなア、鳥羽から養子にござんしたお前、末々は私と女夫にすると父樣のいひつけ」貢「ハテそりや言はいでも知れてある事ぢやワイの」榊「そんなら女夫ぢやぞえ」貢「オヽ女夫ぢや／＼」榊「オヽ嬉し」ト取付かうとする。皆々「オヽ／＼／＼」ト祝詞あげる。庄太夫「貢殿／＼、何處へござつた、貢殿／＼」貢「オヽ／＼」ト舞臺の方へ來る。庄太夫「貢殿／＼」貢「オヽ／＼／＼」ト返辭を祝詞の樣に合せ舞臺へ戻り元の座に坐る、榊も舞臺へ來る、ト庄太夫止め。庄太夫「これはしたり榊樣、まだいひ殘した事がある、烏渡こつちへ」貢「庄太夫殿／＼」庄太夫「オヽ／＼／＼」ト返辭と祝詞と又こつちやになり、矢張庄太夫榊にしなだれる、ト彦太夫隔て。彦太夫「撒錢／＼」講頭「ハッ」ト葛桶より錢を出し撒く、禰宜皆々競合うて是を拾ふ、講頭唐紙の内へも錢を撒く事、此内はやめたる誂への神樂、禰宜皆々錢を拾うて袂へ入れ、我勝に騷ぐ、庄太夫皆々の拾ひし錢を引奪り逃げやうとする、皆々追はへ歩く、此間に貢は榊を伴れ奥へ入る、庄太夫皆々と摑合ひ、彦太夫これを止める、捨白こつちやになり殘らず奥へ入る、彦太夫殘り、金包の三方を持ち、しかつべらし

彦太夫「これは御執行めでたう存じます」講頭「どなたも御苦勞に存じます」彦太夫「主孫太夫は御長官の用事につき江戸發足の留守中、手前事は孫太夫が弟、猿田彦太夫と申す留守を預る名代でござれば、亭主同然に御用仰付けられませい」講頭「これは〳〵、久々太々も怠りまして、其上當年は講中が殖えました故、銀六貫目の太々、則ち百兩持參仕りました、宜しう頼みます」ト三方の包金を出す、彦太夫取つて。彦太夫「御奇特に存じます、太々を始めるでござらう」ト立つて三方を前に置き、彦太夫元の座へ著く、庄太夫立つて神前へ辭儀して洗米をそこらへ撒く。禰宜皆々「オヽ〳〵」ト祝詞になる、トこれより太々神樂になり、皆々後向になり、オヽ〳〵といふ、唐紙の彼方には鈴の音、神巫神樂を舞ふ事奥深に聞かせる、此内庄太夫はそろ〳〵立つて榊を引張り花道へ連行く。榊「アヽこれ又悪い事しやるかいの」庄太夫「何の悪い事があらう、何日ぞは〳〵と思うてもアノ貢殿が邪魔になつてどうもならぬ、皆は太々で夢中になつて居る中」榊「エヽあた執著い、忌ぢや〳〵」庄太夫「どつこい〳〵、返事聞かせ給へ橋、抱いて寐たらば葭屋橋」彦太夫「オヽ〳〵〳〵」皆々「オヽ〳〵〳〵」ト此内無理に榊をこかす。貢「榊殿、庄太夫殿、榊殿、庄太夫殿」ト呼び〳〵花道へ來て引分ける。庄太夫「オヽ〳〵〳〵」皆々「オヽ〳〵〳〵」庄太夫「オオ〳〵〳〵」ト返事と祝詞とごつちやになり、庄太夫戻つて來り、オヽ〳〵と彦太夫傍へ坐

を開き急度見て。「宛名は徳島岩次殿へ大學より」ト兩人振解き、それをと寛るを見事に投退け。「讀めた」ト思入、この仕組よろしく。拍子幕

二幕目　孫太夫内の場

一講頭利根右衛門　一猿田彦太夫
一胴脈金兵衛　一娘榊
一油屋女郎お岸　一聟貢
一正直庄太夫　一伯母お峯
一いれかた一人　一禰宜大勢

本舞臺三間の間、南の方へ筋違に見せ、正面とも紗綾形の唐紙、振よき竹二本、注連を張り、唐紙の内太々神樂の模樣、禰宜大勢烏帽子白張にて後向に列び、彦太夫かすも毛親仁の御師にて、裝束は指貫折烏帽子、中啓を持つ、庄太夫同く裝束の形にて、貢も同じ裝束、舞臺よき所に居列び、講頭麻社袴にて、三方に百兩の包金を載せ、能き所に控へる、榊、千早緋の袴、振袖の巫女にて能き所に控へ、一體太々の見得、誂への鳴物にて幕開く。ト彦太夫拍子を打ち、南方に向ひ拜み、それより講頭が傍へ來て。

小癪な」ト又斬つてかゝる、立廻り、萬次郎この內提灯持つてうろついてゐる、此時林平丈五郎、狀を奪合ひ摑合ひ出る、萬次郎見て。萬次「ヤア林平か、今の狀の片破は」林平「其片破は此奴が持つて」丈五「何を」ト立廻の內、貢大藏を見事に投退け、丈五郎が持居る狀を奪取り、丈五郎を見事に投退け。貢「スリヤ此狀が宛名の所」林平「如何にも」貢「萬次郎樣、提灯を」萬次「合點ぢや」ト提燈を差出す、丈五郎提燈を切つて隕す、大藏貢へ蒐る、いづれも闇がりの模樣。

貢「萬次郎樣、危うござりまするぞ」ト丈五郎は狀を奪らうとする、大藏萬次郎を斬らんと窺ひゐる、貢萬次郎に怪我させまいといふ思入、林平二人を引捉へんと互に探合ひ、危き立廻あつてトド貢、大藏丈五郎を捕へる、林平萬次郎と探合ひ。林平「若旦那か」萬次「林平」貢「僕殿、爰は危い、お供して早うござれ」林平「合點ぢや」ト浪の音にて林平萬次郎に引添ひ向へ走入る、大藏丈五郎、それをと行かうとする、貢兩人を一寸當てゝ。貢「萬次郎樣はモウござりましたか、やれ嬉しやそれで落ついた。これ何卒宛名が讀みたいものぢやが」ト狀をいろ〳〵透し見る、此時曉六時の鐘、方々にて鷄の聲する、空に烏おびたゞしく飛ぶ、此時兩人心づき起上り。丈五、大藏「うぬを」ト組付く、立廻り此時正面の岩の前面へ紅絹張一ぱいの朝日半分出かゝる、是にて一度に明くなる。貢「アレヤ日の出」ト丈五郎を踏附け大藏を捻上げ、片手にて狀

更思當つた、下坂の刀質入させしも正しく伯父御よりの言附、どうぞ首尾よう下坂の刀を」

貢「ハテ私が詮議して出します、お氣遣なされますな、サア〳〵お急ぎなされませ」ト往かうとする、向より丈五郎ちぎれし狀を半分持ち逸散に驅出で、貢に行當り萬次郎が顔を見て。

丈五「ヤア萬次郎か」萬次「丈五郎ぢやないか」丈五「コリヤ耐らぬワ」ト逸散に下座の方へ入る。

貢「何ぢや頓と狂氣の沙汰ぢや」ト跡見送りゐる。萬次「これ〳〵今の奴が下坂を質入させた丈五郎ぢやワイの」貢「アノ今のが、はてなア」トいふ内向より林平逸散に出で、又行當り顔を見て。林平「萬次郎樣か」萬次「林平」林平「今こゝへ丈五郎めは參りませぬか」萬次「たつた今この道筋へ」林平「刀の手がかり此一通」ト萬次郎に渡し追かけんとする。萬次「これ〳〵そして樣子は」

林平「それ言つて居る間はござらぬ、汝丈五郎め」ト逸散に下座の方へ走入る。貢「何の事ぢや、これも半狂氣の沙汰ぢや」萬次「マア〳〵其狀讀んで見やいの」貢「畏りました」ト萬次郎提灯を取り燈火を見せる。「飛札を以て申入れ候ふ、彌其御地にて下坂の刀手に入り候らはゞ、早速歸國あるべく候ふ、跡は破れて宛名はなけれど詮議の手がかり、コリヤよい物が手に入りましたワエ」ト懐へ入れる、大藏走出で遮巡ひて。大藏「萬次郎此處に在せたか、うぬ」ト斬つて蒐る、貢見事に引付け。貢「萬次郎樣に斬附けし狼藉者、うぬ詮議のある奴ぢやワエ」大藏「何を

になり、貢サアお出なされませト小提灯を提げ、萬次郎尾いて花道より中の間の歩道を通り南の口へ入る、左膳残りゐる、ばたくにて林平狀の裂れし半分を持ち、逸散に出て左膳を見て。林平「左膳樣か」左膳「慌たゞしい、林平何事ぢや」林平「唯今伯父御より內意の密書、丈五郞奴が所持致し居つたを見屆け、引奪らんと致す機、引裂つてはござれども、密書の斷片イザ御覽下されませう」ト渡す、左膳見て。左膳「宛名は無けれど若や刀の手懸にもならん、萬次郎へ追つつき手渡し致せ」ト林平へ渡す。林平「シテ萬次郎樣は」左膳「貢が供して二見村へ」林平「心得ました」ト行かうとする、後より大藏拔打に。大藏「左膳め覺悟」ト斬つて蒐る、左膳立廻つて大藏を引付け。左膳「早う行け」林平「ハッ」ト逸散に向へ入る、左膳大藏と立廻の見得にて。

返し

向ふ奥深に二見の浦の景色、注連を張りし二見の岩、東西の窻を下し闇の仕組、七ツ半の鐘聞ゆる、かすめたる浪の音、向より貢提燈を提げ、萬次郎つき出る。

貢「モウあれが七時半、夜の明けぬ中に參りたいもので御座ります、モウ道々も申す通り、御朋輩の大藏丈五郎など心の知れぬ奸者、必ず此上御油斷なされぬが可うござります」萬次「サア今

伯父御様へよしなに申してくりやれ」飛脚「畏つてござります」ト引返し向へ入る。丈五「イヤナニ大藏殿、最前騙取りし折紙の樣子、彼の左膳めが叶すには、萬次郎が親九郎左衞門を蟄居させん爲、悴萬次郎を馬鹿者に仕立て、下坂の刀捲上ぐる手段も、みんな彼奴が堪をつけ、朋輩の我々を伯父御よりの犬なりと氣取つたれば、所詮生けてはおかれますまい、貴殿は殘つて彼の左膳奴を、コレ」ト叫く。大藏「呑込んだ、どつさりばつさり」丈五「コレ、ござれ」大藏「合點だ」ト奥へ窺ひ入る。丈五「これからは此伯父御の御狀、德島岩次へそれ」ト往かうとする、林平立聞きゐて此狀ひつたくり往かうとする、丈五郎武者振つき。「ヤアうぬア林平め、そんなら樣子を」林平「何も彼も聞いた、詮義のある狀貰ひましたぞ」丈五「それ聞かれちやア百年目だ、くたばつて仕舞へ」ト拔いて斬附ける、立廻あつて丈五郎林平を當て、狀を持ち向へ走入る、林平跡よりぼつかけ入る、合方時の鐘にて奥より萬次郎左膳貢、小提灯を持ち出で。貢「左樣ならば左膳樣、何か宜しうお頼み申上げます」左膳「何事も身共が承知致して居る、いや何貢、萬次郎事必ず頼んだぞよ」貢「お氣遣なされますな、二見村には私が知音もござりますれば、當分あの方へお預け申し、必然私が御歸參致させます、お氣遣遊ばされますな、サア萬次郎樣、夜の明けぬ中、早うお出なされませ」萬次「左膳樣、隨分御無事で」左膳「堅固で居やれ」ト時の鐘

詮議」貢「ハヽヽ其衒者が、詮議に來るで有らうとて待つては居らぬ、マア控へてござれ」林平「エエ」トこれにて控へる。左膳「金銀に目をかけず、刀の折紙を望むからは、下坂の刀を望む者の僞業に違ひない、其書狀は先達て大學が家來、徳島岩次といふ奴、當地へ入込みしと九郎左衞門が知せ、察する所手を廻して下坂の刀を奪取り、萬次郎に罪を拵へ、親九郎左衞門に蟄居させん謀計と見えた」貢「シテ其徳島岩治といふ奴御存じで御座りますか」左膳「年の頃は二十八九、中肉に色黒く、口早に物いうて、確か眉の上に黒子が有つたと思うたワイノ」貢「可し、それさへ聞いておけばモウ可う御座ります」左膳「今聞く通り大學よりも當所へ犬を入れおけば油斷はならぬ、まだ外に談ずる仔細もあれば」貢「爰は端近奥へ參つて」左膳「申談ぜう、兩人奥へ來やれ」ト唄になり左膳萬次郎貢奥へ入る、林平殘る、時の鐘、直に向より大藏先に若い衆一人、紺看板の飛脚にて狀箱を持ち出で門口に窺ひ。大藏「栗原丈五郎殿お居やるか、鳥渡御意得たい」ト呼立てる、これにて林平かげをする、奥より丈五郎出で。丈五「慌たゞしい安達大藏殿、何事でござるな」大藏「兼て貴殿我々當所へ立越え、萬次郎めを馬鹿者に仕立て失策らせる手段、唯今お國より飛脚到來、宛名を見れば伯父御樣より徳島岩次へ内意の御狀、飛脚その狀これ」飛脚「ハッ慥にお渡し申しましたぞ」ト旅狀箱を丈五郎へ渡す。丈五「兩人慥に受取つた、此由

事も大學へ聞えては一大事、必ず他言致すな」貢「何しに他言致しませうぞ」左膳「萬次郎參れ」
萬次「ハッ」ト奥より萬次郎出る。左膳「萬次郎、あれに居るは福岡貢とて身が家來、其方にも由縁の者、刀の事も貢を頼み取返し歸國致せ」貢「さては貴君が萬次郎樣で御座りまするか、私が、マア話は追つての事、シテ其刀は何者へお預けなされましたナ」萬次「サア私は知らぬが、家來の計にて山田の町人に預けたが、其者が出奔して行方が知れぬ故、折紙ばかり此方にあるワイノ」貢「シテ其折紙は持つて御座りますか」萬次「林平、最前の折紙を出してたも」林平「ネイ」
ト折紙二枚貢へ渡す、貢披き見て。貢「コリヤこれ二枚の折紙」左膳「ナニ二枚あらう筈がない、ドレ見しやれ」ト改めて。「ヤアこりや二枚ながら贋物ぢやワ」林平「ナニ其折紙が二枚ながら贋物でござりまするか」貢「一體どういふ事で折紙が二枚あるので御座ります」林平「さればの儀でござります、下坂の刀詮議せうと思ふ矢先、黑上主鈴といふ御師、下坂の刀を浪人共に賣らうと申すを聞附け、其刀を賣つて呉れいと望みし所」貢「その黑上主鈴といふ御師は、伊勢中にはないが、大方それは衒者であらう」萬次「サア其衒者奴が持つて居た故、ツイ此方の折紙を出して見せたれば」貢「扨は其時の浪人者も同類で、摺替へられたに違ひはあるまい」林平「さうぢや」
ト花道へ行かうとする。貢「コリヤお待ちなされ、何處へ御座る」林平「ハテ知れた事、かたりの

汝が身の上、始て聞いて驚入つた、然らば古主といひ今某が縁のある九郎左衛門が家の爲、身が頼む一大事、何によらず勤めるか」貢「これはお詞とも覺えませぬ、御主人の御意と申し、殊に古主の爲とあるからは、一命に拘はりまする事なりとも」左膳「確とさうか」ト貢小柄を拔き我刀にて金打する。「出來した、其魂を見るからは申付くる其仔細、これを見よ」ト貢が持つて來たる狀を出して見せる、貢披き見て愕り、左膳四邊に心を注ける。貢「スリヤ阿波の伯父御大學殿の野心によつて」左膳「サア其如く國を押領せんとの謀圖、禍を除かんと參宮の體にもてなし、九郎左衛門には鎌倉に下り、伯父大學を押籠め隱居の願ひ、汝が親孫太夫を鎌倉表へ遣はせしも一家の某、御前體を首尾よく致させんと、内縁ある評定衆へ密事の使、サ頼といふは爰の事、右萬次郎は忠臣の家を續ぐべき身なれども放埒にて、一旦手に入れし下坂の刀を質物に入れし不所存、其刀の持主相知れず、某匿ひおいては家中の思はく他門の聞え、何卒其方某になり代り、萬次郎を匿ひ右の刀を詮議し出し、歸國させくれなば某が志も相立ち、妹に列る萬次郎は古主の片破、身共へ忠義頼むといふは此事ぢやワイやい」貢「私をお見立なされ、大事を明して御主人のお頼み、身は醢になりましても、下坂の刀を探出し、萬次郎樣を歸國致させませう、お氣遣なされますな」左膳「まづは安堵、然し鎌倉の首尾相知れる迄は、何

けたお客人は對面してお來やつたか」貫「さればの儀で御座ります、仰の通り松坂まで參り居つたる所、未お出もなく、それ故津の本陣まで參りしが、はやお立の所、則あなた樣の御書面を渡し、お返事を受取りまして立歸りました、則ちお客人は直樣本海道へお越しなされまして御座ります」左膳「ムヽスリヤ本海道へお越とな、シテ返書持參おしやつたか」貫「ヘイ〳〵則これが御返書」ト懐より手紙を出して左膳へ渡し。左膳「まだ外に口上とは」貫「ハツ此度伊勢參宮といひ立て、鎌倉へ參り直訴致す思案一決、其上この願叶はずば再び國へ歸らぬ心底、萬次郎事、殿の御意を承け青井下坂の刀を其地へ索に參り今に歸らず、若し身持惰弱もあらば某に成代り、萬次郎を勘當なされ、下坂の刀は貴殿御詮議なされ下されよとの御口上でござります」左膳「ハヽア適れ遉は阿波の家老、今田九郎左衛門ほどある、義心といひ忠心といひ、ハテ阿州殿には良い家來を持たれたな」貫「藤浪樣、今度の願ひ叶はずば再び國へ歸らぬとは氣遣はしい、何故の儀でござります」左膳「貢、其方や何故それを尋ぬるぞ」貫「何を隱しませう、私が親は元今田九郎左衛門樣の御家來の由、過逝かれし母の噺、仔細あつて幼少の時分、志州の鳥羽へ引越して人となり今福岡孫太夫殿の養子の私、則お家へ御奉公、その貴方のお妹御は古主九郎左衛門樣の嫁君、彼是重なるお主筋、案じますのも此故で御座ります」左膳「ハテ思ひがけない

返し　時の鐘にて此道具ぶん廻す

三間の間平舞臺にして、下の方に格子戸をはめ、門口すゝ物、上の方障子屋體、所々伊勢月詣の札かけてある、道具とまる。トてんつゝにて向より若い衆二人、いきせきと駕籠舁にて出て來り門口へ來て。

駕籠「ヤレぶつ附いたぞ、モシ旦那叶屋はモウ爰でござります」棒組「ヤレ〳〵お急ぎ故大汗に成つたワイ、旦那參りまして御座りますぞえ」ト草履を直す、垂を上げ貢大小三尺手拭にて駕籠より出で。駕籠「旦那早う參つたではござりませぬか」貢「オヽ太儀〳〵、存の外早う參つた」ト懐より四文錢三百目出し。「コリヤ極は二百なれど殘りは酒代ぢや、サア持つて行きやれ」棒組「ヘイ〳〵是は有難う御座ります、又お通りの節お頼み申します」ト捨白にて駕籠を擔ぎ向へ入る、貢門口を入る。貢「ちと頼みたいぞや〳〵」ト奥へ向つて呼ぶ、奥にて。左膳「アレ店に案内があるぞや、女子共はお居やらぬか、ハテ泊が多いから皆座敷へ出てゐるさうな」ト莨盆をさげ著流し大小にて出で、貢を見で。「ヤ其方は貢でないか」貢「左樣仰せらるゝは左膳樣で御座りまするか」左膳「オヽ其方の歸りを相待つて居つたワエ、サア〳〵是へ〳〵、シテ申付

鈴が首筋捉へ引つける。牛藏「アヽお赦しなされて下さりませ」ト主鈴を連行かうとする、下座より丈五郎出て來る、ト顏見合せ。丈五、大藏「首尾は」岩次「コレ」トあたりを見廻はし。「まんまと折紙はすりかへた、コレ」ト出して見せる。丈五、大藏「うまい〳〵」岩次「なまの牛藏太儀であつた」牛藏「モウ可う御座りまするか」ト衣裳を脱ぐと襤褸になる、小袖も大小も一緒に引括り擔げる。岩次「ソレ骨折代」ト金を投げてやる。牛藏「アヽ有難い、こんな用なら何時なりと」岩次「早く行け」ト牛藏金を戴き下座へ入る。「先づ一方は方附いた、シテ刀の持主未だ行方が知れぬかな」丈五「胴脈の金兵衞といふ奴に預けておいたが、一向行方が知れませぬ」岩次「何でも遠くへ行かう筈がない、金さへ遣れば取戻さるゝ彼の刀、シテ阿波からの便はなかつたか」大藏「追々飛脚到來との儀」岩次「下坂の刀此方の手に入れば、國家は皆伯父御のもの、其節身共は立身出世」丈五「この丈五郎も其尾に取附き此身の出世」大藏「祝事に一つしめうか」ト岩次郎邊を見廻し。岩次「コレ内密で打ちませう」ト指の先にて三人手を拍つこなし。

たアノ妛な僞者めが」牛藏「スリヤ當所の支配人を知つて御座るか」林平「知れた事だワ」牛藏「南無三しまつた」ト迯げやうとするを捉へ。岩次「待て汝、憎い奴の、既に五十枚騙らうとひろいだ大盜人、汝が樣な奴はかう〳〵」ト折紙を懷へ入れ主鈴をむね打にする、此時供の草履取、逸散に下座へ迯げて入る。牛藏「ハイ〳〵御赦されて下さりませ、ふとした出來心、貴方が佐野屋に御座つて刀をお求めなさるゝと聞いた故の思つき、是といふも一人の母者人が大病、人參代に差閊へてからの騙事、どうぞ御了簡なされて下されまし」岩次「まだ〳〵汝ふとい奴の、眞二つに」ト斬らうとする、萬次郎止め。萬次「マア〳〵お待ちなされまし、憎い奴とは申しながら親への孝とあれば、命は助けてお遣りなされまし」牛藏「ハイ〳〵命ばかりはお助けなされて下さりませ」岩次「うぬ憎い奴なれど、若いお侍の御挨拶に面じ免してくれる、扨々貴公のお蔭ですでの事、騙らるゝ所を免れました、サア此折紙は二枚ともに貴公へお返し申す」ト折紙を渡す、林平請取り。林平「イヤナニ若旦那、左膳樣も嘸お待兼でござりませう、ちつとも早うお出なされませ」萬次「なる程さう致さう、ナニ御浪人、あの者の事は幾重にも」岩次「ハテ彼奴が事はお構ひなく、御用とあらば少しも早う」萬次「左樣ならば御浪人、重ねてお目にかゝりませう」ト唄になり、萬次郎林平下座へ入る。岩次「サア汝にはまだ詮議がある、うせう」ト主

せぬが、其青井下坂の刀御求めなさるゝとの儀、其刀はもと手前主人が遠國より參つて求めましたが、ちと仔細ござつて人手に渡り、今その刀を外へ遣つては主人の一命にも拘はりまする、何卒お刀所望させては下さりますまいか」岩次「ソリャ心易い事、拙者は此刀に限らず名作でさへあればよい、御入用ならば隨分御勝手になされい」林平「お聞届け下されて先は大慶、シテ又あなたは御得心かな」牛藏「いやモウいづれへ遣はしても構ひはござらぬ」林平「然らば其刀一寸拜見仰付けられませ」ト主鈴刀を林平に渡す。「お旦那これ御覽なされい」ト刀を渡す、萬次郎取つて見て。萬次「ア、これ〳〵下坂の刀でないワイノウ」牛藏「ア、これ〳〵麁相仰せられな、下坂の刀に相違御座らぬぞ、違ひない證據は慥な折紙、これ見さつしやれ」ト折紙を出して見せる。林平「ナニ折紙、ハヽヽ其折紙は此方に所持致して居るワ」牛藏「ハヽヽ下坂の折紙が二枚あらうか、馬鹿な事を」萬次「いや〳〵其折紙は俺が爰に持つてゐる、なんと是でも爭論ふか」ト折紙を懷より出して見せる。岩次「ドレ見せさつしやれ」ト取つて兩方の折紙を較べ。「誠に寸分違はぬ折紙、いづれが贋とも正眞とも、ハテよく似せたものぢやなア」林平「シテ此下坂の刀は何時頃より所持なさるゝ」牛藏「三年以前より手前が所持致して居るワ」林平「それで化の皮が顯はれた、此春當所の支配より詮議して手に入れた下坂、人手に渡したは先の月、年月相違し

されませぬがお幸福、なんぼ刀を持つて參つても折紙がなくば前方も疵物、ソリヤお案じなされまするな、大方今に刀が戻つて參るで御座りませう、ア、それにつけても晩程左膳樣にお會ひなされて、ア、これ其御返答が、ハテ困つたものだナア」ト長床几に腰を掛け兩人思案してゐる、合方になり奥塀口より牛藏、小袖繼裃御師の形にて草履取つれ出る、向より岩次著流し深編笠浪人者にて出て來り、舞臺よき所にて行逢ひ。牛藏「アイヤ〳〵卒爾ながら、そこ元は山田の町人佐野屋善兵衛方にお泊なさるゝ御浪人では御座らぬか」岩次「いかにも左樣で御座る、シテ其許は誰方で御座るな」牛藏「拙者は長官の支配下黑上主鈴と申す御師で御座るが、貴殿名作の刀をお求めなさるゝと有つて、手前所持の下坂の刀を判金五十枚に所望致させくれよとの、佐野屋善兵衛段々の頼み故、唯今持參仕る所で御座る」岩次「それは幸ひ、シテ其下坂の刀所持して御座るか」牛藏「如何にも唯今これに所持致して御座る」ト此臺詞を聞いて萬次郎思入あつて、林平にあの刀を取かへして呉れろといふ科、林平呑込む。岩次「然らば宿元へ同道致して金子に引換と致さう」牛藏「左樣致さう、サアお出なされ」岩次「然らば御免、お先へ參る」ト兩人奥塀口へ行かうとする。林平「アイヤ〳〵御兩所とも一寸お待ち下されい」岩次「手前の事かな」林平「いかにも左樣で御座ります」岩次「なんぞ用でも御座るかな」林平「別儀でもござりま

うしやんせう、サアお岸樣、そろ〳〵參りませう」お岸「そんなら私しや行く程に、萬次郎樣、晩程違へず來て下さんせえ」萬次「ハテ違へる事ぢやないワイノウ」丈、大「其請人は我々二人」お岸「必ず違へて下さんすなえ」萬野「ハテお侍に二言はござんせぬ、ノウ林平樣」林平「きつと下郎がお供申します」お岸「萬次郎樣」萬次「お岸待つてゐや」萬野「サア御座んせいなア」ト三味線入の馬士唄になり、お岸先に皆々向へ入る、跡に萬次郎林平殘る。林平「モシ〳〵若旦那樣、マア何は差措き下坂の刀の事、折角お手に入つたれど、アノマア刀は何者へお渡しなされました」萬次「サア折角刀を尋出し、買取るは買取つたが、茶屋の入用に差詰り、山田の町人金兵衞とやらいふ者に、少々の間質物に預け置きしに、其金兵衞より此程行方の知れぬので、それ故に國元へ歸らずにゐるのぢやワイノ」林平「そりやァ大事だ、そんな事なら早く私におつしやれば可い事、この林平も下坂がお手に入つたと聞いて早速お迎に參り、御歸國を勸めるのにお歸りのないは、アノお岸殿に迷うての事かと思つたに、そりやアマアとんだ事をなされました、僅の金に大切の品を心の知れぬ町人に預けるとは、如何にお若いというて、ア、困つた事をなされたなア」萬次「サア俺も此頃はそれが氣になつてならぬワイノウ、然しながら下坂の折紙はコレ大切に持つてゐるワイノウ」ト折紙を懷より出して見せる。林平「まだしもそれをお放しな

事でござんしたかいなア」萬次「モウ〱思ひもつかぬ所へ小舅殿が見えられて、ぴつしよりと汗になつた、其上何やら用事が有る、旅宿へ來いと云はれたが、アヽこれいなずばなるまいワイノ」林平「いやモウ物堅い左膳樣、お待ちなさるゝとおつしやつたれば、是から直にお出なされずばなりますまい」お岸「そんなら今夜は貴方の御用で山田の旅宿へお出なさんすかえ、それでは私しやどうも少と心の濟まぬ事が有るワイなア、ノウ萬野殿」萬野「サイなア萬次郎樣を今宵お伴申したいが、今の樣なお約束では無理にとも申されますまい、何事も御用をお仕舞ひなされ次第來てお上げなさんせ、待つて居りますぞえ」林平「ハテそりや俺が呑込んでゐるワさ」お岸「イエ〱林平殿が然う言はんしても、こんな事を幸に、又外へお供さしやんせうも知れぬ、滅多に油斷はならぬワイなア」萬次「ハテ疑ひ深い、それ程に思はゞノウ二人の衆」丈五「イヤモウ用事仕舞次第、そもじが所へ連れて行く、其の請合は我々二人、山田の旅宿へ尾いて行き、用事歸りは直に三人一座」大藏「成程丈五郎殿の云はるゝ通り、身共も萬次郎殿の傍を離れず、用事終へば直に推かける、それを樂みに待つて居給へ」お岸「そんならお二人樣、必ず主を連れ申して下さんせえ」丈五、大藏「ハテ承知致してをるワ」萬野「あゝいふお請合が有るからは、氣を丈夫に持つて待つて上げさんせ、左や右いふ中日も暮れかゝる、直に歸らうぢや御座んせぬか」佐助「さ

や道連でござつた、ハヽヽヽ」萬次「成程この女中は道連の人で御座ります」左膳「身共も道連と見受けた、シテ青井下坂の刀はどうぢや、手に入つたか」萬次「サア其儀は」ト問へる。林平「アイヤ恐れながら其刀の儀、詮議のため當所へ立越えられまして御座ります、當國松坂邊に手がかりござる噂を承り、何卒早速相知れます様にと大神宮へ日毎の參詣、お聞きなされまし、其加護にや下坂の刀手に入りまして御座ります」左膳「スリヤ其刀が手に入りしとな、其禮參として大神宮へ日毎の參詣とはよい心がけ、然りながら道連とはいひながら艶な女中、その心願ある身で往來繁き此邊に、婦人に交はる酒盛杯は無用に致すがよい、ハテ人の口には戸が閉てられぬ、どの様な風說を受けうも知れぬ、コリヤ林平、其方附添ひ何か心を附きやれ、ア、不埒千萬、刀手に入るからは急ぎ歸國をしやるが可からう」林平「へイ畏りまして御座ります」ト萬次郎と顏見合せ思入。左膳「身共事は山田上町叶屋方に旅宿致す、まだ申聞かす儀もござれば、後方倚が旅宿へ尋ねてお來やれ、必ず共に待ち申すぞ」萬次「畏りまして御座ります、左樣ならば左膳樣」左膳「萬次郎、後程會ひ申さう、いづれも是に、家來供せい」ト唄になり左膳家來つれ下座へ入る、皆々思入、萬野跡見送り。萬野「ヤレ／＼飛んだお方が御座んして、折角面白う飲まうとした酒を、燗冷にしたワイなア」お岸「そんなら常々お噂の有つた左膳樣とは、彼方の

し」萬次「エ、了簡ならぬ所なれど各々のお取持、然らば機嫌直しませう」丈五「それで吾々も大慶に存ずる」萬野「サアお岸樣、若旦那の御機嫌が直つたから、お前一つ上つて主へおさしなさんせえ」お岸「そんなら御機嫌が直つたかえ」萬野「直つた段かいな、サア一つ飲ましやんせ」林平「ドリヤお酌致さう」ト林平酌をする、お岸盃を取上げる、ト唄になり向ふより左膳野袴打裂羽織大小にて、若い衆一人草履取にてつき出で、直に本舞臺へ來て皆々の樣子をためらひ見て」佐膳「それに居るは萬次郎でないか」萬次「左樣おつしやるは左膳樣」丈五郎「ヤア爰へはどうして。佐膳「これは何れも是にお居やるか、ハテ變つた所で御意得ました」ト上の方へ通る、林平思入有つてお岸を隱す、お岸林平が後に控へる。林平「これは〳〵、左膳樣には存じよらぬ所でお目見仕ります、見ますれば御家來衆も輕々しく、何れへ御越しなされまするな」佐膳「如何にも、身共此邊を徘徊なすも主人の仰せ、鎌倉の三老時政殿、諸國巡見にお越しあると關東よりの知せ、それ故主人の支配内、地頭代官の者ども、邪曲の計ひあつては國の名折と、主命を受け藤浪左膳竊かの巡見。朋輩衆も打交りての酒宴の樣子、殊には艶なる婦人抔も見ゆるが。ア、これは何か道連か、定めし道連といふ樣な事で御座らうな」丈五「如何にも、吾々は萬次郎殿同道にて大神宮へ參詣、此女は則ち道連でござるて、ノウ萬次郎殿、ナ、ソレ道連ナ、アい

譯もない、役にも立たぬ事を案じぬ者ぢや、又林平も林平ぢや、何の役にも立たぬ事を話し散らして、折角面白い趣向を、お岸が今の白で吾もアノ左膳樣の事、エヽ又思出したワイなア」林平「サア私はツイ一寸申したばかり、お氣に違ひましたれば、幾重にも御堪忍なされて下されまし」お岸「いえ〳〵、主の知つた事ぢやござんせぬ、私が林平殿を欺してお國の樣子を聞いたのでござんす、主に科はござんせぬ、いうたが惡くば堪忍して下さんせいなア」萬次「イヤ〳〵何ぞといふと國の事を聞きたがるは、大方わしに愛想が盡きたのであらうワイのう」お岸「エヽ何でお前に愛想がつきようぞいなア」萬次「いや〳〵愛想がつきたで有らう〳〵」お岸「イエ〳〵、わたしや愛想は盡きんワイなア」萬次「いや〳〵つきよう〳〵」お岸「いえ〳〵つきぬ〳〵」ト互に煙管にてつゝき合ひ、皆々氣の毒がる、萬野此間へ入り。萬野「アヽ申し〳〵何のお前に愛想が盡きませう、盡きぬといふ證據は、愛想は築地が中へ入りやんした、爰を圓くするのが仲居の役、サア〳〵中直の酒にさんせいなア」大藏「それがよからう、サア萬次郎殿、機嫌直して酒にさつしやい〳〵」丈五「ドリヤ身共がおあひ仕らう、先程より駕籠舁の眞似をして、殊の外氣鬱致した、武士が酒手もねだられまい、酒代の代に機嫌直して貰ひませう」林平「それが可うござりませう、下郎がお酌致しませう」佐助「御機嫌を直して若旦那、お一つお上りなされま

體嬉しい事ぢやござんせぬワイなア」大藏「サアそゝもじに道中させるも、萬次郎殿が晩の睦言を思ふから、それに駕籠では物がない、こから確乎と歩いて、晩の本練といふ所はどうぢやな」萬野「エヽ好かない、無駄をいはんすかいなア」お杉「これ〳〵お前方は、私らが店前に立つてゐさんしては、錢を貰ふ邪魔になるワイなア」お玉「ちつと脇へ寄つて貰ひませうワイなア」佐助「成程コリヤ此方が心が注かなんだ、これ〳〵花たち店を塞げた其代り、錢はしつかり投げてやる、サア〳〵受けたり〳〵」萬次「コリヤ佐助、錢投げる事はどうぢや、あれが噂のあるお杉お玉といふ物貰か」佐助「ハイ左樣でござります」萬次「然らば身共が持合せた小粒なりと投げて遣りませうか」杉、玉「そりや有難うござります、サア〳〵早うお投げなさんせいなア」萬次「そりや投げるぞ〳〵」ト懷より小粒を投げて遣る、我がちに拾ひ。お杉「ヤレ有難や、お錢と違うて山吹色の此お金」お玉「運直に酒など飮まうかいな」ト三絃を抱へいそ〳〵と下座へ入る、跡合方。佐助「いやはや慾ばつた奴等だ」お岸「申し萬次郎樣、今更改めて私が申す事ぢやなけれども、お前樣は何やら大切な品を御詮議なさんすとの事、其お役の身を以て此樣に遊興にばかりかゝつてお出なさんしては、お國への聞え、聞きやお前の奥樣の親御樣は物がたいお方と、あの林平殿の咄、ひよつとお身の難儀にでもならうと、私しやそれが大體案じられるワイなア」萬次「ハテ

知らんせんワイなア」佐助「それさ、古市から此相の山まで僅ばかりの道程を、百里も道中する様なお岸様の道中姿、お慰も多いに、道者の御趣向とはイヤモ耐つたものぢや御座りませぬ」林平「如何に御趣向だといつて、若旦那が駕籠の眞似をして、お岸様を駕籠に乗せ舁歩くとは、是が誠に戀の重荷とやらで御座りませう、時に暑くろしい駕籠にばかり御座つては氣が晴れますまい、サア〳〵駕籠から出し申さつしやいサ」萬野「ほんにさうしやんせう、サアお岸様、爰へお出いなア」丈五郎「ドリヤ身共がお草履を直さうか」ト紅絹の緒の草履を直す、お岸舞臺へ出て來る、此人數みな〳〵長床几に腰をかける。お岸「ホンニ萬次郎様を始め、お二人様も嘸しんどう御座んせう、モウ爰は何處でござんすえ」丈五「ハテ爰はそもじと萬次郎殿と、しつぽりと相の山、お杉お玉が店の前だワナ」萬次「又口合をいふかいやい、時にお岸、そなたも駕籠の裡で氣詰であつたであらう、俺も舁きつけぬ駕籠を舁いたで、モウ〳〵疲勞うて〳〵コレ〳〵林平、酒を持て〳〵」林平「ネイ〳〵、さア〳〵よい見はらしで一つ上りまし、お岸様も嘸お氣鬱でござりませう」ト提重を持行く。お岸「いゝえいなア、私しや此伊勢の古市に勤はしてゐれど、終に身まゝに道中した事は御座んせぬ、京大阪からもおやま様方が、參宮さしやんすを見る毎に羨しう思うた許り、今日この様に道中の眞似事をするも、萬次郎様の恩ぢやと思や、大

開く。ト左右より若い衆、伊勢參の旅人の仕出し大勢出で、捨白にてお杉お玉へ錢を投げて遣る事いろ〳〵、始終相の山の模樣よろしく東西へ別れ入る、ト此時鳴物替つて。

唄『花が人呼ぶ浮氣の花が、浮きうかるゝ浮氣の花よ、おれごみぢや合點ぢや、かた山ぢや合點ぢや、下戸は酒手で荻の花、おれ込ぢや合點ぢや。ト戻り駕籠の出唄になり、向ふより大藏著流し侍の形、頰被をして裾をからげ脚絆を穿き、中拔草履にて駕籠舁の眞似をしたる拵へ、丈五郎同樣にて四手の駕籠をかつぎ、此内にお岸を浴衣がけの旅出立の女郎にて煙管を持ち乘てゐる、萬次郎著流し意氣地なき形にて三尺手拭をしめ頰被にて息杖を持ち、後肩を丈五郎と代つて駕籠を舁上げ、二足三足歩んでは又丈五郎へ渡す仕組、萬野仲居にて是も浴衣がけ、竹の先へ火繩を附けたるを持ち、佐助若い者の形にて女菅笠を二つ持ち啣煙管、後より林平、ねぢ切奴の拵へ、柿色の脚絆草鞋にて、三人前の大小を手拭にて結び、是をかつぎ提重をさげ、此人數出て來る、駕籠を舁きし三人、肩の痛い科、やう〳〵本舞臺へ來てよき所へ下し。大藏「ヤレヤレ舁つけない駕籠で大汗になつた」丈五郎「それ〳〵、身共の肩がめき〳〵いひます」萬次郎「イヤモウ取分け此萬次郎は、終に駕籠を舁いた事がない故、しんどうて〳〵ならんワイノ」萬野「さうで御座んせう、お二人樣は格別、萬次郎樣が駕籠を舁くとは、イヤモウ狼狽へたお釋迦樣も

油屋おこん
福岡貢　伊勢音頭戀寐刃

作者　近松徳三

一幕目

相の山の場
返し山田旅宿の場
返し二見浦の場

一今田萬次郎　一物貰ひお杉
一若い者佐助　一同　お玉
一安逢大藏　一黑上主鈴　實はなまの牛藏
一粟原丈五郎　一奴林平
一仲居萬野　一古市女郎お岸
一德島岩次　一藤浪左膳
一福岡貢　一若い衆大勢
一駕籠舁二人　一飛脚
一仕出し

本舞臺三間の間一面の杉林、上の方に勢州相の山といふ榜示杭、眞中に藁葺の小屋、此内にお杉お玉浴衣の形にて古き三絃を彈いてゐる、かすめたる大拍子の神樂にテンツヽをかぶせたる鳴物にて幕

姉妹達大礎 終

る。臺七「こりや何ひろぐのだ」棒突皆々「太鼓ぢや〳〵」坪内「卜庵老早く〳〵」棒突「醫者ぢや〳〵」
卜庵「合點ぢや〳〵」ト宮城野が脈を伺ひ氣付呑ます事有つて。「氣遣ない踏込んだ〳〵」ト又立になり信夫一柵手を負ふ、綱平太鼓を叩く。棒突「太鼓ぢや〳〵」ト引分る。臺七「又かいやい」
棒突「醫者ぢや〳〵」松田「卜庵老早く〳〵」ト又立になる、宮城野信夫危ふくなる、半兵衛お力與茂吉佐五平入替つて立廻り、半兵衛、臺七を一トかせ斬る。臺七「まて〳〵太鼓ぢや〳〵」綱平「太鼓はやぶれた」臺七「エ、忌々しい、醫者ぢや〳〵」卜庵「合點ぢや〳〵」ト脈を見て。「氣遣ない〳〵」
ませ。「氣遣ござらぬ、勝負〳〵」卜庵「心得ました〳〵」ト右の如く脈を見て氣付をの
臺七「よいか〳〵」卜庵「脈は上つた〳〵」臺七「エ、おきさらせ」トト庵を踏飛ばす、是より皆々立宜しく有つて、トヾ臺七を斬倒し。宮城「父上の敵」信夫「母樣の仇」半兵、與茂「舅のかたき」佐五、お力「お主の仇」皆々「おもひ知つたか」ト皆々とゞめさす。兵部「敵討が相濟んだ、今こそかへす杉本の印可」ト半兵衛へわたす。半兵衛「忝ない」兵部「寶も揃うた、目出たい、本國へ出立〳〵」
ト打出し。

幕

はり、罪に取つておとさん汝が工、さるによつて管領職へ目見得させ、此所に足を留め、首尾よく敵を討たさんため、まつた某反逆といひしは、汝が俗性を聞出し、鎮守府の印を無事に取返さん我計略、邪法の餘類、逆磔にも行ふべきやつ、敵討の勝負はまだしも、サア潔よく立會へ」臺七「すりや武者修行せしは大義の望でないか」兵部「大義を起すは武士の本懐、しかし逆を以つて順を討たざる我本懐、七草が餘類血判とるも穢らはしい」ト天上天下の絹を出し引さく。臺七「よいは、かうなつたら是非に及ばぬ、敵討の勝負致してくれう」兵部「某は檢使の役目、双方共に用意仕やれ」皆々「ハア、」ト皆々用意にかゝる、臺七上着をぬぎ捨て白むくになる、松田三寳に土器水桶を持ち出る、皆々故實の水盃有り。松田「互に尋常の勝負をとげ、疲もあらば太鼓の相圖を以て休息致させてよからう」綱平「畏つてござりまする」卜庵「拙者は手疵の看病、是に控へ居りまする」ト此間に水盃を仕舞ひ双方土器を破り左右へわかつて。半兵衛「去春本國白石に於いて討つて立退きし杉本甚内が高弟、改名して金江半兵衛」宮城「甚内が娘宮城野」信夫「同妹しのぶ」與茂吉「入間の與茂吉」佐五「家來佐五平」お力「女房りき」皆々「サア尋常に勝負勝負」臺七「うぬら一々返討だ、觀念ひろげ」皆々「サア」臺七「サア」皆々「サア」ト是より達のめりやすになる、立宜しく有つて宮城野一枷斬らるゝ、綱平相圖の太鼓を打つ、捧突左右へ引分け

ぼし召」吉見「管領よりの」四人「計らひでござる」鶏羽「是も聞えました」ト此内典膳實は外科醫卜庵𧘔𧘕衣裳をぬぐ、下は醫者の形になる、鶏羽、典膳を見て。鶏羽「典膳殿、貴殿の其形は」卜庵「イヤ拙者有樣は外科でござる」鶏羽「ナニ外科とは」卜庵「追付け因緣が知れませう、細工はりう〳〵仕上を見て居さつしやれ」トいふ所へ半兵衞、宮城野、與茂吉、信夫、佐五平、お力、綱平跡に跟き、皆々鶏羽を取巻く、此時棒突の奴大勢出る。半兵、宮城、與茂、信夫、佐五、お力、綱平「志賀臺七」ト詰よる鶏羽皆々を見て悔り。鶏羽「ヤア汝達が其形は、殊に最前くたばつた佐五平お力、うぬら存命でをるか、ヤア〳〵〳〵こりやどうぢや」佐五「オヽ兩人共相果てしと見せしは、おのれが手より兵部之輔樣へわたしたる邪法の鏡をもつて、汝に手盛をくはせたのぢやわやい」鶏羽「ヤア」トおどろく。半兵衞「其上最前某反逆一味と名乘りしは、鎭守府の印を手に入れん爲、兵部之輔殿と申合せ、七草が血筋をひいた其方、兄弟の緣を斷絶り、師匠甚内殿の修羅の妄執」宮城「よう母樣迄返討にしやつたのう」信夫「父上の敵」佐五「お主の仇」與茂、お力「サア尋常に」皆々「勝負勝負」鶏羽「身共に刃向はゞいづれも火蓋を」松田、坪内、吉見、加藤「臺七動くな」ト臺七方へ筒先をむける。鶏羽「ヤア〳〵〳〵こりやどうぢや」ト大きに驚く、ト奥塀口より兵部之輔出て。兵部「ヤアヤア臺七、其方某を賴來りしと僞り、邪法の鏡をわたし、まさかの時は某を七草が殘黨と呼

ト宮城野信夫お力盃を銘々持ち、綱平ついで廻る、三人のんで半兵衛與茂吉佐五平へさす、三人盃持つ、綱平ついで廻る、ト八ッの鐘なる。お節「アリヤもう八ッの鐘」皆々「敵討の刻限は」兵部「寅の一天」皆々「もはや一時」兵部「行馬へ參つて心しづかに」皆々「ハッ」兵部「行きやれ〳〵」ト皆々いきほひ込んで向へ走り入る、兵部之輔お節宜しくこなし。チョン〳〵返し道具。ト七時の本釣鐘鳴る、右の見得にて道具正面へ引く。

浪幕一面におりる、よき所に陣太鼓を釣るし松の木出る、方々にて篝をたき立て、提灯數多ともし、舞臺先後一面に行馬出る、始終本釣鐘にて、向より鵜羽警護の人數、鐵砲にて前後をかこひ出る、典膳跡より付出る、皆々本舞臺へ來て。

松田、坪内、吉見、加藤「黑右衛門どの、是が則ち立合の場所でござりまする」ト臺七四邊を見て合點の行かぬこなしにて。鵜羽「孰れも立合の場所は、管領の御前とござるに、見れば廣々たる濱邊の體、コリヤどういふ儀でござるな」坪内「されば今朝御前に於いてとござれ共、足場よき由井が濱にて、諸人に見物を赦し、貴殿の英名をかゞやかさんが爲の計ひでござる」鵜羽「さやう承ればば御尤に存ずる、見ますれば行馬をしつらひござるが、是も管領のお差圖でござるかな」松田「諸人の群集混雜もあらんかと、かく行馬をしつらはせてござる」加藤「是も黑右衛門殿を大切にお

臺七をたばかり取返したる鎮守府の御判」ト兵部之輔へわたす。兵部「此鎮守府の印を以て高館の家を相續、まつた此邪法の鏡は甲斐之介殿の手より禁庭へさし上、粟島の家の手柄にさせん」ト綱平にわたす。綱平「エヽ有りがたい」兵部「志賀臺七、某へ此鏡をわたし置きたるは、まさかの時此兵部之輔を七草が餘類にせんと、彼奴が工の裏をかき、二種共に手に入れしは、兩家の緣組首尾よく納る」半兵衛「此上は敵討御免の御書を待つばかり」ト向よりばた〳〵にて與茂吉御免の御書を竹にはさみ走り出て。與茂吉「コレ〳〵敵討御免の御書、申請けて立歸りました」宮城、信夫「オヽ出來た〳〵」半兵衛「與茂吉、すりやそちが詞も」與茂吉「兵部樣のお世話で、わしが入間詞も滿足に直つたゆゑ、此大事のお使を首尾よう仕課せて戻りました」宮城「此功によつてしのぶと其方、夫婦に致しくれる」與茂、信夫「エヽ忝い」兵部「おせつ、付けた品用意よくば是へ」お節「ハアヽ」トお節三寶に三組盃をのせ、長柄の銚子を持ち出て。「首尾よう敵を討ちおほせ、宮城野殿と谷五郎樣、信夫殿與茂吉殿、佐五平お力も改めて夫婦の盃、仲人は此おせつ、サア〳〵早う祝言の盃を」ト三寶眞中へ直す、皆々悅び。宮城「何から何迄御兩所樣のお志」半兵衛「辭退いたさず」與茂、信夫「夫婦の盃」佐吾「下郎め迄も」お力「あやかりました」お節「三人共に祝言とは」兵部「是も目出たい三々九度」綱平「祝うて一つ拙者がお酌」宮城、信夫、お力「そんなら一所に」

井が濱邊に矢來をしつらひ、用意一々調ひし上、管領職より敵討御免の御書到來も追付、しかし相手は手利、そち達兩人では心元ない、よい助太刀を遣さう、ヤア〳〵兩人の助太刀早く參れ」佐五、お力「ハア、」ト佐五平お力白むくに鉢卷襷、一腰さし、橋懸よりつか〳〵と出る。

宮城「ヤアそなたはお力佐五平」信夫「先刻に二人ながら差ちがへて」兩人「死にやつたぢやないかいなウ」佐五「いかにも拙者が相果てしと見せたも」お力「兵部之輔樣の」兩人「御計略」宮城、信夫「エヽ」ト兵部之輔懷中より邪法の鏡を出し。兵部「コレ此邪法の鏡を以て、お力佐五平が相果てし體に見せしも某が計ひ、なんと宮城野、其方へ不義仕かけた佐五平は、此鏡を以て唐意軒がなすわざ、今又某此鏡を以てお力佐五平相果てし體に見せしは、佐五平が不義の汚名をすゝがんため」宮城「そんなら皆唐意軒が所爲て有つたか」信夫「今こそ不義の疑はれた」兩人「元の主從ぢやぞよ」佐五「ヘエヽ有りがたい、是と申すも兵部之輔樣のお蔭」お力「佐五平どの」佐五「おき」兩人「エヽ忝うござりまする」トばた〳〵にて橋懸より奴綱平早打の形にて走り出て。

綱平「いづれも是にござるか、粟島高館兩家の緣談、鎭守府の印手に入る迄は、暫く延引とござるゆゑ、此儀兵部樣へ通達申し、寶の詮議を相賴めよと、御家老藏人樣より早打のお使」ト奥より半兵衛白無垢鉢卷襷にて印を持出で。半兵衛「兵部之輔殿の計ひにて、わざと反逆の體に見せ、

いたした」ト懐中より御判を出し。「谷五郎は是を以て鎌倉滅亡の上、すぐに奥州へ切入り、彼地の手筈を首尾よく致せ」ト半兵衛へわたす。半兵衛「鎮守府の印、慥に預つてござる」鵜羽「此上は一味の者へ觸ながし、萬事の手つがひ」兵部「イヤわづかに蟻の一穴より大山も崩るゝ習ひ、期に至る迄はやはり隱密」半兵衛「東國の味方を招くは此一品、拙者は一刻も早く」兵部「萬事油斷なきやうに」半兵衛「正之どの兄者人」兵部「早く〳〵」半兵衛「ハツ」ト半兵衛印を持ち向へ走り入る、夜半の鐘なる、ト奥より典膳出る。典膳「もはや九時、用意よくば同道致さう」兵部「鵜羽氏の願ひに依て、眞の立會は明寅の一天、門弟中警固の用意」家中皆々「ハア丶」ト皆々鐵砲を持ち宜しく並ぶ。鵜羽「兵部之輔殿、コリやどうでござるな」兵部「大切なる管領職の御師範、萬一途中にて狼藉の儀も有らんかと、拙者が計らひ」鵜羽「ハテそこ〳〵へお氣を付けられ忝い」典膳「然らば此儘管領の館へ」兵部「拙者は跡より」鵜羽「兵部之輔殿、お先へ參る」兵部「明朝御前にて」兵部、鵜羽「御意得ませう」ト唄になり、松田、吉見、坪内、加藤鐵砲を持ち鵜羽が前後に引そひ、典膳跡より、皆々しづ〳〵向へ入る、兵部之輔こなし有つて。兵部「兩人の者用意よくば是へ參れ」宮城、信夫「ハア丶」ト宮城野信夫白無垢もみの鉢巻襷、一腰さし奥より出で。宮城「兵部之輔樣のお情にて」信夫「親の敵」兩人「志賀臺七を」ト向をきつと見る。兵部「敵討の場所は由

體の此臺七、サア弟返答によつて其場は立たさぬ、味方に隨くか但し刃向うか、返答ぶて、ド丶どうぢや」半兵衛「いかにも味方致さう」兩人「なんと」半兵衛「一心の器量を以て大義を思立つは、男子たる身の望む所、高館に仕へし志賀谷五郎の名はきえて、今は主なき金江半兵衛、まつた杉本甚内殿は元は楠家の一族、某が爲には師匠なり、舅なり、南朝の旗上と有るならば、未來にござる甚内殿も嘸本望、今日只今足利家へ弓引くといふ我所存、二心なき武士の金打」ト刀を拔かうとする。兵部「イ丶ヤ金打には及ばぬ、一心だに極らば、ソレ」ト口明の卷絹を出し半兵衛方へ投る、半兵衛取つて披き見て。半兵衛「天上天下唯我獨尊、ムウン」トよみ、トちよと思案して刀にて指をつんざき絹に注ぎ。「軍神に誓つて違變なき心底、斯の通り」ト兵部之輔にわたす。兵部「血判慥に落手いたした」鵜羽「弟谷五郎、スリヤいよ〱某に刃向ふ所存はないぢや迄」半兵衛「瓦礫を捨て名玉を取得る當然の理、辨へなき身共ではござらぬ」鵜羽「適れ流石の弟、出來す〱、ナニ兵部之輔殿、室町へ切入る手筈はな」兵部「此比天文を測り見るに、當月下旬こそ事を計るべき時節到來、御邊を京都の大將と定め、鎌倉表は金江半兵衛、某兼て習ひ得たる南蠻流祕法の毒藥、由井が濱邊の川上より流しかけ、鎌倉武士を鏖し、先第一の軍慮となるは邪法の鏡、とくより臺七が手より某が申請けたり」鵜羽「そりや身共が肌身を放さず所持

の場所へ驅付け、敵臺七が有所鎌倉と聞きたる故、入込んだはそちに逢はうばかり、サア覺悟せい」鵜羽「さうぬかしやいつそ」ト鵜羽、半兵衛へ斬つて懸る、半兵衛拔合せ鵜羽と立廻り、此中へ侍二人半兵衛へかゝるを、半兵衛拔討に侍一人を斬る、鵜羽斬つて行くはずみ、半兵衛身をかはすと鵜羽誤つて家來をぽんと斬る、半兵衛鵜羽へ斬てかゝる、鵜羽受止める。兵部「兩人共に同士討致すか、先まちやれ」ト聲かける、兩人切むすびなから。兩人「なんと」トとまる。兵部「兵部之輔が本心語つて聞けん、双方共にまづひきやれ」兩人「ウン」トこなし有つて、兩人左右へ別れ刀を納め。半兵衛「兵部之輔殿こなたの本心」鵜羽「語つて聞かさんとは」鵜、半「如何でござるな」ト兵部之輔眞中におし直り。兵部「元某は南朝第一の忠臣楠正行が後胤、祖父正成討死の砌、家來笹目の憲法といふ者、水子の我を抱き抱へ、亂軍の中を切ぬけ宇治の里にて人と成り、猶も下賤に染屋の忰、成長の後我を招き、眞かう〳〵と憲法が物語、扨はと知つたる父の家名、夫よりきざす我大望、宇治兵部之輔正之と名を改め、おもひ立つたる武者修行、さる春奥州に有りし折から一年あまり、一國の人氣を窺ひ、それより此鎌倉に立越え、おもては武道の師となぞらへ、天の時と地の利を考へ、足利殿を攻亡し、再び南朝の御代となさん我存念、片腕ともなるべき金江半兵衛、一心を定め某が味方につきやれ」鵜羽「兼て兵部之輔に合

兩人も冥途の供」ト兩人を突放し刀に手を懸ける、お節、宮城野信夫を後にかこひ鵜羽を止めて。お節「イヤ此者共はわたくしが召使、滅多に殺さす事はなりませぬ」鵜羽「でも身が心に隨はぬ女郎ども」お節「イヤお取持致しませう」鵜羽「なんと」お節「夫兵部之輔が大切に致されまするあなた樣、私がとつくりと得心させまして、二人共寐所のお伽、手活の花とながめさせませう」兵部「でかしたお節、奥へ連行き篤と申しふくめ」お節「畏りました」兵部「イザ典膳殿にも暫時奥にて」典膳「いかにも休息仕らう」お節「サアふたり共マア奥へ」宮城、信夫「ちやと申して」ト兩人おこつくをお節宜しく止めて。お節「ハテマアおじやいのう」ト唄になり、鵜羽ウヽンと宮城野信夫方へ反打つをお節宜しく兩人をかこひ、典膳に目禮する、典膳先に立ち、お節、宮城野信夫をつれ奥へ入る、跡合方になり、兵部之輔鵜羽こなし有つて。鵜羽「兵部之輔殿、スリヤいよいよ只今の詞に相違なく、明日眞の立會、某へ勝を讓る所存よな」兵部「何が扨一旦約したる兵部之輔が詞は金鉄さ」鵜羽「先は祝著に存ずる」ト橋懸ばた〳〵にて鵜羽が家來二人、金江半兵衛が前後をかこひ、つか〳〵と走り出て。侍二人「金江半兵衛腕廻はせ」ト兩方より十手にて打かゝる、半兵衛立廻にてじつと留る。鵜羽「ヤアうぬは弟谷五郎、者共打すゑて繩ぶて」侍二人「ハツ、」とつた」ト又かゝるを半兵衛兩人を投付けて。半兵衛「磯崎殿を返討にしたる人非人、最後

佐五平「もう了簡が」ト鵜羽「何を蛆蟲めが」ト佐五平が眉間を打つ、疵付く、お力行かうとするを同く長柄にてぶちすゑ。「うぬ手向ひひろぐと逆磔だぞ」トきつといふ、佐五平お力顔見合せ。佐五「お主の敵を討たん爲、是迄の憂艱難」お力「其敵が討たれぬといふは」佐五「お力、よつく武運につき果たか」お力「道理でござんす佐五平殿」佐五「おぼえもない不義の悪名といひ、敵は討たれず、何存らへて詮ない命、腹かつさばいて冥途にござる御主人に申譯」お力「でかさしやんした佐五平殿、こな様の不義放埓は酒の科、現在わたしが夫ぢやもの、何の憎う思ひませう、こな様獨は殺さぬ、わしも一緒に冥途の供」佐五「オ丶よく言つてくれた、今此場で夫婦諸共」お力「さしちがへて」トお力佐五平一腰拔き、互に衿元しつかと取り、拔身を兩方よりさしつける。宮城、信夫「ア丶コレ」ト宮城野信夫行かうとするを、鵜羽兩人が首筋取つて引付け。鵜羽「動きあがるな、サア兩人共に早くくたばれ」佐五、お力「オ丶いふにや及ぶ」ト兩人互に刺違へ剋る、宮城野信夫あせる、鵜羽うごかさぬ見得。佐五「おのれ臺七、生代り死替り」お力「お主の敵」佐五「恨をはらさいで」兩人「置かうか」ト兩人色々有つてばつたりと死る、宮城野信夫ハアと泣落す。兵部「いづれも見苦しい、其死骸片付け召されい」松田、坪内皆々「畏つてござりまする」ト松田、坪内、吉見、加藤、兩人が死骸をいだき橋懸へ入る。鵜羽「此上は宮城野しのぶ、うぬら

の者共、身が寐やの伽を致させたいが、苦しうござるまいかな」兵部「何が扨お心易い儀でござる、管領職の御師範たる貴殿、兵部之輔が召使御目に留つたは彼らが幸運」お節「イヤ申しそりや又あんまり」兵部「何があんまり、臺七殿の御意に入らねばかれらが身の破滅、コリヤヤイ兩人、命替りのお宮仕、承知いたせ」宮城、信夫「ぢやと申しまして」お節「アヽコレ今兵部之輔殿のおつしやる通り、命にかへる寶はない、お目に留つたこそ幸ひ、兩人共に貴方のお傍へ、ナ、心を靜めてお伽を申しや」ト目配する。宮城「なる程、あなた方のお心遣ひ」信夫「よう得心してをりまする」お節「得心の上は早うお傍へ」宮城、信夫「心得ました」ト合方になり、宮城野信夫こなし有りて鵜羽が傍へ行く、佐五平お力口をしきてなし、宮城野信夫鵜羽が兩方にすわる。宮城「お客樣、ふつゝかな私ども」信夫「あなたのお伽を」兩人「仕りませう」鵜羽「オヽ早速の承知でかすでかす、コリヤ宮城野、汝は本妻しのぶは妾、兩人ともに月と花」ト宮城野を引よせ。「不愍のかけて呉う、ナニ兵部之輔殿、御免下されい、コリヤ信夫身が脛をさすれ」ト信夫方へ片足なげ出す。信夫「なんと」ト信夫氣色するを。兵部「コリヤ〳〵兩人、お望の通り腰膝を篤となで擦り、御機嫌を伺へさ」宮城、信夫「かしこまりました」ト宮城野、鵜羽に靠れかゝる、信夫鵜羽が足をさする、佐五平お力此體を見て。佐五、力「エヽ」トお力三寶を揉碎く、佐五平身をふるはし。

師範たる拙者に何奴でもどなたでも、コヽ是程でも指を觸へると直に逆磔だ、まだ其上に兵部之輔どの、こなたには此臺七が身にも命にもかへぬ大切なる一品をわたし置いたは、兄弟同然の因縁を結ばう爲ばかり、よもや違變はござるまいなア」兵部「何の違變仕らう、大切の一品を申請けた兵部之輔、我一命の續くだけはこなたと合體、氣遣せずとゆる〳〵御休息なされいさ」鵜羽「千萬忝う存ずる、コリヤヤイ女郎共、そな粕野郎め、汝等如何樣に踠いても、身共に刃向ふ事はならぬ、其子細はコリヤこれだ」ト懐中より墨付を出し。「此度粟島甲斐之助臣下楠原菅傳といひしは、誠は七草が老臣森唐意軒、最期の砌、かの俤といふ邪法の鏡を奪ひ取つて立退く曲者、此鎌倉に身を忍ぶよし、詮議仕るに於いては東八ヶ國の支配申付る者也、鵜羽黑右衛門へ鎌倉の管領在判、なんとかよる御墨附を頂戴致したる某、びくとでも指さへて見をらう、直にうぬら逆磔だ、がなんと手向ひせぬか、親の敵と斬りかけぬか、女郎め下郎め、主の敵と手向ひせぬか、フヽヽハヽヽヽ、何として〳〵、よもや手向がなるまいがな」宮城「エヽ親の敵の志賀臺七」佐五「お主の仇を目の前に置きながら」信夫「討つ事ならぬといふは」おカ「御墨付といひ」佐五「管領職の御師範」宮城、信夫「こりやマア何とせうぞ」佐五、おカ「御兩所樣」四人「エヽ口をしいなア」ト身をふるはしなく。鵜羽「もがくは〳〵、何と兵部之輔殿、アノ姉妹

盆に返らぬ思案が出來たか」佐五「イヤサ其儀は」兵部「言譯立たねば不義は免れぬ」佐五「エヽ現在敵を目の前に置きながら、御兩所の後立となつて討つ事もならぬといふは、よつく天道に見はなされたか、エヽ口惜いなア」お力「不義者の佐五平殿は頼まぬ、御兩所樣の後立は此力、サアお二人共」宮城、信夫「そんならお力」お力「サアふん込んで勝負〱」ト三人勢込んで立上る。兵部「イヽヤ志賀臺七を敵というて討たす事罷りならぬ」三人「そりや又なぜな」兵部「此度管領職には、臺七の武藝を甚だ御懇望有つて御師範と罷成る、殊更明日は御前にて某と眞劍の立合、是とても臺七に勝を讓る我所存」お節「エヽそんなら貴夫が臺七殿に」兵部「オヽサ今管領職の御意に入つた志賀臺七、敵などと指でもさゝば立所に汝達は逆磔、杉本の家は一生埋木となるぞよ」宮城「そんなら先達て後立となつて」信夫「敵討たさうとおつしやつたお詞は」お力「兵部之輔樣僞りで」三人「ござりましたか」兵部「イヽヤ兵部之輔虛言は構へねど、今四海一統に管領の下知に隨ふ此時節、兵部之輔一人違背がならうか」三人「そんなら」ト三人顏見合せ。「エヽ口をしいなア」ト三人泣落す、鵜羽にた〱笑うて。鵜羽「ハレよい態、イヤ兵部之輔殿、有樣は貴殿の所存疑ひました、杉本の身寄を取込み世話さつしやるは、大方此臺七を討たす所存で有らうと存じたが、今の詞を聞いて安堵いたした、いかさま管領職の御威勢はきびしいものだ、御

門」一 信夫「本名志賀臺七」一 お力「名を變へし卑怯者」一 佐五「もはやのがれぬ尋常に」一 四人「勝負〱」一 鵜羽「イヽヤ變名したは卑怯でない、コリヤコレ兵部之輔殿が差圖、鵜羽黑右衛門と改名して管領職へ吹擧したも、皆兵部之輔が計ひさ」一 お力「ハテ心得ぬ、お姉妹を別業に匿まひ下さるは、敵を討すお心ざしと思ひの外、臺七が立身出世の御吹擧なさるゝ兵部之輔樣のお心では」一 宮城、信夫「どういふ事やら、申し奧樣」一 三人「お聞かせなされて下さりませ」一 お節「さればいなう、樣子はしらねど是なる臺七殿と、夫兵部之輔殿とは無二の因緣、それ故管領職へ師範の取次」一 鵜羽「其又兵部之輔殿が、此者共を引合さるゝは」一 お節「杉本甚内殿へ夫が寸志」一 皆々「マヽなんと」一 お節「先達て兵部之輔殿の手に入つた杉本の印可菊水の卷をもつて、鎌倉中の諸歴々を門弟と致しまするは、正しく楠流の印可の德、其杉本が身寄の者、匿まひまするは則ち甚内殿へ夫が返禮」一 鵜羽「いかさまコリヤ尤」一 佐五「イヽヤ其返禮請け度くない、敵臺七を討つてこそお旦那の修羅の妄執もはれう、御姉妹を世話にして敵討をさせまいとは、後暗い兵部之輔どの、モウ世話は賴まぬ、此佐五平が後立となつて、おのれ臺七只一討」一 ト反打つて鵜羽へ行かうとする、此時奧より兵部之輔衣裝𧘕𧘔にてつか〱と出で、佐五平を二重舞臺より突のけきつとなつて。兵部「イヽヤ不義者の汝に宮城野姉妹は渡されぬ」一 佐五「なんと」一 兵部「最前かけたる水の謎、覆水

に致さう」ト盃を取つて。「サア女郎、イヤサ妼のしのぶ一ツつげ」お節「コレお客人様が、ソレ注げと仰しやる、ちやつとおつぎ申しやいのウ」信夫「アイ畏りました」ト信夫長柄を持ちこなし有つて酒をつぐ、鵜羽盃持ちながら宮城野が顔を見て。鵜羽「ハテ美しい物だなア、宮城野、イヤサ腰元の宮城野、お客人の此盃、我にくれるぞよ」ト宮城野が手を取り引よせる、此はずみに持つたる盃の酒こぼれる、宮城野鵜羽が手をふり放す、首筋取つてぐつと引付け。「こいつ不行儀千萬な女郎めが、うぬ貴人の待遇もしらいで、のぶ〳〵と此場へ出さるのぶとい奴、なぜ酒をぶち零した、うぬもまた身が盃を獻さうといふに、なぜ一言の返答なく不禮の振舞、コリヤ此鵜羽黒右衛門官領職の御師範、身が盃をささうといへば、鎌倉中の大小名有りがたいと三拜して涙を零し悦ぶぞよ、それにうぬ一言の返答せぬ罰當め、うぬが如な奴らは重ねての見せしめにかう〳〵〳〵」トさん〴〵に打擲して。「かうしてくれるわい」ト二重舞臺より蹴落し、此時後より佐五平お力つか〳〵と出て。佐五、お力「志賀臺七うぬを」ト兩方よりかゝる、立廻にて鵜羽、兩人を二重舞臺より蹴落し。鵜羽「佐五平お力、樣々のやつが出あがつたな」佐五「臺七、うぬに逢たかつたわやい」お力「鵜羽黒右衛門と名をかへ、鎌倉にかくれ忍ぶと聞いて、お二人を伴ひ鎌倉へ立越え、そなたの行方を尋ねたわいのう」宮城「サア鵜羽黒右衛

なつた義理は立つ、劔術の立會とは又格別の儀だ、それ故違背なくお請申した、早く兵部之輔どのに御意得たい、どれに居めさるな」お節「イヤ兵部之輔儀は、只今衣紋を改めをりまする、マア御馳走に九獻の用意、それ娵共早う〳〵」宮城、信夫「ハア、」ト合方になり宮城野白木の三寳に盃のせ持ち出る、信夫長柄の銚子持ち出る。宮城「お客人樣」信夫「一獻おめし上り」兩人「遊ばされませい」ト鵜羽が前へ三寳を置く、宮城野西の方、信夫東の方、兩方にすわる、鵜羽宮城野を見て。鵜羽「ヤア、わりや宮城野」宮城「鵜羽黑右衞門といふは」信夫「敵志賀臺七」鵜羽「フウうぬは仙臺訛の妹信夫」信夫「岡崎でよう迯げやつたなア」鵜羽「フウうぬが仙臺訛も直つて、兄弟ともに是にをるか」お節「私が召使に抱へましてござりまする」鵜羽「イヤ其儀も疾より承つた、兩人共に別業へ取込み、劔術ををしへさつしやる事も、訛の詞付を直すも、御内室おせつ殿、こなたのお世話といふ事よつく存じ罷有るぞや」お節「ホヽ、黑右衞門樣の御意とも覺えませぬ、夫兵部之輔は鎌倉中の御大名方へ立入りまするゆゑ、毎日〳〵御大家よりの御使者、それ故召使ひまする者共へも、心がけの爲少しばかりは劔術も稽古をさせ、又遠國の詞付では何とやら賤しいやうに聞えます故、上方詞に直さしましたは、お歷々の御酒のお相手、お茶の給仕に出しませうと存じましての事でござりまする」鵜羽「聞えました、いかにも拙者が酒の相手

てござりまする、典膳様もようこそお出下されました、御苦労に存じまする」典膳「是は〳〵御挨拶、扨兵部之輔殿には是なる鵜羽黒右衛門殿を、管領職の御師範に吹擧召され、甚の御機嫌、今日も黒右衛門殿をお相手に御酒宴遊ばされ、お盃の上にて軍學のお咄し、黒右衛門殿には劍術體術、何暗からぬ物語、管領職にも日比お好の兵術、御酒宴の餘り、明日御前に於いて兵部之輔殿と黒右衛門殿、眞劍の立會、達て御所望によつて、黒右衛門殿には速にお請申され、則ち拙者此趣を承り、兵部之輔殿に申渡さん爲參つてござるさ」お節「ムウそんなら明日黒右衛門様と兵部之輔殿、御前に於いて眞劍の立會致せよとの御上意とな」典膳「いかにも」お節「ハテなア」トこなし。吉見「眞劍の立合は互に命づく」松田「殊に御前といひ、いづれが勝つとも負るとも」坪内「御入魂の御兩所」加藤「それに兵部之輔様にお尋合もなく」坪内「黒右衛門殿にはお受け有つて」四人「御下城なされたとな」鵜羽「なる程、此度某此鎌倉へ立越え、兵部之輔殿のお世話になり、凡三十日許も此家に滯留、それより吹擧を以て管領職へお目見え相叶ひ、サア是からが拙者の利口だの、何か管領職の腰を打ぬき、わづかの間に御師範仰付られ、今では田もやろ畦もやらうと、管領職を立てうと倒さうと某次第、尤も初は吹擧いたしたは兵部之輔なれども、其恩返しは致して置いた、オヽ某が身にも命にもかへぬ恩返なりや、世話に

はぬ」佐五「スリヤ言譯立たねば。チエヽ。ホイ」トどつかりとすわる、兵部之輔手水鉢の水を杓にて汲取つて佐五平が方へ差出し。兵部「佐五平、水は方圓の器に隨ひ、人間又水の如く、清濁は心による、不義放埓の汚名をすゝぐ一心は、清き水の源」ト杓の水をあける。佐五「是は」兵部「太公望の水のたとへ」佐五「すりや言譯立たねば」兵部「元へ返らぬ水のたとへ」佐五「清くすすぐか」兵部「おもく濁るか」佐五「此身の災難」兵部「洗ひ清めて」佐五「おつ付け言わけ」兵部「先それ迄は」佐五「兵部之輔樣」兵部「佐五平、篤と思案のいたせ」ト唄になり兵部之輔奥へ入る、佐五平跡に殘り思入有り。佐五「兵部之輔樣の今のお詞といひ此謎、宮城野樣女房といひ、ハテ合點の行かぬ」ト向より。戸ヤ内より「お客樣の御入り」佐五「何にもせよ今一應、さうぢや」ト橋懸へ隱れる、ト正木典膳衣裝、鵜羽黑右衞門長社袴にて出る、典膳惣髮の侍にて、家來大勢付き出で來る、奥よりお節、跡より加藤、吉見、坪內、松田出迎ふ、鵜羽典膳二重舞臺へすわる、家來皆々橋懸へ入る、お節、松田、坪內、吉見、加藤平舞臺へすわる。お節「鵜羽黑右衞門樣、只今御下城」皆々「遊されましたか」鵜羽「いかにも只今下城仕り、直樣是へ參つたは、ちと兵部之輔殿に談ずる子細有つて、典膳殿を同道仕つた」お節「是は〳〵、ようこそお立寄下されました、今日は御下城の節御入下されまする筈にて、御馳走申せと兵部之輔申付け置きまし

印を結び。兵部「不所存者まて」佐五「ナニ不所存者とは」兵部「佐五平久しいなァ」ト此時兵部之輔を見て。佐五「ヤア兵部之輔様、私めを不所存者とはな」兵部「先達て奥州を出立の砌、宮城野が供をゆるし遣したが、途中より宮城野に後れ、なぜ今迄遅参致した」佐五「イヤ其儀は敵臺七が詮議に隙どり」兵部「コナ偽り者め」佐五「ナニ偽り者とは」兵部「おのれが事は好色亂酒ゆゑ、宮城野か供は叶はぬと、母磯崎が詞をなだめ、某が心を以て敵討の供をゆるしくれたぞよ、それに主に向つて不義放埒」佐五「エヽ」兵部「知るまいとおもふが、うぬ今日是へ参つたは戀の叶はぬを意趣におもひ、宮城野を討つ所存で有らうがな」佐五「是は又お情ない、あなた迄が下郎めを不所存者とは、下郎め不義致した覺は毛頭ござりませぬ」兵部「覺えないといふ證據が有るか」佐五「イヤサ證據もへちまも、佐五平が身にとりまして」兵部「覺えないとはいはさぬ、宮城野に不義仕かけ、現在の女房に迄見限られた慥な證據」佐五「ちやと申しまして」兵部「證據があるか」佐五「證據というては」兵部「不義ものか」佐五「サア」兵部「言譯あるか」佐五「サア」兩人「サアサアサア〳〵」兵部「コナ不忠不義の人非人めが」トきつといふ、佐五平返〳〵思入有つて。佐五「エヽみす〳〵しれた無實の難、コリヤ又あんまり胴慾でござりますわいのう」ト口をしいこなし、兵部、佐五平を首筋取つて切戸の外へ突出し。兵部「不義の言譯立たぬ中は屋敷に叶

りましたが、其家來がほんに有らう事か有るまい事か、主をとらへて。きつい不所存者でござりまするゆゑ、主從の緣を切る心で、勘當をいたして置きました故、たとへ今爰へ佐五平が參りましても、詞はかはしませぬ、のうお力」 お力「ハイ左樣でござりまする、私が爲に現在の夫なれ共、不所存者に添うてをりましては不忠者になります故、夫婦の緣はきりました、今爰へ佐五平が見えましても、ほんにもう顏を見れば見る程腹が立ちまする」 お節「ホウそんなら先達て噂しやつた佐五平。ハテ顏に似合はぬ不所存者ぢやのう」 佐五「エヽ成程先達て駿河をお立退なさるゝ時、お供に後れましたゆゑ、夫故左樣おつしやるが、それは只今申通り、普傳が詞にたぶらかされて上方へ參りました故」 お節「アヽ是そなお人、爰に居る者共は皆此方の召使、近付でもない人に、長々と聞くに及ばぬ、早う歸らしやれいのう」 佐五「イヤサ樣子を聞かねばいつかな此場は立ちませぬ」 お節「ハテ扨そなたには何にも聞く筋はない、コレ二人共奥へおじや」 三人「畏つてござりまする」 佐五「イヤ申しあなたには」 ト宮城野行かうとするを留る、佐五平をお力引退け。 お力「サアお出なされませ」 ト合方になり皆々奥へ入る、佐五平殘り。 佐五「何の事だ、皆寄つて不所存者だく\と、此佐五平不所存の覺えはないぞ、いつそ奥へ踏込んで」 ト行かうとする、どろ\/になり、此内兵部之輔虛無僧の形にて、宜しき所よりせり上にて出て

たう存じまする」ト佐五平向より出て。佐五「御免下されませう、私めは兵部之輔様にちと御意得まして」ト宮城野信夫を見て。「ヤア宮城野様しのぶ様、貴方方のお行方を」トお力を見て。「お力か、扨マア粟島の長屋を立退いた跡へ戻り、背傳様に様子を聞けば、敵臺七が跡をしたうて上方へと聞くと其儘、追つかけても逢はぬゆゑ、もしや京地へも入込むも計られずと、直に京地へ參り方々と尋ねてもかいくれしれず、詮方つきて元の駿河へ立歸れば、思ひもよらぬ楠原背傳、七草の餘類と有つてきびしい御刑罰、誰に尋ねう人もなく、察する所鎌倉へ御越なされましたと心付いたが神佛の引合、途中にて様子を聞けば、宇治兵部之輔様の御世話になつてござるとの事、それ故是へ參りましてござりまする、ヤレ〳〵お二人とも御息才で、お力も無事で重疊〳〵」トいふ、皆々物いはぬ故。「なんの事だ、何をいうてもお二人共けんによもない體、コリヤマアお力どういふ事だ、汝がよもや知らぬといふ事は有るまい」お力「イヤしらぬ」佐五「ヤ」お力「こな様誰ぢや」佐五「何ぬかす、男を見忘れて箆棒め」お力「イヽヤわしや男はないぞ」佐五「なんと」お力「こな様のやうな道しらず、人の皮きた畜生に近付はもたぬわいの」佐五「何の事だ、一つも合點が參りませぬ、宮城野様しのぶ様、やうすお聞かせなされて下さりませ」宮城「申し奥様、先達て國を出ます時、佐五平と申しまする丁度あの様な家來が付いて參

ませうかい」ト松田坪内を摑みひしぎに懸らうとする、兩人身を縮める、ト奥より兵部之輔女房お節ずつと出。お節「お力、必聊爾しやんな」宮城、信夫、お力「ヤアおせつ様」お節「夫兵部之輔殿、そなた衆三人を別業に匿まひ置くも、銘々深い望の有る故、其望に就いては武藝が肝心、よりより夫兵部之輔殿、別業の稽古場へお出なされ、御指南なされますれ共、心にたゆみが有つてはと此衆を頼み理不盡の深じやれも、心掛を探らう爲、皆太儀でござりました」松田「我々が無禮も手の内を見やうばかり」坪内「お節様のお差圖を受けましての儀でござる」吉見「最前よりのお働き」加藤「遖れの手の裡」皆々「おどろき入りましてござりまする」宮城「扨はさういふ事でござりましたか」信夫「さうともしらず詞をあらく」お力「きこつない慮外の段」宮城、信夫「皆様御了簡なされて」三人「下さりませ」お節「此上は又折々立合も頼まねばなりませぬ、マア門弟衆は奥へござつて休息なされませ」吉見、坪内「然らば左樣仕りませう、いづれも是に」ト四人奥へ入る。

お節「お力、けふは大事のお客様の御入、それ故三人共に呼寄せたは、お茶の給仕を頼まうため、ほんに太儀でござるのう」お力「是はマア御勿體ないお詞、何から何迄御恩の冥加、夫佐五平は不所存ゆゑ夫婦の緣を切つて、二人前の忠義を盡しませうと存じましても、高が女の事、兵部之輔様御夫婦のお心ざし、必ずお忘れなされますなえ」宮城「段々のお志」宮城、信夫「エヽ有りが

たら」一松田「それ〳〵氣も魂も皆此太股の内へ」一ト又宮城野の股へ手をやる、叩きのける。

坪内「我等は又後から」一ト信夫が腰へ取付くを取つて投げる。加藤、吉見「ハテ扨今のにこりもせず」

松田、坪内「ツイちよつとなりと」一ト又取付くを兩方立廻り有つて振拂ふ、又かゝる、此時橋懸よりお力出て來て此體を見て、つか〳〵と走り入り兩人を取て投げる。宮城、信夫「ヤアお力おじやつたか」一お力「お二人共にコリヤ何事でござりまする」、宮城「さればいのう、奥樣のお召に隨ひ、此屋敷へ來ると其儘、此二人の衆がじやら〳〵とてんがう斗り」信夫「女子の肌へ手を入れたり、猥の有條」宮城「あんまり不行儀な仕方とおもうて」一信夫「ふたり共に拂ひのけても」宮城「しつかうわるじやれ」一兩人「さつしやるわいのう」一お力「ようござりまする、わたしが參りましたれば、もうお前さん方には構はせませぬ、わたしが相手になつて、此お二人に存分嬲られませう、サアお二人共、私をなぶらつしやれ、サアてんがうさつしやれぬか、但し私の方から手を出してなぶられませうか」一ト兩人が傍へ行かうとする、加藤、吉見留めて。吉見「アヽ是こなたの大力でなぶられたら」加藤「二人の命はござらぬわいの」一兩人「マア〳〵御了簡〳〵」一お力「イエ〳〵わたしが傍にゐぬと思うて狼藉なされて、心の中とつくりと聞きぬかにやわたしが心が濟みませぬ、お二人共御挨拶は御無用でござりまする」一ト加藤、吉見をとつて突飛し。「サアなぶられ

は御大身のお客のお出故、此お屋敷へ參つてお取持せよと、奥樣の仰せ下されましたゆゑ參りました私共へ、不行儀千萬なお侍樣、始て參りましたものどもへ、じやら〳〵とてんがうばかり、如何にわたしらぢやというて、其樣に蔑視んでてんがうなされまするがよいか、是がようござりますかいなァ」トうでを又ねぢ上げる。松田「アヽ是々腕がしんこになるわいの〳〵」

信夫「姉樣のいはしやんす通り、何ぢややら無法無體に女子を捉へてんがうさしやんす惡戯なお方々、重ての爲にとつくりと覺えさせて置きますのでござりますわいなァ」ト又ぐつと〆上げる。坪内「アヽ是々死ます〳〵、モウ一生てんがうは言ますまい程に、ゆるめて下され〳〵」

松田「これからなぶれといはつしやつても、ふたゝび目と目を見合しも致すまい程に、どうぞ助けて下され」坪内「コレサ御兩所よいやうに」坪内、松田「御挨拶〳〵」加藤「アレ兩人共によく〳〵術ないと相見え、武士の見苦しい平詫」吉見「マア〳〵放してやりやれさ」、宮城「姫御前のあら〳〵しい、此樣な事致しまするもお恥しうござりますけれど、あんまりな惡戯故」信夫「一度は見せ付ける所なれど、お前樣方の御挨拶にめんじまして」宮城野「ゆるして上げます程に重ねてきつと」宮城、信夫「窘ましやんせ」ト兩人を慘う突放す。松田「アイタヽヽ、ても扨も顏に似合はぬ手酷い手の内」坪内「雪の樣な細い手が、こつ佛へ喰入るやうに有つた、アノ手で腰を〆付けて貰う

を尋ねる心にて、花道へ行く荷物の跡をつけて行く、長持東西へ入る、臺七西の通ひ道へ行く、半兵衛花道両方一ときに半まで行く、始終本釣鐘、方々にて鷄笛をふき明方の體、黒蓋そろ〳〵とあげかける、ト霞一面におりて夜のあけはなれし體、この時東西にて顔見合せきつとこなし、臺七は通ひ路をつつと走り入る、半兵衛西の方へ目をつけて行く心にて向へ入るよろしく。

幕

大切

造り物三間の間、二重舞臺、向ふ金襖奥塀口折廻障子家體、橋懸り後屋敷塀、内庭の見得、植込宜しく東西に柴垣、切戸口よき所に有り、幕の内より宮城野松田彌太七が手を振上げてゐる、信夫坪内多傳を襟じめにしてゐる、加藤七右衛門、吉見勝右衛門傍より挨拶してゐる、此見得にて琴唄にて幕明くる。

加藤「是さふたりとも、もう了簡して遣はされいさ」吉見「これ〳〵兩人共に、もう是に懲りて戯弄仕召れぬがよいぞや」松田「いかにも〳〵、是にこりぬ者がござらうか」坪内「ふたり共に御免なされ〳〵」宮城「私も妹も兵部之輔樣の別業へ參りましてお世話になつてをりまする、今日

ト斬つてかゝる、七郎兵衛起つて磯崎へかゝる、軍吾半兵衛が龕燈を落とし、立廻の中、磯崎七郎兵衛をぽんと斬り、其身もがつくりとなつて死ぬる。半兵衛「南無阿彌陀佛」ト立廻つて軍吾を斬倒しこなしあり、ト奥塀口より旅人空尻に乘り、馬士ハイ／＼と口綱を取つて通りかゝる、半兵衛ツカ／＼と行て馬士を引退け、馬の口をとり、提燈にて乘人の顏を改め、しか／＼有つて突はなす、馬を牽いて花道へ迯げて入る、ト橋懸より問屋駕籠一挺、原問屋と書きたる挑灯をつり出て來る、半兵衛引戻し、駕籠の垂をあげ、乘人を引出して頬被をとり顏を改める、其まゝ突放す、ト轎夫半分乘せたなりにて、駕籠を引きずり奥塀口へにげて入る、ト向より三度飛脚挑灯を持ち出て來る、半兵衛提灯を引つたくり笠をかなぐり、胸倉を持つて顏を見る、直に突放す、ト飛脚うろたへ奥塀口へ迯げて入る、半兵衛右の提灯にて方々を窺ひ、稻村に目をつけ立寄らんとする、此時軍吾起上り、提灯を叩き落とす、舞臺中まつ暗になる、半兵衛刀を納める、ト本釣鐘にて曉を撞出す、稻村を引きわけて臺七ぬつと出て窺ひ、拔身をふりまはす、半兵衛立ちふさがる、双方控へてきつと身構へ、ト向戸屋の内にて大勢馬士唄をうたふ、奥塀口より雲介大勢むしろ包みの長持三棹かき、馬士唄うたひ出る、向よりも雲助長持を二棹舁き出て本舞臺へ來る、臺七この中へまぎれ込み上の方へ行く、半兵衛この人數をよけながら曲者

ト半兵衛心得ぬこなし、龕燈をさし付け見て。半兵衛「さいふこなたは磯崎樣ではござりませぬか」磯崎「ヤなんと」ト半兵衛あかしにてわが顏を見せ。半兵衛「谷五郎でござる、氣を慥にお持ちなされい」磯崎「まことに谷五郎樣」トがつくりとなる、氣つけなど呑ませいろ〳〵介抱する事あつて。半兵衛「存じよらざる對面といひ、數ケ所の手疵、何者の爲業でござる、苦しくとも相手をおつしやれ、刃傷の相手は何者でござるな」磯崎「エヽ口惜しい、敵臺七にめぐりあひ、夫の敵と心ばかりははやれ共、初の手疵におくれをとり、口惜や臺七を取迯したわいのう」半兵衛「スリヤ臺七は此所へ、うぬいづくに」ト尋ねうとして又磯崎を介抱して。「敵討致す迄は大切の一命、心を慥に磯崎樣」磯崎「イヤ〳〵迚もこの深手では助かる事はなりますまい、敵を討つて家を治め、娘が身の上、必ずともに賴みましたぞや」半兵衛「お氣遣ひなさるな、たとへ臺七此所を迯がすとも、天地の間は草をうがつて尋ね出し、鎭守府の印を奪返し、宮城野へ力となつて臺七が首を提げ、甚内殿、こなた樣の泉下のまよひはらさせませう」磯崎「臺七が落ちつく先は鎌倉屋敷」半兵衛「ムヽもしや宇治兵部之輔へ」磯崎「サア其兵部之輔も心しれねば」半兵衛「彼地へ立越え忍び〳〵に篤と實否を」磯崎「吉左右を草葉の蔭から」半兵衛「敵の行先が、お聞屆なされしは今はの餞別、迷ひを晴して成佛なされい」ト此内軍吾うかゞひ出て居て。軍吾「うぬ谷五郎」

なもがくな、とても身共に抵抗はかなはぬ、存分ほざいて潔よくくたばり居らう」 磯崎「エヽ夫といひ我々まで、そちが手にかゝるといふは、弓矢神摩利支天にも見放されたか、エヽ口惜いわいやい、たとへ此身は返討に逢ふとても、せめての頼みは宇治兵部之輔殿、子供が力となつて敵を討たして下さる樣、頼んで死にたい、子供にま一度逢ひたいわいのゥ」 臺七「アヽハヽヽヽハテ愚な奴だな、ヤイうぬが其頼みに思ふ兵部之輔は身共が腹心、其譯は先達て讓り置いたる印可を以て、當時鎌倉にて楠流を相立て、名を弘める兵部之輔、是皆身共が蔭といふもの、なりや大恩ある身共、何故に助太刀致さう馬鹿な事を、是より鎌倉へ立越え、兵部之介を味方に付けるこの臺七、杉本所縁の青蠅めら、たとへ何者が助太刀いたいても叶はぬ事だ、及ばぬ事だ、うぬ息の通ふ中に一太刀なりと切付けぬか、相手にならぬか、臺七がこはいか、恐ろしいか、フヽハヽヽヽ、何として〱其腰拔女郎のいかぬ事だぞ」 トいろ〱惡口する。 磯崎「エヽ言はう樣ない極重惡人、夫の敵おのれ臺七」 ト斬付けんともがく、臺七そろ〱側へいて。臺七「由緣の奴等もあとから遣はす、死出の峠で待つて居らう」 トつき立てし刀を、磯崎よるを蹴するてとゞめをさゝんとする、向より人が來る故、稻村へかくれる、ト向より半兵衛走り出で磯崎に行きあたる、磯崎起きかへッて刀を杖につききつとなる。 磯崎「卑怯者そこ動くな」

龕燈をさし付ける、兩人顏をそむけて行くを引もどし、きつと見て。半兵衛「うぬ兩人は」軍、新「谷五郎か」ト兩方より斬つてかゝる、半兵衛片手に龕燈をもちながら拔合せ切結ぶ、はげしき立あつて、トド新八を見事に斬る、軍吾向へ迯げるを半兵衛追つかけ入る、ト橋懸より磯崎七郎兵衛切りむすび出て立廻りあり、七郎兵衛に拔身をさしつけ、稻村の際まで行く、七郎兵衛かはして切りこむを、入りかはつて見事に七郎兵衛を斬り、きつと見え、此時稻村より拔身の手を出して磯崎を斬付ける、ウンとのり、其まゝ起きかへつて刀を杖にきつと見得。磯崎「何者なれば卑怯の仕業、なぜ名乘りかけて勝負せぬ、卑法な奴の」ト此時稻村の後より浪人の形、拔身を提げて出て。臺七「望に任せ尋常の勝負いたしてくれう」ト向へ出る、凄き合方、磯崎この聲に氣を付け。磯崎「さういふは慥に」臺七「この日比尋ねさまよふ志賀臺七だ、磯崎無事に居つたな」磯崎「扨こそ臺七、だまし討とは卑怯な奴の」ト立たうとして苦しきこなし。臺七「よい推量だ、女郎ながら杉本の一流を存じをれば、迂濶にはかゝられぬ、ぢやによつてだまし討つた、うぬは元より、宮城野の兄弟奴夫婦、こと〴〵くぶつぱなし、臺七が病の根を切つて仕舞うのだ、ぬかしたい事あらば存分にほざけ、武士の情に聞いてくれう」磯崎「エヽ其高言を」トよろぼひ斬つて行くをくゞり、又一刀拔身を膝へつつ立つ磯崎くるしむ。臺七「コリヤもがく

けた、臺七が有所つゝまず言へ、どうぢや」曾平「ム、臺七の有所をいへとは、さては杉本にみよりの者ぢやな」半兵衛「いかにも改名致した金江半兵衛、谷五郎が聲を聞忘れたか、コナ狼狽者めが」曾平「コリャたまらぬ」ト振きり迯出す、引つかつぎ見事に投げる、起上つて斬付くるを立まはつて、踏みつけ。半兵衛「サア眞直に白狀いたせ、ぬかさぬと立所に命がないぞよ」曾平「アアこれ言ひまする〳〵、ちつと緩めて下さりませ」半兵衛「サアぬかしをらう」曾平「臺七様は夜通しに鎌倉へ忍びの道中、我々も一緒に彼地へ參るのでござるわい」半兵衛「ハテ心得ぬ、兼て臺七白晝を恐れ、道中筋も夜の中ならんと、此辻堂にひそみ窺ひ居れど、今に於て參らぬはハテ心得ぬ」曾平「有樣に申した上は命ばかりはどうぞ助けて下さりませ」半兵衛「イヽヤ師恩を忘れし人非人、臺七にかたんの者、一人も生けては置かぬ」曾平「さう吐かしやいつそ」ト斬つてかゝる、拔身を落し、其まゝしめ殺し、死骸を蹴やり。半兵衛「間道もなき一筋往來」ト思入あつて竹袋より一腰をほつ込み、龕燈をとつて向を見て火影をかくし、大石に腰をかけてきつと見え、ト此時向より軍吾、新八、旅裝束にて連立出て。曾「新八殿、もう七時であらうか、臺七殿に逢ひさうなものでござるが」新八「さればでござる、ただし道が違うて行き過ぎはさつしやれぬか」軍吾「先づ沼津迄參らう、サアござれ〳〵」トいひ〳〵兩人共本舞臺へ來る、半兵衛のつと出て

つと立ち。七郎「よい推量、さすがの磯崎よう悟つた、去年高館の屋敷へ騙にいた時、聞き込んだ信夫が身の上、是幸に伯父ぢやと僞り、うぬをたらして宮城野が在所をほざかせ、臺七殿へ內通せん爲、又最前吉原の宿にて、臺七殿よりぶち殺して了へとの事、殊に臺七殿の道中筋、大事を聞いたからはモウ生けちやおかれぬ、皆の者、何もかもぐれてしまうた、起きい〱」皆々「合點ぢや」ト皆々起きる、磯崎薦包の刀を出して。磯崎「寄つたら一々斬捨ぢやぞ」七郎「さういふうぬから」ト金剛杖にて打つてかゝる、煎兵衛皆々もたゝきかゝる、磯崎拔合せいろいろあり、トゞ皆々にげるを橋懸へ追うて入る、葭簀の圍ひ板松とも東へ引く、西の方より辻堂稻村出る、月かくれる窓の黑蓋をおろしくらがりの體、道具納まる、橋懸より高倉曾平はしり出で。曾平「ヤレ〱走つた〱、先づ一息入れてから參らう」ト辻堂の前なる石に腰かけ、火打を出して煙草を吸付け。「臺七殿に此辻堂で出逢ふ筈ぢやが、いまだお越なされぬ體夜の明けぬ中にお目にかゝりたいものぢやが、何をいうても月は入る道は分らず、というて斯うしても居られまい、行き次第に尋ねて見よう」ト煙管をしまひ立上る、ト此時辻堂の內より金江半兵衛、旅虛無僧の拵へにてぬつと出る、淒き合方になり、所々にて蛙啼く、半兵衛引戻し、ぐつと引付ける、曾平あせり。曾平「コリヤ何者ぢや、放せ〱」半兵衛「志賀臺七一味の樣子聞屆

春、此磯崎は夫預りの御寶紛失せし故國に殘され、其後伯父大學殿のはからひにて家國は沒收、文の便も、樣子を聞けば慥か娘は」　トいはふとする、此時向より高倉曾平、胸あて股引、旅のこしらへ、大小笠をもち走り出で、七郎兵衞を見て。曾平「ヤアお身は七郎兵衞でないか」ト寄らうとする、七郎兵衞磯崎を教へ、何もいふなとしかたにてあせる、磯崎これに氣をつけこなしある、曾平まじめになつて。「イヤサ七郎兵衞、先刻人を以て申渡した通り、杉本身寄の者と見るならば、討つて捨るが肝心だ、合點ナ、扨臺七樣は夜通しに鎌倉宇治兵部之輔殿方へ落付く筈、其方お目には掛らなんだか」ト七郎兵衞術なきこなし。七郎「サア〳〵えいわいえいわい」ト小聲にてあせる。曾平「然らば承知な、身共は臺七殿へ追付き申し、必ずぬからぬ樣にしやれ、さらば」　ト上の方へ走り入る、磯崎始終にこなし有り、七郎兵衞呆けし體にて。

七郎「ハヽヽヽいかい阿房もあればある者ぢやナア、現在敵と付覘ふ奧樣やこの七郎兵衞とも知らず、うか〳〵と臺七が忍びの道中ぬかしたは敵の天命、臺七が此海道を行たらこそ幸ひ、宮城野樣に知らせ申したい、サヽヽヽお在所はどうでござりますな」磯崎「イヽヤ娘が在所を尋ねうより、其方の心底ありやうに白狀せい」七郎「なんと」磯崎「信夫が伯父と僞りて、宮城野が在所を聞出し、敵臺七へ內通するのであらうがな」　トきつといふ、七郎兵衞思入、ず

七郎「あまり無體を申しまする故、見かねて御挨拶、お禮に及びませぬ」磯崎「イヤ〳〵そもじの蔭で難儀を遁れました、心もせけばさらばでござる」ト行かうとする。七郎「イヤ〳〵暫く、ちと貴女にお尋ね申したい事がござりまする」磯崎「アノわしに」七郎「ハイ」ト合方になり、七郎兵衛邊りを見て手をつかへ。「卒爾ながらあなたは奥州高館の御家中、杉本甚内樣の奥樣ではござりませぬか」ト磯崎こなしあつて。磯崎「イヽヤそんな者ではござらぬわいの」七郎「いか樣、御大望ある貴女なれば、おつゝみなさるゝも御尤、何をかくしませう、私は御連合甚内樣のお情を身にやどし、信夫といふ娘迄生みました小夜衣が兄弟、信夫が爲には伯父七郎兵衛と申す者でござりまする、甚内樣には不慮の御最後、御娘御宮城野樣には敵討のお願叶ひ、御出國なされたとの事、どうぞ姉御樣にめぐり合ひ、妹信夫もとも〳〵に敵討におつれ下されいとお願ひ申したい、何卒宮城野樣の御在所、お聞かせなされて下されうならば、有り難う存じまする」ト憂ひまじりにていふ。磯崎「扨は信夫が伯父であつたか、縁あればこそ深切によう言うて下さつたのう、不思議にめぐり逢うたも、親は泣より、七郎兵衛どの」七郎「奥樣」磯崎「思へば悲しい」兩人「世の成行ぢやナア」ト大泣。七郎「イヤ〳〵泣いて居る所でない、一時も早う宮城野樣のお目にかゝりたい、御在所をお聞かせ下さりませ」磯崎「されば娘が國を出やつたは去年の

脛にかけたのぢや」 與三「貴様が杖を穢がした故、大山をふむ事がならぬわいの」 野助「晝より明い此月夜、わざと踏んで通つたのか、女中どうでごんす」 磯崎「これはきつい麁相しました、幾重にも許し下され」 頓兵「イヤ許すまい、腹の癒る程叩きのめし、穢れた杖を清めるのぢや」 皆々「此杖を喰へやい」 ト銘々ふり上げる、磯崎身がまへして。磯崎「寄つたらそち達の爲にならぬぞ」 皆々「其頬げたを」 ト皆々かゝらうとする時、七郎兵衛ずつと出て二三人を見事に投げて、磯崎をかこうてこなしあり。 頓兵「先達何でおいらを」 皆々「投げたのぢや」 七郎「何でとはうぬら悪いぞよく／＼、最前からの樣子を殘らず聞いて居たが、大切な金剛杖を蹴つて通つたは女中がわるいなれど、了簡せいと謝つてござるでないか、それに汝ら聞わけず、女中一人を大勢して、こりやどうせうと思ふや」 頓兵「どうのかうのはない、ぶち殺して腹いるのぢや」 皆々「さうぢやさうぢや」 七郎「イヤさうはなるまい」 皆々「なぜなるまい」 七郎「サイヤイ其悪根性を矯直さう爲の大山登り、悪いと知つて先達が許して措かうかい」 頓兵「エヽ面倒な、先達ぐるめにぶちのめせ」
皆々「合點ぢや」 ト皆々七郎兵衛へかゝる、いろ／＼有つて七郎兵衛皆々を杖にてのめらす。
七郎「悪と知つて悪を企むは重罪五逆、未來を知らぬやつらぢやナア、無法なやつ等に出逢なされ、嘸お困りなされたでござりませうなア」 磯崎「危い所へそもじの挨拶、嬉しうござるぞや」

や」野助「おりやもう在所の松が見えるに依てか、一倍がつくりと草臥たわいI」與三「何でもいんだら、何奴なと蹴仆して精進上げにやならぬ」頓兵「イヤ下戸ばかりぢやない、上戸の精進もあげにやならぬ」櫃九「上戸でも下戸でも、喰物は肉の事ぢや、佛といふやつらは悪い奴等ぢやないか」頓兵「時に先達、さつきに原の宿で侍が何やら貴様に囁いて居たが、ありや何で有つたぞいの」七郎「イヤばつといはるゝ事ぢやない、咄すには折があらうぞい、何は格別、アノ茶屋へいてゆつくりと休まうかい」皆々「そんなら先達」七郎「新客達、わせい」ト皆々捨白いうて葭簀の内へ連れだち入る、ト誂への獨吟になり、向より磯崎方々破れたる形、刀を藁苞にして、わいがけ旅疲の體にて出で、花道に立どまり。磯崎「ア、憂世ぢやナア、花のあしたに國を立ち、いつしか爰は駿河路の、行先とても定めない憂き身のはて、思へば儚ない身の上ぢやナア」ト泣くこなしあつて。「ほんにわしとした事が、氣聊誰も聞いて居ねばこそ、月は朧にくらけれど爰は往還、ハテ退屈な道ではあるぞ」ト又獨吟になり、本舞臺へ來る、此内頓兵衛皆々出かけ囁き合ふ事ありて、杖を横に置いて窺ふ、磯崎つまづく、皆々上下へ別れ立出で。頓皆々「女中待んせ」磯崎「此方の事かな」頓皆々「オヽ貴様の事ぢや」磯崎「つひに見なれぬ衆、此方に用とは」頓兵「大それた用がある、別火物忌垢離をとり、大山へ登るこちら」櫃九「其大事の金剛杖、何で

立て、同じくしるせし木綿幟を立て、七郎兵衛先達の拵へ、輪袈裟をかけ金剛杖をつき出る、新客頓兵衛、權九郎、野介、與六、此内二人は螺を吹き、二人は鈴をならし、此外大勢いづれも新客の拵へ、白木綿袷袢天、同じく手おひ脚絆鉢巻、各々金剛杖をつき、右の文をとなへ、口々にとなへ／＼出る。土作「ヤレ／＼待ちかねた、先達の七郎兵衛殿、皆も下向さつしやれたか」七郎「オ、庄屋どの初め在所の衆、よう迎ひに出やしやつたのう」トいひ／＼皆々本舞臺へくる。土作「七郎兵衛殿、新客に別條もござらなんだかの」七郎「イヤもうお山へ登ると違うて、麓だけで輕い事のう」土作皆々「それは皆々悦びます」土作「さて辨當も持つて來ましたぞや」七郎「マア何でも一休みせうかいの」頓兵衛「よからう」ト皆々床几にかける。七郎「時に何ぢやわい、跡の宿でしたゝか餅をしてやつたれば、腹には何にも置き所がない、先へ持つていんで下され」土作「さうして皆はどうするぞいの」七郎「イヤまだ月の入る迄はお禮の文を唱へにやならぬて」土作「そんなら先へいにませうかい」七郎「皆の衆、御苦勞でござんしたのう」土作「隨分早う戻らつしやれ、サア皆もござれ／＼」ト百姓皆々つれ、土作橋懸へ入る、頓兵衛皆々見送り、捨臺詞しか／＼ありて。七郎「さて頓兵衛、權九、與三、野助もよつぽどいきついた顏付ぢやの」頓兵「イヤ何ぢやしらぬが、足はしつかい擂粉木ぢや」權九「全體けふの十八里がはり過ぎた道ぢ

五幕目

造り物、野原水茶屋、軒に大山不動萬人講と書いたる提燈を釣り、すべて休所の體、破風月を出し夜の景色、幕の內より土作庄屋の形、其外百姓大勢、重箱の包みを持ち、大山參り迎ひの體にて、銘々床几に腰かけ居る、茶店の女、茶を運びゐる、在鄉唄にて幕開く。

土作「何と皆の衆、今年は珍らしい事ではないか、いつも夏山でなければ登られぬ大山の不動樣が、麓での出開帳、そこでこちらの一村が、やつぱり登山する樣に垢離を取り、別火を喰うての大山參り、けふが丁度下向の日取ゆゑ、日の中から迎ひに來て居るが、さて皆遲い事ぢやわいの、おれが案じは、折角持つて來た握飯が、餅にならうかと氣にかゝつてならぬてや」百姓「イヤ申し、もちに成つたら、豆の粉でまぶして喰ひまする」土作「こいつは尤ぢやわい」皆々「ハヽヽヽ」土作「時に女中樣、モウ何時ぢやの」茶屋女「アイ初夜うつてからよつ程間がござります」土作「てつきり四過だと見えるわいの、これは又待たす事ぢやの」皆々「おそい事でござりまする」ト向ふ戶屋の內にて。七郎兵衛「大山大ぜう不動明王、ひだり金剛、右制多伽」皆々「南無不動明王」土作皆々「サア〳〵戾つてくるぞ〳〵」ト向より大山不動萬人講と書いたる高提燈を先に

印を結ぶ、臺七向へ走り入る、綱平は十手、勇八は鑓にて唐意軒が術になやまされ、トヾ綱平ウントこける、勇八たぢ／＼と跡すさりして鑓を構へる、トばた／＼にて甲斐之介軍立の形、藏人衣裝裃にて、兩人鑓を提さげ橋懸よりつか／＼と走り出る、跡より雛形姫、彌生、青柳、糸遊、若草、三笠其他子供殘らず、皆々右踊の著附に一本ざし、紅の鉢巻襷、銘々弓張を持ち出る、跡よりつゞいて藤太、新吾、土手藏、右内、砂平、松助此人數、皆々松明を持ち出で舞臺一面にぐるりと、綱平も起上つて取捲く。甲斐「森唐意軒」甲斐、藏人「覺悟せい」ト兩人東西より鑓を突出す、唐意軒鑓の鹽首を兩手に取つて。唐意軒「うぬら如きのへろ／＼鑓、我腹には立たぬ、さりながら天の命數極つた某、我手で死れぬ邪法の掟、汝等に手柄を施しくれう」ト持つたる鑓をかばと我兩脇腹へ突立てる。勇八「とゞめは身共が」ト突懸くる、唐意軒又鹽首取つて。唐意軒「アヲイキツウシゴシヤウデン」ト鑓を持ちそへ我咽へ突立てる、トどろ／＼にて甲斐之介、藏人、勇八三方より挾る、唐意軒すつくと立ちながら、物凄き見え、三方より鑓を引拔く、唐意軒こなし有つてばつたりとこける、藏人こなし有つて。藏人「勝鬨」ト内にてエイ／＼オウと遠攻打上げる、何れも見得よく。

幕

悴が身の上氣遣なく、それより西國へ立越え、七草四郎を守立て、邪宗門の一揆を起し、粟島甲斐之介に攻破られ、是迚も空しく無念の敗軍、我忍術を以て楠原普傳と成り、粟島家に入込みしも、再び仇をむくはんため、臺七其方は我悴、二十五年の星霜つもつて思はず對面、ハテ逞ましう生立つたよなア」臺七「ハテおもひも寄らぬお物語、いかにも武隈の神前にて拾ひ子の樣子は承り及べ共、こなたを實の親人とは、今の今迄存ぜぬ不孝、眞平御免下されい」ト唐意軒邪法の鏡を出し。唐意軒「臺七、此邪法の鏡を以て此場を立退き、身を全うせよ、此佛の鏡を所持すれば、其身に凶事はない、大切にいたせ」ト臺七にわたす。臺七「エヽ忝ない、拙者も先達て奪ひ取りたる鎭守府の印」ト出し。「東八ヶ國の軍勢催促の此印といひ、邪法の鏡、二種を所持すれば臺七が身は大丈夫、併し此場のやうす、かゝる騷動を見捨ては」唐意軒「ヤアおろか〳〵、譬幾萬人にて取圍むとも、物の數とも思はね共、今月今宵につゞまる我命數と、天帝よりのしらせ、さるによつて死後聖天に趣く門出、はな〴〵しき最期をとげん、㚑構はずと早く立退け」臺七「ぢやと申して」唐意軒「未練な奴の」ト叱り付ける、臺七きつとなつて。臺七「オオさうぢや、危きに近よらぬ大事の身體」唐意軒「一時も早く」臺七「然らば親人」唐意軒「さらば」臺七「ハア」ト臺七行かうとするを、勇八綱平東西よりつか〳〵と出て、臺七にかゝる、唐意軒

攻静に合方入の樂にて、此體よき所迄突出す、唐意軒宜しくこなし有つて。

唐意軒「誠にけふは如月二十八日、七草四郎太夫秦の義久の忌日、追付け修羅の妄執をはらさせませう、シヤウデンハライソウ〱」ト合掌する、ト少しどろ〱にて空より白星一つ落ちてハツト煙硝もえる、是にて唐意軒右星の落ちたる所をきつと見て、又空をきつと眺め。「ハテ怪しや、今迄空に赫々たる我白星、光を失ひ地に隕ちしは」トこなし有つて。「扨は我命數今月今夜に終るといふ天帝の知らせなるか、ハヽヽヽヽホイ」ト宜しくこなし有つて、ト又印を結ぶ、トどろ〱にて唐意軒が目前へ臺七せり上にてぬつと出で不思議の體にて。臺七「ハテ合點の行かぬ、今迄街道筋に居た臺七、見れば正しく粟島の城中、爰へはどうして」唐意軒「オヽ夫こそ身が妖術のなすわざ」臺七「ヤなんと」トふり返り唐意軒を見て。「そちは何者」唐意軒「オヽ今迄四十有餘の楠原晋傳と見せしは、我尊む邪法の奇端、誠は行年積つて九十七歲、七草が老臣森唐意軒、今は何をか包まん、臺七、誠其方は我が悴だわやい」臺七「ヤア何がなんと」唐意軒「オヽ不審は尤、元某は足利尊氏が爲に滅亡、主君は御最期、それより森唐意軒と名を改め、先年奥州に下り世を忍ぶ中、老年に至つて一子を設け、大望有る身の足手纏ひ、と則ち武隈明神の神前に白き絹に包み捨置きしに、汝志賀團右衞門にひろはれ、志賀の名跡と聞くより先は安堵、

ツ畏つてござりまする」トばた〳〵にて橋懸へ入る。藏人「綱平、其方は大手搦手、門を打ちきつと警護を申付けい」綱平「畏つてござりまする」ト橋懸へ走り入る。土手藏「拙者は是より築山のくま〴〵」砂平「お花畠泉水の水筋」右内「又は樹木の繁み〳〵」松助「殘る方なくせんぎませう」甲斐「オヽ手分を致し狩出せ」四人「ハアヽ」藏人「藤太新吾は萬事の驅引」藤太、新吾「ハッ」甲斐、藏人「急げ〳〵」皆々「ハアヽ」トばた〳〵にて橋懸へ走り入る。藏人「幻術を行ふ唐意軒、いかなる不意をうたんも計られず、殿には先一間へお入遊され、物の具御用意有つて然るべう存じまする」甲斐「なる程、藏人が申す條尤〳〵、然らば奧にて」藏人「はやく御用意」甲斐「藏人來やれ」ト打上げ綱平立の跡打上げ。藏人「まづ」ト又遠攻はげしく、甲斐之介藏人奧へ入る、トばた〳〵にて立の人數四人、異形なる袢天甲手脚當にて唐めいた劍を持ち走り出る、跡より勇八りゝしき形にて鑓を持ち追驅出て、立さま〴〵有りてトヾ勇八皆々を追かけ入る、トチヨン〳〵淺黄幕切落す。

造り物、向ふ一面は網代垣、奧深う取つて眞中に二間の數寄家建の體、杉の丸柱、家根大和ぶき、三方緣付、右網代垣の前一面の山吹見事に咲き有り、右數寄家に普傳の唐意軒白髮の亂髮、白き著付、白き長袴白き居士衣羽織にて、卓に白骨を乘せ、香爐を置き、名香をくゆらせゐる體、此見得にて遠

入込み仇をむくはん汝が計略」藏人「サアかく見顯はす上は、最早のがれぬ森唐意軒」甲斐「すみやかに鏡を渡すか」藏人「踏付け繩ぶたうか」甲斐「神國正道なる我々に向ひ」藏人「邪法外道が及ぶべきか」甲斐「但し甲斐之介が一刀に命を取らうか」藏人、甲斐「サア」皆々「サア〳〵〳〵」藏人「邪法外道の人畜め」ト藏人背傳を二重舞臺より踏落し、皆々十手にて打すゑる、背傳印をむすぶ、トどろ〳〵にて皆々跡へたぢ〳〵とよる、背傳せり下げにて消える、皆々恂り。奴四人「ヤア唐意軒が形」勇八「我々が眼をくらまし」綱平「其儘に消失せしは」蒲原「いよ〳〵邪法を行ふ曲者」藤太「此上は如何して搦捕りませう」新吾「殿樣藏人どの」奴四人「御思案が」皆々「ござりまするかな」甲斐「オヽ氣遣ひ致すな、先達て七草追討の砌、禁庭より賜はつたる帝の御宸翰を、松江藏人に相渡し、まつた某が寢所には追討の節下し置かれし四神の御籏を守たてまつれば、邪法の障礙より付く事いつかな能はず」藏人「則ち御宸翰は肌身を放さず守護仕る」ト錦の袋に入れたる宸筆を出す。甲斐「四神の御籏は是に有る」ト家臺のなげしより箱を取出す。藏人「蒲原右内は此場の仔細、早打にて禁庭へ奏問仕り、七草が殘黨森唐意軒を打亡し、粟島甲斐之介追付け參内仕りまするど天奏へ申上げよ」右内「畏つてござりまする」トばた〳〵にて向へ走り入る。藏人「熊本勇八、汝は家中の中唐意軒に荷擔の者共を見付け次第に討つてすてよ」勇八「ハ

て能く知つた、相役の某にさたもなく、猥に家を預らんとは汝が反逆」普傳「イヽヤ數代軍功の家筋、殿は御病氣、御一子とてもなければ若も殿御逝去有つてはお家は斷絕、それ故某が暫く御家督相續するは、コリヤお家をおもふ臣下の役サ」藏人「其家をおもふ汝が、我家來を九州より乘込んだ船頭と僞りしを誠と心得、賄賂の金子を遣はし、藏人を罪に取つておとせよとなぜ賴んだ」勇八「藏人樣の家來共しらず、賴んだ普傳、こいつ正しく七草か殘黨と、態と一味となつて工の底をくゞつた、なんと肝が轉ぐりがへらうがな」普傳「イヤそれこそ相役の藏人、町人百姓をとり込み、殿の軍用金を貪りしは、正しく逆心、其實否を糺さん爲、汝が家來と存じながら、褒美をくれたはコリヤ某が苦肉の計略」藏人「イヽヤ遁れぬ證據は大瀧法印參れ」ト遠責打上げ跡打ながし。皆々「ハア、」ト皆々奥より出る。修驗者「殿を呪咀する賴人は楠原普傳」楠原「其科を藏人樣におほせんと汝が企」修驗「殿の用金を掠めしも」新吾「町人百姓と馴合しも」綱平、勇八「皆藏人樣の」皆々「計略ぢやわやい」勇八「殿の御病氣平癒の祈りに呼寄せし大瀧法印に、殿を調伏させんと賴みし汝、主を呪咀する反逆大罪、殊に邪法の鏡をかくし置き、最前某水責の苦痛に氣絕せし體に見せしを、誠と心得、汝が手に有る邪法の鏡をかくし置きしなどと僞り、此藏人を七草が餘類なりと、自滅させせん汝が工」甲斐「幻術を以て楠原普傳と形をかへ、當城へ

意軒とは何のたは事」藏人「イヽヤ粟島の家臣楠原普傳と、面體格好よく似たる紛れ者、察する所七草が殘黨森唐意軒で有らうがな」普傳「フヽヽハヽヽヽ不便やわりや眼がしひたか、森唐意軒は九十餘歲、此普傳とは雲泥の相違、何をとらへて唐意軒などとは、イヤ馬鹿〳〵しい呆氣者」トきつといふ一間の內より。甲斐之介「イヽヤ其證據は粟島甲斐之介、それへいて對面せう」ト障子家體引ぬきにて甲斐之介衣裝長社袴靑月代立派に立つてゐる、普傳見て恟り。普傳「ムウすりや病氣とは僞で有つたよな」甲斐「オヽ某七草四郎を攻亡し、かれが尊む天帝の繪像、まつた怪しき旗さし物迄、悉く火煙となしたる中に、邪宗門の神寶俤と名付けし邪法の鏡有所しれず、察する所七草が殘黨生殘り、また〳〵仇をなさんと白眼しゆゑ、わざと凱陣の其日より、病氣と僞り引籠りしは、此實否を糺さん爲」藏人「楠原普傳は七草が城中にて討死、然るに存命にて凱陣せしは正しく邪法の曲者」普傳「イイヤ此普傳、七草が城中にて討死と見せしは、敵をたばかる智謀軍術、いか程に疑ひ受けても楠原普傳に相違ござらぬ」藏人「ムウ然らば誠の楠原普傳が、なぜ主家を滅亡させんとは工んだぞ」普傳「だまれ藏人、此普傳主家を滅亡させんとは何をもつて」藏人「オヽ其方主人の名代として禁庭へ參內の節、甲斐之介病氣所詮全快なりがたく、何卒臣下なれ共普傳、暫く當家を預り度き願ひ致したる事、某內意を以

粟島の家督は某申請ける、イザお勅使、御同道仕りませう」勅使「然らば直さま」四人「シテ此死骸は」普傳「反逆人なれば國境にて逆磔」四人「畏まつてござりまする」普傳「イザ〳〵」勅使「普傳來やれ」四人「還御」ト琴唄になり勅使兼成しづ〳〵花道へ行く、跡より普傳鏡を持ち行く、皆々下馬切つてゐる、能き所にて藏人右梯子に括り付けられながら。藏人「楠原普傳まて」ト聲かける、是にて普傳一寸立止る、勅使四人の奴もこなし、普傳こなし有つて。普傳「イザ〳〵お越あられませう」ト行きかゝる。藏人「七草四郎秦の義久が軍師森唐意軒、暫くまて」ト繩を引切りきつと見得。普傳「何がなんと」ト立留る、遠攻になる。藏人「ソレ遁すな」綱平「ハツ」ト勅使實は綱平裝束著付小はぜにて脱捨てる、下は繻子奴十手振上げ。「動くな」トきつと見得。藏人「大小」船頭「ハア、」ト橋懸より島藏、實は熊本勇八藏人が大小持つて走り出渡す、藏人手早に取つてさす、島藏普傳へ詰よる、藏人しづ〳〵ト二重舞臺へ上り。藏人「邪法の鏡を持つて粟島の家督を押領せんと、しすまし顔に禁庭へ參内とは、ふて〳〵しき工、七草が殘黨森唐意軒、最早遁れぬ白狀せい」ト聞いて普傳鏡を懷中してつか〳〵と藏人目がけかけ戻る、兼成の奴跡よりついて來る、島藏向へ廻り、十手にてかゝるを普傳島藏を蹴飛ばし、兼成かゝるを引摑んで見事に投付け、すぐに二重舞臺へかけ上つて。普傳「松江藏人、楠原普傳に向ひ森唐

松助、姫を引付ける、土手藏右内砂平三人してサア立たうと藏人を引立てる、又唄になり三人して藏人を梯子へくゝり付ける、此内雛形姫あせるを松助動かさぬこなし、とゞ藏人を梯子に括り、横槌を枕にさせ水責の見得宜しく有り、此内唄一くさり有つて又合方になる。普傳「サア白狀せぬか、言はぬかぬかさぬか、ハテしぶとい奴、ソレ水くらはせい」四人「サアいはぬか吐さぬか」普傳「水くらはせい」四人「ハッ」ト皆々立かゝる、又唄に成る、砂平藏人が兩足をおさへる、土手藏右内互に杓にて本水を汲み水責にする、此内始終琴二面にて浮寐の唄宜しく有る、雛形姫あせる、松助止めてゐる、藏人さまぐ\苦しむこなし有り、宜しく取合せ有るべし。普傳「サア苦しくば白狀せい」土手藏「いはぬか」右内「ぬかさぬか」砂平、松助「白狀せぬか」トいひく\水を流しかける、藏人もがく。土手「サアいはぬか」三人「白狀せぬか」トせめかけく\水を流しかける、藏人返すぐ\苦しみ、とゞウンと悶絕する、此時琴歌やめる。四人「ヤアコリヤくたばりました」姫「ヤアそんなら藏人は」トいろく\有つて。「ハア、」ト泣きおとす、ト橋懸ばたにて、蒲原右内錦の袋に入れたる邪法の鏡を持ち、藤太新吾諸共にはしり出で。蒲原「ハツ普傳樣、藏人が屋敷詮議仕り、隱し置いたる邪法の鏡詮議仕出し、持參仕つてござりまする」普傳「扨こそ邪法の鏡をかくし置く藏人、七草が一味に相違ない、此俤の鏡を禁庭へ指上げ、

見てつか／＼と傍へ行く。姫「コレ藏人、そなたはマア何として其樣な恐しい心になつてたもつたぞいのう、日比からそなたの心はよう知つてゐる、よもや其方に限り謀反の心は有るまいとおもへども、晋傳が達て言やればせう事もなし、コレ言譯が有るならちやつと言譯をして、早う繩めを助かつてたも、力とおもふそなたが、もしも責殺さりやつたら、兄上といひ六太郎樣や自は、なんとせうぞいの／＼」ト取付きなく。晋傳「ヤア雛形樣、科人に何繰言、ヤイ藏人、もう此上は包むに及ばぬ汝が俗稱、七草に合體に紛れない、サア速かに白狀せい」奴四人「サア白狀せい」ト藏人こなし有つて晋傳が顏をきつと見て。藏人「ハテ思ひよらぬ晋傳が詞、此藏人を七草が殘黨とは何をもつて」晋傳「それ早く天秤にかけて白狀させい」奴四人「ハッ」ト又唄になり、土手藏右内、脇差の鞘を藏人が繩目へ兩方より千鳥にさし込みこぢ上げる、松助砂平十手にて打つ。奴四人「サア白狀せい」ト土手藏右内はこぢ上げる、砂平松助は十手にて叩く、雛形姫二重舞臺よりあせる、藏人苦しきこなし、又浮寐一くさり有りて跡合方になる、藏人苦しみながら。藏人「いか程拷問しても、無實の罪、白狀する覺はない」晋傳「ハテしぶとい奴、此上は水食はして白狀させい」四人「畏つてござりまする」ト藏人を引立にかゝる。姫「アヽ是マア待つてたもいなう」トさゝへる。松助「ハテお退なされい」ト引退ける、雛形姫又取付く故、

き願ひ、天氣宜しくお取成を希ひ奉りまする」姫「そんなら普傳、兄上の病氣ゆゑ、そなたが家督を繼やるかいのう」普傳「ハテ何も女儀の御存ない事、控へてござれ」ト橋懸ばた〳〵にて土手藏走り出で。土手藏「ハッ詮議場へ引すゑ、矢がら責に仕りますれども、一向に口を閉ぢ何も白狀仕りませぬやうにござりまする」普傳「どうで水食はさずば白狀せまい、是へ引出せ、お勅使の目通で某が、一責せめて白狀させう、是へひけ。土手藏「ハッ」ト走り入る。姫「そんならまだ藏人をせめて、白狀さす事が有るかいのう」普傳「いかにも、彼奴七草に合體して、當家に仇いたすと覺ゆる、それ故拷問仕つて事を糺す、お勅使にも暫時御宥免下さりませう」勅使「オヽそれこそ一大事の詮議、とくと致してよからう」普傳「ハッ。ソレ者共水責の用意いたせ」奴四人「ハッ」ト始終序の舞にて、橋懸より土手藏筵を持出でよき所へ敷く、右内梯子と横槌を持出でむしろの上に置く、砂平松助手桶に本水入れ持出、むしろの兩方に置きて、皆々橋懸へ走り入る、雛形姫水責の道具を見て心遣ひのこなし、橋懸の内にて。奴四人「きり〳〵歩め」ト序の舞やんで琴二面にて浮寐の唄になり、橋懸より藏人わんぼうに繩帶、高手小手に縛められ、しほ〳〵出てくる、跡より土手藏繩取、右内砂平松助引添ひ、サア歩め〳〵とせり立てるこなし、藏人本舞臺能き所へ坐る、是迄に浮寐一くさり唄うて跡合方になる、雛形姫、藏人を

して藏人が大小を捥取り手籠にして引立て、橋懸へつかく\と入る、普傳邊を見廻し。普傳「こりやお身達は申付け置いた彼詮議をナ」トさゝやく。家中三人「ハッ」普傳「法印は奥へ參つて件の密法」修驗者「ハッ」普傳「早く\」家中「ハッ」トやはり序の舞にて右内、藤太、新吾は橋懸、大瀧法印は奥へ入る、跡に普傳、船頭あたりを窺ひ。船頭「普傳樣、あなたのお頼み故難風で乗込んだ船を幸ひ、藏人が本國より兵糧運送などと、無實を言ひかけまんまと藏人めを罪に取つておとしましてござりまする」普傳「察する所、町人百姓を取込み、彼奴らが虚妄と見たゆゑ、其科を反逆の企などと、罪につみをおもく言立て、大罪人にして刑罰に行ふ計略」船頭「へゝへゝえらい目論見なア」ト普傳懐中より袱紗包の金子を出し、島藏へほふる、島藏取つて。「是は」普傳「當座の褒美」船頭「エ、忝い」普傳「早く出船」船頭「うまいは」普傳「ゆけ」ト島藏金を戴き向へ走り入る、此内やはり序の舞にて、普傳うまい\と心にうなづくこなし、奥より勅使兼成、雛形姫跟き出來て。勅使「楠原普傳」普傳「お勅使樣」雛形「コレ普傳、今聞けば藏人が惡心、アリヤマア誠かいのう」勅使「普傳、藏人が逆心委しく聞いた、當家の柱石にる兩人、殊に甲斐之介の病氣、汝一人の辛勞、察しやる」普傳「ハッ先達て某上京の節、關白家へお願ひ申せし當家の家督相續、病氣故參内延引、それ故楠原普傳家老ながら當家の家督、暫く預り度

れた身の上、とつとと冥途へ走りたい、きり〳〵片付けて了はつしやれ」トどつかとすわり首さしのべる。藏人「うぬ」ト刀に手をかけ立上る、普傳藏人に詰かけ。普傳「イヽヤ訴人の者に指もさゝせぬ、サア反逆露顯いたせサ」藏人「イヽヤ反逆の覺えはない」普傳「まだ此上にあらがはゞ遁れぬ證據、ヤア修驗者大瀧法印參れ」修驗者「ハア、」ト奥塀口より大瀧法印散髮水衣括り袴、太刀はきつか〳〵と走り出る。「こりや藏人殿、こなたの頼みに依つて、甲斐之介殿の病氣全快の祈と見せ、誠は一命を絕つ呪咀の祈り、普傳樣に見顯され、のこらず白狀しましたわいのう」藏人「すりや某を罪に落さんと、覺なき呪咀の白狀」修驗「イヽヤ此期に及んで覺えないとは卑怯〳〵」普傳「サア覺えないといふには、何ぞ慥な證據が有るか」藏人「イヤ證據といふては」修驗「謀逆の證據は此法印」右內「千貫樋の金子」藤太「兵糧米の言譯有るか」新吾「薩埵峠の大木伐りしも工で有らうが」船頭「本國肥前へ運送、兵糧貯へは此嶋藏が慥な訴人」普傳「主人を呪咀する大罪人」右內、藤太、新吾「なんと是でもあらがふか」ト右の一札ひろげさし付ける。藏人「サアそれは」普傳、皆々「サア」藏人「サア」皆々「サア〳〵〳〵」普傳「コナ人外め」ト藏人を二重舞臺より蹴落し。「それ打するゐい」奴四人「ハツ御上意だ〳〵〳〵」普傳「彼奴にはまだ白狀さする儀が有る、詮議場へ引立て拷問にかけい」奴四人「ハツ。うせう」ト奥にて序の舞打ちかける、ト四人

拜借を、わざと十萬兩と認めしは、百姓共が性根をさぐる某が工夫サ」普傳「然らば又詰替の年貢米、殿の印形すわりし切手を引裂き、汝が印形にて米を自由に半金にて買戻すと僞り、數多の米を貯へるは、兵粮の手段で有らうがナ」藏人「イヽヤ、殿の印形すわりし切手を以て、彼等が自由に致させ置かば、此後米を買込み、萬民の難儀を思ひ計つて、此方へ半金にて買取りしは、下をあはれむ某が情」普傳「イヤさうはぬけさせぬ、此度袖師ヶ浦へ大船乘込みしと僞り、吟味抔と船をわざとゞめ置き、兵粮殘らず大船に積むは、まさかの用意で有らうがな」藏人「イイヤ先達ての時化日和、風波のわざとはいひながら、主船頭が不調法、コリヤ渠等をいましめの爲」普傳「ハテどういへばかういふと、よいは此上は其船頭め打ちすゑて白狀させえ」四人「ハツ。サア白狀しをらう」ト四人十手にて船頭を打ちにかゝる、立廻にて船頭四人を取つて投げる。「うぬ手向ひひろぐか」船頭「オヽ手向ひする、叶はぬ場所と見たゆゑ、主船頭が船わつて出るのぢや、コレ申し藏人樣、もう叶はぬ、此方もぶち割つてしまはんせ、いかにもアノ和郎の賴みによつて、難風に出合うたとは僞り、三保の浦へ船を乘入れ、藏人殿の相圖を待つてゐるのでごんす、何とすつぱりとぶち割らうがの、其代りどうぞ命をというてからが助けもせまい、よいは一度死んて二度は死なぬ平戸の島藏ぢや、此首さらへおとし、早う命の出船、碇綱のき

頭も迯げようとするを、右内砂平松助十手をふり上げ。三人「動くな」ト取巻く。船頭「ハイハイ」トうづくまる、土手藏右一札三通とも取つて。土手「ハッ」ト普傳へ持つて行く。藏人「それを」ト取りにかゝるを普傳、藏人が手をたゝきのけきつとなつて。普傳「いづれも此一札改めさつしやれ」右内、膳太、新吾「ハッ」ト三人一札を取つてめい〱拔き見て。右内「扨こそ此一札は、領分の百姓共に薩埵山の大木を伐拂ふ人歩料として一萬兩拜借と有りしに、此證文の表は十萬兩と認め」膳太「此一札は半金にお買上げと僞り、すぐに袖師が浦にとめ置いたる大船へ、殘らず米を積込めよと、米や宅右衛門へ頼みの一札」新吾「コレ此一札は千貫樋の普請料五千兩といひしも相違、五萬兩と認め有るは」右内「扨は松江藏人」膳太、新吾「お身が私欲に」三人「極つた」普傳「イヽヤお家を亡ぼす反逆人」藏人「何がなんと」普傳「千貫樋破損といひ立、數多の人歩を以て伊豆の海を切入れ、すはといはゞ水の手を切つておとし、當國を水にひたし鏖殺しにせん工で有らうがな」藏人「イヽヤ、千貫樋破損は田畑を助くる某が仁心」普傳「イヽヤ田畑の助けとせば、井田の法とて十反の内に池一つほらすべきに、伊豆の海に樋を仕かけ、此國へ取りよせるは正しく工有つての所業、殊に普請料と名付け、一萬兩拜借と僞り、汝が自筆で十萬兩と認め、百姓をしたがへ殿の用金をかすめとるは、軍用の手段で有らうがな」藏人「イヽヤ一萬兩の

をお渡しなさるゝ、併し高利を取つた其過怠に遣はされし米は、其儘半分にて」宅右「イヤそれでは」蔵人「但し言分が有るか」トきつといふ。宅右「是は又坪算用ぢや」ト天窓をかく。蔵人「沼津の者共夫へ出い」町人「ハイ〳〵」蔵人「先達て千貫樋破損につき、普請申付け置きしになぜ延引に及ぶ」町人「ハイどうも私共の手くさいで普請はなりませぬゆゑ、御拝借をお願ひ申しまする」蔵人「黙らう、汝らが田地の助けとなる水筋の普請、殿より金子を遣はさるゝといふ法が有らうか、しかし某が情を以て金子五千両用立くれる、此一札を以てお金方にて金子を請とれ、普請成就の上は、一ケ年に千貫文宛差上げをらう」ト一札をやる。船頭「エヽ有りがたい、是で千貫樋のいはれが知れた、イヤとんと譯の知れぬはおれが身の上ぢや、貴様達は皆それ〴〵お金を申受けた、おりやお金のかはりお咎をうけてのけた、アタ忌々しい」皆々「ドレこちらはお金を戴かうか」ト皆々橋懸へ行かうとする、普傳此内ぢつと見てゐる、此時。普傳「者共、きやつらに繩ぶて」奴四人「ハツ腕まはせ」ト四人腰より十手取出し振上る。船頭皆々「ハイ、、、」ト身をちゞめる。蔵人「普傳殿、某が申付けたる者共、何故繩打ち召る」普傳「盗賊だゆゑ繩ぶつのさ」蔵人「何がなんと」普傳「それ彼奴等に繩ぶち其一札奪ひとれ」奴四人「ハツとつた」ト皆々かゝる、皆々右の一札をすてゝ。皆々「アヽ御赦されませ〳〵」ト皆々橋懸へ迯げ入る、船

ら難船破船と僞り、賣買の物を高直となし、其利をむさぼるにつくいやつ、それ故船をとゞめ置いた、達つて歸りたくば首を置いて立歸れ」船頭「ぢやと申して」藏人「首を刎ねうか」船頭「是は又迷惑な」ト困つたこなし。藏人「領分の百姓、薩埵山の大木を伐拂へと申付けし某が詞を用ひず、なぜ其儘にさし措いた」百姓○「ハイされぱの儀でござりまする、薩埵山の大木を伐拂ひまするには、大分の人數が入りまする樣にござりまする」百姓△「何卒其入用金をおかし下さりませうならばハイ／＼」二人「有り難うござりまする」藏人「よいは、不承知でなくば此度は赦しくれう、則ち大木を伐る人數料として一萬兩おかしなさるゝ」ト懐中より書物二三通出し。「身が直筆の此手形を持つて、お金方にて金子を受取れ」百姓二人「エヽ有難う存じまする」ト證文戴く。藏人「お藏米の問屋宅右衞門、夫へ出い」宅右「ハイ／＼」ト向へ出る。藏人「そちが願は先達て詰替の年貢米を賣渡せし切手を以て、米受取りたい願ひ、よつて切手の通り米相渡しくれうが、其切手持參いたしたか」宅右「ハイ／＼則ち是にござりまする」ト持つて行く、藏人取つてさん／＼に引裂く。「アヽ申しそれは」藏人「それはとは憎い奴の、大切な殿の御判のすわりし切手を渡し置きたるに、おのれが勝手に質物にさし入れ、下直の米をかひ込み、下をいため高利を貪る不屈者、それ故殿の御判の切手は取上げ、あらたに某が印形すゑた手形を以て米

今出仕致した」普傳「お勅使のお入り」左内「御病氣のお疑ひ」新吾「鏡の詮議も」藏人「イヤ何もかも承つた」普傳「藏人殿へお勅使のお疑ひは、普傳が腹にかへて申し宥め置いた、此上は殿の御病體を此普傳が立合うて」藏人「イヤなりませぬ」普傳「ヤア」藏人「御病家へは藏人一人、其外は決して無用と殿の御上意、よもや違背はなさりますまいナ」普傳「お手前一人が呑込んで、若し違ひの有つた時は」藏人「松江藏人が腹一ッ、餘人の腹は御無心申さぬ」普傳「すりやお手前が腹にかへて」藏人「いかにも」普傳「ハテなア」船頭「是皆の衆、藏人樣がお出なされたわいの」皆々「ちやつと願うて下されく」船頭「サアくよいてやく、イヤアノ藏人樣」トずつと藏人が傍へ行かうとする。土手藏「ヤイく御家老樣お立會の場所へ、のぶくと慮外な奴」右内、沙平「さがれさがれ、さがりをらう」船頭「イヤさがるまいわいの、外の衆は格別、此平戶の嶋藏、海化日和を行くやうに、いつ迄船がかよりをさせておくのぢや、高が科といふのが」藏人「此度袖師が浦へ、あらたに某が築かせ置いたる船手の新關、なぜ案内もなく大船を乘迄んだ」船頭「サそれはかうでござります、遠州灘より變つて來た俄の日和、追手しけにまくり立てられ、案内する間もあらばこそ、命からく乘込みましたが、誤りとは申すものよ、有樣は日和が科でござりまする」藏人「默りをらうコナ横道者め、おのれらが近年風波嵐などと申立て、諸色を積みなが

彌生「ほんにそれ〳〵、暫しも陽氣がおこたれば」青柳「陰氣募つて御病氣の障りとなる」糸遊「そんなら一時も早う」彌生「奥にて踊を」皆々「始めませう」雛形「お勅使様にはいざ先奥へ」勅使「然らば普傳」普傳「先お入り」皆々「あられませう」ト踊三味線になり、勅使先に立ち跡より雛形姫皆々花笠を持つて入る。右内「普傳様、御主人の御病氣、こなた様を始め我々迄も、御病家へは一人も出入を止めし松江藏人が采配、何とも合點が參りませぬ」藤太「察する所、主人に媚諂らひ、おのれ一人が當家の柱石とならん藏人が我まゝ」新吾「それにあなたの腹にかへ、勅使へ返答なされんとは、若し相違有る時は普傳様のお身の上」右内「なぜ主人の病氣、松江藏人に御吟味下されよと仰せられませぬ」藤太「何ゆゑ藏人を」三人「おかばひなさるゝな」普傳「ナニ藏人をかばふべき、時刻を延し某病家へ推參して、とくと實否を糺す所存さ」右内「御尤の御思案ではござれ共、病家の詰々にはえび錠おろし」藤太「間毎〳〵の襖には皆尻ざし」新吾「うかつに寄りつかれぬ殿の御寐所」右内「折破つて通らば狼藉者の名をとらん」三人「此儀は如何なされまする」普傳「ナニ忠義の狼藉苦しうない」三人「然らば我々も」普傳「來やれ」三人「ハッ」ト三人立上る、普傳一間へ行かうとする、此時正面の襖明け松江藏人著付社杯、つか〳〵と出て普傳を付廻して一間をかこふ、皆々藏人を見て。三人「ヤア松江藏人殿」普傳「いつの間に登城しやつた」藏人「只

島藏が跡に付き。町人「これ船頭殿、こちらが願ひもとも〴〵に」百姓「どうぞ願うて下され」皆々「頼みますぞや〳〵」船頭「サアよいわいの〳〵、おれ次第にさつしやれ、ハイ〳〵御家老樣へお願ひ申上げまする」ト菅傳橋懸に立止り。菅傳「汝達が願ひ聞屆けてくれたいが、只今お勅使のお入、勅答申上げた其上にて聞屆けくれう、暫くそれに控へてをれ」船頭「ハイ〳〵左樣ならばコレ皆の衆、控へて居やしやれ〳〵」トわや〳〵いうて橋懸へ控へゐる、菅傳ずつと通り、二重舞臺の眞中にすわる。右内「菅傳樣只今出仕」皆々「なされましたか」菅傳「イヤ先刻登城仕り、お次に於て暫時休足」勅使「ムウ扨は其方が當家の家老楠原菅傳よな」菅傳「ハツお勅使には辨の兼成公」勅使「對面は今が始、シテ勅答はなんとぢや」菅傳「主人甲斐之介病氣に相違ござりませぬ」勅使「イヽヤ正しく虚病とおもふ故」菅傳「ハテ當家の執權楠原菅傳が病氣と申すからは相違ござらぬ、萬一お疑ひござらば、某が腹を以て申譯仕る」勅使「ムウさすがは當家の家老程有つて、大丈夫の返答、汝が詞にめんじ病氣見屆は赦してくれう」菅傳「有難く存じ奉ります」勅使「シテ邪法の鏡の儀は」菅傳「其儀も追付相糺し勅答仕りませう」右内「お勅使樣には暫く奧にて御休足下されませう」勅使「いかさま、返答相待つ間、暫時休足」藤太「雛形樣には皆を引連れお勅使饗應の御用意」雛形「なる程、何がな御馳走に兄上樣を保養の爲、踊りも時のお慰み」

閒の大病と有るに、見れば女共には花笠をきせて風流の踊姿、禁庭は病氣といひ立て引籠り、コリヤ一家中打寄り踊の遊よな」雛形「イヤ全く左樣ではござりませぬ、兄甲斐之介の病氣は、正しく邪法の障礙にて、陽氣おとろへ陰氣に引入れまする魔道の業、それゆゑ太鼓三味線にてはやし立て、踊の手拍子は則ち神慮を仰ぐ拍子にかたどり」彌生「梅の花笠は一陽來復の先がけ、勝色見する當家の勢ひ、陽氣さかんの花を頭に戴きまするも、邪法の障礙を拂はん爲」青柳「皆一樣に緋の小袖を著ましたが、赤きは陽のつかさ、六の足取六十餘社の神樣を驚かし」糸遊「音頭がかざす日の丸の扇は則ち日の形」彌生「千代の始といふ文句は春の心」雛形「松坂こえたといふ文句は」若草「伊勢の神風まねく心」雛形「皆兄樣の病氣平癒」彌生「祈りの爲の伊勢音頭」青柳「さらさら榮耀榮華の」糸遊「おごりの業では」皆々「こざりませぬ」勅使「ム丶然らば驕奢のさたは聞捨にいたしてくれうが、何分甲斐之介が病氣見屆けよと有る勅諚、家中の者病家へ案内せよ」三人「イヤ其儀は」勅使「ムウ病家へ案内せぬは虛病に相違ないか」三人「イヤ全く」勅使「然らば案内」三人「サ其儀は」勅使「虛病か」三人「サア」勅使「案内するか」三人「サア」勅使「兼成直に見屆けうか」三人「サア」皆々「サア〳〵」勅使「返答はなんと」晋傳「其返答楠原晋傳仕りませう」ト太鼓謳になり、橋懸より晋傳著付長社祚にて出來る、跡より平戸島藏船頭の形、町人百姓

ふ、兼成花道よき所にて立留まる。右内「お勅使様には遠路の所」雛形「御苦勞の御入」藤太、新吾「まづまづあれへ」立女みなみな「お通り下されませう」ト矢張管絃にて兼成しづしづ二重舞臺へ上り床几にかゝる、仕丁六位橋懸へ入る、雛形姫、右内、藤太、新吾、彌生、青柳、糸遊、若草、子供皆々平舞臺に並ぶ、此時踊三味線止めて祝詞ばかり打つてゐる。勅使「勅使の趣餘の儀にあらず、粟島甲斐之介儀は三ヶ年以前、七草一揆を討亡し凱陣の後、彼七草が寶佛と名付けし邪法の鏡、甲斐之介持參いたし禁庭へ參内すべき所、病氣といひ立て延引の届と有つて、家老楠原普傳先北上京致せし其勞を御いたはり有つて、暫時の日延を賜はりし所に、今に於て參内もせず、等閑に打捨てある事、且は禁庭を蔑しめたるしわざ、さるに依つて辨の兼冬勅使として遙々下向せしは、甲斐之介が病氣見屆けよと有る、勅使の趣かくの通り」右内「勅使の趣恐入りましてござります、しかし主人甲斐之介病氣之儀、毛頭相違はござりませぬ、三ヶ年以前七草亡び、凱陣の途中より俄の病氣、察する所七草一揆は邪法を行ふ曲者、其怨念主人を惱ますと存じられます」新吾「さるに依て奥には修驗者を招き、晝夜共に勤行いとまなく祈りをります樣にござります」藤太「何分主人甲斐之介病氣本腹仕ります迄、今暫く御用捨下さりませうならば」三人「有難く存じまする」勅使「イヤならぬならぬ、甲斐之介が病氣其意を得ず、三ヶ年が

力が加勢をいたせ」佐五「シテ兩人が追かけたは」普傳「最早一時以前の事」佐五「南無三、さすれば餘程のおくれ」普傳「猶豫いたすな」佐五「一時三里」普傳「暫時も早く」佐五「此まゝおいとま」普傳「急げ〳〵」佐五「ハッ」ト勢込んで向へ走り入る、普傳跡を見てにつたりと笑ひ。普傳「ハテもがくは〳〵」トあざ笑ふこなし、チョン〳〵にて廻り道具、又踊三味線祝詞になる。

造り物、惣一面の二重舞臺、欄間御殿掛り、向ふ一面の金襖、上の方腰高塗骨障子家體、奥御殿の體、右踊三味線に合せて二重舞臺の上に雛形姫、娰青柳、糸遊、彌生、春野、若草、三笠其外子供殘らず、緋縮緬に伊達紋黑繻子の帶、花笠にて皆々踊つてゐる見得、平舞臺に土手藏右內砂平松助揃ひの繻子の奴に着かへ踊つてゐる、此見得にて踊三味線、奥には鈴の音祝詞にて道具納る、みな〳〵踊り居る、ト向にて。

向ふより「勅使のお入」ト管絃になる、二重舞臺本舞臺の皆々構はず踊つてゐる、やはり踊三味線奥には祝詞管絃一所になる、向より辨兼成黑の裝束冠、勅使にて跡より仕丁六位添ひ、しづしづ出來る、ト橋懸より蒲原右內、江尻藤太、沖津新吾著附𧘕𧘔、家中にて勅使を出迎ふ體にて。右內「ヤイお勅使のお入なるぞ」藤太、新吾「しづまらぬか〳〵」トいふに奴四人踊を止めて橋懸にすわる、雛形姫皆々花笠をぬぎ、右踊の著附の上に襠をきる、皆々右の踊の形にて出迎

矗と立上り、それなりにせり下る、又大どろ〳〵にて右佐五平が消えたる所に、錦の袋に入れたる邪法の鏡飛出る仕かけにて、普傳が手にとまる、臺七恂りして。臺七「是は」普傳「邪法の神寶、佛と名付けし名鏡」臺七「すりや佐五平とおもひしは」普傳「此邪法の鏡の徳をもつて、佐五平が姿を顯はし、宮城野に無體の戀慕と見せたも、皆此鏡の奇瑞」臺七「シテ誠の佐五平は」普傳「某が辯舌に乘り、汝が在所を詮議せよと、今朝近在へ遣はしたればまだ歸らぬ、さるによつて我計略を以て佐五平が姿を顯はし、宮城野に不義の體に見せし故、此後佐五平は不忠者と成つて、つゞまる所は佐五平は腹かつさばいてくたばる、コリヤ其方は女郎共に跡より追付き返討」臺七「シテ道筋は」普傳「相州鎌倉」臺七「スリヤ下街道」普傳「行きやれ」臺七「おさらば」ト臺七向へ走り入る、此内始終合方にて普傳臺七が跡を見て、右の鏡を懷中する、ト橋懸ばたばたにて誠の佐五平旅より戻りし體にて出て。佐五平「ホウ是は普傳樣」普傳「佐五平今歸つたか」佐五「ハツお詞に隨ひ藤枝の近邊を縱横十文字にかけ廻り、吟味致しましたれども何の手懸も相しれませぬ故、立歸つて御長屋を見ますれば、宮城野樣もお力もをりませぬが、二人ながらどれへ參りましてござりまするな」普傳「オヽ宮城野お力は敵臺七が跡を慕うて追かけさせた」佐五「すりや臺七めは」普傳「上方街道を鞠子の方へ」佐五「是より直にほつかけて」普傳「宮城野お

首筋取つて緣側へ引付け。普傳「兩人共に早く〳〵」宮城「ハイ合點でござります」ト宮城野先に立ちお力花道へ行かうとする、佐五平あせつて普傳をふりはなし、宮城野方へ行かうとするを、お力佐五平を捉まへ。お力「夫婦の緣も是限、エ、見さけ果てた」ト打付ける、佐五平又行かうとするを、普傳二重舞臺よりおりて、刀の鐺にて佐五平を當る、宮城野お力こなし。普傳「未練殘さず早く行け」トきつといふ、佐五平ばつたりとこける、お力佐五平方を見てこなし有りて氣をかへ。お力「さうぢや、ござりませ」ト宮城野と入替り手を引いて向へ走り入る、普傳跡を見送りぢつとこなし、靜な合方になり、上手の柴垣を押分け臺七ぬつと顏を出し、向を見てこなし有つて、そろ〳〵柴垣を出て。臺七「普傳樣」普傳「志賀臺七」臺七「兼て軍學の師と賴まん爲、國元より好みを通ぜし普傳樣、此程のお心遣ひ千萬忝う存じまする」普傳「お身を敵と付け狙ふ宮城野、矢矧の橋より匿ひ歸りしは、打放さうばかり、しかしお上より御免有つた敵討、屋敷で殺せば跡難かし、此下郎めさへ遠ざけ置けば、たとへ大力の女郎め付添ふとて、何程の事か有らう、跡よりぼつかけ途中でぶち殺し、後日の災ひを退ぞきやれ」臺七「心得ました、ついでに其下郎めも敵の餘類」ト刀に手を懸け行かうとする、普傳止めて。普傳「まちやれ、それには及ばぬ」臺七「ム、及ばぬとはな」ト普傳印を結び、天に向うて合掌する、どろ〳〵にて佐五

土手蔵「右四ヶ條の願ひ」　右内「取次を相願ひをりまする」　松助「それ故普傳樣へ申上げまする」
砂平「是へ呼出しませうか」　四人「如何仕りませうな」　普傳「ムヽ其者共は相役松江藏人が申付けたる儀、追付け藏人登城仕り次第、普傳立會事落著いたしくれう、今暫く控へをれと申聞かせい」
四人「畏つてござりまする」　ト向へ走り入る、トばた〳〵にて橋懸より宮城野帶をしやらどけにしどけなき體にて走り出で、二重舞臺へかけ上る。宮城野「申しどうぞお助けなされて下さりませいなア」　ト普傳に取付く、普傳驚く所へ、又ばた〳〵にて佐五平髪を亂し拔身を持つて走り出る、跡よりお力つゞいて走り出る。お力「まつた」　ト佐五平を留める、佐五平お力を振解いて宮城野方へ拔身をふり上げ行かうとする、お力佐五平が拔身の手を腕搦にして、見事にしつかと止める。普傳「宮城野お力、佐五平が血相、仔細はなんと」　お力「ハツ申上げまするも面目もござりませぬ、夫佐五平は宮城野樣に無體の戀慕、御得心ないを憤り、勿體ないお主樣に此手向ひ」　普傳「ハテにつくい下郎め、主に刃向ふ人外には構はずと、兩人共に早く此場を立退け」
宮城野「ムウ此場を立退けとはな」　普傳「此屋敷の内に敵臺七に所縁ある者が有る、さすれば汝達が身の災ひ、一先此場を立退き鎌倉に身を忍び、本望とげよ、ナ、合點か」　宮城「段々のお志」
佐五平「イヽヤ此場はやらぬ」　ト又宮城野方へ斬つて行くを、普傳煙管にて拔身を打落し、直に

宮城野奥へ迯げうとする、佐五平お力をふりはなし宮城野が帶に手を懸ける、お力佐五平を引退けうと首筋取つて引く、宮城野は迯げうとする、此機に宮城野が帶ほどけ、宮城野帶の端を持つてふるふ、佐五平きつと帶を控へる、お力佐五平が髻を取つて。「エ、こなたはのう」トきつとひしぎつける、ト踊の唄チョン〳〵にて道具廻る、ト又踊三味線祝詞になる。

造り物、三間の間二重舞臺、向ふ一面に緣、黑塗杉戸、東西後高塀、前に兩方とも柴垣、右二重舞臺の緣先に楠原晉傳着附羽織袴にて坐り、莨盆前に置き、煙草のんでゐる。ト向より土手藏右内砂平松助、右四人の奴出て手をつき。

土手藏「晉傳樣へ申上げまする、先比袖師が浦へ乘込みましたる檜垣の船頭、平戸の島藏、何卒御吟味相濟みなば、一日も早う出船仕り度き願ひ、お取次を賴みをりまする」右内「ハツお藏米の米方宅右衞門、先達てお願申置きましたる米切手の儀、何卒お聞屆下されまするやうに、又又相願ひをりまするやうにござりまする」砂平「御領分の百姓、薩埵山の大木を伐取る儀不承知ゆゑ、上意を背くと有つて庄屋組頭の者、村方惣名代にあがりやへ留置かれましたる者共、何卒御免の願ひ、只管仕りをりまする樣にござりまする」松助「沼津の者共、千貫樋破損に就き、御拜借の願ひ、何卒お聞屆下されまするやうにと、推して訴訟仕りまするやうにござりまする」

主人のお慈悲、それ故三年が間、精進禁酒不淫の大願、三年が間は女房持つ事はならぬけれど、お主の御意違背はならぬによつて、そちと夫婦には成るものゝ、三年が間は辛抱してくれいと、事を分けていはしやんすゆゑ、いかにも合點でござんすと、祝言の盃してから、今日迄まだむしろは踏みませぬぞや、其わたしへ義理も思はず、勿體ないお主樣へ不義放埓、こりやこな樣酒飲ましやんしたの、そりやもう旅勞れの事ぢやに依て、酒飲ましやんすなといふではござんせぬけれど、惡い病が有るとしつて酒飲むとは情ない、コレ親旦那樣お果てなされてより、お身に願ひの有る宮城野樣、木にも萱にも心を置く私等二人が便にするは、廣い世界にこな樣より外にはござんせぬわいの〳〵」　トなき。「大方何心なう草臥休めに酒一ツ飮ましやんしたのでござんせう、醉が醒めたらやつぱり元の佐五平どの、先刻にからの無禮は酒の科でござります、何事もおゆるしなされて下さりませと、ちやつと宮城野樣へお詫申さしやんせ、エヽこれ佐五平殿」　トいうても佐五平うつとりと宮城野が顏を見てゐる、宮城野袖にて顏をおほひいやがるこなし、お力色々いうても左右佐五平宮城野を見て恍惚と成つてゐる故、きつとなつて。「そんならどの樣にいうても」佐五「おもひ斷られぬわいやい」　ト又宮城野方へ行かうとするを、お力佐五平を引つかみ動かさぬこなしにて。お力「アヽ宮城野樣は妾構はずと奧へ〳〵」ト

泣手を合せ宮城野を拜む、宮城野ぢつと俯き泣いてゐる、佐五平又きつとなつて。「又かう言ひ出すからは、否でも應でも聞いて貰はにやなりませぬ、達て得心さつしやれねば佐五平が命は投出して居りますぞや」宮城「ヤア、」佐五「得心して下さりまするか」宮城「サア」佐五「いやか」宮城「サア」佐五「おうか」宮城「サア」兩人「サア／＼」トぢつと付廻し。佐五「どうも堪へられぬわいのう」ト宮城野に取付く、アレイ／＼ともがくはずみにこける、所へ橋懸よりお力何氣なう戻つて來て、此體を見て恟りして、つか／＼と行き佐五平首筋とつて。お力「コリャ何するのぢや」ト取つてほふる、宮城野起きて。宮城「やアお力か、よう戻つてたもつたのう」トお力に取付きなく。お力「マ、何の事ぢや、とんと譯がしれませぬ、マア樣子をおつしやりませ」トいふ内佐五平お力を引退け直に宮城野に取付く、お力興ざめ佐五平を引退け、胸倉取つて下へとんと突する。「コレ佐五平殿、樣子は聞かねど此體たらく、コリャこな樣病が起つたな」トいふ内お力を又引退け、宮城野方へ行かうとするを、お力止める、佐五平又振放し行く故引付けて。「ア、こなたはのう」ト又引起し。「コレお主樣のお情で、こなたと夫婦になつた其夜に、こなたがいふには、コリャお力、俺は生れ付いて酒を呑むと心が猥になつて、色深い病が有る、先達て旦那のお供先にて酒を呑み、お上の女中に不義言かけ、既にお手討に逢ふべき命を助かつたはお

が、どうもかうも詞につくされませぬによつて」ト矢張擦り〳〵、此臺詞のとまりに又下へ手をやる、宮城野又悧りする、佐五平も悧り、トこなし、宮城野物いはずに佐五平が顔を見ながら、そろ〳〵おきる、佐五平面目なさゝうにじり〳〵と此方へ來て、立つて奥へ行かうとする、佐五平宮城野が裾を捉へぢつと引留める。宮城「佐五平、何としやるぞいのう」トわな〳〵慄うていふ、佐五平宮城野が裾をぢつと控へながら、下より顔を見る。佐五「でも美しいものぢやなア」宮城「ヤア、」佐五「ほれました」宮城「ヤア、」佐五「どうぞ叶へて下さりませ」ト宮城野佐五平を振放し、顫ひを止め心を落し付けたこなしにて。宮城「不忠者めが」トずつと奥へ行かうとする、佐五平宮城野を引廻し、向へ廻り下にゐて。佐五「不忠合點」宮城「ヤ」佐五「非義非道といはれうが、どうもなりませぬ宮城野樣」宮城「そんならアノ眞實に」佐五「何僞り申しませう、いかにも國を出まして今日の只今迄、忠義一圖の佐五平め、今あなたのお腹をなでてをりまする内に、見れば見る程ても美しい顔だなア、追付け首尾よう本望とげさつしやりましたら、谷五郎樣と。マヽ羨しい事だなアとおもうたが因果の始め、お主樣も忠義も打忘れ、ぞつこん心から底から惚れました、申し宮城野樣、不便な事とおもうて何卒お得心なされて下さりませ、申しコレ手を合しまする、是だ〳〵是でござりまする」ト泣

癪の頭をコレかうおさへると、それ〳〵蟲めがぐう〳〵となきまする、谷五郎樣の事を明暮戀ひしたうてござるおどもりが此蟲めだ、如何樣積ると書いてしやくとよむ、尤な事だなア」ト此臺詞いひ〳〵宮城野を擦つてゐて、思はず下へ手をやる、宮城野悔り、佐五平も悔りする。宮城「コレ佐五平、何しやるぞいのう滅相な」佐五「ハイ御ゆるされて下さりませ、思はずしらず粗相千萬な事を仕りました」宮城「オヽわしや悔りしたわいのう」佐五「あなたより私が上氣仕りました、ハテ扨藥袋もない」トいひ〳〵又丁寧にさする。宮城「イヤ是佐五平、そなたの願はいつ迄ぢやや」佐五「ハイ三年が問と限りましたが、モウ二年の上も經ちましたれば、わづか半季餘になりましたて」宮城「早うそなたの願が滿さしてやりたいわいのう」佐五「そりやなぜでござりまする」宮城「さいのう、お力と女夫になりやつたといふ名許りで、まだ一緒に寐やらぬぢやないかいのう、わしが谷五郎樣の事を思ふにつけ、お力の心根を推量して、怎ぞそなたも願を早う了うて、お力と寐せてやりたいのう」佐五「ハテ滅相な、私が命替りの禁酒不淫、滅多にややぶる事はなりませぬてや、とは申すものゝお力が心根、おもひやれば不便な事でござりまする、奥樣のお差圖で夫婦に成りましたれど只の名ばかり、それをまた不便に思召し、どうぞ早う願を了うて、お力めに堪納させてやれとおつしやるあなたのお志の忝さと申すもの

る、宮城野此内莨盆を引寄せ、火入の灰をならし、懐より香包を出し香をたき、手を合はせ。宮城「今日は父上の御命日、御供養申しませうにも旅の空、心ばかりの手向、なむあみだ佛〳〵」佐五「ア、世が世の時で有らうなら、千僧萬僧の御法事をなされうもの、此憂艱難も敵臺七がなす業」宮城「父上お果なされずば、谷五郎樣と目出たう夫婦にならうもの、おもふ中を引別れ、知らぬ旅路に彷徨ふも、みんなアノ臺七ゆゑ、エ、恨めしい、お懐かしいは谷五郎樣、夕もありありとお顔を見て、翌日は逢はうとたつた一言、ほいない夢のさめ〴〵と、涙やるせはござんせぬ、谷五郎樣おなつかしうござりますわいな」ト泣く、佐五平こなし有りて。佐五「お道理だお道理」トともに涙を催す、宮城野癪の指込むこなし。宮城「ア、〳〵」ト我手に腹をおさへ苦しきこなし、佐五平驚き。佐五「何となされました〳〵」ト傍へかけよる。「ア、コリヤ癪氣だ、ア、是御家中に鍼立が有らうけれど、どの誰がどなたやら勝手しらず、オ、幸ひ〳〵おらが此右の手は蝮指だ、是で撫ると癪氣の藥、ドレちつとさすつて上げませう、ドレ〳〵まづ枕を上げませう」ト木枕取つて宮城野にあてがひ、寐ころばし。「爰に蒲團も有るは」ト蒲團取つて來て宮城野にきせ。「どれちつとさすりませう」ト宮城野が胸先をなで。「ホウこりや餘程胸先から腹へむけて突張返つてをるは、是では術ないもお道理だ〳〵、ドレ私が此蝮蛇指で、

此力も、大抵案じた事かいなア、戻らしやんした樣子を宮城野樣へ」宮城「イヤお力、聞きましたわいのウ」ト襖を明け出る。佐五平「ホウ宮城野樣」宮城「佐五平、いかい苦勞をしてたもるのウ、矢矧の橋で、わしもお力も此屋敷の御家老楠原普傳樣のおせわになり、爰に逗留もモウ三日餘り」お力「ほんにもうお情深い普傳樣、お前が戻らしやんしたら、早速にしらせ、敵臺七が有所しれたら、倶々に力になつて遣らうと仰しやつてござるわいのう」佐五「オヽサ行先に鬼はないわい、元來此栗島家のお妹君と、俺が國の若殿樣とは御緣組、其家中の杉本甚内が身寄の者と聞き、普傳樣はお世話なされ下さりまするも、やはりお主樣のお蔭、こりやお力、俺が立歸つた樣子、普傳樣へおしらせ申して來い、後程お目に懸つて何かのお禮申上げうわい」お力「そんならわたしは普傳樣へ、ちよつとお報せ申して來う、宮城野樣、ツイいて參りませう」宮城「そんなら太儀ながら」お力「アヽ申し何の太儀な事はござりませう、ドリヤいてこうか」ト合方になりお力橋懸へ入る、佐五平下にゐて。佐五「宮城野樣、御免なされませ」ト兩脚投出し草鞋脚絆を解きながら。「扨々歩いた〱、アノ又臺七め、脛の達者な奴、何か岡崎から付け出して、荒井の番所迄に跡へなり先へなり付けて來たが、今切の船で間違うたか、但し荒井から本坂越に行きをつたか、何でも偉いめに合はせをつたて」ト捨白いひ〱脚絆草鞋をといてる

三人取付く。お力「オヽかうするわい」ト又三人を投げて、そこに有る米俵を取つて皆々に打付ける、四人逃廻る、トヽ臼を横にこかして四人の方へ突きこかす、ト春臼橋懸の方へころ〳〵とこげてゆく、是にて皆々橋懸へ逃げて入る、此内始終踊三味線祝詞となりお力皆々の逃げて入りし跡を見て。お力「ハヽヽヽヽ男の形をして、アノマア弱い事わいのホヽヽヽ」ト笑うて。「ドレドレマア爰を片付けませうか」ト又踊三味線祝詞にて向より佐五平旅姿にていきせき出る。佐五平「扨々大きなお屋敷だ、此長屋にゐるか」トいひ〳〵出て來てお力を見付け。「お力でないか」お力「オヽ佐五平殿、今も今とてお前の事を言出してゐたわいなア、是さうして敵臺七が」佐五「こりや」ト押へる、お力もこなし有り。「どこにどういふ所縁が有るまいものでもない、大きな聲をすないやい」お力「アイ〳〵。さうして樣子はえ」佐五「さればサア此間矢矧の橋で臺七を見付け、なんでも落著く先を見屆け、宮城野樣に本望とげさせませうと、臺七が跡をしたうて荒井今切、何が番所の前でどさくさ船に乘りおくれ、臺七めを見失ひ、普傳樣のお世話なされて、此お屋敷へ三人共に匿まはれ、今朝普傳樣の御意に隨ひ、敵臺七藤枝の宿にをるとの事ゆゑ、今朝早々より驅出して宿の入口から一軒〳〵吟味したれど樣子がしれぬ、定めし宮城野樣も其方も案じて居らうと、直樣取つて返してやう〳〵と今戻つたてや」お力「イヤもう宮城野樣も

まひ下されまして、此様な長屋に置いて下されまする冥加の爲、米を搗いたり水汲んだり、女の手業にあらくれ仕事、ほんにざんない女子ぢやと皆様笑うて下さりますなえ」右内「なんの笑うてよいものか、自體長屋の飯米は、いつも我等が搗かねばならぬ」松助「所をおぬしを頼んで搗いて貰ふは、女子にまれな大力ゆゑさ」土手「おいらが手助をするお力女郎、コレ其代りに今夜は俺がおぬしが手足も腰もさすりおろして上るにヨウ」トお力が手をつかまへる、お力いやがり。お力「アコレ悪い事さつしやるないのウ」土手「何の悪い事、よい事だぞ／＼」ト執かうする、お力むつとして。お力「アヽあた執著いおかぬのかいの」ト片手にて土手藏が腕を取つて捩上げる。土手「アイタヽヽコリヤなんとする／＼」お力「なんとするとは、コレわしには佐五平といふ歷乎とした男が有るぞや、其ぬし有る者にてんがうするによつて、重ねてのためコレかうして置くのぢやわいな」ト突飛ばす土手藏むがうこける。仲間三人「ハヽヽ女に負けをつたわい」ト三人笑ふ土手藏腹立つて。土手「こりや又あんまりだがな」トお力が胸ぐらとる。お力「何ちよこざいな」トとつて投げ。「いつそ」ト杵を取つてふり上げる、みな／＼驚き。松助「コリヤ待て／＼」右内「おらが挨拶だ／＼」紗平「了簡しろ／＼」ト三人お力が杵の手に取付く。お力「イヽヤ退いた／＼」ト三人を取つてほふる。三人「こいつ挨拶人をどうさらす」ト

斐之介様が、三年先に七草一揆と合戦を遊され、難なく七草勢を討亡し、御凱陣の後にふと御病氣さし起り、典薬衆が色々としても御本腹がない、そこでもし七草一揆は邪法のしわざを持つて、亡されし無念の魂魄、殿様をなやますもしれぬと有つて、御家臣松江藏人様が駿河一國の修驗者を毎日呼寄せ、アノ通りの御祈禱だわい」おカ「夫でアノ鈴の音が聞えました、が御病氣の中でアノ踊はえ」右内「オヽサあれも藏人様の御差圖、邪宗門亡びた妄念は、正しく陰氣の司どる時刻を考へ、障碍をなさん、それ故打はやし、踊などは陽氣集るもの故、家中の女中子供を集め、晝夜わかたぬ踊の拍子だてや」おカ「ムウそれで踊の様子も知れましたが、わしや又楠原普傳様が御家老様とやら存じてをりましたが、其松江藏人様と申しまするも御家老でござりますかえ」松助「オヽサ此お屋敷には楠原普傳様、松江藏人様、御兩所共にお家の兩翼だわい」おカ「普傳様も御發明なが、又藏人様もお賢いなア」砂平「イヤ又普傳様が彼七草攻の時、一番に敵の城へ切つて入り、花々しい戰ひ、敵は大勢普傳様は只一人、大方討死をなされたで有らうと思ひの外、七草亡びて御凱陣の其時、御存命でお歸りなされたゆゑ、一家中の悅び、それから普傳様の羽振は、益々當家の重家老様といふはあなたの事ぢや」おカ「なる程、普傳様の御威勢はきびしいものでござります、殊にお情深いお心ざし、何の所緣もないわたしら二人をお匿

いて居る、土手藏右内砂平松助、右四人中間にて松助は俵を明け、搗いた米を箕にて入れてゐる、土手藏は米の入りし俵を繩にてくゝつて居る、右内砂平は米の俵をかたげ橋懸よき所へ俵を運んで居る見え、此體にて遙奥にて祈りの體にて鈴の音鼓の音にて祝詞、橋懸の後にて太鼓入の踊三味線、此模樣にてまく明ける。

土手藏「そりやよいぞ」ト俵をこかす。砂平「オヽ合點だ」ト俵をふりかたげ砂平の方へ持つて行く、砂平取つて。右内「しめたぞ」松助「何と一ぷくと出かけうかい」土手「オヽよかろ〳〵」松助「お力女郎も休まつしやれ」お力「イエ〳〵私しやねつからしんどうござんせぬ、何ぢややら奧御殿には御祈禱が有るやら、鈴の音がするやら鼓がポン〳〵〳〵と鳴るやら、こちらの方では太鼓三絃で踊が有る樣子、アノ拍子に乘つて米をつくによつて、とんと氣が勇んでしんどい事はないわいなア」砂平「いかさま、俺們もアノ音を聞くと、尻がひよい〳〵踊り上がるぞ」お力「アリヤマアなんで御座んすえ」右内「いかさま、お主はやう〳〵此頃此家へ來たによつて、委細をしらぬは尤だ」松助「米の俵を括りながら咄して聞かさうかい」お力「そんなら私も米を搗き〳〵聞きませうわいナ」土手「オヽさうしろ〳〵」ト銘々俵を拵へながら咄する、お力米をつきながら咄を聞く。「扨かうだわい、アノ遙か奧に鈴の音がするは、アリヤ此お屋敷の殿樣、粟島甲

ゆみくろ、山へゆこ合點ぢや、裾をしよんからげてざんぶりと、海にせい、おつと心得山また山に、東山のナア〳〵、おふや出やる〳〵中てつかりしよ〳〵、けつたしよ〳〵、けつたよのお月かくす奴は碌なやつは隱さないでは。月を便りに野らもどり、是も入間のならひかや。

宗六、お倉「中々出來した〳〵」與茂吉「なんと是はどう有るまい、是から皆が手を揃へずに、一踊をどらんとはどう有るまい」お倉「そりや可かろ、サア〳〵主、お前も一ばん踊りなんし」宗六「おらはそんな事は不得手、ゆるせ〳〵」お倉「はてさういはずと」皆「をどろ〳〵」ト是より五人並び、すり鐘入の踊になる。浄「陸奥の名所は數々ござる。中に松嶋宮城が萩よ、野田の玉川となぶ千鳥、文のとりやり錦木などは、ほんに田舍の戀ぢやもの、うたふ姿も一樣に、謳ふ聲々色鳥の、翼ならべて行空の、霞が中の清見寺、跡に見なして東路や、鎌倉さして急ぎ行く。トよろしく。

幕

四幕目

造り物、平舞臺向ふ世話襖、上の方折廻り明障子家體、橋懸り屋敷塀、右は駿河國栗島家城内長屋の見得、幕内よりお力手拭を鉢巻にして、襦袢腕かけ、能き所に米搗臼を置き、大きな杵を持ち米をつ

しもに廣き富士の裾野に、數萬の射手は入ちがひ、分取數多いたしける、曾我兄弟の人々は、敵にめぐり逢はんとて、前後左右に眼を配つて居たりける、かくとはしらず祐經は、三枝有る鹿を射留めんと、かりまたがつて駈廻る、五郎目早き若者にて、すは祐經と見るよりも、鹿こそ通れと呼けば、十郎はつと嬉しくて、煽を打つて追かける、よわき馬につよく手綱をかいくれば、と有るふし木につまづいて、馬諸共に眞逆さま、ばつさりこどつさりこ、時宗慌て兄貴を起すか馬を呵るか、はつつけめ畜生め、ほてつぱらめと兄も弟もほやいた〳〵、ほやくも道理だ、やれ〳〵なんたる煩さいこつたよ、君が心は丸太船かや、くれ〴〵駿河のふじや三里の、きふにうちたい、しかし敵が饂飩蕎麥切、洗濯物でもござるまいぞや、石に竹釘打たれぬ〳〵、いつそ大坂の手打連中を頼んで見やうか、何のかのとて隙が入間の詞もむしやくしや、ひけをもんだはさりとは〳〵、煩いこつたよ、ホヽヽホイ、アヽほつとした、出來た〳〵と煽立て、笑ひは旅の憂晴し、憂世忘れぬ歌比丘尼。ト是にて花道より比丘尼名月板簓をならし、後に柄杓をさし出る。淨『梅は匂ひよ櫻花、人は見めより只心ちとくわん。觀ずれば煩惱の、人もはれやかに冥々たる、人界の眠をさます松の風、極樂の〳〵、菩薩の誓ひと聞くなれば、雪や氷や名に隔つらん、萬法皆一如也、實相の門に入らうよ、さとりて過ぐる法の道、一人とぼ〳〵あ

來の先になり、又後になり駿河なる、富士の裾野の朝霧や。宗六「こりや〳〵入間、なんとマア見事な富士の景色ぢやないか、爰で一休せう、其間にアノ信夫めと、おもいれ濡れて見せい〳〵」お倉「それがよからう〳〵」浮『しやれたおだてを眞實に、うけて信夫がいき〳〵と、嬉涙の手をあはせ、拜み申すぞ旦那樣、海よりや深い山よりや高い、でつかちない御恩だよ、これサア脊アとのお身樣は、なじよにだまされ申さない、但しや嬉しくは有り申さないかいの、此御恩我等は仇にやせんだいの、訛は耳に入間者、人の詞とは裏表、好かんといふのが好いたので、どうぞ樣を女房に、持ちとむないと明暮に、おもひ暮さぬおれが氣は、マア〳〵ドウどんなものぢやとおもやるな、オヽサ嬉しく御座るはと、詞はひね木もよの花、恥しがるがもどかしさ、お倉がよりて結ぶ緣、ほんに二人の戀風を、わしが引いたかぞつとする、サア兩方から押たり、しつかりと私を挾んで押たり、オヽさむ、まだ〳〵おしたり、そこで斯うぢやと身を跡へ、はづす機にぴつたりと、抱きあひたる妹脊中、顏を赤めてしよげりける。宗六「ハヽヽ中々でかしをつた、誠に往古曾我兄弟の人々、アノ富士の裾野にて、親河津の敵工藤祐經を討つたと有る、此度の門出に曾我物語をちくとん許りいたせ〳〵」與茂吉「イヽヤ合點ぢやない」浮『合點ぢやないと立上り、いやがる信夫無理やりに、相手に取つて滅多振、宗六煙管で拍子とる、さ

ワキ

太夫　宮園和國太夫
　　　宮園文字太夫
三絃　春富士龜藏
長歌　鈴木萬里
同　　鈴木友藏

造り物淺黃幕にて幕明けろ、ト口上出でふれ仕舞ふ、上手に出語。

淨瑠璃『遠山も笑ふがごとき春霞、たつや日數の積り來て、隙行く駒に戀といふ、重荷をのせて行く空の、雁は越路にかへれども、我は古鄕のつてだにも、しらぬ信夫と與茂吉は、跡にもつがひ蝶々の、草にこぼすや白粉と、紅のつやさへひかりよき、江戶繪姿の旅はどき。ト是にてチョン、花道中程せり上にて、宗六著附半合羽、お倉旅行の形、信夫同く與茂吉著流し、四人帶脚絆何れも旅の形にて見得よくせり上る、是と一緖に淺黃幕切落す、奧深に山つゞき、この奧へ富士山、雪つもりし體にて、しかぐとせり上る。淨『見あぐれば、鹿子まだらに雪きえて、麓に三保の結び松、浮島の原吉原の、宿から宿へ櫛の齒を、引きもちきらぬ旅人の、つれて上下の早飛脚。ト此淨瑠璃にて富士山の裾野、板松の間を旅人の仕出し、おもひく飛脚馬士など、子供にて遠見の模樣段々通る。淨『エイサッサく、扨も見事なおつどら馬よ、よそに往

雨車になる。近習「雨具の用意」ト笠合羽籠持出で、宮城野お力に袖合羽菅笠きせる、皆々もきる、但し花道の人數は其儘なり、宜しく有つて。背傳「何かは屋敷で、乘物やれ」近習「ハッ」ト近習戸を閉てる、直に雨覆ひをする。「おさき」行列皆々「ハア、」ト又所知入きつぱりとなる、行列の人數列を正し、宮城野お力此中へ交つて、各並よく向へ入る、宜しく入り切ると所持入かすめる、橋の下より臺七向ふを見送り、背傳が二人を匿まひしは心得ぬといふこなしをして、其身も屋敷へ紛れ込む心にて、四邊を見廻し、落散りし合羽笠を取り著て花道へ行掛る、ト橋懸より佐五平、宮城野を尋ぬる心にて走り出る、臺七一寸立廻り笠の紐をしめてツイト向へ入る、佐五平是を見て心得ぬこなしにて同く落ちりし笠合羽を取り手早く著て、笠を戴く、チョント木を入れる、こなし宜しく向へツイと入る、きざみ拍子木にて。

幕

道行

一入間與茂吉	あらし雛助	一しのぶ	藤川友吉
一びくに名月	吾妻藤藏	一宗六女房おくら	山下八百藏
一大福や宗六	尾上新七	一道者	大ぜい
一馬士	大ぜい	一仕出し	大ぜい

合羽籠、笠籠持ちつき出る、先手の七つ道具花道へさしかゝる時分に、橋懸より宮城野迯げ出て。
宮城野「御赦されませ〳〵」トいひ〳〵供先をわつて橋の上へ來る、皆々狼藉者すさりをらう〳〵と口々にいふ、宮城野右の通りにて、乘物橋半まで來る時分に、宮城野乘物近くなる。近習「ヤアヤアお乘物近く慮外な女め」トきつといふ、此時ばた〳〵にて西の方よりお力走り出で、此中へ入る。お力「ヤア宮城野樣」宮城「お力かいのウ」近習「無禮の女めいつそ」ト二人を包んで反打つ、お力、宮城野をかこひきつと身構へ、ト乘物の内より。普傳「者共まて」近習「ハッ」ト納まる。
普傳「乘物立てい」侍皆々「ハッ」トやはり乘物をかき上げながら、近習戸を開く、ト内に楠原普傳衣裝社袴家老職の拵にて乘つてゐる、行列並よくならぶ、所持入かすめる。普傳「奥州高館の家中杉本氏の娘宮城野」宮城「エヽ」お力「シテあなた樣は」普傳「内縁ある粟島の老臣楠原普傳、岩清水へ殿の代參、只今下向」宮城「御存の上は包むに及ばず、此身の上」お力「狙ふ敵は志賀臺七、正しく此邊に」トきつとこなし。普傳「狩人の矢矧に今宵泊りなば、明や渡らん豐川の浪」
宮城「なんと」普傳「淵瀬もしらぬ豐川を、迂濶には渡られまい、かくまひくれう」宮城、お力「エヽ」
普傳「屋敷にかくまひ助力して討して吳う」宮城、お力「エヽそりや御眞實で」普傳「刀にかけて」兩人「エエ忝ない」トをがむ。普傳「近習の者、かれらを供廻りの中に包み屋敷へ伴へ」近習「ハッ」ト

を渡つて追つかけ入る、ト是に摺違うて臺七橋へ戻り掛り。臺七「今のはたしかに」ト上を見送り番屋の書付を見てきつと思入有つて、霜の文字を殘らず消し書直さんとする、向より人が來る故こなし有つて欄干をつたひ、橋詰へかくれる、此時釣鐘止む、いつもの在郷唄になり、方々にて鷄啼く、夜の明けし體、是にて向より宮城野佐五平各々旅の拵にて出る。宮城野「佐五平、お力は何處で間違うたぞいの」佐五平「さればでござりまする、とかう申す内夜も明放れました、アレ／＼あれが矢矧の橋と申して、東國第一の大橋でござりまする、マア／＼ござりませ」ト連立ち橋の方へ來る、橋懸より軍吾曾平新吾出て、二人が橋を渡りかゝる所を右の人數雲助も一つになつて取巻き。新吾「宮城野主從、わいらうせるを待つてゐたわい」ト佐五平、宮城野をかこひ皆々を見て。佐五平「うぬらは臺七に頼まれ待伏をひろいだな」曾平「しれた事ぢや、奴ぐるめにたゝめ／＼」軍、新「合點ぢや」ト皆々佐五平へ懸るを、一々取つて投げ、ひらりと拔いて斬りちらす、是にて皆々橋懸へ迯げる、佐五平、宮城野を連れて追うて入る、此内臺七橋杙にかくれてゐるこなし有り、此内きつぱりとした所知入になる、ト橋の西の方より本行列、先手振、金紋の挾箱、大總臺笠立笠、長刀、各々抱茗荷の紋付、大鳥毛其外弓うつぼ猩々緋覆ひの鐵砲、高股立の侍、見事に振つて跡に乘物七草をふんで、數鑓、牽馬、跡押へ、茶辨當沓籠、

トきつといふ、こなし有つて。「いづれも來やれ」ト臺七皆々連れ橋を渡り上の方へ入る、此間始終本釣鐘、向ふばた〳〵にて官兵衛坊主頭の飛脚にて、お力と白木の狀箱を奪合出る、花道にて立止つて。お力「詮議有る官兵衛、マア此狀箱を渡しや」飛脚「うぬ殺す奴なれど、御用先が急ぐ、邪魔せずとそこ退け」お力「密書を渡しや」官兵衛「渡す事はならぬ」トもみ合ひながら橋の際迄來て密書を引出し奪合、トヾお力へ取る、官兵衛を捻ぢするながら、片手にひろげてよむ。お力「今夕岡崎迄著仕候處、杉本身寄の者共窺ひ候に付、又々上方へ引返し候、品により彼屋敷へ入込、暫らく身を密め候、猶追々御左右申べく候、早速大學様へ臺七より」トよんで。「すりや臺七は上方へ」トこなし有り、官兵衛はね返し斬つてかゝる、立の見得にて橋の半迄來る、お力立廻りの中、霜の書付を見て、臺七が書きし通りの文句をよみ、又密書を見て。「此密書とは相違せる書付」トちよつと思案して霜に書きしは僞とさとる心にて、官兵衛を取つて投げ霜の文字を消し、又指にて番屋の屋根へ密書の通りを書き能き程に官兵衛蒐り、立廻つて官兵衛よむ。官兵衛「敵臺七行先は上方にて御座候、身寄の人々上方筋へ御趣有るべく候、佐五平女房りき是を書遺す」トよんでお力を引退け霜を消さんとする、お力消さすまいとする、トヾ拔合ひ立廻つて。お力「敵の片われ」ト官兵衛を川中へ見事に切込む、刀をしやんと納め、橋

の合方に成る、ト向より臺七右の形、覆面頭巾にて顔をかくし、右京太夫九平太其外幕明の侍、此人數皆々少し急く見得にて各々橋へ差懸り、半まで來る、始終本釣鐘打つてゐる、臺七こなし有つて。

臺七「いづれも扨危險な目に出逢ました」右京「彼奴們が落合うて乘らうとは存じ懸がござらなんだ」皆々「さやうでござる」臺七「大學樣の御內意によつて、本國へ參らうとは存じたが、是ならば彼地迚も氣ぶさいに存ずる」右京「シテ上方へ引返すは」皆々「いづれを目當に」臺七「最然の密書に、楠原氏は城州岩淸水へ領主の代參下向の道筋、今宵池鯉鮒泊りと有る、是へ參つて一手にならば鐵石城に籠つたも同然、此やうすを密書に認め津輕官兵衞を飛脚に仕立て、大學樣へ遣はしてござる」皆々「それでわかりました」ト臺七思入有つて番屋の屋根の霜に指にて文字をかく、みなく見て。右京「なにく。西矢矧くれどの宿の横道より間道を越え、鎌倉表へ立越え候間、味方の人々追々此道筋へ來らるべき者なり、志賀臺七是を殘す」ト書く內によむ。九平太「ム、池鯉鮒へござる臺七殿が、鎌倉へ參ると書殘されしは」伴藏「鎌倉上方、上下の相違は如何でござるな」臺七「さればば杉本由緣の奴原、是非したうてくるは定、味方の者への內通をわざと彼奴們が見るやうにいたし置くは、扨は鎌倉へとぼつかけるは治定、そこを外して池鯉鮒へ參る當座の手段サ」皆々「御尤」ト向戸屋の內ばたくする、臺七見て。臺七「あれは確かに」

るこなし、軍吾、會平、新吾窺ひ出て。軍吾「力強の衒妻ぢや、ばらしてしまへ」會平、方吾「合點ぢや」ト會平、お力へ掛る、新吾、丈助が繩をとく、軍吾は信夫を引立にゆく、宗六、軍吾を引つかんで留る。お力「官兵衛が飛脚に成つたは慥に密書」宗六「おりや信夫様を伴うて遠州路を鎌倉へかけ抜けて、直に宇治のお屋敷へ」ト軍吾を取つて投げる。與茂吉「おれも供して一緒に行くまい」お倉「お力様は引返して」お力「シテ出合ふ所は」宗六「矢矧の橋の左手右手、手分して早う〳〵」お力「心得ました」宗六「信夫様ござりませ」ト信夫連れお倉與茂吉も跟いて奥へ入る、皆々お力へ懸るを、一々取つて投げる、ト踊りの太鼓三絃になり、是にて立色々有り、トド皆々向へ迯げるを、お力凛々しく見得にて追かけ入る、江戸騒になり、面白き鳴物を入れて。

返し道具

此鳴物に合せて舞臺端二重舞臺、共に一面にせり上る、舞臺惣一面の矢矧の橋、見事なる擬寶珠の高欄、橋懸はがんぎ、上の方行抜にて橋半ばの心、後は遙に矢矧川の氣色よき所に柳の大木、破風より一面にしだれ柳、右橋の半ばに誂の番屋有り、橋板高欄がんぎ陸地共残らず霜降の體、右取付宜しく道具納る迄騒ぎ鳴物賑しく有つて宜しく止る時分、本釣鐘にて明六をつく、是にて鳴物止む、常

りに取付ましたわいな」トいひ〳〵本舞臺へ來る、右の繩五間許長くして丈助は花道の中程にて迯げん〳〵ともがくこなし。宗六「手懸りとは耳寄どうぢや〳〵」お力「さつきの詞に轉顚する丈助が白狀、それ故直に引つかへしましてござりまする」宗六「シテ飛脚めはどつちへぞ迯げをつたか」お力「滅多に迯しは致しませね」ト繩を手繰る、丈助引摺られて來る。「サア今の通りを白狀さしやんせ」丈助「サア〳〵よいてや、今度は本違ひなしの白狀ぢや、臺七殿はさる公家方の贋綸符を以て東國へのお下り、今夜は此岡崎に泊つてござるわい」お力「扨こそなア」トこなし。お倉「そんなら今の」宗六「泊客に極つた、これ悅ばんせ、臺七は奥に居をるぞ」お倉「コレ忙しい中ぢやが、此子が尋る信夫様だ」お力「エヽ」トおどろく。宗六「そりや跡でいはれる事ぢや、マア〳〵敵討の用意〳〵」お力「此マア宮城野様や佐五平殿は、何處に居さんすぞいなア」ト向を見てそは〳〵する。宗六「なんでもマア臺七めを引立てゝ來うわい」ト奥へいかうとする、所へ與茂吉走り出て。與茂吉「是々今夜の泊人は皆侍めと一ツでないかして、俄に出立するといはずに、握飯をえらうさゝずに、皆連立たずと裏道から何方へやらうせなんだ〳〵」皆々「ヤア〳〵」與茂吉「其上盲按摩が大きな目球を明けずに、俄に飛脚にならずに、是もどつちへやらいかなんだ〳〵」宗六「ヤア〳〵〳〵スリヤ風を喰うたか、エヽ殘念な」トみな〳〵無念な

間へやりやんす」ト臺七「ムヽ座敷を變へて一獻くまん、更行く空が戀の晝時、納得させてつれて參れ」トいかうとする。宗六「アヽイヤお客樣、ちつと此方に尋ぬる註文、譯道の立つ迄は、一寸も動かしや致さぬ、宗六がかう申せば鐵の鎖に繫いだも同然、御酒でも上つてゆつくりと御寐なりませ」臺七「此方の用片付く迄は、動けとゆつても動きはせぬが、いでと思はば鐵の網、鐵のくさりも引切つて立歸る」トこなし有つて。「モウ何時で有らうナ」お倉「さればハ比でもありんすに」宗六「曉迄にゆるり二時」臺七「色よい返事を、どりや」ト信夫を目懸けて行くを、宗六引廻して立ふさがる、臺七ぢつとなつて。「待てをらうか」ト唄になり、臺七こなし有つて刀をさげ、悠々と奥へ入る、跡に兩人信夫を眞中へ連れ出て。宗六「宮城野しのぶが行方しれなば、鎌倉屋敷へ送りくれよと、宇治兵部殿のお賴み、お前が信夫樣で有らうとは、思ひがけがござらなんだ」お倉「ぬしも以前は甚内樣の御家來、佐五平樣の兄御だわな」宗六「宮城野樣にも佐五平夫婦にも、追付け逢はせ、敵も討たせますする、お悅びなされませ」ト兩方よりいふ内、信夫嬉しがるこなし有つて。信夫「御亭樣お方樣、悅び申すはく」ト宗六を拜み、お倉をも拜み、いそくと勇む。宗六、倉「オヽ道理ぢやく」ト兩人も悅ぶ所へ、ばたくにて向よりお力丈助を繩にてくゝり、ひつ立て走り出る。お力「サアくく手懸

宗六「イヤアノ小よしは、ちつと譯がござりまして、他所へ遣はす事はなりにくう存じまする」

臺七「身受さゝずばいつそ」ト宗六を引廻し入替つて信夫目がけてゆく、宗六止めて。宗六「イヤたとへお侍樣にもせよ、宗六が居間、襖一重は城廓同然、踏込まうとはちと理不盡かと存じまする」臺七「ム、是非手討に致すといはゞ」宗六「此場のいきづく、お侍でも相手にいたす」

臺七「はてなア、左程迄身にかへて女をかばふ汝が俗稱、いかにしても呑込めぬ」宗六「イヤ私よりあな樣の俗姓」臺七「なんと」宗六「堂上方の諸大夫と有つて、道中筋は繪符を以て往來をなされ、泊り〴〵の忍びの體、樣子が分り難う存じまするが、何御用有つてどれからどれへのお下りでござりますな」臺七「默らう、こいつ堂上方の所用相尋ねて何にいたす、身が吟味より汝身の上」宗六「こなたの本心」臺七「まつすぐにいへ」宗六「白狀さつしやれ」臺七「われが」宗六「こなたが」兩人「何をこしやくな」ト兩方より反打つて詰寄る、お倉引分けて中へ入り。

お倉「アヽイヤお二人のお身の上、明日迄わつちが預りやんした」兩人「なんと」お倉「ハテお侍樣なりお客なり、主は町人、どうかそぐはぬ立引だとおもふから、無事に此場は預りやんす」ト宗六こなし有て。宗六「いかさまなア、お泊りの客衆に、角目立つてもおちな物かい」臺七「シテ女が返事は如何いたす」お倉「サアそれもわつちが篤りと、言含めて後からお寐

の涙、たが節付けてよをうとう、扨こそ善知やすかたの。ト文句の中臺七は隅々へ氣を付け、人はこぬかと心遣ひのこなしにて、追廻はす、信夫迯げて隔の襖に行當る、此時に宗六襖を明る、直に信夫を我居間の方へ引廻はす、お倉信夫をかこふ、臺七、宗六を見てちやつと納める、宗六立塞がる、右の唄の終迄に此模樣宜しく有る、常の合方に變る。宗六「お客樣、さわがしい何事でござりまする」ト臺七こなし有つて。臺七「其方は此家の亭主だな」宗六「ハイ宗六でござりまする、見受けますれば何かお腹立の體だが、アノ小よしめが何ぞ不調法でも仕りましたかな」臺七「いかにも旅泊の徒然申付けた寐所の伽、添臥するをいやだといふから、嚇をくれて手に入れん爲、ハヽヽヽハア仁體千萬」ト刀を納める。宗六「なる程至極御尤でござりまするが、あの小よしめはまだお客樣の伽には出しませぬ、山出の白奉公人、それを貴方樣の寐所へお伽に出しましたは、コリヤ朋輩共がわるじやれでがなござりませう、お客樣御機嫌直しに、ナアくらよ、替りを上げませいやい、誰がよかろなア、賤機にせうか瓜生野か、イヤく道柴がよからう」臺七「イヤ外の女は望にない、其訛女奴を添臥させい」宗六「イヤ血氣さかんのお客樣へ、まだ初床の小よしめを突付けたら、てつきり跡が疵物でござりますわい」臺七「身請せう」宗六「エヽ」臺七「下女婢女にもせよ、遊女並の身の代を以て身請致さば、亭主言分は有るまいがな」

間者は變つた物いひだ、ウム〳〵」ト寐言をいうて寐る、お倉辛氣がる、臺七襖へ耳をよせて窺ふ事色々有りて、又信夫の傍へより。臺七「シテ汝が所縁の者に名乘逢うたか、まだ逢はぬか」信夫「敵は上方に居るとサア、先刻に野郎のお方が此屋體へ寐まり申して、姉さアも野郎も此岡崎近邊に居申すとサア」臺七「ムヽすりや所縁の者が此邊りに」トこなし。信夫「オヽサ赤腹はたれ申さぬはサア」臺七「ムウン」トきつとこなし。信夫「尋ねて逢はしておくりやり申せ、夫樣を賴み申す〳〵はサア」ト泣いていふ。唄『しぼる袂の露涙、野邊の幾重や通すらん。ト此中お倉の呟くを宗六ふと聞取り能う聞いて、扨はと起上り帶を締直し、ともに襖へ耳を寄せ聞く、臺七とつ置いつ思案する、こなし色々有つて。臺七「ハテ不愍な身の上だな、どうぞ其所縁の者に逢はして」ト擂寄り刀を拔かうとする、信夫見るゆゑ氣を變へて。「どうぞ逢はしてくれたいものだが」信夫「それ樣をたのみ申すよ」臺七「オヽサ逢はしてくれう」トこなし有つて。「あれは何だアレを見よ」ト指す、信夫見る、臺七斬らんとする、信夫おどろき飛のき。信夫「何ぶつきり申す、怖ない魂消申すよ」臺七「默らう此奴」ト振上げて追廻はす、此音に宗六帶を締め、刀を取つて來いと苛つこなし、お倉一腰を取つて來て渡す、宗六腰にたばさんでこなたを窺ふ、臺七は信夫を追廻はす。信夫「アレエ〳〵」ト迯廻る。唄『子は安かたの安からぬ、親は空にて血

て。「ア、憂世だなア」唄『おもひなき身に較べこし、さつと淺黄に染めうより、元の白地がまし

ぢやもの。「シテ父を人手に討れたといふは、其父の名はなんといふ、百姓か町人か、但しは商

人か」信夫「だよア は奥州で歴々の 侍さア、」臺七「ナニ侍、ム、シテ其父の名は何といふ」信夫「が

アまは生がひの時聞き申した、だよアの名は高館の家中でサア武藝の達人杉本甚内サア、」

臺七「ナニ甚内」ト驚く、お倉是に驚き寐てゐる宗六を起す、宗六うつよの樣に寐返り、蒲團を

かぶつて巨燵へ入る、臺七居直り信夫が形を見て。「ハテ侍の娘だよなア」トこなし有り。

信夫「だよアをぶつ切り申した敵が討ちたいから、朝な夕なにまつむ事よ、宮城野サアいつて腹

異の姉アも有り申すとサ、忠義の女郎も有り、其お方に野郎きれまさりのなこやも有り申すと

サ、早くめぐり逢つて一所に敵討たいとおもつてをるはサア、我等が國での名は信夫と申した

はさ」トお倉こなし。臺七「ム、姉の家來に奴夫婦」ト思入有つて。「シテ其敵の名苗字、所縁

の者が存じ有つてか、但しはしらぬか、どうだ〳〵」信夫「ナニサ顏はしり申さぬが、惡體な侍

だとサ、名は志賀團七サ」ト臺七ぎつくり、枕刀を引寄せ油斷せぬこなし。唄『さるにても、

憂しやつまのにせ紫の色わるう、窶れ顏見る悲しやと。ト唄の中臺七帶を後へ廻し、枕刀を

取つて行燈を押やり、隅々へ氣を配る、お倉は始終宗六を起す、宗六うつよのやうに。宗六「入

したとサア、おやつかに魂消申したく」トなく、臺七寐苦しき體にて枕を上げ寐ながら莨盆を引よせ、莨のむ、お倉急須の火を煽ぎながら、ふと信夫が聲を聞き、心得ぬこなしにて、襖へ寄り耳を立てる、信夫又涙を拂うて。「わけて悲しいはだゞアも人に切られてお死にやり申したとサア、生かひに對面をせないけりや悲しさも百倍、だゞアやがアまに死別れ申して、正眞の木から落ちた猿だわ、國を出申してから鑿方も槌方もしらないけりや、寐てはだゞアを思ひ出し、起きてはがアまを戀したひ、よつぱかり泣くらし泣つゞけて居申すわさ」トなく、お倉貰泣のこなし。「又是の家體は吉原の御亭の出店だわサア、江戸へ賣られて岡崎三界經巡り申してサア、おじやれ奉公をする事よサア、むかざれもせない身だから、夫樣と寐そべつてあたけ申すと、踵の皸引掛つてうつ切れ申すべい、がいにおぞい事だわサア、だゞアやがアまの死目にさへえゝ逢はない因果者サア、まだよつぱかりの年の內、何樂みに暮し申すべい、此身の憂を思ふに付け、だゞアやがアまの冥途から」唄『鴛鴦の片羽のとぼくと、子に迷ひ行くさゞよ千鳥。「逢ひたく思つて迷うてがな居やり申ぞ、それが悲しくおりやり申すわサア」ト大泣き。唄『泣いてくどくぞ哀れなり。ト右の間臺七始終よその事の樣に聞くこなし有つて。臺七「いかさまなア、人の行末と水の流れ、奥州とあれば身共とても」ト身の上に引當てゝこなし有つ

信夫「うん共はづない東奥州だ、ア、」臺七「何さま仙臺訛と見ゆる、シテ奥州はどの邊りだ」信夫「奥州は白石近在逆井村と申す在所だわさア」臺七「逆井村、オヽ遙かの片田舍より此岡崎へ身を賣つたは、親孝行の爲か、さうか〳〵」ト信夫しやくり上げ荐りに泣く。「ハヽヽヽ、何それを泣く事が有る、親の爲に奉公致すは汝耳だないわよ、どの女でも皆其通りだ、泣く事はない、ヨヨ、チヱ鼻汁かんでくれう」ト抱寄せて涙を拭うてやり、色々深切なるこなし、信夫やうやうに顏を上げて。信夫「それ樣が深切にいつてくりやり申す程、甚に悲しくなり申すよ、かう寐そべつて寄添ひ申すもサア、先生の緣だとおもつて、哀れな身の上を一ト通り聞いておくりやり申せサア」ト臺七吐息をついて。臺七「こりや客ではなくてお守役だは、ハヽヽヽ、どりや枕の伽に承らうか」ト枕を取つて夜著を著て横になる。內にて唄「憎くや男の當言を、聞いているさの障子より、もれ出る月は冴ゆれど胸の闇。ト此內宗六居間の心にて宗六巨燵にあたり寐てゐる、此傍にお倉寐巻の形にて急須を置き煎茶をしてゐる、仕切の襖緞子張の引拔に成り、信夫涙を拂ひ。信夫「語るに就いてがいに悲しいうん共が身だはサア、まだ出張らない其內に、父アにはなれ、只一人の大事の母ま、づない大病をおうけやり申して、人參の價に吉原へおしやらくに出申してサア、はるか後に聞き申せば、人參の効驗もなくつて、がアまはお死にやり申

遠慮はない是へ來よ、ハテこよさ」ト手を持つて引寄せる、右唄のめりやす、信夫始終泣いてゐる、臺七顔を覗いて。「ハテ田舎にも京だなア、年はいくつだ、名はなんといふぞ」ト又顔を覗き。「なんだ泣くか、ハヽヽヽ何ぞ怖い者の傍へ來たやうに、何の泣く事が有るぞい、アア聞えたわい、年格好といひ、汝はまだ初だな、初だ〳〵初ならば道理だわい、コリヤ何にも泣く事はない、恐しくおもふならどうもせぬは、旅宿の徒然に咄でもするわさ、ヨヨ、機嫌直せ、もう〳〵泣きやんで機嫌よくいたせ」トいひ〳〵信夫の振袖をいらうたりして少し氣の動くこなし有つて。「サア寐よ、どうもせずに」ト始終こまづける様にいふ、信夫かぶり振つて泣く、臺七持餘し。「こいつ一向初心者だ、われどうで一度は渡らねばならぬ川だ、身が淺瀬を教へてくれう」ト引寄せる、信夫ひつしよなく振切つて大泣き、臺七ほつと吐息をつき。「是は又難儀な守をする事だな」トちよつと思案をして。「ム、コリヤ何か、なんぞ仕落でも致して親方の折檻にあつたといふ様な事か」ト信夫かぶりふつて泣く。「但しは朋輩共と諍論でも致してそれ故の事か」ト信夫かぶりふりなく。「ム、さうでもない、然らば又何ぞ身の上に悲しい事が有つて、更行く夜半に有りし昔を思續けて、それでなくか」信夫「ア、〳〵」ト返事してしやくり上げてなく。臺七「ム、夫れならば道理だ、汝は遠國者と見えるが、生國はどこだ」

大望ある拙者でござれば、命は大切、それ故かく堂上方のお名をかり、贋綸符を以て往來致す儀でござる、かの魏の國の曹操と申すは、數多度敗軍を仕り、ある時は髭を燒かれ、又或時は赤裸體になつて逃げさまようてござるが、終に其艱難を凌いで志を遂げ申してござる、大功をなさんず者は細瑾を顧みずと申す、身共迚も先其通り、必ず卑怯者だとおさげしみ下さるな」右京「何しに左樣存じませう、貴殿一味の野々宮宮内殿に賴まれ、彼地迄付添の我々、萬一の時はお力に相成り申す」九平太「イヤそれに就き旅宿のお氣欝ばらし、御寐所のお伽を云付けてござる」伴藏「數多有る遊女の内、拙者が見立てました女、ちと詞に訛はござれど至極の標致でござる」右京「なんとお夜伽は如何でござらうな」臺七「ハヽヽそれは一興、いか樣にも仕りませう」トお露お松出て。お露「もうお休みなされませ、是へお床を取りませう」ト二人して寐所を敷き枕を並べ、しか〲あつて。お松「申しお差圖のお子をおこしまするぞえ」三人「早く連れて來やれ」露、松「はい〱」ト入る。臺七「いづれもには明朝」三人「御意得ませう」ト胡弓入妹脊川の獨吟になり、三人入る、唄「口舌は宵の夢なれや、二枕の妹脊川、袖から袖へ手を入れて、ぢつと〆たる下紐の。ト唄の中、信夫寐卷の形にて出て、蒲團の端にすわり、しく〱泣いてゐる、臺七莨のんでゐる。臺七「ム、伽に參つたは汝か、太儀だな、是へ來よ、そこは蒲團の端だは、

よ」一　宗六「早ういかんせ」一　おカ「いて參りませう」一　ト花道へつか／＼といて、丈助を鐵砲ざしにさし上げる、兩人見て。宗六「江戸の女中はとんだものだ」一　ト江戸騷になり、おカ右の見得にて向へ入る、宗六お倉を連れ奥へ入る、しやん／＼と暮六の鐘なる。

返し

見附の障子一面に開く、但し西にて二間許り引殘す、正面離座敷の體、眞中に臺七百日浪人の拵へ、著流し前帶にて結構なる夜具に乘り、遠州行燈の傍にて狀を讀み居る、刀掛に刀を懸け、後に屛風立て有り、其脇に右京大夫、九平太、伴藏、控へ居る、江戸騷ぎ止む、靜かな合方になり。

右京「楠原氏より丈助を以ての密事は、如何體な儀でござるな」一　トいふ内に臺七よみ了ひ。臺七「それ披見めされ」一　ト狀をほうる、右京太夫取つてよむ、九平太伴藏も見る。右京「こりや是眞逆の時は彼屋敷へ」一　トいふを臺七おさへて。臺七「イヤ是」一　ト邊りを見て向へ出て。「別座敷の儀なれば他聞は有るまじとおもへど、用心に如くはござらぬ、密かに／＼」一　右京「御尤」一　ト狀を戻す、臺七火鉢引寄せ、狀を火中してこなし有つて。臺七「杉本の緣者の手に立つ者は只一兩人、さのみ苦勞には存ぜぬが、宇治兵部之輔助太刀を加へ、忍び／＼に身を窺ふと承る、

ござるぞいな」お倉「お前が尋ねてなら知れさうなものだぞえ」宗六「如何樣手先の女衒共を尋ねたら、しれぬといふ事は有るまい、それはそれにして何卒敵の手がかりを聞出したいものだが」ト此時お力最前飛脚が捨置きし刀を取り、不思議さうに見て。お力「こりやこれ見覺有る安達丈助が刀、ハテ心えぬ」トこなし、この內飛脚實は丈助刀を取りに出てゐて此時。丈助「南無三其力を」ト取らうとする、立廻り有つて。お力「扨こそ丈助殿、よい所で逢つたなア」丈助「お力めで有つたか、わるい所で逢つたなア」宗六「すりや其飛脚めは」お力「敵の馴合、臺七が行方眞直に白狀なさんせ」丈助「イヽヤ樣子有つて國をふけつたれど、臺七が行方はしらぬわい」ト振切つて迯げんとするを取つておさへ、膝に引敷き。お力「白狀さんせずばかうしていはす」ト腕をいためる」丈助「アイタヽヽ、こりやいふ程に緩めてくれ、目が眩ふわい」お力「サアいはしやんせ」トゆるめる。丈助「臺七殿は去年以來上方に隱れてござつて、今度伯父御の方から內通が有つて、本國へ引返へす積り、今夜の泊りは御油か赤坂か、吉田三川濱松でも有らうか、そこ迄はしらぬわい」お力「すりや臺七は」ト丈助起きようとするをぐつと抑へ。「扨こそなア」宗六「呑込めぬ白狀だが、マア其奴を目見に連れて、近邊の宿々を詮索して見たがよい」お力「宮城野樣や佐五平殿が見えましたら」ト丈助が片手を持つて引立てる。お倉「止めまして置きやんすわ

我身ながらも阿呆のうはもり、どうぞ元の侍になりたいと、遅蒔ながら武藝の稽古、今鎌倉で名の高い宇治兵部之輔殿の弟子に成つて、間がな隙がな入込む内、或時師匠がおれを呼んで、密のお頼み、杉本の家來はのがれぬ事が有つて、助力をせねばならぬ筋合、幸ひ其方岡崎に出店もあれば、旅人に心を付けて、もし由緣の人と見るならば、早速屋敷へ伴ひくれよとのお頼み、畏つたと請合うた其日より、此岡崎の出店へ來て、夜は泊人に心を付け、明れば野がけの遊山のと、方々を驅あるくも、お主達に尋ね逢はんが爲、いひこそせね此宗六が心盡し、お内儀推量して下んせいの」ト泣いていふ。お倉「わつちが口から主の事いふは異なものなれど、商賣こそ賤しけれ、人にかうと頼まれちやア引かね氣性だわえ、シテ其宮城野樣や佐五平樣は何處にごさんすね」お力「されば途中の内も人目立つてはいかゞと存じ、日の中は別れ〳〵、先程表へ笠の印を頼みましたが、どう道が間違ひましたか心懸りに存じまする」宗六「イヤ〳〵、たとひ違うても、池鯉鮒迄はござるまい、明日早々岡崎の宿屋〳〵を尋ねたら、ツイしれる事だ、シテ宮城野樣の妹御のしのぶの樣行方はしれてござりますかな」お力「されば樣子有つて江戸吉原への御奉公、その節尋ねましたれど、何を申しても親方衆の名を存じませねば、今に於いて得めぐり逢ひませせぬ樣にござりまする」宗六「ハテナ、吉原は手前の町だが、ハテどこに

た様子は」兩人「どうでござりますな」お力「親旦那様不慮の横死は、世の風説にもお聞なされたでござりませう、御由緒と申し殿様のお覺え厚き家柄なれば、敵を討つて家を立てよと、御息女宮城野様に敵討のお暇を賜はり、夫佐五平、この力も諸共に、本國を出立、敵は同家中志賀臺七と知れながら、尋ぬる日數も一とせ餘り、今に於て有所もしれず、國元の噂をきけば、伯父大學様の計ひでお屋敷も召上げられ、奥様磯崎様にも御出國の風聞、又宮城野様に腹異りのお妹御しのぶ様、此お行方も知れませず、お主の御在所、敵の有所も尋ねん爲、一先上方を心ざし、四國九國の果迄も、草をわかつて尋ねん爲、不思議に今宵此お宿へ泊り合せ、婢衆のいふを聞けば、本家は江戸の吉原で大福や宗六様、扨は夫の咄に聞いた兄御様の内方へ泊り合したも不思議の御縁、東海道は諸方の往來、もしや敵の手がかりにもならんかと、お尋ね申した今宵の時宜、様子と申すは此通りでござります」ト宗六こなし有つて。宗六「くら、汝はまだしるまいが、此宗六が親父様は島田三郎左衛門というて、杉本甚内様の家來、其倅の島田三郎兵衛、若氣の放埒で親仁様の勘當受け、それにも構はず吉原へ入り込み、大の通ぢや通り者ぢやといはるゝが嬉しうて、とう／＼大福屋へ入聟、弟左五平がお主達の力と成つて敵を尋ねる憂き艱難、それに引替へ此兄は、茶會ぢやの誹諧の附合のと、揚句には妾迄を置きまはつて、

出て、此體を見て。「是はしたり、何事でござんす、マア〳〵しづまりなさんせ〳〵」ト色々して引分ける、お倉お力が胸倉を取つて。お倉「一體お前から起つた事だ、主にはわつちといふ妻が有るわいな、何故あんな濡文を送りなんした、濟まぬわな〳〵」トお力をふり廻す。お力「これは迷惑な」トこなし、宗六お倉を引退け。宗六「先刻に手紙を遣はされましたは、お前でござりますかな」お力「左樣でござりまする」宗六「終に逢うた事もなし、先刻の狀では筋合が解らぬ、樣子はどうでござりますな」お倉「何さわかつてござんすわいな」宗六「默つて居い、シテ樣子は」トお力四邊を見て。お力「お差合はござりませぬかな」宗六「誰も聞く者はござりませぬ」お力「私事は奧州高館の御家中、杉本甚内樣の家來、佐五平が女房、力と申す者でござりまする」宗六「ムヽすりや此宗六を佐五平が兄と知つて」お力「態々お尋ね申しました」お倉「イヽエそりや嘘だ」ト右の文を取上げ。「これ此文に杉印方にてさ印のつ印にて御座候と、遣手の杉に世話さして、お前の名はおさつさん」お力「イヤ杉印は杉本、さ印は佐五平、つ印は妻と申す事、杉本身内の佐五平が妻と申すのでござりまする」お倉「エヽ」宗六「それ見あがれ」お力「人目を憚る隱詞でござりまする」お倉「すりや佐五平樣の」宗六「内儀であつたか」宗六、お倉「是はしたり」ト一時に膝を叩く、合方になり、宗六お倉眞中にお力をはさんで。お倉「シテお尋ねなされまし

を取つてほうる。與茂「何ぢやしらぬが無上に腹が立たぬ、ねつから腹立たぬわい」トあぐらかいて坐る。信夫「是サアぎしみ申すな、御亭があだけ申しても、我共は忌だわサア」ト宗六の顔を振袖にてうち與茂吉の傍へすわる。宗六「汝がいやでも俺が應だ」ト又信夫へかゝる、お倉宗六が顔を平手でくらはす、宗六お倉をくらはす。お倉「たゝきなんしたぞえ」宗六「くらはしたらどうするぞい」お倉「あんまりだわな」ト莨盆を打付ける。宗六「措きあがれ、はつつけめ」ト菅笠を以つて打付ける、お倉も菅笠を打付ける、是より兩人の荷物行李、風呂敷包、土產物など、出たらめに打付ける、與茂吉も調子に乘つて打付ける、信夫うろ／＼する、都て右の間信夫の仙臺者と、與茂吉の入間者と、お倉吉原風、宗六大通、各々身分の癖宜しく心得あるべし、此模樣ドヽ宗六お倉を叩きに蒐る、信夫止める、宗六信夫に取付く、お倉引のけ。お倉「小よし手前は爰にゐずと奧へいけ／＼」宗六「入間者も邪魔になる、奧へいけ／＼」與茂「合點ぢや」ト下にすわる。宗六「エヽさうぢやないわい、奧へいくな」與茂「オツトせう」信夫「寢そべつて話すべい、御亭のおしやらくにはなり申さない、來のめせ／＼」ト與茂吉も連れて奧へはいる。宗六「サア差向に成つてせりふする、いふ事が有るならぬかせやい／＼」トお倉が胸倉を持つてねぢ付ける、此内橋懸の襖よりお力出て。お力「お返事が有りさうなものぢやが」トいひ／＼

目を付けて。「なんだか人が知らないとおもつて、昨夜も四疊半へ連れていつて、コレ小よしぼや、手前にとんだいきつきだ、兩國の火の見だないが、登詰めたの何のかのと、何だか氣の廻つた蔦のやうに、がらみ廻つて、エヽ舌たるい、染々好きんせん」ト與茂吉信夫を見て腹立つるこなし。宗六「こりややィ、あの小よしめは外の朋輩と違うて、正道な者ぢやに依て、常から可愛がるのぢや、仇口いうた事を本間にさらすからは、よい是からはまた小よしを妾にして、毎晩々々抱いて寐てこます」お倉「ねらるゝなら寐て見なんし」宗六「オヽ寐て見せる、見てけつかれ」與茂「サア〳〵氣體が悪うない、腹立たぬぞ〳〵、金輪際腹が立たぬわい」トぴんとする。信夫「モシヤアいびり申すな、てんこちもない俺はいやだわさア」宗六「いやがる所を抱いて寐るのぢや、來い」ト信夫を引ぱる、お倉わけ入る。お倉「措きなんし、寐さす事はならぬわいな」宗六「邪魔さらすな、退きさらせ」トお倉を引退け信夫へ蒐る、與茂吉止めて。與茂「どつこい是ばかりは俺が邪魔せぬ、オヽ金輪際邪魔をせぬぞ」信夫「コレごゝ樣、俺はおぞい事はせないわさオヽ」トお倉へ言譯するをぴんとして。お倉「手めへは其氣で有らうが、主が悪性がすきいせん、なんのこつた馬鹿らしい」ト持つてゐる煙管を打付ける。宗六「男に向うて投打をさらすかな、こりやヤィ汝が煙管をぶち付けるなら、俺は兩國橋でもぶちつけるわい」ト火鉢

前が逢ひなんすもわつちが逢ふも同じ事だ」宗六「待いやい、われが其悋氣も久しいものだ、よい加減に取措いでな」お倉「取措いたら勝手はよからうが、さうはなりやんせぬ」トぴんとしていふ、宗六腹立て。宗六「措きあがれ、いはして置けば可いかとおもつて、男の面をびつしやりくらはしの、莨ばく／＼の、やに下りで田舍芝居の梅ケ枝かなんぞのやうに、煙くらべん淺間面が忌々しいわい」トける。お倉「どうしなんす」トお倉立懸る、信夫お倉を止める、與茂吉宗六を止める。與茂吉「是々腹は立つまいけれど、もう／＼／＼堪忍さんすな／＼」信夫「ま樣も女郎さアも、もう／＼よつぱら立ちやり申すな／＼」お倉「小よし默りや、手前も譯がある、主が常からの目遣ひ、よく知つてゐるのさ」信夫「めろさア、おぞい事はしらないわサア」お倉「手前隱しやつても、お松やお露によく聞いてゐるのさ」宗六「聞いた事が有るならぬかし上れい」與茂吉「おれが聞人になつてやらんは、其樣子をいはんすな／＼」お倉「入間や、手前はしるまいが、一體主は吉原で大福屋といつちやア女郎衆の百人も有る揚屋だわの」與茂吉「ム丶、揚やの筋承知せんは」お倉「わつちやア元吉原の女郎だ、ぬしに請けられて此岡崎の出店を妾宅にして、ぬしの身體を預つてゐるのさ」與茂「よし合點がいかぬは」お倉「あの小よしは、江戸へ取つた子飼だが、容色がよくても訛だから、わつちが方へ引取つておじやれにして遣うのさ」ト宗六へ

ましてくれいと、此お文を遣してござりました」宗六「何ぢや表の女子客が狀をおこした、どれ」ト狀をとる、此內お倉出かけ見てゐる、宗六上書を見て。「宗六樣まゐる、泊り客より、ハテなア、何ぢやしらぬが跡からお返事いたしませうといへ」お倉「アイ〳〵」ト入る、お倉こなし。宗六「誰ぢやていなア」トいひ〳〵狀をひらき。「誠になれ〳〵しき御事ながら、文して御とはせ申上り〳〵、我身事は御存じ遊ばされ候杉印方にて、さ印のつ印にて御座候」ト讀みさし合點のいかぬこなし、お倉脇より文を引つたくり、默つてよむ、宗六見て。「くら、手前いつの間に來た」お倉「今來やんした」ト宗六を尻目にかけながら狀をよむ。「杉印方にてさ印のつ印にて御座候、委しき事はおめもじに申上げたく、人目を憚り候へば、密に寐所迄御忍び下されまし候やうに、くれ〴〵も待入り〳〵」トよみちよつと思案して。「樣子がわかりんした、杉印は遣手の杉サ、さ印つ印は女の名だ、宵に泊つた一人の旅の女中、合點がいきんしなんだが、主やア色をしなんすの、馬鹿らしい」ト狀を打付けぴんとする。宗六「エヽ何いふぞい、コリヤ的然と間違で有らう、マア俺が逢うて見やう」お倉「さういつてわつちを欺さうでか、さうは乘られぬわな」宗六「はて扨覺えがあるならあるといふわさ」お倉「措きなんし噓だ、お前には逢はさぬ、わつちが逢ひやんす」宗六「ハテお客は俺に逢はうと言うてござるわさ」お倉「べかこう、お

宗六「それかね」ト三九が顏へ突付ける、ぢつと控へてこなし有り。「三九、わりや目が見えるか」三九「エ、」宗六「蛙の頰はる按摩でも、此金ばかりは滅多には摑むまい、但し摑むか」三九「サアそれはな」宗六「ほしがる金ぢや、なんで摑まぬ」三九「サア」宗六「つかめやい」三九「サア」兩人「サア〳〵〳〵」宗六「今夜の花ぢや辭儀せずと受取つておけやい」ト燒火箸にて面をくらはす、三九じり〳〵舞うて。三九「ヤレ人殺ぢや、熱いわ〳〵」ト顏をかゝへてそこら中を驅歩く、飛脚いろ〳〵有つて。飛脚「いつそうぬ」ト拔いて切つて行く、軍吾も懸る、三九迯げんとするを與茂吉立塞がつて止る、宗六軍吾を取つてなげ、飛脚をぽんと當て、又其間に三九迯げるを宗六引戻し取つておさへ。宗六「こりや動きあがるな、小よし其荒繩もて來い」信夫「オヽオヽ」ト持つてくる、宗六、三九をくゝる、所へ侍旅人みな〳〵出て。侍旅人皆々「おいらが盜まれた金は」宗六「皆取返して置きました、盜人は此奴ぢや、引張つていて苛虐んだ〳〵」侍皆々「合點ぢや〳〵」ト三九ほやくを、皆々大盜人め、うせう〳〵と捨白いうて引立て入る、此間に軍吾飛脚に息を入れ囁き、二人共密とぬけて入る。宗六「サア是からは飛脚めぢや」トそこらを見て。「こりや飛脚めも獅子めも何處へやらうせた、ても迯足の早い奴らぢや」ト此時橋懸よりお露封じ文持ち走り出て。お露「申し〳〵表座敷に泊つてござる女中客、貴方へ上げ

飛脚「なる程〳〵、それならば高直に買うた筈ぢや、よい〳〵俺が取替へて遣はさう」ト橐の金を出す、此間に宗六飯櫃の金を出し懐中する、飛脚小判を出して。「金子十六兩、大方これでよからう」ト三九に持たす。三九「よし〳〵百貫を金に直して拾六兩、それ飯の代ぢや」宗六「相場に合はしては不足なれど、馴染がひにさうもなるまい、それ飯ぢや」ト渡す、三九取つて。三九「馴染がひに高い飯ぢや」軍吾「百貫の方に編笠は聞いたが、飯一櫃とはハテ高いものなア」ト宗六受取りし金子を見てこなし有り。飛脚「なんと按摩奥で一療治頼まうかい」三九「參りませうとも」飛脚「サア越後獅子も來やれ」宗六「三人ともまつた」軍吾、飛脚「用が有るか」宗六「お飛脚は、何處屋敷のお飛脚樣だなア」飛脚「駿河府中屋敷の家來だ、それがどうした」宗六「三九から受取つた此金、此出所もお前樣だの」飛脚「いかにも俺が金だ」宗六「これ此金を見れば一兩〳〵高といふ字の極印、こりや是奥州高館の御用金、五千兩餘の紛失と有つて、道中の宿々へ配符をもつて密かの御詮議、府中の屋敷のお飛脚が、高館の御用金はどうして取持してござりますな」飛脚「サ其儀は」宗六「どうでござります。トサアおれが殿樣か庄屋殿ならば詮議するすべも有らうが、町人の身でとやかういふも野暮の內かい、なア三九」三九「左樣とも〳〵、金の極印がお氣に入らずば、其金をこつちへ」ト取らうとする、其手を叩きのけ火鉢の鐵架を取つて。

る。「入間殿、其飯櫃を取つて來て下んせ」ト與茂吉飯櫃を取つて來て宗六へ渡す、三九悄りする。「どりや手盛に仕らうか」ト飯櫃へかゝる、三九驚き探り寄つて宗六に取付き。三九「ア、是々此飯喰はす事はならぬ〳〵、オ、ならぬ事ぢやぞ」宗六「妙な事をいふわい、僕が宅で僕が口で、おれが飯をおれが喰ふに、構うておくれな」ト蓋を明けようとするをとめて。三九「アア是々、是は又情ない事ぢや」ト天窓かき〳〵色々有つて。「よい此飯買はう」宗六「なんと」三九「サア此飯が賣つてほしいが、何と賣つて下さりませぬか」宗六「變つた物を買いたがるなア、そりやはや喰ひかゝつた飯でも、値がよくば賣るまい物でもない、がマアなんぼ位に買はうと思ふ」三九「さればなア旅籠を百廿四文と積つて、此飯一ぱいを三百文に買ひませう」宗六「三百でも五百でも一貫でも否だよ」ト又蓋を明けうとする。三九「サア〳〵そんならば飛んで五貫ぢや」ト又明けるを止めて。「どつこい一飛に廿貫ぢや」ト又明けるを止めて。「ム、五十貫。でもまけまい大飛に百貫ぢや」宗六「百貫か、可いは、負けてもやれ」三九「まかつたか、ア、嬉しや」ト落付く、此間飛脚、軍吾びく〳〵して飛脚、三九の傍へいて。飛脚「是さ〳〵、飯一ぱいを百貫とはどうだぞい」三九「どうのかうのはない、先刻に働いたかのな」トあの櫃に盗んだ金が匿して有ると呑込ます。「ぢやによつて百貫に買うたのぢや、お前取替へて下さりませ」

えが有るとは覺えがないといふのか」與茂吉「是々さうぢやない、さうぢや」飛脚、軍吾「さうでないとはやつぱり盜賊」宗六「是はしたり、あれがやつぱり入間ぢやわいの」飛脚「あれが入間か、なんだかどき／＼して頓と分らぬ、入間でもぬるまでも盜人に違ひはないわい」軍吾「オヽさうぢや、引摺つていて詮議する、うせう」ト與茂吉を引立てんとする。宗六「イヤさうはなりますまい」飛脚「ならぬとはどうしてならぬ」宗六「堂上方の泊り客に道切した狼藉と有つて、明日の朝迄は俺が預り、外へ手放しては預つたお客へ言譯がない、何と左樣なものぢやござりませぬか」飛脚、軍吾「シテ盜まれた金子は」宗六「詮議して差上げます、ハテ泊つたお客は十方旦那、金銀にちちうが有つたら、何百兩でも辨へて出すが宿屋の大法、金さへ戻りや可いぢやござりませぬか」飛脚「ハテ廣い腹中ぢやよなァ」三九「高で其日過の按摩なれば、疑はれまいものでもないぢやによつて詮議するのぢや、オヽ金輪際詮議するぞ」ト宗六莨の煙を吹懸ける、三九むせぶ事色々有り。「出る杭が打たれるぢや、もう／＼何にも」ト淨瑠璃にて。「いはぬがいふにいや勝る、暇乞さへ泣顏に」ト駒太夫にて語り／＼引込む。飛脚「措きあがれ、淨瑠璃おもしろくないぞ、サア亭主金子の立引はどう付ける、どうだ」宗六「ハテ夜明迄には譯立をいたしますわい、小よしよ、おりやまだ夜食を食はぬ、其膳をもつて來い」ト信夫膳を取つて來て宗六へする

て見たがよい、忽ち飛梅の名號ぢや」ト飛脚宗六が傍へいて。飛脚「お主が此家の亭主大福屋宗六だな」宗六「アイ宗六はわしでござります」ト煙草盆持つてすわる。飛脚「ムヽ宗六見知つたよい男だ、江戸吉原の大通といふ事は、六十六ケ國に隱れがない、其大通たる宗六が、盜人の宿をするか、イヤサ旅人の金を盜ませうてよするのか、盜賊の同類か」宗六「是々コナ奴殿は、とつけもない事をいふお人ぢや、シテ誰が金を盜みましたな」三九「そこにござるお飛脚殿を始め、大勢の泊人の金を盜んだ、其盜人といふは」宗六「やかましい、汝には問はぬわい」三九「ハイ〳〵」ト跡へよる。飛脚「大切な御用先の路銀が紛失致したわい」軍吾「おいらが身ばれに友吟味するのぢや、此丁稚奴が胡散なによつてそれでの打擲」飛脚「踏んで〳〵踏のめしたがどうした」宗六「ハテなアヽシテ彼の若い者が金を盜んだといふには、證據でもござりますかな」三九「證據といふは玉川三九、私でござりまするぢや、目こそ見えね、こんな事を嗅いで廻るわたしが役目ぢやによつて」宗六「又さし出るかい」三九「ハイ〳〵」ト引込む。飛脚「證據はなけれど押推に詮議すれば、なる程覺えがあると吐す、彼奴が口から覺えが有ると白狀ひろいだによつて」宗六「そこが間違ひ、あれは入間で產れて入間詞を遣ふによつて、いふ事が裏腹、覺えが有るといふは覺えがないといふのさ」飛脚「ムヽ何といふ、入間詞を遣ふに依て、覺

うて、えらいめに逢しもせず、爰の旦那が預りもせず、世話にもならずに、それで爰に居ぬのぢやわいのう」ト信夫四邊を見て少し寄添ひ。信夫「行末和郎と女夫にするとサァ、母樣の常常にお申しやり申したわサァ」ト膝へ凭れかゝる、與茂吉引退け。與茂吉「おりやそんな事は恥しうござんせぬ否ではごんせぬ、忌ぢやない〳〵」信夫「ハテなじびを嫌ひ申すか、其ぐだまが甚にめごいわさァ」ト又抱付く。與茂「エ、とつと思や恥かしうないわいの」信夫「わらしは嫌やり申すか」與茂「なんのいの、眞實は愛しうごんせぬ」信夫「それならばなじび申すか」與茂「せう事がない、女夫に成るまい」信夫「赤腹はたれ申さぬか」與茂「ム、ほんまぢやない〳〵」信夫「與茂吉」與茂「信夫樣」信夫「めごいわいのウ」ト取付く。與茂「ねつから愛しうはごんせぬ」ト同じく取付く、此時飛脚、軍吾、三九もさぐり出て。飛脚「こりや動ぎ上んな、宵から金の見えんのは奴が働いたのだな」與茂「是々おりや胡散な者ぢや、オヽ胡散なものぢやぞ」軍吾「胡散なと吐す、踏のめせ〳〵」ト皆々立掛つて打擲する、信夫止めるを三九さぐり寄つて引のけ、同じく與茂吉を踏付ける、此時奥より宗六膳を持ち出て此體を見て、膳をかたへに置き、ずつといて飛脚、軍吾を取つて投げる、三九寄るを握拳にてはる、信夫、與茂吉を介抱する、飛脚起きて。飛脚「アイタヽヽ、ても酷い目に逢はせをつた」三九「けれど目の球がなければこそ、有つ

そりやさうと晝飯のまゝで腹がげつそりと減らん、所で用意の握飯を出しかけまい」ト懐中より竹の皮に包みし握飯を出してくふ事あり。「味ないはく、空腹うないによつて偉うもない」ト味さうにして喰ふ、所へ奥より信夫座敷へ火鉢を持つて往く體にて出て與茂吉を見て。信夫「こな和郎は何をしてゐめすサア」トいひく火鉢をそこに置く、此時顔見合せ悔りして。與茂吉「ヤア信夫樣か」信夫「モシヤア與茂吉でないか」與茂吉「オヽ信夫樣ぢやないハア」ト驚き握飯を咽につめ術ながる、信夫脊さすり介抱して。信夫「是サア氣をおつきやり申せく」ト與茂吉胸を撫おろし、やうくに氣をつけ。與茂吉「ヤレくあんまり思ひがけ有つたによつて、すんでの事握飯と心中しよまいとした、信夫樣、お前が爰にゐやんせぬ事は、狼狽へた神樣も御存じ有る事ぢや、マアく能い所で逢はなんだのウ」ト信夫ちよつとなく。信夫「うん共が奉公に出よつた跡で、がアまもお死にやり申し、だじアも斬られ申したと、人の噂に聞き申したはサア、わらしはあぜ來やり申した、不思議に逢つてたまげ申すはサア」トなくくいふ、與茂吉も泣いて。與茂吉「オヽ道理ぢやないく、去年の春でもない、國屋敷でもない處で、父御甚内樣に始めて逢はず、其日に殺されて死にはさつしやれなんだ、此事をお前にしらすまいと思うて行方を尋ねずに、うかく東海道の方を來なんだれば、殿樣のお通りの道を切らなんだとい

子に成るも過去の約束でがなござらう」新吾「なんと官兵衛殿を師匠に致して、ちと小盗みなりと習ひませうかい」三人「ハヽヽヽ」三九「是サ〳〵旅人の耳が近い、靜に〳〵」飛脚「紛失の金を囮にして、身共が思案は是」トさゝやく。三九「ムヽすりや貴殿の金も紛失といひ立て、ムヽよしよし」トいふ内右京太夫ふと目を覺し、枕元の金がない故。右京「南無三、路銀が紛失した、皆起きいよし」皆々「ヤアヽ」ト皆々起きる。順禮、皆々「おいらも路金が見えぬぞ」ト口々にやかましういふ、三九皆々もともに驚き慌てる。伴藏、九平太「なんでも相客に盜人が有る」順禮「越後獅子が胡散なぞ」獅子「何とぬかすのぢや」旅人「按摩めが合點が行かぬ」三九「滅相な知りませんぞ知りませんぞ」ト右の臺詞かけ合聒しくいひ、無茶になつて摑合ひ、色々有つて揉合ひ、皆々奥へ入る、ト三九其儘引返し出て。三九「知らんぞ〳〵、俺們はしらんのぢやぞ」トこなし有り鼻唄にて。「知らずしられぬ中ならば、浮れまいもの、さりとては」ト謳ひ〳〵、そこに有る飯櫃の中へ金をかくす、やはり鼻唄にて。「そなたの世話になりふりも、我身の末のはなれ駒」ト謳ひさしこなし有つて。「などとけつかるわいハヽヽヽ、どりや奥へ往かうか」ト探り〳〵奥へ入る、ト踊太鼓三絃になり、チヨン〳〵にて中仕切一面の障子引立てる、ト鳴物やんで合方になり、奥より與茂吉出て。與茂吉「あた腹の立たぬ、今日のやうに無實を受けなんだ事はない、

蒲團をとる、其外は丸寐にする、所々へ屛風を立てる、三九始終彈いてゐる。三九「もし〳〵添乳にお聞きなされませぬか、エ、エ」トいひ〳〵又何にても得たる事を彈く、此内皆々鼾をかいたり寐言をいうたりする、三九諷ひながら旅人の寐息を窺ふこなし、三絃をいつともなく凄う彈かける、ト是を切かけ、内にて凄き合方になり、能き程に三九ぱつちりと目を明き、四邊を見て又盲の體にて三絃彈きながら旅人の寐所を窺ひ、段々金を盜んで廻る、それより探りもつて上の方へ行く、飛脚の懷へ手を入る、飛脚其手を取つてきつと〆る、双方氣味合のこなし有つて、此見得にて兩人向へ出る、飛脚四邊を見て手を放し。飛脚「津輕官兵衞殿」ト三九目を明き。三九「安達丈助殿」ト新吾、軍吾、倉平もそろ〳〵起きて來て。三人「我々も此所に」三九「ハテなア」飛脚「本國出發の後は、行先は別れ〳〵、當時身共は駿州栗島の御家老楠原筆傳樣に奉公、主人御代參の歸るさ、今宵池鯉鮒の宿にお泊り、則ち志賀臺七殿へ」トこなし有つて。「イヤ此儀はゆる〳〵と申さう」三九「身共達は先達ての路用を遣ひなくして詮方なく、贋盲目と成つて宿屋〳〵を徘徊いたし、按摩から取入つて旅人の油斷を窺ひ、枕さがしをいたしをる、御覽下されい今夜も是一ッにして凡百兩」ト金を見せる。軍吾「適れお手際でござる、身共はさやうな事は不器用ながら、かく越後獅子の身過ぎ」倉平「馬に乘つた我々が、獅

つとばかり揉で錢を取り。三九「按摩ようございい」トこちらへ來て九平太按摩買はうといふ、又もむ。旅人「此象牙と木櫛とで何程ぢや」小間「八十四文でござりまする」旅人「此貰入はなんぼぢや」小間物「一匁八分でござります」旅人「百にせい〳〵」馬士「乘つて下さりまするか」伴藏「酒代ぐるめに三百五十くれるワ、拵へい〳〵」馬士「そんなら拵へます」ト橋懸へ入る、髮結又外の者を結ふ、錢や飛脚へ錢を渡し。錢屋「錢はようございい」ト財布をかたげ此方へ來る、次郎作と權兵衛はゐさい構はず順禮の詠歌となへてゐる、右の模樣銘々のおもひ付にて色々有るべし、程よく錢屋去ぬる、髮結小間物屋も入る。松、露、夏「三九さん、一曲聞きたいわいな」三九「何でもぢやが、お祝儀が出ますかな」九平太「三絃をひくかよい〳〵、祝儀を呉れう、どりや〳〵」ト銀を出して三九に渡す。三九「ヤアゝ。二朱權現の花盛り、さらば一曲お聞かせ申さうか」皆々「所望ぢや〳〵」ト三味線持つて向ふへ出て。三九「扨お客樣のお望によりまして、玉川三九國太夫節を差上げまする」皆々「よからう〳〵」ト寄こぞつて聞く、三九國太夫を語る、文句の切に皆々よう〳〵と譽める、三九其跡は出たらめに彈いてゐる。右京、九平太、伴飛「草臥がまゐつた、臥りませうかい」お仲「申し抱なさるゝと此通りぢやわいな」ト蒲團を飛脚にやる。獅子三人「えらう見せ付けるなア」順禮、皆々「サア〳〵寐よう〳〵」ト口々にいうて銘々相方の有るは善き

唄になり、宗六お倉を伴れて此人數皆々入る。

返し

店先の道具左右へ引分ける、奥深に取放したる大座敷の體、間毎に衝立にて仕切り、上の座敷に飛脚髪結に髭を剃せ居る、獅子舞三人膳にすわり飯をくつてゐる、飛脚傍におなま相方の心にてすわりゐる、錢屋錢を賣つてゐる、次の間に右京太夫九平太伴藏酒のみゐる、お露お松お夏相方の心にて酌してゐる、馬方空尻の相對してゐる、次の間に順禮二人其外旅人傍に小間物屋、せり箱をひろげ土産物を賣つてゐる、間毎々々に宿屋の行燈をともし、都て旅籠宿の忙しき賑やかなる景色、砧やうの合方にて道具納る。

右京「吉田迄の通しぢや、何ぼでやるぞ」馬士「から尻なら五百おやりなされませ」右京「それは高い」ト髪結飛脚を結うて下へ行く。旅人「ちよつと撫付けてもらはう」髪結「ハイ〳〵」ト三九さぐり出て。三九「誰方も按摩ようござい」ト旅人按摩買はうといふ、三九ハイ〳〵ともむ。三九「二朱になんぼ賣る」小間「七百二十あげます」飛脚「前の宿では七百廿六文賣つたぞよ」トぼやき〳〵二朱とこま金を出す、錢屋算盤を置き、秤にてかねを懸ける、三九ちよ

お倉「主え、皆侍だに聲山を立てゝ達引も措きなんしたがよい」宗六「あゝ言はんと跡で紛議の有つた時は、俺が迷惑だよ」三九「アいかさまなア、所の習慣とて吉田でも岡崎でも、晝は出女夜は女郎、取りわけて此岡崎は惣體のみめがよいげな、それなればこそ歌にも諷ふぢやないか」ト内にて三味線、三九是に合せ手拍子打つて。三九「岡崎女郎衆〳〵、岡崎女郎衆はよい女郎ぢや、ハヽヽヽヽ」トうたうて笑ふ、此内に皆々粧うて正面むき立姿になり並ぶ。宗六「倉よ見い、彼した所は吉原の中三にもまけぬぞよ」お倉「アイ〳〵さうだわな」ト黄呑みながら風と見る。お糸「本におじやれの身には何がなる、晝は一日旅人をとめ女」お松「夜に入ると枕の伽」お鶴「一夜ながれの儚ない勤」おなま「ハテ苦は色かゆる濱の松風ぢやわいな」三九「さう出た君達の御器量が、エ見たいな〳〵」ト手をもぢ〳〵していふ。宗六「ハテいづくの浦でも勤といふ字は二ツはない、おじやれ變じて松の位」お糸「晝のお糸は夜の賤機」お松「お松はひな鶴」お鶴「おつゆは道柴」お夏「お夏は瓜生野」おなま「おなまは倉橋」三九「ざつと揃うた傾城達」お糸「あだな枕に今宵もまた」お鶴、お松「しんきな座敷を」皆々「勤めうわいな」宗六「エヽ述懐をいはずと、皆座敷へ出て客衆にオヽ可愛いと抱付かうぞや、倉よ我も野がけで草臥たで有らう、其草臥た所が付目だ」お倉「何つがもないねえ」宗六「エヽ有難い、ハヽヽヽ、サア皆奥へずいき〳〵」ト江戸騒

て一盃飲め」三九「こいつは有りがたいわい」宗六「サア來い〳〵」ト本舞臺へ來て宗六上へ通る。
右京「ムヽ亭主宗六」九平太「道切したわつぱめ」伴藏「糺明いたすを」侍皆々「なぜ止めた」宗六「委細はあれから承りましたが、道中筋で斯樣な事はまゝ有る事でござります、只今アノ若い者が謝りはせぬ了簡すなといひまするは、アリヤ入間詞でござりまする、コレ貴樣は入間者で有らうがの」與茂吉「お前は目推量のわるい人ぢや、成程おりや入間者ではごんせぬ」宗六「お聞なされませ、皆詞の裏でござりまする」吉見「たとへ何者にもせよ、お乘物先へ無禮いたした」九平太、伴藏「わつぱめなれば」宗六「預りませう」三人「なんと」宗六「ハテ亭主の私が預つて道切致した申譯をさせまする、但し成敗をさせませうか、どちらへなりとも立引を付けませう、貴方方はマア奥へござつて風呂へづぶ入り、茶漬をがさ〳〵、酒をぐい呑にしてお休みなされませ」九平太「然らば亭主」伴藏「しつかりと預けたぞ」宗六「入間も奥へいて休め〳〵」侍三人「我々も奥へ」宗六「マアござりませ」ト江戸騷ぎになり、侍みな〳〵奥へ入る、宗六口の間へ入る、此内おじやれ皆皆鏡臺を持つて出て並べ、身仕舞にかゝる、暮六の鐘なる。宗六「アレ入相を打つぞよ、皆身仕舞が出來たら、お客の座敷へ出て貰はうぞ」女皆々「アイ〳〵どりや拵ようか」トすがゝきになり、皆々前垂はづし、田舍模樣の打かけを著る、奥よりお倉內儀の形になり、煙草盆さげて出て。

ト乗物と荷物におじやれ跟いて入る、橋懸より同體の侍二人、與茂吉旅の形、是を二人して引立て出る、おじやれ皆々直に出る。侍「何れもわつぱめを引立てゝ參つた」お糸「申しお前方は、アノ若いのをどうなさるのぢやぞいな」右京「イヤ彼奴は御主人のお乘物先を道切した狼藉奴」九平太「主人の御意によつて引立て參つた」伴藏「其奴縛し上げて引きすゑ召れ」トみなく反打つ。與茂吉「アヽ是々お前も聞譯のよい人ぢやわいな、先刻にから不調法はせぬ、謝りはせぬ程に量見すなと謝つてはゐるんぞえ」侍三人「まだくにつくいやつの」ト反打つ。お糸「是々あの子、ちやつと詫言をしたがよいわいの」與茂吉「イヤく謝らぬく、謝りはせぬぞ」侍皆々「あやまらずば」ト與茂吉を五人の中へ取圍んで。「いつそ」ト一時に柄に手を懸ける、向ふ戸屋の內より。宗六「まつた大福屋宗六、そこへ往て挨拶をしやんしよわい」侍「なんと」ト江戸深川の騷唄になり、向より亭主宗六吉原大通の拵へ、野掛の戾りの體にて、男一人毛氈をかたげ、手提を持ち、此跡より玉川三九盲按摩の坊主にて、木綿やつし鈴の付いた杖をつき出る。三九「旦那く、跡から呼びかけるのに聞かぬ顏とはどうでござりまする」宗六「オヽ三九、呼ぶやうに思うたが汝で有つたか」三九「今日は妾宅を伴なうてお樂みぢやな」宗六「何をいふやら、したが汝は商賣に精を出すな」三九「おまへ按摩をせにや食へませぬわいナ」宗六「しゆんだやつぢや、こちへ來

岡崎大福屋で宿を取らうと申合して參りましたれば、大方尋ねてまゐらるゝでござりませう」お倉「それは幸ひだ、マア〳〵來なんし」ト始終右の田舍唄にて、本舞臺へ來て此時おじやれみなみな出て。皆々「お倉さん、お歸りなされたかえ」お倉「摘草をしたので、とんと遲くなつたわいのう」お糸「貴方はお泊りでござりますかえ」お倉「お連も有るさうな、綺麗な座敷へ通しましや」お松「表座敷がようござりませう」トお力草鞋をぬいで上り。お力「連衆が尋ねて見えませう程に、此笠を表につるいて置いて下さんせ」お鮮「アイ〳〵合點でござんす」ト菅笠を持つて表の方へ走り行く。お力「かう參りませうかな」お倉「サア〳〵お出なんし」トお力をつれお倉入る、所へ橋懸よりおなま案内して吉見右京太夫、早瀨九平太、岩瀨伴藏旅羽織野袴、大小三度笠を持ち出る。おなま「申し〳〵お先觸の有つたお泊りでござりますぞえ」お糸「直に奧へ通しましたがよいわいの」右京「其方あるじか、今朝相觸れし通り、主人は京都綾の小路家の諸太夫、仔細有つてお微行の道中、それ故相宿をお厭ひなさるゝ、別座敷しつらひ置いたか」お糸「ハイ奧の離座敷を明けさせて置きました、直にお通りなされませい」伴藏、九平太「しからばお乘物」ト呼ぶ橋懸より旅羽織黑股引の侍、乘物を手舁にして、跡より繪符の付いた駄荷を二棹、各々同體の侍にて手輿にて出る、其間におじやれも出てゐる。右京、伴藏「直樣離座敷へ」皆々「御案内申しませう」

りや面白からう」お糸「申し此所の習ひで、女中をお呼びなされんと夜具を上げませぬぞえ」飛脚「何だ女郎を買はないと、蒲團を來さないか」女皆々「さうぢやわいな」飛脚「それは迷惑な」トいふ内信夫を見て。「よいは〳〵、身共は此君にいたすべい」ト信夫に寄添ふ信夫ふり切り。信夫「何のめり申す、俺はいやだア」ト仙臺訛にていふ。飛脚「さうすねる所が命だわい」ト又寄るをおなま引のけ。おなま「初手からの註文ぢや、嫌はれては一分が立たぬ、アイ立たぬ〳〵、立てゝ下さんせお飛脚さん」飛脚「汝がいけるものかい」女皆々「サア奥へござんせいなア」飛脚「サア皆一所に行くべい」順禮、皆々「サアござれ〳〵」ト此人數殘らずわや〳〵捨白にて奥へ入る、ト面白き田舍唄になる、と向より大福屋女房お倉江戸仕立の妾の拵へ、帽子抱帶、野がけの戻りの體、下女二人手籠に摘草の入りしを持ち、跡よりお力參宮の體、著付に浴衣を引張り、藁苞の一腰を脊負ひ、菅笠を持つて跟き出る、花道にて。お倉「わつちが所は是だわえ、お客さん早く來なせえ」ト吉原詞にていふ。お力「お宿は大福屋と申しますかえ」お倉「アイサおめへは一人旅だとネ、わつちは今日夫と連立つて野がけに行きやんして歸りがけに、おめへが泊めてくれろと仰しやるによつてネ、御案内を申しやんす」お力「お聞下されませ、自體一兩人連もござりましたれど、富士川の渡しより間違ひまして、其連衆にはぐれましてござりまする、したが

うと襃る、男盆に米と十二銅を載せやる、見物皆々マア一曲所望ぢやと口々にいふ故、又鳴物に合はせ獅子を舞ふ、此内能き程に向より早助（實は安達丈助）飛脚の拵にて、脚袢胸當三度笠、刀の鞘に紙包状箱を付けてかたげ、エイサッサ〳〵とかけ聲にて走り出て花道にて。

飛脚「是が岡崎の大福屋だな」トいひ〳〵本舞臺へ來て。「旅籠はいくらだ、風呂は隨分熱いがよい、蒲團も餘計かしてくりやれ」トいひ〳〵草鞋を脱ぎ上る、獅子是に構はず舞うてゐる、飛脚腹立て、あへかへし。「ヤア越後獅子置けろ〳〵、儕にばかり口を叩かせて相手にならないか、泊客をせないか、どうひろぐのだ」トやかましうわめく、是にて獅子止む。お松「本に越後獅子に懸つて氣が注きませなんだわいなア」おりく「お泊りさんかえ」飛脚「オヽサおら一人だによつて、どつこでも大事ないは、やれ〳〵草臥た〳〵」おなま「申し草臥てなら、足さすりに行くぞえ」

飛脚「ヤア汝が頰でも客を勸めるか」おなま「オヽアノお方わいな、日の內こそおじやれなれ、夜に入ると君傾城ぢやわいな」飛脚「傾城が惘れてけつかるわい」ト此獅子舞の被物をとり、此時飛脚と顏見合せ。獅子三人「ヤア、貴殿は」飛脚「さいふお身達は」三人「ハテ思がけない」飛脚「イヤイヤ是々近付でないぞ〳〵」ト差合が有ると敎へる事有りて。「身は上下往來の飛脚、幸ひ越後獅子を揚にして今夜の座敷を取持たさう、身が座敷へ參れ〳〵」三人「それは忝ない」願禮皆々「こ

るを、宮城野あせつて右の刀をぬき頭陀八をぽんと切つて悔りし、谷五郎にしがみ付く、磯崎佐五平お力此體を見て三人こなし。佐五平「出來た」兵部「天晴手の内」ト大學を突のけ扇をひらく。大學「ムン」兵部「見事」ト大學又來るを止めて扇にて宮城野を煽ぐこなし、よろしく。幕

三幕目

造り物六間の間、通りの二重舞臺端近く突出し、向ふ見附一面に中格子、旅宿家店の間の體、欄間に富士詣の箱札、山上講、伊勢講の札、又はぶら〳〵の手拭印、江戸芝居の番附など一面に張り、都て道中宿屋の通りに有るべし、此店先にて藤田軍吾、高倉曾平、福原新吾三人共越後獅子にて羯鼓錫杖を持ち舞うて居ろ、笛吹き太鼓打ちうたひ居ろ、信夫、お糸、お露、お松、おり〳〵皆々おじやれにて、擧つて見てゐる、此後におなま、是もおじやれにて白粉をこて程ぬり、片肌をぬぎかけ、身仕舞を爲させし體にて、ふまへの上に立身にて丸鏡を持ち、是に越後獅子を映して見てゐる、權兵衛、次郎作、順禮の形、其外旅人大勢、股引の男、料理人、丁稚、飯炊、おもひ〳〵の形にておひ重つて見てゐる、在鄕唄の中へ獅子の曲太鼓を入れて幕明ける、三人唄鳴物に合せ、中返、杉立、手這、祕術を盡して色々有るべし、見物の人數は譽めたり色々捨ぜりふ有り、段々有りて止る、ト皆々ようよ

討」谷五郎「すりや御判の詮議を拙者に」兵部「臺七が濁りし性根に引替へ、義心は朽ちても朽ちぬ金の文字を取つて金江半兵衛と改名して、宇治兵部之輔が腹心の家來と成つて御判の詮議」谷五郎「エ、忝ない、名も改むれば宮城野殿、縁組も亦改めて頼の印」ト刀を取つて差出し。「谷五郎が爲にも舅の敵なれども、討つ事ならぬ義理有る兄弟、此刀を持つて敵臺七を討たば谷五郎もともに本望遂げしも同然、肌身を放さず大事に召れ」ト宮城野に刀渡す。宮城野「そんならお前は」谷五郎「寶の詮議は身が役目」磯崎「娘が身の上頼みの印を納むれば、又此方からも聟殿へ」ト宮城野が持つたる刀を抜いて、振袖の兩袖を切取つて刀を收め。「姫御前は祝言の盃濟めば、振袖をとめるが習ひ、そなたの兩袖切つたは、聟殿へ未來迄も變らぬ夫婦の聟引出の此兩袖、目出たう納めてやつて下さりませ」ト谷五郎へわたす。谷五郎「お志の聟引出、慥に受納仕つた」佐五平「ハア、千秋萬歳、かゝる目出たき敵討の門出、いよ／＼下郎めもお供に」磯崎「イヤ酒に心の亂るゝ其方、どうも供は」お力「アイヤ佐五平殿には私が引そひまして、若もの事が御座りましたら、たとへ夫でも」磯崎「出來したお力」兵部「兩人ともに供を赦した」佐五、お力「エ、忝ない」磯崎「急いで出立」皆々「おさらば」大學、づだ八「エ、おもへば」ト大學二重舞臺へ斬つて上る、兵部之輔と立廻りにて止める、頭陀八も行かうとするを、谷五郎引のける、頭陀八谷五郎に蒐

覺ない、今日やう〳〵目見の其方、お家の伯父たる大學に向つて過言の一言、おとぼね斬つて斬りさげてくれう」ト斬つて懸るを宜しく留めて。兵部「すりやいか樣に申しても」大學「詞が過ぎる、慮外な奴の」トふりほどいて又懸るを止めて。兵部「五十四郡を押領せんと、鎭守府の印を盜取つた盜賊」大學「それしつたら」ト又斬つて行くを、刀たゝき落し二重舞臺より下へ取つてなげる、又來る所を當る、大學ウントたぢ〳〵と跡すさりして下にゐる、兵部二重舞臺に立派にすわる。兵部「それ谷五郎、彼奴が懷中吟味いたせ」谷五郎「ハッ」トつか〳〵と寄つて大學が懷中へ手を突込み、立廻り有つて鎭守府の印を引出し。「扨こそ鎭守府の御判」トつか〳〵と兵部方へ持つて行く、ト兵部取つて見て。兵部「ドレ、こりや贋物」谷五郎「ナニ贋物とな」大學「すりや某に盜取つて渡せし臺七めが所爲、やみ〳〵と騙られたか、エヽ無念やなア」市之正「扨は臺七といひ汝迄、國に弓引く人外め」ト刀追取り大學方へ行かうとするを、兵部之輔刀の鐺をとめて。兵部「申さば御連枝の御中」市之正「ぢやというて」兵部「此儘直に押込隱居仰付けられ然るべう存じまする」市之正「此上は七草が殘黨を拷問させ、邪法の鏡を」兵部「イヤ其鏡は邪宗門の棟梁ならで所持致すまい、かれらは技葉、やはり此まゝ」谷五郎「さし當る御判の盜賊は兄臺七」兵部「浪人致したるこそ幸ひ、此場を立退き臺七にたより、御判を取返し、其上にて宮城野に敵

門ならで外にない、何と動はとれまいがな」づだ八「エヽ残念な、年來仕込みし我大望、よくもう
ぬ見顯はしたよなア」兵部「オヽ十能六藝に達した宇治兵部之輔、かゝる事を存ぜぬとおもふか、
狼狽者め、七草の殘黨山形宇右衛門で有らうがな」づだ八「サアそれは」兵部「但し拷問に懸けうか」
づだ八「サア」兩人「サア〳〵〳〵」兵部「なんと」づだ八「エヽもう破れかぶれぢや」ト拔いて兵部へ
切つて懸る、兵部持つたる鐵扇にて頭陀八が拔身をたゝき落し、又來る所を扇にて眉間を打つ、
頭陀八眉間を打割られ、兩手にて天窓を抱へる、此時大學刀を拔いて兵部へ切つて懸るを、身を
かはし大學が利腕の脇所をしつかと捕へ。兵部「コリヤ何となさるゝな」大學「イヤ是はオヽ今日
より當家の師範となる宇治兵部之輔、手練の程を試ん爲」兵部「すりや拙者が手の裡を御覽なさ
れんと有つて」大學「いかにも」兵部「はてなア」ト大學が利腕を取りながら人相を見るこなし。
大學「こりや〳〵兵部之輔、手の裡見えた爰はなせ、はなさぬか」トきつといふ、兵部大學が人
相をきつと見て。兵部「面ちやうそうの如く、天てい角立、眼中鋭く、烏睛漆を點じ、しかもき
どくつ蜀の魏延が相に同じ」ト突放す。大學「ヤなんと」兵部「十能六藝に鍛練したる某、殊更相
術の胸にうかめ、一度面を見るがいなや、胸中をさす事割符を合すが如く、こなたの心底」
ト大學ぎつくりとなる。「いはぬぞや、申さぬぞや、此以後本心を改めさつしやれ」大學「イヽヤ

なし呉う」ヅダ八「エヽ」ト悔り。兵部「先武士に取立」ヅダ八「エヽ」兵部「衣服大小を拜領させ」ヅダ八「エヽ」兵部「知行はいか程がよからうぞ、オヽそれ〳〵先殿の御墨附を頂戴させう」ヅダ八「エエ」ト兵部之輔傍に有る硯引寄せ、筆紙を取つて。兵部「先知行は此位がよからうかい」トいひいひ認め、頭陀八悦ぶこなし。「殿のお墨附、筆者は則ち宇治兵部之輔」トいひ〳〵認めて。「頭陀八、有難く頂戴いたせ」ト頭陀八墨附取つて。ヅダ八「サア〳〵えらいぞ〳〵、思ひも寄らぬ立身出世、是といふもあなたの御執成、エヽ有がたい」ト戴き見て。「こりや何ぢや、此頭陀八と申す下郎、主に不義放埒の科によつて、縛首にも致すべきもの也。あた忌々しい、此頭陀八不義放埒の覺がない、宇治兵部之輔、なんで身共を馬鹿にひろぐのだ」ト書物を打付け詰かける。兵部「わりや無筆でないか」ヅダ八「ヤア」兵部「無筆でよく物を讀むとは、おのれ紛れ者に極つた」ヅダ八「サアそれは」兵部「無筆と成つて入込みしには仔細なくては叶はぬ、其艶書是へ」トおカつか〳〵と兵部之輔方へ持行く、艶書の名宛を見て。「扨こそ艶書の文言は佐五平に認めさせて、宮城野と書いた名宛はうぬが手跡で有らうがな」ヅダ八「イヽヤ覺はない」兵部「最早陳じても陳じさせぬ、七草が殘黨」ヅダ八「何がなんと」兵部「これ此宮城野と書いたる筆勢、日本の流儀によく似せたれども、此筆法は唐土呂洞賓が筆立、此流義を學ぶものは七草方にて山形宇右衛

やげな、定めてこな様不自由に有らう何のと、内證でおれがいふ事聞いて下さんせぬかと、あた忌らしい事の有條いうて、間がな隙がな口説いたぢやないかいのう」づだ八「誰がいの」お力「こなたが」づだ八「てもマアぬけ〳〵と、そんな事がよういはるゝなア」お力「又それも惚けるのか」づだ八「汝をくどいたといふ證據が有るか」お力「證據はこなたの胸に覺が有らう」づだ八「イヽヤしらぬ、證據を出せ」お力「サア其證據は」づだ八「ないか」お力「サア」づだ八「證據もないに同じ様に云かけひろぐ女郎めが」ト蹴飛す、お力佐五平兩方より氣色する。「何ぢや〳〵、二人とも無念なら證據を出せ、證據がなけりや、宮城野様に不義しかけたは汝ぢや〳〵、サアぐつとでも吐して見され、よもや返答は有るまいがな、申し奥様、此様な不義者といひ、人に云かけひろぐ女郎めを、供につけておやりなさるゝと、宮城野様が大體御難儀なされまする、忠義一途の此頭陀八をおやりなされて下さりませうならば、おのれ志賀臺七、たとへ何方に隱れをるとも、尋ね出して本望とげさせませう間、下郎めをお供に召連れ下さりませうならば、いかばかり悦ばしう存じまする」兵部「ハテ下ざまには惜しき忠義の者、コリヤヤイ頭陀八とやら、身が目通へずつと參れ〳〵」づだ八「ネイ〳〵」ト能き所へ行き、下にゐる。兵部「ハテそちは忠義な者ぢやわい、そちがやうな者は殿様へ吹擧申さば適れ御用に立ちさうなもの、某が執成を以て殿の御家人と

疑ひ受けた、サア汝が頼んだ樣子を、そこへ出て言譯せい、サア早う〳〵」トせいていふ。
づだ八「こりや〳〵佐五平、そりや何をいふのぢや、何の事ぢやぞいやい」佐五平「ハテしれた事、汝が頼んだ此狀の言譯を」づだ八「イヽヤしらぬ、頼んだ覺はない」佐五平「ヤ」づだ八「どこに汝を頼んだ、アノ正々しい顏わいの」ト空とぼけする、佐五平氣をいらち。佐五平「ムウそんなら此狀頼んで置きながら、わりやしらぬか」づだ八「オヽしらぬ、微塵も覺はない、エヽ聞えた、コリヤ何か汝が言譯なさに、何にもしらぬ俺にあつ灰かけるか、マアさうはなるまい、コナ鼻垂めが」佐五平「ムウ現在うぬ、兩手をすつて頼みながら、今更空惚するといふて、さゝうかいやい」づだ八「そんなら又、おれが頼んだといふ何ぞ確な證據が有るか」佐五平「ヤア」づだ八「サア證據があらば出せ」佐五「其證據は」づだ八「有るか」佐五「サア」兩人「サア〳〵」づだ八「證據もないに云かけひろぐ、コナ盜人め」ト佐五平が首筋取つてひしぎ付けるを、お力つか〳〵と行き、頭陀八を何の苦もなく摑んで投る。づだ八「アイタヽヽヽヤイ盜人め、コリヤ何とさらすのぢや」お力「こりや何ぢや、わしがこな樣のいふ事聞かぬによつて、それで佐五平殿を罪に落すのぢやなア」づだ八「さりとは妙不思議けぶけれよつな事を云出した、何を汝に云ひかけた」お力「ハテ隱へ廻つてはコレお力どん、聞けば佐五平は三年が間、願かけて女房持つたと云ふばかりで、肝心の事はまだち

やうに申上げ候ては定めし道しらずとも御さげしみ遊ばし候はんとぞんじ候へども、今更おもひ切るにきられぬ心の中を御くみわけ遊ばされ、色よき御返事くれ〴〵願上げ候、まづは荒々めでたくかしく、宮城の様參る、御そんじ」トよみ悔りして〽ヤア此手は佐五平」佐五平「ヤア」

張崎「サアそれぢやによつてどうも娘宮城野か供にはやられぬわいの」お力「御尤で御座りまする」トつか〳〵と佐五平が傍へ行き〽「爰な不所存者め」ト首筋を取つて引付ける。佐五平「こいつ俺を何とする」お力「オヽいつそぶち切つて仕舞ふわいの」ト佐五平が脇差に手をかけ拔かうとするをおさへて。佐五平「コリヤ待て〳〵、是には言譯が有るわいやい」お力「サア其言譯聞きませう」佐五平「オヽ今爰で明りを立てゝ見せう、待つてをれ」ト右の狀を持ち橋懸へ行かうとする、頭陀八佐五平を突廻はして向ふへ立ちふさがり。頭陀八「佐五平、さういうて拔けるのか、其手はさゝぬわい」佐五平「オヽ頭陀八、我に逢ひたかつたコリヤ」ト手を取つて向ふへ連出〽「此間部屋でいふには、さる所の娘へやる文だ、知つてゐる通りおりや無筆だ故、どうぞ我を賴むというて、コレ此狀を認めてやつたぞよ、其時此先の名宛は何と書かうと尋ねたら、ツイ樣參る御存じとばかり書いて吳いというたによつて、其通り認めてやつたが、今見れば宮城野樣參ると書いて有るが、無筆の汝がよもや書きもせまい、誰に書いて貰うた、マア第一此狀で佐五平が

それとも達て行かねばならぬ事なら、申し谷五郎様、お前も一緒に來て下さんす事なら」大學「イヤそりやならぬ、谷五郎は敵臺七が弟、そちと緣組はいまだ家中へ披露せぬ內證事、谷五郎と同道は叶はぬわい」兵部「イヤ大學樣、そりや御了簡が違ひました」大學「何が違うた」兵部「谷五郎は只今殿のお暇を蒙り浪人の身の上、さすれば志賀の名跡は暫し殿へ御取上、浪人の身の氣散じ、女の道連苦しうないてや」宮城「エヽ忝なう御座ります」ト兵部之輔を拜む、佐五平おづ〳〵這出て。佐五平「憚りながら下郎めがお願ひ、何卒敵討の御供御免下さりませうならば、有難う存じまする」磯崎「イヽヤ佐五平、そちや供には叶はぬ」佐五平「エイ」磯崎「大切な敵討の供に、不忠不義の其方はならぬわいやい」左五、お力「エヽ」ト驚く、佐五平磯崎が傍へ行きどつかと下にゐて。佐五平「申し奥樣、何と御意なされまする、不忠不義の佐五平はお供に叶はぬとは、ドどういたした儀で御座りまする、下郎が何も不忠不義いたした覺、微塵も御座りませぬ、何故左樣なお情ない事を仰せ下されまするぞ、不忠不義の仔細、サ承りませう」磯崎「オヽ其證據は此艷書」佐五平「エイ」磯崎「お力よんで見や」ト件の文をお力方へ投る、お力取り拔きよむ、此時頭陀八橋懸より出て見てゐる。お力「餘りおもひにたへかね、御覽も御面倒に思召し候はんなれども、心のたけを拙き筆にいはせ申し候、誠に枝高き御方樣に、下郎の賤しき身も顧みずか

こなし、磯崎きつとなつて。磯崎「イヽヤ左様ならば鎭守府の御判出まする迄、私は屋敷にとゞまりませう、何卒娘宮城野へ敵討御免を」市之正「聞屆た」磯崎「エヽ」市之正「磯崎一人屋敷に殘るは甚内が名代、神妙の願ひ聞屆遣はさう」磯崎「エヽ有難う御座りまする」大學「よいわ、寶の出ぬ時は、磯崎汝は人質、覺悟はよいか」磯崎「女でこそあれ甚内が女房、寶の代り命を差上げまする覺悟で御座りまする」宮城野「エヽ」磯崎「これ娘、母が殘るは大切な寶紛失の申譯、そなたが敵討にゆきやるは親への孝行、首尾よう敵を討つて、甚内殿の妄執をはらしてたもや」宮城野「イヽエ母様、わたしや獨り敵討に行くことは否で御座りますわいなア」磯崎「さいのう、母も一緒に行きたいけれど、今聞きやる通り大切な寶の紛失、此詮議をせねば、草葉の蔭の甚内殿の迷の種、敵を討つも寶の詮議も貞心孝行、いづれの道も家の爲ぢやわいのう」宮城野「サア何ぼう家のためでも孝行でも、わたしやアノ祝言せぬ其中は」磯崎「ヤ」宮城「こちや敵討に行きとむなう御座んすわいナア」お力「これ〳〵申し宮城野様、そりや何をおつしやる、折角願うた敵討を、そんな譯もない事おつしやらずと、ちやつと御用意なされませ」佐五平「オオさうだ〳〵、めでたう敵をお討なされた跡では、御祝言も世間はれてなることで御座りまするわいのう」宮城野「イヤ〳〵どの様にいやつても、わしや祝言せにや行く事はいやで御座る、

く彼七草の殘黨に合體せしと覺ゆる、引捉へ詮議するは易けれども、わざと見のがし置くは、七草の餘類をおびき出す詮議の囮、二ツには今臺七を入牢いたさば、磯崎親子の者、甚内が敵と名乘り臺七を討つ事叶はぬ、敵がしれねば杉本の家は沒收、さるに依つて一旦臺七を見遁し、跡にて敵は臺七なりと言上仕り、敵討の願を立てさせん某が寸志サ」谷五郎「すりや兄臺七は七草に加擔」磯崎「夫の敵」宮城野「親の敵」佐五、お力「お主の仇」兵部「ハテ苦しうない、宇治兵部之輔が計略をもつて、七草が餘類も邪法の鏡も追付け取得る」皆々「ぢやと申して」ト皆々向ふをきつと見てこなし。兵部「ハテせく事はない、お身達が敵、兵部之輔は請合うて討ず〳〵」皆々「エエ」ト悅びじぎする。兵部「此楠流の印可は暫く某が預り置く、若殿へ御指南申せば、杉本甚内存生へ有るも同じ事。ハツ何卒彼等に敵討御免なし下されませうならば、有りがたう存じ奉ります」市之正「今日より當家の師範たる其方が願ひ、如何にも敵討ゆるしてくれたぞ」皆々「エエ有りがたう存じまする」大學「イヽヤそりやなりますまい」皆々「なぜなりませぬナ」大學「當家の寶鎭守府の印、籠め置かれし寶藏の鍵預りは杉本甚内、其鎭守府の印は疾より紛失」皆々「エエ」ト皆恟り。大學「さすれば甚内が越度、其科ある妻子、敵討などとはのぶとい奴の」磯崎「そりや其申譯立ちませねば」大學「敵討は叶はぬわい」ト皆〳〵顏見合。皆々「ホイ」ト當惑の

持主は」磯崎「谷五郎様には」佐五、お力「御存じで御座るか」谷五郎「いかにも」四人「シテ其敵は」谷五郎「外でもない志賀臺七」四人「エヽ」四人「エヽヽ」谷五郎「證據は則ちこの穗先」ト腹へ突込まうとする、宮城野慌て縋りとめて。宮城「アヽ是れ待つて下さりませ」谷五郎「イヽヤ放さつしやれ」ト突退けて又突込まうとする。兵部「谷五郎まちやれ」谷五郎「イヤ現在兄の訴人」ト又突込ふとする。兵部「不忠になるがや」谷五郎「なんと」兵部「武士の命はお馬の先にて御用に立つが忠義ならずや、非義非道の兄に孝を立て、尤お暇申し受けたれども、是迄の君恩はどの命を以て報じ召るゝな」谷五郎「サアそれは」兵部「アヽ思案が若い、篤と思案をしやれ」谷五「ぢやと申して」兵部「甚内存生に契約の緣組、いはゞ舅の敵ではないか、なぜ女共の力となつて本望遂げさせる所存がなくて、切腹などとはうつけた事を」谷五「ムヽ左樣のこなたが、何故に兄臺七を見のがし召された」兵部「志賀杉本の兩家が立てたさ」谷五、磯崎「なんと」兵部「兄臺七と事變り、適れな誠有る武士、殊に小身なれども高館に數代連綿たる志賀の名跡、非道の臺七の爲に滅亡さするが何とも殘念、まつた杉本の家はお家の師範、彼といひ是といひ、何れもお家の柱石、絕果てん事嘆はし、これ此菊水の印可を奪ひ返し、臺七を助けて立退かせしは、先達て亡び失せたる七草が殘黨、邪法の鏡を以て四海を覆へさんと、東國に徘徊する由、臺七が眼中人相、正し

之輔二重舞臺の眞中、大學上の方にすわり。大學「シテ其印可は何者が所持する」兵部「則ち菊水の印可は是に御座る」ト懐中より出し見せる。大學「ムウ其印可を所持するからは」磯崎「夫甚内殿の敵は」佐五平「宇治兵部之輔」磯宮「そなたで有つたな」兵部「イヽヤ身共でない」磯崎「イヽヤ大切な印可故、不斷夫が所持の一巻」宮城「こなたの手に有るからは」佐五、お力「覺ないとは卑怯で有らう」磯崎「夫の敵」宮城「父上の仇」お力「お主の仇」佐五平「サア尋常に」四人「勝負〳〵」谷五郎「待つた何れも、其敵は外に御座るぞ」ト奥よりつか〳〵と出る。磯崎、宮城「ムウ谷五郎樣」佐五平「外に敵が」四人「有るとはな」谷五郎「甚内殿の敵は宇治兵部之輔殿ではない、必ずはやまり召されな」磯崎「シテ誠の敵は」四人「何者で御座るな」谷五郎「只今申聞かせませう、先暫く。ハツ殿へお願ひ何卒谷五郎めにお暇を下し置かれませうならば有りがたう存じ奉りまする」市之正「ムウ暇を願ふ谷五郎、仔細有りげな此場の樣子」兵部「イヤ憚りながらお聞濟遣はされまするが可らう樣に存じ奉りまする」市之正「ムウ谷五郎、望に任せ暇を遣はす、急いで敵の名を申してよからう」谷五郎「ハツ早速のお聞屆有難う存じまする、ナニ宮城野殿、契約の縁組も變替申すぞ」宮城「エヽそりや又なぜで御座りますぞいなア」谷五郎「其仔細はコレ此鑓の穗先」ト最前の穗先を出し。「此鑓の穗先は則ち甚内殿の無念の魂、此鑓の主こそ甚内殿の敵」佐五平「そんなら其鑓の

大學樣、御憐愍で御座りまする、お情に何卒此儀を偏へに願ひ上げまする」おカ「只今佐五平申上げまする通り、此儘屋敷を立退きましては、もう杉本の家も一生埋れ木と成果まする、御存じ遊されまする通り、御子息はなく、宮城野樣は女儀の事なり、奥樣のお心を思ひやりまする程、さぞお便りも御座りますまい、其心に張をもつて、おのれやれ女子でこそあれと思召すは、敵討御免と有る御意が千人力となりますれば、どうぞあなた樣の思召入れで」磯崎「どうぞ首尾よう敵を討ち」宮城「杉本の家の、立ちます樣に」佐五平「何卒お執成を」おカ「ひとへに願ひ」四人「上げまする」大學「エヽかしましい扶持放され、いか程ゆつても武家の格式は背かれぬ、ごくにも立たぬ願ひをせうより、明日より袖乞いたす工夫をしをらう」四人「すりやどう有つても」大學「敵討の願ひは叶はぬ、杉本の家名は退轉に極まつたわやい」四人「ハア、ヽヽ」ト泣きおとす。兵部「イヤ杉本の家名相續仕るぞ」ト奥より兵部之輔裃衣裝大小、髮も立派にしてずつと出る。四人「エヽなんと」大學「兵部之輔、ドヽどうして杉本の家が立つぞ」兵部「劍術の遺恨によつて甚内を闇討に仕り、杉本の印可を奪ひ取つて立退く、さすれば其菊水の印可を所持するものこそ甚内が敵さ」大學「シテ印可を奪ひ所持するは何者」兵部「只今是にて御覽に入れませう、御前是へお越遊ばされませう」ト正面の襖開かせ、市之正近習皆々つき出で座に就く、兵部

がなナア」ト手を組み思案の體、此内後へ磯崎宮城野を連れ出る、橋懸より佐五平お力小腰をかゞめ出で、大學上の方へ、磯崎宮城野下の方へ、佐五平お力兩方よりおづ〳〵と揉手して。磯、宮「大學様」左五、力「我々がお願ひ」ト大學四人をじろりと見て。大學「我達はまだ立退かぬか」磯崎「只今奥にて殿様のお盃を頂戴致しまして、最早今日中に屋敷を立退かねばならぬと存じますれば、本にもう涙がこぼれまして、殿様へ申上げまする詞も出ませぬやうに御座りまする、それ故あなた様へのお願ひ」大學「ムウすりや今日中に屋敷を没收致すを、今暫く日延の願ひか」磯崎「イヽヤさやうでは御座りませぬ」大學「左様でなくば何の願ぢや」磯崎「どうぞ敵討御免の願ひを」大學「敵の名もしらず敵討の願ひがならうか、馬鹿な事を」佐五平「御尤の御意で御座りまする、サそこがお上のお情、此儘にて立退きましては、翌にも敵の名を聞出し、出逢ひましても、理不盡に敵討のならぬ武家の法はよく存じながら、叶はぬ願ひも女のこととお赦し有つて、何卒殿様へ御執成仰下されまするは、あなた様より外に御座りませぬ、御分知をお取り遊され、御家老格で御座りますれども、元は殿様と御連枝のあなた様、申さば殿様も同然、何卒あなた様のお詞をもつて敵討御免下されませうならば、此奴めが脛のつゞくだけ六十餘州をかけ廻り、敵を詮議仕出し、御兩所に本望とげさせ、再び杉本の家名も立てたう御座りまする、申し

大望、妨となるは杉本甚內、思ひがけもなく闇討に逢ひしは、大學樣の御利運と申すもので御座りまする」大學「いかにも某かねて當國五十四郡を押領せんと、志賀臺七と謀し合せ、當家の寶鎭守府の印は疾より奪ひ我手に入る、甚內横死の上、一家中は大半味方、併し臺七が弟谷五郎、此奴若輩者なれど萬事に小ざかしき毛二才め、それに今の六部めが面魂只者ならず、彼奴ら兩人をだまし寄つて討つて捨つる、汝も某に兼て合體せしは、斯樣な時必ずぬかるな、合點か」づだ八「委細畏つて御座りまする、元來谷五郎は甚內が祕藏の門弟、兼て宮城野が心をかけ、則ちお力めが戀の仲介、又此づだ八はこつ恥しい事ながら、アノお力めに首たけ、所に甚內夫婦が差圖を以て、お力と佐五平めと夫婦に致した、其時の心外さ口をしさ、おのれ谷五郎と宮城野が取持するは、お力めと佐五平、是幸ひ佐五平を罪に取つて落し、お力めを手に入れる工で拵へ置いた艶書を、奥方磯崎が手へ渡し置きましたれば、甚內が最後は不義の詮議所でもなく、おもふ事は皆ぐりはま、此上は手短に谷五郎も六部めも騙すに手なし、物の見事に仕おほせたらば、兼て申上げた拙者が大願の片腕にも」大學「オヽいふにや及ぶ汝が望達し吳う」頭陀八「エヽ忝ない」大學「萬事ぬかるな」頭陀八「おつ付け吉左右」大學「はやく」頭陀八「ハツ」ト唄になり、頭陀八橋懸へ走り入る、跡にこなし有て。大學「もしあの手で行かぬ時は。ハテどう

兵部「承知なれば手向ひはせぬ、サア印可を渡しやれ」臺七「いやだならぬ、骨折つて奪ひ取つた印可、うま〳〵と渡さうか、のぶとい奴の、臺七が此首と釣替の印可だ、滅多にや渡さうか、馬鹿つくせ」ト又驅出す、兵部之輔拳をもつて逃ぐる臺七が弓手の脇腹へ遠當のこなし、臺七ウントト肝にこたへし體にて、ぎつくりと立すくみになり、たぢ〳〵と花道を跡すさりし、よき所迄戾り、又どつかと坐る。兵部「何と宇治兵部之輔が奇々たる遠當の術、筋骨にこたへたか」トきつといふ、臺七ぐんにやり弱りしこなしにて。臺七「こたへた〳〵、ハテ扨きよといものぢや、楠流の印可を望む宇治兵部之輔、言はねど聞かねど胸に一物、臺七も大望有る故、些細な事に命は捨てぬ、眞逆の時は臺七が片腕と賴む印、菊水の印可お身に呉たぞ」ト一卷出し兵部之輔方へほうる兵部之輔取て。兵部「いかにも慥に落手致した」臺七「印可を渡すが互の因緣」兵部「某も追付鎌倉へ立越え、楠流の指南と聞かば」臺七「尋ね求めて」兵部「其時對面」臺七「先それ迄は」兵部「堅固でゐやれ」臺七「さらば」ト唄になり、臺七向ふへ走り入る、兵部之輔跡を見送り。兵部「彼奴を助け置くも一ツの手段」ト件の印可を戴く〳〵、ト太鼓謠になり、兵部之輔こなし有つて奥へ入る、跡相方になり、奥より大學出る、橋懸りより頭陀八窺ひ出て。大學「づだ八」づだ八「兼て思召の御

なんと是等も盜賊か」兵部「沛公は筵をおりし野夫なれども、三尺の劔に大蛇を隨へ、阿房宮の家を鎭め、項羽と戰ひ、高祖と呼ばれ、漢家四百年の基を建つる、これ民をやしなひ四海安靜ならしめん爲、皆是れ亂れたる天下を治む、彼を見て是をくらぶれば、萬里に羽をのす大鵬と雀の小踊するも同然、汝の所爲は主君の師範たる甚内を害し、妻子の嘆きもいとはず、武士たる者の仁にも缺け義にも背き、只暴惡の武道におのが遺恨をはらさん爲、杉本の家をたやす、盜賊とも國賊ともいはん方なき人非人、天道是を赦さずして、終に其身は屍を衢にさらし、ししむらを鳶烏の餌食と成るは今目前、サア兵部之輔が金言に返す詞が有るなら、一言半句の返答打つて見よ臺七」臺七「サアそれは」兵部「サア」臺七「サア」兩人「サア〱〱」兵部「なんと盜賊で有るまいか」ト言伏られ。臺七「エ、、、」ト口をしきこなし。兵部「もはや一寸も動さぬ、臺七思案極めて返答せよ」ト臺七こなし有つて。臺七「さうぢや、心に將の氣を持ちながら盜賊といふ名に迷ひ暫時の隙取、それ」ト行かうとする。兵部「まて」臺七「うぬと問答無益の沙汰だわい」兵部「イ、ヤ迯るとて迯がさうか、十間迯ぐれば十間殺し、二十間三十間たとはば百間程を隔てゝも、兵部之輔が腕に覺の遠當の術をもつて、立所にそちが一命を」ト兵部之輔身をかため臺七方へ當にかゝる、臺七花道にべつたり坐つて兩手を上げて。臺七「ア、是さ

ひ」谷五郎「兄弟の縁も是迄」臺七「シテ志賀の名跡は」谷五郎「そりや谷五郎が胸に御座る」臺七「もし本心を改めて」谷五郎「敵と名乗りいさぎよく」臺七「磯崎親子に討れなば」谷五郎「其時こそは」臺七「元の兄弟」谷五郎「家名をよごすか」臺七「武士を磨くか」谷五郎「善悪二つは」臺七「身共か胸に」谷五郎「マアそれ迄は」臺七「弟」谷五郎「兄者人、武士の立つべき御思案召れい」ト唄になり、件の鑓の穂先を持つて奥へ入る、跡に臺七こなし有つて。臺七「オヽそれよ、親の家名を穢す穢さぬ臺七が魂、谷五郎追付き見せて安堵させうぞよ、さうぢや」トこなし有つてつか〳〵と花道へ行く。兵部「卑怯者めが」ト臺七きつと立留つて。臺七「ナニ卑怯者とは」兵部「實義有る弟をたばかり、死出の用意などと誠しやかに此場を立去らんとは、武士に似合はぬ卑怯とやいはん、コナ盗賊めが」トいふに又きつと立留り。臺七「武士が零落れ切取するも有るならひ、まして是は劍術の遺恨によつて討果し立退くは武藝の勵み、それを盗賊といはゞ兵衛佐頼朝は平家を討つて六十餘州を掌中ににぎる、さすれば頼朝は盗賊といはうか、イヤたわけた事を」兵部「右大將頼朝は驕る平家を討亡し、四海安靜に治めしは後白川の法皇より院宣を賜はりし故、是皆源家の氏の尊き故、それに引替へ氏も素性も賤しき身をもつて、人を害し印可を奪ひ取つて立退くは盗賊で有るまいか」臺七「イヤ漢の高祖は沛縣の土民なれども、國を切取つて王位に登る、

臺七「ムウ」ト手を組み下にゐて思案のこなし、兵部之輔こなし有つて。兵部「ハテ天晴器量の若もの、義理有る兄を重んじ、家名を大切におもふ志、感じ入つた、某も一旦の義を立て敵は此者で御座ると白狀せぬは武士の情、義理と情な辨へなくては誠の武士とはいはれまい、とくと思案をしやれ」ト臺七こなし有つて膝をはたと打ち。臺七「ハアさうぢや、誤つた〳〵、恥辱を取つた其欝憤、甚内を討つて杉本の家を滅亡させんと、そこへばかり心付き、我身の破滅になるといふ所へ心付かざるは我誤り、幼少より養育に預り、大恩有る志賀の家名を退轉さすは、不所存とやいはん恩しらず、谷五郎よく言うてくれた、汝が意見聞屆けた、ア、弟は持つべきものだナァ、今といふ今臺七が本心を改め時、是より屋敷へ立歸り、死出の晴著の用意を調へ、是へ參つて潔よく、磯崎親子に討るれば、卑怯未練の名もとらず、武士の最期を巾立に、志賀の家名は弟其方相續致して呉いよ、賴み置くは是ばかり」谷五郎「ム、すりや本心に立歸り、敵と名乘つて出る所存とな」臺七「いかにも」谷五郎「イヤ合點が行かぬ、今日是へ御座つたは、こなたの心に一物有りとにらみ置いた」臺七「ヤアなんと」谷五郎「辯舌巧みに云廻し、此場を立退く所存で有らうがな」臺七「ヤア」と谷五郎、臺七が顏をきつと見て。谷五郎「こなたはのう、所詮定まらぬ本心と見ぬいた、卑怯未練に迯隱れ、其身を全う致されよ」臺七「すりや臺七が詞を疑

此屋敷へ御座つたは、磯崎殿を始、宮城野諸共に、だまし寄つて返討に致す所存よな、但し外に仔細有つてか、よもや我こそ甚内が敵と名告つて出る心は有るまい、殿の上意を幸ひにお勅使の旅館へ參ると僞り、當所を逐電する所存で御座らうがな、エヽ見さげ果た臺七殿、親團右衛門殿は小身なれども、代々高館の恩祿に連綿たる志賀の名跡、一子なきを愁ひ氏神への願望滿ずる日に當り、ひろひ歸りし此方は則ち氏神の告子と養育有つて、志賀の家督相續の跡にて拙者が出生、義理有る兄者人、殊に死去致されし二親の遺言を守つて敬ふ拙者をこばみ、ありとあられぬ非道の行跡、昨日お勅使お成の場所にて、宮城野と拙者が緣組を根に持ち甚内殿に恥しめられ、其遺恨に依つて加擔人を大ぜい待伏させ、白石の藪陰にて騙討とは卑怯な振舞、敵がしれねば杉本の家名は今日只今退轉致すぞや、なぜ武士らしく眞かく〳〵の遺恨有つて、甚内は我手にかけたと尋常に名乘つて出で、首さしのべて討たれさつしやれたら、あれ志賀臺七こそ誠の侍と、殿をはじめ一家中に、こなたの武名かゞやきまするぞや、それに何ぞや勅使の旅館へ參るなぞと、殿樣へは僞りを構へ、御師範たる杉本の家は滅亡させ、それが武士かイヤサ侍か、其にくしみでコレ志賀の家名迄沒收せらるゝといふ所へ心がつかぬか兄者人、エヽ淺ましい所存で御座るよなア」トきつと詰かけこなし有る、臺七一々聞いてゐて。

正近習皆々を引連れ、大學跡につき奥へ入る、侍共サア早く〱と佐五平お力頭陀八を追立て是非なく三人橋懸へしほ〱と入る、跡より侍四人つき入る、兵部之輔、臺七、谷五郎右三人跡に殘る、谷五郎始終手を組み思案のこなし。臺七「扨々笑止千萬な儀では有るというて致方もない、ドレ先殿の御意勅使の旅館へ參らうか、ナニ兵部之輔殿、先以て身の納りお目出たう存ずる、猶此上は入魂にお頼み申す、弟其方は宇治殿を奥へ同道、ドリヤ拙者は參らうか」ト立上る、谷五郎こなし。谷五郎「兄者人、お待ちなされい」臺七「谷五郎用が有るか」谷五郎「すりやいよ〱こなた樣は、お勅使の旅館へ御座るぢやまで」臺七「主命なれば行かずばなるまい」谷五郎「勅使の旅館へ御座らぬ先に、お目に懸くる物が御座る、先御待なされい」臺七「ナニ身共に見するものとは」ト谷五部懐中より件の鑓の穗先を出し。谷五郎「兄者人これ覺が御座るか」ト臺七取つて見て愕り。臺七「とれのヤ是は」谷五郎「よく存じて罷あるぞや」トきつといふ、臺七ぎつくりとなる、兵部之輔手を組みぢつと見てゐる、ト合方になり谷五郎こなし有つて。谷五郎「其志津の三郎の鑓は、親園右衛門殿の所持なれども、いまだ家中に誰有つて存じたる者もないがこなたの幸運、最前佐五平が持歸り、甚内殿の横死の場所に落ち有りし鑓の穗先、一目見るより扨は敵は兄臺七殿とは、谷五郎一人は能く存じ罷あるぞや、さはしらず甚内殿を害せし事を押包み、

る」大學「イヤそりや叶はぬ事ぢや、武士たる者が闇討にあへば、家沒收はお定り、それに猶豫などとはのぶとい事、其願ひは叶はぬ、只今屋敷を立退け〳〵」磯崎「そんなら如何樣に申しましても」大學「諄い」ト皆々顏見合せ。四人「ハア」トさし俯く、此內谷五郎思案のこなし。臺七「ハテ扨笑止千万、申さば殿樣にも御秘藏の甚內が妻子、何卒今日一日の御宥免、偏に願ひ上げ奉ります」市之正「オヽ臺七、神妙の執成、予も秘藏の甚內が妻子、不憫には思へども、武家の作法に依怙贔屓はならぬ、併し今日一日は予も此屋敷に有つて、彼等に名殘の盃を遣はさう」臺七「すりやお暇の御盃を、エヽ是さ冥加至極もない、サヽお禮を〳〵」皆々「有がたう存じまする」市之正「サヽ汝達へは名殘の盃、又兵部之輔主從の盃」兵部「ハッ」市之正「臺七は先刻申付け置いた勅使の旅館へ、見送りの挨拶萬事」臺七「畏つて御座りまする」大學「もの共其扶持はなされの下郎共、女郎諸共彼奴が部屋へ引立て、其外殘の者共へも右の樣子申し聞かせ、今日中に追出せ」侍四人「畏つて御座りまする、サア三人とも早く立て」ト三人ハアト辭儀する。大學「磯崎宮城野案內いたせ」兩人「ハア」市之正「臺七は旅館へ、兵部之輔奥へ來やれ」兵部「御前にはまづ」兵部、臺七「入らせられませう」ト唄になり、磯崎宮城野にサアおじやと手を取る、宮城野谷五郎へ心を殘して無理に連れて、案內する心にて先に立つ、市之

ア」ト こなし。市之正「扨は其方が聞及ぶ宇治兵部之輔政之どな、かねて劍術鍛錬の高名、當國迄もかくれない、予が事は高館市之正長宗、對面は今が初め、家の師範たる杉本甚内横死の上、暫時も師範なくては餘國の嘲り、兼て兵部之輔汝が武藝したはしく思ひし折から、今日思はず對面せしは正しく奇緣、何卒其方我國に留つて一子六太郎が師範となり呉うならば予が大慶、一家中の悦ひ、此儀承知してくれうか」兵部「コハ有難き御前のお詞、武者修行と申立諸國を遍歷仕るも、よき主取を願ふ所存、かゝる大國の師範となるは武士の面目、御辭退申さず暫く當國に足を留め、若殿樣へ御指南仕るで御座りませう」市之正「オゝ早速の承知滿足〳〵」大學「ハテおもひも寄らぬ宇治兵部之輔、此國の師範とは、何臺七如何おもふぞ」臺七「すんと善う御座りまする、兼て名高き宇治兵部之輔、此國に足をとむるとは」ト兵部之輔と顔見合せ。「先安堵仕つた」磯路「ハッ大殿樣へ御願申上げまする、甚内討れました敵のしれませねば、杉本の家名は今日限り、何卒殿樣の御仁心を持ちまして、夫の敵を尋出しまする迄、家沒收の儀を御宥免下されませうならば、生々世々の御厚恩と申しませうか、コレ娘、そなたも倶々、お力佐五平頭陀八も、お願ひ申してたもひのう」宮城野「今母樣の申されまする通り」お力「どうぞ今暫くの御宥免を」佐五平「何卒お聞屆下さりませうならば」づだ八「有りがたう存じ」四人「奉ります

なしに申せ、達て包みかくせば其方が爲にならぬぞよ」　トいふ中臺七色々こなし。臺七「アイヤアイヤ憚りながら御前の御意で御座りますれど、劍術の師範たる甚内を討つて立退く程の者、うかうか當所に罷ありませうか、そこをぢつとか樣な席へ參りをるは、そりや大丈夫でなけりやいたさぬ事、よもや左樣な者も御座るまい、のふ六部、さうでないか、此敵は同家中では有るまい、固より此席に左樣な面體はなければないとナ、言つたがよい、よもや此場に其面體に似たる者は有りそむないものぢやてなァ」　ト兵部之輔呑込みこなし、思入有つて。兵部「なる程かう見ました所が、其敵の面體は御座りませぬ」　ト臺七落つきたるこなし。磯、左五、カ「そりや此場に其面體はないか」　ト顏見合せ。「ホイ」　ト當惑の體。大學「それ六部に繩ぶたつしやれ」　ト家來出て。四人「うで廻せ」　ト兵部之輔に詰かゝる。兵部「何科あつて搦め捕らつしやるな」　大學「イイヤのぶとい奴の、察する所甚内闇討の場所に有合せ、必ず此事他言致すなと賄賂の金を貰ひ、其恩に敵の面體はしつたれども名は存ぜぬ抔と紛らはしき言譯、繩打つて獄舍へ引きそれ踏付けて繩ぶて」　四人「ハツ、捕つた」　トかゝるをぽん／＼となげて。兵部「六部となつて諸國を廻る武者修行仕り、一流を立てんと心ざす宇治兵部之輔政之、わづかの金子に眼くれ、本意を忘る武士ぢや御座らぬ」　大學「ムウすりや其方が宇治兵部之輔政之か」　兵部「如何にも」　大學「はてな

程其敵は能く存じてをりまする」ト臺七こなし有る、谷五郎もこなし有り。大學「シテ敵の名は」兵部「イヤ名は存じませぬ」大學「ヤア何といふ、敵は能く存じてをると云つて、又敵の名は存ぜぬとは紛らはしき言、コリヤうぬに詮議が有るわいやい」兵部「イヤ六十六部へ大乘妙典を納る修行者、且以て僞りは申さぬ、敵は能く存じながら、名は存じませぬてや」大學「敵を存じながら名を知らぬとはどういふ仔細だ」兵部「なる程御不審は御尤、夜前暮過白石の谷蔭を通りし所、何かは知らずころび落ちたる血汐の死骸、ハテ心得ずと窺ふ所に、つゞいて上の山手より驅來る侍、先暫くと呼留め、意趣斬か口論かと樣子をとへば、劍術の遺恨によつて討果すといひ捨て其場を立去る、其時面體は能く見覺え置きました」ト臺七こなし。「併し佛道修行の身の上なれば、追かけて名を聞くにも及ばずと存じ、か樣な場所へ參り合すも他生の緣と、死骸に廻向致す所へ、御息女や御家來が驅付け、私を敵ぢやといはつしやる、此方に覺ない樣子を段々と申したれば、然らば敵の面體を見覺えるが手懸りと有つて、是へ同道致したので御座りまする、ひよんな所へ參り合せ、拙者が迷惑御推量下さりませ」市之正「ムウスリヤ劍術の遺恨によつて刄傷に及ぶと有らば、此敵は正しく家中の中に有ると覺ゆる」ト臺七こなし。「コリヤ修行者、これなる大學を始め、かう並居る中に、其敵の面體に似たるものはなきか、あらば遠慮

の通り、武士が闇討に逢へば家名は立ぬ、家は沒收、ハテ何とも氣のどく千萬な」左五平「イヤ敵の名は確と相知れませねど、慥な手懸を捉へ置きまして御座りまする」ト聞いて臺七ぎつくり、谷五郎もこなし、磯崎悦ぶこなし有つて。磯崎「何といやる佐五平、敵の手懸をとらへおきやつたとなア、エヽ其方も先刻にからさう言うて給つたがよい、ほんによう捉へてたもつた、サア其手懸を早く爰へ出して殿様のお目にかけてたもひのう」左五平「畏りました、只今お目にかけますするで御座りませう、サア修行者是へ出やれ」ト乘物の戸をあける、ト内より兵部之輔すつと出る、臺七、兵部之輔を見てぎよつとしたるこなし、市之正、大學、谷五郎、磯崎、頭陀八、此人數は不思議なこなし、兵部之輔、臺七を見てこなし有つて。兵部「何れも御免下されい」ト平舞臺の眞中へすわる。大學「ヤイ〳〵下郎め、見れば六十六部を引連れ敵の手懸とは、どういふ仔細ぢや」左五平「されば の儀で御座りまする、主人甚内最期の場所に居合はせし此六十六部、扨は彼奴が所爲と存じ、主人の敵遁さぬと申せども、且以つて覺なき申譯はいたせども、最期の場所に有合せ、殊に敵の面體はよく覺えるるとの儀、さるによつて屈强の手懸と存じ屋敷へ同道いたしまして御座りまする」ト此白の中、臺七色々こなし有つて。大學「ムヽすりや其六十六部が敵の面體をよく存じをる、コリヤ殿の御前ぢや、狼狽へずと確と申せ」兵部「ハイ成

察しやる」大學「兩人の者、家中の屋敷へ殿のお成とは冥加ない事た程に、有難いとおもつてお禮申上げい、なんと臺七、甚内は幸福者だないか、不慮に討たれたればこそ、殿の直々の御悔、かくいふ大學は殿の弟なれども、分地七萬石を領し、家老役を相勤め千石を頂戴する小身の甚内、身共に遙か勝つた憐愍、ハレ甚内は果報者では有るわい、フ、、ハ、、、」臺七「なる程、大學樣の御意の通り、日比御懇望の甚内殿、おもひも寄らぬ横死の樣子、殿樣にも甚惜ませられ、御寵臣なればこそ直のお成、コレサ磯崎殿、宮城野殿、冥加ない殿の御心配、おろかに思はぬがよく御座るぞや」ト磯崎、宮城野ハット涙をかくし辭儀する。市之正「たとへ小知にもせよ杉本甚内は高館の師範、討つて立退いたるは、當主に刃向ふも同然、たとへ何方に迯隱るゝとも、尋出して其方達に本望とげさせくれう、シテ甚内を討つたる敵の家名實名は何といふ、早く其名を申せサ」磯崎「ハツ有難い殿樣の御意、夫甚内を討ちました敵の名は」大學「何といふ、サア早く申せ」磯崎「サア其敵の名は」大學「其敵の名は」磯崎「サア其名は」ト磯崎、宮城野、お力、佐五平顏見合せこなし、此内谷五郎もぢつと思案のこなし。大學「ム、すりや敵の名はしれぬか、スリヤ甚内は闇討に出合ひ、敵は何者ともしらぬか、フ、、ハ、、、、武士たる者が闇討に逢ふとは、ハレいはう樣もない馬鹿侍、杉本の家は沒收だぞよ」臺七「是さ兩人、大學樣の御意

品、銘は則ち志津の三郎」と聞いて谷五郎つか〳〵と傍へ行き。谷五郎「どれ其鑓」ト取つて見て。「いかにもコリや是志津の三郎、スリヤ」左五平「其穂先御存じて御座りまするか」トきつとこなし。づだ八「正しく鑓の主が主人の敵」磯崎「何者の所爲で御座りまするぞ」宮城野「見覺が御座りまするならば」お力「申し谷五郎様、其持主は」左五平「何もので」五人「御座りまするな」ト五人詰かけていふ、谷五郎スリヤ敵は兄の臺七で有つたかといふこなし有つて、又五人の顔を見て様様こなし有つて。谷五郎「ハテ何者の所持の鑓か」左五平「すりや御存は」皆々「御座りませぬか」ト谷五郎こなし有つて、五人顔見合せ。谷五郎「いかにも」五人「フン」トこなし、向ふにて。向ふより「お成り」といふに皆々驚く。谷五郎「ハテ心得ぬ家中の屋敷へ殿のお成とは稀の儀、何にもせよ先お出迎ひ」皆々「ハアヽヽ」ト皆々威儀つくろひ、谷五郎鑓の穂先を紙にて巻き、懐中して出迎ひ。磯崎「殿様にはイザ先是へ」皆々「お通り下されませう」ト向より高館市之正大殿の拵へ、著附袴羽織、ちひさ刀にて、跡より小姓刀持ち出る、高館大學著附社袴大小にて、臺七著附社袴大小にて、跡より近習大勢、著附社袴大小にて出來る、皆々すつと通り、市之正二重舞臺の上の方に坐る、次に大學臺七すわる、近習皆々後へ並ぶ、谷五郎平舞臺の上にすわる、磯崎、宮城野、お力、左五平、頭陀八下の方に並ぶ。市之正「磯崎、宮城野、おもひ寄らぬ甚内が横死、さぞ愁傷

宜でお討れなされた。其場の樣子によつて又敵の手懸もしれるもの、サア其場の樣子はどうぢや、コレ宮城野、泣いて許り居やつてはすまぬ、樣子をいやいのう、アヽかういふ事の有らうはしか、先刻に花の散つたといひ、摩利支天の掛地といひ、皆しらせで有つたもの、夫の御最期とは氣もつかず、今の今迄知らなんだは、女子の淺はか、サア佐五平やお力も、お討れなされた其場の樣子、早ういやいのう」谷五郎「コリヤ佐五平、武士が闇討に逢ひ、敵がしれねば杉本の家は立たぬぞよ、磯崎殿、最前甚内殿横死の樣子、聞くとひとしく驅付け參つたれども、何の樣子も御存じなき體、申聞かせなばさぞ仰天、如何はせんと猶豫ふ內、御身達が立歸り、敵はしれぬとばかりでは事が濟まぬ、何卒手掛に成るべき儀でもないか、佐五平コリヤ心を靜めて仔細をいやれ」佐五平「ハッ谷五郎樣、奧樣、其場の樣子と申しまするは、昨日龜割坂の山館にて、お勅使をお見立申し、直樣御主人には高館へお歸り、拙者は旦那の御用に付き、二本松迄參りかゝる途中にて、數多の烏が鳴騷ぐ、ハテ心得ずとおもふ程に、俄の胸騷、心も空に白石の下道傳ひ、谷の邊りにて血汐に染みし死骸を見れば、お旦那、南無三寶と驅寄り見れば、無念や御主人には早事きれて敢ない御最期で御座りましたわいのう」磯崎「ハアヽヽ」ト泣く佐五平手拭にて包みし鑓の穗先を取出し。左五平「御最期の場所にて手に入つた鑓の穗先、手懸りの一

にて様子を聞けば、甚内様は夜前白石の藪かげ」磯崎「ヤア」づだ八「あへない御最期で御座りましたといのう」磯崎「ヤ、、、そりやド、どういふ仔細で、サ、其譯は」づだ八「イヤ委しい様子は存ぜねど、途中で宮城野様のお目に懸り、お旦那の様子聞くと其儘、あなたへお報せまうさんと立歸りまして御座りまする、最早是へ宮城野様もお歸りで御座りまする」トいふ中向ふより家來大勢エイサッサ〱と早打の様に乗物を舁き走り出る、此跡より宮城野、お力、左五平乗物に引き添ひ走り出る、乗物橋懸へ舁きおろす、宮城野、お力、左五平、磯崎を見て。宮城野「ヤア母様」左五平、お力「奥様」磯崎「甚内殿の様子は聞いたか」三人「エ、口惜しう御座りまする」磯崎「サア敵は何者ぢや、敵の名はなんと〱」トせいていふ。三人「サア其敵の名は」磯崎「名は」三人「サア其名は」磯崎「何者ぢやぞいのう」トきつといふ。宮城「其敵の名は」佐五、お力「しれませぬわいナ」磯崎「ヤア、、、、」ト驚く。「何と言やる、甚内殿を討つ敵の名はしれぬか」宮城「アイ」トなく、磯崎こなし有つて。磯崎「ハア、、」ト泣いて又きつとなつて佐五平お力をむこふへ連出て。「こりや佐五平お力、そち達二人を供にやつたは、これ斯ういふ時、佐五平は元より、お力そちも男勝りの力量有る者故、まさかの時は氣遣ひないと思うたかひもなう甚内殿をやみ〱と討せ、其敵しれぬといふて事が濟まうとおもふかいやい、サアどういふ時

出來て。谷五郎「ホウ磯崎殿」磯崎「谷五郎樣、マア〳〵お通り下されませ」谷五郎「然らば御免下されませう」ト谷五郎上へ通り、磯崎が面體に心を付けるこなし、磯崎何氣なう下にゐて。磯崎「谷五郎樣、シテ御用とは何事で御座りまするな」谷五郎「イヤ師匠甚内殿の儀に就き」磯崎「サア御覽じて下さりませ、夜前どの道歸られまする筈の所、何の便りもござりませぬ故、餘り心元なう存じまして、今朝早々家來頭陀八を道迄迎ひに遣しました」谷五郎「ムウすりや何も樣子は御存じないか」磯崎「樣子しらぬかとは何ぞ氣遣な事は御座りませぬか」谷五郎「サア其儀は」ト言はうとしてこなし有つて。ムント思案のこなし、磯崎合點の行かぬこなしにて。磯崎「どうやら樣子有りげな谷五郎樣、何とやら氣遣はしう存じまする、申し早う樣子をお聞かせなされて下さりませ」ト此時床に懸けたる摩利支天の繪像はたと落ちる、此音に磯崎悄りして、つか〳〵と行き掛地を取つて。磯崎「武運の守り摩利支天の繪像かざり置いたに、風も吹かず物にもさはらず、此掛地のおちたは」谷五郎「すりや武運の守り、摩利支天の尊像を餝り」磯崎「今も今とて庭の櫻のちりしも氣懸り」谷五郎「摩利支天の掛地といひ」磯崎「櫻の散つたも」谷五郎「正しく」磯崎「ヱ」谷五郎「ハテ爭はれぬ」磯崎「サア樣子をお聞かせ下さりませいなア」ト向ばた〳〵にて奴頭陀八逸散に走り出で。頭陀八「ハツ奥樣」磯崎「ヤア頭陀八か」づだ八「ヤお旦那を迎ひに參る途中

ふ花ふゞき」ト此文を見て。「道ならぬ此文は正しく」トこなし有つて又櫻を見て。「花物いはねど風も吹かぬにちるはしらせか。此文といひ花といひ、ハテ心ならぬ事ぢやな」ト文と櫻を見て宜しくこなし有る。お濱「ヤ奥樣、櫻の散つたをお心におかけなされ候やうに見えまする、こりや目出たい事の有るしらせでござりまする」お汲「これお濱どの、どうして花の散るのが目出たいぞいのう」お濱「ハテ散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、とやらいふ歌が有るぢやないかいの」お汲「イヤ／＼、それでも櫻の散るは春の夕暮、入相の鐘に花や散るらん、といふ歌が有るぢやないかいの、それにまだ夕暮所か、今やう／＼時計が五ツを打つたわいのう」お汲「朝の間から花の散るとは、本に變つた事ぢやのう」お濱「是はしたり、其樣な事はいはぬものぢや、奥樣が氣におかけなさるゝ故、祝ひ直しておくものぢやわいの、あゝ笑止なお衆では有るぞ」トいふ所へ下部一人走り出る。家來「ハツ申上げまする、志賀谷五郎樣何か御意得たき御用有つてお出で御座りまする、是へお通し申しませうかな」磯崎「オヽ谷五郎樣は甚内殿のお弟子といひ、殊に御懇意のお方、御用とは何事ぞ、直にこれへお通し申しや」家來「ハツ」ト下部橋懸へ入る。磯崎「これそなた衆はお菓子茶の用意しや」婢皆々「畏りまして御座りまする」ト四人奥へ入る、いそ崎右の文を巻納め、懐へ入れる、ト橋懸より谷五郎著附社衽にてつか／＼と

で、死骸につまづき、色々見る事有つて。左五平「ヤアコリヤ是御主人甚内様〳〵」ト呼生ける事色々有り。「何者の所爲」ト行かうとして戻り。「今一足遅かりしか」エヽ殘念なト下に居て大泣、此内兵部之輔笈を負ひそろ〳〵行かける、左五平目を付けつか〳〵とよつて。「御主人の敵」ト斬つて蒐る、兵部之輔振かへり。兵部「早まるまい、まつた」左五平「なにを」ト斬つて行くを入違へて。兵部「聊爾せまいぞ」ト錫杖を構へ眼を配る、左五平こなし、此身得よろしく。

幕

二幕目

造り物三間の間二重舞臺、向ふ奥塀口折廻り障子家體、此内に床の間これに摩利支天の掛地を懸け、前に供物を供へ有り、橋懸後屋敷塀、上の方に平舞臺、櫻の立木花盛りの體、幕の内より甚内女房磯崎著附襠にて、二重舞臺眞中に長い文をよんでゐる見得、お島、お汐、お濱、お汲著附娍の形にて、二重舞臺の下の方にすわりゐる、ト右盛り　櫻花散かゝる見得、磯崎此體を見て文をよみさし、櫻の木を見て不思議のこなし、此見得にて面白き合方にてまく明く、ト磯崎こなし有つて。

磯崎「明日見んとおもふ心の仇櫻夜半に嵐のふかぬものかは、庭に盛りの彼の花の、雪と見まが

體にて眼をくばる、臺七氣を變へぢつとおとし付けて。「其元は武者修行でござるな」 兵部「左樣でござる、武州より此奥州へ經廻り、一國に一人の首塚を築き、是より北國筋へ參るのでござる」 臺七「ムヽわざと名は聞き申さぬ、此場の始終必ずとも他言召さるな」 兵部「眞以つて口外は仕らぬ、が所望がしたい」 臺七「所望とは何を」 兵部「楠流の印可の卷を」 臺七「なんと」 兵部「武者修行仕るも身に大望有つての儀、印可を渡して味方さつしやれ」 臺七「なりませぬ、遺恨の元は印可の卷、犬骨をつて鷹の餌食に渡す事罷ならぬ」 兵部「ハヽヽヽかう面體を見しつたれば、何時にても手に入れ申す、お身にしかと預けたぞ」 臺七「讓る時節に讓らうわい」 ト兵部之輔懷中より卷絹を出しひろげ。 兵部「天上天下唯我獨尊、身が尊む此祕文、此場の誓紙是に血判」 臺七「イヽヤ望有る身共、旗下に隨く事罷ならぬ、血判いやだ、何を馬鹿な」 ト言捨て花道へつか〱と行く、兵部之輔懷刀を手裏劍に打つ、ト臺七肩先へ立つ。「こりや何とする」 兵部「再會すべき後日の合紋」 臺七「ハテ念の入つた」 ト小柄をぬき打返へす、兵部之輔片手につかみ。 兵部「血判慥に請取つた」 ト小柄の血を右の絹にぬる。 臺七「ムウン」 ト無念のこなし。 兵部「重ねて逢はう」 ト臺七氣をかへ。 臺七「さらばだ」 ト向へ行懸ける、戸屋の内に人音する故、引返し橋懸へ走り入る、ト向より左五平奴の形、胸當股引脚袢三尺帶、菅笠持ち捨白いひ〱出

中將家の雜掌野々宮宮内殿に兼てより賄賂を以つて取入りおけば、京都へ登り築地の内へ入りをらば、指ざしならぬ屈強の隱家」官兵衞「然らば後日に」軍、新、登「尋ね參らう」臺七「あの地にてお出會申さう」ト袱紗包の金を出して路金にさつしやれとやる、官兵衞取つて銘々に一包づつわけてやり。皆々「忝い」臺七「おいきやれ」皆々「ハッ」ト此人數皆々橋懸りへ走り入る、臺七見送りこなし有つて死骸の懷中に有る印可の卷を出してひろげ、月明りに見る事有つて。臺七「年月望みし楠流印可の卷、エヽ忝い」ト笑坪のこなしにて卷納める、ト此時上の藪垣ひらく、ト宇治兵部之輔六部の拵にて笈をおひ、錫杖をつき、最前より聞いてゐた心にて立つて居る、臺七尻褰をおろし、こなし有つて、のさ〳〵と花道へ行きかける、兵部之輔ずつと向へ出て。兵部「是々お侍」ト呼ぶ、臺七ぎつくりして立留る。臺七「呼つしやれたは身共でござるか」兵部「いかにも、只今見請けますれば刀傷の體、行合の口論でござるか、但し意趣斬でござるか、承り屆けたい」臺七「意趣斬でござる、兵法の遺恨ござつて、相手をしとめ立退くのでござる」兵部「ムヽ、武士の身にはまゝ有る事、しかし相手をしとめながら、終刀をさゝぬはお侍に似合はぬ、ちと不心得に存ずる」ト臺七こなし有つて。臺七「尤も」ト本舞臺へ戻つて來て。「とゞめさしませう、只今とゞめを」ト兵部之輔を目がけ切らんとする、兵部之輔油斷せぬ

たばたにて右藪間の細道へ臺七を追込まれし見得にて迯げて出る、甚内拔刀にておはへ出る、難なく追詰め討たんとする、甚内目先へ藪より鑓ぬつと出る、甚内飛退く、此隙に臺七藪をぬけ後へ入る、方々より投鑓出る、甚内切拂ふ、藪間にて自由に働かれぬこなし、後の藪より鑓ぬんぬと出る、悉く切拂ひ色々有ると、臺七前の藪に引添ひ出て、鑓を突込む、甚内が脾腹を突立てる、其儘鑓の穂先を切る、臺七ぬけて藪の中へ入る、立廻つて、甚内「うぬ人外め、冥途の供に連れる、覺悟ひろげ」臺七「こま事ほざかずとくたばれ」ト切結ぶ、皆々出て拔つれて切込み〳〵難なく甚内をしとめる、藪を引分けて皆々前へ出る、此時吹替の死骸にて前へ出るなり、皆々ホツト息をつく、合方になり邊を見て一所へ集り。臺七「どうやらかうやら了ひ付けましてござる」官兵衞「餘程骨がをれました、のう何れも」文助皆々「さやうでござる」臺七「始より手剛いと存ずるから、迯るふりで藪中へ誘き入れ、覺えの手鑓で脇坪をぐつしやり」皆々「お手柄でござる」臺七「時に各々方暫く影を隱さずばなるまい」官兵衞「なる程國許の手筈次第で事落去の上、大學樣よりおしらせ有る筈」「一先此場は」三人軍吾「立退くでござらう」文助「臺七殿、貴殿は如何召さるゝ」臺七「されば拙者は何くはぬ顏で一先立歸り、路用を貯へ、折よくば宮城野を引つかたけ退く思案、首尾よう致して跡から參る」官兵衞「シテこなたはどれを目當に」臺七「都

を見て。臺七「日比の欝憤うぬ甚内」ト鑓をよこたへ向へ走り入る。

返し

一面の黒幕松原になり、本釣鐘にて入相を打つ、向より駕籠をぼつ立て甚内馬上にて出る、早く〳〵と捨白有つて本舞臺へかゝる時、上手の松枝より本雀十羽程パッと立つ、甚内馬を乘留めきつとなつて。

臺七「ハテ怪しや、今黄昏に至つて諸鳥は塒に歸るべき頃ほひ、野に伏兵有る時は歸鴈列を亂すといふ、扨は」トきつとこなし、松原の間より丈助、軍吾、新吾、曾平黒裝束、皆々出て供先へ切つて懸る、甚内が家來皆々迯げる、甚内馬より飛びおりて抜合はせ切結ぶ、丈助駕籠の繩を切る、官兵衛出る、繩を解き一腰をやる、官兵衛も加勢に加はる、甚内左右を切拂ふ、臺七も出て鑓にて蒐る、甚内は臺七ばかりを目ざして切つて行く、臺七程よくあしらうて橋懸へ迯げて入る、甚内追かけるを皆々さゝへる、取つてはなげ〳〵橋懸の方へ行く、始終本釣鐘、此間チョン〳〵にて松原東へ引く、西より藪疊出る、但し此藪二並にして、前は高さ三尺許、後は揩きりにして、本竹の藪段々に出て一面になる、右の立の見得にて皆々橋懸へ入る、始終ば

やうにござりまする」甚内「ハテ心得ぬ、シテ臺七は如何致した」お力「過急の御用と有つて高館へ只今お歸り」甚内「扨こそ猶豫ならぬお國の存亡、其方は姫のお行方詮議いたせ」お力「心得ました」甚内「用意の一腰」トやる、お力取つて。お力「親旦那樣」甚内「はやう行け」お力「ハッ」ト刀を持つて向へ走り入る、官兵衞きよろ〳〵する。甚内「馬引けやい」侍「ハア、」ト橋懸より口取乘馬を牽き、鑓持草履取隨き出る、此間に甚内、官兵衞に猿轡をはめ。甚内「用意の駕籠をもて」侍家來「ハッ」ト家來二人囚人駕籠を持つて出る、甚内、官兵衞を引立て駕籠へ打込み、家來繩にて駕籠をくゝる、此間に甚内馬を引寄せて打乘り。甚内「高館迄は行程十五里、白石の松原より山手にかゝれば難所なれども、僅かに八里、其駕籠早く〳〵」家來「ハア、」ト駕籠を舁いて向へ走り入る、甚内馬を乘廻し鞭をあてゝ向へ逸散に驅けて入る、鑓持草履取ついて入る、所知入止む、合方になる、ト奥塀口より臺七鑓を持つて丈助、軍吾、新吾、舎平跟き出る、橋懸より黑裝束四人、皆鑓を持ち窺ひ出る、臺七眞中に皆々ひそめきより。皆々「臺七どの」臺七「最前の意趣といひ、官兵衞が口走つたれば、もう甚内めを生けちや措かれぬ」丈助「老耄ながら武藝の達人」皆々「我々が加勢で」臺七「城下の松原、道は二筋」丈助「弓手右手より引包んで」臺七「はやく」皆々「合點ぢや」ト丈助始め皆々橋懸へ走り入る、臺七鑓の鞘を外ししごく事有つて、向

知入になり、官兵衛死骸を柴垣へ蹴込み。官兵衛「ばらし次手に甚内めを、さうだ」ト鯉口をくつろげ、奥を目がけて行く、向へ甚内出て立塞り。甚内「官兵衛どれへ」ト官兵衛氣をかへ。官兵衛「イヤサ身共は」甚内「血相してどれへ參る」官兵衛「ア丶かうでござるわい、向後志賀氏を破門致して、こなたの弟子に成りたい望み、そこで先生の武藝をちよと試みに」ト抜いて切りかける、腕首を取つて。甚内「ハテ役にも立たぬ事を」官兵衛「所を」ト又切つて行く、程よく抜身をおとし、取つて押へ早繩にて括り。官兵衛「是サ〳〵こりや身共を何と召さるゝ」甚内「伯父御大學樣を始め、臺七が惡事の段々、何もかも白狀いたせ」官兵衛「イ丶ヤしらぬ、左樣の儀は存じ申さぬ」甚内「ぬかさぬか、言はずばかうして」ト鞘にてこぢる。官兵衛「アイタ〳〵、これ〳〵いひます〳〵、緩めて下さりませ、何もかも言ふ〳〵、いふわいのう〳〵」甚内「サアぬかしをらう」官兵衛「かうごしにかゝるからは、皆ばれてしまふは、高はかうぢや、伯父御大學殿が此一國を押領せんといふ大望、叛逆の勸人といふは臺七殿でえすぢや、そこで家の寶鎭守府の印を盗んで大學殿へ渡したも臺七殿、こなたの門弟丈助を始め、其外の門弟、此官兵衛迄が味方についたは慾に迷うての出來心、かう白狀するからは命はどうぞ、ハイ〳〵お助なされて下さりませ」ト泣く、ばたばたにてお力走り出て、お力「親旦那樣、只今殿樣お立の所、お姫樣のお行方が相知れませぬ

な事しやつたら赦さぬぞや」七郎「オヽ怖い事ぢや、邪魔ひろぐとコリヤ」ト大だらをぬいて。「此平針が情所へグウトお見舞申すぞよ」トびら付かす。櫻木「これ滅多な事せまいぞ」七郎「わたせやい」櫻木「イヽヤならぬ」七郎「いたく〵をささうか」三人「サア〵〵」七郎「エヽ面倒な」ト櫻木を斬らんとする所へ與茂吉出て、七郎兵衞の拔身にしがみ付く、はなさぬ故腕へ喰付く、七郎兵衞これにて拔身をはなし顔を見て。「ヤアおのれは」與茂吉「七郎兵衞殿、よう信夫樣を賣つた金を横取せなんだなァ」七郎「ヤイ野呂間め」與茂吉「のろまぢやない入間ぢや」七郎「エヽ邪魔な、退させ」ト與茂吉をなげ雛形姫へかゝる、櫻木支へる、與茂吉も又かゝる、色々世話の立廻り有つて、櫻木、七郎兵衞を引廻し。櫻木「コレ入間さん、爰構はずとお姫樣を」與茂吉「甚内樣へ送つて行くまい」七郎「うぬ」ト行くを櫻木さゝへて。櫻木「早う行かしやんせ」與茂吉「行けとはどうぢや」櫻木「イヤ行かしやんすな」與茂吉「イヤ行かぬ、お姫樣ごんすな」ト姫を連れて向へ走り入る、七郎兵衞行くを櫻木止める、立廻り有つて七郎兵衞拔身を取上げ櫻木をぽんと切る、ウントト倒れる、とゞめ刺さうとする、官兵衞出かけるて。官兵衞「こりやとゞめに及ばぬ、斬捨にして」七郎「こちらな仕事を」官兵衞「早う行け」七郎「合點ぢや」ト向へ走り入る、官兵衞、櫻木がとゞめさす、ト東の樂屋にて。「還御」トいふ、ト西の樂屋にて。「若殿のお立」トいふ、所

甚内もこなし有つて。甚内「ア有難き殿の尊命、かゝる賢慮の明君に教導なし、師範と申すもをこがましき甚内め、愚按を以ておもひ計れば、三年以前九州において七草一揆の大將四郎太夫、軍師森宗意軒など名有るもの共悉く討死し、事落著に及びしかど、七草餘黨が寶と尊む面影と名付けし邪法の鏡、是をもつて飛行自在の術をなすと語り傳へし稀代の一品、亂軍の中に紛失なし、かいくれに有所しれず、若殘黨の輩有つて領地へ入込み、鎭守守の印紛失も、目あては一ツの手筋ならんか、慥にそれと、サ推量はしながらも、手懸を取得ぬ中は荒立てられぬお家の騷動」六太郎「シテお勅使を呼迎へし其方が所存は」甚内「婚禮跡目も事なく調へ、鎭守府の印は紛失、詮議の日延仰付けられいとお願ひを申上げ、承引なくば拙者めが」ト腹切るといふ眞似する。六太郎「すりや」トいふを抑へて。甚内「ハテ何事も甚内めにお任せあられませう」六太郎「よきに詮議を致してよからう」甚内「ハッ、御前には先入らせられませう」ト唄になり六太郎こなし有つて奥へ入る、甚内も思入有つて、跡より入る、序の舞になる、ト奥塀口より七郎兵衞、雛形姫を引立て出る。七郎「うせう〳〵」姫「これ狼藉な、何としやるぞいのう」七郎「何ともせぬ、さる人に賴まれて貴樣を衣川の深みへどんぶりこさすのぢや、お出〳〵」ト引立つる。姫「コレどうしやるぞいのう」ト色々有る、櫻木出て七郎兵衞をおさへ、雛形姫をかこひ。櫻木「滅多

勝といたさず、始終の勝を專要とする武藝の骨法、とくと御合點が參りましたか」官兵衞「御尤さうに存ずる」臺七「いづれもサヽお越しなされい」ト唄になり臺七腰膝の痛みをかくすこなしにて、刀を杖につき、官兵衞同じく腰をかゝへ、谷五郎、宮城野、丈助、軍吾、新吾、曾平、お力も跡より、甚内へ會釋して此人數皆々入る、甚内六太郎殘る、合方になり六太郎四邊を見て立寄り。六太郎「甚内、家の重寶鎭守府の印はとくに紛失いたさうがな」甚内「なんと御意なさる」六太郎「寶藏の鍵預りは其方、紛失せしを深く包みし心遣ひ、それと推量致したわいやい」甚内「なる程御推察の上は包むに及ばぬ、二ケ年以前某鎌倉在番の留主中、寶藏の石垣を取つて忍び入り、鎭守府の印を奪ひ取つて立のく曲者、表向に致さば事大仰にならんと存じ、此日比心を付けて相尋ねをりまするやうにござる」六太郎「サアそれ故にこそ某も故意と女の色香に迷ひ、酒宴亂舞に日を暮すも、家中の内を探らん爲、然るに今日勅使のお入、婚禮が直に跡目、家を繼げば寶を持參し上洛せねばならず、コハ如何せんとおもふ折から、伯父大學殿のおすゝめ、達の大木戸に僞りの軍を始め、勅使を都へ追つかへし、心の儘に遊べよとすゝむる心の一物、わざと乘つて隨ひしも、無禮狼藉の科を蒙り、家督の期を延しなば、其内に寶の詮議、心にあらぬ放埒と察せしは汝一人、此年月の心盡しを、甚内推量してくれい」ト愁ひのこなし、

馬せしは、天命天罰其身に報い思ひしつたで有らう」ト臺七が胸倉を持つて引立て、拔身を胸先へさし付け。「サかく手の下の罪人となつて遁るゝといふ術が有るか、咽ぶえを抉らうか、袈裟に切らうか、胴切にせうか、但しかうして生首をぶち落さうか」ト刀のむねを首筋へあて挽切るやうにする、臺七無念泣になく、甚内こなし有つて。「それ迚も刀の穢れ、勅使お成の折からといひ、命ばかりは助けてくれる、此後性根を入替へをらう」ト突はなし突のけ、拔刀もはふる、臺七ぐんにやりとなり弱りしこなし。文助「何と何れも、どう思うてもやはり先生の、流義がよくござるの」皆々「さうでござる」文助「臺七殿は女さへ相手に得うせん生でござる」皆々「ハヽヽハ」六太郎「甚内が穩便の計ひ、事納りし上は宮城野谷五郎が祝言を取急ぎ、妼力が今日の手柄、歸館の砌沙汰に及ばん」皆々「有難う存じまする」六太郎「甚内には密かに言渡す儀有り、一家中とも勅使の御前へ相詰めてよからう」文、軍、新、官「畏つてござります」官兵衛「サア先生お立なされ、お手を取りませうかな」ト臺七差添を取つて鞘へ納め、又刀を納める　此時散亂して有る小判をそつと取つて袂へ入れ、それより刀を杖にして腰の痛むこなしにて、むりに立上り。臺七「官兵衛殿、よく聞かつしやい、漢の沛公と申すは元はいけんの土民項羽と戰つて、百度の内九十九度相負けてござる、終の軍に只一度打勝つて漢家四百年の基業をひらいたとござる、一旦の勝を

者人、エヽこなたはのウ、若殿の御前とも憚らず人もなげなる我慢偏執、其廣言にも似ぬ先程よりの立會、金子を以て仕付る試合、勇もない表裏の勝といふ事は、アレ甚内殿がとつくりと見てござるわいのう、女童にも仕付らるゝ未熟不鍛錬の身を以て、我意につのる氣まゝ法外、未練とやいはん、卑怯の振舞ヱヽ、見さげ果たお心ぢやのウ」ト泣いていふ、臺七、谷五郎が胸倉持つ手をふり切り、お力方をねめ付け、甚内が傍へいて。臺七「甚内氣疎いものぢや、召遣の女郎でさへ今の手の内、驚き入つたきよとい物だ、身が手の内誠未熟か未熟でないか、眞劍を持つて、甚内汝を」ト拔かける、甚内おさへて。甚内「コリヤ何する」臺七「眞劍をもつて流義の甲乙試るのだ」トかはしてひらりとぬき切つて蒐る、甚内苦もなく扇にてたゝき落す、すぐに差添をぬいて切つて蒐る、甚内もぎ取り立廻つて薙倒し胸打にさん〴〵打するこなし有つて。甚内「動きあがるな人外めが、おのれ元來志賀段右衞門が門前に襤褸を纏うて捨て有りしやつ、段右衞門子なきによつて拾ひ上げ、養育の内谷五郎出生をなしたれど、養ひし義理をおもひ、家督に立て志賀の跡目、養父死去の其後は佞獄を以つて伯父御大學樣に取入り、させる功もなく手柄もなく、三千石の高祿をむさぼり、お下の町人百姓を虐げ、伯父御を劫に氣儘の政道、あまつさへ若殿六太郎樣をなきものにせんと非道の工、お召の駒の工は自然と其身にむくい落

せう、女郎めサアたて」 お力「イヤあなたではお相手が不足に存じまする」官兵衛「イヤ〳〵こいつ法量もない寐言をはくがな、臺七殿の高弟、津輕官兵衛、師匠の手練は大海の大魚、大船を呑む鯨同然、其鯨に付そふ身共は鯱鉾の手並はまつかう」 トだまし打に打かくる、お力早く竹刀を取つて宜しく留め。 お力「しやちほこ様は瞞討が流儀かな」官兵衛「オヽサ小股取つても勝つが本ぢや」 ト付込み立色々有つて官兵衛をさん〴〵打すゑる、臺七しなへ取つて打懸る、お力とめて。 お力「コリヤ鯨様にもだまし打かな」 臺七「いかにも願の如く立合うてくれうと思うて」 ト打蒐る、宜しく留めて。 お力「臺七様かう請けました所は、萬更相手に御不足もござりますまい」臺七「所をかうして」 トふりほどき金を出して お力に持たせ、其儘討たんとする、お力金をほつて竹刀を胸先へ突付け。 お力「かう付込めば」 臺七「かうする」 ト立廻り又金を大分出して、お力が袂へ入れる、お力取捨てる、此心の立廻り間々へ程よく有り、とゞ臺七がしなへを落し打すゑる、官兵衛又寄るを同じく打すゑ。 お力「お願ひ申した夫の名代、かう〳〵、かう打すゑまするが姫御前のたしなみ、少々許の心がけでござります」宮城野「オヽお力出かしやつた〳〵、よう叩いてたもつたのう」 ト無上に嬉しがる、お力會釋して下へさがる、谷五郎最前より立合の始終に氣を付けてゐる、こなし有つて、此時仆れてゐる臺七を引起し胸倉を取つて。 谷五郎「兄

樣のお試合、谷五郎樣に物の見事におかち遊した所、遖れお手利と申しませうか、御卑怯と申しませうか、兄御でなくばと谷五郎樣の、嘸本意なうも口惜しうも御無念にも思召しませうと、お心根を察し入りましてのお願ひ、何卒臺七殿に一手お試合と、サア申しまするも嗚呼がましけれど、夫左五平此場に有つて眞斯うお願ひ申しまするとお汲分遊ばされまして、どうぞ臺七樣が少し許でもお相手におなり下さりまするやう、此儀偏にお願ひ申上げまする」甚內「御前いかゞ計ひませう」六太郎「元來力量の女と有つて、甚內手廻りに遣ひ、武藝も粗教へしと聞く、苦しかるまい臺七立合うてとらせ」臺七「罷ならぬ、若殿の御意ではござれど、志賀臺七は一國一人、杉本流に此日比骨を折られた門弟衆でさへ今の通り、悉くぶちするゐてござる、きやつは何者、下主下郎と云ひ、況して女郎、ぶち殺してからが益にやならぬ、ヤイ〳〵女郎め、うぬ惡い望だ、身と立合ふがいなやだれの用捨はない、ぶつて〳〵ぶち殺す、命がないぞよ、命がなくても立合ひたいか、馬鹿なやつの」お力「サアそこが身を捨てゝこそ浮む世も有れとやら、命を的に試合ましたら、何ほう女の私でも、竹刀の端がちよつと當るまいものでもござりませぬ」臺七「イヽヤ勝てまいい」お力「どうぞお願ひ申上げまする」臺七「ハテ叶はぬ事を」官兵衞「イヤ先生あれ程に賴む事、餘り不便な儀でござる、かう致さう、先生の名代に拙者が立合うて吳れま

へ刀取つて打懸る、立廻りの内丈助己にも金をと手を出す、是は味方ゆゑいや〳〵といふこなし、此立廻り有りてとゞ是非なく金を下へほり付る、丈助竹刀落されこける、臺七打つ中丈助そつと金を取つて。「エヽいま〳〵しい」トぼやき〳〵引込む。臺七「なんと見たか、臺七が手並はざつとこんなものぢや、弟われも出て相手になれ」谷五郎「イヤわたくしは」臺七「なぜ出ぬ、甚内が懇望召さるゝ其方、武藝の業が至つたか至らぬか、ためし見る、それしへ出い」谷五郎「でも現在兄者人と」六太郎「イヤ〳〵谷五郎、仕官の身は親子兄弟とて用捨すべきに非ず、武藝の勵みなれば辭退なく立會うてよからう」甚内「御前の御意ぢやハヤ」谷五郎「しからば兄者人、主命でござれば用捨はいたしませぬ」ト身拵へして。「イザ立會ひませう」ト竹刀を取りにかゝる所を、臺七疊みかけて打すゑる。「こりや欺打に召さるゝか」臺七「默りをらう、汝等がやうな青蠅の相手になつて、しなへの一ッもあてらるゝ樣な臺七でない、コナ慮外者めが」ト又打つ、谷五郎赤面する、宮城野忍泣になく、此前よりお力出かけ見てゐる、おづ〳〵下座へ出て。お力「親旦那甚内殿へお頼み申上げまする、今日宮城野樣のお供いたして此所へ參りました、私は夫左五平が名代、佐五平申付まするは、お主樣達のお名の瑕瑾、お身のひけになる樣の儀あらば、男勝りに御奉公を申上げい、其爲の名代ぢやぞよと吳々も申付けましてござります、只今臺七

立たぬ、思案して返答ぶちやれ、甚内どうだ」甚内「高き木は風にたふれ、先ずるは猶及ばざるにしかじと、仁義を守る杉本甚内、金銀をもつて印可を取替へんとは、臺七殿お身が小い根性に引較べ、ちと馬鹿〳〵しう存ずる」臺七「ム、然らば是非とも身に印可は讓らぬとな」甚内「今少し稽古を勵み、鍛練して望み召され」ト臺七思入有つて。臺七「官兵衛、用意の竹刀持つしやれ」官兵衛「心得ました」トしなへを二本持つて出て眞中へ直す。臺七「甚内、若殿の御前で立會を試み、流儀の甲乙、ぶつて〳〵ぶちすゑ、胴腰ぶちぬいた其上で、印可の卷を手に入れて見せう、サア立つしやれ」甚内「イヤ甚内手をおろす迄もない、門弟衆臺七殿と立會うて遣はされい」皆々「心得ました」臺七「門弟衆をぶちすゑて置いて、跡で甚内いやとはいはさぬ、サ誰からなりと出さつしやい」軍吾「先身共から」トづつと向へ出て兩人一時に竹刀を取る、是より白囃子になる、立廻りの中官兵衛皆々かけ聲する、軍吾付入らんとする、臺七小判を出してそつと軍吾へやる、ちやつと取り呑込む體にてしなへ落される、臺七打ちゑる。曾平「エ、不甲斐ない、のかつしやい〳〵」ト入替り竹刀を取つて打かくる、立廻つて臺七付入る、曾平ずつと出で外のしなへを持つて横合より打懸る、色々有る中、臺七小判を出し兩人が袂へ入れる、二人袂を拈つて見て呑込む、臺七二人のしなへを落す、丈助身拵して。丈助「どれ身共が」ト竹

前の御仲人といひ有難く承知仕つてござります、谷五郎氣には入るまいが、つれそうてくりやれ、娘汝も承知で有らう、但しはいやか」宮城野「アヽ申し何のマア、わたしが否でござんせうぞいナア、得心も得心、ほんにもう此やうな得心はござんせぬ、谷五郎樣も得心でござんせうなアあれ〳〵得心ぢやといなア」谷五郎「殿のお差圖といひ、身不肖の谷五郎め、杉本殿の家督相續致すは身に餘る大慶、有難くお請申上ぐるでござりまする」宮城野「アレ有難いとおつしやるわいなア〳〵」ト無上に悦び、臺七と顏見合せ兩人共こなし有り。甚内「印可の卷肌身放さず是に所持いたしてござるが、明日は摩利支天の緣日、身が屋敷で御酒洗米をもつて聟舅の緣をむすび、其節印可も差讓るでござらう」谷五郎「萬事宜しう賴みまする」ト此内臺七むかつくこなし色々有り、甚内がそばへいて膝と膝をならべきつとなつて。臺七「甚内殿、此臺七は武藝の達人、奧州五十四郡廣しとはいへ共、誰肩を比ぶる者一人も覺えぬ、殊には大身、金銀がみち〳〵て有る、その大身たる身共、そつちから懇望して娘宮城野を差上げませうから、內證の賄ひ何かお世話を下されいと賴まねばならぬ所、マアそれは格別、楠流の印可の卷、金銀は望み程遣はさうから、身に讓り召されと幾度か〳〵賴んだ事、お身や忘れやせまい、但し老耄して失念したか、なぜ身共に一言の屆もなうお請申した、娘は格別、印可の卷を他へ讓らしては身共武士が

て吟味せうか、どうぢや」ト此内宮城野色々こなし有つて。宮城野「法度を破る不義者は谷五郎樣ぢやない、外にござんす」臺七「なんと」宮城野「いふまいとは思ふけれど、もう言はにや叶はぬわいな、私に戀をしかけた不義者といふは」谷五郎「コレ〳〵宮野野どの、何にも仰しやつて下さるな、枝に技が咲きましては、どこへどう廻つて甚内殿の御難儀になるまいとも申されぬ、何にもおつしやつて下さるな」宮城野「それぢやというてあんまり胤腹わけぬ兄者人、義理といふ字はどうもけづられませぬ」宮城野「すりやいふにもいはれぬかいなア、エヽ」ト臺七見てこなし。臺七「ハヽヽヽさう有りさうな事だ、此上は宮城野殿を預つて不義のあるない詮議いたす、甚内殿息女は身共が預りましたぞ、サア宮城野立つしやれい」ト宮城野を引立てうとする。六太郎「臺七まて」臺七「イヤ連れ歸つて詮議いたす」六太郎「ハアテ待てといはゞマアまて」臺七「ハッ」トこなし有つて控へる。六太郎「不義をもつて武家第一の戒めとする事、辨へなき谷五郎宮城野でも有るまい、改めて仲人せう、甚内の弟子といひ器量有る谷五郎、聟がねに取つて不足も有るまい」ト宮城野谷五郎臺七こなし有り。甚内「有難き御上意、元來武家は楠正成の餘流、さるによつて杉本の流儀を相立て、まつた菊水と名付け楠家の祕事を傳へたる印可の一卷、讓るべき男子なければ、此儀を朝暮案じをつたが、谷五郎が器量は兼て知る、御

れちや行かぬ、今は赦す、此以後をたしなみをらう」官兵衛「先生は當時の豪傑、餘人の流儀と一口に申すば勿體なうござるわい」丈助「いかにも左樣でござる、拙者は甚内殿の門弟ではござれど、追從は申さぬ、臺七殿の流儀が拔群に秀でござるわい」宮内「イヤ〳〵丈助殿、官兵衛殿は格別こなたの爲には師匠の流儀、何故さみ召さるゝ」曾平「臺七殿がしたはしくば、先生を破門してなぜ弟子に成り召されぬ」新吾「流義の甲乙此場にてためして見やうか、丈助どの」三人「何とでござる」甚内「門弟衆、角目立つてそりや何事でござる」三人「ちやと申てし」甚内「ハテ扨騷がしい、取上げて益ない事ぢや、マア控へてござれ」三人「ハッ」ト控へる、此時宮城野ずつと出で、「臺七へ詰かけ。宮城野「臺七殿、いかに兄御樣のかうけぢやとて、胴慾な今の打擲、生さぬ中の義理をおもうて、聞きにくい悪口過言も、アレあの通り一言半句の詞も返へさず、ぢつと聞入れてござるわいナア、わたしやあそこに聞いてゐて悲しいやら口惜しいやら、谷五郎樣の心を思ひ計つておいとしうてなりませぬわいなア、とサテかけも構はぬわたしでさへ、口惜しうてなりませぬ、臺七樣エヽお前はなア」臺七「甚内殿の息女宮城野、こなたどうして弟が肩持つぞ」宮城野「エヽ」臺七「イヤサぶちするゐるは兄が折檻さゝへこさへいはつしやるは、エヽコリヤ何か弟谷五郎と狂ひをつて、それゆゑに肩を持つのか、法度を破る不義の大罪、此場に於

サその儀は、ハテ面沃な」ト臺七も心得ぬこなし、谷五郎ずつと出て。谷五郎「イヤその儀は拙者が申し上げませう、先生甚内殿のお差圖によつて、お厩の警護萬端氣を附けて見廻る中、一の厩に繋ぎし黒の駒、鞍のくるひ何とやら心にかゝり、若殿御乗馬の儀なれば、萬一の儀も有らんと存じ、二の厩の黒の駒と替取へましたは拙者がはからひ、しかし鐙を切りかけしと迄は心付かず、兄者人へ答へざりしは拙者が過失、幾重にも御用捨下さりませう」臺七「ムヽ何といふ、黒の駒を繋ぎかへたは弟汝だナ」谷五郎「左様でごりまする」ト臺七むつとした體にて、ずつと立ち弓を持つて谷五郎を打すゐる、谷五郎こたへる、此時後へ宮城野出かけこなし有り。臺七「コナ青二才めが、うぬ身を何だとおもふ、義理ある兄弟、親同然の兄だぞよ、殊に身共は大殿市の正様のお目鏡に相叶ひ、祿三千石を頂戴なし、家老格をもつて出頭第一の大身だぞ」ト甚内を尻目にかけて。「其千石かそこらの分際で、軍學劍術の師範で候などと、武藝鍛錬の臺七に肩をならべ、家中の若侍を手に入れ自慢が胸がわるい」ト甚内へかけて又谷五郎に向ひ。「ヤイうぬ、よくも宮城野。イヤサ此場においてうぬが惡名いはぬぞよ、打明けぬは兄が情、其情も辨へず又しても無禮法外、コリヤ何か義理ある兄の禮儀を忘れ、兄をなき者にして志賀の家を呑まんといふうぬが工みか、それぢや行かぬ」ト又甚内の方へ。「オヽそ

する、甚内悦ぶ、六太郎能き所に駒を立る、谷五郎弓矢を取り同じく射ると、是も矢ぎりを射て大勢よいよ〱とほめる、谷五郎駒を立る、ト臺七弓矢を取り矢をつがひながら鐙を踏〆る、ト是にて腹帯ゆるみ鞍をかへし、大地へ落馬する、内にて大勢どつとどよめく聲する、皆皆驚き銘々馬よりおりる、此時鳴物止む、機敷の幕一面におりる、軍吾、曾平、新吾其外門弟皆々出る、官兵衛先生が落馬召された、先生〱と介抱する、皆々藥よ水よといふ、甚内印籠を谷五郎にやる、ト取つて氣付を臺七に呑ます、官兵衛柄杓に水を汲み持ち出て、此模樣各々捨白にて立騷ぐ體、六太郎甚内よき所へ合引にかゝる、臺七やう〱に心付き。臺七「よくござる〱、ハレ面目次第もない」トこなし。官兵衛「先生〱、コリヤどうでござるぞいの」臺七「爰でござる、貴殿もお若いがよく聞いて置かつしやれ、彼世上の譬に、よく泳ぐ者は必おぼれ、能く乘るものは必落つる、一藝に達し拔群に秀づるから、得ては魔がさすものでござる、たゞいまのは魔が魅入つてござる、騷がつしやるな、いくらも有ることでござる、しかし合點の行かぬは計らひ置いた黑の駒は」ト六太郎が乘つてゐる馬を見て。「はて心得ぬ」官兵衛「先生も同じ黑の駒、ドレ」ト臺七が乘りし馬を見て。「扨こそ鐙の力皮を切りかけ、かくなさんと計らひし體、すりや黑の駒を取違へて」甚内「取違へてとは何がどういたした」官兵衛「イヤ

强に見ゆるが、一馬場せめて見やれ」谷五郎「然らば御免下さりませう」ト笠を著て馬上になり、甚内上の方の合引にかゝる、ト橋懸より官兵衞、丈助右の仕立、栗毛と鹿毛の駒に乘つて出る、奥塀口より臺七黑の駒に乘つて出る。官兵、丈助「臺七どの」臺七「いづれも馬上の晴業、油斷して不覺を取り召さるな」官兵衞「いかにも身共は志賀氏の門弟」丈助「拙者は杉本氏の門弟」谷五郎「殿のお差圖により甚内殿の門葉となる此谷五郎」臺七「流儀の甲乙とて用捨はない、狼狽へをらば馬蹄にかくるぞ」谷五郎「此方とても用捨はいたさぬ」甚内「お勅使上覽でござれば、互に爭論なきやうおの／＼勵まれてよからう」皆々「御尤に存ずる」ト始終鳴物にて、是よりおの／＼地乘輪乘、花道の戸屋の際迄いて駒を立直し、跡へ戻る、入ちがへ／＼色々有り、此内臺七鞍心のわるい意にて鞭をあしらひ、手綱くり上げこなし有り、甚内臺七が馬上に氣を付けるこなし有り、此内橋懸より六太郎著附馬乘袴陣笠、弓矢持ち出て。六太郎「身不肖ながら六太郎、騎射の一曲上覽にそなへ奉らん」ト是にておの／＼左右へ駒を控へる。甚内「馬上の弓は晴の一曲、骨法の狙違へず、的のたゞ中遊ばせ／＼」ト固唾をのんで見る、六太郎手綱を控へ輪乘二三遍する、臺七六太郎が馬上に氣を注けこなし有り、六太郎西のはし迄駈けていて振返りさまに矢を番ひ引しほつて射る、東の樂屋に安土の有るやきりを射し體にて、大勢よいよ／＼とほめる聲

ア、彼奴等は悪い事ばつかりをぬかしをる」ト向を見て。「慥に今のは信夫様の伯父の七郎兵衛め、甚内様の大事にさんせぬお姫様を殺すまいと聞いたは俺が不仕合、七郎兵衛をぼつかけずお姫様を取りかへさず、甚内様に渡すまい、うぬ七郎兵衛待ちをるな」ト尻引からけ向へおはへ入る。

返し

鼓大小入、競馬の鳴物になる見附の家體觀音開きにて兩方へ開く、左右櫻の林になる、正面奥深にして棧敷の體、紫の幕を張り、眞中の二疊臺に勅使兼冬、宮内後、近習控へ、東の棧敷には雛形姫、櫻木、宮城野、お力其外女形皆々見物の體、西の棧敷に吉見右京太夫、山形主計頭、豐岡大膳亮、其外諸士見物の體、棧敷の前、埒になり、舞臺端花道の兩方八寸許の高さの埒になり、破風より枝垂櫻見事にしてばらりとおりろ、櫻の馬場の眞中に甚内馬乘袴に改め、鞭をさし、吹反しの陣笠にて葦毛の駒の轡面を取り、馬より下りし體、馬柄杓にて頭へ水をはませてゐる見え、右の鳴物にて道具納る、ト内より大勢よう／＼とほめる聲する、ト谷五郎著附馬乘袴に改め、鞭をさし陣笠を持つて。

谷五郎「先生には老功の達者、只今の駈は驚き入りましてござる」甚内「谷五郎、牧出ゆゑ餘程口

で呼寄せ置きし粟島の姫、ひそかに汝が盗出して衣川の深みへ、ナ、すつぱりとしおほせい」七郎「よし呑込んだ、首尾ようやつたら又褒美を」臺七「皆までいふな、そりや」ト又金をはふる。七郎「コリャ二十兩の嵩、味ひは」ト懐中する。官兵衛「片付次手に若殿もしもうて取る、臺七殿の思召は」臺七「それも思案を致して置いた、若殿始め一家中、お勅使上覽に競馬の催し、殿の乘馬は黒の駒、ひそかに鐙の力革を切りかけおく、さすれば馬藝の時に至り鐙を切つて鞍をかへし、落馬召さるゝは定の者、然有る時は師範未熟の甚内が越度となり、若殿は恥辱をとらせ、それ云立に大殿へ讒言なし、切腹さするか押込むるか、甚内ぐるめに仕舞うてとる身共が計略、細工は流々追付仕上をお見せ申さう」官兵衛「それこそ屈強、シテ召替の黒の駒は」臺七「假屋につゞく廐の中、一の鎖につながせ置けば、其期に及んで計らひ召され」官兵衛「ム、よし〳〵」七郎「おりや衒妻を引つかたげて」臺七「櫻ヶ谷にて競馬上覽、勅使は正面、東棧敷は女中の一群」七郎「すりや櫻ヶ谷へ」臺七「必ずぬかるな」七郎「やり付けて見せませう」ト内にてしらせの太鼓鳴る。内より「いづれも競馬の刻限でござるぞ」ト聲する、臺七兩人に目配して。臺七「はやく」七郎、官兵「合點ぢや」ト官兵衛は奥へ、七郎兵衛は向へ走り入る、臺七こなし有て。臺七「ムムよし〳〵」ト唄になり、しづ〳〵奥へ入る、小蔭より與茂七出て。與茂七「てもえらい奴們な

は侍、此方は町人、かうなりや一所懸命ぢや」ト大肌ぬぎになり、どつさりと下にゐて。「サアすつぱりとやらんせ」宮「よい覺悟ぢや」と拔いて目先へ見せる、七郎兵衛こなし、宮兵衛振上げ切らんとする、此時奥より臺七是も馬乘袴に改め、ずつと出て宮兵衛を引廻はして眞中へ入り、金包を七郎兵衛が傍へはふる、七郎兵衛取つて。七郎「是は」宮兵衛「先生、アノ金子は」

臺七「命は助ける、當座の褒美」ト七郎兵衛金を改め。七郎「恰度拾兩、アいつ見ても惡うない奴ぢや」ト懷中する、野々宮宮内出かけるて。宮内「臺七、是に居召さるか」臺七「宮内樣、先達てより拙者が願ひ」宮内「いかにも中將家の諸太夫と相なり、禁裏出入を致し度き願ひ、色色と取繕ひし所、悦び召され大方に首尾をいたした」臺七「それは重疊、が迚もの事にお願ひの案文、一書に認めてござる」ト懷中より文箱を出して。「御苦勞ながらお取次下されい」ト宮内に渡す。宮内「此文箱は」臺七「すべらきの御代榮えんと東なる、陸奥山に金花さく」ト宮内文箱がずつしり重い故、しめたといふこなしをして。宮内「身に替てお取次致さう」ト文箱を懷中する。臺七「萬事宜しう」宮内「後刻逢ひ申さう」ト宮内入る。七郎「もふけ筋なら何時でもしらして下んせ、どりや俺も去なうか」ト行かうとする。臺七「七郎兵衛まて」七郎「まだ用がごんすか」臺七「改めて吩咐ける役目が有る」七郎「おれに吩咐る役目とは」臺七「甚内が計らひ

跡よりついて入る、ト橋懸より七郎兵衛右の形に大たら一本さし出る、奥より官兵衛著附馬乘袴にて出る、始終合方。七郎「官兵衛樣」官兵衛「五四六の七郎兵衛」七郎「伯父御大學樣のお賴で、何でもすつぱりとやり付けうとおもうたが、すつぱりと失策つてのけた、ぢやが雇賃は約束ぢや、サア骨折代をせうかい」官兵衛「默りをらう、奴物の見事に騙を爲損じ、褒美所かそりやならぬ事だ」七郎「なりませぬか、よごんす、ならにや可ごんす、さう手強う出やんすりや、こつちもやけぢや、ドレ一寸と逢うてこう」ト奥へ行かうとする。官兵衛「までどこへ參る」七郎「どこへ行こぞい、奥へ往て甚内殿に逢うて、先刻にかたりに來たは、若殿に科をこしらへ自滅させうといふ伯父御大學樣の賴み、臺七樣官兵衛樣皆不忠ぢやといふ事を、何もかもまき出してしまひますわい」ト又行くを。官兵衛「イヤまて褒美くれう」七郎「ムヽコリヤかう有りさうな事ぢや、されば御褒美を戴こかい」官兵衛「いかにも望の通り褒美くれう、汝の褒美は」ト拔かうとする、七郎兵衛恂りして飛のき。七郎「アヽ是々褒美やらうとおちつかせ、油斷させてばつさり、テモ古いやつなア」官兵衛「イヽヤ賴みにならぬ町人の魂、騙を首尾よう仕おほせても殺さうと存じたれば猶の事、どの道に生けちや措かぬ、覺悟してそれへ出い」七郎「そんならどうでも」官兵衛「ばらしてしまふ」ト七郎兵衛こなし有つて。七郎「何とせう所詮敵たうてからがそつち

此方もわざと尋ねぬ此年月、扨は世をはかなくせしとな、娘が生立、數ふればはや十五、血筋の親は顔さへ知らず、宿世の縁とて與茂吉とやら、健氣にも奉公するなァ、して女が相果てしは」與茂吉「去年霜月二十日の晩、泣死にしてめでたい往生さんせなんだ」甚内「今日は二月二十日、月日變れど變らぬ命日、なむあみだ佛〳〵」宮城野「此上は、妹が身の上」與茂吉「眞實の姉妹ぢやとおもはずに、可愛がつてやらんすな」甚内「姉は宮城野妹は信夫、姉妹が名をみちのくの名によせて、圖らず付けしも千々の因縁」宮城野「同じ胤を請けついでも、姉は錦の中に育ち」與茂吉「しのぶ樣は肩をすそに結びもせず、在所に育たず、擧句には勤もさんせず」甚内「憂きが中にも貞女をたて、空しうなりしか」宮城野「おもへば儚い」與茂吉「目出たい成行」甚内「うつれば變る」ト二人の手を持つて引よせ、ほろりと泣いて。三人「世の有樣ぢやなァ」トこなし此時小姓出て。小姓「甚内樣これにござりまするか、先程より殿樣の御尋ねでござります、サァお越なされませ」甚内「何樣、それへ參りませう、ナニ與茂吉とやら、娘しのぶに云送る事もあれば」宮城野「とゝ樣の御用御仕舞有る迄、お次で暫く」トこなし有て。「休足をさしやんすな」與茂吉「そんなら居やんすまい」宮城「サァ申しとゝ樣」甚内「娘奧へ與茂吉も一緒に」トこなし有て。「奧へ參るな」與茂吉「ムヽ、いきますまい」ト唄になり、甚内宮城野を伴れ、與茂吉もついて奧へ入る、小姓も

此身もおもき病に取合せ相果候事、命は露をしからず候へ共、しのぶ事、成人いたし候迄は、今少しながらへたく、大人參を求め候金子に手づかへ、世にまづしきほど悲しきものは御座なく候」トよみさしてなく。甚内「金子入用の儀が有るならば、程遠からぬ身が屋敷、不通の約をなしたりとも、なぜ書狀でなりと申してはこさなんだぞい」與茂吉「きつい義理しらずではないかいの」トなく。宮城野「娘しのぶ、此事を嘆き人を賴んで江戸吉原といふ色里へ苦界十年二十兩の價に身を賣り〳〵。ヤアそんなら妹は勤奉公に參つたかいのウ」甚内「ナニ娘しのぶは身を賣つたとか」與茂吉「悦ばんせ、こんな目出たい事はごんせぬ」宮城野「勤奉公に遣はし候事夢にも存ぜず、跡にて聞いて悲しさ口惜しさやる方なく、母はいやしき身なれ共、父樣は歷々、杉本甚内樣といふ武士の娘、勤奉公致させ候事、悲しさ類なく、いよ〳〵重き病となり〳〵、お醫師の手もはなれ候ゆゑ、命の内に此事を書遺し、甚内樣か奧樣か、おふたりの中に告げしらせ、娘が身の上を賴みたく、只よみぢのさはりは此事のみに御座候、殊に宮城野樣といふ御惣領も御座候よし、便りなさ信夫事、御不憫がらせ下されまし候やう、わけて御たのみ申上候、病ひの床の泪にくれ〴〵かくは書遺しり〳〵」トよみ狀を抱〆めてハア、となく、甚内も泣く。
甚内「ア定めないは世の有樣、貧しうくらせば猶更に奧への氣がね、義理を思ひ便りをせねば、

か女子か、成人もさぞ有らん、早く聞きたい、サヽどうぢや〳〵」宮城野「義理あるかゝ樣、義理ある妹、明暮なつかしくおもうてゐたが、健な便りが早う聞きたい、どうぢやぞいなァ」ト尋ぬる中與茂吉しく〳〵泣いてゐる。甚内「サヽ樣子を委しく」トこなし有て。「かたつて聞かすな」與茂吉「オヽ聞かすまい、お前方が逢ひたがらんせぬお人さんはの」ト一寸思案して書物を出し。「おれが癖の入間詞ではわからぬ入譯、この書物にとつくりと書いてはない程に、ソレ讀んで見やんすな」トわたす、宮城野取り。甚内「すりや其一書を娘はやく」宮城野「アイ〳〵」トひらきよむ。「筆のあゆみもたど〳〵しながら書殘しり〳〵、此身事深川の舞子にて有りし折から、假初の緣にて杉本甚内樣に馴初をかさね、情の胤を身にやどせし折から、御歸國もせはしくなる上、お國元には御本妻も有り候へば、あかぬ別れに一生不通の約束をなし參らせて、古鄕なれば奥州白石の片里逆井村へ引込み、ほどなう產落し候が女の子にて、名を信夫と名付け參らせ候」甚内「此年月の養育、さぞや苦勞にもありつらん」與茂吉「信夫樣の乳母といふはおれが母者人ではない、生國は武州の入間ではない、其緣でおれも奉公にきはせぬ、其母者人も、かくといふ病を請けずに、ころりと死なれはせなんだ、こんな嬉しい事はござんせぬ」トなく、宮城野又狀を見て。宮城野「憂事はつゞくものにて、朝夕の煙を立てかねし上、乳母も身まかり、

でないとはさうといふのか、ハヽヽ、これは一興な儀ぢや」宮城野「エヽそんならなんでござんすかえ、物事を逆様にいふを入間詞と申しますかえ」甚内「入間の里に生立つた者は皆かやうに申す事ぢや、そこなもの、シテ汝が尋ぬるといふ先の仁は何物ぢや」トいうても與茂吉だまつてゐるゆゑ、こなし有つて。「イヤ何者ぢやと尋ねはせぬ ぞ」與茂吉「問はんせにや言はうわいの、高館の屋敷で杉本甚内様といふお人が、けふ此山館へ來てゞはないげな、其甚内様にどうぞ逢はして下さんすな」甚内「ムヽ甚内といふは身共ぢやが、尋ねて參つた様子はどうぢや。ト尋ねはせぬぞ」與茂吉「そんなら甚内様か、コレ十四五年も以前ではない、江戸の深川で馴染をかけさんせなんだ舞子のさよ衣様、勤を退かずに此國の逆非村へ引込みはさんせぬ、おりや入間の里から奉公にこなんだ與茂吉といふ下人ぢやない、何と合點が行くまいがの」宮城野「とゝ様常々わたしにお咄しなされた義理の有る母さん」甚内「おもへば早一昔、鎌倉在番の折から、朋輩に誘はれ、ふと深川へ通ひ、ひかれぬ義理でなじみをかけ、一夜二夜數つもりて、間もなく歸國の日限は相せまり、連れかへるも奥が手前、家中の沙汰も如何と思ひ、僅かなる金子をあたへ、互に不通の約をなして國元へ立歸り、御用繁多に取紛れ、忘るゝとなく月日も立ち、十年の上を過去つて、ふしぎにも女が噂、シテ無事でゐるか、其砌安産もなしつらう、産落せしは男子

ざるか」軍吾「先生の教訓」皆々「承知仕つてござりまする」ト爰にて序の舞やむ。甚內「おのおの方は勅使の御前へ」新吾「然らば先生」曾平「後刻」皆々「御意得ませう」ト此人數皆々入る、甚內殘る、ト在鄕唄になり、向より入間與茂吉木綿やつしほつとせ、脚袢草鞋風呂敷を脊負ひ、菅笠を持ち出て。與茂吉「イヤちつとものを頼みますまい」ト橋懸へ立留つていふ、奥より宮城野出で。宮城野「とゝ樣是にござりまするか」甚內「オヽ、娘宮城野、いつの間にまゐつた」宮城「未明より參つてをりまする、殿樣が甚內を呼べと仰せられます、サアおこし遊ばせ」甚內「いかにも其方も參れ」宮城「アイ」ト二人往かうとする。與茂吉「是々ちよつと頼みますまい、どうぞ頼まれてもらひますまい」甚內「なんといふ」與茂吉「おりや白石の片在所、逆井村のものではごんせぬ、ちつとこゝに尋ねる人がないによつて、わざ〳〵爰へ尋ねて來なんだのぢや」宮城野「ホヽ、替つた物の云ひやう、どうでも亂心ぢやさうなぞえ」甚內「イヤ〳〵左樣ではあるまい、が何かわからぬ詞づかひ」ト與茂吉が持つてゐる菅笠の書付を見て。「武州入間の里與茂吉」トよみ、一寸思案をして。「此入間の里といふは所の習ひとして、さうせいといふ事をさうせなといひ、右を左、左を右ともじかふゆゑ、是を入間詞といひ、入間川とて狂言にもつづり、世の翫弄となる、扨は其方は入間者ぢやな」與茂吉「イヤ〳〵さうぢやごんせぬ」甚內「さう

甚内「委細畏つてござりまする」櫻木「かうなるからは天下はれての御祝言」姫「此上ともにお見捨なう」六太郎「夫婦妹脊の三々九度」女皆々「わたしらは待女郎」七郎「おもひ廻せばほろ怪體な」ト甚内を見る。官兵衛「こりや」ト顔にてをしへる。丈助「町人め立たう」七郎「やかましうぬかすな、立つて居るわい」甚内「お勅使には設の假家へ」勅使「六太郎方々案内」皆々「先お入あられませう」ト序の舞になる、勅使に宮内付添ひ、六太郎雛形姫、櫻木の手を引き、女形みな〳〵官兵衛も入る、丈助七郎兵衛を突廻し橋懸りへ入る、ト仕丁跡より入る、甚内殘る、門弟皆々も殘りゐる、始終序の舞、軍吾曾平新吾出て。三人「先生是にござるか」甚内「いづれも申付けた用意、相調うてござるかな」軍吾「なる程先生のお差圖に任せ、櫻ヶ谷の地面をならし、方八丁に汗馬をゆひかけ、射垜の用意も調へてござる」新吾「お勅使上覽でござればわけての晴業、それゆゑ牧出しの名馬をすぐり、鞍具の美麗をつくし、お廐につながしてござる」曾平「先生の馬藝は八乘流、志賀臺七殿は大坪流、兩家の一流勝り劣りは晴の勝負、物の見事に乘勝つて先生の流儀を見せ付けませう、ノウいづれも」軍、新「御尤に存ずる」甚内「イヤ〳〵他流を侮り、我慢偏執の心より、得てはものにおくれを取ります、彼の圍碁をかこむに勝たんとすれば負と成り、只まけまじと打つが碁立の心得、十能六藝何によらず此心得が肝要、いづれも御承知でご

「いふも憂し言はぬもつらしむさし鐙、何を隱さうおりや五四六の七郎兵衞といふ江戸のするばう、何か此比の不幸福、ほんどちこでえすぢや、そこで斯いふ欺騙を目論んだも、つまる所は大金にせうといふかくすけでの目論見ぢや、慾一通に迷うての出來心、お侍量見つけて四五兩酒代をやつて下され」官兵衞「ヤアにくい雜言、うぬ眞二ッに」ト反打つて行くを甚内とめ。甚内「ハテ引かれ者の小歌とやら、科人が首の座にいたつては、得も得しれぬ事を申すものぢやわさ」門弟皆々「然らば縄ぶつて」甚内「イヤ召捕るに及ばぬ、丈助其奴が詮議は其方に申付る」丈助「アノ拙者めに」甚内「取逃さぬやうに申付けたぞ」丈助「しつかりと預りました」六太郎「誠や山は石によつてかたく、君は臣によつて全たしと、今に始めぬ甚内が忠節、しかし某が放埒も深い所存有つての事、打明け語る折もあらん、先お勅使を饗應してよからう」甚内「ハツ其儀に付き櫻ケ谷にて馬上の一曲、陸奥立の駒を擇り、公卿方には珍らかなる武家の行作、先お棧敷へお入遊ばされ、御酒宴を催され然るべう存じます」勅使「大内にて騎射と名付け、仲春に弓を見る事めでたき例と記錄にも是をのする、朝夕目なれし詩歌管絃には事替り、時にとつての一興ならん」宮内「六太郎殿には甚内の師範によつて、馬上の業も上達と承る、一馬場せめて御上覽に入れられなば、何よりの馳走でござらう」六太郎「お勅使の御所望とござらば、甚内計らうてよからう」

ムンイ、ヤ粟島家は大身、家中あまたの其中には同じ苗氏もいくらも有る、松江藏人に相違はないぞ」甚内「藏人ならばなぜお姫樣を同道いたさぬ」藏人「雛形姫は御自害有つて、持參いたした血汐の短刀」甚内「イ、ヤお姫樣は御安泰、しかも此場に麗々とござるわい」藏人「何がなんと」ト其内、舞子淺野（實は雛形姫）に向ひ。甚内「雛形姫樣、殿のお傍へお越あられませう」雛形姫「甚内、もう名乘つても大事ないかや」ト皆々愕り、藏人ふるひ出す、女形皆々雛形姫に打かけをきせる。六太郎「ヤアそんなら白拍子の淺野というたは」櫻木「言號のお姫樣ぢやわいなア、甚内樣のお頼みゆゑ、合點してお傍に置いたは、御本妻の義理を思うてわたしが計らひ」姫「兄上へお願ひ申し、とうにお館へ參りまして、甚内や櫻木殿の世話になり、白拍子と名乘ましたもお傍にゐたい自が願ひ、姫というてお氣に染まずば、やつぱり白拍子ぢやとおぼし召してお傍に置いて下さりませえ」甚内「輿入延引に付明暮のお物案じ、萬一過ちの儀もあらんと、家老藏人と内意を以て頼みこされ、愚案を以て右の計ひ、なんと是でも雛形姫は御自害有つたか」藏人「ムムサアそれは」甚内「どうぢや」トきつといふ、藏人（實は五四六の七郎兵衛）ぐんにやりとなり氣をかへて、大小を捨て社袴もぬぎ、甚内傍に趺坐かいてすわり。七郎兵衛「古いやつぢや騙者でえすわい、其かたりの頼人といふは、ト官兵衛を見る、官兵衛顏にていふなといふこなし。

ましてござりまする」ト此内藏人始終煙草のみ聞いてゐて此時。藏人「御裁断が濟みましたら、使者の返答承りませうか」六太郎「勅命をお請け申すが取も直さず使者への返答」藏人「左樣ござらば引出の音物、改めてお納め下されい」六太郎「誠に」ト三寶の箱を取つて開き見る、中より短刀出る、六太郎見てこりやコレ血に染まりし短刀、是は」藏人「主人の息女雛形姫は自害して相果ました」六太郎「何雛形姫は自害せしとな、ホイ」トこなし有る。藏人「六太郎樣には櫻木といふ白拍子が色香にまよひ、此方の縁邊を違變有るべきと承りての御所存、縁組をきらはれて娘が一分たちませうか、さるによつて殿へ恨みの一書を殘し、ソレ其短刀を以てあへなき御自害、主人甲斐之介立腹有つて、血汐の短刀聟引出に進上いたし、有無の返答聞切つて立歸れと承つた此藏人、六太郎樣御返答は如何でござるな」六太郎「サア其言譯は」藏人「何のござらう言譯なくば其短刀、腹へ突込み臓腑を引出し、からくれなゐの血汐に染めて、使者の身共へお渡しなされい」甚内「イヽヤ存じもよらぬ、罷りならぬ」藏人「ムヽシテ粟島への申譯は」甚内「使者の御けめう今一應」藏人「異な事に念おし召さる、粟島の家老松江藏人、それがどうした」甚内「都在番の折から松江氏には度々出會、身共とは無二の懇意、面體を存じて有る」藏人「ヤ」ト恟り。甚内「跡先むすばぬ騙盜賊篤と聞合せて參りはせいで、ハヽヽハテ馬鹿な野郎だナ」藏人「ム

若殿の越度でないか」甚内「綾の小路中將兼冬卿には、疾よりこれへお出迎申した」官兵衛「何がなんと」ト甚内橋懸へ向ひ。甚内「お勅使にはイザ先入らせられませう」ト管絃になり、橋懸りより兼冬勅使にて野々宮宮内繼裃雜掌の形、其外仕丁大ぜい付出る、丈助官兵衛悔り、六太郎驚きながら。六太郎「すりやお勅使、ハツ〳〵」ト各出迎ふ、勅使上へ通り床几にかゝる、藏人こなし有つてやはり煙草呑んでゐる。官兵衛「ムヽ現在國境より追立て歸したお勅使樣、それが何してこりやどうぢや」甚内「殿御遊興より事おこり、お勅使に狼藉有ると聞くと等しく、早速立越え中將家の雜掌野々宮宮内殿に就いて、さま〴〵お詫申せし所、早速お聞濟有りしも宮内殿のお執成ゆゑと、千萬忝う存ずる」宮内「お勅使出迎ひとあらば、道の警護作法禮儀も有るべき所、甲冑を帶し劍戟を以て不禮狼藉、きつとお咎も有るべき所、老臣たる杉本甚内詞をつくして詫致さるゝにより、御免許有りしも事を好まぬおほやけの計ひ、有難うおもはれてよからう」甚内「なんと官兵衛、お勅使此場へお成有つても若殿の落度になるか」官兵衛「イヤ其儀は」甚内「伯父御の名代、こりやちと算用が違ひ申さう、ハヽヽヽ」勅使「扨は其方は伊達六太郎よな、此度東國歌枕の序をもつて、此奥州へ立寄りしは假初ならぬ帝の內勅、今改めて申すに及ばぬ粟島との縁を調へ、寶を持參しいそぎ上洛致してよからう」六太郎「勅命の趣委細承知仕り

といつたが無理か」六太郎「サアそれは」官兵衛「言わけござるか」六太郎「サア」兩人「サア〳〵」
六太郎「サア其言譯は」官兵衛「よも言譯はござるまい、都より御咎の來らぬ內、御切腹なさるゝがまだしも申譯、但しまた御師範たる杉本甚內殿潔白の言譯召るか、返答ぶちやれ、甚內殿どうだ」
甚內「虎の斑は目に見えて、心の斑は目に見えずと、表面ばかりは武士の交り、家來の分として御主人に切腹勸め、家の亡ぶを願ふ所存か」官兵衛「イヤ全く」甚內「汝が一言で殿のお身持、腰の推人も大方それと、サア此場に於て詮議は糺さぬ、以後をきつとたしなみ召され」官兵衛「イヽヤ只今も申通り、伯父御樣より內意を請くる身共なれば、家來でない伯父御の名代、此場に於て潔白の政道相糺して見せるのさ」丈助「なる程伯父御の御意は背かれますまい、切腹のしやう御存なくばいつそ身共が」ト立たうとする。甚內「丈助控へい」丈助「でも」門弟「先生の御意でござるぞ」ト丈助こなし有つてハツと下にゐる。六太郎「此場の言譯さうぢや」ト切腹せうとする、櫻木取付き。櫻木「コレ早まつて下さりますないナア」六太郎「生きながらへては違勅のお咎」
甚內「イヽヤ落度はない、切腹御無用」官兵衛「達の大木戸に勢揃へなしたは跡方もない軍の催し、是ばかりでも科はのがれぬ」甚內「治世に亂を忘れず、人馬を揃へ矢尻をみがき、士卒の驅引時となく調練するは武士たるの心がけ、大國にはまゝ有る事さ」官兵衛「然らば勅使をほつ返したは、

も縁組の使者を以て萬事取計ひ致さんが爲、則ち聟引出の音物、六太郎様へお納め下されうならば、使者に立ちたる拙者が面目、甲斐之介口上の趣、あらかじめ斯の通りでござります」六太郎「すりや何といふぞ、急に祝言を取結ばんと使者に來たのか」ト櫻木、六太郎が太股をつめる。六太郎「アイタヽヽヽいたい苦勞で有つたなア」藏人「イヤ役目でござれば苦勞にも存ぜぬ」ト此時奥より官兵衛衣裝社杯に改め出て。官兵衛「イヤ兩家の御縁は破れ申した、祝言はなりますまい」トいひ〳〵出る。藏人「御縁が破れたとはな」官兵衛「此場に於て事の裁斷、使者には暫くお控へ下されい」藏人「縁組の儀に付裁斷の儀とござらば、さし扣へて承らう」ト片側へよつて煙草盆控へる。甚内「臺七殿の門弟津輕官兵衛殿、裁斷とは何裁斷」官兵衛「甚内殿、こなたには若殿六太郎様に軍學武術何かの御師範、御教訓がよいかして若殿には日夜につのる身持放埓、さしあたる失策といふは達の大木戸に勢揃へを催し、隣國の大名に跡方もない廻文を觸廻し、狼狽へ騒いで來て見れば殿の遊興、鬨の聲矢叫びに、お勅使下向の路次をさへぎり、國境よりぼつかへされしは、帝へ弓引く朝敵同然、是ばかりでも科はのがれぬ、かやうの事を吟味いたせと伯父御大學様の内意を請け、付添ひ出る官兵衛、伯父御様の御詮議同然、さあ若殿粟島家の使者の面前、勅諚の御縁を破つた言譯がござるか」六太郎「サアそれは」官兵衛「違勅の大罪

ト六太郎皆々こなし有つて跡へ戻り、橋懸へ行かんとする、ト杉本甚内中年、家中指南のこしらへ、衣裳𧘕𧘔大小にて、門弟四人各々𧘕𧘔にて跡に付隨ひ、ずつと出て立ふさがる、六太郎見て。六太郎「南無三、毛蟲ぢやコリヤ叶はぬ」ト迯うとする。甚內「イヤ／＼殿、三州殿よりお使者とござる、先お靜りなされませう」ト六太郎皆々と顔見合せ、じつとなる、踊り三弦やむ。藏人「通りませうか」甚內「イザ／＼」ト六太郎櫻木を連れたなりに上へすわる、藏人三寶を六太郎の前に置きて座に就く、甚內丈助門弟各々並よくならぶ、其外女形は後に並ぶ。丈助「先生には門弟衆を同道にて、只今御入來でござるかな」甚內「お勅使上覽の爲櫻ヶ谷に埒を結かけ、馳的の用意萬事滯りなく申付け、直さま是へ伺候の所、存じよらざる粟島のお使者、御家名を承り口上迚も承知仕りたう存じまする」藏人「拙者事は三州の領主粟島甲斐之介が家中松江藏人と申す者、主人甲斐之介儀は三とせ以前九州七草一揆のをりから、岩倉殿の添人として討手に向ひ、比類なき功名有つて、足利殿のおぼえ目出たく、名草の郡の領主を引取り、當時三河の國吉田の館に御入有つて、祿二十萬石の領主粟島殿の御妹雛形姫を以て、當家の若殿六太郎樣に御內緣を結ぶ所、當今より改めて勅定有り、兩家緣談調ひ次第、六太郎樣家の寶を御持參なされ、家督願ひに御上洛有るべき段、お勅使是へ御下向と承り、此方より

糸屋の娘」六太郎「其外あらゆる女共が抱付吸付、其苦しさ面白さ、何にたとへん方もなし」丈助「よつて誓文件の如し」六太郎「なんと丈夫なもので有らうがな」ト櫻木笑うて。櫻木「本にあんまりな事で可笑しいわいなア」六太郎、丈助「そりやこそ笑ひが出た、お中直りを祝うて一ッ打ちませうか」皆々「しやん〳〵も一ッせい、しやん〳〵祝うて三度おしやしやんのしやん」ト此時ばたばたにて向より侍一人はしり出で。侍「申上げまする、上州粟島家より御縁組のお使者と有つて此所へおこしでござりまする、是へ通しませうか、如何計ひませうな」六太郎「折角勅使を去したれば、又難儀なものが來た事ぢや、なんなと言うて去なせ〳〵」侍「畏つてござります」トはいる。櫻木「粟島のお姫様と祝言をするのかいなア」六太郎「ハテ祝言がいやなればこそ、勅使も使者も追返して仕舞うのぢや、したが押かけて來はせまいか、丈助どうしたもので有らう」丈助「どうと申したら使者に出替して逢はぬがようござりまする、是から掛造りのお花畠へいて、どつと騷ぎかけませうかい」六太郎「よからう〳〵、汝も參れ」丈助「往いでならうか」六太郎「こりや面白い、サア皆の者さわげ〳〵」ト踊りの太鼓三弦になり、六太郎櫻木の手を引き、丈助其外皆々捨白にて花道へ行きかゝる、ト向より松江藏人衣裝社衿大小にて、蒔繪の箱を白木の三寶にのせもち、づつと出で立塞がり。藏人「粟島の使者、おして推參仕つてござりまする」

というたれば、櫻木が呵つても大事ない、向後そちに見かへるというて無理やりに」女皆々「あつたかえ」淺野「イヽエどうやらかうやら迯げて出て、私が身の潔白を櫻木様へ告げたのぢやわいなア」ト此内六太郎色々有て。六太郎「ハテ惡事千里ぢやなア」櫻木「それぢやによつてわたしが腹の立つが無理かいなア」六太郎「オヽ無理ぢや」櫻木「どうして無理ぢやえ」六太郎「サアそれはアノ、何ぢやしらぬが無理ぢや」櫻木「その譯聞かうわいなア」女皆々「マア待たしやんせいなア」六太郎「とめなく、おれも聞かんのぢや」綾助「サアくようござりますわいな」ト又せり合ふを皆々とめる所へ丈助出てわけ入り。丈助「殿お靜りなされ、櫻木殿もまたつしやれく、樣子は殘らず承つた、とかく殿がいやしいから、又してもつまみ喰をなさるゝ故、斯樣な騷動がおこりますわい、先今日は拙者が御挨拶申す、櫻木殿御堪忍なされ、拙者が貰ひぢや、只今の口説行司暫く預りく」櫻木「イヽエ重ねての惡性をせまいといふ誓言を聞かねば、何ぼうでも聞く事ぢやござんせぬ」丈助「それはいつち易い事ぢや、それ殿誓言く」六太郎「おもしろい誓言せう、凡日本大小の神祇をちかひに立て、再び女にてんがうを言かけまい」丈助「此事僞るにおいては一生女子に攻めつぶされ、未來は其儘女子の地獄へはまるなり」六太郎「先女子の地獄といふは西施楊貴妃小野小町衣通姫」丈助「世話にとりては油屋お染、八百屋のお七、本町二丁目

「身共が門弟津輕官兵衛に謀合せ、今日中に何かの手番、手段といふは是」ト丈助を招きささやく。丈助「適れ妙計」臺七「萬事は奥でしめし合さう」丈助「臺七どの」臺七「丈助來やれ」ト唄になり臺七こなし有つて丈助伴れ下座の家體へ入る、ト奥にて。櫻木「イエ〱何程でもきく事ぢやござんせぬ」六太郎「いふ事が有るならいうたがよいわい」女形皆々「マア〱ようござんすわいなァ」ト六太郎櫻木せり合うて居る見得にて、淺野、鹿野、正木、かをる、子供、綾助も止ながら出る。櫻木「あんまり殿樣が惡性なわいなァ」六太郎「なんでおれが惡性な」櫻木「惡性なわけいふぞえ」六太郎「聞うかい」正木「是いなァ、其やうに爭合はずとマァ譯をいうたがよいわいナ」かをる「一體マァ何からおこつた口說ぢやぞいなァ」櫻木「サア其譯といふは、そこにゐやしやんす淺野さんから起つた事ぢやわいなァ」鹿野「どういふ譯ぢやぞいなァ」櫻木「淺の樣、今の事をま一度いうて下さんせいナァ」淺野「皆樣聞いて下さんせ、今奥で床の間の花を見て居たればナ、そこへ六樣がお出なされて、花子の狂言が習ひたい程に、密かな所でをしへて呉いと、それから圍ひの間へ連れていて、ほんまの花子はこんなものぢやといふて、恥しい事ばつかりを、トうつむく。櫻木「聞かしやんしたか、アノ通りぢやわいなァ」綾助「我折れ」皆々「さうしてどうぢやえ」淺野「サアそんな事をしたらば、櫻木樣が呵つてゞ有らうによつて、わたしやいやぢや

やならば思直して返事さつしやれ、いやならばぶち放す、刃に懸けて死にたる者は、未來では劔の山、三途八難五逆の責苦、大抵大方苦しい事ではござらぬぞや」ト此内宮城野そつとぬけて奥へ入る、丈助やはりしやべつてゐる。甚七「丈助だまらつしやい」丈助「イヤ默りますまい、一大事でござる、すでに以て」甚七「だまらつしやい」丈助「イヤお構ひなさるな、先地獄の苦しみといふものが」甚七「ハテ扨宮城野は奥へ參つたわい」ト突飛ばす、丈助そこらを見て。丈助「南無三、外しをつたか、エヽ忌々しい」甚七「宮城野が詞の端々いよ／＼、身が推量に違はず、弟谷五郎に狂ひをるに極つたわえ」丈助「すりや御舍弟谷五郎殿に」甚七「いかにも何かに就けて邪魔な奴、此奴片附けて仕廻ひなば、自然と戀は叶ふといふもの」丈助「胤はら違ふ兄弟の義理に替へても宮城野殿を手に入れんとは、ハテきつい思込みやうぢやな」甚七「イヤ宮城野に心をかけしは一朝一夕の事でない、小身なれ共由緒正しき杉本甚内、武術に於ては楠流の奥義を極め、菊水の卷と名付けて極意の印可、女さへ隨へば自然と印可も手に入る道理、斯程迄に心をくだけど隨はねば是非に及ばぬ、今一思案せずばなるまい」丈助「なる程左樣承れば御尤に存ずる、それは格別、伯父御大學樣に兼て一味の貴殿、拙者若殿六太郎樣に自滅させて、一國を押領有る伯父御の大望」といふをおさへて。甚七「是音高し、おんみつ／＼」ト四邊を見て。

臺七「宮城野殿、いよ〳〵承知か」宮城「オヽくど」臺七「忝い、此場では何かとさし合、宮城野殿ちよとあれへござれ」ト手を持つていふ。宮城「アヽ申し何なされますぞいなア」臺七「サア積る咄の山々が、どうも此場では咄しにくい、櫻が谷の小蔭へ參り、差向ひでしつぽりとおはなしを申すわさ」ト連れんとするをふり切つて。宮城「さやうな猥褻な事はわたしや厭でござりまする」丈助「イヤ〳〵宮城野殿、たつた今迄應というて、手の裏を反すやうに、そりやどうでござる」宮城「わたしやとんと合點が行かぬわいナ」丈助「是程合點がいて有るのに、高で此臺七殿がこなたへ執心」宮城「エヽそんなら私への執心と仰せられましたは」臺七「志賀臺七身共でござる」宮城「エヽわたしや又弟御の谷五郎樣かとおもうて」臺七「なんと」宮城「オヽ笑止、きつい間違ぢやわいな、臺七樣重ねて仰せられますな、いやでござりますぞえ」トつんといふ、臺七むつとしたる體にて。臺七「丈助、先月取替へた金子入用ぢや、今かへさつしやれ」丈助「よくござる」ト宮城野の傍へいて。「宮城野殿、安達丈助は武士でござるぞ、拙者がためには師匠甚内殿の息女なりや、外ならぬやうに存じて臺七殿へ媒致すは、コリヤ双方のためといふもの、何は格別武士たる者が詞のかすがひ、今となつて否應はいはさぬ、それとても得心なくばこなたをぶち放し身も切腹いたす、死ぬる事がいやならばおもひ直して返事さつしやれ、い

んなら志賀」ト奥を見てこなし、下の障子より臺七出かけるゐ丈助臺七へ目配して。丈助「杉本の聟に取つて、不足のない志賀氏、お氣に入らねばせう事もなし、どりや出直して參らう」ト立つて行うとする、宮城野谷五郎と取違へ悦ぶこなしにて、丈助をとめ。宮城「アヽ申しわたしや得心ぢやぞえ」丈助「スリヤ身共が申した事を」宮城「聞かいでならうかいなア、わたしや疾からきく氣ぢやわいナ」丈助「眞實得心でござるか」宮城「アイ得心から上ぢやわいなア」丈助「それ得心ぢやと〳〵」ト臺七へ聞かす、臺七悦び。宮城「本に殿御の心は深いもの、其お心で有りながら表向は物堅う、ツイ今の時打明けてくれたがよいわいな」ト奥を見ていふ。丈助「サアそこがかの戀といふものは、直に逢うては申しにくいものぢや、したがかう打解けるからはもう遠慮には及ばぬ、臺七殿〳〵、サヽ是へ〳〵」臺七「丈助お身が取持ち忝う存ずる」丈助「なんのお禮に及ぶ事がござる、是からは又直々にお咄しなされたがようござる」ト宮城野、丈助が袖を引いて。宮城「申し臺七樣も御得心でござりますかえ」臺七「此方は得心から上でござるわい」宮城「それはマアお嬉しう存じまする、是からは又隨分と大事に致しませう程に、お前樣も可愛がつて下さりませえ」丈助「それ可愛がつてくれいと〳〵」臺七「丈助、どうか身共は上氣いたしたやうな」丈助「去迚は氣のよわい仁ぢや、先よい事には寸善尺魔といへば手附がてらそこらで」

殿、是さ〱コレサ宮城野殿」ト宮城野悔りして。宮城野「ハイ〱何ぞ御用でござりますかえ」丈助「是は又きつい悔りの仕様ぢや、大方先生のお迎ひでござらう、御親父に逢つしやれたか」宮城野「アイ逢うたやら逢はぬやら、一向藥袋でござりまする」ト奥を見送つていふ。丈助「何の事ぢや、イヤ宮城野殿、ちとこなたに談じたい儀が」宮城野「エヽ」丈助「かくいふ身共は御親父甚内殿の門弟なりや、外ならぬ先生の御息女、縦令相應な縁談もござらばお世話申したいと存ずる折から、幸ひとこなたへ執心の仁が有つて、何卒拙者に取持呉いと再三の頼み、こなたさへお得心ござらば直に先生へ申入れて表向の縁組、なんと相談する氣はござらぬか」宮城野「丈助様、せつかくのお世話なれど、ちつと心に願ひがござりまして殿御持つ事はなりませぬわいナア」丈助「サヽそこでござる、こなたの御容色で聟擇なさるゝは至極の御尤、したが男に持つて不足のない先の相手と申すは」宮城野「イエ〱名を仰しやつても、わたしやいやでござりますわいなア」丈助「是は又惡い請ぢや、それ程いやがらしやるものを無理にとも申されまい、身共を身共とおもうて取持を頼まつしやれた志賀唐崎の一ッ松が、さぞ身共を恨むるで有らう、ハテぜひにも及ばぬ」ト宮城聞きとがめる。宮城野「丈助様、志賀唐崎の一ッ松とはえ」丈助「ハテこなたに執心の仁と申すは、志賀唐崎の一ッ松、ナ、志賀と申したら大方御合點でござらう」宮城野「そ

明けては申しませぬけれど、母様には御願ひ申しまして、そちが好いた事なら幸ひ谷五郎様は部屋住といひ、爺様に願うて女夫にしてやらう程に、氣遣すなと母様のお詞、どうで不束かな私なれば、お氣には入らぬでござんせうけれと、どうぞ女夫に成つて下さりましたら、大體や大方嬉しい事のやうに、かゝ様はおもはしやんせうし、私も又おもひます物の樣な物でこざんすわいナア」ト言難さうにくど〳〵いふ。谷五郎「イヤ是々宮城野殿、尤も某部屋住ではござれど、甚内殿は若殿六太郎様へ武術御師範有つて由緒の家筋、此谷五郎も門人となつて御指南を請くれば假にも師匠、其師匠の息女とみだり不義がござつては甚内殿の思召、家中の思わくも如何でござる、身不肖の某へ志は千萬過分に存じまする、重ねて左樣の儀はおつしやて下さるな宮城野殿、後刻お目に懸りませう」宮城野「なんの是程迄に思ひ込んでをりますものを」谷五郎「すげなう申すはこなたのお爲に」宮城野「わたしが爲とはえ」谷五郎「不義は一統にいましむるは、今に始めぬ武家の格式」宮城野「エヽつつともう」ト谷五郎こなし有つて。谷五郎「御前へ參つて今一應」ト行くを又袂に取付いてちよつと留める、すげなう振切つて。「谷五郎は武士でござるぞ」ト唄になり、谷五郎ついと奥へ入る、始終合方宮城野本意ないこなしにて跡を見送る、下座の一と間より安達丈助出て。丈助「是は宮城野殿是に居召さるか」ト宮城野やはり奥を見送つてゐるゆゑ。「宮城野

木様」皆々「むつ様も御一緒に」櫻木「サアござんせいなア」六太郎「どりや粋を通さうか」ト唄になり、六太郎櫻木を連れ女形皆々、才助も付いて奥へ入る、谷五郎宮城野お力殘りゐる、谷五郎奥を見やり。谷五郎「水の出端の御放埓、所詮いかやうにいうてもお聞入は有るまい、何ともはや」ト手を組み思案の體、此内お力色々有つて宮城野を谷五郎傍へ突やる、宮城野傍へすわり、付穗のないこなしにて、又元の所へ來る、お力もどかしがり、突込んでいへといふ仕方をする、宮城野夫でも恥しいと云ふこなし、お力、宮城野が手を持つて無理に引ぱりいて突やる、此はずみに谷五郎の傍へ坐る、谷五郎ふり返り見る、ト宮城野振袖を顔に當る、お力こなし有りて。お力「どりや奥へ行うか」ト合方となる、お力こなし有つて奥へ入る。谷五郎「杉本氏の息女宮城野どの、よくおこしなされた」宮城「ハイよう參じましてござりまする」谷五郎「御親父甚内殿には、お勅使上覽の競馬かけ的、何角お差圖と有つてとくより御入來、定めて御親父をお迎ひの爲此所へのお越でござらうな」宮城「アイ爺様のお迎ひやら、お前様のお迎ひやら、何やらかぢややら、心がもだ〱してどうも云ひやうが御座んせぬ物の様な物でござりまする、何ぼう不束な私なれど、爺様は武藝の家筋、私を妻つて杉本の家が續ぎたいと望むお方もたんと有るさうなけれど、私や貴方を除けて外に殿御を持つ氣はござりませぬ、爺様は物がたいによつて、打

ます」お力「奥様のお媒介で表向の女夫なれど、我ものになつて自由に成らぬ」六太郎「いなり山の松だけか」お力「ハイ」ト恥しさうにうつむく。六太郎「ハテ左五平めは憎い奴なア」綾助「因縁咄で座が滅入つた、奥へいて飲直しませうかい」六太郎「よからう〱、サア皆こい〱」ト皆々立上る、此内奥より志賀谷五郎出て。谷五郎「イヤ御前暫くお控へ下さりませう」ト眞中にすわる、女形皆々しらけた體にて跡へよる、お力、宮城野が袖を引きて谷五郎を教へいろ〱有る、宮城野、谷五郎にほれてゐるこなし、櫻木は六太郎が袖を引き、奥へいかうとこなし、六太郎もじ〱して。六太郎「其方は志賀臺七が弟谷五郎、いつの間に是へ」谷五郎「お勅使お成につき饗應萬事を親殿より仰付られ、先刻より相詰めをりまする、承りますれば達の大木戸に勢揃を催され、お勅使へ狼藉有りしとの事、先以て酒より前後を忘ずる殿のお身持、お勅使へお詫有つて何卒」六太郎「コリヤ〱谷五郎、意見なら古いぞ〱、此面白い色と酒がすてられるものかいヤイ」谷五郎「スリヤどうござつても、ホイ」六太郎「きやつ某が氣に入なれど、固くろしいが玉に疵ぢや、所をやはらげるは宮城野、ナ、そちが胸中は知つてゐるは、櫻木始め皆をつれて奥へ行き汝は跡に殘つてナ」ト谷五郎を教へ。「呑込んだか」ト宮城野こなし。櫻木「そんならあなたに宮城野樣が」六太郎「こりや何にもいふな」綾助「是から奥で飲かけ山の郭公」淺野「サア櫻

たが、殿さまに思はれて嬉しい事の數々、わたしやもう都へいぬる氣はござんせぬわいナア」淺野「それといふも都にまれな六さんの風俗」綾助、鹿野「其くせ粹で氣立もよし」正木「それなればこそ」かをる「身にかへてのいとしがりやう」小辰さんご「櫻木さま、さぞ本望で有らうなア」櫻木「そりやモウ言はしやんすが諄ぢやわいナア」宮城野「御前の仰せられます通り、ふつゝかな國訛も直つて、都の風をおぼえたも、皆櫻木樣のおかげで有難うござりまする」櫻木「何んのお禮に及びます事かいなア」お力「隨分氣をつける樣に存じましても、不器用な私どこぞの程では國訛が出まして、オヽ恥かし」綾助「イヤあなたは仙臺なまりではない、江戸なまりと見えまする」お力「さればでござりまする、元私は江州高島大井子と申しました者の娘、生れついた力量が親旦那甚内樣のお目に留りまして、お屋敷へ抱へられ、鎌倉御在番、其間に男勝りのみちなれば、武藝の道も習うて置けと、親旦那の直の御指南、近江で生れて江戸に育ち、今此お國で左五平どのといふ男を持つも、緣は異なもの、人の行末は知れぬものでござりますわいなア」六太郎「何ぼうかたくろしい左五平でも、そちと寐所の劍術、毎晩〳〵エイヤツトウをやるで有らうな」お力「お聞遊ばせ、夫は心願が有るとて禁酒不淫の行、それゆゑ女夫と申しますは名ばかり、終に一度も」綾助「ないとはいはさぬ白狀〳〵」宮城野「イエ〳〵、そりや妾が證據でござり

綾助「何と六さまが扇の手は、きついかくし藝ぢやないかいな」皆々「きやうといもので有つたわいな」鹿野「六さん當つたぞえ」六太郎「イヤ〳〵俺よりそこに居る宮城野、腰元のお力、ふたり共にきつう出かしたぢやないか、ノウ櫻木」櫻木「イエモウ大體器用なお方々ぢやないわいな」淺野「わたしらは一向誤つたわいなア」宮城野「又おなぶりなさるかいなア、御前にも御存じ遊ばします通り、わたしが父は御家中へ劍術の指南を致すもの、かたい性質其娘の宮城野、都の女中さんに立交りて恥しい事の有たけも、御前のお詞がおもいから、皆さま必ずとも笑うて下さりますなえ」お力「宮城野さまの父御杉本甚内さまに召遣はれまする腰元の私、奥樣磯崎樣の仰により、御家來の左五平殿に縁を結び、只今にては左五平が女房、夫の名代に宮城野さまの御供致し、親旦那甚内さまをお迎ひに參りまして、思ひもよらぬ殿さまの御遊興、御無體な舞のお相手、此やうな迷惑はござりませぬ」六太郎「ハテ卑下をするやつでは有る、此奥州は日の本の邊鄙、堅いばかりが國の風俗、第一氣に入らぬは仙臺なまりの言葉遣、都は王城の水に育ち、物言ひ何か和らかな故、家中の男女に此風義を習はさうと、此櫻木を始め鹿野淺野、其外都の白拍子幇間迄取よせて、國訛をとんとぬいて、都詞のござんすに仕替たは、何ンとあつぱれの軍師で有らうがな」櫻木「お館へ召れて京を立つた時は、陸奥の果へ來てどうなる事ぢやと案じ

おカ「此朝風の朝日島、名に負ふ千賀の浦風に」宮城野「うかれて出づる盃の」櫻木「酒に誘はれ」淺野「色にひかれ」おカ「はる〴〵是へ」二人「參りて候」謡『みきと聞く名も理りや秋風の、吹くとも〳〵さらに身には寒からじ、理りや白菊の〳〵、きせ綿をあたゝめて、酒をいざや汲まうよ。ト是にておの〳〵本舞臺へ直り二人づつ左右へわかれ、六太郎眞中になりて。女形皆々「まれ人も御覽ずらん」六太郎「月星はくまもなし」皆々「所は松島の」六太郎「江の内の酒もり」皆々「猩々舞を舞はうよ」謡『蘆の葉の笛を吹き、浪の鼓どうと打つ、聲すみ渡る浦風の、秋のしらべや殘るらん。ト是より歌はやしへ取る、右の人數所作のもやういろ〳〵有りて、よろしく納る。淺野「御身色有る殿御故に」櫻木「此國に色酒のおもしろきを傳へ」宮城野「かたい心を和らげて」おカ「都の風俗に仕立上げて」四人「上げやんすにて候」謡『よもつきじ萬代までの色の名の酒、汲めどもつきず飮めどもかはらぬ居つゞけのさかづき、かねもつけ來るわかれて後朝、是元はたよ〳〵と弱り臥したる枕の夢の、さむるとおもへば色達は、其儘つきせぬ遊びぞ目出たけれ。ト右の謡ちらしの心にて、宜しく納る、ト奥より呉羽、繁野、勝彌、文彌、皆々舞子にて綾助幇間、此人數皆々出て。皆々「よう〳〵出來ましたわいな」六太郎「マア息つぎぢや酒にせい〳〵」女形皆々「アイアイ」ト銚子盃を持出て六太郎は櫻木の傍にすわり、宮城野おカは下の方、其外居並ぶ。

六法の出端にて宜しく振有つて留り。

六太郎「是は陸奥の金花のふもとに住居いたす民にて候、扨も我色酒をたのしむにより或夜ふしぎの夢を見る、象潟松島の市に出て色酒を賣るならば、まだ以上のあほう者になるべしと、教へのまゝになすわざの」謠『とき去り時來りけるにや、次第〳〵にすつぱの身と成りて候。又爰にふしぎなる事の候、市毎に來る色酒を飲む女共がひとりならず二人三人四人迄ござる、盃の數はかさなれ共、一向よわらぬ飲手にて候故、名を尋ねて候へば海中に住む猩々の娘共と申して候、今日は松島の濱邊に出て、かの猩々をまたばやと存じ候。謠『松島の江の邊にて〳〵、菊をたゝへて夜もすから、月の夜にも友待や、またかたむくる盃の影をたゝへて待居たり〳〵。ト此謠の内鹿野右の車を引いて出る、六太郎盃を請くる、鹿野つぐ、此模樣有りて三味線入の謠にて。

謠『老せぬや藥の名をも菊の水、さかづきもうかみ出て、友に逢ふぞ嬉しき、此友に逢ふぞ嬉しき。ト是にて向ふより淺野ふり袖白拍子の形、櫻木打ぬき廣袖さしき付白拍子の形、宮城野屋敷風、ふり袖かゝへ帶、おカ婀風、同じく抱帶、おの〳〵置綿帽子銘々手に大盃を持ち、長柄の杓をかたげ出て、花道にならぶ。宮城野「何と皆樣、朝夕見ても見あかぬは此松島の浦の景色」櫻木「霞が浦も打はれて、小島のあまの漁舟」淺野「夜は一トしほの月見崎、都島にも及びなき」

わるからう」谷五郎「なぜわるうござるな」臺七「元來身が親志賀段右衞門殿に養子の身ども、家督に立つた其後に、本妻腹に出生の其方、胤腹わけぬ義理の兄弟、養父段右衞門死去召れてより、次第に立身、當時祿三千石を賜はり、家老格と出頭するは伯父御大學樣の御推擧とは言ひながら、身共が器量拔群に秀でしゆゑ、コリヤいはひでもしれた事、其方は部屋住、出頭の兄をさし措き諫言立はわるからうといふのさ」谷五郎「すりや兄者人が御諫言をなさるゝかな」臺七「そりや身共がむねに有る」谷五郎「ハテナア」トこなし有る。臺七「アノ騷ぎは若殿の遊興、先づあれへ參つてお目見得致さう」谷五郎「然らば兄者人」臺七「同道致さう、弟參れ」谷五郎「イザお越しなされませう」ト始終踊り三味線にて、兩人とも大木戸の内へはいる。

返し

達の大木戸左右へ引分け、後の山幕切つて落す。

造物平舞臺、正面三間の間より左右折廻りにして白拍子鹿野好みの拵にて、金の車に眞紅の綱を付け、右車の上に絹張の酒瓶、菊の造花を見事に飾り立、綱を持つて引いて出る、車を能き所に置きて、少し計り所作有つて留り、能き所に控へる、トつしま樂になり、橋懸より六太郎衣裳羽織に改め丹前

我は」六太郎「ハテ扨參酌せずと御入來〳〵」丈助「何でも面白うなつたは、若殿と櫻木樣との御中祝うて一さし舞はう」ト扇をひろげる、歌三味線、爰にて官兵衞野田の富士を舞ふ事有つてよろしく納る、皆々よう〳〵とほめる。六太郎「出來た〳〵、是から白拍子を相手に今樣の藝盡し、固藏の大名共をみな寄つて引立ていく〳〵」軍吾、新吾、曾平「サア〳〵ござりませ」右京、主計、大膳「是は迷惑」六太郎皆々「ひんよいョウイ」右京三人「どうでも參れか」皆々「ひんよいョウイ、おたぢやく〳〵」ト山車のしやぎりになり、三人を中に引包んで六太郎丈助官兵衞其他一件皆々捨白やかましういうて、大木戸の内へ入る、此跡踊りの太鼓三味線になり、向より志賀臺七、著附社袴家中のこしらへにて、草履取つれ出る、橋懸より志賀谷五郎著附社袴、若侍の扮裝にて、是も草履取連れ出る。谷五郎「是は兄者人志賀臺七どの」臺七「弟谷五郎、未明より相詰をつたな」谷五郎「お勅使お成につき饗應の爲、櫻が谷にて競馬懸的の催し、師匠杉本甚内殿のおまねきにより、未明より相詰をります、兄者人にもそれ故の御入來でござりませう」臺七「なる程、身も饗應の取持を致さん爲、只今參りかゝりし所、途中にての噂、若殿六太郎樣何角お勅使へ狼藉有りしとやら、其方も承つたで有らう」谷五郎「さればば山館に相詰めし所、耳を貫く貝鉦太鼓、何事かと樣子をとへば右のしだら、それゆゑ若殿へお目見えいたし、とくと御諫言を申さんが爲」臺七「イヤ諫言

大學様に打わつて談合したとおもへ、そいつよつ程むつかしいというて智慧をふるはれた所が此趣向ぢや、七草の残黨が奥州へ攻下つたというて勢揃を拵へ、一國かあへかへす所へ、勅使が來るは軍最中で、そこ所ではないというて、國境からぼつかへすは、利づめで祝言はのびるは、櫻木とおもふやうに娛まれると伯父御の智慧でやりかけた軍事、おもふ圖へまゐつたといふは、是れ今日の新狂言、作者は伯父御大學様、なんとみな合點が行かうがな」丈助「そんなら七草の残黨が攻寄せて來たというたは」六太郎「けもない事、噓ぢや〳〵」丈助「是は又途方もないおもひ付ぢや」官兵衛「そんならさうと初手から仰せられたがよい、身共等は又誠の軍かとおもうて、あつたら肝をひやしましてござるわい」右京「すりや廻文をもつて我々を招かれしは」六太郎「サア是程仰山に仕込まんと、お勅使が瞞されんぢや、そこで隣國の各へ廻した廻文、何にも知らいで御苦勞〳〵」右京、大膳、主計「なんの事ぢや」軍吾「是程にしかけて若殿が寐所の軍で有らうとは、とんと思ひがけなかつた」新吾「母衣武者の夕立に出あうたはこんな物でもあらうか」曾平「六月の俄に出損うた心持ちや」三人「ハヽヽヽヽ」丈助「なんでも軍は若殿の大勝、此場はめでたう勝鬨〳〵」軍兵「エイ〳〵オウ〳〵」ト鬨の聲、内にてどんちやん打上げる。六太郎「各々を引つけた替り、山館へ伴うて色酒を振廻ひませう」三人「イヤ〳〵我

て、お勅使へ右の趣段々と斷るといへ共一向御承引なく、其上雜掌野々宮左近といふ者、理不盡にかけ通らんといたす故、血氣にはやる味方の若武者、劒戟を以てぼつ立て〳〵、勅使を始め官人仕丁に至る迄、殘らず國境へぼつ返してござる、さすれば大內へは朝敵となつて、足元には七草一揆、お家の大事、今此時、此儀御注進申さんため、直樣立歸つてござります」
六太郎「勅使をぼつ立てしは差當る違勅の大罪」右京、主計、大膳「すりやお勅使を」皆々「ムウン」ト吐息つきこなし有り。六太郎「津輕官兵衞、いよ〳〵勅使は立歸つたか」官兵衞「さやうでござる」六太郎「オツトよし〳〵、此法へやらう爲に拵へた勢揃、皆太儀で有つた休め〳〵」丈助「イヤ〳〵六太郎樣、そりや何を御意なさるゝ」官兵衞「我々は一圓に合點が參りませぬ」軍吾、曾平、新吾「僞りの勢揃とは」右京、主計、大膳「六太郎樣」皆々「如何でござるな」ト六太郎眞中へ出て。六太郎「されば合點が行くまい、高はかうぢや、そち達も知る通り、都から取よせた大勢の白拍子、その中に櫻木といふ美人を手に入れ、手活の花とおもふ所、ひよんな事は粟島の姫と緣組の勅定、勅使が高館のやしきへ來て、親人に緣組の事を云付けるとすぐに祝言して、家督願ひに都へのぼらねばならぬ、姫と女夫に成つては櫻木は腹立てる、おれも氣がすまぬゆゑ、何でも是には分別が有らうと、枕の千もわつては見たれど、とんと仕樣がないから、さし合くらぬ伯父御の

右京「合戰の樣子承るとひとしく、家の子郎等、手勢すぐつて二千五百騎、貝田の邊に控へさせ、先大將に見參と存じ、罷越しましてござる」六太郎「第一番の著到吉見右京太夫殿、帳面に記してよからう」丈助「畏つてござります」ト帳面を取つて名を記す、又どんちやんになり、橋懸にて鬨の聲を上げ、山形主計頭、豐岡大膳亮甲冑の形、軍兵數多旗を押立て走り出で。主計「苅田の領主山形主計頭」大膳「芋ヶ瀨の領主豐岡大膳亮」主計「兩家の手勢三千五百騎」大膳「一手に加はり只今參上」兩人「仕つてござります」六太郎「御兩所御苦勞、二番手三番手の著到相記してよからう」丈助「ハッ」ト同じく帳面に記す。右京「見ればいまだ矢合の初りし體とも相見えず」主計「敵の軍勢軍の備へ」大膳「要害によつて待受くるか」右京「又は絕所へ討つて出るか」主計「大將の手配りは」大膳「如何でござるな」六太郎「敵は二本松福島の間に到著いたし、遠路の旅につかれ苦しむ其所へ、不意におしよせ討取りなば、度を失うて粉微塵」軍、曾、新「此儘すぐに押寄せませう」右京、大膳、主計「げに尤」軍吾、新吾「者共つゞけ」軍兵「ハア、」六太郎「ヤレ方々血氣にはやるは匹夫の勇、柔能く強を制するといへば、弱きと見て侮るは破れの基、百度戰つて百度勝つ謀こそあらん、先々靜つてよからう」皆々「ハッ」ト各々靜まる、向ばた〳〵にて官兵衞走り出。官兵衞「何れも一大事が出來ました」皆々「何一大事とは」官兵衞「されば若殿の御意に依

お通りの間は路次を開き甲冑を禮服に改め、お出迎有るべきや、此儀承引なくば勅使に對して弓引くも同然、大將の御賢慮如何、御返答を承れよと有つてお乘物を國境に立置き、再三のお使者でござるが、此儀如何計らひませうな」六太郎「ヤアならぬ〳〵、勅使のお通りと有つて軍勢をまとめ引取りなば、其機に乘つて敵込入り、高館へ攻めかけなば、ゆゝしき味方の一大事、圍みを引く事罷ならぬと、お斷を申上げ、それとても承引なくば勅使とて苦しうない、國境よりぼつかへしてよからう、早う〳〵」官兵衛「畏つてござります」ト引返し走り入る。丈助「歌枕と名づけ此國へお入あるは、兼冬公の私にあらず、先達て三州の領主粟島甲斐之助殿の妹姫を、若殿六太郎樣への御内緣、此度帝より改めて婚禮を取結び、達の家督を御相續有つて、勅使と共に上洛を遊され、お家の重寶鎭守府の印を、記錄所にてお改有り、達家代々家督定の先例、其お勅使へ對し不禮狼藉ござらば、若殿を始め一國の騷動、但し思召有つての儀か、六太郎樣如何でござるな」六太郎「尤の不審ながら、某が所存は追て云聞かさう」丈助「御意ではござれどお勅使へ不禮有つては、ハテ何ともはや」ト思案する、內にてどんちやん、向ふ戸屋の內にて鬨の聲を上ぐ、吉見右京太夫甲冑の形、軍兵大ぜい旗を先に押立て出る。右京「岩沼の領主吉見右京太夫只今參著」六太郎「廻文を以て催促せしに早速の入來、御神妙に存ずる」

ませう」六太郎「尤の不審、かく軍勢を集むる事三年以前、九州にて亡びたる七草が殘黨、此國を切りとらんと、討ちもらされの野武士をかたらひ攻來るとの風聞、取るに足らずとは云ひながら、二葉の中に摘切らずんば斧を用ふる國の煩ひ、夫故伯父者人大學殿の進めに隨ひ、斯く甲冑劍戟をたづさへ、此達の大木戸に出張を構へ、敵おし寄せなば一當あてゝ國境をぼつ下し、悉く討取らんが爲、かく合戰の催ほし、子細といふは此通り、其旨相心得てよからう」丈助「御意畏つてござりまする、當時足利武將義持公、四海に仁和をほどこし給へば、弓は袋に劍はさや、武道にうとき今の世の中、斯く申す安達丈助は、若殿の御師範たる杉本甚內殿の門弟、日比の武藝は今此時、一揆の大將を討取つて粉骨碎身、手柄の程を御覽に入れませう」軍吾「丈助殿の仰の通り、並居る者共は皆杉本氏の門弟、此度の軍に諸人の目をおどろかす程の高名を顯はし」新吾「あはれよき敵と見るならば、眞一文字に切つて入り、武者振よき首を取つて、兼て望の極意の印可」曾平「杉本流の奥義をそらんじ、先生甚內殿の御賞美に預かる門弟共が多年の願ひ」丈助「なる程〳〵、軍中の手柄は仕勝、何れにもぬかり召るな」皆々「相心得てござる」ト此時向ばた〳〵にて津輕官兵衛半切胴丸甲手脚當鉢巻にて走り出。官兵衛「申上げます、都のお勅使綾の小路中將兼冬公、東國歌枕のついで、此國へお入の所、思ひがけなき合戰の催し、

次第

一鵜羽黑右衞門（實は志賀臺七）小村儀右衞門　一奴佐五平　尾上新七
一大福屋宗六　尾上新七　一松江藏人　同
一杉本甚内　嵐小六　一宇治兵部之輔正之　嵐小六
一楠原普傳（實は森原意斬）同

口明

造物城の石垣、上は矢切にて眞中龜割坂の道筋、後山幕奥州達の大木戸の體、達六太郎著込腹卷大口小手脚當陣羽織かつら鉢卷、若大將の拵へにて采配を持ち床几にかゝろ、安達丈助半切胴丸かつら鉢卷の形、藤田軍吾、福原新吾、高倉曾平各軍立の形、旗持の雜兵竹に雀の旗を持ち六太郎に引添ふ、其外雜兵あまた並びゐる、鬨の聲ドンチヤンにて幕明くろ。と遠攻しづかに打つ。

六太郎「何れも著到の軍勢は相揃うたか、どうぢや」丈助「若殿六太郎樣の下知によつて、一家中へ觸ながし、勢揃の人數を勝り、追々參著仕つてござります」軍吾「奥州高館は御先祖藤原の秀衡公より代々鎭守府の御家筋」新吾「先年義經公を此國に迎へ取り、鎌倉大軍の討手を引請け數度の合戰」曾平「一度もおくれをとらず、終に御和睦有つて萬歲をとなへ、お國代々靜謐に相なりしに、計らざる今度の合戰」丈助「火急の招きに子細を存ぜす、思召の段」皆々「仰せ聞けられ

替名之

役名	役者
一奴右内	他人
一奴土手藏	駒藏
一おじやれおなま	爲右衛門
一白拍子さんご	松次郎
一腰元若草	德三郎
一腰元お濱	同
一おじやれお糸	若松
一腰元お汲	吉太郎
一同春野	松之助
一高館市之正	音羽
一雛形姫	花桐富松
一辨の兼成（實は奴綱平）	中村歌右衛門
一津輕官兵衛	山村友右衛門
一白拍子櫻木	藤川友吉
一松江藏人（實は五四六ノ七郎兵衛）	嵐三八
一高舘大學	同
一逹六太郎	嵐雛照
一栗島甲斐之助	嵐吉三郎
一比丘尼名月	吾妻藤藏
一宗六女房お倉	山下八百藏
一兵部之輔妻お節	花桐豐松

役名	役者
一藤田軍吾	駒藏
一野々宮宮内	爲右衛門
一奴松助	同
一腰元お汐	松次郎
一仲居おりく	德三郎
一中將兼冬卿	若松
一腰元彌生	同
一同三笠	吉太郎
一正木典膳	音羽
一舞子淺野（實は雛形姫）	花桐富松
一安逹丈助	中村歌右衛門
一按摩三九（實は津輕官兵衛）	山村友右衛門
一信夫	藤川友吉
一奴頭陀八	同
一平戸島藏（實は熊本勇八）	嵐三八
一入間ノ與茂吉	嵐雛助
一志賀谷五郎（後に金江牛兵衛）	嵐吉三郎
一佐五平女房お力	吾妻藤藏
一甚内娘宮城野	山下八百藏
一甚内奥方磯崎	花桐豐松
一志賀臺七	山村儀右衛門

亀割坂 下紐關 姉妹達大礎（あねいもうとだてのおほきど）

作者　辰岡萬作

役人

一白拍子小辰　福太郎
一腰元かほる　陸次郎
一腰元糸遊　同
一おじやれお松　榮藏
一白拍子鹿野　菊三郎
一順禮權兵衛　平三郎
一米屋宅右衛門　同
一沖津新吾　門十郎
一順禮次郎作　同
一坪内多傳　姉金
一岩瀬伴藏　同
一早瀬九平太　國八
一松田彌太七　同
一蒲原右内　三保吉
一奴砂平　萬藏

一腰元お島　福太郎
一おじやれお露　陸次郎
一白拍子正木　榮藏
一腰元青柳　同
一幇間綾助　平三郎
一加藤七右衛門　同
一綾小路兼冬公　門十郎
一吉見勝右衛門　同
一豐岡大膳亮　姉金
一江尻藤太　同
一山形主計ノ頭　國八
一大瀧法師　同
一吉見右京大夫　三保吉
一福原新吾　萬藏
一高倉曾平　他人

く立になる、靜馬ひるむト。政右「又五郎卑怯な」又五郎「なにが卑怯ぢや」トふりかへる、隙を見合せて。政右「そりや そこぢや」ト靜馬、又五郎を斬ふせる、所へ主膳、善右衛門兩方より馬上にてかけつける。靜馬「親のかたき」政右「舅の敵」政、靜「おもひ知つたか」ト二人止を刺すト。主膳、善右「ホヽ、ヽ、あつぱれ、出來たく」主膳「首尾よく本望遂げ、主人の大慶」善右「かねて主人の懇望、兩人とも馳走申付けよと主人の詞」政右「だんくの御深切」主膳、善右「先づ此場は御立く」ト打出し。　太鼓幕

「林左衛門いづくへ迯げる」林左「もう絶體絶命ぢや」ト政右衛門にわたり合ひ、切り伏せらるゝ、ト源内鎗を持ち出て、源内「主人の敵」ト突きかゝる、立まはりあり。政右「ハテ下郎にはゆゝしき奴の」源内「覺悟せい」トかゝるをあしらふ、立まはりあり。政右「主の敵とおもふが尤ながら、某に刃向ふとは蟷螂が斧」源内「何を」ト突かゝるをあしらふ所、立あつて。政右「あたら命を失はんより、はやく迯げい／＼」トいろ／＼ある所へ、孫八手を負ひ、大勢に取捲かれ出るを見て。「エヽ面倒な」政右「こりや孫八、氣をたしかに持て」孫八「これしきのかすり手、お構ひなくとも若旦那を」政右「合點ぢや」ト家來をおひこむ、所へ十兵衛出で。孫八「うぬも敵」ト刀ふりあげる、十兵衛ふるひ／＼。十兵衛「イエ申し／＼私は呉服屋でござります」ト迯げうとする。孫八「何を」ト斬倒し止めを刺す、見得にて道具かへるト。

造り物打ぬき、向ふ城の體、又五郎鎗にて突かけゐる、靜馬小太刀の大立いろ／＼有る所へ、政右衛門駈つけ。

政右「靜馬か」靜馬「ハッ」政右「櫻田をはじめ、助太刀の奴輩残らず討取つたぞ」又五郎「すりや残らず討取つたとな」靜馬「のこりは澤井又五郎、かれ一人」政右「踏込んで討とめい」靜馬「がつてんぢや」政右「唐木政右衛門が控へた、又五郎卑怯働くな」又五郎「返討ぢや覺悟せい」トはげし

皆々おひこむ、トこれより入亂の立になる、政右衛門、林左衛門、善平と立あつておひかける、ト引道具になる、政右衛門二人花道へおひかけると花道の兩方、松原の引道具になる、ト見得あつて入る、ト孫八、喜平五右衛門、仙兵衛を相手に大立あつて追込む、ト元の松原になる、ト政右衛門大童にてぜい宅と立しい〳〵出る。政右「靜馬やい〳〵」トよぶ内、家來大勢かゝるを切散す所へ、孫八大勢に取まかれ危き所を、政右衛門、ぜい宅が片脚を切るしかけ、孫八が傍へよつて。「孫八が」孫八「お旦那」政右「手おつたか」孫八「ハア」政右「氣を落すな」ト又みな〳〵かゝる、みな〳〵切倒し。「大方討はなしたが、シテ靜馬は」孫八「大ぜいに圍まれ、見失ひました」政右「なんと〳〵」孫八「たしかに小田町通りを」政右「スリヤ小田町通りを」トいかうとする、大勢出で取りまく所へ、背後より善右衛門裃衣裳にて馬にのり出で。善右「唐木政右衛門殿」政右「柏木善右衛門殿」善右「同門の好、かけ付けました」政右「外事の挨拶は追ての事、御免なされ」善右「イヤ適れのおはたらき、して靜馬殿は」政右「いづくにをるか、お頼み申す」善右「心得ました」トかけて入る、ぜい宅刀を杖につきながら下知するを、政右衛門討放す。孫八「若旦那のお身の上が」政右「心もとない」ト追かけ入る、ト黑幕引落す。

造り物小田町の體になる、林左衛門逃げかゝるを政右衛門おひかけ出て。

が顔を見て。「討ちたい〳〵と思ひつめし親の敵、めぐり逢うた今日只今、喜あまつて轉倒した靜馬」トやはり睨詰めるる。「心をしづめて」ト切りかけるを、靜馬身ひらき立廻あつてとめ。靜馬「これは」政右「あつぱれ、神影の奥義、遠山の詠、その心得を忘れまいぞ」靜馬「ハア」政右「尋常の勝負、名乘りかけて、まづ暫く」ト三人木陰へ入る、ト向より林左衛門、ぜい宅、又五郎、榮藏馬に乘り出る、五右衛門、仙兵衛、善平、善平、團九郎、旅裝束にて付いて出る、十兵衛其外家來ども源内、鑓持にて隨き出づ。林左「ヤレ〳〵朝嵐が身にしゆんでさうさうといたしたが、一獻たべたればよく暖まつたわい」ぜい宅「今の松坂屋といふ煑賣屋めは、さてさて意きいたやつでござつた」又五郎「切豆腐の加減、どうもいへませなんだのう、いづれも」皆々「さやうでござる」トいひ〳〵本舞臺へくる、三人木陰より出て。靜馬「澤井又五郎まて」皆々「なんと」靜馬「汝が討つて立退いたる渡邊勒負が躮、同苗靜馬、この所に待受けた、尋常に勝負せい」トみな〳〵驚く、馬よりおりる。政右「眞劍の勝負を望みし櫻田林左衛門、今日只今勝負せんため、唐木政右衛門これに控へをるぞ」皆々「ヤア〳〵」林左「野守之助殿のお賴は爰ぢや、いづれも」榮藏「家來どももぬかるな」トかゝるを孫八追込む、この間に又五郎鑓をとり。又五郎「やさしや靜馬、返討覺悟せい」靜馬「親の敵觀念せい」ト立ながら入る、政右衛門

おさへよ」孫八「おさへの合の助太刀は、下郎めに仰付られませい」政右「コリヤ出來した、ひとつ飲め」孫八「ハイ〳〵」ト孫八飲む、これより又靜馬のみ、政右衞門へもどす、ト盃ををさめ。政右「かれこれ云ふ中、もう五ツまへ、用意しやれ」靜馬「かしこまりました」政右「靜馬、そちは餘人にかまふ事はない、目指す敵は又五郎一人、一心をすゑて合點か、某は櫻田をはじめ、助太刀のやつばら何十人あつても撫斬にする、孫八」孫八「ハッ」政右「そちは靜馬に引添うて、又五郎と勝負のせつ、さゝゆるやつばら、隨分防いで一騎打の勝負をさせい」孫八「畏つてござります」政右「中間小者に至るまで、隨分心を配つて、合點な」孫八「ハッ」ト此内身拵へし、寢刃合はせるを亭主出て見て。質屋「ヤアそんならお前方」政右「氣遣ひな者ぢやない、親の敵を討つものぢや」質屋「エヽそんなら御代官所へ訴へねばなりません」政右「ムヽスリヤそちは所の下用人か、先達て敵討御免と有る管領の御判頂戴はいたしをるが、用人とあればその方が念の爲め訴へるがよいが、隨分密に頼むぞ」質屋「合點でござります」ト橋懸へ入る、戸屋の中より馬士唄うたふ。孫八「ヤイあの同勢は」靜馬「確かに又五郎、日ごろの欝憤、うぬ」トかけ出さうとする、政右衞門とめて。政右「こりや時節到來して手に入る敵、せく事はないぞ」ト靜馬向ふを睨詰めゐる、政右衞門がいふ事きこえぬこなしにて、涙組みゐる、政右衞門、靜馬

を少々貰ひたいが」賣買屋「ハイ〳〵、こつちへお入りなされませ」政右「イヤ〳〵、まだ此家も今起きたと見える、寢込へ入るも心ない」孫八「左樣でござります、內へなど入つてゐては氣がすみませぬ、幸ひこゝに床几がござります、これで一ッおあがりなされませ」政右「まことに爰も氣がはれてよい、一ッたべて用意しや」ト床几へ腰かける。孫八「亭主、なんぞよい肴があらうか」賣買屋「ハイ今起きたばかりぢやによつて、なんにも生肴はござりませんが、鹽鰯が有るが、燒いて上げませうか」政右「それよからう」孫八「はやく賴みます」賣買屋「ハイ〳〵」ト內へ入る、此間靜馬始終向を見詰め、待ちかねるこなし。靜馬「もう來さうなものでござりますが」政右「ハテ性急な、その樣におもうて、眞逆の時にうろつかれまいぞ、もう手に入つた同然の奴等、せく事はない、追付討たす」ト此內亭主盆に茶碗、皿に鰯を入れ、片手に湯婆提げ持ち出で、賣買屋「サア酒あげませう、肴の鰯は餘りかはいらしい小いものぢやによつて、頭取るとひしよがない、首はお前樣がた取つて上つて下さりませ」政右「なんぢや可愛らしい鰯」靜馬「首をとれとは」トかほ見合せ。政右「辻占がよい、靜馬それ首とれ」靜馬「イヤもうこの上の肴はござりません」賣買屋「お氣に入りまして嬉しうござります」トいひ〳〵內へ入る。政右「サア當人ぢや、祝うて一ッ飮みやれ」靜馬「ハッ、しからば」トのみ。「お慮外ながら」政右「祝うて爰で取つて

る、善右衛門は花道へ入る、早幕にてすぐに引かへす、鷄なく。
造り物奥塀口の方に、煮賣屋店閉めてある體、釣鐘なると、煮賣屋亭主出て店を明け、床几をならべ、萬屋といふ暖簾懸ける間に、向より政右衛門靜馬、孫八をつれ出る。

靜馬「よもや先へは驅拔は仕りますまいが」政右「やくたいもない氣遣ひしやるな、此邊の事はうまれ古郷、田道畦道まで案内よく存じてをる、最前越えたおとぎ峠も、本道を行けば、彼やうに來るとは半里の上は違ふわいの、駄荷の事なれば本街道を通らねばならぬて」孫八「左樣でござります、ことに三十人から上の同勢、中々早くて四ツ半でなくば此所へは參りますまい」政右「イヤ〱、あの方も心をせく道中、五ツか五ツ半にはまゐるで有らう」靜馬「もし脇道へは參りは仕りますまいかな」政右「ハテくど〱と案じる事はない、右はたゝせ坂、それを登れば本町筋へ出る、左の方へ行けば城の搦手、いづれにしても駄荷乘掛はこの道へ出て來ねばならぬ程に氣遣ひしやるな、あんじる事はないわい」孫八「イヤお旦那、あれに店の明いた所がござります、たしか、煮賣屋さうにござります」政右「それさいはひの所ぢや」靜馬「左樣ならあれで用意いたしませうかな」政右「さうしたがよい」トいひ〱本舞臺へきて。孫八「なんぢや萬屋」政右「ナニ萬屋とはまんがよい、こゝで用意せうわい」孫八「御免なれや、近頃邪魔ながら酒

足利の御成敗、敵というて討つ事かなはず、そこを察してこの詮議、某が申しうけ首尾よく靜馬が親の敵を討たせよとある、主人春太郎殿の御意によつてこの計らひ」善右「それがしは元唐木政右衛門とは劍術の朋友、殊に某主人唐木が劍術御懇望にて、何とぞ首尾よく敵討の力となれと有る、御意に任せどう／＼の大八と姿を窶すも主命」主膳「靜馬に忠義をつくす女、手にかけられしは、彼奴らが肌をゆるさせん御計略よな」善右「不憫ながらも手にかけし故、某に肌をゆるし、詞に隨ひ夜通しに伊賀越」主膳「貴殿の支配地、場所のよき所へそびき出さん謀計、あつぱれ／＼、シテ靜馬政右衛門は」善右「おとぎ峠の難所に間道」主膳「アノ地の案内はしつたる政右衛門」善右「さきへ驅拔け小田原町の出口の茶屋に相待つ手筈」主膳「勝負は時の運とはいへど」善右「何十人有るとても」主膳「手利の靜馬政右衛門、本意を遂ぐるは」善右「明四ツ時は過すまい、拙者はこれより直にかの地へ」主膳「それがしは暫くこれに、源内めが殘りしは幸ひ、御用金の詮議し、足利の政道」善右「御尤、家來馬牽け」馬士「ハア」ト駄賃馬を引出す、中、源内窺ひ出て。源内「さてはうぬらが謀計であつたよな、觀念せい」ト蒐る、主膳立まはりあり。主膳「御用金虛妄の同類め、遁れぬ所ぢや腕まはせ」ト立廻の中、善右衛門馬に乗り。善右「主膳どの跡の儀は」主膳「おかまひなく」善右「おさらば」主膳「ござれ」ト源内をおさへ

せい宅「土佐沖から九州へ乘込み海上」林左「西と思はせ東へまはるは、こりや妙計」せい宅「してその手筈は」大八「手下の奴らに吩咐、荷物は裏から豐後橋に待たして有る、夜の内に上野まで九里の餘有れど、夜中の時分」林左「時は四ッ半」源内「空尻でぼつ立てたら」大八「あす五ッには上野へでますわいの」十兵衛「この十兵衛幸ひの厄詣、ついでに參宮とは有難い」林左「何を悠長らしい」大八「おりや侍めに追付いて、まんよくばたつた一討」源内「それも手まはし」皆々「ぬかるまいぞ」大八「合點ぢや」ト走り入る。又五郎「シテ野守之助殿が見える時は」源内「この源内はそこらは拔からぬ、かの金子諸共跡から參らう」林左「家來どもの用意」内より「ハア、」林左「豐後橋までこの儘に一時もはやう」源内「伊勢宇治でお目にかゝらう」せい宅「いづれも出立」又五郎「ござれ」トみな〳〵向へ入る、源内殘り。源内「これで落付いた、身共も何かの用意、さうぢや」ト奥へ入る、合方になり、大八（實は柏木善右衞門）金助（實は荒尾主膳）窺ひ出、顏見合せ。善右衞門「上杉家の家臣荒尾主膳殿」主膳「畠山大膳どのの家中、柏木善右衞門殿」善右「申合した通り、まんまと首尾よう」主膳「鎌倉にて新參の又五郎、某は國許にあつて面體しらぬを幸ひ、足利の侍と僞り、面體を變し又五郎、事によつて元の如くなしたれば、よも見損ずる事はござるまい」善右「して御用金貳萬兩の詮議はな」主膳「その詮議落著せねば、かれらは天下の科人、

金助「ハヽアあつぱれ貞女かな、か程の女が無道人と縁を組みしも、まことに業因、詮議の種に作歩きしは、はからざる是も因緣、未來は佛の緣にすくふよ、南無阿彌陀佛〳〵」お園「なむあみだぶつ」ト ゑぐり死ぬる。又五郎思入有り。又五郎「ハヽヽヽわが見る前に、ほてくろしい畜生を喰へあるいた犬侍、このまゝに歸ればよし、惡く詮議すると又五郎が刀の引導、女郎めと共に一蓮托生、思案の極めて返答せい、どうぢや」金助「ヤア身の程しらぬ極重惡人、うぬらが身を遁れんと、咎なき者の命を取り、九州へ迯下らん仕度、最前より樣子はきいたわい」又五郎「それ聞いたら生けては措かぬ」ト立廻あつて止める。金助「今討取るは易けれども、足利の御用金虛妄の大罪人」又五郎「何を」ト又切りかけるを立廻りあり。金助「のこらず召捕り、何かの詮議」又五郎「さうぬかしや猶」ト はげしく立ちまはりにて、又五郎を當る。金助「同勢をもつて召捕らん、代官所まで家來つゞけ」侍「ハア」ト侍付入る、奥よりみな〳〵出て。又五郎「南無三寶あいつをやつては」皆々「われ〳〵が身の大事、なんとせうな」ト大八鐵砲持出て。大八「氣遣ない、その思案して置きました」源内「大八、思案しておいたとは」大八「捕手のこぬ中、爰をぬけるがよい」林左「イヤ行く道々には定めて討手」大八「ハテ兵庫へ向けて出ると思ふあつちの不意、思ひがけなう道をかへて伊賀越に」又五郎「ハア、伊勢浦から舟にのり、西へまはり」

ひながら、わたしやお前が可愛しい故、今はの際に女房の意見聞き入れて、コレ申し善心になつて下さんせ又五郎さま、これ拜みますわいのう」又五郎「ハヽヽ、ぬかしたな、許嫁で候のと、味も見せずに女房よばはり、けちぶとい女郎めが」お園「さいな、お前の身は親々の勘當、おゆるしない中に枕はどうも交されませぬ、善心にさへなつて下さんすりや、しぜんと親親の御勘當も赦り、私もせめて未來は」又五郎「もういやぢや、汁氣の有る中はつれなくさらして、もうそろそろ佛顔、抹香臭い末の約束、いやぢやぞ、追つけくわいけい歡樂な身になれば、どのやうな女房妾めかけも持次第、ごくにも立たぬよまひ事ほざく手間で、早くくたばつてしまひをらう」お園「エヽむごい胴慾な惡心、その心から未來永々親子の勘當、未來も女夫にはならぬこの身、一生殿御の肌しらず、賽の川原で迷うであらう」又五郎「そりや奴が心からぢやわい」お園「イイエお前の惡心からとはいふ物の、しらぬ事とて夫の敵討うと思うた事で、かへつて夫の身の上を、私が訴人したも同じ事、冥途にござる父御樣や母御樣への云譯のこの自害、この上著は假の詰袖、こゝろの底は袖もえゝ詰めぬは、流石は貞女を守つたと、ほめて貰ふがせめての樂み、娑婆に心の殘らぬ身體は、未來へはやう南無阿彌陀」トゑぐる中、金助出る。「エヽ淺ましい、暇乞さへする人のないといふは、どうした因果な身上ぢやぞいの〳〵」ト大泣。

源內「門出を祝うて最前の蕎麥切りはな」林左「ア丶そりやもう冷切つてあるわいの」大八「所を蒸なほして返討といたすのぢや〳〵」林左「ナニ蒸なほしてかへり打の蕎麥切、ム丶こりや賞翫せざなるまい」源內「然らばいづれも樣」大八「マアござりませ」ト唄になり、みな〳〵入る、又五郎思入あつて。又五郎「それ」ト行かうとする、お園出で。お園「又五郎樣、吉左右變へてこりや何處へ」ト お園を引付け。又五郎「こな畜生めが」お園「これナアお前故心を盡す私を畜生とは」又五郎「ぬかすな、うぬはこの又五郎と親々の許嫁、これまでたび〳〵口說いても、成る樣でならぬ樣に隨はぬこそ道理、外に男をこしらへて、よくも身どもを馬鹿にひろいだな、二人連でこれへうせたは、事顯れる天命思ひしつたな、こな四ッ足めが」ト お園思入あつて。お園「そのいひわけはかう」ト自害する。又五郎「こりや云分なさにくたばるのか」お園「これ申し、けふ連立つて爰へきたは、事あらはれる天命と、わたしが身の事よりもお前の事、あらはれる惡事の天命としらしやんせぬかいのう、淺ましい、コレ人を殺す意になれば、潔ようその身を果すが侍の常、敵というて付覘はれ、卑怯未練に隱れ忍び、九州はおろか、唐土へわたつても、非道な事に人を害め、遁るゝといふ事があらうと思はしやんすかいな〳〵、なぜ潔よう腹切つて、流石は澤井又左衛門が子ほどあると云はれては下さんせぬ、小さい時の許嫁、惡人とはい

されてよからう」源内「われ〳〵はみな野守之助殿に頼まれ、又五郎を警護の役人」仙兵「安達仙兵衛」五右「九佐見五右衛門」團九「星合團九郎」喜平「八多喜平」源内「一旦圍まうた又五郎、討しては足利が昵近の銘々一分立たずとあつて、木にも萱にも意を置くゆゑこの仕宜、大八の無禮の段は」皆々「眞平御免しやれ」大八「ヤレ〳〵〳〵何の事ぢやと思うたら、この大八が性根玉を見るため、コリヤ皆が疑はしやますも尤ぢや、疑晴れて俺も男が立つといふものでエス」林左「此上は心置なく、なにかの內談」源内「荷物萬端の儀は」林左「しかとそちを」林、源「頼んだぞよ」大八「氣遣さつしやりますな、一旦頼まれたからは、たとへ命でもハテ親はなし子はなし、一門一家はなし、拳骨とりより大きな首、意氣づくならとつて行けぢやわいハヽヽヽ」林、源「イヤもう頼もしい〳〵」ト又五郎出。又五郎「大八が心底見えました上は、一時もはやく相良へ下る何かの手つがひ」林左「されば〳〵、夜舟で大坂へとは思へども、繁華の湊心許ない故、大八に云付け荷物ぐるめ銘々、空尻にて兵庫まで、あの方より舟をしつらひ下る積り」大八「そこで外の馬士は雇はず、俺が手下のやつらばかり、なんにもかも呑込まして置きました」又五郎「萬事の世話過分〳〵、明朝野守之助殿到著までにとおもへども、猶豫ならぬ足利の役人、うぬらすなほに歸ればよし、異儀に及ぶと手短に片付けて後から追付、いづれも出立の用意〳〵」

大八「ヤアこなた様は」林左「いづれもお引なされ」四人「ハツ」大八「こりやどうぢや」林左「不審もつとも」ト大八が手を執り、上座になほし。「ハア、さて〳〵驚き入つた丈夫のたましひ、泥中の蓮、新錢の中のかへ錢とはお身が事、その心底をよく察し、相良へ下る荷物萬端、この林左衛門は微塵さら〳〵疑はねど、野守之助殿より付けおかるゝ竹内贅宅を初め、山岡湊江なんどに仲間小者〆テ三十七人の事、いろ〳〵と評議まち〳〵、どう〳〵の大八こそ、生れながらの馬士、今にでも荷物をおさへられ、詮議に逢はゞいかゞあらん、ことに好物のくらひぬけ、酒に迷はされ、上戸の癖、もしこの漏もやせんと案じに胸も休まらず、所詮一心のすわりし所を見て、いづれも安堵させん爲、せまじき事とは思ひながら右の仕合、不骨の段眞平〳〵、誠や花は櫻木人は馬士、末世にのこる名こそをしけれ、其方が丈夫の魂にあやからば、たとへ靜馬政右衛門岩石の中を尋ね、鐵銅の内をさがすとも、やはか逃おほせいであるべきか、人ある中にも人なしとは申せども、馬士の中にも有れば有るもの、油斷のならぬ人ごころ、女按摩の蕁めが、間者であらうとは、且もつておもはぬ事、所をたつた一討に今の働き、これにて疑ひさらりとはれ、三拾餘の者共が眩みし眼を開かす大八、イヤもう〳〵大八〳〵と澤山さうに申すは勿體ない、けふから大八を地車ともたんじりとも御所車とも思ふぞよ、いづれも安堵な

つぱら踏貫くぞ」四人「イヤ慮外な奴の」源内「待つたいづれも、又五郎がこの旅宿に匿まひ有るといふ證據でもござるかな」喜平「ヤアいはれざる證據呼はり」四人「注進のものが確な證據」源内「イヽヤそりや證據にはなりますまい」トおかな出で。おかな「その證據はわたしでござんす」源内「ヤアわりや按摩のおかな、聾というたは」おかな「この事を聞出さう爲ぢやわいな」源内「スリヤうぬは間者ぢやな」おかな「靜馬樣の家來石留武助が妹、お主の敵を聞出し、靜馬樣へお知らせ申さう爲、聾というて宿屋〳〵に入込んだ効あつて、晝からの樣子何もかも聞いたによつておしらせ申したうても、靜馬樣は何處にござるやら處はしらず、どうやらと思ふ中にこの詮議、又五郎は此内におりまするに違はござりませんわいな」仙兵衛「サアかういふたしかな證據が出るからは、爭うても爭はれぬ、又五郎をこゝへ出せ」源内「サアそれは」喜平「下郎めそこのけ」大八「イヽヤのかぬ」五左「のかねば此中」仙兵衛「うぬらも同罪」源内「まつたくもつて」喜平「改めさすか」皆々「サア〳〵〳〵」四人「どうぢや」ト大八、源内が刀をぬきとり。大八「もう是非に及ばぬ」トおかなを一刀にきる。四人「うぬ女を手にかけたな」大八「オヽ殺さいでは又五郎殿の身の上、才まくつた女郎め、ばらする性根のすゑどころ、サアこの上は死暴ぢや、手次手にいつそうぬ」ト懸らうとする、長持の中より。林左「ヤレれうじすな、大八暫く〳〵」

點、可危い事せにや一足飛の出世になりません」源内「スリヤ命を投出して」大八「どう〳〵の大八は、エヽ男子でえすわいの」源内「ホヽ、頼もしい、スリヤこの荷物、そちにしつかりと預けたぞ」大八「あづかつたが最後、貧乏揺ぎもさすこつちやごんせん」ト此内表へ安達仙兵衛、八多喜平、九佐見五右衛門、星合團九郎窺ひ出て。仙兵衛「それ」トばた〳〵にて入る、長持へかゝるを大八みな〳〵投げ。大八「コリヤ何するのぢや」仙兵衛「この長持に詮議がある」四人「そこのけ」ト又かゝる、大八引退け。大八「さうはさゝんわい、東國西國股にかけて、馬士仲間で誰しらぬ者もないどう〳〵の大八が預つた此荷物へ、指さいたら命がないぞ」仙兵衛「ヤア慮外な下郎め」四人「われ〳〵を誰とおもふ」源内「していづれもさまは誰方でござります」五右衛門「舟岡山の城主上杉の家臣ぢやわい」源内「スリヤ上杉の御家來とな、詮議とは何の御詮議」喜平「鎌倉において渡邊靱負といふ者を討取、足利家へさし上ぐる正宗の刀を奪ひ立退たる澤井又五郎」團九郎「所々方々詮議する所、この旅宿に忍ぶ由」仙兵衛「注進の者あつて召捕に向うた」五右「又五郎はたしかに此中、ソレいづれも」喜平「合點でござる」ト大八引退け立まはりあり、長持の上へ上り。大八「寄りあがるな、預るものは半分の主、この長持は俺がものぢや、澤井とやら、たわいとやら知らぬぞ、オヽかう言出すからは知つても知らぬぞ、無理に詮議と御詫ばるとほて

又五郎「委細は後刻」兩人「御意得ませう」ト唄になり、金助お園思入あつて入る、又五郎殘り。
又五郎「貳萬兩の金の行端、般若坂の事までしつた奴、この儘にして措いては」トおもひ入、
源内大八兩方より出かけ聞いてゐる。源内「又五郎どの」又五郎「ヤコレ」トおもひ入、源内小聲にて。源内「又五郎どの、委細はあれから立聞いたしたが、世を忍ぶ貴殿の身の上より、差當る林左衞門殿の身の上が」又五郎「サア足利の御用金虛妄の樣子、事露はれては伯父貴の身の上」
源内「明早朝には野守之助殿、確に到著、彼奴が如何程吟味役でも、野守之助どの足利の昵近の儀なれば、少々無理でも權威をもつて都へかへすに手間隙いらず、どうぞ彼奴をたらしこみて明朝まで」又五郎「中々手延にならぬ、今宵の中に伯父貴を道まで」源内「持出す思案」又五郎「もしそれがいかぬときは、コレ」ト囁く。源内「合點でござる」又五郎「ぬかりめされな」ト唄になり、又五郎奧へ入る、源内跡見おくり。源内「なんでも急に此荷物を」ト大八つつと出て。大八「その荷物、わしが預りませう」源内「馬かた大八、あのわれがこの荷物を」大八「ハテ望みの所まで、きつと送り屆けます」源内「ムウしてわりや送る先、改めてをるか」大八「ハテ九州の相良ぢやごんせんか」源内「スリヤ最前からの樣子、われ〳〵が身のうへ」大八「世を忍ぶお前方としつて、一ばん往て見る仕事」源内「わりやさういへば、そちも身の上ぢやぞよ」大八「そりや合

いたす、盛直さつしやれ」又五郎「へ、ゝゝ打かけた割笄の片しは、こなたの髷に留めてある、けれう笄なればこそ、めつたに簪擇みも出來まい」金助「ハテ左右の手練驚き入つたが、吟味は此家に」又五郎「見事詮議を」金助「いたして見せう」ト双方刀おつとり膝立直す、お園思入。お園「これこちの人、イヤサこちの人、お前は大事の吟味、林左衛門に逢はぬ中は、譯立たぬ此場の仕宜、互に急いては爲損ずる大事の所でありさうなもの」金助「成程、負うた子に教へられて淺瀨とは此事、とんと吟味も遂げぬ中、理の高じたは非の百倍、既に食傷いたさうとしたわい」又五郎「いやがるものに無理に強ひるもいらざる事」金助「イヤ其の強ひるは此方から」又五郎「何を強ひる」金助「般若坂の死骸の懐中にのこし置いたる一通、今の筆勢と正しく同筆」又五郎「スリヤそれと」ト立たうとして。「これは」ト立れぬこなし。金助「イヤ驚かつしやるな、もしもの事も有らうかと、袴の裾は疊へ縫うておきました」又五郎「ム、」ト無念のこなし。金助「そりやすなはち其許の笄、うけとり召され」ト又五郎笄抜取る。又五郎「たしかに受取つたが、その一通り金子の事も」金助「せんぎは今晩中」お園「わたしが願も」金助「吟味の上で」又五郎「たがひの賄」金助「とるか」又五郎「とらぬか」お園「無事にをさまる」金助「思案の奥の間」お園「しばしのうちは」又五郎「休息めされ」金助「女房ども」お園「こちの人、エ、つつともう」

金助「二萬兩紛失は役目を預かる身共が過失、事も糺さず立歸つては、拙者が武士がたゝぬ、林左殿には御意を得、事を糺して罷歸らう」又五郎「なんぼ逢はうといはつしやつても、林左衛門は陰性の傷寒、人事を辨へぬものに逢うてから何の役に」金助「立つても立いでも、病氣ならば病床へまゐつて見屆ける拙者が配劑」又五郎「彼の不官金を摑まして是非とも逢はうと、召仕の者に賄賂の沙汰、イヤその手ぢや參らぬ、大病に違ひはないぞ」金助「さほど潔白な病氣に、又これこの通りの山吹菓子は、無事にこの場を歸つてくれと頼むの賂」又五郎「ぜひともに逢はしてくれよとの賂」金助「ハテおもひ合うた」兩人「事どもぢやな」お園「所詮今宵に分らぬ吟味、マアこの場は一旦」金助「イヽヤこの詮議たゞさにや措かん」又五郎「詮議をたゞす目的があるか」金助「目的といふは此家の内」又五郎「だまれ金助、能登川飯合川の新田は末代諸人を助くる勘辨、私慾の爲に斯程の工夫をあみ出さうかい」金助「スリヤ二萬兩の行端は知らぬとな」又五郎「しれた事サ」金助「しかとさうぢなナ」又五郎「二言といはゞ手は見せぬぞ」金助「その潔白な此家の中、茶菓子に出したこの金子は」又五郎「ヤナント」金助「壹兩〳〵に足利家の御用の極印、此家にはどうして」又五郎「サアそれは」兩人「サア〳〵〳〵」金助「なんと」又五郎「さう云やかう」ト手裏劍打つを、煙草盆にてうけ。金助「ふるいやつの、ちと夜食には喰べにくい、この樣な御馳走、箸擇み

仰付けられし所、未だ事至らざる中、同家中貴殿の舍兄櫻田林左衛門どのの工夫をもつて、早速成就せしはイヤハヤ天晴の智謀、末代のほまれ」又五郎「ハテ追従にや及ばぬ、いる事ばかりいはつしやれ、して吟味とはなんの吟味」金助「サアその新田成就いたし、末代の爲になる儀と申しながら、人夫のつもり惣高勘定、當時足利家より出たる金子二萬兩餘の不足、帳面の相違」又五郎「スリヤ貳萬兩の不足とな」金助「諸事吟味の役を承はりたる拙者が謬となれば、是非林左殿へお目に懸りたく存ずる所、お暇を申しうけ出國ゆゑ、所々方々尋ね廻るこの吟味」又五郎「ハテさて何をいはしやる、林左衛門兄弟は武士でござる、足利家の武士と思ひ詞を控ゆれば何といふのだ、その二萬兩の不足の金子は、林左衛門が虚妄といふのか」金助「イヤ左樣とは申さぬが、そこが吟味」又五郎「ヤア吟味とは誰を吟味、用金不足は役目を掠る貴殿の過、女に涎を流し、自身の口から武士道を辨へぬといふたは、こなたの胸を吟味しやれ、但し自身に吟味いたしては、關係合したふせう、この方から吟味してやりませうか」ト又五郎一通を出し。「譯立たぬといびたれ使者、眼の上瘤で見苦しい、これ持つて歸らしやれ」ト一通をわたす、金助とつて。金助「この一通は」又五郎「貳萬兩不足の吟味、病氣本腹次第きつと詮議たゞさんといふ日延を願ふ林左衛門が名判」金助「イヤこれ持てば猶歸らぬ」又五郎「なぜかへられぬ」

爰で勝負せうか」お園「サア勝負したいけれども、これでは又勝負もならぬ様で」金助「勝負せぬ間は女房サ」お園「サアそれは」金助「たつた今まで勝負したいと言うたでないか」お園「サア言うたは言うたけれど」金助「勝負せぬ中は何時までも身どもが女房サ」お園「エヽつつともう私が手にわしが身體が、合點がいかぬわいナア」又五郎「貞女兩夫に見えずと、たとへ五歳三歳にて縁を組み、その當前に打果てゝも、女は一生道を守るが武家の作法、二挺の弓を引く畜生同然、見下げはてた女も有るものぢやナア」金助「イヤさうも言はれませぬ、その畜類も恩はしる、犬も三日飼へば尾をふるのたとへ、恩義を忘れ非道をかまへ、迯あるく輩もあり、これらは又畜生にも生れ劣つた人非人、ナア女房ども、そんなものでないか」お園「常磐御前様はわが子の爲に貞女を破り、貞女の名を殘し給ふとやら、良人の敵を討ちたいと、表向は女房になつてもさらさら肌は汚さぬと、名を汚してゐる女房が、有るまいものでもござんせんぞえ」又五郎「賢を賢として色にかへよ、女に亂れず政道をたゞすが武士、足利の役目を受けながら、鼻毛よまるゝ御役人、何が吟味、詮議とやらも定めて他愛もない詮議でがな、ハテ色は諸道の妨ぢやナ」

金助「まことに大切の儀をはたと失念、先だつて譽田の家中唐木政右衛門といふ武士、算學に達し、能登川飯合川に新田をひらくべき工夫、足利家の御上意に依つて陪臣ながら政右衛門に

「して吟味とは何の吟味」金助「さういふ貴殿は」又五郎「櫻田林左衛門が弟甚五兵衛と申す者、林左衛門儀大病ゆゑの名代、用事あらば拙者に仰聞けられいサ」金助「スリヤ林左衛門殿の舎弟とな、左様ならば林左衛門殿も同然、今般この所へ拙者參つた仔細と申すは、先だつて御存じの能登川飯合川の新田の儀に付」又五郎「ナニ新田の儀に付いてとな」トお園氣をつけ。「それに見なれぬ女がをる、何者でござるな」金助「こりや拙者が女房でござる」お園「アイわたしは」ト互に顔見合せ」又五郎「ヤアそちは」お園「おまへは」又五郎「こりや」ト三人おもひ入。金助「女房共なんとした」お園「サアマア不思議なお前は」又五郎「これ〳〵女中、つひに近付でないぞ」お園「イヽエいな、お前は殺されてござつたではないか」又五郎「これは〳〵〳〵女中何をお言やる、つひに見た事もないぞ、一圓しらぬ存ぜぬぞ、しらぬと言ふからはマアしらぬにナア、ハテ近付ではないぞ」トお園いろ〳〵おもひ入あつて。お園「それで般若坂で、不思議なといはうか、やつぱりさうぢや」金助「ハアもう何時であらう、盧生が夢が縮まりさうな」又五郎「金助殿、アノ女はこなたの女房か」金助「いかにも拙者が妻、イヤもう恥しながら、御前勤の其外は、一向夫婦そばを離れた事もござらぬ、吟味にまゐる今日も、ぜひ付いて往かうと申す故、せう事なしに夫婦連で參つたてや」お園「イヽエイナ、これにはだん〳〵」金助「女房ぢや、ハテ女房ぢや〳〵、但し

うがの、さう聞いては一寸も待れぬ所天の敵」ト又きりかける、立まはり有り。金助「こりや急く事はない、是非今勝負といへば不便ながら返討」お園「エヽ」金助「サア今しばらくの用捨して、身どもを討たずばこれまで付添ひ來た詮もなく、義理もなく、未來の夫には何を手向けるぞ」お園「ぢやというて、五年十年役目すむまで待れうか、たとへ返討にあふとても」金助「イヽヤそりや無分別、たとへ病氣は長くとも、それがしが配劑、年を月に替へ、月を日にかへ、日を時にかゆる蘆生が夢五十年」お園「スリヤ程の知れぬ逗留も」金助「只一時の間とおもへ」お園「見ると聞くとは違ふといふのか」金助「ハテ唐土の一里は道六丁」お園「十年經てば」金助「仙人の一年」お園「一年立てば」金助「それがしが一とき」お園「スリヤ今宵中に」金助「うたれてやらう」お園「夜明の烏」金助「かはい〳〵の所天の敵」お園「必ず討つぞや」金助「マアそれまではやはり女房ども」お園「こちの人、もう何時で有らうぞいな」金助「サアレバ」お園「お茶あがるかえ」金助「ハテ鬼に成つたり佛になつたり、イヤモウからくり的を見る樣ナ、女房どもぢや」又五郎「イヤ足利のいびだれ使者には身どもが逢うて分立てうわい」金助「それ女房ども、不禮のない樣にしや」お園「心得てござんす」ト又五郎衣裳裃にて出る。又五郎「足利家のお役人松野金助殿とやら、まだこれにござるか」金助「イヤもう吟味落著いたす迄は、何時までもゐやうもしれませぬ」又五郎

敵を手ばなしてはといふたれば、それも道理、表向は女房と見せて、おれがそばを離れなといはしやんした故、その詞に隨がうて、あそこやこゝに詮議の先々、現在所天の敵のこなさんを、こちの人〳〵といふて、所々方々隨いてあるくのも、枕こそ交さね言號の所天の敵ぢや、首尾よく討つて冥途にござる爺樣や嚊樣に、よう敵を討つた、出來したと譽められたいばかりぢやわいの〳〵」金助「ハテ返す〴〵も不憫な志、そちが所天を討つた事、全く意趣意恨にはあらねども途中の口論、武士の意氣地、なんと般若坂の邊にてたつた一討、元よりわれは大切な詮議の役目を蒙むる身、後難をおもひ面の皮を剝取り、その場を立ち退かんとせし所へ、折よくもそちが歸つたはまことに夫婦の緣といふもの、女ながらも義を守り、枕もかはさぬ所天の敵を討たんといふ志、返討にするは本意ならず、役目だに相すまば、討れてくれんと約束せしは武士の情」お園「ぢやによつて、今こゝで所天の敵」ト又かゝるを。金助「マテ今聞く通り、やう〳〵詮議の綱に」トあたりを見て。「サア役目しまつた上、討れてくれうといふ武士の詞に二言はない、今暫く辛抱せい」お園「イヽヤそりや僞ぢや」金助「なんと」お園「ハテ今あそこから聞けば、詮議するその人は大病、たとひ五年十年でも、本腹するまでは逗留するといはしやつたは、この詮議を云立に、敵討を引のばし、これなりけりに濟まさうといふ心で有ら

はねばならぬ、まこと正氣づかぬといへば、たとへ五年十年でも、本腹するまでは此座は動かぬぞ」十兵衛「でも」金助「この通り取次いたせ」十兵衛「ハイ」トうぢ〳〵する。金助「はやく取次いたせといふに」トきつといふ、唄になり、十兵衛入る、金助思案の中お園窺ひ出で。お園「申しこちの人」金助「オヽ女房ども、退屈に有らうの」お園「もう御役目はすんだかえ」金助「イヤすんだでもなし、すまぬでもなし、マア暫時の内休息してゐや」お園「イエ〳〵、あれから様子荒まし聞きましてござんする、もう〳〵休息してゐられません」金助「なんと」お園「をつとの敵」ト切かけるを立まはり有り。金助「ハテ性急な、役目首尾よくすんだ上、討れてくれうといふでないか」お園「その詞につらされて、今まで待つた夫の敵」金助「火急に討うと云ふ譯は」お園「エヽこな様はのう、私が夫は世を忍ぶ身、日外南都にてこなたが討つた其場へわしが戻り合はせ、たとひ返討にうたれても、夫への貞心見せうものと、勝負して下さんせというたれば、女の身で良夫の敵の勝負せうとは天晴貞女、返討に討つも不憫なこと、なるほど夫の敵潔よう討れてやらうが、しかし主人の御意を承りながら、大切な役目が有る、それさへ仕舞つたら直に討れてやらう程に、聞分けて待つてくれと、情を籠めた武士の詞、深切なこゝろざしに愛でて、成程討れてさへ下さんすなら、役目すむまで待ちませうとはいへ、

ばなりませぬわい」ト振切り走り入る。金助「ヤイ〳〵〳〵、ハア取逃亡命と出をつたな」ト此内、十兵衛菓子の折を持ち出で。十兵衛「はて御退屈にござりませう、これ麁相な御菓子でござりますれど、お慰みに召上られて下さりませう」金助「ムヽして林左殿は逢はうとの事か」十兵衛「サア氣の毒にござりますれど、一向正氣ござりませぬ」ト此内、金助金を手に持ち。金助「だん〳〵と取次太儀であつた、これは些少なれども、身共がこれへまゐつた手土産ぢや、うけてくりやれ」十兵衛「エヽ」金助「貴様は林左殿の氣に入と見える、たとへ正氣が付かいでも、是非逢はねばならぬ儀ぢやゆゑ、事を分けて頼むぢや」十兵衛「これはどうやらつほさん用で」ト思入。金助「みやげが餘り些少ならばコレ」ト又小判をやる。十兵衛「イエこれば鈍な、先を懸けられたやうの臺詞ぢや」金助「先をかけたとは、どういふ仔細ぢや」十兵衛「イヤ只今のお茶、おあがり下さりましたかな」金助「イヤもう御意得ねば此身の云分が立たぬとおもへば、茶も咽へ通らぬわい」十兵衛「イエ咽を通るやうなお茶ぢやござりません、この菓子も御一緒にどうぞ召上げられて下さりませ」金助「何樣、やうす有る茶菓子とな」トふたを取り。「この金子は」十兵衛「サア病氣で正氣のつかぬ林左衛門、何卒一旦な御歸り下さりませと申す」金助「默りをらう、金銀に眼がくれ、大切な役目を麁略にするやうな武士ぢやないぞ、是非どうあつても逢

かすか」おかな「あぢやらにもそんな事しては、歸んで嚊樣に叱られますわいな」金助「ナニかよ樣に叱られるとは」ト又手を取らうとするを振切り。おかな「みだらな事は、エヽ致しません」トぴんとして入る。金助「何の事ぢや、猥褻な事はエヽ致しませんといつて、ハテわけのしれぬ女ぢやわい」ト思入の中、うちよりハイ〳〵と傳內出ようとするを。「コリヤ〳〵そちやなにものぢや」傳內「ナイ〳〵、身どもは鑓持の傳內と申す者でござります」金助「ナニ傳內、ハレよい名ぢや、一寸來い〳〵」傳內「ナイ〳〵」金助「身どもは林左殿に一寸御意得ねばならぬ、足利家の御疑ひうけ、甚だ難儀いたしをる故參つたが、大病と有るが、よもや一言も物のいはれぬ病氣でもあるまいがな」傳內「イヤもう旦那は一向夢中で、今の間もしれませぬ」金助「ナニ今の間もしれぬとな、ムヽ今もしれぬに醫者衆も見えぬは」傳內「エヽ」金助「ハヽヽハテそちは忠義なものぢやな、林左殿が身共に逢うてはむづかしい事もあらうかと思うての病氣か、ハテ何でもない事ぢや程に」トこの內傳內、ばやう行きたいこゝろ。「こりや有樣にいうて聞かせい」トいひ〳〵小判を握らす。傳內「ネイ〳〵これはありがたうござります」金助「サアどうぞお身が取成して、林左殿にあはれるやうに、こりや賴むは〳〵」傳內「賴まれたうは存じますれど、旦那の病氣は」金助「作病で有らうがな」傳內「命乞の代參に、勢州かち多賀へかけてまゐらね

まはりて肩衣を脱がさうとする。金助「ヤア〱、こりや何する」ト肩衣を直す。おかな「そんならやつぱりこの形でかえ、とつと裃ぐちは揉み難いものぢや」金助「何ぢや、肩を揉んでくれるか、ハテうい女、これも林左殿が肩でも揉んで隨分氣に入れなどと、身どもに機嫌を取るのか」おかな「今夜はきつう冷えまするな」金助「ハテ傍道へすべらすな、林左殿の病氣の譯いうたとて、なにも爲に惡い事ではない、林左殿に逢はねば、身共が武士が立たぬ事が有るから、この樣にいふのぢやわい」おかな「強う肩が凝つて有るさうにござります」金助「サアその心遣で肩も凝る筈、樣子をいうて聞かしさへすりや、肩の支もさらりとさがる、もう〱しんどいのに措いてくれ〱、太儀であつた、もうよいといふのに」おかな「もう可うござりますかえ」金助「よいとも〱、よいついでに言うて聞かせやい」ト又小判をやる。「何も遠慮する事はない、これ取つておけ」ト金をもたして。おかな「イエ〱、上ばかりにこの樣にお金は入りません」金助「サア上の事ゆゑ、いひ難いは道理ながら、有樣にいうて惡い事ではない、こりやよいものぢや、早く樣子をいうてきかせい」ト手を取りいふを、惚れたかといふ思入有り。おかな「お志忝うござりますれど、お武士樣には似合はぬ」金助「何が似合はぬ」おかな「金づくでそんな事しさうな女子ぢやと思うてかいな」金助「ハテたてるな〱、然らば金はやるまいが、いうて聞

金助「ナニ林左どのは御大病となアノ大病、ハヽヽ成程はや大病でありさうな事ぢやが、たとへ大病であらうが、正氣が有るまいとまゝよ、是非御意得ねばならぬわけ、拙者が武士の立たぬ儀なれば」十兵衛「どのやうにおつしやりましても一向」金助「ハテさて、マアさういうて案内しやれ」十兵衛「ハイ左樣ならその通り」ト迷惑さうに奥へ入る、金助四邊見まはし思入の中、おかな茶を持ちいで。おかな「お茶あがりませう」金助「イヤ構やるな〳〵」ト思入有り、懐より金を出し、おかな往かうとするを。「こりや〳〵」ト手招きして。おかな「ハイ」ト茶碗を下に置き寄る。金助「そちや召仕か、林左殿には病氣と有るがまことか、たゞし又、身共に逢ふまい爲か」トいひ〳〵手を取り、小判を握らし。「どういふ品ぢや、こりやよい者ぢや有樣にいへ、どうぢや」トおかなは小判をとつて不思議なこなし。「何も不思議な顏する事はない、それで何なりとも望みな物を買へよ、エヽ正直さうな顏ぢや、何でも有樣にいうてきかす風俗ぢや、よいものぢや、サア〳〵」トおかな、これで按摩とれといふ事と合點して。おかな「エヽなんのこれで」金助「いうて聞かすか、どうぢや〳〵」おかな「イエ〳〵、此やうには要りません」金助「ハテ簪でも買うたがよい、病氣か〳〵」おかな「上下で二十四文でござります」金助「なんぢや、女の身で社杯を買ふか、何をいふやら、サアどういふ譯ぢや」おかな「ハイ〳〵」トいひ〳〵背へ

金助と申す者」十兵衛「ハア、その侍様が何の御用で御出なされた、委細の様子を」金助「イヤその儀は櫻田林左衛門殿に御意得ねばわからぬ儀、何は格別其方は御内衆か」十兵衛「イヤ私はお出入の者でござります」金助「然らばちと頼みたい儀が有る」十兵衛「イヤ何事でござりますな」金助「イヤ別の儀でもないが、仔細あつて身どもが妻女をめし伴れたが、大切な役目について參つた某、女を膝許に置くもいかゞ、何處ぞ勝手の部屋があらば暫時休息いたさせてくりやれ」十兵衛「ヘエお伴とおつしやるはあなた樣でござりまするか」お園「ハイちつと叶ひませぬ事で、主と連立ち參りましてござります、何處ぞ邪魔にならぬ所に置いて下されませ」十兵衛「ハイ〱、したがこゝは貸座敷の事でござります、ことに私も先程參りまして、内の勝手は存じませんが、たしかにあの間が茶の間でござります、マアあれへでも御出なされて御休足なされませ、御家來衆あれへ御供なされませ」金助「然らば御詞に随ひ、あれへまゐつて休息しやれ、家來こゝに用事はない、女どもを連立ち其方達も暫らく休息いたせ」侍「ハア、」お園「そんなら左樣いたしませう、御用お仕舞なされたら」金助「ハテ物數いはずと休足しやれ」ト お園 侍 つれ立ち奥へ入る。「サア林左どのに急に御意得ねばならぬ事、大儀ながら案内しやれ」十兵衛「イヤ〱林左衛門樣は、此間から殊の外の大病でお逢ひなされましてから、一向正氣はござりません」

ば心が落付く、然らば暫時も早くその藥をのんで」又五郎「半時の間に元の通りぢやが、今にも吟味の役人來らば」源内「ハテ都武士の性根へつけこみ、賄賂で面はつたらば半時や一時は」ぜい宅「それ〳〵兎角攫ますが當世でござる」林左「出迎ひ取次は幸ひ呉服屋十兵衞、給仕には聟の娘、身どもはこゝへ隱れて逢はぬが上分別」ト長持へ入る。源内「サア又五郎殿、いづれも奥へ」又五郎「どりや人間に成らうわい」ト唄になり、みな〳〵奥へ入る、松野金助お園侍連れて出で。お園「申しこちの人、一體こゝは何といふ所でござります」金助「こゝは伏見といふ、これより都へは三里、又日本の大湊、かの大坂へは十里の道程、京大坂の用事を整へる所故、こゝも甚繁華の地ぢやてや」お園「そんならこれから都へはたつた三里でござんすかえ」金助「いかにも」お園「定めて都は結構な處で有らうがな」金助「これサうか〳〵とそりや何をいふ、都足利家に勤める身を以て、都は定めて結構な處で有らうなどとは、イヤハヤなんぞ片山陰からも來た樣にハヽヽ」お園「ホヽヽほんに私とした事が、いかに鎌倉者ぢやというて」金助「ハテまだいの、惣體女房の、餘り物を言ひ過ぎたはよくない事ぢや、嗜みやれ〳〵、ナニ家來ども、この宿屋へ案内せい」侍「ハツ賴みませう」十兵衞「どおれ」トいづる。金助「罷り通る免さつしやれ」十兵衞「これはどなた樣でござります」金助「拙者儀は足利家譜代、山手海手を吟味の役人松野

て」ト此内久兵衛蕎麦を荷ひ、孫八門口に付いてゐる」うどん屋「ハイお誂の晦日蕎麦、だしはこの徳利にござります」源内「徳利どころか、胸の蟲がのぼつてある、細言ぬかすと手は見せぬ」うどん屋「ハイ〳〵、蕎麦切持つて來て、そばづゑに逢はうとした、やれ氣味のわるい」トいひ〳〵迯げて入る。林左「なんでも身どもは逢はれぬが」源内「ぢやというてわれ〳〵は猶逢はれず」皆々「ハテどうした物であらうな」ト長持より又五郎出る。又五郎「騷ぐまい、仕やうが有る」ぜい宅「ヤア化性の者か迷ひの者か、正體をあらはせ」又五郎「ハヽ贅宅老、身どもをしらぬかいな」ぜい宅「イヤ化物に近付はもたぬわい」又五郎「コレサ澤井又五郎でござる」ぜい宅「ヤアどうしてお身が又五郎ぢや」又五郎「癩病となる毒藥を服して世を忍ぶこの姿」ぜい宅「ハテナア」林左「又五郎咄は後で、急の手詰、しやうが有るか」又五郎「伯父者人氣遣ひせまい、鎌倉で生れて外見ず懐子のこの又五郎、逢うてやりませう」ト孫八思入あつて走り入る。林左「アヽその姿で足利の役人には」又五郎「イヽヤこの姿を元の姿に直す妙藥も爰に有る」林左「アノその姿を早速なほす妙藥があるか」又五郎「癩病村の祕方、半時にして形替り、又藥を飲めば半時の内に元の姿、長持の内より聞けば、野守之助殿が見え次第、明日は相良へ下るこの身、晝の間は長持住居なりや世を忍ぶは今宵一夜、時の用には癩病も元の姿に戻らうわい」林左「成程〳〵、お身が逢うてくれよ

も叶はぬ難所、他所より入り來る舟もなく屈強の所、すなはち巡見の御役目なれば、野守之助殿が御内通なされんとの儀と、途中の程心許ないとあつて、拙者に相良まで同道仕れとの事故、罷登りましてござりまする」林左「御深切忝うござりまする」ぜい宅「第一おたづね申したいは、この儘にても同勢凡四十人ばかり、此上野守之助殿お越しあらば五六十人の同勢、相良へまゐる道すがらも、どうで金づくめ無作法ながら路用の御心當はよくござりますかな」林左「其儀は貳萬兩餘り所持いたしてござる」ぜい宅「ナニ貳萬兩餘りは、ハテ夥多しい御用意でござるな」ト傳内はしり出。傳内「お旦那〳〵」林左「傳内か幸ひの客來、蕎麥はどうぢや、先づ落付に晦日蕎麥をさし上げませう」傳内「アヽ蕎麥所ぢやござりません、一大事を聞いてまゐりました」皆々「ナニ一大事とは」林左「靜馬政右衛門がこの邊にか」傳内「そんな事ぢやござりません、足利から何やら御用金の詮議があるというて侍がまゐりました」林左「ヤア〳〵アノ足利家より用金の吟味とは」ぜい宅「覺えがござるか〳〵」林左「唯今まだ貳萬兩、舌も引かぬ中に」皆々「ヤアヤ」林左「拙者が逢うては事むづかしい、どうぞいづれも」源内「イヤ逢ふ分はかまひませぬが、足利家の侍とあれば、われ〳〵を見知りをるは必定」常藏「かう並んだ者どもは、みな足利昵近のゆかりなれば」善平「逢うては結句むづかしい」ぜい宅「拙者とても其通り、こりやどうぞし

ませう」トはいる。眾藏「これは先生、よくお越しなされました」林左「ぜいたく老には、遠方御苦勞に存じます」ぜい宅「これは〳〵林左殿、イヤ早速ながら」トあたりを見るこなし。林左「こりや〳〵大八、事によつたらば急に出立の程もしれぬ、何角申付けた通り、よいか」大八「ハイ馬もしやんと備へてござります、何時なりとも」林左「オヽよし〳〵、汝等はそれ勝手へいて酒でも飲んで、餅でも喰うて、あつく茶粥でも啜つてまつてゐよ、はやく〳〵」大八「ヘイ〳〵、みな來い〳〵、何ぢやむしやうに飲食せいといはるゝわい」馬吉々「サア勝手へいかうわい」大八「五郎よ、わりや馬に裾したか、みよ秣は無かつたか、藁など提げて來いよ」トわや〳〵いひいひ入る。十兵衛「ハテ騷がましい馬士共ぢや」ぜい宅「林左どの、まだ女が一人」林左「イヤ〳〵この女は一向の聾、この伏見の宿屋々々、或は旅宿の貸座敷などを廻る按摩取、この程よりちよこ〳〵參つて、よく心も存じたやつ、お心遣御無用〳〵」源內「其外は皆同心のわれ〳〵、シテ野守之助殿には御到著でござるかな」ぜい宅「されば〳〵、野守之助殿には鎌倉表の用事萬端仕て、明朝は大方御到著でござりませう」十兵衛「野守之助樣は、此度九州巡見のお役目、お出入いたしまする私は、九州相良の生れ、右私にあの地の御案內せいとの事でござりまする」ぜい宅「鎌倉において昵近の方々、いろ〳〵と評判有りし所、又五郎殿を匿まひ、九州の相良は馬

のぢやな」林左「どんなものゝ、こんなものゝと、論ずる事に足らぬ、もつとも唐木は神影、身が流儀は違うてあれども、眞逆の時、流儀といふは只一心ぢやわい」大八「なんの事ぢや、そんな珍紛漢はどちらが強いのやら、わけがしれませんわいの」林左「たとへていはゞ唐木は鼠、身どもは虎サ」大八「まだ合點のいかぬ、鼠と虎と噛合うた事はないもせんもの」源内「こいつ呑込の惡い、高で猫にさへ取らるゝ鼠、虎の勢に勝つものはないわい」大八「それでも和藤内にはかなやしよまいがの」皆々「ハヽヽ」おかな「なんと申し、こたへまするかえ、もそつと強う致しませうかえ」林左「中々よくこたへるぞや」ト腕をさし出す。おかな「アイ〱」トもむ。栄蔵「申し先生、中々綺麗な按摩、よい娘でござります」林左「さればよい容貌なれども、皆目聞えぬ鐵聾、何を云つても片便ぢやてや」善平「あつたら娘を聾とは、惜いものでござります」源内「ハテ榮耀らしいつんぼか、そこらあたりの構になる者ではないわいの」大八「ハア兵法が柔道になつた、可愛や誰ぞが餌食に成りをるであらう」皆々「ハヽヽ」ト笑ふ所へ竹内ぜい宅、呉服屋十兵衛出る。十兵衛「たしかに爰でござります」贅宅「案内しやれ」十兵衛「ハイ〱御免なされませ、卒爾ながらこの旅館に、ホウ源内さま」源内「呉服屋十兵衛でないか、よく來やつた、シテお身ひとりか」十兵衛「イヤ竹内贅宅様と御同行申しましてござります」ぜい宅「いづれも御免下さり

なものぢや」源内「雙方互角の勝負、さて〳〵見事でござる」善平「これは御褒美の御詞」粟藏「かたじけなう存じます」馬士大八「なんと皆のもの、兵法といふもんは、何ぢやむづかしい事をいふもんぢやないかい、とんと喧嘩の跡で法談聞く樣なわい」皆々「ハヽヽヽ」ト笑ふ。大八「ほんに兵法で思ひ出した、此間馬貸での咄、大和の國の、アヽなんとやらいふ處にえらい兵法づかひがあるげなて」源内「ナニ、大和國で名高き兵法師とは、こりや滅多な事いふな、このお人の事ぢやわい」大八「ハヽアアノ旦那殿の事かな、これはしたり、しらぬ事とて、今は大和の國を立退いて、方々あるいてゐらるゝとの事であつたが」林左「されば、樣子あつて大和を立退き、今は所々方々いたしてをるが、はや世間の人がしつて、劍術名人の評判するナ、ハテ惡事千里かと思へば善事千里ぢやな」粟藏「イヤもう貴公の劍術、日本に誰しらぬ者もござりませぬ」大八「人はしれぬものぢや、旦那殿は大坂堀江といふ所で、芝居の座本さつしやりましたの」林左「こいつ何を吐す、身どもを役者ぢやと思うてをるか」大八「隱さつしやりますな、旦那殿の大和にござる時、荒木といひませうがの、荒木なら堀江の座本ぢやわいの」源内「われや大和の劍術者といふは、荒木が事か」大八「たしかに荒木とやら、唐木とやら聞きましたて」源内「ハハアこりや林左どのゝ儀ではないか」大八「なんと其の唐木といふ和郎と、旦那殿とはどんなも

ひの寄合を、どうぞ見たいものでござりまする」うどんや「ハアお前もエイヤツトウがいきまするか」孫八「イヤ行くといふ程の事はないが、根が好ぢやで」うどん屋「いま行く所は、此間から毎日兵法がござります、こちらも饂飩や蕎麥をもつていては見て來やんす」孫八「さうしてマアそりや何處の家中で、名は何と云ひまする」うどん屋「サアレバ、アヽなんとやら、中でもいつち上手分の人は、たしかに林左とやら聞きました」孫八「アノ林左、ハアヽ」うどん屋「どりや待つてゞ有らう」ト荷をかたげる。孫八「もしその中に癩はなかつたかのう」うどん屋「滅相な、癩病に棒打するやうな兵法があるもんか」ト云ひ〳〵連立つて幕の中へ入る、トハアトいふ聲にて幕開く。

造り物、世話襖、西折廻り障子、門口に薦包の荷物大分包み有り、眞中に長持直し有り、その傍に林左衛門脇息に懸りゐる、按摩おかな肩揉んでゐる、山室榮藏、湊江善平竹刀打の體、川角源內、馬士大八見物してゐる、勝負有ると馬士皆々笑ふ。

榮藏「ヤイ〳〵何を笑ひをる、勝つ事があれば負る事もありうちぢやわい」馬士「でもきつい負惜みの」源內「榮藏殿、今の太刀捌は餘程しどろに見えまするぞや」林左「今一度立合うて見さつしやれ」善平「サアまゐりませう」ト又竹刀打になる、榮藏、善平を打すゑる。榮藏「何とどん

外者めが」孫八「御尤〳〵」ト笠をぬぎ。「行當つたは此方の不調法、御免なされ」トいひ〳〵顔をながめ、見たやうなといふこなしにて。作藏「此奴なんだ氣味の悪い、もう了簡してやるべい、とつとゝうせう」トいひ〳〵入る、孫八合點のゆかぬこなし、此間に奴傳内幕の内より出る。傳内「オヽ作藏今か〳〵」作藏「オヽ傳内、われやどれへ行く」傳内「オヽ饂飩屋への御使だわい」作藏「蕎麥をやつて行こか」傳内「オヽ三十日蕎麥を十人分いうて來るさ」作藏「そんなら旦那ばかりで、俺が口へは入らぬかな」傳内「しれた事、俺は蕎麥切より引ッかけるがよいわい」作藏「俺もさうだ、こりや序にだしがらを貰うてこよ」傳内「オヽサだしがらで飲むべい、早く歸れよ」作藏「オヽはやく戻ろよ」トいひ〳〵作藏は、幕の内へ入る。傳内「蕎麥がつい打つて有ればよいが」トいひ〳〵戸屋の内へ入る、孫八思入あつて跟いて入る、ト傳内戸屋の中より引かへし出て。「作藏めが待つてをらう、したがだしがらは切れたとぬかす、いま〳〵しい饂飩屋めだ」トいひ〳〵元の所へ入る、久兵衞饂飩屋の箱を提げ出る、跡より孫八つき出て。孫八「うどんやも急がしい商賣でござりますな」饂飩屋「イヤもう常は此樣にもなけれど、今夜は晦日蕎麥で、この樣に急がしいのぢや、やれしんどや」ト荷をおろしやすむ。孫八「今持つてござりますは、かの話の武家方の旅宿ぢやの」うどんや「アイさうでござんす」孫八「その兵法づか

十一段目ヨリ大切マデ

一うどんや久兵衛	久五郎	一呉服屋十兵衛	金十郎
一山室榮藏	正藏	一安達仙兵衛	音藏
一星合團九郎	龜藏	一湊江善平	三藏
一八多喜平	喜十郎	一九佐見五右衛門	瀧十郎
一萬屋喜右衛門	正五郎	一やつこ傳内	龜十郎
一同作藏	次郎兵衛	一川角源内	桐山紋次
一鑓持權介	桐山紋次	一娠按摩おかな	市川吉太郎
一おその	尾上粂助	一竹内ぜいたく	松本次郎三
一池添孫八	嵐三十郎	一櫻田林左衛門	中村次郎三
一渡邊靜馬	澤村宗十郎	一澤井又五郎	淺尾爲十郎
一松尾金助	中山來助	一馬かた大八	中村歌右衛門
一唐木政右衛門	中山文七	一馬士	
一侍中通り		一部屋	
一侍大勢			

十段目の道行終つて、幕の外へ奥𨻶口の方より、孫八六部の形にて花道へ出る、戸屋の内より奴作藏合羽駕籠かたげ、草鞋三十足ばかり持ち出る、花道の中程にて擦違ひに行きあたり。

作藏「ヤイ何さらすぞい」孫八「御免なされ、暗紛れ意が急きます」作藏「こゝろが急けば行當つても大事ないか」孫八「サそこが此方の麁相、御免〳〵」作藏「御免ですむかい、笠を著ながら慮

ト此内向の方にて、大勢の男、ありや〳〵といふ音する故。お袖「たしかにアノ追手は親方さん」靜馬「見つけられては互の大事、一先こゝを退いてたも」お袖「とはいひながら」靜馬「はやく行け」トきつといふ。お袖「アイ」ト向へ走り入る、橋懸より一德、男みな〳〵お袖を尋ね出て、靜馬を見てこなしある、靜馬睨みつける故、こは〴〵恐れ奥塀口の方へ入る、トばた〳〵にて花道より池添孫八、六十六部の形、捕手大ぜいと立しい〳〵、跡より鑓持權助つき出る、ト此内靜馬稻村の脇へ小隱れする。權助「うぬは正しく政右衛門靜馬が家來と見た、ソリャ」大勢「合點ぢや」孫八「うぬらは何奴ぢや」權助「櫻田林左衛門樣の家來たるわれ〳〵、靜馬政右衛門が由緣の者と見るならば、人違でも苦しうない、討つてとれとの仰せゆゑ、下知を受けたる鑓持權助、サア尋常に勝負〳〵」淨「しようぶ〳〵と追取まく。ト大勢の組子、みな〳〵孫八にかゝる、この時靜馬も出て、權助みな〳〵を相手に激しく立あつて、みな〳〵を追込む。孫八「しづま樣か」靜馬「孫八か」孫八「シテお旦那政右衛門樣には」靜馬「この山道を左手へ、追分にてお目に懸る筈、そちは先へまはつて右の樣子を」孫八「そんなら私は先へまはつて」靜馬「はやく行け」ト孫八向へ走り入る。淨「わかれてこそは。三重 ト孫八向を見送る。

幕

に、祇園町へ賣渡され、夫の爲に流れの身、思ふ夫に逢ひたいと、夜道をひそ〳〵辿りくる、山道づたひに。トお袖頬被、抱帶傾城の形、花道よりひそ〳〵と出て。お袖「嬉しや今のは親方さんではなかつたさうな」トこなしあつて。「はる〴〵と鎌倉から尋ねて來たかひもなう、靜馬樣の御爲とは言ひながら、祇園町への勤奉公、親方さんや朋輩衆の氣兼はおろか、どうぞ靜馬樣のお顏がたつた一度拜みたいと、亡命して出ては來たれども、今頃は何處にどうして居さんすやら」淨『ついいふ事も廓馴れて、君をおもうての獨語、憂ひ催す旅寢の空。ト向より靜馬、旅虛無僧の形にて、尺八を持ち、そろ〳〵と出て來て、本舞臺にて顏見合せ。靜馬「ヤア、そなたは」お袖「おまへは」靜馬「何故にかゝる所にたつた一人。これには定めて樣子があらう、サアサアどうぢやいのう」お袖「何をとは胴慾な、たつた一目お前のお顏が見たさに」靜馬「それ故の驅落か、テモ。未練な。とはいふものゝこの靜馬が眼病故に、しほらしいそなたの勤、可愛いは甥の巳之助、わし故の切腹、政右衛門殿の計略とは言ひながら、朝夕思ひ出す事ばかり、しかしながら、おのれ澤井又五郎、おつつけ首尾よく敵討おほせ、めでたう歸國致した上、又改めて二度の祝言」お袖「デモそれが何時の事やら」靜馬「おつつけ敵又五郎を討課せるまで、マアそれ迄は辛抱しや」お袖「アイ」淨『とはいへど女氣の心細くも抱付くを、振放し。靜馬「未練な事を」

造り物、淺黄幕にて、橋懸は並木の板松所々にあり、小鳥雀數多あつまり、コイヤイ打切る、ト幕あく、百姓二三人連立出て、いろ〳〵捨臺詞あつて。

△「夕は村はづれの定が處での遊び事、おいらは今日仕合が悪かつたわいヤイ」□「それいヤイ、隣在所の藪醫者め、彼奴よい仕事をさらしくさつた、したがこの樣な事と思ふなら、宵から内に居て嬶を抱いて寢やうなら、結句面白いめをするであらうに、眠い目を夜通しに、サテ〳〵苦々しい事であつたわい」○「サア〳〵早う内へいんで、おりや直に朝茶腹で、田畑へ出かけぶねぢや〳〵」トこの樣な事いひ〳〵、奥堀口の方へはいる、ト向より一徳親方の形、半合羽に一本ざし、下男二三人、一とくといふ提燈點し、うろ〳〵とお袖を探し思入にて出て來て、本舞臺へ來て。一德「テモ太い奴ぢや、殘る所なく探せ〳〵」男「こゝろえました」ト方々稻村の間、又並木の邊をさがす、こなしあつて又兩方へ別れて入る、一德一人殘りゐる、又引かへし奥堀口橋懸より出て。下男「田道畦道いろ〳〵と」同「さがしましても」同「そこら邊には見えませぬ」一德「然らばアノ山傳ひに、一ト探し致さう、身についてかうまゐれ」三人「ハア、」ト狂言師のやうな捨臺詞あつて、一德に付添ひ、男三人橋懸へ入る、トチヨン〳〵にて淺黄幕切つておとす。浮るり『戀しさに、はる〲國から尋ね來て、思ふ殿御に引別れ、君の顔さへ得見ず

弟」政右「おのれが忍びをるからは、推量違はず最前の侍は又五郎であつたよな」ト侍をおさへる、侍苦しむ體。靜馬「そんなりや又五郎は疾から此家に」政右「居るをしらずに取逃したり、殘念なわいやい」トおさへた侍突放す。侍「いづれもこれへ」ト奥より門弟三人出て。三人「靜馬政右衛門、返討ぢや、觀念をせい」トきりかける、四五人相手にして靜馬立まはり、四五人追込む。お種「靜馬そなたは眼が見えるかや」ト靜馬、正宗の刀をいろ〳〵と振廻し見て。靜馬「兩眼ともに明に見えまする」政右「まことに妙藥の驗」お種「巳之助が孝行」靜馬「女房が深切」政右「天の惠にかなうたか」三人「エ、かたじけない」ト内より二人出て、政右衛門、靜馬に切付ける、兩人一人づつ胴切にする。お種「あつぱれ正宗の切味」政右「拜領の鐵味」靜馬「政右衛門どのお先へ」政右「がつてんぢや」ト尻からげる、この氣味合よろしく。幕　トこれより十段目道行にかゝる。

十段目道行

一とく　三藏　一鐘持權助　桐山紋次
一おそで　中村槌五郎　一池添孫八　嵐三十郎
一しづま　澤村宗十郎　一細子大ぜい
一くろわのもの三人

ゐましたが、可愛さうに年端もいかぬ巳之助が、眞實の事とおもひ、腹を切つて死んだ心のいぢらしうていぢらしうて、身も世もあられぬわいな、まだ其上に、死んだ跡では矢張お前や私が子にしてくれといやつたからは、冥土の道も迷ふぢやあらうと、それぱつかりが悲しうて悲しうてわが子の死ぬる其の下に、顔さへ見ずにお念佛ばつかりで泣いて居りましたわいナア」ト大泣き、このうちに政右衛門、鉢へお種が持つて歸りし藥を入れ、巳之助が血を絞り込み、靜馬が前におく。政右「サア靜馬、この妙藥を飲みやれ」靜馬「いかに私が病氣を治したいというて、お袖が身の代の金で調へたこの藥、巳之助が血汐、コレガなんと飲れませうぞ〳〵」ト泣く、政右衛門きつとなり。政右「政右衛門意を碎いたこの藥、飲まぬといふのか」靜馬「それでも現在」政右「眼病本腹せいでも大事ないか」靜馬「サアそれは」政右「敵を討たいでも大事ないか」靜馬「サアそれは」政右「サア」靜馬「さうぢや」ト飲む、武助腸の内より、件の狀を出し差出す、政右衛門とつて血汐の狀を、角行燈へ張付けすかし見て。政右「スリヤ又五郎はこの所にゐるとナア、出來した武助、勘當赦したぞ」武助「御勘當お赦し下さるゝとな、へゝ、有難し、かたじけないウン」ト後へ仆れ死ぬる、ト奥より入込の武士一人出て。侍「其の正宗わたせ」トとりにかゝる、政右衛門とつて押へ。政右「正宗を欲しがるおのれは」侍「しれた事、又五郎どのゝ門

衛門が來たるを待つに、連りに喉渇くゆゑ、傍なる鑵子にかゝる、金右衛門は忍び居て、始終を見るゆゑ、ヤレその湯を飲みたまふな、毒氣有りととゞむる、不思議なりと又左衛門鑵子の内を見るに、かの蛇の頭麗々とあり、これによつて金右衛門はわが命の親なりとあつて、故なく正宗の刀を讓る、眞其如く、今目前に蛇の竹にのぼり、己と頭切れて手水鉢へ飛入りしに、忽ち水氣立上るは、察する所竹の中に名作あるに極つた、ハヽヽ、稀代の業を見る事ぢやナ」トいふ、武助塀より飛下り。武助「何にもせよこの中」ト竹を拔き見る、内より刀出る、武助とり透し見て。「コリヤ疑もなき正宗の刀」トわが腹へ突込む、不死身切れたる故、びつくりする仕打。「ヤア、この刀の、わが身體へ立つたるは」トいひながら苦しむ。政右「ホヽヽ驚くことはない、正宗の刀の德にて、星に映して切る時は、いかなる不死身たりとも速かに切れる、スリヤ此刀が正宗に極つた、ハヽヽ、かたじけなやナア」ト天を拜し喜ぶ、中二階より靜馬、巳之助の死骸を抱きて下り。靜馬「政右衛門樣、巳之助がこの死骸、いぢらしい事を致しました」トなく、政右衛門愁の仕打、此内武助腹切りながら、手水桶を引よせ、腸を洗ふ事あり仕打、柴垣よりわつと泣く、政右衛門聲かけて。政右「女房どもでないか」お種「アイ〳〵、最前お藥を貰うては戻つたれど、どうやら、お前の素振合點行かぬ故、うら道から忍んで、柴垣の陰で聞いて

いうても不死身なれば腹は切られず」トいろ〳〵有り、二階にて巳之助、政右衛門が獨言を聞き、默首き脇差取り。巳之助「とゝ樣のお詞は、せめて腹切つて武士らしう死ねば、とゝ樣の武士も立つ、伯父樣も敵討たつしやる、たとへ又五郎が子でも、死んでしまへば矢張り爺樣嬶樣の子になる、さうぢや」ト腹切る。巳之助「アイタ、、、ア痛い〳〵、づつないわいのう」政右「出來した〳〵」ト苦しむ、政右衛門こたへられぬ憂ひ、中二階を拜み泣仆れる、トうすどろ〳〵にて、柴垣より大蛇仕懸にて、手洗鉢前の竹へのぼるしかけ、政右衛門きつとなり窺ひ、目を放さず見る、蛇以前又五郎が刀を入れし竹へ上り、竹の眞中の所にて頭切れ、胴より下はおつる、頭は手水鉢へ飛入ると、どろ〳〵にて吹水あがる、政右衛門きつと見て。政右「ハテ不思議なる事を見る事ぢやナア、寛永の頃、鎌倉にて渡邊金右衛門と云つし者あり、同じ朋友に澤井又左衛門といつし者、正宗の一腰、重代とあつて祕藏するこの金右衛門、この正宗を深く望めども、又左衛門重代なりと讓らず、渡邊氏は只管に讓りくれと望む、又左衛門も是非に〳〵といふに、しからば重代なるによつて讓る事はならず、たゞ盜取れよ、さすれば先祖へのいひわけなりと、互に武士の身を守り、明後晩と刻限を極めしに、折節暮方なれば、澤井氏は壺の内に花壇の草をとらんと鍬持つて草を穿つに、過つて蛇の頭をきり、其後蚊帳に入つて、金右

その縁で敵が討たれぬといはつしやる、それではわし故爺様は腰抜と人が笑ふであろ、わしがこの様に足はたゝず、友達の子供が腰抜といふさへ口惜しかつた、それにまた爺様を腰抜といはすが、おりや口惜しいわいのう、もう爺様にも嚊様にもあはぬが、悲しいわいのう、エヽ因果なものぢやナア」ト足摺して泣く、政右衛門始終を聞いて袖を口に啣へ忍泣き、辛抱の仕打、ト廿三夜の月引幕の上へ引出す、表の武助恭いと捨臺有つて、門口の松へのぼる内、又二階にて淨瑠璃とまる、まだ腹切らぬといふこなし、政右衛門一人足音し。浮るり『板額そろ〳〵。外に與市が身ごしらへ、いづれも様子を。政右「こりや待て〳〵女房、わりや何處へ行く」ト足音し。「なんぢや敵の胤ぢやによつて、あの躮を殺しに行くか、これやい、われが殺さいでも、あの巳之助は悧悧者ぢやによつて、敵の又五郎が子ぢやと知つたら、腹切り侍らしう死ぬるわいやい」ト又足音して。「はて扨よいてや〳〵、兎角いはぬ中が花、聞いたら死ぬる、ハテ外からいうて死んだら是非に及ばぬ、暫時の中なりと助けて置きたい、時節をまちや、よいか、合點がいたか、サアマア奥へいきや」ト又足音いろ〳〵して。「ハテ聞分もない、俺次第にしておきやといふのに、マアおじやいのう」ト三人の足音にかへる。浮るり『これを聞いて。武助「人の意もしらいで、面白さうに淨瑠璃どころかい、この僕めに腹切れといふ天道様の敎か、ぢやと

の淨瑠璃かたる。政右「おのれも聞いて愕りしをるか、おのれが狼狽へた性根と、躮巳之助が立派な心と比べて見れば、おのれはきつい狼狽者、女房が生んだ俺が子は、七夜の中に死んだる故、もしや女房が聞いて煩にもならうかと、種々と心を痛める折に、幸ひ又五郎が女房、同じ日に男子出生、内々にて貰ひ入れ、代へ置いたあの巳之助、眞は又五郎が眞實の子ぢやわいやい、嬉しや親には生れ勝つた天晴な性根、子ながらも恥かしい、又今まで敵を得討たぬも、あの躮ゆゑ、巳之助を實の親又五郎へ返し、恩を請けたる一禮をいうて、その上にての敵討、またこの事を躮にいうて聞かせぬは、あいつ怜悧者ぢや、義理も理窟もよう知つてゐる巳之助ぢや、この樣子を聞くと、生きてはゐぬ、死ぬる、イヤ又死なにやならぬ、殺すまいと思うていはぬは彼奴が不憫さ、女房はこの樣子をしつて、殺してしまへといへど、おりやあいつが可愛い、殺すまいと思ふ故、如何にも得いはぬわいやい」ト二階へ聞かす樣に聞耳してゐる、表には武助、入りたい思入、この合方。武助「エヽこの月はなぜ出て下されぬ、内へ忍び入りたうても勝手はしらず、どこがどこやら見えぬ、はやう月が出て欲しいナア」トこの内淨瑠璃、ト武助躁る、二階に巳之助、政右衛門がいふを聞いて泣いてゐる、三方仕打、二階にて。巳之助「今父樣のいはつしやるのを聞けば、俺は爺樣や嚊樣の子では無うて、敵の又五郎が子ぢやによつて、

は、ごくにもたゝぬたわけた事、早く歸れ」武助「それは餘り御情ない口惜しい無念にござるわいの」政右「まだ／＼くど／＼よまい事、聞く耳もたぬ、はや歸れ」武助「ぢやと申して」政右「はてうせうてや」ト武助表へつれ出て、門口をしめる、武助表にていろ／＼無念のこなし。武助「申し旦那、政右衛門樣、こりや餘りお意強い申し／＼」ト立たり居たり躁く、政右衛門內にて樣子を窺ひゐる、二階にて泊人の聲にて。二階にて「サア／＼稽古來／＼、夜が更けた、明日の間にあはぬ、もう月魄があがらしやつた、稽古せい／＼」ト內にていふ、ト中二階の障子あける、ト巳之助一人居る、政右衛門いろ／＼工夫の仕打あり、掛行燈に羽織をかけて、獨語のこなし、表より門の戶を叩き。武助「申し／＼旦那どの、旦那樣、そこにかえ、口惜しうござりまする、無念な、どうぞ御勘當御赦され、敵討の御供をさせて下さりませ、申し／＼」政右「はて喧しい、たとへどの樣に願うても叶はぬ、元より又五郎に今逢うても、今敵討つ事は叶はぬ」武助「何といはつしやる、又五郎に逢うても討つ事はならぬとは、こりや腰が拔けたか、なんで敵が討れぬ、なぜ討れませぬぞ」政右「又五郎は討れぬ義理が有る」武助「敵の又五郎に何の義理がござる」政右「躮巳之助は俺が子ぢやない、敵又五郎が子ぢやわいやい」ト中二階の巳之助、吃驚する、お種樣子を聞いてる、表にて武助も驚き、ハツトいうて下にゐる、二階には和田合戰

武助「さうおつしやるは旦那政右衛門様か」政右「武助ぢやないか」武助「アイ申し旦那様、たびたびお詫申上げますれども、お聞届ない私身のあやまり、何卒御了簡なされ、御勘當御赦免下さりませうならば、有難う存じまする」政右「ヤイ〱、もう〱込入る宿屋、壁に耳、いらざる勘當の詫、叶はぬ事ぢや、きり〱立つて行け」武助「其段幾重にも」政右「言付けた一ッの功が立つたか」武助「なるほど、敵又五郎が有所を知らす密書、拙者が手に入りましてござる」政右「ナニ敵の密書が手に入つたか、出かした」ト表をあけ、武助内へ入り。「それでおのれが功は立つ、サア密書は」武助「サアその密書は」政右「早く出せ〱」ト武助密書を呑んだといふ思入、胸を掻き口惜しきこなしいろ〱あつて。政右「こいつ何をひろぐ、早く密書を出さぬか」武助「サアその密書」政右「その密書は」武助「サアそれは」政右「どうした」武助「呑んでしまひました」政右「のんだとは」武助「船若坂の邊にて、又五郎が家來に出喰し、難なく一通奪ひとり、歸らんとせし所に、かの家來共大勢折重り、密書を返せととりかゝる、渡さじと組合ひしに、拙者はひとり相手は大勢、渡すまいと口に啣へ、取合ひ働く難儀の場所、いたし方なくその密書呑込みましてござりまする」ト口惜しきこなし、政右衛門驚き。政右「痴呆者め、たとひ如何程功になる密書にもせよ、呑迄んでしまへば手に入らぬも同じ事、それが一ッの功に立つなどと

政右「又五郎ではござらぬ」源内「それにこの紋所の羽織は」政右「こりや又五郎が著がへ、身どもは身内の者、拙者とても尋ねてをりまする、折々又五郎これへまゐると承り、此間よりこれへ入込んで待受けてをりまするてや」源内「すりや其許、又五郎どの身内のお方、それで様子がしれましてござる、然らばとてもの儀に、又五郎へ直々に様子申上げたう存じまする、この絵圖は御兩人へお預け申しまする、又五郎殿これへ御出ならばお止めおかれ下さりませう、拙者は少々意あたりの方ござれば、その方を詮議いたし、又後程これへまゐりませう、萬事お二人様をお頼みまするぞ」政右「左様ならば後程、これへ御出なされ、待受けて居りまする」源内「おいとま申しませう」政右「ようお出なされました」トうたになる、源内入る、又五郎二階へ入る、政右衛門絵圖を懐中へ入れ思案して、表の門を閉る。政右「絵圖に合せて又五郎を詮議する一方の武士は、こりや譯がしれて有るが、その武士に物を言はさぬ奥の武士、何で有らうぞ、もしや彼奴が」ト絵圖を出し、奥を見て引合せ。「とんと違うて有る、それでもなし、ハテナアまづ何にもせよ、面を見知らぬ身どもに、この絵圖を渡したは、こつちの手懸、もはや本望達する時節、迚もの事に靜馬が眼病、今宵中に本腹させねばならぬわいの」ト唄になり、石留武助向より走り出て門を叩き。武助「頼まう〳〵、爰あけい〳〵」ト忙しく敲く。政右「何者ぢや〳〵」

はおかぬぞ」ト懐中より種が島を出しさし付け。又五郎「こりや〳〵麁相すな、早まるな、この様な迷惑な事はない程にの」ト頭を搔く。源内「何が迷惑、動くまいぞ、さて申上げます、主人より申越しましたは」トいはうとする、又五郎頭をかき。又五郎「こりや〳〵、滅多に大事をいふまいぞ、そりや違うた、その又五郎殿はたつた今」ト行かうとする。源内「どつこい動くと、どう腹打ち貫くぞ」又五郎「これは氣の毒、さうではないわいの、とんと間違うて、その又五郎は外を詮議するに及ばぬ、只今つれて來る」ト行かうとする。源内「どつこい其手は喰はぬぞ、動くと命がないぞ」ト鐵砲かまへる。又五郎「これは難儀な事では有るわいの、せう事がない、身も武士ぢや、他言いたさぬといふ金打」ト刀を拔かうとして竹ゆゑに拔かれぬ可笑み、脇差を拔きかけ、扇にて打つ。「武士の金打かくの通り」源内「武士の金打有るは、よもや他言もあるまい」又五郎「てもしんどい事かな」政右「シテ様子は」源内「然らば申上げませう、拙者事は近藤野守之助が家來、川角源内と申す者、主人申付けまするは、拙者その又五郎殿存じませぬ故、この繪姿を差越しましてござる、この繪圖に引合せ相違なくば、委細申し上げよとの儀、まづこの繪姿を御覽下さりませい」ト源内、政右衛門を繪圖に引合せ見て。源内「この繪圖とこなた樣とは拔群の相違、ハテ心えぬ、もつとも御紋所は又五郎樣なれども、此繪圖に合はぬ此方は」

るゝお身の上、お包みなさるゝは御尤に存じまする」政右「なぜ又その様にいはつしやるぞ」源内「イヤもうお隠しなさるゝには及びませぬ、お前の召してござるそのお羽織の御定紋で、又五郎様とよく見請けましてござる」ト政右衛門心付き思案して。政右「又五郎なれば何と致した」源内「イヤもう主人が殊なうお前様のお身の上を案じ居りまする、拙者に申付け密にお行方を詮議致し、お目に懸りて萬事の儀お咄し申し、その上定めて御不自由に候ふとあつて、少々金子も差越しましてござる、まづ申上げませうは」ト此内二階より又五郎出かけ、とめるこなし、政右衛門二階の方を見る、源内もみる、三人顔見合はせ、又五郎障子びつしやりしめる、源内身拵して。源内「御覧じましたか、大事を立聞したる奴、その儘にはおかれぬ、おのれ眞二つに」ト二階へ行く、又五郎上より下りて、まつたく〱。又五郎「聊爾せまい、則ち又五郎といふは」ト政右衛門と顔見合せ。「サアその又五郎といふは確にそれ」ト外へ出やうとする、政右衛門とめて。政右「こりやこなたどれへござる」又五郎「イヤサ其又五郎はこゝにゐぬによつて、詮議致して進ぜうと存じて、それで」ト又行かうとする、政右衛門ちよつと止めて。政右「ハテいかいお世話でござるの、其許に御苦勞はかけぬ、矢張その儘これにござりませ」ト突放す、ト又五郎行かうとする。源内「大事を聞いた武士、その儘には遁さぬ、是非に遁げうとおいやると生けて

く、此内政右衛門わが著て居る振袖を兩方ともに握り。政右「これはお袖が小袖、かへ〳〵にて互に餘處ながら祝言した袖詰の兩袖、せめて此袖なりと可愛がつてやれや」ト靜馬に渡す、靜馬受取り抱しめて泣轉ける、子役に行き當りさぐり。靜馬「こりやたれぢや、巳之助さうにござりまする、よう寐て居まするぞえ」政右「可愛や、何にもしらずにか」ト少し泣き。「世話ながら、添乳してやつて下され」ト唄になり、靜馬、巳之助を探り〳〵二階へあがる、表に人音する、政右衛門ちやつと羽織を著る、川角源内半合羽三度笠、旅の形にて。源内「たしかに此邊と聞きましたが」ト書付を見て、傳法屋、こゝだ〳〵、ちと物が尋ねたい、どなたぞ頼みませう」政右「なんの御用でござるな」源内「イヤ御免なりませう」ト内へ入り。「外の儀でもござりませんが、この宿に鎌倉の御浪人樣は、御存じござりませんかな」政右「エ、鎌倉の御浪人と申すは、誰方でござるやら、シテまづ御用の筋は何事でござるな」源内「されば、拙者儀は川角源内と申す者、さる御方よりの御狀を持參仕りましたる故、お渡し申し度く、伺候致してござる」政右「鎌倉の御浪人と申すは、承りませぬが」トいふ内、政右衛門著てゐる羽織に、又五郎の紋付きある故、源内見て。源内「ヤアお前は又五郎さんでござりますかな」政右「アヽこれ〳〵手前は左樣な者ではござらぬが」源内「なるほど〳〵、お隱しなさるゝは御尤、世をお忍びなさ

一德「心當りが有るか」政右「ござりますゝ」ト掛硯を出し、狀を書く。「これ女房ども、これを鷄庵樣の所へ持つていきや」一德「ムウそんなら、鷄庵樣の請判か、そんなら慥ぢや」お種「わしやその鷄庵樣の所は知らぬもの」一德「おれが知つてゐる、連立つて往きませう、あつちで印形とつて金渡し、直に八軒屋へ出ませうわいなア」政右「そんならお前、鷄庵樣お近付かえ」一德「上り下りにあの向ひの駕籠の甚兵衛が處へ行くによつて、知つて居ります、鷄庵さま近付ぢやで」政右「それは幸でござりまする、そんなら左樣になされて下されませ、これ女房ども、その手紙を見せれば、何もかもあつちで合點ぢや、金請取りやつたら鷄庵樣から來るものがある程に、それも取つて戻りや、大事のものぢやぞ」一德「そんなら行きましよか、みな往かつしやれ」お袖「そんならモウ行くのかえ、どうぞちよつとなりと靜馬樣に」ト泣く。お種「ならう事ならたつた一夜」政右「はてそれに如才があるものか、長い事でもない、ちつとの間ぢや、辛抱しや」一德「いつでも證文の段になると、この涙には困つたものぢや、サアいかつしやれ」お種「お供致しませう」ト一德、お種、お袖、三人はいる、ト二階より靜馬探り出て。靜馬「政右衛門樣、お袖はモウまゐりましたかな」政右「せめて一目と思うたれど、どうで別れねばならぬ事ぢやによつて、心強う」トなく。靜馬「不便な事致しました、私故に流の勤」トな

捨てゝなりとも、お役に立つが女房の習ぢやわいナア」政右「オヽ出かしやつた〱、必ず詞を番うたぞや」お袖「なんの僞り申しませうぞいナア」ト政右衛門喜び、最前の羽織を著て、政右「申し〱二階にござる京のお客さん、ちよつとお目に懸りたうござりまする」トよぶ、オヽイ〱と返事して、一徳下りて來る。一徳「お呼びなされたはその元樣でござるか」政右「なるほど拙者でござりまする、さて最前途中でおつしやれた奉公人衆の事、どれぞよい代りがござりましたかな」一徳「最前申す通り、可惜代物を得とらずに、歸りましたわいナア」政右「サアそれでお呼び申したは、幸よい奉公人があるが、御相談なされませぬか」トいふとお袖、恥かしきこなし有り。一徳「これは耳寄、シテその奉公人は何處にゐられまするぞ」政右「すなはち彼奴、どうでござります」一徳「その元の御娘御か、見事育よくお仕立、申分なし、相談致しませう」政右「マアどの位なものぢやナア」一徳「何かなしに下商ひ、とつと百兩出しませう」政右「マア有がたい、どうぞ只今證文はなりますまいかな」一徳「幸ひ、證文も認めて有る、サア親判なされい」ト矢立を出し、政右衛門名前を認め。政右「サア印形致しまする」ト判押す。一徳「こなたが母親ぢやの、これもよし、さて大法ぢやが請判はたれぢや」政右「わたしが致しませう」一徳「そも身内ばかりのでは、表面がすまぬわいの」政右「そんなら他人の請判を」

のでござんすわいナア」政右「その敵又五郎が羽織を、爰迄持つて來たその仔細は」お種「されば
いナア、三十三所の觀音様で、お二方御息災であるやうに宿願かけ、二ツにこの羽織を佛前
へなほし、敵又五郎、命に別條ないやうにと、敵の健固を祈るのも、どうぞ首尾ようお二人に、
敵が討せましたいばかりぢやわいナア」政右「そんならこれが又五郎めが羽織ぢやナア」ト羽
織を打ちつけて。「しばらくも穢はしい〳〵」ト踏む。お袖「申し政右衛門様、恐しい山坂を越
えて來たも、どうぞして靜馬様に逢はうと思ふが私が樂しみ、どうぞ靜馬様にあはせて下さり
ませいナア」ト泣く。政右「なるほど道理〳〵、靜馬に逢はしたいけれども、爰には居ぬわい
の」お袖「何とおつしやる、爰にはござらぬかえ」ト二階の障子をあけ、靜馬出やうとする、
政右衛門これを見つけ。政右「これ出まい〳〵まだぢや、出ま〳〵」お袖「出まい〳〵とはえ」
政右「サア靜馬はこゝに居ぬに依て、居ぬ處へ滅多に向へ出ると悪い、それで出まい〳〵とい
ふ事ぢやぞいの」お袖「サアそんなら出や致しませぬわいナア」政右「イヤこれお袖、夫程靜馬に
心底をつくす氣なら、そなたに聞きたい事がある」お袖「靜馬様のお身に係つた事なら、何なり
とも聞きませうわいナア」政右「若今にも靜馬が身分に、金のいらねばならぬ事があつたら、吾
儕傾城流れの勤をしてなりとも、靜馬が用に立てうと思ふ意が有るか」お袖「アイ勤は愚、命を

の、月も代り日も代り、數へて見ればもう一年の餘り、巳之助はせがむ、このお袖さんは、逢ひたい〳〵と朝から晩までせがましやんす、わしひとりの難儀、それで私が身もあられず、詮方つきてこの西國、同行三人宿所〳〵ではいひあかし泣きあかし、碌に一夜も寢た事もござんせなんだ、その念願で今宵といふ今宵巡り逢うた、嬉しいは嬉しいけれど、唐木政右衛門といふお姿が、有らうことか何の罰ぢやぞいナア」ト泣く。お袖「お道理〳〵、わたしとても靜馬樣に尋ね逢ひたいが、心の誓でこゝまでまゐりましたわいナア、それはさうと政右衛門樣、お前樣はこのお寒いに、何としていかう薄著で、このお姿でござりまする」政右「おれがこの形か」二人「なんとした事ぢや、おつしやつて下さりませいナア」政右「この形は。オヽそれ〳〵、行をするのぢやわいの」お種「何とおつしやります、行とおつしやるは、何の行でござりまする」政右「おれが行といふのは。それ二十三夜の行をするのぢや、南無德大勢至菩薩〳〵」お袖「二十三夜、もう月魄もおあがりなされまする、マア〳〵お小袖をめしませいナア、マア私が小袖なりとも御召しなされて下さりませい」ト風呂敷包より、又五郎が羽織を出す、政右衛門紋所を見て。政右「變つたものをもつておじやつたの」お種「さればいナア、この羽織は日外鎌倉にて爺樣が、御討れなされた場所に落ちてあつた又五郎が羽織、敵のしるしと持つておじやつた

ふ宿屋のある所は爰で」政右「アイ爰でごんすが」ト政右衛門と顔見合せ。お種「ヤアお前は政右衛門様ではないかいナア」政右「女房どもか」お袖「ほんに政右衛門様ぢやわいナア」政右「おそで殿か」三人「これはしたり」トびつくりする。政右「マア／＼二人ともに來たか／＼」ト政右衛門二人を連れて内へ入る、あたりを見て。お種「よい所でお目に懸りました、これといふも三十三ヶ所の觀音様の御引合か、エヽ有がたいナア」政右「吾儕達の嬉しいより、俺が喜びを思ひやつてたも、さうして巳之助めは達者なかの」お種「達者な位かいなア、ほんに風一ッ引した事はござりません、それ爺様に逢や」巳之助「とゝ様かいのう」政右「巳之助か」ト抱いて上へなほし。「何より彼より、汝に逢ひたかつた、嬉しや／＼、ようマア健で、よう來てくれたナア」ト大きな聲でいふ。お種「オヽけうとい物の言ひ様さしやんすわなナア」政右「イヤサ坊主めを見てあんまり嬉しさに、それでナア巳之助、よう來てくれたナア、汝が來たので俺が願が叶ふわいやい」お種「巳之助が何の願でござんすえ」政右「ハテ逢ひたい／＼と思うてゐる、俺が願が叶うたといふ事ぢやわいの」お種「ても仰山な物のいひ様さしやんす程にの」政右「それはさうと、吾儕たちは何として、この順禮はとんと合點がいかぬ、どうぢやぞいの」お種「さればいナア、あなた方がお國を出なされて、今日か明日かと待てども／＼何の便もなく、待つ日數は早いも

もう七ツ巳の年、そんなら見事親の事思ひ出す意も出る時分ぢや、七ツ七里憎まれて居をらう」トふつと氣をつけ、指を繰り。「まてよ、躮めは一トまはり下の巳の年、七ツ巳の年」ト又指を折り。「最前鷄庵殿のいはれた一味の妙薬、調合の血汐は七歳の男子、巳の年の巳之助、則ちわが躮であつたか、エヽ忝ない。たとへ金が出來ても、その血汐なければ用に立たぬ、持合せた躮の巳之助、一時も早う」ト往かうとして。「イヤ／＼國許までは往戻り二十里の餘もあり、すりや今宵の間に合はぬ、金があつても躮がゐねば間に合はず」トいろ／＼して。「エヽこれもはや望の叶ふは足許へなつて來たれども、一ツとしていま手に入らぬは、よつく武運にも盡き果てたか」トべつたりとすわり大泣き、ト花道よりお種、笈摺、菅笠、杖、順禮の姿、巳之助を脊に負ひ出る、後よりお袖、同じく順禮の姿、杖、風呂敷包、少々負ひ、順禮歌にて出る。お種「四番に和泉の槇尾寺、み山路や檜原松原分けゆけば、槇の尾寺に駒ぞ勇むる」お袖「申しおたね様、こゝは何處でござりまするえ」お種「さればいのう、大方こゝが長町といふ宿屋の有る所で有らうわいのう」お袖「お前様もいかうお草臥さうな、おみ足元が悪い、はやうお泊りなされませいナア」お種「さればいのう、巳之助が寢やつたので、きつう疲勞うなりましたわいの」ト政右衛門の傍へ行く。お種「申し、ちと物が尋ねたうござりまする、長町とい

橋筋、三ツ寺東へ入、門の際に針屋の隣」政右「御玄關の襖の繪は蘆に鶴」鷄庵「その鶴の領の樣に、永う待して下さるなや」政右「心得ました」ト唄になり、鷄庵入る、政右衞門襦袢一ッにて殘る。「まづ藥を迯すまいために、受合は受合うたが、どうして才覺がならうぞ。しかし百兩といふ金は高のしれた事、工面の出來まいものでもないが、たとへ金が出來ても、十歲より內の巳の年の血汐、これがなければ間にあはず、敵に邂逅してもおりや又五郎が顏は見しらぬ、見知つたあの靜馬が兩眼明ならねば、これも間に合はぬ、ハテ血汐も欲しし金もなし、兩眼見えねば心も暗闇、目あては一人難儀は三ツ、何日か無念をはらすべき時節や來らん、ハテ口惜しやナア。といふてたれを當所に談合する者もなし。是とてもよしない事、妻子は地獄の家裏とは、佛の戒め、思ふまいとは斷念めても、かういふ難儀に責められては、思ひ出さねばならぬ、男の俺でさへ思ひ出すもの、國許の女房や躮が思ひ出して居るであらう、今日は首尾よく助太刀討つて歸らつしやるか、明日は無事な顏を見ることかと、待つ程に經て一年餘、この樣に便のないは、碌な事ぢやあるまい、敵にも得逢はず、もしや病死でもさつしやれたかなぞと案じ暮し、泣き暮らす、ぐづ〳〵いうてゐるであらう、可愛や〳〵」トふして泣く。「坊主めも同じやうに、頑是なしに尋ねてゐるか、イヤ〳〵頑是のない時分でも有るまい、坊主めも

ませぬわいの」藥屋「さうなりとして腹癒ざなるまい、これお醫者殿、こなたの様な悪い工をすると、何處ぞでは捕まへられて、この日本橋の辻で曝される者ぢやぞや、思ひなしか、どうやら曝者見るやうな顔ぢやぞや」妙貞「今迄の好に今宵一夜はおいてやる、夜が明けたら二人ともに出ていかうぞ、爰な大盗賊め」トふむ、政右衛門少し横にこける。鷄庵「はてよいわいの、その様にせいでも大事ない事ぢやわいの」トふむ、政右衛門又元へこける、腕まくりしてきしむ。藥屋「何ぞやいふ事が有るか」ト政右衛門、口惜しき身振にてなく。妙貞「藥屋様奥へござれ、酒一ツ進ぜませう」藥屋「忝ない、そんなら婆様」妙貞「サアござりませ」ト著物金持ち二人入る。鷄庵「これは〳〵婆様、何時までも生きようと思うて、無得心な鬼婆め、せめてその著物なと返しをれいやい、返せ〳〵」ト奥をみていかうとする。政右「イヤ〳〵もうお心遣なされて下されまするな、大事ござりませぬ」鷄庵「エヽ氣の毒千萬な」トいろ〳〵して。「ホ大事の病人を受取つておきながら、それ〳〵」トいかうとする、政右衛門袖を控へ。政右「今宵の中に金子百兩調へまして、あなたのお宅へ參りませう程に、その代呂物どつちへもお遣なされて下さりまするな、頼みまするぞ」鷄庵「そりや氣遣さつしやるな、何方へも遣りやしませぬ、そんなら夜半の鐘の鳴るまでに」政右「合點でござります、あなたのお所は」鷄庵「島の内中

療治にあるきまする藪醫者でござる、他國者ぢやによつて近付はなく、爰へ驅込みました、少少づつの藥を續けてくれい、頼むというて金二分、敷金に越しやつた、如何樣遠國から稼ぎに來るお人ぢや、よもや〳〵麁相は有るまい、商賣は相身互ぢやと思うて、今までの藥はみな俺が續けたぞや」政右「お前のいかいお世話になりましてござりまする、それ故今日まで渡世仕りました」藥屋「サア仕りましたはよいわいの、其後に來ていはつしやるには、よい所の療治を請取りました、手があへば私も人になりまするというて、段々貴樣の頼み、それも聞屆け、藪醫者には拔群過ぎた代物を呑込んでやつたぞや、それからとんと來ぬ程に〳〵、門も通らぬ、あんまり合點が行かぬによつて、婆樣を頼んで樣子を聞きにきて、おりやあそこに隱れて聞いてゐるたわいの、これお醫者どの、これですむかい、世界の立引がすむかいのう、あのまぢ〳〵した顔わいの」政右「イヤモウどうおつしやつても、お前樣には一言もござりませぬ」藥屋「ないか、有りさうなものぢやがの」妙貞「返事はあらうが金はない、逆樣にふるうても、鍋錢のかけもないわいのう、もうくど〳〵いはずと腹癒に、踏みのめしてやらつしやりませ」藥屋「踏のめして金の代にするは、向ふは勝手こつちは大損、婆樣どうしませうぞいの」妙貞「はてどうというたら、このめくさり金とこの著物を引當にして、お前と二人が分取にしようより外の事はござり

て見まする、必ず腹を立てさつしやるなや、何と貴方の腰の物を、暫くお預けなされぬか、最前代官殿が天晴と譽めました、すりや金子は調ひさうなものぢやが、暫くお預けなさるゝ事はどうでござらうの」政右「これは〳〵御深切のお心遣ひ、忝う存じまする、しかしこの一腰は、大切な方より拜領致しましたれば、例へ如何樣な儀があつても一時も離しまする事は致し難うござりまする」鷄庵「ハテナア」ト政右衞門兩手を拱んで思案して居る、ト奥より妙貞出て。妙貞「これヤイ藪醫者め、ようも〳〵俺に喜ばして置いて、この樣な胴脈を摑ましをつたナア」政右「なんとおつしやる、最前の一分が惡うござるか」妙貞「わるい段か、眞赤な胴脈ぢや、こりや俺にこのやうなわるぴんを摑ましておいて、榮耀らしい藥所か、此わんほうは宿錢の代に俺がお預り、此金もおれが取る、をしくば明日中に算用せい、出入が濟まにや、二人ともに追出すぞよ」政右「申しそれは餘りでござりまする、それ皆遣つたら、算用より多うござりまするぞや」妙貞「イヽヤまだ足らぬ、藥屋殿ござりませい」藥屋「オイ〳〵」ト藥屋内より出る。妙貞「なんと見やしやりましたか」藥屋「見ました聞きました、婆樣いかいお世話で忝ない、これこゝなお醫者樣、醫者殿、藪醫者どの、貴樣は〳〵、これ俺もの、堺筋で藥種屋の次郎兵衞というて古い藥屋ぢや、日外貴樣が俺が處へ初めて來て、私は長崎から來て、この傳法屋に宿とつて、

ませんか」トいふ、鷄庵頭を掻き、氣の毒なこなし。鷄庵「成程貴公の心腹も篤と承知致して居りますれども、これも未だ買切らぬ預りもの、どうも氣の毒なが」政右「いかさま、大枚の金になる大切な物なれば、貸し難いとおつしやるも御尤」ト思案して、懐中より嚢を出し。「ハイこれに金子六兩ござりまする、これをお前へ御預け申しまする程に、何卒その眞珠をお貸しなされて下されませい」鷄庵「六兩、イヤなか〳〵その樣な事では達きませぬわい」政右「スリヤこの金では」鷄庵「何として〳〵、まだ〳〵餘程達きませぬ」政右「ヘエ」ト思案して布子羽織を脱ぎ、鷄庵が前におき。政右「これが頓と私が身代限でござりまする、高で五百か三百のものなれども、私が如在のない所をお目にかけるのぢや、どうなりとして眼が早う治したうござりまする、どうぞその藥、私にお預けなされ下されますまいかな」鷄庵「ハテ天晴武士氣ぢや、申さう樣もないなされかた、イヤもう申すには及ばねども、大枚の金高どうも、ハテ氣の毒な儀でござるわいの」政右「これ程に致しまして御預けなされ難いとおつしやるは、マア如何程の事でござりまする」鷄庵「サアこれ程で百兩ぢやと申す事でござる」政右「ナニアノ金で百兩でござりますかな」鷄庵「高い物でござるて」政右「ホイ」鷄庵「サア入用と申すと足元を見て高ばりますてや」政右「一向及ばぬは」鷄庵「イヤ申し、何とも無躾な事でござるが、其元の意を察していう

トあたりを見て。政右「イヤ申し鷄庵樣、此間から御賴み申し置いた一藥は御手に入りましたかな」鷄庵「サア其許のわけてお賴み故、道修町中を吟味させました所に、不思議と結構なが手に入りました」政右「それは有難い仕合でござりまする」鷄庵「世に眞珠といへども、伊勢眞珠、尾張眞珠なぞと申して、甚だ紛らはしいものでござるが、正眞も正眞も無類飛切と申すが手に入りました故、貴公の御目に懸けうと存じ持參いたした、御覽なされ」ト鷄庵疊紙より出して見せる、政右衛門戴き見て。政右「左樣なればこの眞珠に、あなた樣の御祕法の一藥を入れまして用ひまする時は、立所に兩眼涼しく相成りまするかな」鷄庵「サアそこぢやて、眞珠と一藥ばかり大方二十日あまりには、たしかに受合ひまする」政右「それでは日限が延すぎまするが、モそつと早いお工風はござりますまいかナ」鷄庵「それもあれど、殊の外得難いものが要りまするで」政右「ヘエ得難いとおつしやる一藥は、マアどの樣な藥でござりまするな」鷄庵「必ず他言は御無用、その得難いと申すは、十歲內の巳の年の男子の生血、その上人に殺されたは能なし、得心、或は切腹抔と申す樣な血でなければ、効かぬとやら申し傳へました」政右「ハテナア、それは得がたい一藥でござりまするわいな」鷄庵「サアそれは氣の毒な一藥でござるてや」政右「イヤそれも有るまい物でもござりません、しかしマアその眞珠を今宵私にお貸しなされて下さり

政右「飯代は外にきつとする、これは彼の大金儲の先悦びに進上致すぢや」妙貞「なんとおつしやる、この一分と二百文、俺にとつて置けかえ、さうしてそのお馴染の藥代がとれたらば、二匁の宿錢を五匁かえ、ホヽヽへヽヽても扨も結構な事かな、そんならこれは戴いて置きませう、まあ〳〵この一歩は神棚へ上げて、お前樣の御療治の流行るやうに願ひませう、又二百匁は御神酒を買うて、へヽヽホヽヽアヽこれお若者の、何をきな〳〵思ひなさるぞ、やんがてお眼も能うなる、マア氣をゆるりと持つて、五年も十年も御養生をなされや、ヤア、若いといふものは、こりややいおとめよ、それお手を引いて二階へ連れまして往け、どりや奥へいて神棚へ御神酒上げませう、やれめでたやの〳〵」ト婆奥へ入る。鷄庵「ナント手の裏返すやうな婆樣ぢやないかの」政右「贔屓の強い婆樣でござります、これ〳〵こなたは二階へ往て氣を靜めや、女中太儀ながら伴れていて下さりませ」女中「アイ〳〵、サアお出なされませ」ト手を引く。靜馬「鷄庵樣、これにござりませ」鷄庵「アヽ隨分養生しませうぞ」靜馬「アイ〳〵」鷄庵「これ女中、冷えぬ樣に暖めて進ぜさつしやれ、したが胯で暖めまいぞ、大きな毒ぢやぞ」ト靜馬、下女つれ二階へあがる。鷄庵「アヽ婆樣が喚き止んだら、大水の出た跡のやうな」政右「左樣でござります、これにつけても金銀は結構なものでござりまする」鷄庵「先づ世界の寶ぢや」

事でござりまする、此間こちらによい病人を請取りました」鷄庵「どのやうな病人ぢやの」政右「高麗橋邊、お歴々でござりまするが、其家の大切な一人娘、病性はとんと知れませぬ故、歴々のお醫者衆が手を盡したその後を、少々手筋がござりまして、達て私に頼まれました故、私もいろ〳〵とは辭退致しましたが、何のまゝよ、てんぽのかはハテ診た上で力に及ばぬ事なりや變改はしうち、何でも往て見やうと存じまして、右の世話人と同道で參りました、何が毛氈を引きまするか、金屛風できら〳〵として頓と朝鮮人の通筋を見るやうでと思召しませ、一家内と見えて、ツンよ〳〵と容態を申しまする、さて脈を見ました所が、病氣はたしかな所が見えまする故、少し私の量見もござつて、まづ一服置きまして、今日又見舞ましたれば、其一服が適中致しましたというて、家内は喜び何事はない、此藪醫者を生如來のやうに馳走たつぱい致しましたでござりまする」鷄庵「ハテなう、得て有る事でござる」政右「これ婆樣、アノ病人を本腹させたらば、五十兩はぶら〳〵、その時こそこれまでお世話になつたお禮に、二匁の旅籠を五匁づつ進ぜまするぞ、マア喜んで下さりませい」鷄庵「ハテさてそれはよい金に取付かしやつたノウ、これもう我等もあやかりたいてや」政右「さて婆樣、こゝに最前の割前が二百文ある、この二百文とこの金一分、その許へ進上仕るぢや」妙貞「アノこりや飯代の内上ゲかい」

人の變でもあるかの」男「イエ〳〵左樣の儀ではござりませぬ、旦那申しまするには、この間は段々御苦勞かけまして有がたう存じまする、お蔭で病人も本腹仕りまして悅びまする、つきましては、病人も殊なう氣をつかしましたが、夜前より藥飮むまいと申しまするは、みなみな寄合まして意見仕りますれども、病上り故か氣短かに申しまする故、あなた樣へお尋ね申し、苦しうない事ならば、暫時お藥を休みませうかどう仕りませうぞ、此儀をあなた樣へ御尋ねの爲に、私を差越しましてござりまする」政右「イヤ〳〵少しも苦しうない事ぢや、先づ拙者が療治で本腹はさせたぢやは補ひぢや、とつくりと補ふが第一と存ずれども、しかし病人の意次第、却て氣に障れば變の元となる、そんならマア當分休ましてみたもよかろかい」男「然らば左樣申し聞かせませう」政右「成程〳〵さうさつしやれ」ト男、箱を出し。男「些少ながら當分のお禮の爲、お留めおかれ下さりませう」政右「ハテさて義理〳〵しい、何時にても大事ない事を」男「イヤ又お禮は緩々と申越しますでござりませう」政右「これは〳〵お志ぢや、確に請取ましてござりまする」男「私はお暇申しませう」政右「御苦勞〳〵、よろしう申して下され」男「おさらばでござりまする」政右「ようござりました」ト男入る、跡へ政右衞門、金拈り見る、鷄庵と顏見合せ。鷄庵「とれますの〳〵」ト二人ハヽヽヽと笑ふ。政右「イヤもうこれは端

ろうろとする」代官「サアなんとでござる」又五郎「拙者が刀は」代官「お辭退なさるゝは上意を背かつしやるか」又五郎「さうではござりませねど」ト代官が傍へ行き、御内聞で御覽下されませうと差出す、代官思入あり、拔きかける、竹光ゆゑちやつと納め又五郎に渡し。代官「改めました、申分ござらぬ」又五郎「面目次第もござりませぬ」ト又五郎會釋して戻る、政右衛門、靜馬が刀を取り、我が刀と兩手に持ち差出す、代官目禮して兩腰を拔き、とくと改め、元の通りに納め。代官「さて／＼天晴なお腰物、これまで改め參つた内、これ程の腰物未だ拜見致しません、不作法ながら、驚き入りましてござります」ト政右衛門腰にさし、一腰は靜馬に渡す。「イヤ／＼天晴なる御道具、奥ゆかしく存じまする。イヤなに主人、泊りの武家方は此衆中ばかり」妙貞「ハイ此お三人ばかりでござりまする」代官「然らば次へ參らうおさらば、家來供せい」家來「ハッ」トあるき代官家來つれかへる、又五郎も二階へあがる。政右「さても／＼別事でもない事、吃驚いたした」トいふ所へ男一人、文箱持ち出る。男「頼みませう、傳法屋といふ宿屋はこれでござりまするかな」政右「アイこれでござりまする、何の御用でござります」男「然らば長崎からお出なさるゝお醫者樣は、これにござりまするか」政右「その醫者これに居りまする、お尋に預るは誰方ぢやな」ト男と顏見合せ。「誰ぢやとおもうたれば、薩摩屋の男衆か、何用ぢや、病

んださうにござりまする、それでお前が仰向に轉けさつしやつたのぢや」妙貞「ハテのう、さうぢや有るまい、投げたのぢやあらうがの」政右「なんの爲にお前を投げませうぞいの」妙貞「そんならマアそれにしておいて、サア二人ながら出て往て貰はうかい」政右「なぜでござりまする」妙貞「モウ廿日の上にもなるのに、錢一文も拂せずに、こりやどうするのぢや、二人三人飯代とらずにおく宿屋はござるまいぞや、サア錢が無か二人ともに出ていきやいのう」政右「飯代拂ひさへすりや可いぢやござりませんか」妙貞「サア受取ませう」政右「氣遣ひなされますな、今出て行けというても、算用せにや去はしませぬわいのう」妙貞「エヽ口は調法なものぢやのう」鷄庵「イヤモウ先刻にから騒がしいので、俺も氣が上りました、イヤ總體、不斷の四十こして經行止れば、えてあの如に凛々しう成るものでござるて」妙貞「默らしやれ」鷄庵「オット默りませう」ト表へ代官、家來つれ出る、内へ入り。あるき「お代官様の御出ぢやぞや、婆さま、武家方の客衆、これへ呼ばつしやれ」ト妙貞、靜馬、鷄庵、又五郎、下女、みな〳〵出で、手を支へる。代官「外の儀でもない、此度東山殿より御吟味なさるゝ正宗の刀詮議、いづれも違背なくこれへ出しめされてよからう」鷄庵「まづ拙者からお改め下されませう」ト鷄庵合口出す。代官「イヤ〳〵、貴殿のは改むるには及ばぬ寸尺、サア次にござるお武士、腰の物お出しなされい」ト又五郎う

てか」靜馬「ハイ成程御尤でござりまする、そりやもう合點して居りまする」妙貞「こなたばかり合點して居やしやつても、取るもの取らねばこつちへ濟まぬわいのう」下女「ハテマアようござりまするわいのう」妙貞「何かいやい、汝もおのれぢや、朝から晩までお盲の傍にへばり著いてあた忌らしい、内の事はどうするのぢや、箒の腹打食はすぞよ、さあお盲宿錢はどうするのぢやいのう」靜馬「御尤でござりまする、追付け國許から銀子參る筈ゆゑ、來次第にきつと御勘定申しませう」妙貞「いひ出すと國許〳〵と、おいで下され、聞飽いて居る、モウ待たぬぞや、今日濟ましや」鷄庵「これ〳〵お袋、道理ながらその樣にはいはぬものぢや、人は了簡といふものがなけれや」妙貞「左平治おいて貰ひませう、すつこんで居さつしやれ」鷄庵「いか樣ともいかやうとも」妙貞「サアお盲、今算用ぢや、無いか、無かその樣にしては居られそもないものぢや、面の皮の厚い、サア無か出ていきや」ト靜馬うぢ〳〵。妙貞「出やらぬか、引出すぞや、エヽ面倒臭い」ト胸倉を持ち、後より引立てる、下女取付き立まはり、政右衛門入る、妙貞を背後より胴〆足で下へ突据ゑる、妙貞政右衛門が顏を見て。妙貞「ヤアこなたは藪醫者どのか」政右「今歸りました」妙貞「今戻つたりや何で俺を投げたのぢや」政右「ナンノ御前を投げませう、今戻りかゝりましたれば、何やらばた〳〵致しましたによつて、すつと入つた拍子に、お前の裾を踏

て變る事もござるまい」靜馬「やはり兩眼ともに痛みまして難儀仕りまする」鷄庵「道理〳〵、目といふものは大事のものぢや、脈見ませう」ト見て「ようござる、氣を急くまいぞや、目一通りは七十五日といひまするわいのう、加減仕りませう」ト又藥をあはせる、ト向より唐木政右衛門、さんすいなる藪醫者の形にて出る、先へ祇園町一徳羽織著て手に證文箱持ち出る、花道にて。政右「きつうお暇がいりましたの」一德「まだ今日のは早いのでござります、何か北の新地からほりえ島の内を歩く事、この樣な短かい日は困りまする」政右「デモ御苦勞な事、さうしてよい奉公人衆でもござりましたか」一德「サア結構な奉公人、しかも實心、何でもしめつたと思うて下つて樣子を聞けば、ちつとやらさらへが足りません故、みす〳〵な大金をすてゝ上らねばなりませぬ」政右「ハテナア、むづかしいものでござりまするナア、お話をしてきた故、道を近う覺えました、サア〳〵御入りなされませ」一德「どれ登り準備致さうか」ト入る、二階へ上る、ト入る、政右衛門跡へ殘り思案してゐる、鷄庵藥合せ了ひ。鷄庵「これ加減の藥ぢや、さわ〳〵と煎じて一番ばかり參りませ」ト靜馬が手に渡す、戴きて下女に渡し。靜馬「太儀ながら煎じて下され」下女「あい〳〵」ト藥とる、ト奥より妙貞出る。妙貞「ホウお盲爰にか、これ此方はうか〳〵と呼んで來たやうにして居やしやるが、宿錢がもう廿日の上もこぬぞや、知つ

つて、手水鉢の前の竹の中にて、太き竹斜に切り、刀の目釘をぬき、身ばかりを竹の中へ隱し、又柴垣の竹をとり、鞘に合せ切り、身の代に指し、鍔をはめ腰にさし入る、ト下女靜馬が手を引き二階より出る。靜馬「思ひがけない眼病で、多い世話になりますの」下女「なんのいナア、世話致しまするは私らが役、お客様の事ぢやもの、疎には存じませぬ、お前樣もお心おきなく御用いひ付けなされて下さりませ」靜馬「近比過分にござる、本腹いたしたらきつと禮をいはうぞや」下女「何のいナア、お目が癒りさへすりや、わたしやお禮請けるより嬉しうござりまするわいナア」靜馬「深切な人ぢやのう」下女「燠が付けませう、なんぞ」ト煙草持つて來て。「申し、和かい水のやうな薫のよい煙草買うて置きました、一服あがりませい」靜馬「逆上つて惡からうもの」下女「そんな氣遣のある煙草ぢやござんせぬ」ト吸著けてやる、靜馬のむ、いろ〳〵あるべし。靜馬「どうぢやこの鷄庵様はまだ見えぬかいの」下女「先刻にから、奥に御病人の療治をしてでござりまする、お前のお日の事も問うてどござんしたわいナァ」靜馬「見て貰ひたいものぢや」下女「さう申して參りませう」靜馬「太儀ながらいうて下され」下女「アイ〳〵」ト下女入る、靜馬一人呟きゐる。鷄庵「どれ〳〵、逢ひませう〳〵」ト内より出る、下女付出る。靜馬「鷄庵様でござりまするか、待兼ねて居ました」鷄庵「御尤〳〵、どれ容態を見ませう」ト見て。鷄庵「さし

モウ耳がしやら〳〵致しまする」鷄庵「さうでござりませう、加減致しませう」ト藥調合する。又五郎「イヤモウ旅がけの儀なれは難儀仕りまするで」鷄庵「御道理〳〵、したが藥が廻れば早いものでござるてや、加減致しませう」ト藥を合はす中、あるき一人出て。あるき「婆様内にか〳〵、ばさま」トやかましういふ、トおくより傳法屋主婦妙貞出る。妙貞「オヽかしましい事ぢやぞいのう」あるき「何ぢややしらぬが、お上からお尋ねなさるゝ事が有つて、此長町を一軒〳〵武士たる者の御詮議ぢや、さう言うておかつしやれといふ天下觸だぞや」トいうて入る。妙貞「サアサアいろ〳〵の事が出來たぞや、やかましや〳〵」トいうて奥へはいる。又五郎「イヤ申し鷄庵樣、アリヤ何事でござりませうな」鷄庵「イヤ別に氣遣な事ではござらぬ、最前河内屋でちよつと聞きましたが、大切な正宗とやらの刀を盗んで迯げた者があるというて、代官所から長町宿屋をお尋ねなさるゝと申す事でござるて」又五郎「ハテナア」鷄庵「イヤもう其樣な大膽な事をする奴ならば、滅多にしれるものではござらぬて」又五郎「いかさま、早速には知れますまいかい」鷄庵「この藥は、生姜なしにまゐりませい」ト又五郎とつて下女に渡す。又五郎「太儀ながら、煎じてたも」鷄庵「ドレこれから奥の病人衆を見舞ひませう」又五郎「御苦勞に存じまする」ト唄になり、鷄庵、下女連立ち入る、ト又五郎一人殘り、我が腰の刀を匿したいとする仕打いろ〳〵あ

又聞えたら大體の事ではないぞや」下人「ハテ爰ばかりには日は照るまい〳〵」同「さうぢや〳〵、長町中を歩いても一代は暮さるゝ、ャもう日の暮ぢやさうな、長屋の衆がもどるで有らうぞや、ドレわれらは風呂へ水汲雀どのと參らうか」トいろ〳〵宜しく臺詞の中、花道より芝居出る、つぎへ天滿の神子、又獨角力みな〳〵少々づつ白あつて內へ入る。下女「これ〳〵みなの衆、早い仕舞で有つたのう」角力「扨々寒い事〳〵」神子「寒い筈、この寒中に眞裸體で震ふ事ぢやもの」芝居「それ〳〵、死病と身すぎぢやわいの」角力「なんと大芝居、くれぬぞや、身體疵だらけの上を砂まぶれ、悉皆餡こかしのやうに成つて、これだけぢやわいのう」芝居「かさに降る雪も、七ツ時分には喉から血を吐くやうなてや」角力「握拳の出すばかりで、とんと今年は收入がない、其のかはりに足が元手ぢやわいのう」芝居「サァ〳〵みな〳〵船辨慶めが戾らぬ中サァ〳〵かうござりませう」トみな〳〵表の路次へ入る、ト表へ石森鷄庵醫者の形、藥箱持一人つれ出る。下男「石森鷄庵御見舞」ト鷄庵內へ入り。鷄庵「コレおちよ女郎、病人衆へしらせて下され」下女「心得ましてござりまする」ト奧へ入る、ト又五郎出て。又五郎「これは御苦勞に存じます」鷄庵「ハア丶シテ變りました事もござらぬかの」又五郎「さして變りました儀もござりませぬ」鷄庵「どれお脈を見ませう」ト鷄庵、又五郎の脈を見る、これはいかう上りまするの」又五郎「イヤ

九ツ目

一下女一人　久五郎
一祇園町一とく　三藏
一政右衛門子巳之助　太次郎
一川角源内　桐山紋二
一政右衛門女房お種　花桐豊松
一石留武助　嵐文五郎
一唐木政右衛門　中山文七
一下人二人
一ひとり角力一人
一あるき一人

一大芝居　正藏
一代官　金十郎
一傳法屋妙貞　松本次郎三
一おそで　中村槌五郎
一和田靜馬　澤村宗十郎
一澤井叉五郎　淺尾爲十郎
一石森鷄庵　太夫本
一家來大ぜい
一天滿神子一人

造り物、長町宿屋の道具、向三間の間、破風の所大二階見附階の下、大段梯子正面に有り、梯子のわき赤壁暖簾口、奥塀口の方中二階、下に柴垣、手水鉢前竹五本、内一本仕掛有り、二階いづれも高欄腰障子、いつもの所に門口、傳法屋といふ掛行燈、門口より舞臺端まで本ばかりの塀、並に門口のわきに松一本、但し足懸あり、橋懸の方鼠色壁路次口有り前に井戸あり。

下人「さても〳〵忙しやな〳〵、かたはしから物をいふ人では有るぞ」下人「貴樣もさうおもふか、ありや人ではないわいのう、どうでも三間ぢやないかしらぬ」下女「これ〳〵何をいふのぢや、

あつて。「女こい」ト金助、お園を引立て、奥𢈘口の方へ走り入る、ト向より飛脚出る、ト跡より武助、そろ〳〵見隠れに出る、ト善平橋懸より右の家來つれ、飛脚と行合ひ。善平「これはこれは、鎌倉より林左衞門樣への御使、よい所でお目にかゝつた、拙者も先程、又五郎樣にお目にかゝり返事とり、これに所持仕る」飛脚「御意の通り、林左衞門樣の御返事受取り、夜を日についで歸る所でござりまする」ト此臺詞の中、武助委細を聞き、兩人が眞中へずつとわけ入り。武助「してやつた、二人ともに此狀こつちへ渡せ」善平「委細を聞いた下郎め、ソレ」飛脚「合點ぢや」トこれより武助、皆々を對手に大立いろ〳〵あつて、武助拔身を手で摑み、折り曲る事有り、樣々あつてとゞ武助疲勞れ、池の水を手で掬ひ飲み居ると、みな〳〵顏にてしらせあひ、武助を善平拜打にする、ねつから切れぬゆゑ、善平吃驚する、武助これにかまはず嘲笑ひてゐる、此まはり二三度あつて又立になりみな〳〵追込む、善平、武助をさゝへるはずみに呑んでしまふ、善平取付くを、武助、善平を見事にぽんと切る。武助「敵の在所勘當の詫の綱」ト善平起上り。善平「うぬを」武助「よいやサ」ト大袈裟に斬る。「かたじけない」ト向へ走り入る。

幕

が、かう見受けました所が、女の旅連なぞにはぐれ、その人を尋ねらるゝといふ様な事ではないか」お園「ハイ夫を見失ひましたによつて、その行方を尋ねるのでござりまする」金助「左様存じておとゞめ申した、此へきてこれを見やれさ」トお園つか〳〵と走りより、死骸を見てびつくり。お園「ヤアこれは夫又五郎殿」ト金助と顔見合せ、兩人思入あつて。金助「スリヤこの死骸がそちが夫とナア」お園「何者の所爲で此樣な、淺ましい形にはならしやんしたぞいナア」金助「女そちや夫の敵討つ氣はないか」お園「女でこそあれ夫の敵、討いでおかうか」金助「ハテ健氣の一言、袖の振合ふも他生の緣、敵討せて遣らう」お園「して其敵は」金助「外でもない身共ぢや」トお園身がまへする。「意趣も遺恨もなけれども、ちうじちうやう行合の口論、武士の儀によつてかくの通り手にかけた、さぞ口惜からう無念に有らう、イヤ愁傷の段思ひやらるゝ」トお園何ともいはず、始終口惜き思入あつて。お園「夫の敵、侍やらぬ」ト少々立廻あつて、金助見得よくとめて。金助「せくな女、此方より名乘つて出る程の身ども、討たれてやらうが今はならぬ、ちとこの方に入用の命、それさへ了はゞ尋常に、其時こそは討れてくれう、不承ながら夫までは、われ待たずばなるまい」お園「イヤ〳〵さうはいはさぬ、夫の敵ゆるさぬ、覺悟しや」ト又切かける、立まはりあつて。金助「ハテさて聞分のない女、さう云やいつそ返討に」ト思入

乘になり、面の皮をむき、我著物を脱ぎ死骸にきせ、死骸の著物をきかへ、矢立を出して狀を書き死骸の懐へいれる、橋向より湊江善平、股引脚袢打裂羽織侍の形にて、家來四五人つれて出て、又五郎を見付け。善平「それにござるは又五郎樣ではござりませぬか、よい所でお目に懸りました、主人野守之助よりの御狀」ト文箱を又五郎に渡す。又五郎「野守殿の使太儀」ト狀を讀み、其まゝ返事を書き、右の文箱へ納め。「歸られてもあらうならば、委細の儀はこの返事に認め有ると言うておくりやれ」善平「委細畏つてござりまする」又五郎「太儀〳〵」ト此内花道戸屋の内にてどよ〳〵と人音する、ト又五郎向をきつと見て善平に顏にて知らせ、又五郎は奥塀口へ入る、善平は家來打つれ橋懸へ入る、ト向より松野金助、野袴打裂羽織、侍の形にて高下駄傘をさし出る、ト件の左内が死骸に躓き、思入あつて。金助「面皮をあばきたど一刀にあやめし有樣、必定盜賊の爲業とみゆる」ト思入あつて。「扶りし傷には似もやらず、衣服に疵のつかざるは。ハテナア」ト懐中へ手を入れ、右の狀をとり出し一寸よみ。「ハテよい物が手に入つたナア」ト奥塀口へお園出て。お園「どつちへ行かしやんした事ぢやしらぬ」ト花道へ行かうとする、ト金助思入あつて。金助「コレ〳〵女中」お園「私が事でござりますか」金助「いかにもこなたの事ぢや」お園「おめしなされまするは何の御用でござります」金助「イヤほかの儀でもない

行かうとする。馬士「申し〳〵、此家の亭主は、何處へいかれましたな」お園「わたしも餘處の者ぢやによつて存じませぬが、今何處へやら往かしやんしたさうなわいな」馬「ハア、そんなら待たざなるまい」お園「申し〳〵、爰らに酒屋はござりませぬかな」馬「ナンノ町ぢやもの、酒屋だらけでごんすわい」お園「とつとわたしや、旅の者ぢやによつて」馬「よごんす、ごんせ、待つてゐるも同じ事ぢや、わしが教へてやりませう」お園「それは忝うござりまする」ト兩人つれ立ち橋懸へ入る、又五郎出て。又五郎「人目を忍ぶ屈竟の妙藥」トくすり店さがし。「きやつが懷中ソレ」ト橋懸へ走り入る、お園出て。お園「又五郎さま〳〵」ト同じく追懸け入る。

かへし

黑まく眞中大稻村、雨車、此見得にて道具留る、ト又五郎尻からげ、羽織をかぶり、きり〳〵まひ〳〵出る。

左内「エヽいま〳〵しい、いろ〳〵の目にあふ事ぢや、さうして又此雨のえらさわい、イヤ丁度よい雨宿、しばらくこの木の下にて休まうぞ」ト左内、右の稻村の傍へよる、ト稻村の内より又五郎、左内の首筋摑み内へ引込み、芋刺に殺す、ト藥屋の吹替出す、ト早がはり、又五郎の形にて、物凄き思入あつて、とゞ藥屋を殺し、懷に有る件の藥二包ともに取り、戴き向へいかうとして思入。又五郎「毒喰はゞ皿までと、役に立てゝまさう」ト又五郎、藥屋の死骸の上へ馬

行く、お染其手を取り、じつと締めてぐにや〱して。お染「オヽ辛氣」ト太郎兵衛に抱付く、忌らしきこなし、付けつまはしつする。太郎「狼狽者め、親を捉へてこりや何するのぢや」お染「コレ爺さん」ト取つく、太郎兵衛びつくりして。太郎「こりややい何ぬかす、六十に餘つてそんな機嫌ぢやない、親ぢやわい〱」ト帯を解き追廻す、太郎兵衛向ふへ逃げ入る。お染「イヤ親ぢや、まつた〱〱」トわる身にて追かけ入る、左内見て。左内「ハヽヽ、惚藥もひどい物ぢや。時に祕傳の妙藥、扨も利けば利くもの、一服用ひて忽ち相好の變る難病、又此なほし藥を用ふると、半時かゝらず元の形になるとは、いやはや我ながら肝が潰れる、イヤ取違へては成まい」ト出して見て。「此赤藥が難病、白藥が治し、よし〱懷中は離されぬ金ぢや〱」ト代官奥塀口より家來大勢連出で。皆々「それ遁すな」左内「こりや何となされます」代官「ヤアぬかすな、汝れ樣々の妙藥とて、惡しき藥を賣る由、殊に竹の筒をもつて囁藥抔と申す事を致す由、毒害などの藥を賣るも計れず、依て代官所の仰せ、急ぎ御前へうせをらう」左内「是は迷惑な、其竹の筒は女悦と申しまして」代官「ヤア言譯は御前で致せ、家來ども引立い」ト皆々左内を引ぱり入る、馬士又戻り。馬士「内にござりますか、申し〱」トお園出る。お園「そんならまつて居さしやんせ、私がつゐさう言うて來るわえ」トいひ〱出て、馬士に行當り、ハア是は免して下さんせ」ト

飲むとその顔が半時の間に、元の通りになる、サア〳〵戴いて飲んだり」おそめ「アイ〳〵忝うござんす」トおそめ呑む、少し苦しき思入。太郎「何とした〳〵」左内「ちつとの間、あの店へ氣を休めてござれ、すぐに元のやうに治る」太郎「ハイ〳〵忝うござります」トおそめを店へなほし、太郎兵衛脊中さすりゐる、左内も店へしかじか藥調合してゐる、ト馬士一人牽出で。馬士「此中は忝うごんす」左内「どうぢや、効驗が見えましたかの」馬「きいた段ぢやござらん、此間の藥を持つていんで、家主の娘にたつた一度振かけたれば、人中もかまはず、ぬれかけるやら抱付くやら、お蔭で本望遂げました、友達どもが一服もらうてくれというて、それで來ました、マア一ぷく下され」左内「これも一子相傳でござる、不思議な藥であらうがの」ト袋を出し、散藥を合はせゐる。馬士「サア藥代二分渡しました、その間に一服いたそ」トおそめ起きて。おそめ「とゝさん、もうよいさうなわいの」太郎「ヤアそなたの顔は」トおそめが顔撫でて見て。おそめ「ほんにさつぱりと治つたわいな〳〵」ト兩人悦ぶ。左内「輕いのは半時までは懸らぬ、その位なは忽ちぢや」おそめ「エヽ忝うござります」ト辭儀する拍子、左内が持つてゐる藥、おそめ打かへす。左内「エヽこれはしたり、大事の藥を打ちあけて、エヽどんな事しられた、サアサア癒つたらもう歸なしやれ〳〵」太郎「ハイ〳〵お暇申しませう」ト手を引いて花道の方へ

ちや、金さへ出せば半時に元の樣にしてやるわいのう」太郎「金所ぢやないわいのう、大事の〱懸娘、此間より風の心地、ア、時分の娘ぢや、もしや戀病では有るまいか、見て下されとつれて來れば、この藥を呑ませいと言うて下さつた粉藥、呑ますと直にサア逆上すほど〱〱、見てゐる内にこの通りに赤癩にようしやつた〱」左内「サア〱よいてや〱」太郎「何ぢやよいてや、イヤよいてやア、これいナア〱ほんに言うではなけれども、色白からず黒からず、瓜實顏でしをの眼で、つぼ〱口で、鼻筋は蟻のとわたりまでとほつて有つて、その上にちよみで、小野の小町か楊貴妃かと、袖褄を引かれた容姿ぢやぞや」左内「ソリヤ誰が」おそめ「アイわしいナ」ト左内をかしがる。おそめ「シヤ、ほんに何が可笑い、殿御を持つて兒生んで、末はどうしてかうしてと、夕も風呂の上り場で、きたない顏ぢやと人さんが、指差して笑はんす、大身代の殿達へ、どう嫁入がなろぞいの、償うてかへしや〱」左内「サアまどうてやるが、金があるか」太郎「金というたら何ほ程でござる」左内「ハテ大切な藥ぢやけれど、慾には要らん、なるだけ工面しやれ、半時の中には治してやろ」ト太郎兵衛、はな紙袋より金を出し。太郎「持合せが二兩ごんす、どうぞこれでまけて下され」左内「ア、安いものぢやけれど、治してやろ」ト懷中より藥入を出し、粉藥をわけて茶碗に入れ、よろしく有つて。左内「この藥は一子相傳、これ

人がないわい」お園「そんならお姉様は」又五郎「それも俺ゆゑ、自害しられたのぢや」お園「エヽ」トびつくり。又五郎「何にも驚く事はない、こりや世界の順道ぢや」トお園氣をかへ。お園「遠い東から伴れて來ても、どうぞお前の心を入替へ、母樣に勘當ゆるしてもらはうと、それを頼り、樂みに生きてゐましてござんする、その母樣がお果てなされたら、何樂みに生きて居りませう、又五郎さん、隨分健でゐやしやんせ、さらばでござんす、南無阿みだ佛」トお園、又五郎が脇差を持つ、又五郎とめて。又五郎「エヽどう狂氣め、何をしをる」お園「イヤ〳〵放して殺して下さんせ」又五郎「めつたに殺してたまるものかい」ト橋懸にて、人音やかましう、又五郎思入して。又五郎「面倒な」ト藥店の後へ無理にお園を引摺りはいる、股引打裂羽織の武士、家來四五人つれ出で。代官「家來ども、此程より當所に於て心得ぬ藥を賣り、かたり同然の賣藥賣、引立て參れとの事、此の店に相違はない」家來「左樣でござりまする」ト見て。代官「こりや藥屋は居らぬか、必定風をくらつて逐電した、ソレ近邊を詮議いたせ」皆々「ハア、」代官「かうまゐれ」ト奥堺口へ入る、ト橋懸俗醫者左内藥屋の形、太郎兵衛おそめ出て。左内「サア〳〵よい〳〵、癒してやるわいの〳〵」太郎兵衛「償うてかへしやく〳〵」ト女形、顏に腫物あり、太郎兵衛の形にて。左内「サア道理ぢや〳〵、それは胎毒の内攻した所へ風を引いて、そこへ藥で發散して吹出たの

袖抱帯、手をひかれ出て。

又五郎「サアやかましい、何も女のしつた事ぢやない、俺次第にしておけ」お園「なんぼその様にいはしやんしても、これぱつかり、御聞入れて下さんせ」又五郎「ハテどびつこい、聞入るも聞入れぬも俺が胸にある、早う歩け」トしか〴〵あつて舞臺へ來る。お園「マア〳〵待たしやんせ、歩け歩けといはしやんすが、何處へ連れて行くのぢやぞいナア」又五郎「何處の彼處のといふ事はない、高が大坂の長町へ行くのぢや」お園「其の長町といはしやんすは、お前の何ぞかえ」又五郎「イヤ」お園「そんなら何ぢやえ」又五郎「しれた事、やつぱり宿屋ぢや」トお園氣をかへ。お園「これ又五郎さん、諄い事ぢやけれどもナア、よう聞かしやんせえ、お前のお意故とは言ひながら、行先も〳〵的度もなしの旅籠屋泊り、果は何とせうと思はしやんす、其の御前の悪性故、これ見やしやんせ、此樣に袖も結ばず、ほんの女房とは言號ばかり、どうぞ意を入かへて、親御の御勘當も赦して貰ひ、世間廣う女夫になりたい、これ又五郎さん、ちつとは私が身にもなつて下さんせいナア」又五郎「エ、やかましい、夫程俺が大切で著歩く汝が、なぜ俺に抱かれては寢ぬ」お園「そりや母御さんが、御勘當御赦しなされたその時は、許嫁ぢやもの、抱かれて寢いちやナア」又五郎「その勘當赦してくれる母者人は、とうに死んでしまはれたりや、勘當赦して貰ふ

内記「敵討の餞別」政右「ハア」ト政右衛門思入有つて、内記が持つて居る刀を戴き納める。
内記「隨分麁相なるものぢやぞよ」政右「ハア、重々厚き御懇情」内記「勘當の政右衛門には、おもひもなるまい、親子は一體なれば、躮巳之助に盃くれう」ト侍、三寶長柄を内記が前におく、内記飲んで巳之助にさす、お種その土器を請取り、巳之助に戴かす。内記「めでたう敵討ちおほせ、再びかへる意の返盃」トお種、右の土器を内記が前になほす、内記飲んでしまうて。
内記「肴くれう。一張の弓の勢たり、東南西北の敵をやすく滅せり、ハヽヽヽ敵討の門出」
ト兩人俯く。(幕)ト幕の傍へ、政右衛門、靜馬、孫八、のし〳〵花道へ入る。

八ツ目

一飛脚　正五郎　　一湊江善平　正藏
一おその　尾上粂助　　一石留武助　嵐文五郎
一松野金助　中山來助　　一澤井又五郎　淺尾爲十郎
一俗醫者左内　淺尾爲十郎　　一代官一人
一仕出し　油屋太郎兵衛　　一同おそめ
一馬士二人

造り物、見附黒幕、おく海道、板松二三枚、よき所に賣藥店に書付有る石をのせ、よろしく書物ならべ藥袋つりあり、在郷唄にて幕あく、旅人三四人出て、捨臺詞言うて通る、又五郎著流し、お園振

掌にある上は氣遣ひしやるな、さりながら態と主人にうとまれ御勘氣を受け、暫くも御主人をたばかり、不忠不義の名をとるも、緣にかゝはる孝の道、國を出づる時に妻子を忘れ」靜馬「境を出づるに家を忘れ」政右「寒風そせつの厭ひなく」靜馬「雨露霜雪に身をこらし、敵又五郎やはか討いで」政右「さはいへ、かゝる事だにお馬の前の忠義なら、のう靜馬」靜馬「政右衛門どの」

兩人「まゝならぬ憂世ぢやナア」孫八「憚りながらお旦那樣へ申上げまする、一時もはやう御立なされて、然るべう存じまする」政右「もつとも、靜馬きやれ」小紫「マア〱お待なされて下されませう」兩人「までとは」小紫「お兩方への御祝儀、御祝ひ申しませう」兩人「祝儀とは」小紫「女ながらも大事を聞いた私、敵討の血祭」ト靜馬が刀にて、小紫自害せうとする、政右衛門とめて、そのまゝ小紫が髮を其刀にて切り。政右「髮はすなはち血の餘り、其血の緒を切つて、躮巳之助に付置、尼の乳母居直り。憚ながら殿樣へ申上げまする、隨分御健勝で、お渡りなされ下されませう」ト政右衛門、孫八、靜馬花道へ行く。內記「まて」政、靜「ハア」ト花道にすわる。內記「申付けたもの兩人にくれい」ト臺に小判の包を載せ、兩人の前になほす。「些少ながら路用にやれ」政右「ありがたうは」靜馬「ござれども」政右「金少々は貯畜へござりまずる」ト內記、小判の臺を引けといふこなしする、ト侍立寄り直す、ト內記刀を持さへ、かへして。

又立になる、政右衛門疊の下を潜る、ト最前忍びし善平を引出し、内記に突つけ、其のまゝ鑓玉にかける。「神影三つの口傳の霧がくれ」ト内記こなしあつて、鑓引うけ政右衛門に突きにかゝる、立あつて内記突込む鑓の穂先を、政右衛門兩手にて拜み、政右「神影流の奥儀の口傳とくと御傳授下されませう」ト政右衛門跡へすさる。内記「立合にことよせ傳授せしは、天晴の計らひ過分々々」政右「これは殿樣の有りがたき御詞、冥加にかなひ有りがたう存じ奉りまする」内記「此度將軍より此内記に仰付られし三ッの傳授、今其方に受けたれば、參勤の時將軍へ御傳授申し奉れば、譽田の家の繁榮は其方が蔭、徒には思はぬぞよ、譽田内記手をさげて禮を申す」政右「ハヽヽ冥加もなき仕合、未熟の拙者、中々藝を惜み、殿樣に御傳授仕らぬてい、さら〳〵なし、家來に傳授うけ給ひては殿樣の御名の疵、さるによつて不禮をも顧みず、立合に事よせ御傳授いたせしも、君を重んずる寸志の御禮、最前よりの不禮の段々、眞平御免下さりませう」内記「たれか有る、申付けし一品これへもて」内より「ハッ」ト鎧櫃を持出る。内記「これ政右衛門にくれい」「ハ、ア」ト鎧櫃の蓋をとる、内より靜馬出る。お種「ヤア、そなたは靜馬」靜馬「内記樣のお情にて、政右衛門殿の心底を承り、如何ばかりか悅ばしう存じまする」孫八「靜馬樣、さぞ御悅びでござりませう」政右「我爲にも舅の敵、討つて本意を達するは、我

門一落すんだれば、此場にあつて益なし、いざ歸らう」林左「御乘物」ト乘物、家來大ぜい舁き出づる、内記しづ〳〵乘物へのる、家來みな並ぶ、林左衛門、政右衛門が御用すぢとつて。林左「ナニ門弟中、これいござれ、よい物をお目にかけう。これ此奴が面を見られい、これサ怖い事はないわいの、高が此扇子でぶつても、手前の御手が鉄よりも強いによつて、此の通りの面に疵、何とよく固まつたであらうがの、何かほうげたの明いたまゝ、神影流のイヤ神道ぢやのと、頬げたからの出るまゝ、其の先生さまが此態、なんと拙者が手の内見ておかつしやれ」門弟「いかさま、よい氣味でござりまする」林左「ナント政右衛門、わりや此樣にせられても無念な事はないか、イヤ口をしい事はないか、エヽ馬鹿な奴の、べらぼうめだわい。お乘物立ちませい」ト唄になり、みな〳〵奥塀口へ入る。お種「政右衛門さん、さぞ御無念にござんせう」巳之助「とゝさま、口惜いわいのう」孫八「御旦那さま、下郎めが腹わたがにえかへりましてござりまする」政右「今林左衛門を打殺すは易けれど、彼奴は又五郎の爲には眞實の伯父ぢやわい、そち達が願ひの通り今こそ助太刀してくれう、此御不興受けうため、幾世の思ひをしたわいやい」ト内記、障子を開き、鑓を二つ提げ出て。内記「政右衛門の知行盜人、遁がさぬ」トこれより鑓の立合、政右衛門扇子にて始終あしらひ。政右「これが神道の固め」ト内記思入あつて

音を」内記「鯉口轡の音に目を覺すは眞の武士、そりや思ひもよらぬ事」林左「然らばいつそ打放して」内記「手討にすれば、此内記がする」林左「ちやと申して」内記「それがしが詞をそちや背くか」林左「まつたく以て左樣では」内記「左樣でなくば控へて居やう」林左「エ、命冥加な」内記「元來足利どのより、この內記に神影流の三つの口傳を傳授せよと有る、氣合まだ辨へねば、その儀傳授せよと再三申遣せども、一子相傳の事なれば、教ふる事かなはずと、其日よりの廓通ひ、察する所傳授惜みしものならん、憎きやつ、手討にせんと思へども、夫のみに助けおくに、それに何ぞや手討にせんとは、某を蔑如にする不調法ものめが」林左「だん〳〵あやまり入りましてござりまする」内記「手討がはりの阿房拂ひ、百杖打つて檢非を糺せ」林左「ハア丶たれか有る、竹刀しなへを持たつしやれ」内記「竹刀しなへに及ばぬ、此扇子にて打て」林左「スリヤ其の御扇子で」内記「それもきはめて百杖うつに及ばぬ、これこの扇子の骨は十本、すりや十度打てば百度、きつと申渡したぞ」ト扇子を林左衞門にわたす。林左「たとへ扇子は僅なれども、腕を固めて打つ時は鐵石」ト扇子を持ち、政右衞門が傍へゆく、引起す。ト小紫孫八奥より出かける。「殿樣のお慈悲の扇子、奴性骨に耐へたか」トたゝく、政右衞門氣がつく。「御前ぢやが御前ぢやが〳〵、アノ大だわけめが」ト此内お種孫八小紫、みな〳〵無念のこなし。内記「政右衞

身持放埓、とくと御覽遊ばされましたか」内記「政右衛門が身持放埓、いろ〳〵と取沙汰致せども、よもやとは存じ打捨置きしに、晝夜も分ぬ亂酒の有様、逐一に承知いたした、かやうの輩と知らずして、知行をくれし内記こそ、兩眼明かに有りながら盲目同然、かゝる不忠不義の政右衛門、一時もわが目通りは叶はぬ間、百杖打つて安房拂ひ、林左衛門此役儀そちに言付ける間、政右衛門を百杖うて」林左「委細かしこまりてござりまする、更めて殿様へ御願がござりまする、先だつて政右衛門お目見え致せし折から、彼奴が面體骨柄、只ものならずと存じ、まさかの時は殿様の御用にも立つべきものと存じ、態と立合を負けしは、君への忠義、今又お暇の出た政右衛門なれば、御前において眞劍の勝負御免なし下さらば、有がたう存じませう」ト林左衛門下緒はづし、襷にかけ、身拵して政右衛門が寢てゐる側へ行く。お種「前後もしらぬ夫政右衛門、それを相手になさりやうとは、そりやお前卑怯でござんす」林左「何にも女のしつた事ぢやない、すつこんでゐやれ」ト政右衛門がそばへ行く。「政右衛門、先だつての立合打負けしは、身共が計略、今眞劍の勝負する、サア立あがつて勝負せい」ト林左衛門切らうとする。内記「林左衛門まて、かく熟醉せし政右衛門眞劍の儀はよしにせい」林左「イヤ憚りながら、詞をかへすではござらねども、武士は轡の音で目を覺すと申す事ござれば、御免蒙り、鯉口の

ト林左衛門いろ〳〵こなしあつて内へ入る、善平あたりに氣を付けゐる、林左衛門件の狀をよむ、此内武助尻からげ、鷺平が跡をおうて入る。林左「これを見られよ、又五郎殿より六通、如何にしても政右衛門合點ゆかぬやつ、これ其許は此疊の下に忍び、すはといはゞ政右衛門めを芋刺、合點ナア」善平「すりや政右衛門めを」林左「ぬかるまいぞ」ト善平疊の下へ隱れる、林左衛門跡の敷目を直しゐる、奥より政右衛門の聲にて。政右「林左衛門〳〵、林左衛門はどれへ行かれた」林左「爰に居る〳〵」政右「こゝに居るとは、こゝな横著者めが、おればつかりを盛潰して、ぬけるとは、林左衛門卑怯な〳〵」林左「さういはれては此林左衛門、返す辭はないてやないてや」政右「ちつとさうともござるまい、サア〳〵ソンなら奥へいて敵打か、いつぱい飲む程に、サア〳〵お出〳〵」ト政右衛門、林左衛門が手を引き奥へ行かうとする、眞中へお種、巳之助を抱き、二人が中へわつて入り。お種「さられた私、この子を抱へて居やう筈がない、ましてや男の子は、男に付くが習、これ戻しましたぞえ」ト巳之助を政右衛門に突付ける。巳之助「とさまいなう」政右「これは又しゆんだものをつれて來たぞ」ト政右衛門此臺詞いひ〳〵、ころりとこける。林左「いづれも御覽うじましたか」ト三間の間、暖簾切つておとす、慶藏亭主甚九郎、外に門弟中見事に並ゐる、障子家體の内に譽田内記、大殿の形にてゐる。「政右衛門が

奥より林左衛門善平いづる。林左「御内證、せつかく助太刀を頼まうと思召された政右衛門、却て去られさつしやれて、さぞ工面が違うたでござらうの」善平「なんの、あの手の内で助太刀なぞとは」林左「ハテサテ何をいはつしやるのぢや」ト向ふより鷺平、飛脚の形にていで。鷺平「林左衛門様、これにござりますか、鎌倉よりの御狀」ト林左衛門悪いといふこなし。林左「ハテサアこりや何にもいふ事はない、何かそれ物よ、御内證方、少しばかり色事、さる太夫よりの狀、こりや〳〵奴、そこらは粋を利かせい、暫時の中、何方へ御出なされて、これ〳〵粋よ粋よ、頼むは〳〵ハ、、、」ト扇子を顔にあて、鷺平にむかふへいけと仕方にてする、鷺平呑込み、花道の眞中へゆく。お種「さられた所に長居もならず、左様ならば林左衛門様、其内御目にかゝりませう」林左「よう御出なされた、又御出なされ」トいひ〳〵出る。「ハア、御内儀はもういなれたさうな。父よ母よと泣く聲聞けば」ト此せりふいひ〳〵花道へ行く。林左「何事ぢや」鷺平「鎌倉よりの密事の御狀」林左「ハテサテ大きな聲な奴ではあるぞ」ト狀箱取り、狀を懐へ入れ、又懐より狀を出し文箱へ入れ。「狀たしかに受取る、返狀はすなはち此内に有るほどに、急いで戻つてかへれ」鷺平「ハア」トいかうとする。林左「コリヤ〳〵までまて〳〵」ト此内武助委細みて居る。鷺平「ハア」林左「むかふで頭うつな」ト鷺平外し入る、

又かういはゞ我が口利口な事いはつしやると思はうが、イヤさう思ひさうなものぢや、なんと俺がいふのが無理か、よもや無理ではあるまいが、忠義には親をも棄てる侍の常、此の助太刀も女房の縁にかゝつての事、そこぢやによつて離別てしまへばしれた他人、すりや他人の助太刀する事もなし、足踏み伸して寝られるといふ物、そこで去るのぢや、不承ながらさう思うてもらはう」お種「そりやもう、あの様な花やかな奥様出來ました故お氣に入らずば去られませう」小棠「イヤ申し奥さま、お前を去らしては、聞きともないわいのう」小棠「サアこれには段々譯の有る事でござります る」お種「いうて下さんすな、譯がなうて旦那どのが、身請なさるゝものかいのう」小棠「其いひわけは」政右「アヽこれ太夫、何にも言譯する事はない、暇の印の一腰、去狀ぢや持つて行け」お種「そんならどうでも」政右「こしらへは麁相なれども、なまくらでもない物ぢや、賣りなりとも拂ひなりとも勝手にして、しろふやうになされ、小遣になされ」小棠「それではわたしが」政右「ハアテ何にもかまふ事はない、サアおくへいて抱かれて寝やう」種、孫「エヽ」ト兩人切歯する。政右「燃えるか、角が生えたか」お種「エヽこなさんはなう」政右「きこえぬ、恨は跡で存分腹立て、去つた女房にかまひはない、イヤやつさもつさそつちでせい」トをどり三味線にて、政右衛門奥へ入る、孫八、お種跡に殘り、思案して居る、ト

刀は」政右「ハテならぬといふにしちくどい、助太刀するとは胸が悪るい」お種「ハイ」ト力おとす。孫八「そんならお前様、いよ〳〵助太刀はいや、エヽ情ない、見下げはてたお心でござりますナア」ト孫八拳を握り。「申し〳〵、扨はお前さんは相手が怖いによつてゞござりまするか、いやさ又五郎めが恐しうござりまするか、コヽヽ此の奴めは下郎ながら、おのれやれ又五郎めを尋ね出し、そつ首をとつらまへてお旦那、立所にざつく〳〵と、膾たゝいたやうにささうと思うてゐますわいの、それになんぢや、助太刀聞くと胸が悪い、聞きともない、そりや嘘だ、まことは又五郎めが怖いのだ、恐しいのだ、又怖くなくば助太刀してやらうといふてくだされ、奥様爲には爺父さま、また御前の爲には舅御さま、坊さま爲には祖父さま、すりや奴めが爲にもお主さま、並々ならぬ大事の敵、サア申し〳〵助太刀してやらうと、ツイいうて下されませ、これ物をいはつしやれ、啞か聾か、物いはしやれ、これものいうて下されいのう」政右「成程これは儕がいふ通り、過つた〳〵、向後心を改めて、靜馬が助太刀してやらう、といひたいがアヽならぬ。なぜといへ、此の政右衛門には、譽田内記様といふお主が有るわい、先の相手の又五郎が、どのやうな手練ぢややらしれぬ、首尾よう敵討おほすればよけれども、若や返討に逢ふ時には、どの命をもつて御主人へは忠義を盡す、その所へ心付かず、助太刀〳〵、

るものかいの」ト小紫立つて退かうとする、政右衛門引のけ。政右「これはしたり、氣の弱い女ではあるぞ」ト孫八尻まくり、腕まくり、きつさうして政右衛門傍へ行き、顔見合せ、又うぢ／＼かしこまり。孫八「旦那どの、イヤ様、お前は／＼何とした事で、この様なお心におなりなされました、ほんにやれ／＼、滅多に白い歯も見せぬお方が、どうした因果で此やうに、夜も晝も遊所へばかりおはいりなされてござりまする、彼奴らはみな狐どもでござりまする、ばかしまするぞえ／＼、旦那さま、お前様は大事の／＼、たいてい大事のお身ぢやござりませぬかえ、それにマア酒ばつかりをお上りなされ、もしも病氣でも起つたら、いつその事に暗闇でござりまするわいな、エヽお前様はナア」ト目をすり膝をかく。お種「もえ出るも枯るゝもおなじ野邊の草、ひよんな時にひよんな處へ。わしが言付でもするやうに、此様に申したら、猶お氣に障らうかしらねども、此やうな面白い處へ參じましたは、まつたく私が悋氣がましい心ではさら／＼ござりませぬ、けふ此所へ尋ねて參りましたは、先だつてお前にお頼み申した、どうぞ助太刀がして貰ひたさ、弟靜馬が力におもふはおまへ一人、どうぞ其事がお頼み申したさに」政右「それが忌さに歸らぬぢやて」お種「エヽアノ力になつて下さんすことが」政右「ずんどならぬぢやて」お種「そんなら靜馬が」政右「助太刀する事まかりならぬ」お種「アノどうでも助太

けつけと物をいうて、愛想つかされてはどうもならぬ、サア本の譬にいふ通り、布は縦から男は女からと、もとは女房が悪いから、日頃不調法な私ぢやによつて、定めてお氣に入らぬことばかりでござりませう、ことに又、あの様な美しい、里なれた女中の粋とやらいふお人の手に入つて、いとしがつて下さんすりや、なほ宅の女房の事も子の事も、思召さぬ筈ではござんすけれど、是迄の馴染がひに、私が心の中を推量して下さんせいナア」小紫「これはマア／＼奥様でござりまするか、思ひもよらぬことになりまして、氣の毒なものは私一人でござりまするわいな」お種「なんのいな、主のお氣にいつたこなさん、何にも言譯に及ばぬ事いな」政右「コレ太夫」ト小紫氣の毒の心遣あり。小紫「エヽ」政右「こつちへよりや／＼」ト小紫迷惑のてい。小紫「イエもうそれでも」政右「ハテ何を遠慮する事が有るぞいの」ト政右衛門引よせる、孫八むつとする。孫八「これそこなお山どの、御家中で石部金吉ぢやといはれる程の堅い俺が旦那を、ようてんつにしやつたなう、申し奥様、お前様のやうに、主の臍を探るやうに、ぐづ／＼おつしやつてござつてはすみませぬ、大事の坊様を、繼母の手にかける事はなりませぬわいなう、どうでござりまするぞいな」ト小紫迷惑の意遣ひ。お種「孫八、わけもない事いやるわいの、なんぼうわしがお氣に入らいでも、大事の／＼本そう子の巳之助が、可愛がらしやんせいでな

由をいうて聞かさうか、おれが譌いはぬといふ證據は、奥を去りこくつてしまうは、さつぱりと邪魔のないやうにしておいて、さうしてから、そもじを身請するわい、なんと眞實ではあるまいか」小案「そんならわたしを身請して」政右「お氣にはまるらずと、奥樣になつておくれ」小案「エヽかたじけない、と禮をいはしておいて、後で笑ふでの」政右「後とはいはぬ、さつぱりと今身請せう」ト政右衛門手をたゝく。仲居「ハイ〳〵」ト仲居出る。政右「ハイ〳〵、われでは埓あかぬ、亭主よべよべ」「申し〳〵、旦那さま、お喚びなさるゝぞえ」ト亭主奥より出る。亭主「ハイ〳〵、何の御用でござります」政右「太夫が身請がしたいが、身の代は如何程ぢや」亭主「梅枝この方、お定りの三百兩」政右「そつこでうけ出せ三百兩」亭主「これはありがた山のほうちん丹と、お金を戴きいつさんに、とぶが如くに」ト三重にて入る、此内孫八見て腹を立て、子役を抱いて眞中へ出し。孫八「奥樣〳〵、もう〳〵〳〵」ト此所へお種出る。「矢竹でござりまする、おつしやりませ。だいじござりませぬ」ト孫八力み居る、お種見て腹を立てる、身構せうとして氣をかへ、會釋して、お種「旦那どの、先刻にから樣子聞きましてござんする、なんとやら私に暇をやつて、あの女中をお内儀さまに。イヤもうさうしたお意ではござりますまいけれど、女子といふ者は心の捌けぬものぢや故に腹の立つ、サア腹の立つまゝにつ

呼ぶ、小紫驚き、武助に目でしらせ、武助柴垣のかげへ、跫足する、かくれる。政右「小紫〳〵、小紫は何處いいた、小紫」ト政右衞門、小紫を見て。「氣がわるいぞよ〳〵、おればかりを待たしておいて、こゝに居つた、ひとり何して居るのぢや」小紫「サアそれはナア」政右「風にふかれて居たといふのか」小紫「アイナア」政右「てもふるいやつの」小紫「オヽ憎てらし」政右「これ太夫、おりや其方に分けてねがひが有る、聞いてたもるか」小紫「何をいな」政右「何をとはきこえぬぞよ〳〵、我身粋出すから、一ト夜さも抱かれて寢た事はないは、こりやおれが粋をつかうてのしうち、眞實は寢たうて〳〵、どこもかも、體も何處も紫色になつて居れど、こゝが粋の傳授ぢやと、じつと辛抱して居るも、そなたに可愛がられうため、何と眞間に可愛がつてくれる氣はないか、こりやどうぢやぞいやい、どうぢやぞいやい」トこのせりふの內、お種孫八出かけ、背後より聞きゐる。小紫「サア〳〵、なんぼうお前が其樣にいはしやんしても、男の心飛鳥川、淵が瀨となる世の譬、わしや騙されうかとおもうて」政右「だまさぬは、眞實から出た誠の眞中を見せうか」小紫「その誠實はお前どうしてみせるぞやえ」政右「サア其誠實、滅多にやいはれぬ」小紫「それ〳〵さういはんすが、噓といふ證據」政右「噓でない證據を見せたその上で、忌とはいはさぬぞ」小紫「わたしもおつて賴む事、後へはひかさぬぞえ」政右「まことの理

い」小紫「なんの大事を聞いたとて、女房の事ぢやもの」武助「壁に耳、豪猪さへ見物に出る世の中。七人の將門は滅すとも、女に油斷すなと昔からの譬」小紫「わしが意をしらぬ人かなんぞのやうに」武助「人に言ひ居つては、旦那樣の爲にならぬわい」ト小紫居直り。小紫「こちの人、サア殺してくださんせ」武助「ヤ」小紫「大事を聞いたわたし、お前の意のすむやうに、さつぱりと私を殺して下さんせいな」武助「こいつ人に困らす樣なことをぬかすかな。おどれ其樣ぬかすと○本間に切るぞよ」小紫「未練な心はござんせぬ、サア切つて下さんせ」武助「オヽ切つて見せう、おどれ。不死身ぢやよつて切るまいと思はうが、たとひ不死身でも人は切るわい。なんまみだ○なんまみだ」ト小紫手を合せ。小紫「南無あみだ佛」ト武助思入、いろ〳〵有り。武助「疑ひは晴れたわい」小紫「わたしが聞いたとて、人に漏す氣はちつともなけれど、疑はれては心がすまぬ、やつぱり私を殺して、疑ひ晴してくださんせい」武助「あやまつた。疑うたは俺が蝶螺のしりぢや、堪忍してくれ」小紫「ハテお前の心のすむことなら、なんの命が惜しからうぞいナア」武助「それが本間の事なら。どうぞ早う詫言してたもいのう」小紫「氣遣ひして下さんすな、おつ付け首尾よう便を聞かするわいな」武助「かならずその約束の通りに」小紫「めでたい吉左右」武助「そんならよい便まつてゐるぞや」ト唄になる、内より政右衛門の聲にて、小紫〳〵と

られうとはおもへど。切られぬ腹は切られぬ、おりや不死身ぢやによつて、腹のかはりに頸きつてこまさうとおもへどもな、猶きられぬ、堺でいつそ川へ身を投げてと思へども、ひよつと土左衛門になつたを、知つたやつが見をつたら。コレ武助めが、食物がなさに、身を投げて死にをつたのぢやと笑はれるはかまやせんけれど、旦那様の名の出るのがけたいな、忌々しいよつて、もう死にもせんのが無念な所か、口惜しいわい〳〵」小紫「これはナアかんまへて、そんな悲しい事やと思うて下さんすわいナ」武助「思はいぢや、汝ばかりよい著る物著くさつて。美味い物ばかり、上の口へもコヽ、この下の口へも、飽ほど喰ひをつて、俺が事は根から構ひをらぬもの」小紫「これいナア滅相な事いうてくださんすな、此の里へ來て今日までは、ちつとも身を汚した覺はござんせぬわいな」武助「ないものが、なぜ勘當の詫言はしてくれをらんぞ」小紫「オヽ道理ぢや、道理でござんす、道理ぢやわいな、お前其の突詰めた意で、勘當さへ赦して貰らうたら、敵討の御供を」ト武助、小紫をしかたにて叱り。武助「シイ。おのれマアそんな事、どこで聞はつつてうせた」小紫「それは最前、政右衛門様の奥様、又若黨の孫八殿とやらが、政右衛門様に助太刀の願ひをなさるゝを、立聞したわいな」武助「マアそんなら、奥様や孫八も來て居るか」小紫「さうでござんすわいな」武助「大事を聞かしたれば。もう助けておかれぬわ

かいな」武助「廿日の上にもなるのに、なぜ便しをらぬ」小紫「尤でござんす、しかし大事のお前の願ぢやもの、如才があつてよいものかいナア」武助「何のない事があらう、十日も廿日も何にもいはずに。なにしてをつた」小紫「サアそこぢやわいな、政さんの側には、かの林左衛門といふ意地悪、また其外辨慶が付いてゐるによつて、咄する隙がないわいな」武助「おのりや辨慶が怖いか。おりや辨慶でも金平でもなんとも思やせぬけれど。サア勘當といふ武器には、どうもかなはぬわい。どうぞ親旦那の御息才な内に、謝罪してと思うて居る間に、つひころり。ハア南無三しまうたと、ほんに精も力も落はてたれば。ナア、イヤ〳〵これからが忠義ぢや、おどれやれ若旦那様の御供してと思うても、どうもならぬ。マア勘當免してもらはにやならぬによつて。おどれを頼んだぢやないか。けたいな、男が女郎に頼むのは。卑下たらしいこつちやけれど、忠義にはかへられぬと、思ひ思うておのれを頼んだ効もない。なぜ今までいうてくれくさらぬ。コリヤおどれ、どせう骨がくさつたのぢやの。毎晩〳〵新しい男と寝くさるがよさに。陣の男を飽きをつたのぢやと、氣が付いたによつてナ、離縁状おこしをらぬ中に、おのれが方から先を思うて去つたのぢやわい。エ、けたいな、勘當うけたも本は汝故ぢやわい、よいよい、もう詫言もしてもらやせん、死んでこます。すつぱりと腹切て、流石は武助ぢやと譽め

れもせず。エヽ口惜しい」ト小紫、武助を見て。小紫「マアお前は武助さん、逢ひたかつたわいナ、よい所へよう來て下さんしたナア」ト武助編笠をとり内へ入り。武助「ヤイあんだらめ」小紫「これお前は偶々あうて、そりやマアなんの事ぢやぞいな」ト武助、小紫が胸倉取り。武助「エエおのれはナア〳〵」小紫「これナア、これや何とするのぢやいな」武助「なんとせうかや。一體おのれを此樣な態にしておくも。こんな事いうて居る隙はない。それ見をれ」ト去狀投出し打つける。小紫「エヽこちの人、なんでこりや、何でござんす」武助「さつた女房に用はない」小紫「武助さん、私には何の科あつて、去つたといはしやんす、こんなものは穢らはしい、忌ぢやわいな、しらぬ〳〵、サア何が氣に入らぬ、ちやつというて下さんせい」武助「おのれがど根性に問へいやい」小紫「イヽエわたしや何にも身に覺はない、おまへは何を其のやうに腹立てて下さんすぞいな」武助「何を。助平づらめ」小紫「わたしがマアどうしたぞいナア、必ずそんな事、あだけにもいうて下さんすなえ」武助「なぜ勘當の謝罪してくれをらぬ」小紫「サイナア、折を見合せ御願ひ申さうと思ふ中、花に嵐といろ〳〵の妨げ、其の上酒の醉がさめねば、言出す折がないゆゑに、しんきで〳〵なるこつちやないわいナア〳〵」武助「けふで幾日に成ると思ひをるぞ」小紫「そればつかりに恥かしい此姿、うか〳〵暮して居さうな女子ぢやと思うて居て下さんす

敷の、次の間へやつて下されい」仲居「かしこまつてござりまする」亭主「そんなら政さまは大座敷、あなた様は次の小座敷へお供申しや」お璽「よい様に頼みます、然らばどなた様にも、これで緩りと御遊びなされませい」孫八「後ほど御目にかゝりませう」お璽「孫八、そちも奥へ、サアほんおじや」ト唄になり、孫八は子役抱き入る、藝子、仲居、亭主、みな〳〵入る。善平「いづれも御覧じ、女房子まで呼寄せての大馬鹿、所詮助太刀を致す所存とは見えませぬ、この通り又五郎殿へ知らせ、用心の門を開かせませうかい」五右「左樣でござる、併し最前先生の命令には、コレ」ト善平に囁く、又慶藏に囁き。「御合點な」善平「ござりませ」ト三人奥へ入る、唄になり、石留武助編笠に木綿やつしにて一本ざし、向より出て來る、奥より小紫出る、内相かた。小紫「モウモウ飲めぬ、堪忍して下さんせ、ちつとの間、爰に風に吹かれて居る程に、そこへよいやうに頼入つたぞえ」ト氣をかへあたりを見。政右衞門樣のあの御身持は、噓か實か。こちの人武助殿に受負うた勘當の詫、政右衞門さまから、靜馬樣へ願うて貰うてくれとの頼み、とはいへあの然體、酒に醉つてござれば、御願ひ申す首尾もなし、どうしたもので有らうな」ト又唄になりこなしある、ト武助伸上り四邊を見。武助「エヽ面白さうに騷ぎをるナア。どうでも人の風聞に違はぬ、政右衞門樣のあの放埒。いつそふんごんで。イヤ〳〵御勘當の身の上なれば、往か

る。「ない〳〵、賴みませうか」亭主「アレ誰方か御出でなされたさうな」仲居「アイ〳〵、何の用でごさんすえ」ト出る。孫八「イヤ別の事でもないが、この家へ唐木政右衛門様といふお方さまが、御出なされてゞあらうが、其お方様はどれにござらしやる」仲居「これはむづかしい、政右衛門様といふは、エヽ政さまの事であらう、成程お出なされてゞござりまする」孫八「サア奥様、おはいりなされませう」トお種、孫八子役負ひながら入る、亭主出て。亭主「マアこれは〳〵、お大盡様の御來臨ぢや、皆こい」孫八「エヽやかましう吐すな、氣が逆上るわい」ト内より五右衛門、慶藏出る。五右「なんとおの〳〵御覽じたか」慶藏「イヤはや惘れた事サ」善平「アノ爲體では中〳〵」トいひ〳〵出て。五右「これは〳〵、政右衛門殿の御內證、お種殿でござりませぬか」お種「これはしたり五右衛門様、何方もようおいでなされました」善平「今日は政右衛門様のお饗應にて、われ〳〵もよい慰みしまする」慶藏「扨は御內證にも、お氣霽に御來駕と見えまする」お種「左様でござりまする」五右「しからばこれへ御出でなされ、藝子どもに彈せて、お慰みなされいサ」仲居「お前様もちつとこつちへお寄りなされい」ト孫八をとらまへにかゝる。孫八「エヽ油臭い、寄るな〳〵」仲居「これはけい〳〵しいお方ぢやぞ」孫八「なんと奧様、一時も早う旦那にお逢ひなされませぬか」お種「これ〳〵コレ、そこな女中、其の政右衛門様のござる御座

右衛門、禿、仲居、亭主、みな〳〵奥へはいる、林左衛門、慶藏、五右衛門、善平、顔見合せ思入有るべし。林左「いづれも、大方見えました」三人「左樣でござりまする」林左「此あとは奥で」三人「まづござりませう」ト唄になり、向より政右衛門女房お種著流し抱帶、屋敷風にて出る、跡より池添孫八木綿やつしに大小、若黨の形にて、子役巳之助振袖著ながしに大小、これを脊に負ひ花道にて。お種「孫八、旦那殿の御出なさる〻揚屋はどこぢや」孫八「ナイ〳〵、向に見えまするあの茶屋が、左樣でござりまする」お種「そんならモウ爰ぢや。これぼんち、爺樣に御目に懸りやつたら、いつもの樣に手を支へて、行儀正しうお挨拶申しやヤ」巳之助「かしこまりました」孫八「なんとぼんさん、茶屋町と申すものは、太鼓や又は三絃をひき立て〻、賑やかな事でござりまする、ぼんさまは面白うござりまするか」巳之助「イヤおれは太鼓や三味線は嫌ぢや、やつぱり毎日屋敷で稽古する劍術が面白いわやい」孫八「エ丶御發明な、奥樣、坊樣のおつしやつた事御聞きなされましたか」お種「オ丶賢い事、よういやつたのう、それに引かへ政右衛門殿の放埒惰弱、廓通ひに夜を晝とも分ちなく流連の。コリヤ爰ではいふ事ぢやない、夫に遇うてからいふ事、わしとした事が、はしたないホ丶丶、サアおじや」孫八「なんでも旦那にお逢ひなされましたら、とつ捉へて御意見なされませ」ト本舞臺へかゝり、お種案内せいといふ仕方す

サアこれで一ツ飲まれい〳〵」政右「こいつはえらひ者ぢやナア」林左「どれ〳〵身どもがお酌致さう」トつぐ。政右「こりや大體でいけぬわいの」林左「ひやういはずと薩張と飲まつしやれ」政右「もう絶體絶命、死ぬると思うてやつてのけうかい」亭主「これはお見事ぢや、サアおあがりなされませい〳〵」政右「たべよう〳〵」小紫「政さん、お前此酒のむかえ」政右「のまねば武士の一分がたゝぬ」小紫「それでもお前さん、此酒あがつたら、又御寢なろぞいな」政右「寢たらなんぢや、酒のんで寢る事ならぬお觸でもあつたかの」小紫「そんな事は知らぬわいな」政右「知らぬ知らさぬ中なれば、浮れまいものさりとては、〳〵、可愛や俺に酒を過させまいと思うて。可愛いやつの、これ〳〵林左、近比不埒とやいはん、ぶしつけとやいはんなれどもこの有樣、どうもこたへられぬによつて、開でちよんの間と致したい、粋を通して此場を見遁しやつてくれい、コリヤ手を合せてな林左大明神、するつかせてたび給へ、南無林左大明神」林左「粋といはれて退かれもせまい」小紫「わたしもおまへに咄して問ひたい事もありおねまへ」政右「マアなんぢや」小紫「サアお寢間でなければ、エ、オ、笑止」政右「そんなら林左、此場の不交際は堪忍してくれるか」林左「どうなとしをれ」政右「さつても粋な骨頂め」林左「追從いはずと早う往きやれ」政右「然らば粋の親玉樣、後刻御意得ませう」亭主「ちやつとサア御出なされませい」ト政

には叶はぬ筈の事サ」 善平「すつぽんとお月さま程違ひませうかい」 林左「イヤ左様にもござらぬ」 慶藏「同じ師匠をとるなら、林左どのの樣な師匠をとれば、きつい幸福でござる」 林左「イヤさうおもはつしやるが、めい〳〵の身の冥加でござる」 政右「なんとぢややら、かたになつて來た、なんとこの話取りおいて、酒にせう〳〵」 林左「よかろ〳〵」 政右「サア〳〵亭主、何なりとも飲めることを始めい〳〵」 亭主「おつと合點そんならこのならんだ道具で、見立づくしはなんとあろ」 ト此合方になり、みな〳〵聲そろへ。 皆々「こりや又えらひえらしこい」 秀「此さかづきをかう持つて、〳〵、瓢簞なんどはどうであろ」 皆々「こりやまたえらひ、えらあてぢや」 善平「此鉢臺をかうもつて、此鉢臺をかう持つて、鳩部でなんどはなんとあろ」 皆々「さつてもきついえらあてぢや」 林左「この鉢臺をかう持つて、この鉢臺をかう持つて、ま一つ持つてかうよせて、二王の下駄はなんとばし」 皆々「これもけうといえらひどい」 政右「そんならおれもやつて見よ、此燗鍋をかうもつて、此とさんをばかうもつて、ま一ッ鉢をかうもつて〳〵。かう持つて、かうもつて」 皆々「智慧貸そか〳〵」 政右「ちゑ借らぬ〳〵、イヤサかうよせて、かう持つて」 皆々「ちゑかそか〳〵」 政右「イヤ借らぬ〳〵。かうもつて〳〵」 皆々「ちゑが貸したい、智慧かそか」 政右「これがどうもならぬわい」 林左「イヤ負け〳〵、サア

界、それに又、鑓の傳授せいとは、きつい不粹〳〵、此政右衛門、御案内の通り馬鹿者なれど、今も申す通り今々の恩もない主人に、このはうの大切な家の祕傳を教へてやつたら、そりやもう本の青海苔を貰うた禮に太々神樂を打つやうなものぢや、なんとさうぢやないか」林左「スリヤいかやうに御意なされても」政右「教へはせぬ〳〵」林左「そんなら助太刀は」政右「助太刀とはな」林左「ハアイヤこの盃で、身どもは一つ飲むが、助けてくれる氣はないかといふ事」政右「きらひ〳〵、酒の事でも助けるといふ字はきつい嫌ぢや」林左「靜馬が頼む」政右「サア其助太刀が忌さに、此やうにかくまれて居る」林左「イヤそりや僞り」政右「なぜ〳〵」林左「貴公の爲にも舅の敵」政右「それも女房さつてしまひ、アノ君を根引にすれば、さらりと女房の縁はないわ、何ときつい孔明か〳〵」林左「成ほど、それが當世、中々貴様位の立合では、助太刀はあぶないもの、先だつての御前の立合、腹は立たつしやるな、其の時貴様をぶちのめす事はなんでもない事ぢやけれども、かはいさうに浪人からかけあがつたもの、叩きのめさば奉公はなるまいと心附き、コリヤ武士の情ぢやと負けてやつたればこそ、けふは五百石はとれるといふもの、なんと政右衛門さうぢやないか」政右「それにとんと違ひなし、そこで今日の饗應ぢやてや」林左「アレ門弟中、聞かつしやつたか、先日の負はおらが、態と負けてやつたのだサ」亭主「そりや先生

かりいふので、政さんばかりを潰すのかいナア」慶藏「イヤ潰すのを、政どのへの御馳走したは、これを本の卵酒といふわいの」小紫「そりやまた何故にえ」慶藏「おつと待つたり、卵酒の因縁會得いたした」藝子、禿、仲間「どうぢやえ」林左「ハテ潰さねば君の味がしれまいといふであらうが、何とどうぢや〳〵」草見「どうでも先生はえらいものぢや」小紫「わつけもない事ばつかり、政さんもうよしにして下さんせ、わたしやお前にいはねばならぬ事が多と有るわいな」政右「いはねばならぬ事とは、如何樣の事かナ」林左「イヤこゝな畜生め、さうしげつては地黄と薯蕷を、飯の代りにせずばなるまい、瘠るぞや〳〵」政右「さういはれては、猶飲まねばならぬといふものかい」草見「さらばわれらお酌止めましよと致しませう」政右「助八といふ意かな」トいひ〳〵政右衞門盃うける。林左「イヤナニ政右、貴樣に尋ねたい事があるが、いうてきかす氣か」政右「何なりともお尋ねなされい」林左「イヤ外の儀でもない、神影流の鑓の祕傳を、貴殿とのさまへ傳授する氣か」政右「けもない事〳〵」林左「スリャどの樣に殿が御意なされても」政右「よう物を合點して見てくれたがよい、一子相傳の祕密口傳、それとのにも三代相恩の御主人といふ樣なことなれば、教へまい事でもない、僅かやう〳〵今日此ごろのお館、その和郎に大事を傳授して耐るものかい」林左「そんならいよ〳〵傳授はしやせぬか」政右「弓は嚢、太刀は鞘、納まる此世

造り物、三間の所一面の長暖簾、上の方障子やたい、橋懸の方小柴垣、門口いつもの所に有り、掛行燈に春日屋と書付け、平舞臺の疊五疊敷き有り、これは後に下たくぶること有り、寶永祭の囃物にて、まくらに手拍子とり、唐木政右衛門、傾城小紫、櫻田林左衛門、藝子、禿、亭主甚九郎、山岡慶藏、草見五右衛門、湊江善平、仲居お春出で、大さかづき鉢肴銚子いろ〳〵有り、此ならびにて道具かはる、暫く寶永まつりのまくら拍子あつてやむト

藝子「サア〳〵政さんが負ぢやわいな〳〵」政右衛門「おれは負けはせぬわいやい」藝子「むりばつかり、そぢやほどにの」亭主「かう致しませう、今のはとんと勝負がしれませぬ、われら亭主役に、さつぱりと一ッ下さりませうかい」林左衛門「でかす〳〵、汝飲んで太夫すへさし枕とせい」ト亭主のむ、跡小紫へやる。小紫「これはまた迷惑なお指圖な」禿「小紫さん、よいわいな、林左さんがすけたいといふ事ぢやわいな」林左「さりとは、すつぱどもが指すものぢやないわい」政右「所をわれらおあひと出懸けうかい」小紫「まささん、其樣にあがる事ないな」林左「なぜなぜ」小紫「イエ〳〵、なんぢやあらうと、政さんの名代は私がするわいナア」草見「ハテきつい心中な」林左「其筈ぢや、春早々から大坂に二ッ有つたげな」湊江「其心中男の政右衛門殿は、中々滅多にいきつく者ぢやないぞ」小紫「何をいはしやんす、何のかのといふと、お前方は上手ばつ

こと」ト脇差にて雛をきる。「ヤア此一通は」トひらく。靜馬「ナニ〳〵渡邊靜馬へ申下す一書、實父靱負が敵澤井又五郎、見付け次第に場所をかまはず、討取るべきもの也」濱町「それも夫が志」靜馬「殘るかたなき御懇情」香太郎「靜馬、其方には暇を遣はしたぞ」右内「首尾よく討つて三光丸へ仕へよ、丹右衞門」丹右「ハア〳〵」右内「さらば」丹右「冥途の御供」ト腹切らうとする、伴作むく〳〵と起き。伴作「おのれを」ト丹右衞門を切にかゝる、立廻あつて伴作を斬殺し、その死骸の上へのり。丹右「おめでたう存じ奉りまする」ト丹右衞門腹へ突込む。幕

七ツ目

一亭主春日屋甚九郎　瀧五郎
一禿うへの　富三郎
一山岡慶藏　三藏
一湊江善平　正藏
一けいせい小紫　尾上久米助
一櫻田林左衞門　中村次郎三
一石留武助　嵐文五郎
一こん田内記　中山來助
一門弟侍五六人
一侍大ぜい

一仲居おはる　五六八
一飛脚さぎ平　正五郎
一草見五右衞門　喜十郎
一政右衞門子巳之助　太次郎
一政右衞門女房おたね　花桐豊松
一池添孫八　嵐三十郎
一渡邊靜馬　澤村宗十郎
一唐木政右衞門　中山文七
一乘物かき四人

者」丹右「則ち一角を老母が忠死によつて見出し、詰腹切らせしが、拙者とても其計略の爲に毒藥の苦しみ」右内「シテ首討つたか」丹右「御實檢下されませう」ト城五郎が首を風呂敷包より出し、右内之助が前におく、右内之助首をきつと見て喜び、がつくりとする仕打。右内「ホヽ、出來した、手柄〳〵」濱町「して連判の姓名はたれ〳〵」丹右「かくの通り」ト連判拔く。伴作「それ見られたりや、破れかぶれぢや」ト丹右衛門に切つてかゝる、立廻にて丹右衛門伴作にあてる、伴作こける。丹右「連判の初筆は澤井又五郎」ト連判狀を大火鉢へ打込む、炎々と燃える。靜馬「詮議の手懸となる連判、なぜ火事なされたナ」丹右「尤々此連判を此まゝおけば、又五郎は謀叛となつて天下の科人、そこをおもうて燒棄しは、そちに敵が討せたサ、まつた見遁せしも其心、殿樣へは不忠の段々、御慈悲の上幾重にも御免下されませう」春太郎「丹右衛門が忠義によつて、御敎書再び手に入るからは、上杉の家は萬々歲」濱町「オヽそれ〳〵、姫君さまと春太郎さま、御婚禮相すむ上は、舟岡の所領を申下し、足利の御家門と仰出され、今日よりは足利春太郎定政さま」春太郎「此上もなき御惠み」右内「スリヤ上杉の跡目の儀は」濱町「三光丸へ別條なく跡目仰付らるゝ」右内「かさね〴〵有難う存じ奉りまする」春太郎「どこもかもをさまつて、この樣な嬉しい事はないわいのう」濱町「ソレ靜馬、今こそ最前渡した雛の切腹」靜馬「ハアヽま

造り物元の道具へもどる、と右内之助壺折にて疵の痛の仕打、曲彔に靠れ、春太郎靜馬介抱して居る、彌生姫濱町お袖しがらみ付添ひ居並び居る。

靜馬「とのさまお心を確にお持ち下されませう」右内「丹右衛門は未だ歸らぬか」靜馬「いまだ歸られませぬ」右内「ハテナア延引遲參は心得ぬ、ソレ遠見申付けい」春太郎「ハアヽ、ソレ家來ども、遠見〳〵」家來四人「ハアヽ」ト四人花道へ走り行く。右内「丹右衛門歸り遲參はナ、十が九ッ上杉の家の斷絶、ハテ無念なナア」ト遠見走り戻り。四人「ハアヽ申上げまする、丹右衛門どの早打にて只今これへ」「エイ〳〵エ、エイ〳〵エ」ト數多の人衆、乘物に細引を付け引き來る、丹右衛門、鉢巻にて、包みし物をば高しきていにて、本舞臺へ乘物するゑる、丹右衛門出てうつむけになる。四人「丹右衛門殿、殿樣の御前、氣を慥におなりなされませ」トいふ、丹右衛門きつとなり、きよろ〳〵とする。右内「丹右衛門か」丹右「とのさまでござりまするか」右内「又五郎を召捕つたか、どうぢや〳〵」ト苦しき仕打。丹右「又五郎儀は老母が忠義によつて、據なく見遁し、則ち御教書並に謀叛徒黨の連判」ト差出す、右内之助手にとり。右内「して謀叛とは、ナヽ何もの」丹右「澤井城五郎と申すは假の名、まことは柴野一角」濱町「其一角は足利上杉兩家へ仇あるもの」右内「スリヤ日外鎌倉の松原にて、管領と思ひ某が乘物へ鐵砲を打かけし曲

ト出して見せる、鳴海とつて。鳴海「こりや謀逆一味の連判狀」城五郎「いつぞや鎌倉において、上杉春太郎に下しおかるゝ安堵の御敎書、荒卷作作に吩咐け、奪取らせし上杉の跡目の御敎書」ト鳴海へ見せる、鳴海とつて。鳴海「かほど迄しこまれし其許の本名は」城五郎「身どもこそは山名が陪臣、柴野一角と申す者サ」鳴海「さてこそな、聞きしは。柴野一角殿が、なぜ又澤井の家には養子にきたぞ」城五郎「それこそはわが計略、又左衞門が緣を索め、近よらん爲サ」ト此臺詞の內、鳴海右の三種、連判狀の紐にてしつかりと括り。鳴海「サテこそナア、これ取らうばかりぢや、聟どのソレ」ト三種ながらほふりやる、丹右衞門、笹尾起きる、丹右衞門、城五郎に詰かけ。丹右「柴野一角覺悟せい」ト黑裝束の侍、鐵砲を持出で。侍「動くな」ト鐵砲かまへる。城五郎「こしやくな奴の」丹右「そちを見出さう爲ばつかりに、種々と心を碎き」鳴海「親子三人が命を餌にかひ」笹尾「まんまと見出した夫の忠義」丹右「最早遁れぬ柴野一角、尋常に」三人「切腹切腹」城五郎「エヽ口惜しやナア、燒鳥婆めが計略に陷つたるか、エヽ〳〵〳〵無念やナ」丹右「かく八方を取卷いたれば、汝が體はこちらのもの、細事いはずとくたばつてしまへ」城五郎「たとへ汝等ごとき取まくとも、一方を切拔け、汝等一々眼に物見せる、覺悟せい」丹右「そりや」侍「動くな」城五郎「なにを」ト皆々見得になる、チヨン〳〵にて道具まはる。

やうな、時代の合はぬ婆ぢやないわいやい」丹右「エ、口惜や、女童にやすく、と、たばかられしか」ト鐘ごんと突く、ト丹右衛門きつとなり。「アノ鐘は九ツ、最早主人も此寺へ御出馬あらば、上杉の御家は斷絶、エ、く能くも武運に盡果てしか、エ、く無念なア」ト奥より與兵衛段九郎走り出で。兩人「丹右衛門うぬを」ト丹右衛門に斬つてかゝる、二人大立、此内笹尾ウンとこける、鳴海よろぼひく右の鉄砲を持ち、丹右衛門を打たんと窺ふ、トヾ丹右衛門兩人を斬殺す、ト件の鉄砲をぽんと打つ、丹右衛門ウンとこける、鳴海どうと後へに居る、右鉄砲の彈、松に中り松より狼火あがる、奥より城五郎しづく出で、鳴海にむかひ思入あつて。城五郎「ホヽヽでかされし鳴海どの、いしくも謀られし、手柄く」鳴海「約束の通り、丹右衛門が持參せし管領よりの御教書、まんまと此方へ奪取ました、して又五郎は」城五郎「裏道より女乘物に乘せておとしました」鳴海「して落付く所は」城五郎「參州と心ざしおとしました」鳴海「エ嬉しや、しかし道の程が覺束ない」城五郎「それは氣遣ひ致されな、竹内贅宅、近藤野守之助、其外手勢二三十人ばかり付けやつたれば氣遣ひない」鳴海「エ、忝ない」城五郎「それがし大望成就せば、又五郎は大名に取立てる、これを未來の土産にして、潔よく臨終せられよ」鳴海「して又大望とおつしやるが、その大望の樣子は」ト城五郎懐中より連判狀出し。「一味徒黨の連判狀」

てまつる」ト此内丹右衞門笹尾、毒藥のあたりしこなしにて、色々苦しき思入。丹右「今この茶を飲むよりはやく、五臓六腑。腦亂して、しんほうらくを貫きしは、扨は」笹尾「アヽ術ない、苦しいわいのう」ト此内、鳴海にこ／＼笑うてゐる、ト丹右衞門、笹尾を拉へ。丹右「エヽ畜生めが、よくも親子言合せ、身に毒を與へたナア」ト笹尾が首筋とつてきつと見る、此内笹尾、始終苦しき思入。「惣身はんしよくして、しこんのはみだし、うなゐを貫き、てんかんして苦しむは、偖はその方も毒藥を喰うたな」ト此内鳴海も毒に中り苦しむ思入。鳴海「ハヽヽヽハハヽハテ快やナア、汝等二人を斯うせう爲、最前からいろ／＼と憂に沈み見せたればこそ、よくも一ぱい喰うたナア、それのみならず慾ばつて、澤山に食らうたな、そのやうにもう／＼どのやうに躁いても、さう喰ひ込んだらもう叶はぬ、おのいらに喰はさうばつかりに、此ばゝが毒味して、己が命を餌にかひ、うぬらを殺す我計ひ、なさぬ中のおのれ、何の可愛いかろ、それに連添ふ聟丹右衞門、又五郎が爲には命の仇、わが子を助けんばつかりに、命をすてゝ邪魔になるおのれら二人をしまふ、さう心得てくたばつてしまへ」ト長刀杖につきおもひ入。笹尾「エヽこなさんはのう、ようも／＼其様な慘い事がいはるゝのう、こゝな鬼婆、義理も法も辨へぬ畜生、四ツ足人非人、エヽこなさんはのう」鳴海「何をよまひ事をぬかす、今時に義理立する

れが嬉しうなうてなんと致しませう、これといふも母さんのお蔭、エ、辱なうござります」
鳴海「又もや御意の變らぬ中に、祝言の儀式取行はん、ハテナア」トこなしあつて。「それよ不束な此婆が手前なれど、夫婦の中も井戸茶碗、互の心も服加減、母が齢にあやからせ、友白髮まで儀を祝ひ、一ぷく立てゝ濃茶の盃」ト鳴海立ち、圍の方へゆく、しづかなる合方、鳴海かこひの障子明け、臺子に懸り茶を立てる。笹尾「かゝさんのあのお手前のお茶が濟んだら、直に義理有る又五郎を」トこなし有るべし。鳴海「何もくどくいふ事はない、追付け祝言の盃をさせませうぞや」ト鳴海茶を立て、かこひより出で、しづくと丹右衞門が前へ坐りこなし有る、ト笹尾へ渡す。笹尾「かゝさん、御苦勞に存じまする」鳴海「サアく早う飮んで、聟殿へさしやいのう」ト笹尾、丹右衞門がこゝろをかね飮みかぬるこなし、いろく鳴海、笹尾が氣を吸み。鳴海「こりや母が氣が付きませなんだ、かゝる騷動の砌、申さば敵中なれば、もし毒藥もあらんかとの疑ひ尤々、茶の湯に毒味はなけれども、亭主の馳走ぶり、ちよつと口をそへませう」ト鳴海茶碗とり、一口のむ、笹尾へまはす、笹尾こなしあつて茶碗をとり、二口のみ、丹右衞門へまはす、サア聟殿、祝言の學びの觴、觴とうけて下さりませ」ト丹右衞門茶を飮む。「ホヽホヽめでたいく、はゝが此しわらくさい聲で、祝言を祝ひませう、千秋萬歲の千箱の玉をた

さ有る時にはこの娘、親もなし兄弟もなく、三千世界に便にするものはこな様より外にはない、どうぞ聞分けて下さりませいのう」トなく。笹尾「段々のお物語、聞く程つらい我身の上、義理のある弟殺すまいと思へば夫の武士が立たず、義理と情に絡まれた私が身の上、母さんお前に別れてなんとせう、私も生きて居りませぬ、死出の山も三途の川も、一所につれていて下さんせ、お前ばかり死なうとはきこえぬ、そりや胴慾ぢや、胴慾でござんすわいナア」鳴海「そんなら此方も、この願が叶はぬならば死んでたもるか」笹尾「夫に見捨られたこの身、なに樂みに存らへて居りませう。母さん」鳴海「むすめ」ト兩人手をとり。笹尾、鳴海「あぢきない世の成行ぢやナア」ト大泣、ト鳴海きつとなつて。鳴海「所詮願のかなはぬ上からは、べん〳〵と生きてゐようか娘」笹尾「かゝさん」兩人「南無あみだ佛」ト兩人丹右衛門が脇差を抜かうとする、丹右衛門とめて、丹右「まことや、唐土珠崖の母子、玉を携へ關を越えしが、此科は我なるか、イヤ我なりと互に爭ひしかば、關番その志を感じ、其科を赦すとある、その如く互に義理の眞實心、聞とゞけて只今祝言いたしてくれう、といひたいものなれど、未だ又五郎を召捕らざれば、眞の盃は叶はぬ、眞似ばかりは致してくれう」鳴海「そんなら祝言のまねびをなされて下されうか、これ〳〵娘、丹右衛門どのが祝言をしてやらうといはつしやるが嬉しいか」笹尾「こ

ば理がきこえぬと、元私はあの子の爲には乳母でござりまする、あの子の母御樣は、大病の枕元へ私をおめしなされ、こりや乳母よ、おれはどうで今度の病氣が出立で有らう、もしおれが死だらば、必ず此子を頼むぞよと、くれぐ〱とのお頼み、アヽお氣遣なされますな、私が目の黑い内はあのお子樣にけがはさしませぬ、隨分大切に致しまして、御成人の後はよい聟樣をとつて、玉のやうな和子樣をお目に懸けませうといふたればナア、奧さまのおつしやるには、世上の諺に、草葉の蔭から見るといふけれど、娘が產んだ初孫を、どうぞ此世で見たいわいやいとおつしやる、おいとしぼや、其夜の明方にこつくりと御臨終、今から私があのお子を、なほいやましにいとしぼさ、寢ても起ても大切に育てあげ、段々と成人なさるゝにつけ、茶の湯縫はり琴三味線、手習香の利樣まで、及ばぬながら此母が、お世話申すもみな奧樣への忠義、眞實がとゞいたやら、親旦那又左衞門樣のお手が懸つて引上げられ、それより儲けしがあの又五郞、氏素性は爭はれぬもの、胤は正しき胤なれど、賤しき母より生れしゆゑ、こゝろ惡道、其又五郞ゆゑあかぬ離別、未來にござる奧樣へ、なんと言譯なる物ぞと、そこぢやによつて此お頼み、これ申し丹右衞門樣、武士は物の哀をしるぞかし、爰の所をきゝわけて、どうぞ笹尾と祝言して下され、これ母が手を合して拜みまする、又五郞をお渡し申さばすぐに死ぬるこの婆、

は」鳴海「お聞届下されうかな」丹右「そりや樣子聞かいでも知れて有る、又五郎が命助けてくれといふ事で有らうが、そりや罷りならぬ」鳴海「イヽヤ左樣でない」丹右「然らは少しの間、猶豫してくれといふのか、其儀も罷りならぬ、早く繩ぶつて渡しやれサア」鳴海「委細畏り入ましてござります、併し只今御願申上げまする、又五郎が命のお願でもなし、元より暫時の延引のお願の筋でもござりませぬが御聞届下さりませうか」笹尾「母さんの御願何かはしらねど、お聞きなされて下さりませ」丹右「サアいふ事あらば、きり〳〵言つてしまはつしやれ」鳴海「外の事でもござりませぬ、娘笹尾が儀、此度こなた樣と離別の別れ、もとはといへば矢張敵又五郎ゆゑ、盜人を捕へて見れば我子とやら、其悪道な又五郎めは只今縛り上げてお手渡申しませうが、爰が一ッの御願、アノ娘笹尾、改めて祝言の盃なされて下さらば、お嬉しう存じまする」丹右「何事かと思へば馬鹿〳〵しい、女房に暇くれしも、又五郎に緣有るから、是非又五郎を此方へ手渡もせず、その先に祝言なぞとは穢らはしい、くどういやるな、聞く耳がないぞ、ハテたはけた老人ぢやわいやい」鳴海「そんならどの樣に申しても」丹右「ならぬ〳〵」鳴海「スリヤ此樣に申しても、お聞入はござりませぬか、ホンニ聞届は。この母がおねがひ。お聞きなされて、どの樣に申しても、祝言はなりませぬかハア。思ひ出すも一昔、ホンの譬へのふしで、恥をいはね

れ、大切な儀を女童にいはうか、此内に男體したものはをらぬか、イヤ取次の役人に女を使ふはエヽ〳〵聞えた、こりや風をくらうて裏道から迯げたか、侍たるべき者は居らぬか、管領足利の上使は將軍も同然、それに何ぞや馬鹿々々しい、汝等如きにいひ聞かす事でない、馬鹿な事を、よし〳〵奥へ踏込み又五郎めを」ト丹右衛門奥へかけ入らうとする、笹尾丹右衛門が刀の鐺を見得よくとらへ。笹尾「そりや聞えぬ丹右衛門どの、こなさん奥へ往てどうさしやんす」丹右「イヤ一ッ穴の狐、女郎め邪魔ひろぐと蹴殺すぞ、うぬ又五郎め繩打つて」笹尾「たとひ斬られうが殺されうが、兄弟と一ッでない身の言譯を」丹右「イヤ面倒な、そこ退け」ト少々立廻あつてとめる、障子の中より。鳴海「澤井又五郎、尋常にそれへまゐつて繩かゝらう」丹右「ナニ又五郎とな、われを」ト丹右衛門行かうとする。笹尾「これまつて下さんせ」丹右「なぜとめる」笹尾「もしやお前の身の上に、凶事があつた其時は」丹右「小癪なそこのけ」ト又立廻あつて、見得よくとめる、ト奥より母の鳴海の聲にて。鳴海「又五郎に繩かけて渡さうとは」ト内より鳴海、三寶長柄を携へ。「あひに相生の松こそめでたかりけれ」丹右「イヤ役にもたゝぬ祝儀の小謠、そこのけ」鳴海「御尤千萬、さりながら此母が祝儀申入れましたは、餘の儀でござらぬ、又五郎には繩打つてお渡し申しませう、その許樣にちとお願がござりまするが」丹右「此場に及んで某へ願と

ア何にも外の事はいはずに、顔見たら、ようこなさんは科もない私を離別て、外におもしろい事を拵らへてゐやしやんすであらうといふ、定めし毎度のやうに怖い顔して、白眼付ける所を。そこでその樣な怖い顏をしても、笑はさにや置かぬ。イヤ〳〵こんな事いうて居る中に、出迎ひが遲うなつては」ト花道の眞中へとんと坐り、いろ〳〵こなし有るべし。「ア丶とんとどうやら恥しい事ぢや」ト笹尾いろ〳〵こなし有り、ト丹右衞門衣裳社袴にて出る。丹右「管領よりの上使」ト笹尾吃驚して、いろ〳〵狼狽へゐる、ト丹右衞門何ともいはず、二重舞臺へ上る。「管領よりの上使」ト丹右衞門、笹尾と顏見合せ。「取次の役人は汝か」ト笹尾逡巡する。「イヤサ取次の役人は汝か」笹尾「ハイ左樣ぢやさうにござります」ト丹右衞門下にゐる、ト笹尾煙草盆をそつと丹右衞門が前に置く、丹右衞門澁面顏して煙草盆突やる。「貴公樣はいつも煙草お上りなさるゝに」ト丹右衞門ぐつと睨める。「今日はお嫌ひなさるゝさうな」ト茶碗を茶臺にのせおづ〳〵出る、丹右衞門が傍へ行き、そつと差出す、又にらむ、笹尾飛退き震ひ泣く、茶碗茶臺ともに落す。丹右「こりや何、者ども居らぬか、奏者の役人は居らぬか、取次者はないか」ト笹尾ちやつと泣やみ。笹尾「ハイ〳〵〳〵これは管領職よりの御上使、御苦勞千萬に存じまする、委細の儀は恐ながら、私へ仰聞けられ下さりませうならば、有難う存じませう」丹右「默

アイ、御用でござりまするか」鳴海「これ其方に喜ばす事があるわいのう」笹尾「此間には承りませぬお詞、喜ぶ事とは何でござります」鳴海「サイノウ、そなたが逢ひたう思やる聟の丹右衛門殿が、今爰へ上使に見えるわいのう」笹尾「なんとおつしやる、丹右衛門殿が見えまするかえ」鳴海「見えるとも〳〵、そこでそなたを呼出した意は、上使取持の役をわが身に勤めさせ、久しぶりの女夫合。アイヤ離別れて戻つたそなたなれば、夫婦合ではなけれども、そこを和女がどうぞをかしういうて、合點か、それも又今までの様に、かまへて心易だてを出すまいぞ、いよ〳〵使者設の役勤めてたもや」笹尾「アノ母さんのおつしやる事はいナア、この奏者勤めいでなんと致しませうぞいナア」鳴海「オヽあの嬉しさうな顔はいのう、其嬉しさうな顔を、上使様へ見せたり、又見られたり。ホヽヽヽ嬉しからう〳〵」笹尾「これが嬉しうなうてなんと致しませう」鳴海「そんなら必ず今云うた通り、隨分おもしろう可笑しういうて取持つが大事ぢや、おれが奥へ行く程に、合點か、ヤレ嬉しや嬉しや」ト奥へ入る。笹尾「これな母さん、私ひとりかいナア、どうやら恥かしいわいナア、サア〳〵嬉しいそもじになつたは。何ぢやら、此間は泣いてばつかりゐたによつて、髪さへよう結なんだ」ト髱を直したり、いろ〳〵する。「此マア笄の埃わいの」ト又いろ〳〵櫛笄を拭く。「サア〳〵爰へござんしたら、なんといはうぞ。マ

はのめ〳〵と、上使の手に渡さるゝか」皆々「御所存はなんとでござるなア」城五郎「それにて此城五郎、思案一決致す、近日今にも上杉にかたまり、管領の上使の威を頭にもつて取圍まひ、一戰に馳向ひ、上使一味の奴原いふに及ばず、管領ぐるめ只一討」鳴海「せがれ又五郎は」野守「スリヤ又五郎殿を、や」三人「ハイ」野守「拙者も落付いたてや」城五郎「ナニ後室、兼々申すは爰の事、先達て又五郎を返せとあつて、擒にせし後室を助けかへし、又五郎と代へ差上げよと參りし使は丹右衛門ばかり、事にのり人質の後室まで、管領の上使、サアそこがかの一ツの思案、血をもつてたらし、舌頭を以ていひほぐし、とかく騙すに手なし、たとへ管領の上使なりとも、又樊噲を取拉ぐ勢ありとも、鬼神をも和ぐるは和歌の德。ナア命だに心にかなふものならば、などか別の悲しかるらん。ナアなどか別の悲しかるらん、老母合點が行きましたか、サア何れも奧へまゐり、上使設の用意なされ、後室、後程お目に懸りませう」ト唄になり、野守之助、奧兵衛、段九郎、ぜい宅皆々奧へ入る、ト鳴海殘り、こなしあつて。鳴海「今城五郎のいはれし古歌は、どうした心で。有らうナア。命だに心にかなふものならば、などか別の悲しかるらん。此歌は朗詠のしろめの餞別、スリヤ此婆が。命を餞別にせいといふ事か、ハテナア。管領よりの御上使と、確かに聟丹右衛門どの。娘々」ト奧より笹尾衣裳襠にて出る。笹尾「アイ

か、察する所に又五郎を相渡せとの上使ならん、面白い、いで生の勝負仕らん、方々用意めされい」せい宅「管領とて何の事があろ」與兵衛「踏付けて首を刎ねてお目にかけう」段九郎「上使ぐるめに再は返しませぬ」せい宅「御尤、然らば上使出迎に及ばず」段九郎「押付けて首を刎ねませう」三人「ござれ」ト三人行かうとする、內より澤井城五郎。城五郎「待つた暫く、澤井城五郎が申入れたい仔細あり、暫く〳〵」三人「ナニ城五郎殿とな」ト城五郎奥より出て。野守「城五郎殿、なぜおとめなさるゝ」城五郎「拙者がお止め申すは、則ちおの〳〵のお爲でござる」野守「足利の管領細川よりの上使、どうした事と指いてもしれた又五郎殿の事、先だつて佐々木丹右衛門、上杉よりの上使として來たれども、老母を捕られ空しく歸る、スリヤ上杉の威光ではかなはぬと思ひ、管領細川の威を假つて、取返しに來たは必定、それを又ならひとなる、おとゞめなさるゝ貴公の御所存はなア」城五郎「たとへ貴公の仰の通り、管領より右又五郎を渡せと有る上使なりとも、一旦上使を引請け、委細具に聞届けし上、萬一外様の事ならば早まつて武名を汚さるゝか、是非また又五郎を渡せとあらば、恨もなき將軍足利殿へ弓を引き、主に敵たう朝敵なぞと、謀叛人の名を取り、逆磔にかゝつても大事ござらぬか、そこを存じてお止め申す此城五郎、マア〳〵お靜りなされい」鳴海「左様ならば上使を引請けて」野守「もし又五郎殿を渡せとあらば、其時貴殿

引摺下して青鼻汁垂れさせてお目にかけう」せい宅「その儀ちつともお氣遣なされな」野守「ナニ方方上杉館の奴原、又五郎殿を隱まひ返さぬゆゑ、其儀を根葉に持ち、此寺へ押寄するよし、何條上杉づれのべろ〳〵武士、今にても寄せ來らば逸散に追下し白泡ふかせ、日比の廣言、一時に毒氣吐かせてくれん、何れも左樣ではござらぬか」段九郎「御意の通り、かね〴〵仲の惡い上杉方、まさかの時にも一方を防ぎ、命有りだけ切死でござる」與兵衛「一旦師匠と頼んだる又五郎殿の一生の御難儀、主從が一命は塵埃と存じをります」せい宅「おの〳〵の仰の通り、此度の騷動、われ〳〵も同心致せし事なれば、上杉の討手を今や〳〵と相待つて居りまするてや」鳴海「おのおの方樣の御懇切、股又五郎が儀を夫程にまでに思召して下されんとのお志、忝うございます」野守「ナニ老母、たとへ如何樣の事あればとて、又五郎殿を渡しては、昵近の武士一分たたず、然るによつて此の出立、老母左樣ではござるぞや」鳴海「何がさて方々樣さへ、其やうに股又五郎が事、思召下さるゝに、親の身ぢやもの、それに如在がござらうか、曝骨のやうになつた此婆となれど心は鐵石、中々上杉方へ渡す事ぢやござりませぬ、まだ〳〵滅多によぼけるやうな事ぢやござりませぬ」野守「ホヽ〳〵流石は又左衛門どの後家、又五郎殿お袋程ある、出來さつしやれた」内より「管領よりの御上使」野守「ナニ管領の上使とは、かた〴〵お聞きなされた

る仕打、刀を杖につき、空を詠めきつとなり、指にて星をくる仕打。「今宵の知死期は」トこなしにて、チョン〳〵にてかへし、ト唐樂のやうな物になる、ト舞臺先より一面に塀をせりあげる、此内に道具まはる。

造り物、榮深寺の體、二重舞臺、見付障子やたい、眞中は大火燈口、前に松の幹など取合よろしく、眞中に鳴海母の形にて長刀杖に突き、片手に數珠つまぐりゐる、近藤野守之助白無垢の大廣袖、丸絎の帶、鉢卷してゐる、下の段に星合段九郎、竹内ぜい宅、安達與兵衛、衣裳𧘕𧘔に小手脛當、見事に並ゐる、但右の鳴物にて道具とまる。

野守之助「かた〴〵味方の諸武士は如何程でござるのう」ぜい宅「凡三百人の餘はございます」段九郎「此儀にのつて寄手を引受け、蜻蛉めらをみなごろしにしてお目に懸けう」與兵衛「すはといはゞ合圖の手配、狼火を上ぐれば十重廿重に取卷き、手筈ちつともお氣遣なされぬがようござる」野守「神妙〳〵、各々は言ふに及ばず、一味の銘々一生の晴勝負なれば、猶此上ながら油斷なく致されてよからう」段九郎「其儀はちつともお氣遣なされまするな」ぜい宅「此方とても同じ事、違背はござらぬてや」與兵衛「左樣でござる、これしきの端た事、イヤハヤ拙者などは空腹に茶漬喰ふより、こゝろやすい事でござる」段九郎「日頃大名顏するべらぼうめ、馬上に乘つてかけ向はゞ、

靜馬「中ぞゆかしき此男雛」濱町「その切腹もまだ早い」靜馬「スリヤ正宗を差上ぐるまでは」丹右「生は難し死は易し、たとへ天下の科人なりとも、又五郎を親の敵と名乗つて討たす時節は、此丹右衛門が胸にある、急く所ではない、死急ぎをする人ではあるわい」トちん〱と六ツの時計を打つ。伴作「アリヤ六ツの時計」右内「九ツの刻限延引に及ばゞ、軍勢をもつて押寄せさするぞ」濱町「その時は上杉の滅亡」彌生「みづからも生きてはゐぬぞや」丹右「おゝそれながら御祝言致させまする」右内「一刻も早く」丹右「ハア、家來ども續け」ト丹右衛門股立とり、向へ走り入る、靜かなる、めりやすになる。右内「皆のものつぎへまゐれ」皆々「ハア、委細畏り奉りましてござります」ト濱町彌生姫下へおりる、皆々宜しく並ぶ。濱町「姫君さまには春太郎殿と諸共にナ」彌生「とかくよいやうに賴むぞや」ト恥かしき仕打。濱町「吉左右待つ間の今日からは、戀しきゆかしい奥の一間、兩人よろしく、計らうてよからう」お袖、しがらみ「かしこまりましてござります」お袖「サアお立あられませう」ト唄になり、春太郎、彌生姫をともなひ、お袖しがらみ靜馬、少々色事の仕打。濱町「吉左右聞くも今暫時、申し姫君樣奥でナ、よい夢を御覽じませ」ト彌生姫、春太郎を見て恥かしき仕打。右内「右内之助は生死の境」濱町「顯定どの」右内「まづまづお入あられませう」ト唄になり、皆々奥へ入る、右内之助隨分靜かに、疵の痛にて立かね

其事ばかりか、若もの事有るならば、此女雛の破裂る事も有らうかとの御悲しみ、餘りあまつて今日のこの祝言」右内「其儀存ぜぬ右内之助にもあらねども、餘りと申せば」濱町「そのために昵近の者どもへ、又五郎を渡せと有る足利家よりの御書、これとても春太郎殿へ引出物」春太郎「スリヤ此御書を引出とな」丹右「又五郎を召捕、榮深寺に籠りゐる昵近の奴輩、片端降參させてお目にかけませう」伴作「イヤ此使は貴殿はやられぬ」丹右「ソリヤなぜな」伴作「ハテ一旦縁の組んだ其方、中々此使合點が參らぬ」丹右「其爲に縁斷つて他人になつた」伴作「縁を切らうがきるまいが此使は」濱町「イヽヤ此使は丹右衛門へ申付ける」丹右「ハア、」ト濱町が前へ出る。濱町「澤井又五郎を謀らふは、そちが胸にあろ」ト丹右衛門へ、濱町御書を渡す。丹右「委細畏りましてござりまする」伴作「貴殿見事御書の詮議するかや」丹右「事をたゞして立かへる」伴作「又五郎を召捕るか」丹右「引くゝつてつれかへるか」靜馬「召捕らるゝ又五郎は天下の科人、親の敵と名乘つて討れぬ仕宜、何事も身に引受けた、さうぢや」ト靜馬腹切らうとする、丹右衛門脇差をとり。丹右「切腹は相叶はぬ」靜馬「切腹もかなひませぬか」丹右「正宗の刀差上げねば、草葉の蔭の父靭負、末代までの不忠の惡名は免れぬがや」靜馬「サアそれは」濱町「もし死ぬると一決せば、最前渡し置いたる男雛」トいふ、靜馬以前の雛を取り。

ト切腹せんといふ、丹右衛門止めて。丹右「御前には暫くお待ち下されませう、恐ながらこの御身持放埒は、跡目御相續下されまい爲でござりませうがや」春太郎「何がなんと」丹右「この丹右衛門見付けた黒ぼし、何と違はござりますまいがな」春太郎「それゆゑの此切腹」ト又切腹せんとする。靜馬「暫くお待ち下されませう、數ならねどもこの靜馬」ト靜馬切腹せんとする、丹右衛門とめて。丹右「そち達の身の上の事故、殿の御無念は眼にさへぎらぬか」靜馬「サアそれ故の切腹」丹右「御教書の詮議第一に心くだく丹右衛門、倶に天の戴かぬ大切なる親の敵を持ちながら、うつら〳〵とする場所でない、御前様にも先々御しづまりあられませう、急く所でない、マア〳〵待つたがえいわいやい」春太郎「スリヤ詮議のめあてといふは」右内「正しくこれも又五郎が所爲に極つた」濱町「サア其又五郎を匿ひ置く城五郎、足利昵近の武士、非道とは知りながら、身迫り必死に及ばゝ、御教書を引裂き捨てんも計られず」春太郎「とある時には當家の瑕瑾」濱町「御教書出でざる其時は、たとひ御家門なればとて、贔屓が有つては天が下の政道は暗闇、それ故この如く雛によそへて咎の御書」春太郎「表向より、この如くのお咎の御書下らば」右内「上杉の滅亡」春太郎「我が身の上」濱町「サアそこを思うて何事も、忽諸の御評定」靜馬「外ざまの聞えを思召して、雛祭の御祝儀は、管領職のお情でがなござりませうがな」濱町「武將の御身も

か」伴作「サアそれは」濱町「ホヽ、愚人に論は無益なれども、雛祭の譯いうて聞かさう、光源氏若菜の巻に、紫の上天兒を作り給ふとある、その天兒といふは、今世にいふ奉公雛の事、萬の悪しき事をこれに課せて禍を避る、また光源氏流離の御時、舟に事々しき人形を乗せて流す、これ須磨の御祓といふ雛遊び有る物の事、紙の人をひなと名付け、その身にあたる悪しき事を、これに課せて避る所の雛祭、此故實をもつて、姫君の御身がはりに立つる雛の生害、なんとこれでも自が誤りか」伴作「サアそれは」濱町「なんと」伴作「テモむづかしい事でござりまする」彌生「そんなら其雛を、自が身にかへて」濱町「今こそこの姫君の御生害」ト女雛を懐劔にて突く。「この死骸は春太郎、其方へ下しおかるゝ」伴作「イヤモそんな死骸は、粟島氏の惣代参りに遣るさゝがようござらう」春太郎「此女雛の中の書物は」ト雛の中の書物を出し。濱町「姫君の御書置、とくと披見なされい」右内「仔細ぞあらん、これへ持て」春太郎「ハア、」ト右内之助が前におく、右内之助披き見て。右内「一、先達て足利の武将より仰下さるゝ條、春太郎定政、上杉の跡目相續の御教書下し置れし所、紛失の由上聞に達し候上は、右の御教書詮議すべく由、萬一出ぬに於いては上杉の家の瑕瑾たるべし、月日。スリヤ先達て御教書下し置かれしとな、コリヤ〳〵弟、仔細はなんと〳〵」春太郎「この申譯は我身の放埒、申譯はこの通り」

所持致すにより、千石の加増申付け、差上げよと言付けし處に、かの又五郎、右の正宗を盗取り、剰へ靭負を殺し立退きし曲者を、同苗城五郎と申すもの昵近の武士を語らひ、榮深寺に立籠り妨をなす、さるによつて先達て、昵近の諸士を某に下しおかれよと願ひし所に有無の御返答もなく、押て祝言といひ、女の童に道具を持たせ、侍たるもの一人も見えず、餘り上杉を踏付けたなされかた、この婚禮改めて變改仕るぞ」濱町「得心はござらぬよな」右内「お尋ねに及ばぬ事さ」彌生「濱まちさらば」ト彌生自害するといふ、濱町抑へ。濱町「まづ〳〵お待ちあそばされませ」トとめる。伴作「この祝言變替とは御尤に存じまする、最前より此所に差控へ居りまするは、女雛男雛祝言などゝ、上杉の物共を癡呆者になさるゝ上使」右内「おもちひ有る昵近の諸士、首を並べてその上で御祝言致させませう」濱町「さうおつしやると此姫君は、御生害をなさるゝかや」彌生「南無あみだ佛」ト又自害せうとする。濱町「マア〳〵お待なされませ」彌生「はなして殺して下されいのう」濱町「御生害には及びませぬ、御生害遊ばす姫君は外にござりまするわいナア」彌生「外に有るとはや」濱町「則これこの姫君の御生害でござりまするわいナ」ト女雛をとり、懐劍にて突かうとする。伴作「その雛に生害とは、ハヽヽヽ」濱町「嘲るそちは雛祭の事知つてゐるか」伴作「しれた事、内裡の形を祭る故サ」濱町「大内に雛祭はない

まする」・靜馬「そなたは爰へはどうして」濱町「そちや渡邊靜馬ぢやナ」靜馬「左樣でござります
る」濱町「苦しうない近う〳〵、樣子あつてお袖が願に依て、評定あつて此度の御祝言の承つ
て、わけ有る樣子、殊に許嫁とやら、是とても管領の御指揮」トいふ、お袖嬉しがる仕打。
お袖「そんなら私も靜馬樣と、祝言を致しますのでござりますかえ」濱町「オヽ改つた喜びやう、
アノ嬉しさうな事わいのう」お袖「申し靜馬さま、早うお請申して下さりませいナ」靜馬「親人お
果なされて未だ喪の內、どうも此儀は御請申されませぬ」お袖「エヽ何おつしやるぞいナァ」
靜馬「ぢやというて、早速お請は」春太郎「オヽそれ〳〵、此祝言すれば跡目相續せねばならず、ア
アいや〳〵、やつぱり鎌倉に居りまするが、私が勝手でござりまする」右內「コリヤ〳〵弟、控
へて居ようぞ」春太郎「ハアヽ」濱町「お袖しがらみ、言付けた通り計らうてよからう」お袖、しがらみ「ハ
アヽ」ト兩人、三寶をもち出、男雛を載せて、春太郎靜馬の前に直し置く。濱町「改めて管領細
川齋政元より、心をこめたる此男雛、とりも直さず武將よりのこの賜物、有難うお請け申して
よからう」右內「御上使の一通り承りたい、委細承知は仕れども、拙者儀、別腹の弟、春太郎は
本妻ばら殊に他領、それゆゑ弟へ跡目相續の御願ひ申上げし所、彌生姫を下し置かれんとの御
意、則御望に任せ正宗の刀、結納のしるしに差上げよと有るゆゑ、我家來渡邊靱負と申す者

をのせ持ち、腰元しがらみも同じ形にて、三寶に紙雛を載せもち、其外せいがい六人ばかり、銘々雛の道具持出、花道にとまり。右内「これは政元殿と思の外、女連の此有様は」濱町「管領細川齋政元が名代」右内「してお名はナ」濱町「政元が妻濱町と申す者でござる」丹右「御上使様には御苦勞千萬に存じ奉りまする」右内「いざ先づ御座へ御通り下されませう」ト濱町彌生姫お袖しがらみ、其外腰元みな〳〵並よくならぶ。右内「思ひよらざる今日の御上使、委細承りたう存じまする」濱町「先だつて春太郎殿、此館へ參られしと聞きし故、春太郎への御上使」右内「誰か有る、春太郎を召連れよ」靜馬「ハア、」ト靜馬走り行き、春太郎を連れ出で。春太郎「イヤイヤ矢張りおりや鎌倉にゐて、酒飲んで遊ぶのがよいわいやい」右内「こりや〳〵御上使なるぞ」春太郎「ナニ御上使樣とな」右内「ひかへよ」春太郎「ハア、」彌生姫「春太郎樣とはあなたかや」濱町「さやうでござりまする」春太郎「恐れながら、さうおつしやるは誰方樣な」濱町「東山前の武將の姫君彌生姫樣でござる」右内「ナニ彌生姫とナ」濱町「先だつて御言號有りながら、御婚禮も延引に及ぶゆゑ、姫君さまくよ〳〵と御物案じの體見るに忍びず、夫齋申付けし今日の計ひ」彌生「不束なみづから、どうでお氣に入るまいなれど、見ぬ戀に憧憬れ、今日の今お顔を見たら恥かしうて、嬉しいわいのう」お袖「御道理でござります、私とてもお顔を見たら、お嬉しうござり

瑾」丹右「何卒御禮服に召かへられて」靜馬「御對面然るべう」丹右「存じ奉りまする」右内「もつとも管領へ對面の上」丹右「御心にかなひし其時には」靜馬「何卒御出馬」右内「思止る、もし又管領の詞心に合はずば」丹右「その時こそ御出馬」靜馬「われ〳〵も御供」右内「其詞に相違はないか」丹右「謁り申さば弓矢神の」兩人「御罸を蒙り奉りまする」右内「ヤア女子ども衣服社衿」ト女中方みな〳〵、臺に衣服社衿を載せ持出る、右内之助著かへる、其外茂左衞門中通りの衆みなみなきかへる、ト靜馬丹右衞門立寄り、遠攻に聞耳して。丹右「アノ螺貝太鼓は」靜馬「御家中を集むる合圖」丹右「ハテさて管領の御入騷がしい、無用と申し渡されよ」靜馬「畏つてござりまする」ト走り入る、ほら太鼓止む、丹右衞門四邊を見て、伴作に活を入れる、伴作起上り。伴作「何ぢや、何の事ぢや、時刻延引致す、丹右衞門にお構なくとも早くお立」ト見かへし、びつくりして。「こりや何事でござりまする」丹右「これお身の身體に魂はないか、管領の御入、貴殿も衣服を更め召され、それとも忌なら勝手次第に召され」伴作「アヽイヤ〳〵、此中に吾等ばかり、此樣な形で居たら、葬禮中へ練物の入つた樣にあろ」ト伴作衣裳社衿に著かへる、みなみな出迎ふ。丹右「管領職にはこれへ御通り下されませう」ト序立の鳴物にて、花道より彌生姫白綸の著付、裲白練のかづき、細川奥方濱町裲下髮、お袖著付裲にて、三寶に紙雛

ござらぬ」伴作「推參な、ソリヤ」ト立あがり。右內「丹右衞門、左程の汝、なぜ先達て又五郎を召捕に遣はせし時、なぜはかられて母は奪取られた」丹右「其儀は拙者了簡あつて、其儘に罷歸りしは、かへつて事を計るの方便」右內「やアぬけ〱、そこ立去らぬか、アレ家來ども丹右衞門を引立てよ」家來「御意ぢや立たう」と引立にかゝる、丹右衞門居り、立ながらにて見得、伴作立懸り。伴作「軍の血祭」ト切かける、立廻にて丹右衞門あてる、ウントこける。右內「某が詞を背くは手向ひか」丹右「ハヽヽ、神もつてお手向は仕りませぬ、何卒此度の御出馬は思召とまりの段、只管願ひ奉りまする」右內「遮つてわが出馬を止める仔細はいかに」丹右「甲冑の御姿にて、御出馬あらば、足利への聞え、此所を篤と御勘辨遊ばされ下さりませうならば、有難う存じ奉りまする」ト花道戸屋の內より。內にて「管領の御入」ト右內之助驚き。右內「ハテ心得ぬ管領の御入、對面は事むづかしい、間道より出馬せん、方々參れ」ト內へ入らんとする、丹右衞門靜馬引とめ。丹右「管領の御入、有無の御對面なく、御出馬あらば」靜馬「足利家へ敵對給ふと申すも知れず」丹右「是非御對面を遊ばされ、然るべう存じまする」ト兩人止る、右內之助思案して。右內「丹右衞門靜馬兩人の詞尤、此儘にて對面せうわい」靜馬「御聞届け遊ばされ有がたう存じ奉りまする」丹右「併し管領へ物の具にて御對面」靜馬「取も直さず君の瑕

レ丹右衛門は閉門、それに何ぞや蚊蜻蛉見るやうな貴殿、いかぬ事〳〵、アヽこりや何か、軍が怖さに敵討呼はりの迯口上か、アヽ置れい〳〵、家中一同に陣立のその中へ、のぶ〳〵と社衦、しつかい奉加場の世話やきを見る樣ナ、ハヽヽヽ」靜馬「ヤア伴作、詞が過ぎる、卑怯でないが、又貴殿には御家の亂を願はるゝか」伴作「なにがなんと」靜馬「靜謐の御代に、われ〳〵如きの意恨に御出馬あつて管領への申譯はナ」伴作「ヤア猪口才な、すつこんでお居やれ」右内「兩人まて」靜馬「ぢやと申して」右内「默れといはゞ控へて居よ、汝が詞理有りといへども、左程の事存ぜぬ右内之助でもない、又五郎が事は格別、外に思ふ仔細あれば、是非出陣は我方寸にある、ナニ伴作、時刻うつる馬牽かせよ」伴作「ハアヽ御家來衆、御馬の用意」家來「ハアヽ」といふ、花道戸屋の内より丹右衛門。丹右「待つた、しばらく〳〵」と花道より丹右衛門社衦にて出る、前後半切の捕手四人、十手にて取卷き、花道に少々立あつて「仔細あつて御前へ行く丹右衛門、止立ひろぐと蹴つて〳〵蹴殺すぞ」トつか〳〵と右内之助が前に坐す。伴作「ヤア丹右衛門、閉門の身を以て御前へ推參不禮千萬、そこ立召され、ソレ家來衆、丹右衛門を引立てめされ」家來「立たう」ト懸る、少々立あつて投退け。丹右「閉門も遠慮も存じてゐる丹右衛門、立たう歸れなどとはしやらくさい、百年が二百年でも、殿に仔細申上ぐる迄、こゝ一寸も動く者ぢや

造り物三間の所、二重舞臺、欄間黑塗の竹のふし、半みすつき惣金襖、西手窓、塗の障子家體、東の方妻戸の樣なる垣、前櫻の大木眞中にて、上杉右内之助兩脇に荒卷伴作、神田茂左衛門、中通り三人みな〳〵鉢卷鎧、靜馬一人社祢にて並居、陣立の見得にて幕あく、法螺太鼓の遠攻。

右内「かた〴〵我思ふ仔細有るに依つて、鎌倉榮深寺に澤井城五郎を初め、昵近の諸士ばら、又五郎を隱まひ、剩へ身が家來丹右衛門を騙り、又五郎が母を奪取つたる擧動言語同斷、憎くき奴原共に依て丹右衛門は閉門申付け、榮深寺を取卷き、昵近の奴輩、首をならぶる、方々も用意致してよからう」伴作「これは殿の御立腹御尤、末代昵近の者共のよき見せしめでござる」茂左「何さま御尤の儀でござりまする」右内「イヤ靜馬、先達より一家中へ申渡し、みな〳〵斯の通り物の具着せしに、汝一人禮服にて參りし段、所存あつての事か、仔細はなんと」靜馬「こは殿樣の御意を背くにはあらねども、此度城五郎榮深寺に取籠りし事の起は同苗靭負、私の意趣を以て、又五郎が討つて立退きし故斯の騷動、申さば又五郎は父の仇、夫しきの儀に殿樣御出馬あつては事の破れ、此儀は幾重にも私へ仰付けられ下さらば、又五郎例へ鐵の内に籠るとも、速に討取つて御覽に入れ奉りたう存じまする」伴作「コレ〳〵如何に若いとて、出放題の減らず口、先達て殿の仰にて、丹右衛門參られてさへ、手に合はぬ昵近の諸士、夫故にソ

づれも御供〳〵」右内「乗物やれ」トみな〳〵乗物かき、向へ入る、ばた〳〵になる、ト又五郎走り出る、城五郎家來提燈さし上げる、又五郎切つて落す、立廻にてみな〳〵入る、城五郎提燈片手にさしつける、又五郎切付ける、城五郎受止め、家來よるを蹴倒し、片手に提燈にて抑へる、又五郎寄る、城五郎扇にて又五郎が顔を隱す。

幕

四ツ目ヨリ返シ六ツ目マデ

役	役者
一 腰元小櫻	三代藏
一 同 山ぶき	仙藏
一 同 まつの	富三郎
一 安達與兵衛	瀧五郎
一 神田茂左衛門	金十郎
一 彌生姫	市川吉太郎
一 荒卷伴作	桐山紋次
一 渡邊靜馬	澤村宗十郎
一 上杉右内之助	嵐三十郎
一 佐々木丹右衛門	中山來助
一 澤井城五郎	中村歌右衛門
一 乗物四人	
一 同 若葉	若藏
一 同 紅葉	菊助
一 同 しがらみ	森藏
一 星合段九郎	友十郎
一 竹の内ぜいたく	松本次郎三
一 茂左衛門娘お袖	中村槌五郎
一 進藤のもり之助	中村次郎三
一 細川奥方濱町	花桐豊松
一 又五郎姉笹尾	姉川大吉
一 又五郎母鳴海	淺尾爲十郎
一 上杉春太郎	大夫本
一 家來大勢	

造り物、向の正面に大手の門前に雁木あり、左右ともに前の方筋違に土手、惣平舞臺になり、乘物下しある、高提燈、箱提燈大ぶんあり、茂左衞門社祢、善平社祢、にて前後を圍み、侍大ぜい乘物を舞臺の先へ持出る、物見より上杉右内之助顏出し。

右内「ざわ〳〵と騷がしい、しづまれ〳〵」善平「只今のしほうは」右内「どうと響きし二ッ彈、乘物の戶を打拔きしばかり」茂左「扨は御乘物に中りしばかり、御尊體に」右内「少も過はなかつたわいやい」善平「正しく打拔きし筒音なれど」右内「イヤ別條はない」茂、善「ヘエ、有難う存じます」ト向より澤井城五郎、提燈先に麻裃にて、つか〳〵と出て來る。茂左「城五郎どの、早速の御出、主人秋定無事にござりまする、お喜びなされて下されい」ト合點のいかぬ體にて。城五郎「管領にてはござらぬな」右内「正しく管領の乘物と、過つて打かけしは、ハテ麁相な奴の」ト城五郎戶をひらき見て。城五郎「管領のこの乘物へ、秋定公のめされしは、ハテナア」右内「兼てか樣の儀もあらんかと、我君と密に代り奉つて」城五郎「代つて御入りなさるゝは、先格に承らぬ儀、ハテ怪しい事かな」右内「もし管領の御乘物へ、斯樣な儀あつては、第一貴殿は御無念になりませうがな」城五郎「ハテ口惜しい」右内「ヤア」城五郎「とてもの事に狼藉者を、召捕るゝがお手柄で有らうもの」右内「テモ」城五郎「まづ以て御忠臣、扨取逃したが無念な」右内「城五郎どの、乘打御免」城五郎「い

後へ隱れる、又五郎邊りを見て尻からげる、ト道具半分左の方へ引込み、橋懸の方へ一間ほど、障子屋體出る、橋は中程になり又五郎いろ〳〵思入して、橋の板を切ぬく、板を踏落し、又歩行いて見たり、いろ〳〵思入有り、奥の方ばた〳〵すると、伴作正宗の刀を拔刀にて盜み出る、跡より靱負追かけ出る、暗がりの體、又五郎透し見て、伴作と代り靱負を橋の方へ誘寄せる、靱負橋を渡り片足踏込む、又五郎切付ける、橋の下より仙右衞門羽織を被きながら、靱負が足を捉へ居る、又五郎いろ〳〵思入。又五郎「正宗といふものは、能う切れる者ぢやわやい」トぐしや〳〵突く、又五郎これより刀の光にて探り、硯箱を尋ねるが、靱負顏へ犬といふ字を書く。「最前の返報覺えをらう」ト止をさす、刀をふき鞘に納める、ト本の鐵砲の音響く。「あの筒音は」トこれより下へ居る。「もう可い〳〵」ト仙右衞門出る、トばた〳〵聞える、兩人橋の後へ隱れる、ト靜馬提燈先に出て來る、血汐にて辷る體。靜馬「ハテこれは怪しからぬ血、申し〳〵親人さま、上使のお乘物へ、何者か鐵砲を打かけました、親人どれにござります」ト橋の方へ來て。「やァこれは親人を何者か」ト下人提燈差出す、又五郎芝垣の側より出て、提燈切おとす、靜馬下へ跳下りて、仙右衞門を摑む、羽織を遺し兩人向へ走り入る、靜馬見得して羽織を見て。「これが手懸り、それ」ト向へおひかけ入る、チョン〳〵にて幕、右道具殘らず西の方へ引込む。

丹右「御教書は國を治むる一ツの寶、國に盗賊家に鼠、御油斷をなされぬが肝要」ト靜馬「丹右衛門殿の御采配に依て、拙者が身の明り立ち、千萬辱なう存じます」ト五郎藏右の形にて走り出て。五郎藏「丹右衛門どの、それに御座りますか、御上使御入國故、何れも御出迎ひのため、御出なされてござりまする、はや御出なされませう」丹右「ナニ御上使御入國とや、然らばお暇申さう、靜馬殿御同道申しませう」靜馬「私も直にお供仕りませう」丹右「ア誠に、心こそ心迷はす心なれ」ト又五郎をみて。「心の駒に手綱ゆるすな、必ず御油斷」靱負「承知いたした、丹右衛門殿」丹右「靱負殿」靜馬「これより直に」丹右「イザ御同道」靱負「おさらば」ト唄になり、丹右衛門、靜馬向へ入る。靱負「ハテ何とも油斷のならぬ事、最早何時であらう、鷄鳴までは一期の浮沈、ハテナア」ト唄になり、靱負はいる、相方になり、又五郎びく〳〵氣のつくこなし、息吹返し思入、橋の許の手水鉢の水掬ひ飲み恂りし、手水鉢を持ち、水鏡を見て震ひ、口惜き思ひして居る所へ、伴作仙右衛門兩人出て。伴作「又五郎、さぞ口惜しからう、道理〳〵、併し折角に奪取つた正宗を差上げさせては」ト又五郎立上り、思入して。又五郎「大事ない、コレこなたは奥へいて」ト伴作に私語く、伴作のみ込み、又仙右衛門にさゝやく。「合點か」伴作「然らば奥へ」ト兩人ゆけとしかたする、伴作奥へ行く、仙右衛門、又五郎が紋付の羽織をかづき、橋の

先へ突付ける。又五郎「左の手で此通りに、斜に伐つて落した手の内、なんと膽が潰れうが」靱負「見事見事、天晴手の裡」ト靱負又松の許へ行き、刀を抜き、峯打にて松の枝を切落す、又五郎が前へ持行き、刃を用ゆるは杣人、木造り等の致す事、木を伐るに刃は峯を以て打つに、一心を定むればはがねに勝る刀のむね打、其方が手の裡の、一心の狂ある故、この如く切口に残す刀の目、このやうな事で人の首は切るゝものぢやないわい」ト又五郎無念のこなし。又五郎「切れるかきれぬか、人の首ぶつて見せう」靱負「そりや誰を」又五郎「おのれを」と靱負に切付けんと抜く、靱負刀の鐺にて腕を抑へ。靱負「それではきられぬ」ト又五郎振解き抜く、靱負抜合せ立まはりあり、又五郎が頸へむねをあてる。靱負「其間には首が落るが」ト又立まはり、又五郎振上げる、脇へ胸へ懸けて見えよく止め。「かうなる時は胸板かけて向袈裟、イヤ中々そんな事では、滅多に人が切らるゝ者ぢやないわい」ト又五郎口惜しきこなしの立廻になり、靱負あてる、又五郎倒れる、靱負刀を納め、硯箱を持ち、又五郎が額に犬といふ字を書き。「誠に畜生に劣りし魂、犬といふ字が意見の餞別」丹右「靱負殿には、いよ〳〵明朝御教書をさし上げられまするか」靱負「左様でござります」丹右「スリャ正宗の刀と諸共に」靱負「委細畏りましてござる」丹右「それ國を治めんと欲するものは先づ家を治む」靱負「家を治めんと欲するもの は身を治む」

し、澤井の家を續がせんと、劍術鍛錬に心を碎き、寢食を忘れ、介抱有るその大恩は、幾許の事ぞと思ふぞ、剩へ其大恩有る靱負殿の子息に、腹切らせんと工む大惡人、寸々にしても飽足らぬ奴ぢやわい」ト扇にて散々にたゝき。「人中で面縛させうと、どう骨を改めんと思ひしが、上使の手前を憚り、差控へたが悔しいわい、うぬが如な畜生に、いへ家に乞はわりもなく悔しい、婆娑に置くは人の仇、いつそ討放して」ト斬らうとする、靱負引退け。靱負「まづ〳〵御了簡、何事も腹立の程拙者に面じ、今日はまづ御了簡に預りませう、如何さまはや、かひ飼ふ犬に手を喰はるゝとは此事、コリヤ又五郎、今忽ち丹右衛門殿の刀下に落つる此首、著置くは先祖への恩返し、又も冥加に叶ふ師の御恩と思ひ、と申して心を入れかへ、誠の武士になる所存はないか、エヽ淺ましい性根ぢやな、家の相續覺束ない、どせう骨に覺えて居らうぞ」ト此内扇にて叩き意見する、又五郎立あがり。又五郎「なんといふのぢや、家の相續覺束ない、何が覺束ない。コリヤえらい事をいうたぞよ、口の端に御番所がないと思うて、大きな事を申上げるわい、澤井の家は劍術を以て立つる家、立つか立たぬか見せうわい」靱負「渡邊澤井は神道神影の兩家、心に心術なくては覺束ない〳〵」ト又五郎起つて松の木の前へ行き、刀を拔き振上げ、又左の手にもちなほし、一打に斜に松の枝を三本伐り、刀を納め、松の枝を靱負等が鼻の

馬が過失になし、其上かやうのお袖殿へ不義の艶書、こな人非人めが」　ト又五郎じゆつなき思入。又五郎「イヤそのおそ様は」　丹右「おそ様は」又五郎「其おそ様はお袖ぢやない」丹右「なんと」又五郎「オヽおそ様といへばお袖が事かい、其おそ様はお園が事、おれが言號のオヽお園が事ぢやわい」　丹右「癡呆者めが、お園はそちが言號の女房、其女房へ付文する者が有るかいやい」又五郎「ハテお園は言號ばかりで、母が嚴しうてつひに寝た夜もない、面胞だらけになつて居るに依て、不愍さにそこで心地ゆかしやつたのサ」　丹右「いはして置けば方圖のない、こな大盗人、イヤ大騙めが」又五郎「大盗人とは何でいふ」　丹右「おのれ正宗の刀を盗み出し、靜馬殿を科に落し腹切らせんと、恩を仇で報ずる思案、何と盗人騙であるまいか、恩を知らぬは畜生、畜生に似合うた様に頭を剃り、門々へ立まはり、物貰はせたが畜生に相應、こな人非人、四つ足め、こなどう畜生めが」又五郎「そりや何を吐すのぢや、その正宗の刀は、おれがのぢや、元來澤井の家の重寶ぢやよつて、澤井正宗といはぬが、おれが物をおれが盗み、天地に點の打人はない、これから正宗はおれが差上げ、千石の加增はおれがしてやるのぢや、さう思うてけつかれ」　ト行かうとする。　ト丹右衞門又五郎少々立廻あつて、とゞ首筋を捉へ、扇にて散々に打擲する。　丹右「チエヽおのれ大罪人めが、靱負殿には先祖の儀を思召し、うぬが樣な人非人を、何卒本心に矯直

たう存じまするといふべき筈、餞別するが悲しさに、何でもない事に物言つけて、只今が限ぢや、なんぢやい、明日から歸參すれば七百石取のォ、澤井又五郎樣ぢや、忌々しい、こんな汚い屋敷は嫌ひぢや、大べらぼうめらめが、いぬるわい、奴覺えてけつかりやあがれ、こな鼻汁垂めが」ト行かうとする、此內丹右衛門、文箱を持つて。丹右「又五郎まて」又五郎「なんぞ用かい」丹右「餞別致さう」ト丹右衛門文箱を又五郎に渡す。又五郎「ホウすりやしほらしいわい、志は木葉も包めぢや、請けて遣らう」ト持ち行かうとする。丹右「又五郎待て、志の餞別を、內も開かず持歸るは無禮であらうぞ」又五郎「どりや何ぢや見やうか」ト又五郎開き見て、一通を出して。「金千六百兩、正宗刀一腰、置ぬし澤井又五郎」ト恟りする。丹右「こりやこれ正宗の刀を盜出し、質物に入れた返り證文、とてもの事にまだよい餞別が爰に有る」ト懷中より艶書を出し。「夢現とも幻とも、憧れ〳〵てそめら〳〵、小夜衣とは片いぢな思付、そもじ故なら吾心、割つて見せたやふたまた五郎、竹に契ひし事も徒に、渡邊家へ言號とは、片腕切られし心地、ぐんにやりとなえる又五郎が思ひをかなへてくれの鐘〳〵、したゝめ置〳〵、〳〵と、こがるゝ又五郎、おそ樣〳〵。こりやこれ靜馬殿の言號、お袖殿の事、女房笹尾、此二通を拾ひ歸りしを見るより南無三寶と、質屋々々へ配符を巡らし、早速此方へ請返した正宗、これを恩有る靫負殿の子息、靜

の言譯は立つまい」丹右「ハテ扨、其許は上使の役、拙者は吟味致すが役目、要ざるお構なく、控へてござれサ」茂左「シテ正宗の事が肝心の御用、ないというては」伴作「言譯は立つまい」丹右「正宗の刀、お目に懸けませう」ト刀箱袋入ほうざや出す、皆々恟りする、丹右衛門、茂左衛門へ渡す、茂左衛門抜き、改め見る。茂左「如何にも相違ござりませぬ」ト靱負へ渡す、靱負受取り伴作との間に置く、伴作取らうとする、靱負右の脇へ取直す。茂左「上使の役目相濟んだれば、拙者どもはお暇申さう、いよ〳〵相違なく献上致されてよからう」靱負「委細畏り奉りましてござりまする」丹右「御上使御苦勞」ト伴作、茂左衛門橋懸へ入る、ト唄になり丹右衛門跡へなほる。靱負「又五郎それへ〳〵」又五郎「へィ〳〵」ト又五郎思入して、靱負の前へ坐る。靱負「又五郎、明日に歸參との事、これ迄は先祖の恩を思ひ、世話に致したれども、最早只今が限り、何方へなりとも行きやれ〳〵」又五郎「へエ、スリヤ今歸れとな」ト又五郎いろ〳〵思入して。「へゝゝ、世話にする〳〵と何が世話、人の世話をするといふものは、ちと腹腸に餘裕がなければならぬものぢや、何ぢややら別事でもない事を落度に追出すのかい、その樣な小い蚤の睾丸つゝ切にした樣な根性で、人の世話がなるものかい、明日は御歸參なさるゝさうな、これまでは永々御逗留なされて、辱ないと衣服大小などを揃へ、これは餞別でござる、千鶴萬龜おめで

うぢ〳〵よむ。丹右「シテその宛名はな」仙右「淸水仙右衞門樣」丹右「確か其許のお名ではないか」仙右「左樣でござりまず」丹右「足で貝ふむ汐干の趣向とは、ハテ結構な御げんな、管領の御耳へ入つたらば、さぞ一廉の御褒美でござらうサ、ナニ次を代つて讀んでごらうじ」ト長谷部五郞藏出て帳面ひらく。五郞藏「三貫七百目、すつぽん三十六鍋、並に總揚入用とも」丹右「其宛名は」五郞藏「長谷部五郞藏」丹右「長谷部五郞藏とはどれかな」五郞藏「さればでござりまする」丹右「其許では無かつたか」五郞藏「如何にも拙者」丹右「イヤはや夥しいほうしよくな、つぎを讀んで御覽じ」ト古川義平次出て帳面を見る。義平次「貳貫八百目、人形其外、家内の者へ付とどけの入用、古川儀平次樣、〆百貳貫目、金にして貳千兩の內、四百兩は又五郞樣へ運上、殘り金千六百兩請取申し候」禿甲「わたしらも人形やら」禿乙「香箱やら、貰うたわいな」丹右「すなはち其許の宛名、何れも此分お上へ聞え、首が胴に著いてあらうと思はつしやるか」大橋「扨も氣の毒な事を聞きましてござんす、どうぞお名の出ぬ樣に、濟して上げまして下されませ」丹右「廓の者ども、重ねて呼出す事も有らう、今日は皆連歸れ」廓の者「ハア有難うござりまする、サア太夫おじや」大橋「ホンニ靜馬樣、つれなかつたと思うたが、結句今日は嬉しいわいな」ト靜馬を見て思入し、みな〳〵橋懸へ入る。伴作「なんぼ丹右衞門殿贔屓に召れても、靜馬放埒

にござりまする又五郎様のお引きなされまして、殘り千三百兩は春太郎様より、太夫が身請金、殘りは諸雜用でござりまする」丹右「シテ又この靜馬殿の印形の證文はどうぢや」揚屋「すなはち千六百兩、又五郎殿より請取りました故、其證文は又五郎様へ御戻し申しましたでござりまする」丹右「ムウ然らば高二分通りは又五郎へとな」ト又五郎うろ／＼として、又氣をかへ。又五郎「イヤかうでござりますわい、春太郎様お使ひ金、餘り大金ゆゑ、少しなりとも儉約を致さんと、惣じて二分引を申付けました、こりや軍陣でも致す事、武士の心懸でござります、イヤはや辨慶と申すものは、思の外術ないものなる物ではないぞ」丹右「ムウ殿の御身持、餘り奢の沙汰と存じ、儉約の爲とな、夫れ申付けた物これへ持て」ト大福帳刀箱、丹右衛門が傍へ出す。「それ廓の者、それへ參つてこれを見よ」ト揚屋起つて伸上り。揚屋「ハイこれは私方の諸色を付けまする當座帳でござりまする」丹右「其方どもを呼寄せ、跡へ役儀の者を遣はし、此方へ召とり置いたわやい、何れも方は御意見の爲、折々廓へござる衆中なれば、立寄つて見物なされい」ト清水仙右衛門帳面開き見て悔りし、又五郎と顏見合はせ、おもひ入。仙右「これは」丹右「どうかな」仙右「四貫六百目、三月三日、太夫三十人、丸裸にして、足で貝踏む汐干の趣向、跡を六人にて念佛がかりになされ、少々傷摺など出來、赤膏藥赤松様から藥代とも」ト

ぎ行く我おもひ、露ほどなりとも知らせたくと有るからは、男の方には一向に知らぬ事、さうして密通といふは、男女合體せざれば不義とはいはれず、こゝを以て其家の掟をたゞすが大法、武士に似合はぬ疎忽の一言、ちと馬鹿〳〵しう存ずるぞ。傾城大橋め、廓の者ども、此一巻これへ出ませい」ト氣をかへ呼出す。内より大ぜい「ハア」ト橋懸より大橋傾城の形、禿大勢つき、上の方へ居る、跡より廓の者二人出る、又五郎見て恟りする、出るなといふて仕方する、廓の者迷惑するこなしあり。丹右「皆ずつと出よ〳〵」ト此内廓の者這うて出る。廓の者「これ太夫、それはどうした居ずまいぢやぞいの、足を投出してどうぢやぞいの」大橋「かうするが廓の習ぢやわいな」廓の者「アノ足を投出しましたが足でないといふ證據でござりまする」丹右「コリヤ廓の者ども、これ迄靜馬殿、廓へ毎度通はれたか、有體に眞直に申せ」揚屋「ハイ靜馬様は、春様の御迎ひに折々御出なされましたばつかりでござりまする」茂左「それに又、夥多しい金子の入用ぢやな」揚屋「イヤ左様ではござりませぬ」丹右「左様でなくば、金子の行端、眞直に申せ」揚屋「ハイ」ト又五郎いふなと思入する、揚屋うぢ〳〵してゐる。丹右「いはねば拷問にかくるが、サア早くいへ」揚屋「ハイアノイヤ」ト此内又五郎、いろ〳〵止める思入して。丹右「家來ども、其奴に水食はせ」家來「立ちをらう」あげや「ハイ申しまする〳〵何を隱しませう、其金子高の、内二分通りは則ちこれ

お顔を見るたび〳〵に、いとゞ可愛いゝと意に思ふばかり、人目のせきに隔てられ、あだにすぎ行くわが思ひ、露程なりと知らせたく、及ばぬ筆にいはせり〳〵、めでたくかしこ、大はしより、靜馬樣參る、扨こそ主君の思ひものと、密通の確な證據、覺ないとはいはれまい」貂貝「サア躮、どうぢや、サなんとぢや」靜馬「サアそれは」伴作「其詮議は後の事、正宗の有所はどうぢや」ト靜馬身をもがき、いろ〳〵思入、靜馬前へ直り胸倉とり。靜馬「チエ、そなたはなう」又五郎「なんぢやぞい」靜馬「口惜いわい〳〵」ト又五郎を突やり、腹切らうとする、丹右衛門その儘止め。丹右「靜馬うろたへたか、生害には及ばぬ、マア待つた」靜馬「でも此申譯がどうも」丹右「ハテ現在言譯が有る、併し犬死するか、マア待たう」伴作「なんぼ贔屓めされても、主人の相方に不義の科は」丹右「イヤ不義でない」伴作「これほど確な證據あれば、言譯は立つまいがな」丹右「不義でない證據は、則ち其艶書、も一度讀んで見さつしやれ」ト伴作又狀をひらき。伴作「おもひにたへかね一寸示しり〳〵、そもじ樣事、折々くるわへ御出なされ候折から、お顔を見るたび〳〵に、いとゞかはいゝと心に思ふばかり、人目の關に隔てられ、あだに過ぎ行く我思ひ、露ほどなりと知らせたく、梅が枝のふしくれだつよも。丹右「それ〳〵其の文言は大橋より靜馬殿への附文、こりやこれ、大橋より憔るゝばかり、人目の關に隔てられ、仇に過

なたの頼ましやつた事を」又五郎「なんぢや頼んだ事は、エヽ成程コリヤ頼まにやならぬ、彼の道を掘返し有つた故、其許の御家來を頼み、直させました、なぜに、上使のお通りなさるゝに、あの通り掘返して捨ては措かれぬによつて、其許の家來衆を頼みましたわサ」靜馬「イヤさうではない」ト靜馬身を揉む。伴作「かねて意見を致したは爰の事サ」靜馬「全く私が身に覺えない事、此金子の儀は。エヽいふまいと申したればどうも。これ又五郎どの、大橋殿の事を、もうどうもかうなつてはいはずには置かれぬ、サア爰で言うて下されこれ〳〵言うて下されいの」又五郎「大橋とは兩國橋の事かな」靜馬「はてのう、さうではないわいの」又五郎「さうでなくば何ぢやな」靜馬「エヽもういふまいと誓言は立てたれど、いはねば此場がすまぬ、申しあの大橋と申すはな、お湯殿に御出生なされた大橋殿、大殿のお胤、春太郎樣の御妹君でござりまするわいの」靱負「合點の行かぬ、親も知らぬ事をそちがどうして」靜馬「イヤ此儀は又五郎殿が申されましてござりまする」又五郎「イヤこれは迷惑な、いうた覺もない事を」靜馬「ハテお名の出る事故、廓にはおかれませぬと有つて」又五郎「コレ〳〵、夫は何の事、口も腐れ、言うた覺はないぞ」ト此内丹右衛門、後の方へ出て居る。伴作「まだ爰に變つた物がござる、しづまさまり〳〵、大はしより」ト披き見て。「おもひにたへかね一寸しめしり〳〵、そもじ樣事、をり〳〵廓へ御出なさるゝ折から、

足、これによつて新知千石御加増あらんとの儀、上使の口上斯の通りでござる」伴作「辭退なきうへは、管領へ差上ぐべしとの儀なれば、卽ち内見致せとの儀でござるサ」靱負「せがれ靜馬、正宗の刀これへ」靜馬「畏りました」ト内より刀箱持ち出る、上使の前に直す、茂左衞門蓋をとり見て吃驚するこなし。茂左「コリヤ、箱の内に刀はない、なんと」みな〳〵「エヽ」トびつくりする。靱負「せがれ刀はなんと」みな〳〵「サア〳〵〳〵どうぢや〳〵〳〵」ト伴作箱の内より一通とり出し」伴作「何か一通がござる」トひらき見る、よみ上げる。「無據入用に付、金子二千兩借用申し候、若し返濟相滯り候はゞ、先祖より相傳はる武具馬具殘らず相渡し申すべく候、後日のため仍て件の如し。宛名は春日屋爲五郎どの、渡邊靜馬判」ト靜馬驚く。靱負「躮こりやどうした譯ぢや、それへ出て樣子を申せ、サヽどうぢや〳〵」伴作「傾城に打込み、偖は家の寶をぶちこんだものと見える、はて笑止千萬な」靱負「サアどうぢや〳〵」靜馬「サアそれは、一向私が存じませぬ事」靱負「知らぬといふ事で濟むか、サア眞直に申せ、どうぢや〳〵」靜馬「此儀は澤井又五郎が存じ居りまする」靱負「なんぢや、又五郎が知つてゐるとな、又五郎〳〵」又五郎「ハア〳〵」ト出しなに、伴作が前へ艶書をおとし向へ出る。靜馬「これ又五郎どの、彼の櫻の馬場での事、サアいうて下され〳〵」又五郎「櫻の馬場、なんぢやばゝは居なんだが」靜馬「エヽ夫こ

はうか、餘り□□か追まくつて仕舞はつしやるがよいてさ」靫負「こゝろ悪道にて勘當受けしを合點して、世話致すこの靫負、人盛なる時は制し、衰へたる時は制せらるゝの習、何とぞ心を改め、再び澤井の家を引興さん爲と存ずるから、貴殿の樣に申しては仁心はないと申すものサ」丹右衛門「サア其仁心は人の上に致す事、彼奴が樣な、人でもない畜生に、致すは無益の至り、面を見るも胸が悪い、立つてうせう」又五郎「どりや、御藥でも煎じませうか」ト又五郎氣味惡く奥へはいる、內より御上使と呼ぶ。靫負「ナニ御上使とや」丹右衛門「表向の御用で有らう、暫くさし控へ、まだ外に申談じたい儀もござれば」靜馬「暫く私が部屋へ御出下され、御休息なされませう」丹右衛門「いか樣、左樣致さう、イザ御案內」靜馬「かう御出なされませう」ト唄になり、靜馬丹右衛門奥へ入る。靫負「たそ衣服𧘕𧘔を持ちやれ」侍「ハア」ト衣裝𧘕𧘔持ち出る、靫負舞臺にて、衣裝𧘕𧘔を著る。靫負「門弟中、御案內賴みます」三人「御上使にはイザお通り下されませう」ト上使神田茂左衛門、荒巻伴作、𧘕𧘔にて來る。茂左衛門「役目でござれば、罷り通ります」靫負「イザお通りあられませう」ト兩人上へ通る。茂左「此度武將の御媒介を以て、姫君御婚姻の儀、いよ〱急ぎ婚禮取結ぶべき事、夫につき貴殿所持の正宗の刀、かねて上聞に達し、此度乞ひ受け、聟引出として差上げらるゝ樣にとの御所望、貴殿所持の事なれば、大御前の御禰

と申せ」侍「ハア」ト橋懸へ入る、丹右衛門社衿大小にて出る、又五郎を見て睨み付ける、又五郎氣味惡きこなしにて下へ下る、丹右衛門二重舞臺の上の方に居る。丹右衛門「此度京都足利家の上意として、忝くも主君上杉の御二男へ御婚姻の儀に付、管領職には御上使として御下向の由、家の面目世の聞え、か程の大慶なる儀はござらぬ、然るに聟君春太郎樣には、御身持御放埓にして、一向に取所もなき御行跡、それを諫むる心は無くて、却て踊り狂ふ輩ばかり、御家の滅亡遠からじと、氣の毒千萬な儀でござります」靭負「そりや何といはつしやる儀でござるぞ、お諫め申すに人の指揮は受け申さぬ、その儀に於いては貴殿のお構ひはいらざる儀、只銘銘の役儀を大切にやるがよい事サ」丹右衛門「ハアこれや異な事がお耳に障りまして、拙者が申すは、付添ひ居つて主人を煽上る馬鹿者の事を申すのサ」靭負「付添ひ居る馬鹿者とは」ト少し靭負こなしする、又五郎出て。又五郎「イヤ〳〵此儀はさう思召すは御尤でござりますれど、さう致した事ではない、兎に付け角に付けお身の上を御大切に存ぜらるゝから」丹右衛門「だまれ〳〵」又五郎「イヤそこが彼の人の口には」丹右衛門「默れといふに、何を口を利く、博奕諸勝負にほこり、婬酒に耽り、人間の道を辨へぬ人非人の、畜生同然の奴がいふ事、此身に聞く耳は持たぬぞ、あの樣な畜生奴を取込み置き、お世話なさるゝから起る事、親一門に見はなされ、人非人とい

ますする」叔母「イヤはや、左樣に存ずるやうでもござらねども、自然と積鬱致して、か樣ござりませう、宜しく御配劑をお頼み申しまする」ト又五郎、右の形にて戻りたる體。又五郎「これは御門弟中樣、ようこそ御勤めなされまする、併し先生の御病氣で、氣の毒に存じまする」義平次「先生御病氣とござれば是非もない儀、併し稽古の儀は、其許御名代に御指南に預りますれば」五郎藏「我々に置きましても、大悦至極に存じまする」又五郎「これは〳〵、御挨拶痛み入ります、さて了伯老には、毎日〳〵御苦勞に存じまする、先生病體いかゞでござりまするな」醫者「イヤはや、さして變りました儀もござらぬが、どうでも心遣ひが多い樣子、只今も申す事、去乍ら次第に御全快でござりませうサ」又五郎「それは宜しうござりまする」醫者「御藥追付け進上致しませう」又五郎「何分宜しう御加減をなされ下されませう」醫者「委細心得ました、さらば參りませう」又五郎「御出なされまするか、御苦勞でござりまする」ト醫者出て行く、靜馬右の形にて戻り來て。靜馬「これは又五郎どの、御苦勞でござりました」又五郎「靜馬どの、只今お下りかな」叔母「忰歸りしか、シテ春太郎樣には如何遊ばされたぞ」靜馬「御機嫌能うお供仕り歸りましてござりまする」叔母「でかした〳〵」ト侍出て。侍「佐々木丹右衞門樣御出でござりまする、お通し申しませうか、如何仕りませうな」靜馬「これ〳〵、御案内には及ばぬ事を、いざお通り下されませう

二ッ目かへし三ッ目

一清水仙右衛門　瀧五郎
一古川義平次　喜十郎
一荒巻伴作　桐山紋二
一渡邊靜馬　澤村宗十郎
一澤井又五郎　淺尾爲十郎
一佐々木丹右衛門　中山來助
一くるわの物大勢
一侍　大勢
一乘物　一挺
一やつこ大ぜい

一長谷部五郎藏　久五郎
一神田茂左衛門　金十郎
一上杉右内之助　嵐三十郎
一渡邊靭負　嵐文五郎
一同姓城五郎　中村歌右衛門
一醫者　一人
一かぶろ　二人
一下部　一人
一同がきて　四人
一門弟　三人

造り物三間の所大家體、二重舞臺欄間あり、奥塀口横障子有り、橋懸り廊下の反橋、とまりに柴垣、此後高塀、舞臺の前に初より仕掛の松の木矢張り有り、二重舞臺の上に、上の方渡邊靭負惣髮著流し、羽織醫者、靭負の脈を診て居る、つぎに三人劍術の弟子ども古川義平次、長谷部五郎藏、清水仙右衛門、並び居る、此見得にて一面に前へ突出す、道具納まる、ト

醫者「餘程欝症なされた樣子に見えまするわいナ」仙右衛門「左樣でござりませう、萬事心遣ひが多くござりまする故でござりませうサ」醫者「どうでも左樣さうな、御養生なされたがようござり

で、御勘當の赦りますす樣に、お賴み申しますわいな」ト此内笹尾、お園に隱して、片手にて見る、又五郎覘き見て、頭かくこなし有り。笹尾「てもさても〱、見さげはてた、シテ明日は御歸參いたすとの風聞、何ぞ御聞きなされたかえ」お園「イエその事はなんにも承りませぬ」笹尾「スリヤこれも母をだました工事と見えた、必ず〱、逢はしやんしよと、かんまへてひとり歩行など御無用、殊に若いお身のかんまへて一人歩行なされぬがよいぞえ、此樣な事を」トいひ〱袂へ入れる。お園「それは母樣のお指圖ゆゑ、きつと心得て居りまするわいな」笹尾「同道いたしませう、サアござんせ」お園「そんならわたしも、お供申しませう」ト唄になり、兩人橋懸へ入る、又五郎出て伸上り。又五郎「エヽひよんな文を姉貴に拾はれて、マア情ない母に見せるであらうわい、しまひ〱」ト此時伴作出て。伴作「又五郎、これはアノ大橋めから、靜馬への付文と見える、なんでもこれを種に不義者にして、靜馬めをしまはせる思案は」ト又五郎とりあげ。又五郎「つれなきしづま樣より、こがるゝ大はしより、よし〱」ト思入して、懷へいれる、内より還御といふ。伴作「御歸館と觸たは、正しく春太郎殿、靜馬めも供を致し間道より」又五郎「歸館致すに違ひない、それ」ト兩人思入して向ふへ入る。

幕

手を合せて拜みまするわいな」ト泣く。又五郎「ハヽア、あやまつた、成程さうぢや、眞實親身な女房の意見、骨身にこたへて忽ち心が入れ變つて、モウ〳〵〳〵ふつつりと心を入れかへ、眞人間に成つたわいの」お園「エヽそれやマアほんでござんすかいな」又五郎「誓文〳〵、今迄の事を思へば、勿體なうてならぬわいの」お園「エヽ忝うござりまする、母樣に申したら、さぞ御喜びでござんせうわいな」又五郎「サアこれからほんの女夫ぢやによつて、枕とつておじや」お園「滅相なかど中で、其上ものがたい母樣の吩咐は、どうも背かれませぬわいな」又五郎「はてさて其樣な愚癡な事いはずと」ト取付く。お園「エヽコレハわつけもない、そんな事があるものでござりますかいな」ト向より姉笹尾裲に上帶して、下人一人つれ出る。又五郎「ぢやというてこれが又、たまるものかいの」ト向を見て、南無三姉貴がと、振すて奥へ迯げて入る、笹尾扇をかざしながら、本舞臺へ來て。お園「これは笹尾樣、御參詣でござりますかいな」笹尾「おそのさん、お前も觀音樣へ御參詣でござりますかな、マア惡道者めが」トいひ〳〵文をひろげ、書付も有り、とり上げ袂の下にて讀みながら、相手になり居る、びつくりして。「扨こそこれぢやもの」お園「何を隱しませう、最前から段々樣子承りました、もはや身の上に倦じはて、さつぱりと心が入れ替り、マアこの樣な嬉しい事はござりませぬ、どうぞ此上はお前のお執成

お袖「皆の衆おじやー」トお袖橋懸へ入る。又五郎「おその、そちはこゝへどうして來たのぢや」
お園「どうして所が、お前はなぜにその樣な惡道な氣を持つて下さんすぞいな、女子さへ見ると無體の戀慕、後家や人の妻ともいはせず、殊にお袖さんはたれぞ、お前のお心故とは言ひながら、親御樣の御勘氣を請け、艱難のお身を引受けて、先祖の義理ある澤井家、引興させたいと、一心にお世話なされる渡邊靱負さまの御子、靜馬さまと言號有る、其お方に無體の戀慕、道も法も思はぬお心は、何とした因果な事でござんすぞいナア、勘當の赦りぬ內、必ず詞も交すなと、母さまの吩咐、言號ばかりで枕は交さぬ女房ゆゑ、さう胴欲に思召すか、コレ此樣に何時までも、振袖著せて置くお心でござんすぞいな、エヽ聞えぬわいな〳〵」又五郎「道理ぢや道理ぢや、俺ぢやというてその樣にしたい事もなけれど、此樣に勘當うけて、內證のかいがまはらぬによつて、ホンのひだるいによつてぢやわいの」お園「エヽお前は曲もない、どうぞお心を入れ替へて、本心になつてくださんす心はござんせぬかいな、お果なされた父御樣や、跡にござる母御樣のお心にもなつて見て、惡道な魂を入かへて、御歸參の願をかなへて、親御樣へ孝行をつくし、どうぞ早う女夫になされて下さんせ、わたしやかうして死ぬれば、現在の賽の河原の苦しみをするが可愛うはござんすまいがな、ちつとはわたしが心を思ひやつて下さんせい、

やなんぢやえ」又五郎「なんぢやとは」大橋「おまへの爲には主ぢやないかいな」又五郎「マアサ其事はちつと様子があつて」ト無理に引こかさうとする、大橋振放し、奥へ逃げて入る、奥よりお袖出る、又五郎恟りしながら、又お袖にぬれかゝる。お袖「これ滅相な、わたしや靜馬様といふ言號の夫ある身、滅相な」又五郎「なんの滅相」ト文を出し、無理に懐へ入れ。「おれが思ひの數々、此文に書いて有る、見てたもく」ト此内嫌がるを、いろく無體にぬれるこなし有り。お袖「此様な滅相な、主の有るものに艶書を付けるといふ事が有るものでござりまするかいな、あはうらしい」ト文投げつける。又五郎「なぜにその様に、ぴんしやんする事ぞい」ト此内お園、局下人つれ、戻りかゝり見て居る。お袖「わるい事もよい加減な事したがよい、あはうらしい」又五郎「さうつれなういはぬ物ぢや」ト又寄るを。お袖「アレ聲を立てるぞえ、アレ又五郎様が」又五郎「ア、これくじんたいな、聲を立てるといふ様な事が有るものか」トお袖歸うとする、やるまいと引とめる、中へお園入る、顔を見て吃驚する、又五郎をかしき思入。お袖「これはマアお園さん、よい所へ戻つて下さんした、とつとわたしや嫌忌がつて居るものを、あのお方が無理な事ばつかり」お園「よいわいな、必ずく堪忍して下さんせ、爰に構はずと早うお歸りなされ」お袖「そんならお園さん」お園「わたしが居るから、氣遣ひな事はごさんせぬわいな」

ほど、そんなら俺は主、そなたは家來ぢやの」ト上の方へすわる。「しづま〱」靜馬「ヤア。ハイ」大橋「こゝへ來い」靜馬「エヽ」大橋「爰へおじや」靜馬「ハイ」ト手をつく。大橋「爰へきて、わしに取付きや」靜馬「エヽ」大橋「主の言付ぢや、はやう取付きやいの」靜馬「でもそれは」お袖「これこれ滅相なそんな事、なんぼお主樣の、いかにしてもそればつかりは、よしにしてくださんせえ」大橋「わしがいふ事を聞かぬと、大勢の者に言付けて、繩かけさせて抱いて寢るぞ」お袖「これいナア、ちやつとこちへ來て下さんせいナア」大橋「これ〱主の眼の前で、そんな事はならぬぞ」お袖「アイ譬ひお主でも、わたしや天下はれて女夫の中、ちつとも大事ござりませぬ」大橋「なんぼ女夫でもさうはならぬ」ト靜馬を兩方へひつぱる、又五郎出て見て、思入して引込む、二人の女形あちこちと引ぱり、とまりに靜馬眞中へ轉けて眼の眩うた體、お袖大橋兩人、背後の茶瓶見付け、茶碗につぎ、一口含む、二人ともに同じ樣に、兩方より口うつしを爭ふ事いろいろあつて、一度に飲込み、靜馬起きあがり、靜馬「その中直りの水盃をささうばつかり」大橋「そんならわたしも」お袖「わたしも」ト大橋抱付かうとする、又五郎背後から引退ける、みな〱悔り、靜馬お袖、幕の内へはいる、大橋ひよんな思入する、又五郎にらむ、顏をかへて。又五郎「ても美しいものではあるぞ、どうもたまらぬ」ト取りつく。大橋「又五郎樣、わたし

引手數多のお身ぢやよつて、一入私が遣瀨なさ、もしや外にいとしぼがるお人が出來やうかと、はやう嫁入がしたい事ぢやと、忘れる間とては御ざりませぬわいな、可愛い事ぢやと思召して、どうぞ早う祝言なされて下されませいな」彈馬「成程〳〵、言號有るそなたの事、思はいではないけれども、御主人の御婚禮のすまぬ中は、家來の身としてどうもさきへは、婚禮はならぬ、さう心得て辛抱しや、そしてマア、門外で人が見まして、猥なといはれては武士が立たぬ、サアサア逝んでたも〳〵」お袖「それ見さしやんせの、偶々あへばそんな慘い事ばつかり、わたしやなんぼでも、はなしやせぬ〳〵」ト取付く。彈馬「これ人が見るわいの、去とてはききわけのない」ト大橋中へ入り。大橋「いやらしいそんな事しておくれなゑ」ト引ぱり、上の方へ行かうとする。彈馬「そりやマア何でござりまする、お前は御主人ぢやで、サア今日より春太郎樣の御兄弟なれば、私が爲にはお主、其お主がそんな事するもので御座りまするかいな、これお袖、これは大事の事なれど、そなたに咄して聞かす、アノ大橋殿、イヤ樣は先大殿樣の御胤、春太郎樣のためには御妹君樣ぢやといの」トこの內荒卷件作ちよつと出て文をひらふ事有り。お袖「エヽそんならあなたは姫君さまで御座りまするかえ」彈馬「しかもたつた今承つたぬくぬくの御姫君樣ぢやわいの、其お主樣がそんな猥な事する物で御座りまするかいな」大橋「なる

參詣でござんせうがな」お袖「さればでござんす、言號ばかりで、御祝言の遲いを、どうぞ早う女夫になりたいといふ大願、お前も又五郎樣と、早う夫婦になりたいといふ願でござんせうがな」お園「取わけて私が殿御又五郎樣は、お心惡道な故、親御樣の御勘當、何とぞお心も直り、御勘氣もゆり、早う祝言を致します樣と、それればかりが願ひでござります」トお袖、靜馬を見て思入し、本舞臺の方へ行く、大橋幕の蔭より出かける。靜馬「思ひも寄らぬ」ト大橋を見て、背の方へかくし。「出まいぞ〳〵、出まい〳〵」お園「出まい〳〵と、なんで御座りますぞいな」靜馬「エヽ、イヤサ出まい〳〵は、かの爰は鎌倉、サア鎌倉山の星月夜と思うて、あはう烏が出やうかと、そこで出まい〳〵でござりまするて」お園「ヘエそんなら烏の事であつたかいな。あんな烏が、可愛い〳〵といはうかと思ふはな」靜馬「エヽ」お園「イヤもう、お袖さんとした事が、逢ひたい〳〵とばつかり思うて居て、何をうぢ〳〵して。エヽこりや私が惡かつた、どりやわたしや觀音樣へ、これ二人の衆、おそでさんの御名代に連立つて參る程に、その跡で何もかも打明けて、合點でござんすか」靜馬「ハテこれは〳〵御氣の毒な、左樣ならお供致しませう」ト靜馬行かうとする、お袖引とめ、お園局男におもひする。つぼね「サア御出なされませ」ト三人橋懸へ入る。お袖「申し靜馬さま、去とては聞えませぬ、御器量といひ、おこゝろといひ、

據入用に付金子二千兩借用申候、若し返濟相滯り候はゞ、先祖より相傳はる武具馬具殘らず相渡し申すべく候、後日の爲仍て件の如し、春日や爲五郎どの。かくの通りでござりまする、いやもう此證文の出る樣な事はござりませぬ事なれども、ホンの念のためと申すもの」ト矢立あてがひ。「御姓名をなされて」ト靜馬名を書き、印形する。靜馬「然らばこれで宜しうござりまするか」又五郎「よう御座ります〳〵。コリヤ〳〵證文渡したぞ」亡八「イヤもうこれさへ御座りますれば慥でござりまする、則ちこれが太夫が身請證文でござりまする」ト又五郎拔き見て。又五郎「よし〳〵、如何にも身請證文受取つた、歸れ〳〵」兩人「左樣ならばお暇申しませう」ト兩人入る。又五郎「サアさらりと相濟みました、先づお二人ともに、幕の内へお入りなされませ」春太郎「サア太夫おじや」ト唄になり、春太郎、大橋、又五郎思入して入る、跡に靜馬殘り居る。靜馬「人の身の上と水の流れは知れぬものぢや、アノ大橋が大殿樣のお胤であらうといふ事は、てもさても思懸けがない事ぢやナア」ト向の方より、お袖振袖を著流し、お園同樣に、兩人ともうちかけにて、跡よりつぼね下人つき出て。お袖「おそのさん、なんとマア櫻は見事に咲いた事ぢやござりませぬかいなア」お園「さればでござりまする、此星合寺の櫻の盛りに、御利生あらたな觀音樣へ歩みを運び、花より勝つた靜馬樣といふ、美しい花を詠めたいと思うての御

にはお大名の事ゆゑ、あの譯も御存じなく、困入りましてござる、ちとそこ許へ御無心がござるが、御聞きなされ下されうかな」 靜馬「とは何の御用でござりまするな」 又五郎「イヤサお借り申したう存じまする」 靜馬「右申しまする通り、拙者部屋住の儀故」 又五郎「イヤ金子ではござらぬ」 靜馬「しからばなんと御座りまするな」又五郎「御印形がお借り申したい」 靜馬「拙者が印形が」 又五郎「大橋殿の身請金が千三百兩ばかり、雜用が七百兩、都合二千兩と申す金子がなければ、春太郎樣のどうも御一分が立ちませぬ、ぢやとまうしても只今金子の才覺と申しては叶ひませぬ、そこで彼等が手前へ、二千兩の金子借用證文、其許の御印形さへなされ下されうなれば、さらりと此場が相濟む事、大橋殿の身請をして首尾よく館へ御歸還がござれば、京都より姫君の御粧料として二万兩まゐる筈、すりや共内で此二千兩はナ」 ト呑込んで居るといふ仕方して。「何でもない事でござりまする」 靜馬「如何さまはや、左樣で相濟みまする事なら、いかにも」又五郎「なされてくだされうか、先以て辱い、こりや〳〵廓の者ども、申付けた證文持參したか」 亡八「でもお前さまの御印形では」又五郎「されば、それぢやによつて靜馬殿へ御印形をお頼み申したワサ」 亡八「成程・左樣ならば確でござりますれば、則ちこれが證文でござります」 ト又五郎とつて拔き見る。 靜馬「文言をちよと」又五郎「いか樣、念の爲御聞なされ。一、無

ますると」静馬「それこそは掛屋方へ申し付けて」又五郎「アヽそれ〳〵、薬袋もない、左様いたす時は、一人が二人の耳へ入り、忽ち一家中の耳に入つて、御恥辱になる、何事も内々にて、どうぞ致し方が、と申して拙者は浪人の身の上、そこ許にはどうぞ御才覺の仕やうはござるまいかな」静馬「私ぢやと申して部屋住の分、ハテ何と致したものでござりませうな」ト橋懸りより、亡八屋、揚屋兩人出る。亡八「又五郎さま、それにござりまするか、私は大橋太夫が親方でござりまする、太夫が事は今日外に身請のお客がござりますれば、遣はしたうござりまする、お戻しなされて」又五郎「コリヤ〳〵それは何をいふのぢや、先達ていふ通り、大橋殿は外へ出す事はならぬ、それ故の揚詰、ならぬ事ぢやぞ」あげや「イヤなんぼさうおつしやりましても、あげ代雜用身の代まで、大金の事でござりますれば、お拂口が鈍うては、うけ込難うござります る」又五郎「ハテ高のしれた金子、春太郎樣はお大名ぢやわやい、何の氣遣な事あつて」亡八「なんぼお大名でも、遊廓の事は金銀次第でござります、埒の明かぬ事いうて居る隙はない、太夫おじや」ト親方つか〳〵と上の方へ行く、春太郎反打つ。春太郎「おのれら太夫に指でもさすと、討捨てるぞ」亡八「でもそれは御無體な」ト又五郎中へは入り。又五郎「マア待て、控へて居よ控へ居よ、身共が埒をあける、控へて居よさ」ト亡八屋下へ控へる。「靜馬どの、御聞の通り、殿

ござりませぬ、元より覺悟仕り居りまする」又五郎「ヘエヽ適々、さすが渡邊靭負殿の御子息、命を捨ての御諫言、イヤハヤ驚き入りましてござる、殿樣には何事も私よろしう取計ひませう間、まづお靜り下されませう、さて〳〵驚き入つた事、その御心底を見ましてござる上は、何を隱し申しませう、か樣にアノ大橋太夫を揚詰なさるゝ事、全く御放埒でない理があるて」靜馬「なんとおつしやる」又五郎「イヤか樣に拙者お側に附添ひ詰あつて御意見を申さぬは、拙者ともに不埓の樣に思召すでござらうが左樣でない」靜馬「と申す譯はな」又五郎「サそこぢや、これと申すも拙者が浪人いたした一德、思ひよらぬ事を承り、あれなる大橋殿事は、先大殿のお湯殿に出生なされたお子でござるわいの」靜馬「すりやあの大橋どのは」又五郎「必ず御他言なされますな、春太郎樣の御妹君でござるわいの」靜馬「エヽ」ト靜馬顏を見合す。大橋「此樣に片時離れず、お側に居ても春太郎さんと、微塵も色がましき事はござんせぬわいの」靜馬「ハテ存じもよらぬ事を承りましてござりまする」又五郎「ぢやによつて、か樣な譯を聞きながら、其分にすて置かるゝ時は、天知る地知る、終に人の口の端に懸り、忽ちお家の御名の出る事、そこを思召して揚詰になされて、外へ出すまいとおぼしめしてござるわいの」靜馬「然らば早速お身請をなさるが宜うござりませう」又五郎「サアそこぢや、何を申しても金銀づく、それ故に心を痛め居り

御弟御春太郎樣へ御仲人遊ばされ、近々御輿入を急ぎ申せとの儀、それに春太郎樣は一向廓へ御出遊ばされてより、御歸館なく、一家中親どもは申すに及ばず、胸を痛め申しまする事でござります」ト靜馬向を見る。又五郎「御尤でござりまする、拙者も左樣存じてから、御機嫌を見合せ、御歸館有る樣にとお勸め申す事でござりまする」ト靜馬向を見て。靜馬「イヤ申し、すなはち春太郎樣、あれにお渡りなされまする、よい折柄でござりまする、いざ御出なされませい」ト兩人本舞臺へ直り、靜馬威儀を改め。「これは若殿樣でござりまするか、まづもちまして御寛體の御尊顏を拜し奉り、有がたう存じまする、つきましては武將足利家より御祝言の儀、頻に致す樣と管領の御催促でござりますれば、何卒お館へ御歸還なし下されませうならば」ト春太郎氣色して。春太郎「こりや〳〵靜馬、身が前で控へうと申付け置くに、それは何事ぢや」靜馬「イヤ左樣ござりませいでは、お家のお爲」春太郎「詞を返へす慮外の奴の」ト春太郎立かゝり、反打懸る、又五郎中へ入り。又五郎「イヤ〳〵先づお靜り下されませう、これサ靜馬殿、默らしやれ」春太郎「イヤ〳〵はなせ〳〵」又五郎「イヤ先づお待ち下されませう」ト靜馬じつと居る、頸さしのべ控へる。「御諫言なさるはどう致した事ぢや、お詫なされ〳〵」靜馬「又五郎殿のお執成、忝う存じますれどお爲を申上げそれがお心に障り、お手討になりまする儀少しも厭ひまする所存

大橋「そんなら私も、兎も角もお心任がよからうと存じます」ト地狂言いふ。ふでや「此マア持つて來いといはしやんした物は、何でござんすえ」春太郎「ハテそれは鋤といふ物ぢやわやい」もとの「地を掘るとどうするのでござんすえ」春太郎「それは鍬というて、地を掘る物ぢやわやい」いがの「そんならこれはえ」春太郎「それで掘つて地を和げ、物を作るは農作といふわいやい、イヤやはり釣狐の格で、此酒といふしなを、どこらへかけて置かうぞ、さらば爰らに懸けて置かうぞ」ト樽茶瓶を程能き處に置く、ところへ橋懸りより荒巻伴作裃にて、家來大勢つれ出る。伴作「これは春太郎さま、お迎ひに參じました、早く御歸館遊ばされませう、われたちは何事ぢや見苦しい、歸れ〳〵」春太郎「イヤ〳〵、慮外な奴の、何故俺が前で遊興の妨害をするぞ、今一言いへば手討にするがどうぢや、但しは聞きたうもない諫言か」伴作「サアそれは」春太郎「手討にせうか」伴作「アイヤ〳〵全く御諫言は仕りませぬ、今日は御趣向につて、お手が痛みますれば、惡しうござりませうと存じ、御手傳を致させませうと存じ、家來ども召連ました、こりや〳〵、それ手手に此地を掘かへせ〳〵」家來大ぜい「畏りました」トみな〳〵大勢、鍬にて舞臺を掘る體して居る、向ふより渡邊靜馬裃大小、澤井又五郎著流し羽織、大小にてつき出る。靜馬「最前も申す通り、御主人上杉家には京都武將の御首尾ますく〳〵よろしく、此度御妹君彌生姬樣を、

口明

一禿ふでや　市松
一同いがの　富三郎
一仲居おはる　五六八
一あらまき伴作　桐山紋次
一云號おその　尾上粂助
一升右衛門妻笹尾　姉川大吉
一上杉春太郎　座本　嵐七三郎
一くるわの者二人
一下人壹人
一同もじの　門蔵
一中居おあき　三代蔵
一傾城大はし　嵐松次郎
一茂左衛門娘おそで　中村槌五郎
一渡邊靜馬　澤村宗十郎
一澤井又五郎　淺尾爲十郎
一つぼれ男
一侍大ぜい
一奴貳人

造り物上の方に少し幕打、櫻の木あり、むかふ黒幕、上より櫻の枝出てあり、下に土手あり、在郷歌にて幕明く、ト向より上杉春太郎廣袖著流し羽織にて出る、茶びんきれいにして、鍬の柄に懸けてかたげ出る、跡に大橋傾城の形にてつき出で、かむろ大勢みな〳〵鋤鍬を持ち出る。

春太郎「罷出でたる者は此あたりの者でござる、それがし屋鋪へかへる樣にとおじやれども、こむづかしい事はきらいぢや故、百姓の業をならひ、農業を致さうと存ずる」大橋「春さん、そりや何の事でござんすぞいなア」春太郎「ハテ又しても家中のものが來て、館へ歸れ〳〵と拜む、館へ歸れば窮屈で面白ない故に、百姓にならうと思うて、今の樣に地狂言でやつたのぢやわい」

讀賣講釋 伊賀越乘掛合羽

作者 奈河龜助

目錄

三十石艠始　終

すべき者也」小市「此度七里半の堤川中へ築き候事、王城へ近道を付けしは、謀叛の萌しと評定極り候事」與「且又川浦遊軒、花滿一家へ下し賜る間、年來の敵、嬲殺しに致すべき者也」與、小市「仍つて御書如件」皆々「サア遊軒、遁れぬ所ぢや覺悟せい」ト又見得になる、是より道具又々廻る。ト右の辨之作源八總角立して居る、是より道具四五遍も早う廻る。ト見得好く右の屋敷の所にて道具止る、立廻有つて遊軒を縫之助みゆき兩人して殺す、橋懸より源八、總角走り出る。

縫「兄者人の敵」みゆき「夫の敵」兩人「思ひ知つたか」源「辨之作も打止めました」與「出來した出來した、是より禁廷へ奏聞せん」みゆき、縫、總「是と云ふも與三右衛門樣のお蔭」與「お勅使樣は」木「先達てお歸し申しました」與「出來した、敵討は濟んだ、まづ此場は目出たいお立〳〵」

ト打出し。

辨之作、今宵水車の樋口より拔出るを、源八、總角兩人致し、川の中にて敵討、天道合さんを行馬となし、小舟を以て取巻き、いかな〳〵動かしは仕らんぞ」遊「ナニ辨之作だ」ト往かうとする、見得になる。遊「寄つたら蹴殺すぞ」與「動くな」ト是より道具舞臺一面に廻る、此内皆立廻り。

道具一面の城、前に水車あり、三十石小舟數多、皆々高提灯にて取巻く、眞中に官翁實は辨之作襦袢、源八襦袢、總角白無垢にて立廻り、此内道具廻りあり。

又元の座敷になる、右の見得にて遊軒を與三右衛門、みゆき、小幡、縫之助取巻き元へ戻る、向ふより小市、御書を持ち出る、道具止る。

與「ヤア小市か」小市「ハツ」與「首尾は」小市「御書」與「一方より讀上げい」ト與三右衛門、小市兩人にて讀む。小市「花満憲法儀は鎌倉の名代として大内に於ての無禮、禁裏を騷がしたる科に依つて、一家殘らず滅亡す」與「然るに吟味を遂げ尋ぬる所に、川浦遊軒か惡心の上、憲法が妻女御幸とやらんに戀慕し、御盃も遊軒打破りし由、悉くなれ合たる者どもより白狀、憲法に科無き條一決せり」小市「且又花満一家紛失の切手差上げし上、淀川上り舟の工夫訴へたる功に依り、昔の所領安堵、加増として家中人別に三十石づつ御加增せしめ、日本廻船の要と致

れまする」遊「山が轉げて來ても勅使の添人、花滿一家與三右衛門が首取つて追付行く、人の見ぬ間に急げ」官「ハツ」ト走り入る、みゆき氣味合あつて遊軒が傍へ行く。遊「みゆき、わりや爰へ何しに來た」みゆき「わたしやお前に逢に」遊「何ぢや身共に逢に、ハテ好く來たな」みゆき「先刻には憎い奴ぢやと思はしやんせうが、わたしや今では憲法樣の事は思ひ出した事も無い、お前の事ばつかり思うて居るのに。お前胴慾ぢやぞえ、但し又私に惚れたと云はんしたは噓かえ」遊「スリヤ憲法への貞心捨て、遊軒が心に隨ふか」みゆき「サア其處が去る者は日々に疎し」遊「いかにも伽さして遣らう、身が氣に入る樣に伽はせまい」みゆき「サアお氣に入らうか入るまいかは知らねども、マア恁う」ト切懸けるを止めて。遊「此樣な伽の爲樣では、些と間に合はぬ」みゆき「そんなら恁う」ト又切掛ける、見得よくとまる、縫之助又切懸ける。遊「扨は汝も入込んだなア」縫「みゆき樣の媒人を致しませう」遊「媒人ならば幾人でもさしてくれう」杢「私も媒人致しませう」遊「幾人でもさせませう」與「拙者も媒人致しませう」遊「幾人でもさせませう」みゆき「お伽致しませう」ト又切懸ける、見得あつて止る。與「コリヤ大内から御沙汰も無い中に、傷付けると家が立たぬぞ」杢「心を靜めてお伽をさしやんせ」ト是より立になる、攻太鼓になり立廻りあつて止る。遊「あの攻太鼓は」與「さのみ驚かつしやる事は無い、將監を討つて立退いたる

るか」縫、みゆき「これは」太「皆與三右衛門殿との相談」與「川浦遊軒方に辨之作匿まひ置く事、草を分つて詮議すれども知れぬこそ道理、あの官翁七十有餘の老人が、人無き所で樣々の氣丈、祭する處遊軒が家の祕藥、戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生したる女の生血と、血筋の白髪を合せ飲したに極つた」縫「まつた源八が娘のお松は行方も知らぬ浪人が生膽を取り、殊に親茂次兵衛が白髪まで」みゆき「スリヤ其時の浪人は」縫「辨之作であつたナ」與「是を消さうには亥の年亥の月亥の日亥の刻に誕生したる女の生血にねこ柳」みゆき「スリヤ先刻のきてふ殿の生血を」與「犬死でない妹が最悟」三人「追付知れる辨之作」與「急く處で無い、心を沈めて來い」ト皆々入る、唄になる、遊軒出て。遊「大底の奴ではないわいやい」ト奥より官翁若い男にて出る。官「悴扨扨お上にも殊ない御機嫌只今」遊「ヤイ〳〵、うぬが其身振は何だ」官「悴、身共が身振が何とした」遊「うぬが顏水鏡で見をらう」官「悴とした事が、扨々何とした」ト老爺がたの臺詞にて手水鉢にて顏を見て。官「ヤアこりや遊軒樣、私は何時の間に此樣になりましたなア」遊「最前の茶をふか〳〵喫うた故ぢやわい」官「與三右衛門が計略に乘つたか、エヽこりやマア如何したものであらうナ」遊「もう儕は此屋敷には置かれぬわい」官「遊軒樣、如何ぞ好い思案は有るまいかナ」遊「表門は番人あり、幸ひ水車の樋口、人の見ぬ間に急げ」官「私は私ぢやが、お前は何となさ

も同然、何奴も這奴も身に指でもさすと、胴と首との生別れだぞ」ト縫之助みゆきにあてゝ云ふ。遊「コリヤ早いぞ〳〵、サ大内より御沙汰の無い中は早、イザ早う御機嫌をお直し下さりませう」遊「うぬ」ト與三右衛門を切らうとする。辨「コリヤ〳〵遊軒、一旦の腹立はあれども、官翁が身に凶事無い事、もう了簡してやれ」遊「這奴踏のめせ」ト砂場へ蹴る、侍、與三右衛門を踏む。遊「もう可い〳〵、是より拙者が手前で茶を差上げませう」ト官翁を見て。遊「親人何さつしやる」官「何かは知らぬが、いかふ痒い事ぢやてい」遊「お勅使には先づ奥へ」辨「方々參れ」遊「仕丁ども休め」官「いかふ痒い事ではある」ト唄になる、辨の中將、遊軒、官翁入る。みゆき「コレ與三右衛門の大腰拔、今のは何ぢや、今の樣に踏打擲に逢うても、こなさんは無念には無いか、エヽ此方はなう、爾ういふ此方の心底とは知らず、今まで敵討を延したが殘念なわいなう」縫「今まで敵討を延したは、遊軒が怖さであつたナ、エヽ爾ういふ心とは知らいで便りにしたが殘念なわいなう」みゆき「もう頼の綱も切れ果てた、是より奥へ踏込み遊軒に繩打つて、禁廷よりお赦しの出るまで、命を取らねば事は濟む、サア縫之助樣お出なされい」縫「ソレ一時も早う」ト此内遊軒聞いて居る。與「ヤレ待て、遊軒ばかりは搦めうが、辨之作は何とする」縫、みゆき「何と」與「女房木幡首尾はもう好い、起きた〳〵」木「與三右衛門殿、首尾好うござります

與「覺え無い者が、木幡は如何して死んだ」官「サア夫は」與、官「サア〳〵〳〵」與「如何ぢや」官「是は又迷惑な事ではある」與「覺え無いのが實ならば、此茶の毒味してさつぱりと言分さつしやれ」官「成程此通りで了へば逆磔付は知れた事、いかにも此茶飲みませう」與「七轉八倒して早く斃死つて了へ」官「飲むは飲むが、さりとは合點の行かぬ」與「ハテ未練、早く飲まつしやれ」官「身の言譯、今飲みまする」與「まだしも覺悟、正しく鴆毒に極まるからは、死體は逆磔付ぢやと覺悟しをらう」ト官翁茶を飲み。官「與三右今茶を飲むが否や、一段と快い、是でも毒に極つたか」與「ハヽヽ、死しなの世迷言、要らざる事云はずとも、早く斃死つて了へ。色も變らずサ正しく毒薬なればこそ女房が此有樣」官翁は麗々とハアハツ　遊「與三右衞門、手前官翁は御勅使へ毒は盛ませぬぞ」與「ハツ」　ト官翁、與三右衞門を引捉へ。官「ヤイわりや何と言うた、身共は何者だと思ふ、川浦遊軒が親、禁廷のお茶の根元とも云はるゝ官翁に向ひ、毒を盛つたと云うたぞよ」與「ハツ、モ與三右衞門が一生の過り、眞平御免されて下さりませう」ト此内官翁痒い思入あり。官「まだ〳〵どの頤で吐した、汝が樣な奴は手討にする」ト切らうとする、遊軒止めて。遊「コレお年寄の氣を揉まれまするな」官「オヽ〳〵」ト官翁又老爺形になる。遊「與三右衞門、わりや花滿一家の肩持つて、遊軒を討さう討さうとすれど、御勅使の添人關白一の人

角小市殿の事を、さらば」ト死ぬる。みゆき「コレ〳〵短い縁であつたなう」ト與三右衛門柳を取つて。與「ゑのこ柳」トきてふが血汐を柳に塗る。みゆき「是は」與「詮議の種ぢや往け」トみゆきを作れ入る、唄になる、縫之助橋懸りより出る。縫「今小市が云うた通りなれば、今宵の中は。何を云うても皆與三右衛門殿に。ソレ」ト奥へ行かうとする、みゆき出て。みゆき「縫之助様か」縫「みゆき様」みゆき「弟にお逢なされましたか」縫「委細残らず承りました」みゆき「可哀やきてふ殿は」縫「コレ泣いて居る所で無い、禁廷へ奏聞の早打、遊軒が耳へ入つては」みゆき「氣遣ひなされまするな、門々は堅めさせ、殊に水車の樋口より拔出でまいものでも無いとあつて、天道合さんを以て取巻き、伏勢がござりまする」縫「エヽ忝い、則ち源八おふねを遣はし置いたれば、氣遣ひはござらぬ」トバタ〳〵になる、皆々入る、官翁を與三右衛門追うて出る。與「動くな」官「まつた、官翁には何科あつて取巻く」與「科は其身に覺えがあらう」遊「仕丁ども引け。與三右衛門、親人には何科あつて取巻召さるゝ」與「官翁は重罪人」遊「重罪人とは」與「木幡が死骸を持て」侍「ハツ」ト木幡死骸戸板にて持ち出る。與「今日勅使へ茶を差上げる官翁の手前、何とも心得ぬと、取上げ見れば此如く紫の泡、察する處毒藥、女房が毒味其儘死したるは、重罪人で無いか」官「スリヤ木幡が其茶を飲むや否」遊「覺えがござるか親人」官「微塵も覺えは無い」

る哉妙なる哉、唐土のくわてきは、柳の葉に蜘のとまり水に浮みしを見て舟を造る、今與三右衞門は花生の盃を見て、夜舟の覺りが開けた」みゆき、小市「エ、何と」與「此花生を今一度」トみゆき向ふへ引いて。みゆき「恁うすれば」與「淀川は水早く、五日七日の中に中々船にて上る事思ひも寄らず、七里半の堤を七曲りの中へ直に付け、王城に近道拵へるは、遊軒が心に深い工あらんと思へども、何を云うても大内の仕官、敵討も家國も、此上り舟の工夫こそと、思ひ暮しは此年月、其通りに舟に綱を付け川端を引上らば、米穀萬事運送は思ひの儘、船にて自由は艪と櫂と、帆を卷くばかりに凝つたるか、綱を付けて引くといふ、僅かな事に心付かざるは、燈臺元暗し、秘事は睫毛であつたよなア」みゆき、小市「スリヤ此通の工夫では」與「重罪たりとも科を赦し」みゆき「所領　重縁昔の通り」與「大内への使は小市」小市「ハッ」ト内へ入る。みゆき「ソレ上り舟の工夫」ト花生をやる。與「ソレ高札、今こそ御朱印」ト小市取つて。小市「追付立歸りませう」與「辨之作が行方も、大方今宵知れるであら」みゆき、小市「エヽ」與「此一書は遊軒が積惡を言上申す豫ての認め」ト書物出してやる。小市「きてふ然らば」與「表門は氣遣ひ無し、水車の樋口より拔出るを油斷すな」小市「若殿にお報せ申さう」みゆき「一時も早う大内へ」與「往け」小市「ハッ」ト走り入る。與「コリヤ妹、犬死とばかり思ふなよ、其方が命は敵討の詮議の種になるぞよ」喜「兎

娘、未來は結ばいで何と致しませう、必ず〳〵冥途は女房ぢやぞ」喜「其詞を聞いたら思ひ殘す事は無い、未來は一ツ蓮でござんすぞや」みゆき「せめて此子の末期に盃」與「イヤ〳〵、顏を合せばやはり敵」みゆき「ぢやと云うて可愛さうに」ト與三右衛門釣花生にゑのころ柳を生けあるを取つて、きてふが血を入れてくさりを片々はづし。與「血肉を啜つて因緣を引くといふ、其方も未來永々小市と緣を引く盃」みゆき「私は則ち待女郎」與「盃に手を差さねば、敵の娘の媒人といふでも無い、ソレ其鎖で」みゆき「緣の鎖の引く盃、取次もせず手も差さず、鎖で引くが二世の結び」與「息引かぬ内早う」ト唄になり、みゆき此鎖を持ち門の外へ引いて出る、與三右衛門手燭を持ち、此中に遊軒下座の家體にて官翁に囁き入る。官翁鐵砲にて與三右衛門を覘ふ。みゆき「小市、二世の盃」小市「是がきてふが血汐」トぢつと泣いて飲む。與「陰中の陽陽中の陰、コレ此雪も内に陽有つて燃ゆる事、陰の凝固る證據、水は火を消し雪は火をかふ、人間も先づ其如く、雪の火を取る露雫と諦めて未來を樂め、是が門火」ト梅の直枝へ火を點ける、雪段々消えて燃行く、官翁鐵砲の上へ水落ちる、官翁鐵砲打付け入る。小市「然らば慮外ながら」トみゆき鎖を内へ引いて入る、唄になり。みゆき「コレ爰に盃」喜「エ、忝い」ト飲む。與「みゆき殿、其盃是へ」みゆき「アイ」ト又引いて來る、與三右衛門つく〴〵見て唄になり。與「ハヽヽ、アヽ、神な

付覘うたに、爲損じ剰へ」小市「女房去つた、二世までの縁斷つた」喜「コレイナそれは」ト行かうとする。みゆき「コレ待つた、遊軒が娘、弟小市に顔合すまいぞ」小市「假令どの樣な事が有つても顔合せぬ金打」ト表にて金打する。喜「エヽ」みゆき「可愛い夫の武士を捨さすか」喜「サア夫は」小市「不忠不義の名を取らすか」喜「サア」みきゆ、小市、喜「サア〳〵〳〵」小市「如何ぢや」喜「ハツ」〳〵ト泣く。みゆき「とは云ふものゝ可憐や〳〵」ト與三右衛門は官翁が事思ひ入、きてふ與三右衛門が刀にて自害する。みゆき「ヤアこりや自害しやつたか」小市「ヤア」與「内へ入ると不孝になるぞ、きてふ爾う無くては道は立つまい」喜「私程因果な者は無い、夫に添ひたいばつかり、兄樣には勘當受け、嬉しやとも〳〵、敵を討つて女夫にならうと思ひの外、敵といふは父さん、どの樣に添ひたう思うても、小市樣の武士の廢る事なら、必ず入つて下さんすな、もう此世で顔は見ぬ、魂はお前の女房ぢやぞえ、此體は遊軒が娘、せめては敵の肉縁を憑う。憑う抉つたれば、もう心は晴れました、此世の念は切つた程に、せめて未來で女夫になつて下さんせえ」みゆき「夫程までに弟が事思うて居る其方、因果とて惡縁」與「天下のお咎めある花滿憲法に一家となる事、上への聞えを憚り勘當は致した、未來に遠慮は無い、妹勘當赦したぞ」喜「エヽ」與「小市、きてふは未來の妹、改めて與三右衛門が媒人、連添うてたもるまいか」小市「此世こそ敵の

奴斬つても苦しうない」宣「苦しうないとは」與「不義者でござる」宣「不義者とは」木幡「其證據は爰に居まする」ト木幡出る。遊「不義の證據見ませう」木「不義の證據は此文、あの雁平めが私に惚れて此付文、官翁樣お前も最前御存じ、但し此文封を解いて、内の名を改めませうかナ」宣「アヽコレ〳〵、成程最前身共も居つた、家來雁平めが此方に不義を働く、扨々憎い奴と思へども、悴が歸つたら手討にもと存じて居つた、與三右能く斬召された、此方の手に懸けるは雁平めが仕合さ」木「爾う仰しやれば此文の、封を解くにも及びませぬ」宣「憎い雁平め」與「ハテ斬れたわ、右手の脇より肋を懸けてすつぱり、天晴の業物、銹には寄らぬものでござります」ト遊軒に渡す。遊「いかいお世話でござる」と不承々々に取る。與「愈女はお傍の伽」喜「父さんどうでも」ト又寄る。遊「這奴虎の子を飼ふ樣な娘、與三右殿、此女めを確と此方に預けたぞ」與「預りました」宣「悴、序に其虎の子も」遊「ハテ何程の事がござらう、遊軒親子は些とでも、指さす奴があると、與三右殿の身の上」宣「それで落付いた」辨「サア皆奥へ參れ」遊「最早お茶の湯の刻限、間もござりますまい」與「女房御案内申せ」木「サアかうお出なされませい」皆々「まづお入なされませう」ト唄になる、辨の中將、遊軒、官翁入る、與三右衛門、みゆき殘る、きてふ泣いて居る。みゆき「何を云うても勅使の守護、家の破滅を思うてエヽ口惜い」喜「折角思ひ思うて

寢間の伽せうならば、心許して寢間の伽さしてくれう」ト切懸ける、與三右衛門みゆきを引退ける。遊「こりや何さつしやる」與「何となさるゝ」遊「此方へ求める小太刀、鋒先の錆びて切味心元無い、女めを試しまする」與「些と御粗相かと存じまする」遊「何が何と」與「此方は勅使守護の役、血をあやしても苦うないか」遊「尤、親人ソレ」宜「合點ぢや」トみゆきに切懸る、立廻りの中與三右衛門扇にて打落す。宜「與三右、こりや何とする」ト手酷く云ふ。與「年に似合はぬ岩疊な事な」宜「サァ何と仰しやる」ト急に老爺方にて云ふ。與「貴殿には勅使へ茶を差上げる役目、血に錆びたる刀を持つさへあるに、女を試し召るゝか」宜「サァ夫は過りました」與「過りも過りも、御老體には似合はぬ近年の過り」宜「ウム」トきめる。遊「親人、お年寄のお引なされい」ト宜翁よほ〳〵下に居る。遊「與三右殿、いかにも御勅使前で、血をあやさうと致したは、親宜翁が無調法、夫とても手前無調法でござる」與「イヤ謝らせうと申すではござりませぬ」遊「イヤあやまりましてござる、あやまりもあやまり近年の大あやまりでござりまする」宜「父さん御前」ト切にかゝる、遊軒止めて。遊「雁平女めを試せ」雁「ハッ」トみゆきに切懸ける、立廻りにて止め。みゆき「こりや何とする」雁「切味試みる」ト立廻りにて與三右衛門雁平を見事に斬る。宜「與三右こりや何とする」與「何とも致さぬ」宜「勅使守護の家來を斬るからは、覺悟であらう」與「這

ります」遊「ドレ其刄物見せうかい」與「御覽なされませい」ト渡す。遊軒拔いて見て。遊「こりや疑ひも無い眞の御太刀」與「其鋒先の血。錆を賣りたいと申しまする」遊「買ひませう、其賣主は何處に居まする」與「小太刀の賣主是へ參れ」みゆき「ハッ」ト著流しにて出る。遊「わりや憲法が女房みゆき」みゆき「遊軒樣、お久し振でお目に懸りました」遊「遊軒を厭ぢや〳〵と嫌うたが、今思ひ知たつであらうナ、而してマア久しう見ぬ内強う窶れたナ」みゆき「エヽ」ト與三右衞門止める。「昔が今の氣であらうなら、流浪は致しますまいと、悔んで居りまする」遊「與三右殿、御幸を此屋敷へ引込んだは、扨は此遊軒を」與「お寢間の伽が致したい願ひ」遊「ヤヽヽ、何と、」與「意氣地を立てまするも身が可愛さ、野心無いと申す證には、賣りました眞の御太刀、價には妾になりと、以前の好みが受けたい彼が願ひでござる」遊「スリャ憲法への貞心を捨てゝ」みゆき「お恥かしながら、何處へ執付く島も無い此身、昔の好みを思召し、お傍でお伽が申したさ、お前に逢ひたい。逢ひたい〳〵と思うて居りましたが、マアお健康でお嬉しうごりまする」遊「アノ此遊軒が傍で」みゆき「御奉公が申したさ」與「夫故刀賣りまするでござりまする」遊「いかにも買ひませう、一旦心懸けましたる女、寢間の伽させう、みゆき爰へ來い」みゆき「ハイ」與「お召なさる、行儀よくして參れ」トみゆき思入あり傍へ行く。みゆき「御用でござりまするかナ」遊「汝さへ

て。喜「ヤアしつくり合ふからは、そんならお前は父さん、お前が父さんなれば」ト小市と顔見合せ。「ヤアお前は」ト小市隠れる。「父さんなれば。ハア」ト大泣。與「淀堤に由ある守袋を添へ捨あつた故、拾上げた妹は、遊軒殿の娘であつたよナ」喜「夫への功、憲法様の敵、一太刀恨まうと思うたに、敵は父さん、スリヤ小市殿と。こりやマア何とせう〱」ト泣く。與「御勅使へ鐵砲を打懸けたれば、所詮命は無いと思うて居よ」喜「それ父さんにもせよ夫の仇」ト切懸くる。遊「ハテ扨、スリヤ憲法方の奴と腐り合うたナ」喜「夫への面晴ぢや」ト立廻りあつて當てる、ウンとのる。官「是は」遊「藥でも遣つて下され」ト官翁藥飲す、きてふ起き。喜「エヽ」ト泣く。遊「世になきものゝ蚯蚓め等には、遊軒が娘は添はさぬ、追付好い聟取つてやらう」ト官翁目で知らす。官「ウン爾うとも〱」ト頷く。與「遊軒殿、手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが、其元樣を戀詫びまして、何卒お伽と申すも慮外、お茶の給仕になされて下されと望みまする、幸ひ持傳へましたる太刀一口、是をお買なされて下さるまいか、夫を橋渡しに致したいと申す故、宜しう申上げくれうと、次に控へさせ置きましてござる、何と御覧遣はされまいか」遊「身共に小太刀が賣りたい」與「親子共にお目利の上手と承り及びましたしか存じませぬ」與「最前女の非人めが、旦那に刀を賣りたいと願ひまする、何とやら合點の行かぬ奴でござ

歩をおひろひなされ、此乗物はナ」遊「雁平、其乗物の内に居る者是へ引出せ」雁「畏つてござりまする」ト内より喜蝶腰縄にて出る。與「其方は」きてふ「お恥かしうござりまする」官「悴、見れば女、仔細は如何ぢや」遊「只今片沼を歸りまする所、御勅使と拙者が眞中へ、鐵砲を打懸けました」與「ハテ夫はひやいな事ナ」遊「早速邊りを吟味致させました所、彼奴が鐵砲所持致す故、直に捕へて參つた」與「ハレ危い事ナ」遊「女の手業に斯樣の事仕るは、一人の工ではあるまい、同類が有らう、有樣に白狀せい」喜「狙ひ濟して本望遂げうと思うたに、エヽ爲損じて口惜いわいやい」ト懐劍にて切懸ける、腕首執へ。遊「與三右殿、此女見知つて居やつしやるか」與「イヤつひに見た事も無い奴でござりまする」遊「アノ現在の妹を」與「妹にもせよ、一旦勘當致したれば他人、他人なれば見知らう樣はござりませぬ」遊「ハテ氣散じな事ぢやな」官「悴、惣體此間は夜寢悪ひ、用心しやれ」喜「遊軒」ト又突にかゝる。遊「コリヤ親を切るか」喜「親とは」遊「最前捕へし時、肌を探せば臍の緒の書付、亥の年亥の月亥の日亥の刻の誕生息災延命と書付けたは拙者が手ぢや」喜「エヽ」遊「鬼やらひの節會の夜、はしたの女に手を懸け懐胎したるは其方、母は些少かの過り有つて大内で追放、其後娘誕生したれども、母は當座に死んだる故、守袋を證據に方々と尋ねて居たが、ハテ健康で居たなア、其方と同じ守袋見よ」ト出す、きてふ合せ見

しまると、彼の竹の根がしがらんで流れまする中に、右の山土が流れて參りますると、竹の根へ挾まれ、此竹が川中へ土臺となりますると、自然と川が埋れまする中に、堤を築きまする算用でござる、よくしたものでござるてや」與「したり、あの早き川瀬、登り船さへ突流される故、行かぬ事と存じたに、川中へ堤を築くとは、其意を得ませぬとばかり存じたに、今のお話驚き入ましてござる」宜「イヤコレ與三右殿ばかりは左樣に仰せられるな、忰遊軒が工夫致した堤の事、惡からうと此方一人庶つて申上げたぢやないか、夫に今更追從らしい」遊「コレ〳〵年寄だてら、そりや何を云ふのぢや、與三右殿ぢやというて、追從も云はつしやれいで何と致さう、當時此遊軒に追從せぬ者は、雪で造つた是此猿松、喃與三右」與「左樣でござりまする」遊「今度の堤の儀も、彼是小智慧の有る衆が、遊軒を嫉んで申上げた故、暫く差控へて居る中、高札ぢやの何ぢやの、川の山のとやつて見ても、サ一人も是ぞ好い事といふものが無い故、せう事無しに又遊軒に仰付られた、爰を思へば世間に智慧の有る者は、いかう少いものでござる」與「それはモウ此方のお智慧に及ぶ程の者はござらぬ」遊「イヤ〳〵強ち斯樣な者が無いとも申されぬ、二人ござる」與「それは誰でござる」遊「ハテ一人は拙者、今一人は世間の人を一人に致して、ハヽヽヽ」與「いかさま仰しやれば左樣なもの、見ますれば御勅使樣には徒

樣でござりまするか」興「遊軒殿のお歸り、迎ひに出い」雁「ナアイ」ト橋懸より勅使辨の中將、跡より川浦遊軒長𧘕𧘔、乘物釣せ家來附き出る、奥より官翁出る。官「是は辨の中將樣、只今お歸りなされましたナ」辨「官翁茶の湯の用意は可いか」官「ハツ」興「遊軒殿、只今お歸りでござりまするか」遊「やうやく只今でござる」興「先づお通りなされませい」ト辨の中將上座へ直る、官翁、遊軒、與三右衞門並よく並ぶ。興「今日は御勅使樣、徒歩をお歩ひ遊ばされ、其元樣萬事御苦勞」遊「イヤ左のみ苦勞な儀もござらぬが、貴殿には珍客が參つて、嘸御退屈にござりませう」興「是は御勿體ない」辨「官翁、其方がいうた細工は出來たか」官「ハツ、雁平申付けた細工は出來たか」雁「へイ疾仕り置きましてござります」ト官翁傍へ猿を持ち行く。

官「中々好い細工ぢや、何と御覽じましたか」興「御幼稚にお渡りなさるゝ故、さぞ道草でござりませう」遊「イヤモ御覽じつけられぬ民家の手業、一段と好いお慰みでござる」官「忰、淀川筋の巡見し召れたか」遊「イヤさして辛う面倒いこともござらねど、どうでも土砂を津の國尻無川へ流し込みまする故、思ふ樣に行き兼ねまするゆゑ、北山の木を伐しますはずでござる」

興「ハア、御工夫が出來ましたかナ」遊「餘り水早くて土を保ちませぬ故、北山の木を殘らず伐りまするると、雨は直に山へ落ち、山の土は一雨〳〵に淀川へ流れまする所へ、藪をとつて流

ト行かうとする。太「コレ御勅使の守護でござりまするぞ」みゆき「スリヤ其切手は」與「與三右衛門が預つた」縫「館の内は取巻いて」小市「一人も動きませぬぞ」太「勅使守護の役目も了ひ」みゆき「辨之作が所在も知れ」縫、小市「再び本地に立歸る」與「今宵の内に時節があらう」太「マア夫までは腰元みゆき」與「女房、著類も著せ替やれ」太「女中奥へ」みゆき「ハア」縫、小市「みゆき樣」みゆき「皆も短氣を出すまいぞ」縫、小市「ハア」ト木幡、小市入る、みゆき、與三右衛門殘る。與「ナニ腰元みゆき、大切なる勅使守護の遊軒殿、隨分無禮の無い樣に」みゆき「時節までは屹度おあづけ申しまする」與「夫が可い〳〵、ナニ御幸、若又時節に及んだ時、其方が手の內は」トみゆき簪にて松へ手裏劍打つ、小鳥飛去る、鳩一羽落ちる。みゆき「豫て手練は致しました」ト見せる。與「見事、女に稀なる手の內、併し欺すに手なし、思ひ懸無い處を憑う」ト打懸ける、莨盆にて受け。みゆき「こりや何となされます」與「若し敵が憑うせば」ト立廻りになる、みゆき疊を上げる、與三右衛門まへ立つ內に飛退く。みゆき「此手練ではナ」與「見事、所を透さず憑う」ト手裏劍打つ、駒下駄にて受留め。みゆき「是では何とござりませるナ」與「緊りと抱へたぞ」みゆき「エヽ忝い」與「奥へ往て休息せい」みゆき「ハッ」ト唄になりみゆき入る。與三右衛門雁平を引起し活を入れる、雁平起きて。雁「ウヽ最前の女めは」與「雁平氣が著いたか」ト雁平恟り。雁「與三右衛門

れまいナ、知れぬ筈ぢや、辨之作は遊軒が隱匿うて居るぞよ」みゆき「エヽ。假令朝敵にならうとまゝよ」與「家が大事か敵が大事か」みゆき「イヤなんと」與「敵を討つも先祖へ孝、其家國を立てる功があるか」みゆき「サア夫は」與「敵を討つて先祖を潰すか、こな不孝者めが」縫「其家國を立つべき功は爰にある」みゆき「縫之助樣」縫「與三右衞門樣、お久しうござりまする」與「縫之助、家國を立つべき功があるとは」縫「天下より預り奉る關西往來の切手、詮議仕つてござりまする、お受取下され」與「いかにも相違無い切手、慥に受取つた」縫「いよ〳〵家督の儀は」與「立てられまい」みゆき「敵討は」與「なるまい〳〵」縫、みゆき「何故な」與「何故家は立てぬ」縫、みゆき「サア其切手で」與「花滿憲法事は鎌倉の御名代、大内へ參内し大切な御用を爲損じ、禁裏を騷がしたる科、重類を絕せとの仰なれども、勘當の者共にお祟り無いは時の憐愍、川筋普請の事も徒に、大切なる預りの切手まで盜まれ、科に科を重ねたる花滿一門、假令預りの切手取返したればとて、其儘に家國が納められうと思ふかヤイ」みゆき「スリヤ其切手を差上げても」小市「家國は立ちませぬか」與「木幡其高札を是へ持て」木「ハア」ト高札持ち行く。與「縫之助、家國を納める功は是ぢや」縫、みゆき「是とは」與「淀川筋水早き所、船にて往來する事工夫致す者あるに於ては、重罪たりとも科を赦し、褒美は望たるべき者也」ト向ふより。「遊軒樣のお歸り」みゆ、縫、小市「なに遊軒が」

は相應の小太刀、買うて貰はふと思ひ、與三右衛門に取次を頼むのか、爾うであらうがナ」みゆき「お目立ますする通り、外へ持つて參られませぬ此刀、目指す處は」與「遊軒殿か」みゆき「ハイ左様でござりまする」與「爾うありさうなものぢや」雁「ハヽヽヽ見れば鋒先には血にて錆腐つてある鈍物、旦那遊軒様に賣らうとは、こな大騙賊めが」みゆき「莫邪が刀も持手の手の內、刀の錆も見苦しけれど、血汐の無念ののりの落さぬが、すぐなる心の亂れ燒、些とお目には入りますまいけど、すはと云はゞ何方でも何奴でも斬りかねぬ業物でござります」與「見事々々、爾う見ゆる〳〵」ト此間縫之助、小市出て見て居る。雁「頤の過たどら乞食め」ト立廻り雁平を當てる、見得あつて止る。與「其刀是へ持て」ト見得あつてみゆき與三右衛門に渡す、篤と見て。「鋒先の血、嘸無念にあらうナ」木「女中、シテあの刀の價は」みゆき「金銀に望はござりませぬ、其價は」與「身が屋敷に奉公の望か」みゆき「ハイ左様でござります」與「イヤそりや叶はぬ」みゆき「そりや又何故でござります」與「此度男山八幡造營に付勅使のお成、守護する役は川浦遊軒、與三右衛門がお宿申し御馳走申す中に、些とでも過ちあれば朝敵同然、與三右衛が手にある內、敵討はなるまい」木「スリヤ此女中は」みゆき「花滿憲法が女房御幸」與「將監を討つて立退いた辨之作は、所在が知れたか」みゆき「遊軒は高位の交り、せめて辨之作なりともと、樣々に尋ねても」與「知

ぬ」雁「まだ〳〵うぬが、今隱した物出さぬか〳〵」木「ヤイ雁平、聲高なそりや何事ぢや」雁「只今旦那を迎ひに大手先へ參りましたる所に、此非人めが何やら合點行かぬ面構へにて御城内を窺ひまする、篤と心をつけますれば、刄物を隱し持居りまする、夫故の詮義でごわりまする」木「非人の身として刄物を隱し持居るとは、ハテ合點の行かぬ」雁「サア非人め出せ」みゆき「何にも隱した覺えはござりませぬ」雁「出さねば惩う」ト少し立廻りにて、みゆき刀ひらりと拔き差付ける。みゆき「隱される丈は秘みますれども、斯樣にお目立まする上からは、秘みませう樣はござりませぬ、いかにも御覽の通り、惩非人の身と成下りましても、家に傳はる此刀」ト少し見得あつて。「但し又非人は刀を所持致しまする事のならぬ者でござりまするかナ」與「非人の女是へ參れ」みゆき「ハイ」ト つか〳〵出で。「與三右衞門樣」與「ヤイ〳〵女、つひに見た事も無い見苦しい女、必ず麁相云ふな」みゆき「ハイ、御用でござりましたかナ」與「非人の身として刀を携へ、城外に徘徊すれば咎める筈、何故又大手先にはうろたへ居るぞ」みゆき「ハイ此刀が賣たうござります」與「なんと」みゆき「斯樣の身と衰へ所々に流寓ひまするが、與三右衞門樣はお情深いと承りまして、此刀を買うて貰ひませう爲」與「アノ其刀を」みゆき「ハイ」與「イヤそりや身共ではあるいまに外、買うて貰はふと思ふ人があつての事であらうがな」みゆき「エヽ」與「勅使守護の高家に

な事でござりましたわいなう」與「されば〳〵、年には寄らぬものぢやてなう」杢「左樣でござりまする、イヤア其文私に下さりませ、今一度恥搔かしてやりまするわいの」與「イヤ廢にしやれ、遊軒殿の耳へ入つても可くない事ぢや、廢にしやれ〳〵」杢「イエ〳〵左樣ではござりませぬ、云はゞ私が胸が濟みませぬわいなア」ト與三右衞門兩人を見て。與「ハテ味に入込んだな、川浦遊軒は淀川筋に七里半の提を築き、往來自由の普請承ると雖も、川筋を舟にて往來する工夫致す者あるに於いては、重罪たりとも科を赦し、恩賞は望次第との仰、與三右衞門承り其高札、サ家を立つべき綱もと樣々に心は盡せども、遊軒が計ひにて獅子飛を切落したれば、淀川筋の水高うして、中々舟にて往來する事思ひも寄らぬ、サ家を立つべき功も無くして、勅使守護の遊軒に刃向ふは朝敵も同然、與三右衞門が城にある內は叶はぬ事〳〵」杢「イヤ申し、夫は何事を御意なされまするえ」與「サア此樣な雪の夜には、得て盜賊押込などの徘徊するものぢや、ヤイ目に懸らばナ命がないぞ、サア時節を待つて、見付られぬ樣に隱れたら可らう。サア何者も此邊に居らねども、大方雪に隱れさうなものぢや」ト縫之助小市囁き又隱れる。杢「何がいナ」與「アレ〳〵庭の樹木が大方雪に隱れさうなもの、オヽ夫が可い〳〵、ハテ入込んだなア」ト橋懸ばた〳〵にて。雁平「サア非人め出さぬか〳〵」みゆき「アイ何にも隱した物はござりませ

るナ」官「これは〳〵與三右殿、此間はいかいお世話になりまする」與「イヤ其元には今日は御苦勞にござりませう」官「左様にもござらぬてや」與「イヤ官翁殿、手前共は篤と存ぜぬ事ながら、茶の湯と申すものも、様々手前のある事さうにござるナ」官「なんとござるやら」與「先づ恁う手を上げまして、其處を恁う緊付けますか、是に挨拶がござる、其挨拶には其様に年は取つたけれども、いでさらば力づくと云へば、若い者五六人前も働く、人が何と侮つたとて、此力瘤で此力瘤で〳〵、ハ、、、、」官「イヤ與三右殿、手前左様な茶は存じませぬ」與「官翁殿其元にはもうお幾歳におなりなされまする」官「拙者七十六に罷成りまする」與「七十六。七十六で五六人前とは、ハテ達者な事でござるナ」官「何とござるやら」ト與三右衛門状を拾取り。與「つれない君様参るおよばぬ身より、つれないとは獨り旅の事か、及ばぬ身、此身はハテ變つた身ぢやなア、官翁殿何と茶の湯にも斯様の物が要る事でござりまするか」官「お花畠の茶の湯の稽古致さねばならぬ」與「イヤ官翁殿、此つれない君とは如何いふ君ぢや承りませう」官「イヤ與三右殿、大切な御勅使饗應の茶の湯、殊の外取込みまする、後程お目に懸りませう、ハアぢやて〳〵」與「イヤコレ此無情い君は如何ぢやぞいなう」官「ハアぢやて〳〵」ト云ひ〳〵奥へ入る。與「ハア、、、」ト此内門の際に縫之助、小市出て聞いて居る。木「テモ扨もマア好い氣味

振放し。杢「是はマァお前樣は御本性でござりまするかえ、さうして好い年をして。與三右衞門といふ夫のある身の上でござりまするぞえ、夫にマァ。つれない君樣參るおよばぬ身より、オヽ厭らし」ト投付ける。宣「年寄々々と云うて貰ひますまい、此樣に年は寄つて見ゆれども、いでさらば爰だと思へば、若者五六人前も働くてや、無情い君よ、幸ひ四邊は靜かなり、こゝらあたりでも隨分」ト又戯る。杢「放さぬのか放さぬか」宣「放さぬ〳〵、わしや何ほうでも放しやせぬ」杢「年寄だてら力が强うて迚も叶はぬ」宣「この力でまさかの時を推量なされい」杢「申し遊軒樣へ申付けるぞえ」宣「遊軒は愚、與三右に云うても大事ない、如何したとて放すものか」ト與三右衞門最前より出て聞いて居て、官翁を執つて抛る。「是は强い力ぢや、其强さでは」ト見て悔り。杢「エヽ好い所へ、申し先刻にから如何もなる事では」與「コレ〳〵奧へ今日は遊軒殿の御親父官翁殿、御勅使へ茶を差上らるゝ、かこひの花も念入れよと吩咐けたが」杢「イヽエイナ、先刻にからあの老爺めが」與「ハテ扨人には目も耳も無いと思ふて居るか、何事も聞いても居る、又知つても居るわいなう」杢「スリヤ先刻にからの事はよう御存じ。ハヽヽヽわたしや御存じあるまいかと思うて、ひよつとお疑ひでもあらうかと存じまして」與「ハテ女といふ者は、味な處へ氣の廻るものではある」ト官翁そろ〳〵入らうとする。與「イヤ官翁殿でござります

存じませぬが、御勅使様のお供なされまする遊軒様お前様、嘸氣苦勞に覺し召ませうナ」宣「倅遊軒が事は、淀川筋巡見致さねばならぬ故、さのみ屈託にもござらねども、どうで參らねばならぬ身の上、又身共が事は茶に事慣れたとあつて、御勅使へ茶を差上げる樣にとの事、高位高官に差上げるは、イヤもう氣が張つてなるものではござらぬて」杢「左樣でござりませうとも、去ながら茶に妙のあるお前故、高位高官にもお附合なされまする、ほんにマア私等も、姫御前ではござりますれども、茶の稽古致したうござりますわいナ」宣「夫は好い心懸、ちと稽古さつしやれ教へて進ぜう」杢「そんなら教へさつしやれて下さりませうかナ」宣「いかにも教へて進ぜう、併し茶といふものは、いかう難かしいものでござるてや」杢「左樣でござりませう」宣「マア一寸立たつしやれ」杢「アイ〳〵」宣「其兩手をぐつと上たへ」杢「アイ慿うでござりまするかえ」ト手を上げる。宣「ソレ〳〵爾う手を上げた所を慿う緊付けたものぢや」ト戯る、振放し。杢「あなたとした事が、こりや何事をなされまする」宣「ハア茶を教へてやりまする、幸ひ四邊が靜なれば、此邊で一吹呑みませうか」杢「是はマアあなたとした事が、ひよつと人に知れたら何となされまするえ」宣「なんの人に知れるもので、此間より何處ぞでは〳〵と存じて居つた、此方へ心中と存じ、此文認めて置いた、是を見て返事下され」ト狀を懷へ捻込み傍へ寄る、

右衛門殿の無調法になるが、嗜め〳〵」奴二人「段々誤り入りましてござります」雁「何とえらいものであらうがナ」杢「其方達は了うたら休め〳〵」二人「ない〳〵」ト入る。官翁「雁平〳〵」

雁「ナアイ」官「倅遊軒はまだ歸らぬか」ト愚癡なる老爺方の臺詞にて云ふ。雁「今日は旦那遊軒樣には、淀の景色御遊覽とあつて、御勅使諸共お出なされてござりまする」官「然らば追付歸るであらう、汝は早く迎ひに行け」雁「ナイ〳〵、小幡樣、お迎ひに往て參りませう」杢「太儀ながら早う往てござれ」雁「ナイ〳〵」ト入る。杢「是は〳〵官翁樣にも、冷えまするのに其樣になされずとも、マア些と御休息なされましたが可うござりまするわいナ」官「何ぼ冷えても爐のたぎりで、差して屈託にもござらぬが、年寄つて久しく蹲ばつて居れば、腰も膝もめり〳〵と、ア、いかう冷えまするて」杢「左樣でござりませうとも」官「ちとそれへ參つて寛ぎませう」杢「サア是へお出なされて、御休息なされましたが可うござりまする」官「左樣致さう、さて〳〵草臥た〳〵」ト向ふへ出る。杢「お道理でござりまする」官「イヤ又憖う見渡した處は如何も云へぬ」ト若い臺詞にて云ふ、木幡と顏見合せ。官「イヤなに御内所、此方の夫與三右衛門殿の、いかい心遣ひになりまする」トおやぢ方にて云ふ。杢「これは〳〵御挨拶でござりまする、夫與三右衛門殿は天下より此城を預り居られますれば、天下の御用は則ち手前の勤、さのみ氣苦勞にも

造物向ふ金襖二重舞臺、家體入込大名屋敷の體、好みあり、橋懸に城の櫓少し見える、中門は橋懸に縫之助小市、白き兜頭巾裝束にて窺ひ居る、高札あり白梅盛りの體、惣一面に雪降の體、榛の官翁下座の家體に惣白髪茶を立てて居る、向ふに奴雁平雪にて猿を造り居る、琴唄にて幕明く、奴二人竹箒にて掃除して居る。

奴〇「ナントやか内、甚に冷たい事ではないか」奴△「冷たい段か、おけすへから腦頭まで縮み上る樣なわい」〇「此方も遊軒樣の奴なら、此樣に冷たい目はすまいものを」△「したがあの樣にほだへかくると機嫌を損うて、えては笠のだいが落ちるものぢやてや」雁平「ヤイ〳〵汝等はソリヤ何を吐す、身共は旦那遊軒樣の御意で猿を拵へて居る、おのいらが差配は賴むまい、がたがた頤利くと顋引裂いて了ふぞよ」〇「わりや見事顋引裂くか」雁「望なら引裂いて遣らうか」△「引裂るゝなら引裂いて見よ」雁「引裂いて見せう」ト聒しう云ふ、小幡裃にて奥より出る、縫之助、小市呀き入る。本「ヤイ〳〵騷がしい何事ぢや」雁「さればでござりまする、此奴らが私めが事をがいに誹ります、夫故喧嘩でござりまする、サアうぬ等何とか云うて見ぬか」本「ヤイヤイ仲間ども、此度八幡御造營に付、禁廷より御勅使がお立なさるゝ、其守護として川浦遊軒樣、親御官翁樣此所に御逗留、萬事麁相の無い樣に呍咐置いたが、若し過失有つては夫與三

朱印出る。ト平太抛る、柳の枝へ懸る、高塀よりおふね見て居る。源「ハテ變つた所に隱しをつたな」平「平太が定紋は、何時でも御朱印ぢやと思うて居よ」源「最早御朱印の所在が知れるからは、此儘では置かぬ覺悟せい」平「最早あれが出たらしよ事か無い、うぬを殺す覺悟せい」ト唄になり是よりどろ〳〵になり、つまり平太を殺す、曉六つの鐘鳴る、岩疊搦みの駕籠の繩を切り、內より縫之助、總角出る。縫「源八」源「若殿樣」ふね「ソレ往來の御朱印」源「忝い」平「それを」ト源八ボンと切る。源「御座りませ」ト幕

第四幕目　淀與三右衛門屋敷の場

役人替名

一勅使辨の中將　粂松
一奴雁平　貫藏
一與三右衛門女房木幡　才藏
一みゆき　大吉
一縫之助　三十郎
一小市　東助
一仕丁、侍等數人
一傾城總角　金作
一與三右衛門妹きてふ　小伊三
一はたの官翁（本名辨之作）　治郎三
一神道源八　文七
一川浦遊軒　大五郎
一淀與三右衛門　四郎五郎

○

けて、其御朱印の所在を云うてくれ、武士が手を下げて賴む、聞分けてくれいサ」平「汝はおそい者ぢやな、爾うやはらで出たら返してくれうと云ひたいがならぬ、儕には常から意趣のある奴ぢや、いかにも往來の御朱印は俺が手にあるが、返す事ならぬと云うたら、汝切らざなるまい、切つては水の泡、そんなら助けて置いて云さうと思ふか、此平太が目の黒い内は、金輪際云ふ事ならぬ、サア切れ〳〵、サア切れ拔けヤイ」源「ハテ扨今云ふ通りの所存、何の爾ういふ氣は無い、抵抗せぬといふ證據」ト刀拋出し。「昔の意趣があるなら、汝が存分にして、跡で御朱印の所在を云うてくれ、賴む〳〵」平「オ、可い推量、スリヤ俺が存分になるか」源「源八も武士だ、二言は無い」平「そんならうぬを懲う〳〵〳〵」ト蹴倒し踏付ける。源「サア存分になつた、云うてくれサ」平「イヤ〳〵まだ這樣こつちやない、ずつとえらい事がある」源「まだ存分にならざ、サア如何樣とも爲いサ」平「うぬを懲うして〳〵」ト下駄にて顔を蹴り踏付け唾を懸ける。「汝は武士でないか、顔を灰吹にされても無念には無いか、へ、、、、、張合の無い奴」源「ハテ抵抗せぬと云ふからは、何の構はう、存分にしてくれ」平「まだ存分にや爲足らぬ」源「まだ存分にや爲跡らぬか、此上の存分は」平「汝を存分には懲うする」ト切懸ける、傘にて留め。源「其存分ばかりは得成らぬ」平「ならねば懲うぢや」ト立になり源八、平太が衣裳の紋を切る、

返し

造物向ふ黒御簾、柳の幹あり、東大臣柱に出口の門あり、雨降りの體、侍提灯燈し駕籠一挺

總角、縫之助乘せ出ろ、跡に平太合羽傘足駄穿き出ろ。

舁夫「申し旦那、どうぞ桐油を懸さして下さりませ」侍「大事の急の用事でお歸りなさるゝに、小言吐すと首が飛ぶぞ」平「コリヤ〳〵。急の道、駕籠の損じ賃は如何程なりと遣はす、早くやれサ」舁「左樣なら可うござります」ト向ふへ往かうとする、向ふより源八駕籠の鼻を押戻し本舞臺へ來る。平「源八か」源「平太か」侍「うぬ」ト提灯切落す。皆々逃げ入る、花道へ追うて行き本舞臺へ戻る。源「其後は逢はぬが、最前はいかい世話であつたなア」平「汝が爰へ來たは、二人の奴等取返しに來たか」源「マア那樣もの」平「いかにも戻してやろ」ト駕籠の傍へ拔いて差付ける。源「コリヤ〳〵逸まるな、麁相すな、汝には只一言云聞かす仔細がある、逸まるなマア待てサ、是此一通は最前其方が懷中より落せし一通、此内に往來の御朱印は其元の所持可被成とあるからは、其方が手にある筈、此往來の御朱印、若殿の御手よりお上へ差上げねば、盜賊の惡名が拔けぬ、汝も以前お主の事ぢや、私同士の意趣に、主の大事は替へられぬ、爰を何卒聞分

りヤ兩人を引立ていゝ」ト唄になり。侍「うせう」茂「ハアー」ト泣く。權「うぬら」侍「きり〳〵うせう」權「マア〳〵待たんせ、コレわりや俺を太郎に懸たなア」侍「うせう」記「うせう」權「マア待て、よう山を見せなんだな」侍「ハテうせうてや」ト花道へ入る、茂治兵衛、おふね跡見送り。茂「まんまと是で遁れた」ふね「コレ是は最前平太郎が懐より落した一通」ト茂治兵衛讀で見て。茂「是はマア結構な物拾やつたの」茂、ふね「ア、嬉しや〳〵」ト兩人拜む、押入より源八出る。源「舅殿、女房共」ふね「まんまとお前に仕立てゝやりました、此一通は最前平太が懐から落した一通」ト源八讀んで見て。源「スリヤ此一通があるからは、御朱印は平太が所持して居るか、此樣子を若殿樣へ」ト長持の錠を拔切り明けて。ふね「ヤア此長持の內が切拔いてござんす」源「內が切拔いて有るとは合點の行かぬ」ト花の井出で。花「コレ〳〵おふね殿や、こなさんが平太の傍に附いて居よと云はんした故、引添うて居たればの、總角樣を引連れて裏道から逃げて去んだ」源「ナニ總角樣を引連れて去んだとあるからは、若殿樣も平太めに出し拔かれたか無念なア」花「まつと先でござんした」源「程は行くまい」茂「聟殿」源「女房共」ふね「是が近道」源「合點ぢや」ト尻褰げ入る、唄になるト

之助殿に繩懸けて渡す、そんなら這奴が源八か」ふね「ア、コレ〳〵、お前の口から主を源八かと云はしやしたからは、もう顯れたかハア嬉しや」權「何の事ぢや」與「コレ〳〵源八、此樣な淺ましい縫之助が姿と思うて、見限つてももう叶はぬ、三世のきえんを結べいヤイ」權「何の事ぢや、こりや皆氣が違うたさうな、阿呆めうぬは那樣事を何處で習うて來をつた、祭りのばんじりに雇はれたと思うてけつかるさうな」記「縫之助最前は能く贋者を摑ました、夫は追つての事、家來ども其奴縛れ」侍「腕廻せ」權「滅多無上に廻せ〳〵と何の事ぢや」記「卑怯な源八、是非あらがふとてもあらがはせぬ確な證據があるぞ」權「證據、面白い」記「家來ども最前の繪圖を出せ」權「何ぢや繪圖ぢや。サア合して見た〳〵」ト家來繪圖を出し合せ。記「年の頃三十年、眼小く」侍「寸分も相違はござりませぬ」記「うぬ是でもあらがふか」權「ア、コレ〳〵〳〵〳〵何の事ぢや」記「右の腕には鐵砲傷あり」侍「出せ。鐵砲傷が確りとござりまする」記「左の腕にはみふね命と入痣あり」侍「御ふね命と確りとござります」記「其奴縛れ」侍「畏りました。捕つた」ふね「コレこちの人、入痣から顯れたかと思へばわしや悲しい」權「何吐す」記「家來ども引立て」侍「うせう」與「コレお家さん旦那さんに」茂、ふね「シイ」與「今の佛さんの命日には、何ぞ旨い物を拵へて進ぜて下さんせえ」茂、ふね「かはいや」ト茂治兵衛、おふね顏見合せ。「お痛はしやなア」記「ソ

つあつよオ、あつ」トおふね鼻紙に挾み酒をつぎ。ふね「サア私から獻すぞえ」ト權九郎受て手へかよる。權「あつあつよ」トおふね燗鍋を權九郎が右のかたへあて、二人ながら轉る、色々可笑味あり。ふね「サア是で可い」權「フウかたみうらみのない樣にしたものぢやな」ふね「コレ此羽織を著やんせ」ト源八の羽織著せる。權「何ぢや可笑い物著せやるの」ふね「是でとんとこちの人」權「女房共」ト連立ち屛風引きながら入る、記內家來大勢連出て。記「平太郎樣、平太樣は何處にござります」ト屛風の內を見て。「ヤアうぬは最前の遣手、誠は源八が女房ぢやよな、ソリヤ家來ども」侍「やらぬぞ」權「アヽコレ〳〵、やらぬとは何の事ぢや、一ツも覺えは無いが何の事ぢや」記「ヤアうぬは神道源八ぢやよな」權「イヽエ神道ぢやござりませぬ、門徒でござります、喃女房ども」記「うぬ共女と共々寢て居るからは、源八に違ひは無いぞ」權「コレ〳〵女房は女房ぢやけれど、僅た今ぬく〳〵の女房ぢや、云譯をしてたもいなう」ふね「コレ〳〵こちの人、お前は源八ぢや無いハサ、源八ぢやないさかいで、何處へ出ても源八ぢやないと云拔けて下さんせ」記「女房が云敎へるから、愈源八ぢやソリヤ」侍「やらぬ」ト內より茂兵衞、與九郎に繩懸け出る。茂「ハイ舅の者でござります」ふね「アヽコレ〳〵父樣、お前は三代相恩のお主に繩懸けるとは、大惡人ぢやなア」茂「コリヤやい、今時は名を取らうより德を取れぢや、夫故繩

ね命、ア、針がない鈍な事ぢや」權「針が無くば明日の事」ト權九郎がねつけのさすがをおふね見て。ふね「イエ〳〵幸ひ好い物がある、此小刀で」權「ア、コレ〳〵、如何に女子の物を知らぬというて、小刀で入痣するといふ事があるものか、神武以降忌物ぢや」ふね「そんなら措かんせ、ドリヤ奥へ往て」權「ア、是さても氣の短い、サアそんなら入痣した跡は今のぢやぞや、サアサアお突なされ〳〵、とんと鳴神が呆れる」ふね「そんならおふね命と彫るぞえ」ト合方、此内權九郎色々思入あるべし、此間ほり〳〵臺詞云ふ。ふね「お前は大分強いわいな、アハヽヽハ」權「なんの此位の事は朝飯の茶漬ぢや、私がまへ喧嘩したが知りやるまいの」ふね「イヽエ知らぬわイナ」權「何が大勢、向ふは拔身を持つて俺に切懸る所を、手を出すは邪魔ぢやと思うて、天窓でこう受けたぢや」ふね「ハテなア、コレ爰が大事の辛抱所ぢや、かう〳〵〳〵して恁うするともう可い、扨も仰山な」ト早う突く。「ソレ見やんせ好う出來た」權「ムウもう終ひか、おりや又ま些と長いものかと思うた、サア約束の通り」ト奥の一間へ入り唐紙を締める。ふね「マア〳〵待たんせ、まだ肝腎の事が有るわいなア」權「まだかいナ」ふね「ハテ祝言の盃せねば、なれ合女夫になるわいなア」權「盃は跡へ廻す」ふね「幸ひ爰に酒がある」ト火鉢の燗鍋に手を添へて、「オ、あつ、是はきつう通つたさうな」權「何の熱い事があろ」ト取りにかゝる。「あつ

事なら、私はほんの男があるといふ名ばかりで後家同然、言ふ事聞かいで何とするもので」權「それは夢では無いかいのう、そんなら御意の變らぬ内に早う〱」ふね「アヽ忙しない、まだ些と云はねばならぬ事がある、口でばかり爾う云はんしても、男の心と飛鳥川と、よう云ふぢやないかいなア」權「そんなら心中見せうか、腕引かうか股突かうか、そもじ故なら如何なりとするわいなう」ふね「イエ〱那樣仰山な心中は要らぬ、お前の體へごくいが打たい」權「何のごくいとはや」ふね「ハテお前は人に勝れて好い男、若し餘處の女子が惚れると腹が立つ、それでお前の腕へ入黒子をしたい」權「ムウ入黒子は夫は心易い、明日でも內でして來う」ふね「アヽ那樣水臭い、爾う云うて欺そてな、もう〱心底の知れた、ドリヤ奥へ往て」ト往かうとする。權「アアコレ〱氣の短い、するわいなう」ふね「そんならサア爰へごんせ」ト硯箱出し。權「何とする」ふね「ハテ知れた事おふね命」ト唄になり左の腕に書きにかゝる、權九郎身を縮める。「ハテ臆病な、まだ書くのに何の痛い事であるぞいナ」ト御の字を書く。權「アヽコレ〱、そりや御の字ぢや、つい平常のおの字を書きやいなう、文盲な人ではあるほどにの」ふね「お前は強う私を安うさんすの」權「何故に」ふね「ハテ私はお前の女房、女房ぢやに依つて御の字を書くのぢや」權「扨は我等が爲の御ふねといふ心か」ふね「アイ」權「もつとも」ト書く。ふね「是でおふ

入る、與九郎出る。與「お家さんアノ、ヤアお前は旦那さん」ト口に手を當ておふね呼く。「ウンウン呑込んだ」ふね「とつさんに早う」ト紙入拾ふ。「こりや最前平太が懐から落した紙入、此一通は」ト呼んで見て戴き居る。權九郎出る。權「おふね／＼、何處へ往た」ト出る。「おふね／＼コリヤ」ふね「エヽ權九郎さんか」權「權九郎さんぢやが、今汝は俺に逢たいと云うておこしたが、何ぞ用があるか」ふね「アイ」權「何の用ぢや」ふね「權九郎さん」ト思入あつて。「強う冷えるなア」權「かまうな」トぜうらくかく。ふね「ドレ火鉢上げよか」ト火鉢を傍へやる。權「ついどない事ぢや、ドレあたつてこます」トおふね色々思入あり、權九郎見るやうで見ぬこなし。ふね「アヽコレづつと冷えるけれど、滅多に火鉢へもあたられず」權「コレ爰へ來てあたつたが可いわい」ふね「大事ないかえ」權「何の誰が呵る者があつて」ふね「そんならあたろ」ト傍へ寄る。權「オヽさむ、テモ寒い事ぢや」ふね「權九郎さん、酒飲まうぢやあるまいか」權「飲まう／＼幸ひ爰にある」ト酒銚子を取つて「燗にやる事は面倒な」ト火鉢の上へ懸ける。ふね「權九郎さん、お前はアノ私に何の彼のと云うて下さんすは、マア定か嘘か夫が聞きたい」權「嘘かとは曲がない、もう／＼／＼天邊から足の爪先へ徹へて」ふね「イエ嘘ぢや嘘々、よう私がうか／＼と乘らうかいなア」權「ほんに／＼／＼強いほん」ふね「云はしやんすな、お前がほんの

這奴が心に隨うてたもんなや」平「吐した面はいの、此樣な目に逢うてもまだ頤の減らぬ、すそびんばふのはつた二才めが、骨も皮もごたく〳〵になるやうに、うぬを慿うく〳〵」ト捻廻し色色あり、無理に踏付ける。總「もういつそ」縫「隨がやるとおりや死ぬるぞや」總「サア夫は」平「オオ死たくばいつそ打殺して」ト引廻す、おふね總角を突放し、縫之助を中へ圍ふ。ふね「ソレ總角さんを渡します」平「へ丶丶丶餘程こたへたさうな」ふね「引替にするからは、云分はござんすまいがナ」平「總角さへ渡せば、何奴も這奴も緩めてやらう」ト長持へ縫之助を引立入れ錠卸す。兩人「是は」平「まだ強ばつて居る總角、ウンと言はした上で此鍵渡さう」ふね「總角さん常磐御前を知つてぢやあらう」總「わたしや死ぬると云うても」平「抱れて寐ぬと僅た一突」ト刀逆手に持つ。ふね、總「ア丶コレ」平「ウンといふか」總「サア如何なりと」ト泣く。平「奥へ往て抱いて寐よう」ふね「其上で其鍵も」平「欲くばやらう、うぬ」ト源八方へ往かうとする、おふね枷になる。「ハテ命冥加なうづ蟲め」ト平太、總角を引立て奥へ入る、唄になり源八奥へ驅込まうとする、おふね執付き。ふね「コレ今奥へ行くと總角殿に凶事が出來る、殿樣が生きてはござらぬぞや」非人「お尋の源八見付けたぞ」ト走り入る。源「南無三」ト往かうとする。「コリヤもう網を張つたわいなう」ふね「こちの人私が思案は」ト呼く。源「出來た、そんなら俺は」ト呼き

胸倉執り。縫「ヤイ汝が爲にも主の位牌を土足に懸けて、恩知らずめ、さうして御朱印も汝が盜んだナ、サア出せ、汝出さぬとて出さゝずに措かうか」ト平太默つて居る、懷を搜し。「こりや懷には無い何處へか隱した、サア眞直に」ト平太、縫之助が首筋執つて捻付け。平「うづ蟲めがうぬ、おのい等が手に觸る所に置いて可いものか、川浦平太は一國の大名、其大名の懷中を家搜して、うぬ盜をひろぐか」ト捻付けて振廻し。「此樣にされたら、何處ぞの溝蟲めが面を出しさうなものぢやが」ふね「御朱印の知れぬ内は、滅多に顏も出されまい」平「總角心に隨へヤイ」總「エヽ此方はなう」ト泣く。平「ヤイみぞ蟲め、やいうぬが總角に腐り付いてけつかる故、身が戀の妨げ、どこぞでは〳〵と思うて居たが、爰へ出たは百年め、思ひ斷りました總角を上げませうと、吐しをろう吐せやい」ト色々にじり付ける。ふね「出まい〳〵、ハテ總角さん出やしやんすな」平「出たが最期、しやぶりとから竹割ぢや」縫「エヽ汝はなア」平「汝とは〳〵、エヽ生白けたしやづ面、こゝを打つて遣らう」ト縫之助が眉間へ傷付ける。總「ア、コレ」トおふね留める。平「出たが最期、朱印は消えて了ふ、出て見ぬか、コレ恁うするが出て見ぬか」トこづく。「ハヽヽヽ好い人質が出をつた、總角厭なら抱いて寐ようとは云はぬ、其代りに這奴をつまみ殺すぞよ」總「サア夫れは」平「出さうなものぢやがナ」縫「コレ〳〵必ず俺を庇うて、

房ではないか」ふね「源八とやら源七とやら、那様者は存じませぬ」平「へ、、、知らぬであらう、何處ぞ其邊に居さうなものぢやが、正眞の猫に追れた鼠同然、彼處の隅爰の押入の陰に隱れ廻るのら犬めが」ふね「サア犬と云はうが猫と云はうが、爰へ出ては彼の衆、イヤサ主に別れて彷徨ふ樣な、人が何の此邊に居てたまるものか」平「イヤいふまい關口平太神道源八と、互に兵術を爭ふ程の奴が、うぬが主の國を横領せられて、あんけらひよんとしてけつかるはどう腰拔め、大切爰へ出て平太へ欝憤を云はぬか、アノ箆坊めが」ふね「サア腰拔と云れうが何と云れうが、大切な願ひがあるぞえ」平「爾う叶すは平太が所持して居る廻船の御朱印の事であらう」ふね「エ、」平「そりや世話燒くな、俺が持つて居る」ふね「エ、」平「可愛や、どの樣に働いても知れぬ所に、たほ〳〵して置いた、平太に一寸でも傷が付けるが最期、朱印は天へ飛んで了うて、マア此界には無いぢや、ようしたものか、爰へ出て平太と勝負して取返さぬか、取返して見ぬか、こりや何ぢや、ハァ飾つた二ツの位牌は、左右衛門と將監が位牌か、エ、あた忌々しい」ト蹴飛す。ふね「サア〳〵、爰をぢつと耐へねば役に立たぬ、是はしたり總角さん如何ぢやいナ」平「ヤイうぬが主の位牌ぢやぞよ、其位牌を平太が踏躙るが無念にはないか、口惜うはないか、口惜くば爰へ出て平太と勝負せい、出あがらぬか青蠅めが」ト縫之助中二階より走出で、平太が

力であつたか、我身の子よりも可愛うて、つひぞ肌を放した事も無いもの、姉さんへの言分は、何と未來へなるものぢや、其方に別れてわしや何とせう、お松、も一度物云うてたも、知らぬ事とて殿樣に、逢ひたい〳〵と云うて暮したを、逢はしたら可かつたもの、お松堪忍してくれい怺へてたも、かはいや〳〵」ト大泣。總「今までは心中を、立てる〳〵と思うたが、女の意氣地はお松さんお前に負けた、未來は必ず女夫になつて下さんせ、いとしや〳〵」ト此臺詞の内橋懸りの屏風開く、平太卒塔婆を持ち聞いて居る。源「泣いたとて悔んだとて歸らぬ事、兎にも角にも殿の御先途を見屆くるこそ娘が追善ぢやかや」ふね「アイ」縫「せめて佛間に回向がしてやりたい」源「憚りながら夫は望みまする所でござりまする」ふね「あの子が肌身に付けた著物、せめて貴方の手で」ト渡す、縫之助取つて抱緊め。縫「可愛や〳〵」ト平太と顔見合す、おふねちやつと源八を押入の内へ入れる、縫之助は中二階へ上る、おふね思入あり屏風の方を見る。平「エヽ」ト卒塔婆を踏折る、總角を引捕へやうとする。ふね「こりや何さしやんす。揚詰の内は指も差させぬと云ふのに、物覺えの惡いおさんではある程にの」平「汝は男に生れ勝つたものぢや、出來すわいやい」ふね「其樣にもござんせぬて」平「神道源八が女房」ふね「エヽ」平「夫が迯廻る故、嘸不自由にあらうナ」ふね「ハヽヽヽ一ツも覺えの無い事を」平「わりや源八が女

障子ぴつしやりと閉す。ふね「コレイなア、お松が死んだとは何の事ぢやいな」總「殿さんお前までがどうでござんすぞいなア」ふね「此著物はお松が。血だらけになつて、こちの人、唯た今まで無事で居たお松が」緑「俺が事を思うて、今まで姿を見せたのは、幽靈であつたわいなう」ふね「エヽ」源「其方が身の上娘が事、與九郎が話で備に聞いた、何者とも知らず渡し場に於て、娘が生膽を取つたとある、戌の年戌の月戌の日に誕生したる女の生膽に、白髮を合せ用ふれば、忽ち白髮となつて相變るとあり、正しく敵の所爲、其方にも此事云聞かさんと來て見れば娘が面影、殿の事を戀慕ひ、未來の緣を結んで貰ひたさに、此世の緣は總角殿、子に迷はぬ親は無いわいやい」緑「夫程にまで俺が事を思うてくれる志忘れ置かぬ、此世は僅か未來では、長う夫婦になつて遣らうぞよ」ト總角泣く、おふね振袖を持ち色々身に添へ泣く。ふね「母樣、傾城になつて居るのに、此櫛は小うて惡い、もそつとむねの高いのを買うてくれいと云うたを、何を榮耀らしい、母も此樣に金遣ふのは大抵苦い事か、忠義にする勤奉公、榮耀者と呵つたれば、殿樣が今でも見えた時に、わたしや惡うござんす、何卒すゝきの兩ざしを買うて下さんせ、殿さんは此樣な風がお好かいなアと、死んで居ながら修羅の迎ひは苦にもせず、經念佛の一遍も聞かず、粧ひ化粧や頭髮の飾り、唄三味線を心懸けたは、殿樣に添ひたい〳〵と、思ふ心の念

うもの、何事も不孝の段は、御免されて下さりませ」ト二階の障子明く、中二階にて茂次兵衛鉦打つて廻向して居る。ふね「姉さん、嘸其時は口惜い最後でござんせう、お氣遣ひなされますな、身醢になるというても、殿樣の仇お前の敵、追付討つて修羅の苦患を助けませう、お松が事は氣遣ひせずと、草葉の蔭から見て下さんせ、其代りには源八殿は貸して下さんせ、未來は三人一つ蓮でござんすぞや、南無阿彌陀佛々々」縫「よその無常を告げるやら、心寂しき一ツ鉦」源「幸ひの追善供養、サア總角樣二世までの固めの盃、殿の位牌の前で縫之助樣と夫婦の盃」總「エヽ夫ではお松さんが」源「其松めが事を、志しに預つた故の祝言、此方は本妻」ふね「其代りには、お傍になりとも娘が事を」源「祝言の謠はあの念佛」ふね「お酌致しませう」ト唄になり祝言する。源「御朱印の盜賊は、慥に平太とは睨んだれども、何を是ぞといふ證據も無し、迂濶にかゝらば御朱印を、土灰にもなさば永々お家は埋木、見出すまではと今日まで廓へ入込めども」ふね「慥に是ぞといふ證據も無し」源「女房、序に此戒名に廻向して置け」ト戒名を出す。ふね「山巖喜譽信女、此戒名は」源「娘松が戒名」ふね「エヽ」源「お松は死んだわいやい」ふね「エエ、それに又先刻に父樣が」ト二階より茂次兵衛顔出し。茂「聟殿」源「舅殿」茂「先へ來て居やつしやるの」源「疾參つた」茂「胸に詰つて」と思入して。「其處へ云うて下され」ト著物を抛る、

囁く。常「ヤアそんなら殿さん」ト常磐木囁く。常「エヽアノお前、イエ〳〵夫では」ト又囁く。總「眞實」常「眞にかえ」總「なんの神懸けて」常「エヽ忝うござんす」ト唄になり常磐木を屏風の中へ入れ、總角屏風引廻し、おふねと顔見合す、おふね物云はずに拜んで居る。總「是程は女の常ぢや、堪忍して下さんせ」ふね「子程可愛い者はござんせぬ、了簡して下さんせ」總「イエ〳〵私が心の狹いから、嘸蔑視ましやんすであらう」ふね「身勝手な者ぢやと、怨んでござんすであう」總「手を合せて拜みます」ふね「イエ〳〵私が」總「イエ私が」兩人「堪忍して下さんせ」ト源八、縫之助を連出る。源「女房おふね」ふね「ヤアこちの人」總「ヤア殿さん」源「始終の樣子は皆聞いた、いかい苦勞をするなァ」ふね「お前に其詞を聞くが氣附人參、好う來て下さんした」ト執付く。「何時の間に爰へござんした」縫「聞けば聞く程、果敢ない浮世ぢやなァ」源「豐入院殿總山大居士、豐壽院殿角山大居士、今日は左衛門樣の御命日、將監樣の御逮夜」トおふね源八が手を卷り。ふね「みふね命、姉樣も今日が逮夜」源「心ばかりのせめては營み」ふね「今日の命日、人に隱して料具も爰に」ト唄になり位牌を飾る、其前に縫之助を直し、おふね硯蓋に菓子餅を供へる、此間唄。源「嘸御無念にござりませう、追付敵討つてお家を再び取立ませう間、今暫く草葉の蔭でお待なされませ」縫「其時都に居りませうならば、叶はずとも遊軒を一太刀恨みませ

結ぶの神様の結び樣に念が入つたものでがなあらう」ト此臺詞の中に千代鶴、八重菊、松代出て屏風を引き床を取る、花の井、みちとせ、千代菊出る。花「總角さん」總「好う來て下さんした、二階客はもう濟んだかえ」花「アイ皆奥の座敷へ往て、二階には常磐木さん一人轉寐してござんす」總「そんならお前方を頼む、奥の客へ好いやうに間を合して、常磐木さんを爰へ呼んで下さんせ」三千「そんなら爰へおこすかえ」總「頼んだぞえ」松、千「アイお床は可うござんす」總「コレ」ト皆々囁く、呑込んで入る、總角長持の錠明ける、縫之助色事師の形で出る。縫「太夫か」總「殿さん」ト物云はずに行燈の火を手燭へ燈し、暗がりにする、平太後へ出て暗うなる故氣を著ける、久馬出る、是に囁く。ト是より平太探つて橋懸り床の取つてある所へ行く、源八立役の形にて才兵衛が口を押へ出て、同じく床の際へ寄る、總角縫之助點頭合ひ連立床の傍にて。總「待つてござんせ」總「早うおじや」ト總角元の所へ戻る、久馬床の傍へ探り寄る、平太縫之助を執へる、コレといふ口へ手を當てる。久「平太樣御首尾は」平「ソリヤ」ト久馬に渡す、久馬縫之助を縛る、所へ源八、才兵衛を突出し縫之助をとる、久馬、才兵衛に猿轡を箝め縛る、源八は縫之助を伴れ探つて内へ入る、平太舌舐りして是より色々思入あり、樣々あるべし、所へ中二階より常磐木を連れ出る。常「總角さん今云はしやんした事は」ト口に手を當て。總「コレ」ト總角

ね止める。ふね「コレ待つて下さんせ」茂「エヽいつそ打割つて云ひたい、云ひたいけれど」與「云うたら消さんすであらう、お家さん逢して下さんせいなう」總「逢さいで何と致しませう」ふね「總角さんか」茂、與「今の樣子は」總「みんな聞きましてござんす、おふねさん何にも申しませぬ、エエ」ト拜み泣く。ふね「此仕儀ぢや程に何卒」總「假令どの樣な事があるというても、是がマア如何默つて居られませう」茂「兎角好い樣に」總「お松さんは本妻私は妾、二人して中好う添ひますわいな」ふね「有樣は親の口から言ひかねてをりました、何卒そんなら」總「直に爰に寐さします る」ふね「エヽ忝い、そんなら父さん與九郎も、ちつとの間奧へ」茂「行くなと云うても行かねばならぬ、阿呆來い」與「アイ」ふね「まだほんの懷子、お前を賴むぞえ」總「そりや氣遣ひさしやんすな」與「何時消えうも知れぬ」茂「コリヤそんなら案内してたも」ふね「小座敷へお供致しませう」與「佛壇のある處へ」茂「コリヤ」ふね「いかさま、義理といふ其義理こそは義理ならめ、義理の上越す義理もあるまじ」茂、與「南無阿彌陀佛」ふね「サアござんせ」ト唄になり、おふね、茂次兵衛與九郎を伴れ入る、跡にて總角思入あつて手を敲く。禿「アイヽヽヽ」ト總角囁く、禿松代入る。總「今までは私より外に、一生女房は持すまいと思うて居たが、しかも私が床取つて寐さゝねばならぬといふも、お松さんと殿樣との中へ、よく／＼先の世で緣を引いて中か、

る」ふね「何がえ」茂「サアそりやあの、二階の客が座敷の興が醒める、消える、些との間なと消えぬ様にしてくれをれ、エ、阿呆め」ふね「其様に思うては疾病が出る、今でこそ此様な淺ましき形になつて居れど、追付殿様を御世に出して、娘も歴乎とした聟を取りますわいナ」茂「何ぢや娘に聟を」ふね「アイ」與「ワア」と大泣。ふね「何を泣く事があるぞいやい」茂「娘其方に無心がある、聞いてたもるか」ふね「父さんとした事が改まつた、何なりと云はしやんせいナ」茂「餘の事でも無い、お松が願を聞いてたも」ふね「お松が願とはえ」茂「如何に忠義なればとて、逢さぬとは餘り酷たらしい、一生の俺が頼みぢや、何卒殿様に逢してやつてたも、お松よ氣遣ひするな、汝が心に入つた様に祖父がしてやらうぞよ、おふね頼む頼むわいなう」トおふね俯向いて居る。與「コレお家さん、こなさんの前のお家さんが死なんしてから、うづくかして旦那をしじう甜めさんしたぢやないか、コレ物心覺えてからは堪忍の成るものぢやない」茂「コレ孝行は外に無い、何卒殿様と孫と寐さしてやつて下され、頼むわいなう」與「私が一生の恩に被ませう程に、お松さんの嬉しがらんす様にして下さんせ」茂、與「拜むわいなう〳〵」ふね「お前より私が逢してやりたさは、どれ程にあらうと思うて居さつしやんすぞいなう」茂、與「そんなら逢してやる氣か」ふね「如何も義理が立ちませぬ」茂「爾うぢや」ト匕首にて死なうとする、與九郎おふ

は娘が事を知つて居るか」ふれ「常住傍を離さぬもの、知つて居いで何と致しませう」茂「猶どきどきとして譯が知れね」與「コレお松さんはな」ふれ「アノ中二階に居るわいなう」茂「ヤアお松は二階に居る」ふれ「又案じたものぢやござんせぬ、客に揚られあの二階に」茂「二階に」ト二階に三味線唄を唄ふ。ふれ「アレあの聲がお松でござんす」茂「ヤアお松か」ト見る、二階にがきの影法師映る。皆々「ヨイヨ〳〵」與「ヤアあの影は」ト茂次兵衛與九郎が口を押へぢつと泣く。ふれ「常よりは達者にござんす」茂「そんなら殿樣を慕うて」ト思入あつて。「可愛や〳〵」ふれ「總角殿に勤をさすと、生きては居ぬと殿樣の御短氣、お松が身の代で今日までは總角殿を人に逢さず、我娘の戀の取持して、總角殿をそでにする、末の出世を娘ですると世間の口の端、總角殿の妬み、源八殿まで忠義の立たぬ悲しさに、折角逢はうと思うておぢやつた娘なれども、隱し秘んで逢はせぬも義理詰、殿樣はつい傍に御座る事も知らずに、逢ひたい〳〵と云うてゐる心根可愛うござんす」茂「そんなら殿樣には逢さぬか」ふれ「アイ」茂「可愛や〳〵」ふれ「侍には何がなつたものぢやぞ」ト與九郎二階へ行かうとするを茂次兵衛引戻し。茂「何處へ行く」與「私は常々殿樣によう似た〳〵と云うて、私ばつかりを廻して居やんした、今の譯を聞けば可愛さうに、せめて俺が顏なと見せて樂ましてやるのぢや」茂「あんだらめ、汝や俺が逢ふとつい消え

いやら」與「譯のある事ぢやごんせぬ、コレお松さんはなア」茂「又吐すか待をらぬか」與「へ、、へ、お松さんはお松さんぢや、ア、」ト泣く。ふね「尤でござんす道理でござんす、お前の心にも姉のみふねが居たらば恁うではあるまい、產さぬ中ぢやに依つて、廓へ賣つたかと思はしやんせう、なんの眞實の娘より可愛もの、假令此身を刻まれるといふても、あの子を放して可いものか、皆お主の爲ぢやと堪忍して下さんせ」茂「其樣に可愛がつてくれる程、おりや身も世もあられぬわいやい」ト泣く。ふね「コリヤ與九郎、何も彼も汝がよう知つて居るぢやないか、何故父さんの篤りと合點の行くやうに、云うて聞してはくれぬぞいやい」與「さいなア、云うて聞したけれども、エヽコレ俺より、泣くなと云ふ此なさんがたんと泣かんすわいの」茂「何吐す、おりや泣きはせぬわい」與「夫でも涙がちよろ〳〵出るわいなア、年寄といふ者はこたへの無いものぢや」ふね「したが氣遣ひして下さんすな、娘も達者に勤めて居りまする」茂「ヤ」ふね「私が傍に附いて居るに依つて、風邪一ッ引しはせぬ程に、夫を腹癒に、お前に知らせずに廓へ來たは、了簡して下さんせ」茂「ヤア〳〵〳〵何ぢや孫は達者で居る」ふね「アイ、しかも廓へ來るはあの子の望み」與「其譯も篤りと咄しました」ふね「夫ぢやに依つて、辛い勤ぢやとばかり思はしやんすな、殿樣に逢ふを賴にして居やるわいなア」茂「何ぢややらどき〳〵と譯が知れぬ、其方

ぬ顔付ぢやわいなア」花「常磐木さんの三味線が聞きたいわいナ」オ「こりや好うござりませう」
常「わしや得う彈かぬもの」花「なアに此中歌うて居やしやんした、わしや知つて居る」ふね「ムウ
もうしんしやくか、あんじたものではない」花「どうでも聞きたいわいナ」オ「サア〳〵所望ぢや
所望ぢや」トかけ畫にて三味線引く。ふね「ハアとう〳〵唄ふ〳〵、怯ず憶せず屋敷で教へた
三味線は女子の嗜み、廓の客の慰みに間に合ふといふは、正味の雙六ばんてよこづち、茶臼が
甕のおもしぢやまで、イヤ〳〵這樣に云うてゐても埒が明かぬ、時に此方の身請の事は、かう
ツ」トおふね色々思入ある所へ、茂次兵衛、與九郎伴れ風呂敷をおひ驅出る。茂「慥に此邊ぢ
やと聞いたが」與「格子のある所ぢやと云うたが、爰でごんす」茂「爰ぢや〳〵、コリヤ必ず泣え
な、何にも云ふな」與「何の云うてたまるもので」茂「そんなら可い、アイ誰ぞ頼みたうござりま
す、爰の家にお舟といふわろがあるか、一寸逢して下さりませ」ふね「アイ誰ぢや、此方へ入ら
しやんせ」茂「入つても大事ござりませぬか、御免されませ」ト内へ入る。ふね「何處からござん
した」茂「イヤ私は些と」ト顏見合せ。「おふねか」ふね「父樣」與「お家さんかえ、エヽ」ト泣く
を茂次兵衛睨む。「泣かぬぞ〳〵」ふね「でも能う來て下さんした、文を遣らうにも便りは無し、
定めて廓へ來て、跡で憎い奴ぢやと叱つて居さしやんしたであらう」茂「イヤモウ憎いやら悲し

む。平「是は出來したサア飲め」常「そんな無理な事を」平「飲まぬか」久「食へヤイ」總「コレおふね殿、あれ見やしやんせいなう」常「詫言して下さんせいなア」ふね「飲んだり〳〵、飲まにや持てぬて」ト寐言の樣に云ふ。平「ドレ喫はしてやらう」ト總角鉢を取つて常磐木を引退け。總「貸しますでござんせう」平「貸すか」總「貸すわいなア」平「貸せば可いて」總「貸さう程に、もう常磐木さんは堪忍して下さんせ」才「サア埒が明いた」久「是から奥へ往て、彼の奴も詮議致しませう」平「奥へ往て一ッ飲まう」才「サアお出なされませ」權「あたほこしもない、可い、俺も奥へ往て小びつちよを對手にして飲んでこまさう」常、幸「旦那私も參じませうか」權「勝手にしをれ」才「サア總角來い」才「サアお出なされませ」ト唄になり平太、總角を伴れ入る、久馬常磐木を伴れ、其外皆々入る、おふね寐て居る、權九郎才兵衛にいろ〳〵可笑しき思入、才兵衛驚き。才「アッ、、、ッ、。エ、權九郎さんお前の其形は何ぢやえ」權「用場はないか」ト入る、才兵衛も入る、おふねそつと起き思入あつて。ふね「ア、浮世ぢやなア、神道源八が妻や子が、如何にお主の爲ぢやとて、前垂姿で酒浸しになつて、娘は傾城、其娘を賣つた身の代で太夫を揚詰にして、變つた身の上ではある、したがもう百兩は皆になつたが、夜半までに身請の相談、こりや如何せう知らぬ」ト二階にて多勢の聲する。才「是はもてる物ではないわ」△「常磐木さんは、どうやら持て

廓穿鑿はマアすぎ候ぢや、わたしがきつと太鼓を持つ程に、私相應の大盡におなりなされねば、諸事粋とは申し悪い、粋にならんせ、戀のしやうが餘り野暮な、そうたいの客さんが後家茶屋へ行くもよい、仲居のある茶屋へ行くも揚屋の遣手はしたまでだてな所へ、コレなア如何に相方が見えぬというて去なうとはどうぢやいなア、お前はあなたにばつかり可愛らしうて、其樣に堅い殿御を誰も持ちたいなアと、じやら〳〵云ふやら、昨夜の口舌がどうで慿うでと、はでに咄しも縺れるに依つてツイ座も長うなる、其折節は一寸どうやら可愛らしい事が、せき〳〵になると茶の間でねるか、起番の夜は廊下に待つて居るやうに、色は心の外ぢやわいなア、其はでもなしに私を口說くとは、役に立たぬてんがうぢや、今の一分でとんとお脈があがつたぢや、爪長屋とはようつけさんした」欘「サア夫は」ふれ「旦那くわつくわ」ト脊中を敲く。皆々「ワアイ言負けて好い氣味ぢや」ト欘九郎しよげになる。ふれ「いかう醉うた〳〵、足揉め〳〵」ト寐轉ぶ。喜「アイ〳〵」ト揉む。平「サア常磐木献いた程に是で一ツ飲め」常「イエ此樣な鉢で」平「つひに飲まぬのを盛殺すが此方の手ぢや」久「飲まいでも飲ます、厭と云ふと口へ注込む」ふれ「ハテ仰山な酒盛ぢやなア」平「ハテ總角を借らうとは云はぬ、汝も俺が揚げて置いたに依つて、燒いて食はうが此方の儘ぢや」久「肴には此切炭をほうばらさうかい」ト火入の火を挾

やげらつくな、可笑うないぞ、邪でも非でも抱いて寐る程に爾う思へ」平「揚詰の總角そんなら借らうかい」ふね「一寸貸す事もならぬぢや、コレ此方へモそつと寄つて貰ひませう」ト總角をだかへて。ふね「私が是程に思うて居るのに、殿さんに逢ひたい〳〵とは、揚詰の此お客の手前へ、些と無遠慮ではあるまいか、思ひ出して貰ひますまい」平「貸す事もならぬぢやまで」權「どうでもならぬぢやまで」ふね「何と飲直さうぢやあるまいか」かぢ、幸、茂「可うござりませう」平「記内一つ飲まうぢやないか」久「才兵衛お盃を持て」權「俺も飲まう、おふね大盡はわりや遣手ぢやないか、俺が座敷を持て」ふね「ほんになア、とんと商賣を忘れた程に、アイ權樣ちとお相致しませう」久「さらば常磐木獻さうか」常「イヽエわしや酒は嫌ひでござんす」久「下戸か」常「アイ」平「下戸とは面白い」權「客が飲めと云ふに飲まぬか」ふね「權樣遣手といふ者は欲がる者ぢやといふがお定りぢやが御存じかえ」ト權九郎紙入より壹分出し鉢の中へ入れ。權「えらいものか、小判ぢやない壹分、サア飲め〳〵、醉潰れさして置いて、おとゝつてしめる飲め〳〵」トおふね金三兩出し。ふね「誰ぞ助けて欲いなア」喜「オツト我等」幸「まんがちな」かぢ「イヤ私が助ける」ト競合ひ三人寄つて飲み。喜、幸、かぢ「壹兩づつ有難い」才「見落しの一分は我等」權「ヤア汝はけうといものぢやナ」ふね「權樣お前の樣なひぢりかすりを商賣に、人を痛めて金儲する者が、

「ドレ〳〵」ト往かうとする。久「コリヤ何する、今宵は身共が揚た太夫、指さす事も成らぬ」ト突飛すを。ふね「ホイ我物ならぬ情なさ、可し〳〵構ふ事も無し酒持てよ」千、松「アイヽヽヽ」ト銚子盃を持つて來る。ふね「口が悪い水一つくれ」喜「畏りましてござりまする」ト差出す、おふね幸助が脊中へ凭れ居る。ふね「アヽさつぱりと是で飲直されるぞ」ト平太總角が手を執り。平「奥へ往て抱いて寐るわい」總「どの様に云はしやんしても」平「縫之助に心中立てるのか」總「いつやらからふつゝりと便りも無し、文も屆かぬか音信一つさしやんせぬ、聞えぬぞへ殿様、死出の山も三途の川も、手に手を執つて行く約束ではないかいなア」常「死出の山も三途の川も、手に手を執つて行くと、羨ましい事ぢやナ」平「エヽいけしぶとい、よう此様に仕込をつた、千も萬もない來い」ト引立てる、おふね割つて入り。ふね「何なさるゝ」平「伴れて往つて」ふね「ちつとなるまいかいナ」平「何故」ふね「何故とはつらい、僅た今お侍さんが、常磐木は揚げて置いた、太夫に指さすなと呵らしやんしたぞえ」平「や」ふね「ちつとお赦し〳〵」ト權九郎おふねが傍へ往て。權「コリヤおふね」ふね「ヤアお前は」ト見て。「エヽ又取違つた程にの、あた猒らしい此顔わいの」ト顔を突く。權「コリヤ〳〵身鯨か何ぞの様に、指でねなすなへ、サア返事は如何ぢや」ふね「とんと猒、極上箱入飛切の猒ぢや、味な事なア」ト笑ふ。權「イヤこり

れは〳〵危険うてなる事ぢやないわいなう」かぢ「イヤおふね殿、總角樣を一寸借ましたいといふお客がある、一寸貸して下さんすまいか」ふね「私が揚詰の太夫すを、借たいといふ客があるか」ォ「コリャおふね、太夫を買ふは金でする事ぢやに依つてせう事がない、お客があるのに大枚の給銀取つてゐる遣手が野良かはいて濟むか」ふね「濟まぬでごんす、親方樣屹度あやまり奉つたぢや、ドレちつと又此方の商賣ぢや、お客樣の座敷を取持つて」ト行かうとしてひよろひよろする。總「アヽコレ危いわいなう」ト抱へる。花「おふね殿、此中云うた平さんといふのは、彼のさんぢやぞえ」總「何ぢや平さんとは」ト見て。「ほんに又來んしたかいなう」平「しぶとう逢はねばしぶとう通ふ、揚詰の大盡おふねといふ遣手はそちか、ちかづきになりたい」久「お召なさるゝ、爰へ來てお伽申せ」ふね「平樣とは豫てお噂在原の平樣ぢやな、太夫す、だんない行かんせ、私も近附にならう」總「イヤ夫でも」ふね「ハテナ私がだんないと云ふからだんないわいなア」ト本舞臺へ來て眞中へ直る、皆々次第に坐る。常「おふねどんござんしたか、待つて居たわいナ」ふね「イヤ常磐木の變らぬ色は酒が足らぬか、其色の青さでは持てぬ、大方やいとが足らぬものでがなあらう、こなさんは灸を絶すと悪い性ぢやのに、何故呟咐けて置いた通りに、四火患門をするゑて貰はんせぬぞ、私が附いて居ぬに依つて、夫ぢや又お腹が痛うはないか

うて戻らんすわいなう」一かぢ「ほんになア、エヽあの形わいなう」一才「太夫様方や禿を、なんぞ己が使ひ者の様に申す、おふねが參ります」一平「總角もござるか」一久「參ります〳〵」一權「直に口說いてしまさうワイ」一久「直にお口說なされませ」一ト平太に云ふ。才、かぢ「さらば戀の捌け口を見ようか」一ト向ふより傾城總角道中して出る、おふね赤前垂仲居の形、酒に醉ひたる體しどけなく、笹に色々櫛、笄、莨入、小判、鏡、守袋を付け、此笹を持出る。幇間喜作、幸助皆々欲がり、取卷き出づる、右すりがね三味線鹿踊なり。ふね「誰に」花の井「私に」ふね「わしの子にや遣らぬ、誰に」千、松「俺に」ふね「折たもんにや遣らぬ、誰に」喜、幸「はなに」ふね「はなれぬもんにや遣らぬ」一ト花道にて色々あつてひよろつく、皆々笹を持ち引拐る故轉ける、皆寄つて引起す、花の井肩へかゝる、囃子止る。ふね「面白い〳〵」一才「喜作惣助、又おふねを引張つておちよばいか、餘り煽動て貰ふまいぞ」かぢ「さうして今日は何ぞ貰はしやつたか」一喜「しやつたの段か、マア一寸莨入五つに金三兩」一かぢ「ヤアヽ」一幸「何ぼ呵られても、おふね大盡でなければ夜が明けぬ」かぢ「エヽそんなら俺も往たら可つたもの、あたほこしもない一生の損ぢや」一總角「コレおふね殿、其様に酒が過ぎて、身も世もたまるものではない、些と控へて下さんせ」一ふね「是は太夫す、お志の段申上げう詞もない穿鑿でござんす、此方少しも醉はぬでござんす」一總「でも道々も、そ

お貰ひなされたが可うござりまする」權「儕に指圖受けいでも、こりや腕づくにこまさう、穴なし汝も呑め」かぢ「サア一ツ上りませ」トぬめりになり、向ふより常磐木道中して出る、禿八重菊附き、跡より關口平太衣裳羽織、侍伴れて出る。平太「コリヤ〳〵常磐木、もそつと靜に歩け」常「爰に消え彼處に結ぶ水の泡、浮世に捨つる身こそをしけれ」平「兎角這奴は小ませた事ばつかり吐す、コリヤ汝が此樣に辛い勤をするは、皆母めが根性からぢや、總角が手に入るまでは、存分に慰む程に爾う思へ」かぢ「エヽひら樣、常磐木樣も好うお出なされました、サア〳〵お入りなされませ」常「先へ行くぞえ」平「コリヤおかぢ、又取逃すな」かぢ「合點でござりまする」オ「扨平樣待兼山の郭公、サアお入なされませ」平「今夜は意趣返しに、儕も酒攻ぢや程に爾う思へ」ト記内出る。記「平太殿」平「記内最前の奴は」記「跡先へつけましてござりまするが、氣取ましたか此内へ付込みましたる故、お出を相待居りまする」平「慥に彼奴と見た目は違ふまい」記「左樣でござりまする」ト常磐木内へ入る、平太記内に咡き橋懸りへ入る。平「亭主何者ぞ内に居るか」オ「ハイお客がござりまする」權「イヤア常磐木は是ぢやな、可い〳〵」平「ソレ」久馬「畏つてござりまする」ト權九郎が顏を見て。「ホウコリヤ違うたわ、能く似た處もあるが、ハテ馬鹿な面だなア」ト突倒す。平「誠に横顏を見れば、其儘ぢや」權「アレおふね殿が又例の酒に醉

何と俺がのが無理か、女郎が無理か、俺が無理ぢやあるまいがな」梅「其樣になうてさへあだ憎てらしいこな樣に、きく者はあるまいと思うたにチヽ怖」松、千「こちらはいやぞ」かぢ「こりや太夫樣のが尤ぢやわいなう」才「定めて其位なら、天晴な事ぢやなア」欅「俺もやけむちやぢや、おふねが手に入らねば、女郎どもや禿どもを」才「是は迷惑でござりまする」かぢ「私等も如才はござりませぬ、如何して見ても往かぬに依つて、彼のお舟が娘の常磐木樣も、お前に呼していじり立さすと、娘を人質に取れたもんぢやに依つて、厭ながら手に入らねばならぬ、此思案は如何でござりまする」欅「出來た、夫ぢや〱」才「アヽ待つたり〱、其常磐木はひら樣といふ大盡の揚詰、是も總角なアノお舟が揚詰にして放さぬに依つて、其人質に買はつしやるのぢや、外へはやられぬてい」欅「這奴が〱、ひらにもせよ壺にもせよ、銀出して太夫を買ふに何を吐す事がある」才「でも揚詰でござりまする」欅「揚詰なら貰ふわい」才「先は歴々のお侍樣でござりまするぞえ」欅「侍が何ぢや怖うないぞ、うぬは襟につくか」才「爾うでは無けれど」かぢ「そんなら先のお侍樣と御相談になされませ。禿衆迎ひに往かつしやれ」ト此間に吹替の源八、頭巾被て向ふより出る、記内跡より隨いて出る、此內へ入る。千、松「アイヽヽ」ト向ふへ入る。梅「アレ〱常磐木さんが、平さんと連立つてござんすぞえ」才「サア是からは、お前の存分に

かぢ「あうた。其あうたものが彼の樣に仰しやりまする筈が」玉「あうたはあうたけれど、つゝともう」ト泣く。かぢ「權九郎樣あはれましたかえ」權「オヽ、あうたはあうた」權「ソレ見さしやつたかの」才「お逢なされましたら、其樣にお腹をお立なされる筈はござりますまいがな」かぢ「何ぞ外に惡い事がござりまするかえ」權「オヽ、有る、自體此間からあの遣手のおふねに惚れて居るに依つて、汝等を頼んでも、イヤすつたのもぢつたのと云うて埒明かぬ、お舟めはこはがる、五日も八日も此樣に流連うたして置いて、おのい等は俺を太郎にかけるのか」才「全く左樣ではござりませぬ、あのお舟が娘を私所へ取ましたに依つて、其目代に遣手奉公に參りましたが、かの虫付の總角を揚詰にして、ちよつといらはしも致しませぬ、外に結構な身請のお客が有つて遣らうと思うても、金銀をぱつ〳〵と蒔散かして、廓中を靡けるに依て、太鼓遣手まで皆お舟が幕下に屬致して、私も力一杯云うて見る氣ぢやけれど、威勢に畏れて能う申しませぬて」かぢ「どうぞ手に入れて上げませうと思うて、才兵衞樣といろ〳〵相談をして居ります、もそつとお待なされませい」權「サア俺もほつと待退屈したに依つて、マア蟲ころしにあの新造を呼んだ所が」皆々「振らしやんしたかえ」權「イヤ振はせぬ」才、かぢ「それでもお前」權「サア咄しをしても、付穗が無く、夫からワア〳〵ほえる、夫から方々逃げまはるに依つておはへて來たのぢや、

造物惣二重舞臺、向ふ長暖簾まいら戸、下座中二階、橋懸り本大格子、寶來屋といふ行燈懸り、騷ぎ唄にて幕開く、權九郎詫いて居る、才兵衞、お梶詫びて居る、梅の、八重菊、松代、千代鶴、孰も傾城の形。

かぢ「マアお待なされませい」權「けたいなぞ〳〵」梅「權九郎樣突出しの太夫樣ぢやに依つて、どうで氣に入らぬ事もあらう、其樣に云うたものでもないわいな」松、千「マア堪忍さしやんせいな」才「まだちひさい太夫殿の事でござりまする、惡い事があるなら、遣手のおかぢに叱らせませう」かぢ「私が簎りと異見致しませう程に、マアお待なされませ」權「コリヤやい、金出して買ふにすつたのもぢつたのと、此權九郎遂に女郎に振られた事が無い、ちつぽけな形をしくさつて、大ばつたの男を能う振つたな」かぢ「成程御尤でござりまする、私がお腹の癒る樣に致しませう」才「爾うぢや〳〵異見しや」かぢ「コレ花の井さん、こなさんはマアよう〳〵此頃仕立で間も無いに、お客を振るといふ事が有るものか、何で振らしやつた」トつめる、花の井泣く。梅「コレコレ其樣に荒うさつしやるないのう」千、松「泣かしやんすわいなう」かぢ「構うて貰ひますまい、太夫樣方の不勤は、遣手が折檻せにやならぬ、サア如何いふ事で振らしやつた」玉「振りはせぬわいなう」權「イヤ〳〵振つた〳〵」かぢ「振つたのか」玉「なんの私が振らう、あうたわいなう」

身の代に傾城の奉公、アヽ又愚痴な事いうた、こんな事いうてまで、ドリヤ往にませう」ト
よろしく幕。

第三幕目　揚屋の場

役人替名

一、幇間幸助　新藏
一、同　喜作　春五郎
一、揚屋才兵衛　友十郎
一、與九郎　三十郎
一、縫之助　三十郎
一、權九郎　文七
一、神道源八　文七
一、茂治兵衛　新九郎
一、おふれ　喜世三
一、久馬　友藏
一、駕籠
一、非人　一人

一、禿松代　小吉
一、同　千代鶴　大藏
一、同　八重菊　小源治
一、傾城玉の井　新四郎
一、花の井　市松
一、常磐木　松之丞
一、總角　金作
一、遣手おかち　文十郎
一、記內　彌平次
一、關口平太　大五郎
一、侍　大勢

いふものを取つたさうな」㦮「そんなら今の侍が孫の敵ぢや」ト尻からげ花道へ入る。與「アヽこれ俺一人殘して、コレ俺も往かう親父さん」トお松の死骸をかたげ向ふへ入る。與「コレ親父さん、イヤ親父さん〳〵」ト才兵衛お舟みな〳〵出る。才「サア〳〵事が濟んだ、證文取つて金渡す」舟「いかいお世話、お松や〳〵、是はしたり何處へ往たやら、コリヤ小屋の邊は血だらけ」才「コリヤさうはさせぬわ、證文して金受取るとふけらかして了ふ、其手は食はぬ其金こつちへ」舟「イエ其金を」才「男どもそいつ踏のめせ」男「合點ぢや」トよつて踏む、ドロドロにてお松出る。松「コリヤ母さんを何とする」舟「ヤお松か、何處へいて居やつた、フンもう廓へゆく事がいやになつたか」松「それで戻つたのでござんすわいな」舟「是でも遁したのでござんすか」才「イヤもう近年の誤り、トント誤つた」舟「アヽ其樣にいはんすなら了簡しよう」才「サアそんなら娘駕籠へ乘りや、アノ垂を上げてくれいか、ドレ上げてやりませう」トお松を駕籠へ乘せ歸る。舟「そんなら私は跡からゆく程に、皆さん賴むぞえ、追付跡からゆく、機嫌よういきやえ」才「娘が上氣したかして、顏が赤うなつた」ト向ふへ入る。舟「追付ゆく程に待つて居や。アヽ女といふものは早う智慧づくものぢやなア、昨日や今日まで子供のやうに思うて居たが、いつの間にやら殿樣と」ト淚をこぼし。「可愛やなア、神道源八が女房や娘が、僅な

辨之作、茂治兵衛が白髪を切り、火にくべて小屋の内より壺を出し合せてのむ。辨「戌の年の戌の月戌の日の戌の刻」ト戴きのみ、ウントト氣を失なふ。茂「アヽ是お侍様〳〵」與「アヽ是申し申し〳〵」茂「これはマア何の事ぢや、お侍様〳〵」與「なんぢややらいぬ〳〵いはんしたが、まちん呑んしたさうな」茂「お侍様、お氣が付きましたか、あはう水々」ト井戸の水汲み呑ます。辨「ウヽン」茂「お侍様お氣が付きましたか、ヤアお前のお顔は」辨「おれの顔が何とした」與「其お前の顔は」辨「身共が顔がどうした」ト草井戸にて見て。「戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生の女の生膽に、血筋の者の白髪を合せ用ゆれば、相好變ると遊軒殿の祕傳、ハテ變つた妙藥もあればあるものぢやなア」茂「エヽ」辨「縁あらば重ねて」ト向ふへ走り入る。茂「なんの事ぢや」ト與九郎、茂治兵衛が襟を持ち井戸に向ひ。與「戌の年戌の月戌の日、スンヘンヘンスンハラメンスンキヤウ〳〵、ハテ變つた寢言もあればあるものぢやなア」茂「エヽあはうめ、何やら胸さわぎがしてわるい、お松はどこに居る」與「ホンニお松さんに道中教へてゐたが、何處へやら消えさんした」茂「エヽ何ぬかすやら、尋ねをれおまつよ」與「お松さん」茂「まつよ」與「まつよ」茂「もちつと大きな聲で呼べ、ヤイお松よ」與「おまよ」茂「まつよ」與「お松さん」茂「まつよ」與「アヽ是小屋の内が血だらけぢや」茂「ヤア〳〵」與「それお松さんが殺してある、きもとやら

権九郎捜して見て。権「なんにも忘れたものはない」弁「金を返すからは云分はあるまいナ」権「誰ぞ云分があるといふたか」弁「最前はなぜ親父殿を打擲したぞ」権「何ぢやい〳〵、埒の明かぬ事いふないやい、そんな強請喰ふのぢやないぞ、金貸して食てゆく権九郎ぢや、返せば云分はない、返さぬさかいでぶつたがなんとした」ト本舞臺へ戻る。弁「さつきには金返さぬさかいで打擲したが、今は金返したさかいでわれをかう〳〵」トむね打くはす。権「イヤおさむ、いかに差いたと思うてひらめかすな、何でぶつた、なんでたゝいた」弁「返したに依て我をかうかう」ト又たゝく。権「イヤもう生きても死んでもぢや、侍、われはひよんな者と出入仕掛けた、不仕合なものぢや、喧嘩して生きて戻つた例のない男ぢや」ト跡へ遁仕度して。「何の、命投げ出して置いてするわい」町人「はてもうよいわいのう、了簡して往きやいのう」権「構ふない、挨拶するとわいら相手ぢやぞ」町人「構ふな〳〵」権「サア侍怖さうにせんと爰へこい、高が命一ツぢや、わりや何で挨拶する、おのれを」ト町人に投げられ。「もう聞かぬ」ト逃げては。「爰へ來い、どいつでも相手ぢや」ト遁げて。「コリヤ侍、卑怯なこゝへ來い」トやかましくいうて町人共向ふへ入る。茂「お前様は神様か佛様か、見ず知らずに私に大枚のお金を下さりまして、あはうよお禮申せ」與「たんとの金を只くれるといふ事があるものか、嬉しうござりまする」ト

おれを投げた〳〵」辨「年寄にもし怪我でも有つてはわるいと思うて、引退けたが何とした」權「ヤイわれが引退けやうは、えらい引退やうぢやな」ト摑みかゝる、顏をたゝく。權「アイタアイタ〳〵〳〵」トそこら捜す。町人「なんぞ落したか」權「目の玉はそこらにないか」與「おつとあるぞ、梅干の種ぢや」辨「これ親父、こなた彼のベラ坊に金五十兩借つて居るか」茂「ハイ」辨「それ返して了はつしやれ」ト金をやる。茂「エヽスリヤ此金を私に下さりまするかえ」與「あの只かえ」辨「いかにも」茂「お前は神樣か佛樣かうぶすな樣か、有難うござりまする、コレ皆の衆、悅んで下され」町人「オヽ出來しやつた、はよう返してしまはしやれ」茂「コリヤ權九郎、金返す受取れ」權「受取いぢや」與「權九郎證文から先へおこせ」權「忙しない、金改めるまちをれ」與「證文おこせ」權「まだしも似せ金ではない、ソリヤ證文」與「おつとせう」茂「おれが手か改めて見よ」與「お前の手も何も、いの字が兩方へ別れてある」茂「あはうめが」町人「權九郎金請取つたらモウ往にやらぬか」權「こなた衆はいろ〳〵世話をするの、年寄る筈ぢや、おれが足でおれが去ぬる、構うて貰ふまい、アヽ世間にはあはうなものがある、近付でもないものに、五十兩といふ金を遣る、いかい痴呆ものぢや、長生すればいろ〳〵の事を見るわいやい」ト花道の中程までゆくと。辨「コリヤ待て」權「何ぞ用があるか」辨「われは何ぞ忘れたものはないか」ト

權九郎「コリャ老耄め、代官所へつれゆく、サア來い」町人「コレ權九郎、其やうにせずといやいの」茂治「コリャ權九郎、いかに貸したが強いというて、其樣にせぬものぢや、ハテ借つた金返す、マア二三日待つてくれい」權「いやぢやわい、今日の明日のと何時まで待つのぢや、サア今受とつた金わたせ」町人「これ權九郎、貸したく〳〵といやるが證文でもあるかや」權「わり樣たちは、人に金を貸した事がないによつて、其樣な事いふわいのう、金貸して證文とらいで濟むものか」與「コリャ權九郎め」權「なんぢや」與「なんでもない」權「一札の事、一金五十兩也、右の金子御入用次第急度返辨申すべく候、若間違ひ候へば、娘お舟を其元へ女房に遣はし申候所實正也。なんと是でも物いふわいやい」與「權九郎め」權「何ぢや」與「なんでもない」茂「權九郎それは尤ぢやが、マア二三日待つてたも、お舟も今は男を持したに依て、私が儘にもどうもならぬ」權「なんぢや、娘に男持たしした、親父、證文に書入れて男持したというて濟むか、太い奴ぢやなア」ト草履にて叩きかゝる、皆々取支へる。町人「マアようござる、もし疵でも付いてはわるい、もう了簡さつしやれ」茂「權九郎いかに手にあうたものぢやというて、胸ぐら取つてわりや何するや」權「イヤ斯するは」トたゝきかゝる、後より辨之作權九郎を投げる。權「イヤ親父、わりや味やるな、腕づくならこい」ト辨之作が顏を見て。「ヤア今のはお侍か、わりや何で

兩」才「エヽ」舟「ドリヤ一走り往て來う」才「アヽこれ〳〵出す〳〵、五十兩出す」舟「イヤ無理にとはいはぬぞえ」才「だれが無理にといふぞいの、娘を五十兩でよい奉公人取つたと思へば、勤をせぬものを五十兩とは」舟「高いかえ」才「イヽエ安いものぢや、サアざつと埓が明いた、幸ひ此在所にこちの人判がある、證文認めて金渡しませう、一走りござれ」ト此間に辨之作出て聞いて居る。舟「そんならさう致しませう」才「してあの子は幾歳ぢや」舟「十六で戌の年でござんす、したが彼の子の戌の年は不思議な生れ、戌の年の戌の月の戌の日の戌の刻に生れた戌の年でござんす」才「それは不思議、出世しませう、サアござれ」舟「これお松、私はあなたと、ちつと往て來る程に、どこへも往かずに待つて居やよ、與九郎よ氣を付けいよ、サアお出なさんせ」ト入る。松「早う戻らしやんせえ」與「お松さん、アノ是から常住殿さんの顔見て嬉しからうナ」松「私や嬉しいわいのう」與「廓へゆくと道中せんならんがお前知つてか」松「イヽヤ知らぬわいのう」與「おれが敎へてやろ、マア斯うつまをとらんせ、斯う足を向ふへ斯う」松「ヅンとようせぬわいのう」與「ハテ不器用な人ではあるほどにの」松「かうかや」與「わしが跡から見てござんせ」ト此間に後より辨之作、お松をつれ小屋の内へ入る。與「ハアこれ」ト權九郎敵役の形にて出る、町人三人つれ出る。茂治兵衛親父の形にて出る。町人「サアよござるわいのう〳〵」

併しチトお前に無心がある」才「娘さへ來る氣なら、何なりと聞きませう」舟「私しも一緒に奉公にゆきたうござんす、仲居になりと遣手とやらになりと、一緒に置いて下さんせんかえ」才「イヤそりやならぬ、それでは始めから蟲つきぢや、總體子飼の奉公人でも、ちよこ〳〵親が來ると根性がわるうなるものぢやに依て、そりやならぬ」舟「そんなら此相談も止めに致しませう」才「そんなら金受取らう、金渡せ」舟「金はござんせぬ」才「すへるな〳〵」舟「ハテ嫌なら縫之介樣を連れていて桶ぶせにしたがよい、が世間にはあはうなものが澤山ある、そりや桶ぶせにしたら、さりとは彼は男氣なものぢやと存じて譽めるものもあらうが、桶伏の桶から金は出まいし、又親ぢやもの子ぢやもの、何の一所に居たというて、あの子の爲にこそようあれ、何のわるい事があらう」才「ア、これ〳〵、御苦勞ながら奉公に、お出なされて下さりますと悅びまする、どうぞお出なされて下さりませ」舟「イエ〳〵無理にいかうとはいはぬぞえ」才「ア、きえたい、どうぞお出下さりませ」舟「そんなら談合致しませう、さうしてマア彼の子の給銀は、揚代さし引して五十兩受取るが、私が給銀はなんぼよこさんすえ」才「一年に二兩二分」舟「アノたつた二兩二分」才「そんなら三兩」舟「アノ三兩」才「イツソ飛んで五兩」舟「安いもんでござんすな、そんならかうつ、イツソ大坂の新町へ談合せうか」才「ア、これ〳〵そんなら何程」舟「マア五十

與「これお家さん、殿さんが舟へ乗らしやる所を攫へて、何のかのといふに依つて、殿様の著るものを著ておれが化けた、何と智謀の程見て置け、きついか」才「扨は己れがふけらしたな」舟「コレ才兵衛さん、マア其やうにいはずとも、モチット待つて下さんせ、金の工面」才「おつと皆までいふまい、金の工面所か、權九郎様に五十兩といふ金借つて、今日の明日のと日延べ、代官所へ斷るといふて居らるゝ、それに金どころか、ついそこらにも、金がぶらついてあるになア」舟「そこらあたりに金がぶらついてあるとはえ」與「拾ひたいものぢや」才「ソレそこに、目の前に」ト與九郎搜す。與「ハテめんような、私が目には見えぬ」與「ハテ其娘廓へさへやれば五十兩、ナント日の前にあるではないか」舟「さればいなア、あの子にはチト義理のある子なり、まだほんのまゝくおうて」才「イヤサよい比合でござんすて」與「まだ去年まで溝でしょやつたもの」松「かゝさん私を廓へやつて下さんせ、私や廓へいきたうござんすわいなア」舟「何をいやるやら、廓へいけば芝居と違うて苦しいものぢやぞや」松「私や廓へいて常住殿様の顔が見たいいなア」舟「ナニ廓へいて殿様の顔が見たい」松「アイ是見て下さんせ」ト守袋の起請を出す。舟「そんならば殿さんと」松「アイ」舟「そりや誰が世話して」與「わしが中へ入つて」ト思案して、舟「そんならわが身は廓へいきやるか」松「アイ」舟「才兵衛さん、そんならさうして下さんせ、

コリヤ父様の手ぢやわいなア」舟「ホンニさうぢや、そこら八氣を付けてたも」松「アイ」ト封を切り。

舟「一筆申入れ〻〻、いよ〳〵御無事に候や、然らば今に御朱印の在所も知れず、承り候へば又総角殿にも揚錢の替りに廓へ參られ候由、定て平太が廓へ通ひ候はん儘、其元面を見知らぬを幸ひに、廓へ入込み、御朱印の詮義なさるべく候、直に詮義致候ては、前の意趣ある平太に候へば、面合はし候事あしく候、宜敷たのみ入り〻〻、なほ〳〵娘の事も宜く賴み入り〻〻、めでたく〳〵かしく、五月十七日。さては廓へ入込み、御朱印の詮義を私にせいといふのか、ア、何して往たらよかろ知らぬ、まて」ト思案する、橋懸りより與九郎、黑羽二重の衣裝、編笠被て來る、ト跡より揚屋才兵衛、男二人つれて出る。才「男共キリ〳〵ひつたて〳〵」トお舟とめて。舟「何なされます」才「ハテ知れた事、廓へ連れて行て揚代の濟まぬものは揚代の法に行なう」舟「イエイエやる事はなりませぬ、なぜといはせんせ、揚代の替りに身請をした總角樣を廓へやつたぢやないか」才「さればいやい、總角も前の總角なら戴いて居るけれど、此縫之介といふものが有るゆゑ勤はしをらず、それで縫之介をつれて往て桶伏にしたらば、總角が勤を大事にするであろと思うて、男共ひつたて〳〵」ト皆々かゝる。與「ハア、、、、」ト笠を取る、あはうなり。

郎、そなたの誂への辨當持つて來たぞや」與「おつとしよ、芋焚いて下さんしたか」舟「何じた事やら、お松は我いふ事を」與「聞くはず、さらば對面致さうか」ト辨當を明けうとする。皆々「先刻にから待つて居る、飯を食はずと渡してくれいやい」與「喧しい、食はぬ先から喉がにつまる」ふね「皆樣を渡して來てから食やいのう」與「そんならお家さん、お前に預けて置く、犬に取られて下んすな」松「オヽ早う往ておぢや」與「罪人ども斯まるれ」皆々「罪人とは」與「ハテ救世の舟へ來いといふ事ぢや」ト與九郎臆病口へ入る、皆々入る、ト橋懸りより飛脚一人出る。飛脚「もし女中さん、チト物が尋ねたうござりまする」舟「ハイ何でござりまする」飛「此あたりに渡守の茂治兵衛といふ人がござりまするか」舟「ハイついそちらの方を横へ取つてござりますと、角の家がさうでござります、幸ひ私は其内のものでござんすが、何の御用でお出なされましたえ」飛「それは幸ひでござります、そんならお前に上げませう、私は飛脚でござります、此狀を屆けまする」舟「ハイ、お舟殿まるる、是は向ふの名がござりませぬ、何れからお出なされましたえ」飛「イヤお舟殿に渡すと、先に知つてぢやというてござりました」舟「そんなら慥に受取りましてござります」飛「イヤもう參じませう」ト入る。舟「マア寄つてお茶でもあがつてお出なされませいな、是はしたり、よい所で逢うた、ハテ合點の行かぬ事ぢや」松「ドレ見せさんせ、

を許し、褒美は望次第たるべき者なり」△「ムウそれでおれも讀めた」耳「爰をどうして源八の渡しといふぞ、因緣の有りさうな事ぢや」○「是は平太といふ人と、源八といふものとして渡し舟堤の爭ひがあつたが、源八は負けて平太が兩方ながら背請受取つたげな」△「人にさしてもやつぱり源八の渡しといはすは、太い奴ぢやナ」兩人「さればいのう」ト小屋の内より與九郎、阿呆の形にて出る。與九「コリヤ〳〵わいらは何をぬかす、役に立ぬ事ぬかすな首が飛ぶぞ」皆々「ハアイ」與九「頭が高い下にをれ」皆々「ハア丶丶丶」與九「おれは所の代官ぢや、聞けばおのれらは源八樣をわるうぬかしをる、此儘ではゆるさぬぞ」皆々「イヤもう何にも存じませぬ、御許されて下さりませ」與九「以後は屹度たしなめ、憎い奴の」ト皆々頭を上げ與九郎が顏を見て」耳「ヤイ汝れ、あはうな面をして代官ぢや、ようおいらに辭儀をさせおつたなア」與九「オ丶おりや爰な渡しぢや、一ぱい食したハ丶丶丶」皆々「おのれ此儘では堪忍ならぬ」トせり合ふ、橋懸りよりおふね、やつしの形、おまつを連れ、辨當持つて來る、在鄕歌。おふね「アヽ是々何事かは存じませぬが、愚しいものでござんす、了簡してやつて下さりませ」與「お家さんか、私が一ぱい食してこましたを腹立てて」ふね「あはうよ、皆もう了簡して下さりませ」皆々「そんなら了簡してやろはやろ、渡しをわたしてくれ」與「それ見たか、否でも應でも誤るはサ」おふね「これ與九

うて御主人達は」皆々「皆こゝに居るわいのう」ト花道より出る。源「ヤア」與「家來を廻し細工はりう〳〵」平「四人のやつら」與「勅定を背くとたつた一打」ト種が島構へる。源「エ、お心ざし忝ない」與「其手疵では心元ない」源「かくの仕合」ト手水鉢を切る。與「出來した」平「うぬ」與「いけ」ト幕

○

役人替名

一才兵衛　友十郎　一與九郎　三十郎
一辨之作　治郎三　一おまつ　松之丞
一茂治兵衛　新九郎　一おふれ　喜世三
一權九郎　文七　一飛脚、町人、百姓、仕出し

○

造物一面の黑幕、眞中に渡津場の小屋、橋懸り松原、高札立てあり、砂舞臺に草井戸、在郷唄にて幕ひらく、ト仕出し三人出る。

百姓「しんどい休め〳〵」仕出し○「何ぢややら、よう〳〵爰は源八の渡し、もう今から休んでどうなるもので」△「それ〳〵まちつと歩め〳〵」□「なんぢや高札が立つてあるは」○「ドレ〳〵」ト讀む。○「一、淀川筋水早く落ち候故、舟にて登る工夫致すものあるに於ては、重罪たりとも其咎

ぬる、鐵砲聲つ。源「ヤア飛道具を持つて卑怯な何やつぢや」ト平太鐵砲持つて出る。平「今汝が右手の腕を撃かすめたは、己れに委細をいひ聞かせ、跡にてなぶり殺しぢや覺悟せい」源「扨は今の鐵砲はうぬで有つたよな」平「左衛門は鎌倉の上使をしくじり、其上兄遊軒に手を負はせ、大内を騒したゆゑ、左衛門はくたばつて了うた」源「ナニ兄遊軒とぬかすからは、扨はおのれは川浦遊軒の弟よな」平「重罪の左衛門、部類眷族一人も殘らず、ぶち殺せとの上意、此屋形は兄遊軒に下され、此平太が押領するわやい」源「ヤア人も多いに遊軒に屋形を押領しられたか、エエ」平「無念なか、オヽ悲しいはず〳〵、みゆきは兄遊軒が心を掛け居れば都へ送り、總角は身が女房、喜蝶も手かけにする、縫之介も跡からやると、くたばつたら左衛門に、此平太が傳言したとぬかせ」源「エヽ遊軒こそ手に入らずとも、己れを打殺して主人への土産、遊軒も跡からやる、半座をわけておきをらう」平「なぶり殺しぢや覺悟ひろげ南無阿彌陀佛」ト立廻りある所へ、與三右衛門つか〳〵と出で、平太を突のけ。與「源八苦しうない早く立退け」平「ても鎌倉の咎人を」與「縫之介みゆき事、將監勘當いたしたる事紛れなき自筆ゆゑ、助け遣はす條件の如し、勘當の者どもお祟りない有難い勅書」平「ても左衛門が重類を」與「勘當は寅の一天、家沒收は卯の上刻」平「イヤなんと」與「かゝる願をせん爲に、種々に心を砕いたわいやい」源「ぢやとい

源「どちらなと穿いたがよいわい」トみゆき足の立たぬ思入、源八みゆきを引起し。源「これみだい様、お前には川浦遊軒熊本辨之作といふ二人の敵がござりまするがや」みゆき「イヤ〻」トみゆき屹度する、其顔へ刀さしつけ。源「これ此血しほは左衛門様の血しほぢやがや」トみゆき身を顫はして睨む。源「モウよい〳〵、サア〳〵立たそ〳〵、左近そちらへもかゝれいやい」トみゆきすがる。源「若殿様御用意、金がござりませうな、お枕金ござりまするか」縫「イヽヤねつからない」左「イヤア源八殿、もし要らうかと存じまして用意の金子を」縫「わづかなれども私も」ト源八取つて。源「ハア栴檀は二葉よりと、まだ年はもゆかぬに、流石は武士の子程ある、よい心掛、これ殿様、御枕金と申すものは、斯様な時にはか入りませぬ、それにマアねつから無いとは餘りな、高垣の方へ行くがよからうか」ト矢あまた射かける、紋之丞死ぬる、皆々惘りする。源「モウ絶體絶命ぢやわいのう」ト捕手あまた出で、見事なる立あり、追うて入る、ト黒裝束の侍一人づつ出で、五人を一人づつ肩げ入る、此間始終ばた〳〵、いろ〳〵立あるべし、源八手負ひ出ていろ〳〵思入あつて。源「縫之介様みゆき様」新「やらぬぞ」ト新治くわへめんにて死ぬる。源「みゆき様」三「やらぬぞ」ト足を切られ死ぬる。源「斯やうに尋ねても御行方の知れぬといふは、敵方へ奪取られたか、エヽ無念なナア」侍「やらぬぞ」ト兩人切られ死

といへと左衛門様が。切腹なれば。ソレみゆき様に戀の叶はぬ意趣、遊軒が大内の」ト思入有て、花道の方を睨みつけ。「エヽ嘸御無念にござりませう」トみふね方に向ひ。「出來したうい者ぢや、よく知せたな」ト紋之丞左近出る。紋「三百人ばかりの人數にて出口を塞ぎました」左「承れば屋形を闕所仰付けられ、若し狼藉も致さうかと、用心の遠攻ぢやと申しまする」源「推量の通りモウ叶ひませぬ、是が左衛門様が、禁裡で騷動をおやりなされ、切腹なされた其おたたりと見えまする、兩人旅の用意せい」左、紋「ハア」源「サア／＼是はしたりどうでございまする」鯉「どこへ行くのぢや」源「どこというて、マア宛なしに出るのでござります」皆々「さうして爰はえ」源「天下よりの仰付けられ、明けて渡さにやなりませぬ」みゆき「そんなら明けて渡すか」ト源八が顏をぢつと見て。源「エヽ腑甲斐ない」ト泣く。みゆき「エヽ男になりたい／＼」鯉「そんなら此屋敷に籠る所存はないか」源「アヽ是壁に耳天に口、われ／＼同士の意趣ならば、いか樣にもなりますれど、天下へ弓引くと朝敵、朝敵となればたとへ後日にいか程の大功なすとても、再び相續は叶ひませぬぞや、サア／＼とも／＼にお諫め申してサア／＼／＼」みゆき「ハツ」ト取亂して泣く。喜蝶「お道理でござりまする」鯉「マアお立なされませい」ト泣く。源「アヽ是／＼とも／＼諫め、エヽ何をきよろ／＼」鯉「イヤ此草鞋は右へはくのか左りか、根から知れぬもの」

揃ひ居りましたが、屋敷人ぎれは一人もござりませぬ」皆々「ナニ一人も居ぬか」左近「其上廻船往來の御朱印が紛失致しましてござりまする」皆々「ハア」將「ナニ廻船往來の御朱印が」ト死る。皆々「是申しこれはア、、」源「スリヤ御朱印も辨之作めうぬ」ト花道の方へ駈出す、向ふよりみふね包を脊負ひ走り出、血みどろになつて源八に行當る。源「ヤ女房みふねか」みふね「御家の大事ぢや〳〵」ト轉る。皆々「ヤアみふねか」ト源八ゆかうとする。みゆき「コリヤ源八、みふねが此形、家の大事ぢやといふがや」小「是マア何ぢやしらぬが、大事やといふのう」ト源八駈戻り、みふねを起し呼び生けて。源「コリヤ女房、氣をしづめて物をいへ、源八ぢや〳〵」みふね「是此切先の血を見て、源八に無念なといへと」トのる。源「コリヤ〳〵跡も先もいはいでは合點がゆかぬ、篤といへ、左衞門様が此切先の血を見て、無念なといへとか」みふね「眞の太刀此土器それ」ト風呂敷放り出し、ウンとのり死ぬる。源「なんぢや〳〵、みふねヤアイ」ト色々して、「もうコリヤ息が絶たか」皆々「ヤア」源「マア包の中を」ト解く。みゆき「ヤアこりや夫左衞門様の御首ぢや」皆々「ヤアナニ左衞門様の、ハア」ト遠攻になり、皆々悸りする。源「兩人遠見せい」紋、左近「畏つてござりまする」ト入る、是より思入様々有つて、源八土器の破と太刀とを見て思案、みゆきは首に取付き取亂し泣く。源「聞傳へたる天盃の土器眞の太刀、此血を見て無念な

通り言上仕りませう、とてもの事に刻限をお書入れなされい」將「心得ました」ト書く。與「是でまがひなき勘當、御家の格式は立ちました」將「家來共門前よりたゝき出せ」皆々「エヽ」與「とてもの事に早々たゝき出したがよからう」將「奥へいてみゆきめを引ずり出し、一緒にうせう、ナニ與三右衛門殿是にござりませう」ト入る、七ツの半鐘。縫、總、源「與三右衛門樣、コリヤマア何でござります」與「最早七ツ時、六ツ迄はたつた一時、用意の乘物」侍「ハア」ト乘物八人して舁き出る、與三右衛門乘る、花道の方へゆく。皆々「これは」與「明六ツまでに屋敷を立退け、將監殿には覺悟なされといへ、狼狽へて此場に居ると命がないぞ」侍「エイ〳〵〳〵」ト早打の如く舁き入る、皆々呆れて居る。皆々「コリヤ何ぢや」トみゆき長刀にて辨之作を追掛け出る、立廻り有て、みゆきが長刀を打落し、引かたげうとする、源八辨之作を取つて投げる、立有つて辨之作逃げて入る。將「辨之作の主殺しめ」ト手を負ひ出る。皆々「ヤア將監樣」源「南無三寶コリヤどうして手を負はしやつた」みゆき「家來、辨之作が兼て川浦遊軒に頼まれ、私を口說たが、今度の御使者に左衛門樣の御供、それに今宵忍入り、私を連れ立退かうとするを支へなされたれば」源「此通りの深手か」トうろたゆる。將「おいの」源「おのれ辨之作め」ト行かうとする。みゆき「源八まて、將監樣のお命が危いがや」ト源八戻る所へ紋之丞出る。紋「今迄家中

家中へ指南もする身を以て、滿座の中でぶちすゑられたは、さし當つて祿盜人、こいつらは何なされまする」將「御尤」與「序に勘當なされずば成りますまい」將「源八勘當ぢや出てうせう」源「ナニ勘當とな」與「先づさつぱりと勘當がよからう」將「對面これぎり、うせう」源「ハツ」ト與「序に申すが、みゆき殿はもと舞子となり、是以て遊女、序に是れも勘當して了はつしやつたがよからう」將「一人たんれいなれば一國亂をおこす」與「一人も置かぬが政道」將「いふに及ばぬ、みゆきも勘當ぢや」皆々「エヽ」與「妹　おのれも勘當ぢや」ト突やる。喜「エヽ」與「妹、おのれが不義も知つて居る、勘當ぢや、うせう」喜「なんにも申しませぬ、怺へて下さんせえ」小「そこら中が勘當だらけになつた」與「イヤ又勘當なされずば、御上へ此事噂あらば家の疵、勘當とはいつちよい思案でござる」將「倅めゆゑに　妹　御を捨てさせまする段、なんぼう氣の毒に存じまする」與「イヤもう手前などは勘當致せば七生までの勘當」將「手前とても七生までの勘當」與「併し一旦は左樣仰せらるれども、指が穢いとて切つては捨られぬ俗のたとへ、少し此勘當與三右衞門會得仕らぬ」ト將監書く。將「これを宜敷申上げて下されい」ト一通認め出す、與三右衞門取つて、與「一、倅縫之助事、身持放埒、又みゆきは遊女なるよし詮議の上不屆至極、夫故七生迄の勘當致し申す所實正也、此儀鎌倉へも御披露願入者也、正月晦日、花滿將監、同左衞門。成程此

思はつしやりまするな」總「エ、忝ない」與「様子は残らず聞届けた」總「ヤア親人様」將「そこに居るは島原の傾城總角ぢやな」皆々「いえ是は」與「いふまい慥に聞届けた、將監殿こなたには先祖より、家中には不義法度の固い掟と承つたが、見ると聞くとは大違ひ、妹喜蝶の婚禮の夜に、傾城遊女を引込み、館は揚屋同然、是で濟みまするか將監殿、急度御返答を承りませう」將「さてさていはう所もない憎い奴等、源八おのれも同じ穴の狐ぢやな」源「與三右衛門様、是はどうでござりまする」縫「與三右衛門殿、此者は御自分様の妹喜蝶殿でござります」與「だれが、ついに見た事もない女、廓の傾城賣女めに與三右衛門近付は持ちませぬぞ」總「イ、エイナア、お前が妹喜蝶ぢやと、私を連れてござんしたぢやないかいな」與「やい〳〵何をぬかす」ト喜蝶綿帽子を取る。縫、總、小「ヤア是は」與「宵より婚禮を待つ所に、延引するこそ道理、コリヤ何ぢや將監殿、淀與三右衛門は武士でござるぞ、妹を揚屋同然の屋形へ嫁入りは得させますまい、傾城ゆゑ妹めは廢りました、淀與三衛門が武士の立つやうの御思案が承りたい」皆々「なんの事ぢや」將「成程御尤、返す〴〵も不所存者の倅め、勘當ぢや」皆々「エ、」將「七生までの勘當ぢや、早く出て失せう」縫「ハツ」與「成程御尤、勘當さつしやれずばなりますまい」源「憚りながら與三右衛門様、お前様が」與「將監殿、武士が知行をくれ、召抱へるもまさかの用に立てんため、夫に

れ年月が書いて有つたを見て、幼な顔が殘つてある、ちひさい時の話し親達の事、憂苦勞を物語して、兄弟の名乘をしたわいなア」縫「それで讀めた、兄左衞門殿、堂上方の娘を妻に貰うたとばかり、親の名もいはず委細は追つて知れうというて暮さつしやつたが、そんなら舞子といふ事を隱さう爲で有つたか」源「そりや私に窃にお話しでござりまする、みゆき樣の舞子の時の名は大吉と申しまする」小「いかにも元の名は大吉といふ舞子で有つたげにござりまする」縫「是はしたり」總「そんならお前も此お家の一家ぢやわいなア」小「アヽ一家にしては薄いものぢや」源「扨最前聞いてをりましたが、コリヤやつぱり傾城の總角殿でござりまするか」縫「オイのう」源「何ぢややら入組んだ樣なわけぢやがどうでござりまする」縫「サアおれも合點が行かぬ、高が此小市は喜蝶といひ交して居る、おれは太夫へ添ひたし」小「そこで縫之助樣と相談して、高は喜蝶を去らして連れていぬる約束して置いた所が是ぢや」縫「マア何いふ仔細でおじやつた」總「さいなアお前の金は來ず、其間に身請の客の埒が明いて行かねばならず、死なうと思うた所に、其客といふは思ひがけもない與三右衞門樣、何であらうとおれが妹の喜蝶ぢやというて連れてゆく、いふやうにせいと俄に拵へてつれてござんしたわいなア」源「したが扨は喜蝶殿も、縫之助樣も、いひかはした者のある事を知つて、圓う納めうといふ與三右衞門樣のお志、仇に

やうにぶつてやる程に、さう心得て居たがよいぢや」ト傍へ坐る、弟子皆々袖引合ひ氣の毒なる思入、平太そろ〳〵起きて刀を差し、徐に塵を拂ひ。平「どんな事が有つても勝つ所で勝ちさへすればよいぢや。源八なか〳〵手利ぢや、ようぶつた何にも云はぬ、此禮は重ねて屹度いふぞよ」源「關口平太、神道源八何時なりとも承らう」平「いはいでならうか」源「聞かいでならうか」平「どうで遲いか」源「早いか」平「禮いふ所が」源「互ひのせつぱ」平「しつかりと」兩人「忘れなよ」ト唄になり、平太みな〳〵連れて入る所へ、縫之助總角出る。縫「源八出來しやつた〳〵」總「大體氣味のよい事ではなかつたわいなア」源「何アノ位の事に屈託する者ぢやない、マア證文を戻しませう」トやる。縫「こいつにかゝつて樣々の目にあふ事ぢや」トやぶる、小市奥より出る、縫之助行當つて。小「ワアイ、イヤもう歸ります」縫「小市ではないか」小「縫之助さん、ヤこなさんは〳〵、よう酷い目に逢したぞよ」縫「イヤもう背中に腹ぢや堪忍してたも」總「小市さん、お前はどうして繩を解いて戻らんした」ト將監、與三右衞門、喜蝶に綿帽子著せてつれ出る。縫「ほんにどうして繩はとけたぞ」小「サア變つた事ぢやないか、あのみゆき樣といふはおれが姉ぢやわいなア」縫、總、源「ヤア、、、」小「わしが親は禁裡の諸太夫で有つたが、仔細有つて浪人の尾羽うちからして、姉は舞子に賣られる、私は奉公に往て今此形、最前の守袋に生

いナ」源「夫もやり兼はせぬて」平「ハヽ、ヽやり兼ずば最前御前でナゼやらなんだ、そこらが口は調法で貧乏隠しの段ぢや、コリヤ〳〵よい事いうて聞かさう、おれと勝負せい、乃公にちつくりでも打勝つたら、コリヤ我望む證文をやるは、其替りに腰を叩き歪める、事によるとぶつて〳〵ぶち殺さうも知ぬぞよ」源「打勝つたら其證文とるぞや」平「ハヽヽ、もう欲になつた、よいはコリヤ證文は爰にあるは、マアちよつとマア〳〵、ひよくれのさき蚤のきん玉の斧で破つた程でも、竹刀の先が、平太身體へちよつと當つたら直にこれをやるがけうといものか」源「力一ぱいやつて見やうわい」平「オヽ出來す〳〵、したが思ひよらぬ所をかうぶちかけると」源「かう止めるでありさうなものぢや」平「よつ程ようなつたわいやい、又爰を外してかうやつたら」源「かうして防ぐぢやてや」平「えらいものぢや、所をかう付込んだら斯して」ト是より立色々有りて、源八平太をぶちのめす。源「かうぶつた物ぢや、マア此樣なものぢや、どなたでもどいつでもマアこんな物ぢや」ト弟子ども氣味わるがる。「ドレさらば證文を」ト取る。平「コリヤそれは」源「なんぢや、竹刀がちくとでも當つたら證文やらうと賭づくぢやないか、約束ぢやに依て取つたがなんと」平「よう取つた、けうとい物ぢや、其けうとい所を又かう」ト抜いて切つてかゝる、立廻りありてぶちすゑる。源「まだ望ならかう〳〵、いくつでも氣に入つた

うと思うて、わざと立合の勝負に負けてやつたといふのか」源「イヤ全くさうではない、それはそれ是は是」平「だまれァがれ、うぬは太い奴ぢやなァ、いけもせぬ立合に打のめされたが面目ないに依て、物に假託けて云くろめるのか」源「さうではない」平「ならぬ、ぐつとならぬ、大べら坊めが、面の皮の千枚で、又此平太にずはら〳〵と物をぬかすな、皆弟子が落ちたが恥しうないか、此頤で、此面で、よう悪たいを聞くなァ」ト指で突く。

「せめて無念なと思ふ根性があらば、きん玉でも踏へてくたばれ、アノ大泥坊めが」ト顔をはる。源「源八邪でも非でも貰ひかゝつた物ぢや、貰はにやならぬ程に、さう心得ていやれ」平「ハハ、、皆聞きやれ、あゝいふ頤ぢや」十、新、三「今のやうに打れても」皆々「恥しうはないか」源「忠義の恥しめは韓信も股をくゞる、強うても負るもあらうし、弱うても勝つもあらうし、そこは千差萬別ぢやと思うたがよい」十、久「面白い」十「強うて負るならば、其強い所へチトお見舞申さうかい」源「何時なりと御出なされ」久「其そつ首をかう」ト打にかゝり、十内同じく打掛る、竹刀打にて二人を打するゑる。源「マァざつとこんな物ぢや」新、三「さういふ所を後からかうと」ト又かゝるを立廻あつて打するゑる。源「何人なりとお出なされ」平「コリヤ出來た、けうとい物ぢやが、それは皆とり〳〵の猿を見る様なわろたち、ひやうりでやられもせうが、先生はいかぬて

ずと申さうか、面の皮の厚いと申さうか、身の程を知らぬと申さうか、けち太い腰骨も痛むであらうが、それは手前が打たうて打つたのぢやない、貴様のけちぶといから叩かれたのぢや、かの水を浴びて居る物を、足首を泥鼈めが食ひ付いて引込まうとするを、引捉へられて料理せらるゝと同じことぢや、したが面の皮の厚いのは、零落た時の甚う多足になるものぢやげな、かうさつしやれ、もう兵術は止めにして辻坊下の豆を切る鎌の曲か、それ今の鍋でもかぶる太夫になつたがよい、ハヽヽヽ」源「イヤもうお差圖受けまして、何なりとも稽古致さにやなりませぬ、時に平太どの、先づ御師範の印可はとらつしやる、渡し堤ともに淀川の普請は受取つしやる、先づ言ふ所のない、これで其元の十分になつたと申すもの、時に其替りにちと其元へ御無心の筋がござる」平「無心とはな」源「餘の儀でもないが、物ぢやて」平「ヤ」源「へヽヽ物ぢやて、其物を下されまいか」平「ヤ」源「わが身にも主ぢやないか、難儀さつしやる事ぢや、又あればかりが女子でもござるまい、サもう貴殿の十分になつたからは、餘の事はいかやうにもなりさうな事ぢや程に聞分て」平「これ〳〵源八、何ぢやと思へば物ぢやをば返しくれいか」源「サア夫をどうぞ」平「ならぬ、ずんとならぬ」源「サアなるまい、さう見たに依て貴樣を十分に納めた忠義者ぢやに依て」平「ヤア」源「其志を酌わけて」平「ヤイ〳〵そんなら何か、その物を貰は

一人本街道を教へて、眞人間にしてやらうと思へば、ア、世話やの〳〵、滿足に教へてやらう」皆々「有難う存じまする」平「皆仕合せなわろたち、有卦に入つたやうなものぢや」皆々「左樣でござります」平「ドレ弟子師匠の盃致さう、奥へござれ」皆々「ハア」ト行かうとする。源「イヤ關口平太ちよつとお目に掛りたい」平「拙者に」源「成ほど」ト兩人向ふへ出る。平「用とは何でござる」源「ハ、、、、イヤもう日比は手前もおのれやれ、いでと思はゞ樊噲項羽でも一握りのやうに存じたが、なか〳〵參るものではない、最前其元の働き微妙の構へに、寄つかゝる事ではござらぬ、向後手前も御指南を受けませう、門弟になされ下されうならば忝う存じまする」平「ハテいつにない利口な御挨拶でいたみ入りまする」源「イヤもう甲乙を見ますれば天と地と申さうか、富士の山を蟻がせゝるも同然、及びません〳〵」平「イヤ又其樣にもござらぬて」源「イヤサ及ばぬと申す證據には、目の前で弟子衆が、其元へ破門致されたを何共申さぬ、又各の前でかく申すが、此後從ひまする性根でござる」平「是は痛み入る御挨拶、左樣に仰やれば此後睦じう致し、互ひに申しかたらひませうと申したらよからうがいやぢや、貴樣は大きな蠅くらひぢやの、此間から兵衛は天下に我ばかりのやうに、いかに頤に細工のよい蝶番があるというて、人も多いに此關口平太と立並んで爭ふといふは、膽のたばねの丈夫なと申さうか、盲目蛇に怖

んと壺ぢやて」みゆき「縄付引立い」皆々「うせう」ト唄になる。
平「ア、どいつもこいつも精出して祝言しあがつたがよい、追付思ひ知らしてこまさうぞ。したが何と、日比には口聞いても今のを見られたか」十内「イヤもう見ぬ事は話にならぬ、常の頤とはうらはら、イヤもう驚入りましてござります。」三平「あの又たゝかれた時のざまといふ物は、かゝつた形ではござらぬ」伸之進「彼の後ろ足を投られた時は、病犬が水道へ轉け込だざまぢや」平「イヤ拙者もちくと骨も打れうかと存じたが、根からはい猫を嘐るやうな、あれが腕なしの振りづんばいでござる」角兵衛「源八殿、今日の勝負は、われらも摩利支天へ立願をかけまする程の儀、こなたも兼て高言を吐いて置いたぢやないか」新治「イヤ是お待ちなされ、百萬だらいうたというて、負けてしまうて、何の役に立ぬ事ぢや、各方は存ぜぬが、手前はズント思ひ切りました」角「拙者も是からよい師匠取をして、武藝を勵まにやならぬ、何れもはなんと思召す」皆々「我々も左様でござる」角「源八殿、向後師弟の緣を切り、指南は賴みませぬぞや」新「指南上げましたぞや」角「平太殿、此列の者一人も殘らずお弟子になりたう存じまする」新「向後弟子になされて下さりませうなら有難う存じまする」平「オヽこりや皆利口になられた、それでちつと米食ふ武士のやうな、ア、したが碌にもない事を教へ込で、きうせん筋へ固つたに依て、一人

平「せき〳〵御通ひ下され候御心ざし、御嬉しく御座候へ共、こなたにちと〳〵さし構ひ御座候まゝ、ぜひ〳〵お思ひ切らせ下さるべく候、此後御返事も申さず候」トし、ひら様り〳〵、あげまきより。此狀と此起請の寫が同筆、是が傾城といふ證據」みゆき「ドレ其狀こゝへ」平「御覽じませ」トみゆき取て。みゆき「ほんにのう、コリヤ紛れもない同筆ぢや」ト引裂く。平「オヽこれソリヤ何なさります」みゆき「どうもせぬ破つたのぢや」平「それを破つては」與「平太、妹を傾城といふには又何ぞ證據があるか」平「證據は」與「ドレ證據は」平「みゆき樣何で破らしやれた」みゆき「破つたは其方が爲ぢや」平「けぶけれんな事を仰やるが、何して爲ぢやな」みゆき「家中一統に廓通ひは御法せき、それに、平樣り〳〵あげまきとは、そちや法度を背いて廓へ通うたか」平「サそれは」平「破つてやるは其方が爲ぢやわいやい」平「ハア」ト口を開く。與「平太妹は傾城か篤と見い」平「見すく傾城の」みゆき「顔を見知つて居れば廓へ通うたのぢやな」平「サそれは」與「近付かとく見い」平「イヤ近付ではござりませぬ」與「こな慮外者めが、急度捕へて糺明する奴なれども、妹が一世一度の祝言の夜、今はゆるす以後急度嗜め」平「壺破つたやうな」小「どこも壺がはやる」みゆき「サア構はずと奥へお出なされませ」與「妹おくへ」總「アイ」平「アヽ何程壺かぶつても、まだこつちにはよい物があるぢや」皆「エヽ」平「物ぢやて」ト縫之助睨む、源八顔でとめる。小「と

八を打する。皆々「ヤア平太殿お出來しなされた」與「平太、適の手の內、見事〳〵」將「出來した、是は花滿の家の印可、師範たる者に讓るが古禮、淀川往來の普請も其方に云付けるぞ」ト印可を左近取次ぐ、平太取る。平「有難うござりまする、弟子衆悅ばつしやれ」皆々「お手柄申さう樣もござりませぬ」平「ヤアきつう骨の折れる事もござらぬ、たまりに控へて居る百姓共へも、此通り申し聞して歸したらよからう」左「畏つてござります」ト入る。將「是で追付普請も成就致さうと存じて氣が休まりまする」與「左樣でござりまする」將「サア奥へ參つて祝言の盃致さう、與三右衞門樣お出なされい」與「追付參りませう」將「みゆき皆引連れておじやれ」みゆき「畏つてござりまする」ト入る。將「紋之丞參れ」紋「ハア」ト將監つれ入る。與「源八は定めて殘念に思ふであろ、併し天災不定というて、大丈夫の氣にかけるものでない、主人の馬の眞先が肝要ぢや、サア縫之助殿、奥で祝言の盃致さう」平「イヤなりますまい」與「なぜ」平「部屋住ながら一國の大名、傾城を女房にする事はなりますまい」與「傾城とは」平「何もかも承つた、與三右衞門樣、餘りなされやうが粹過ぎていやぢやわいの」與「與三右衞門が何がどうした」平「こなた樣の妹御というて嫁入した此女は、總角といふ島原の傾城さ」與「與三右衞門が妹を傾城といふには、何ぞ慥な證據が有るか」平「證據お目に掛けませう」ト懷中より狀を出し、右の起請を取り。

馬見合す。久「コリヤ抜群の相違」與「夫でさらりと詮議は濟まうが」久「ムウ」ト九ツの半鐘打つ。左「子の上刻でござりまする」ト花滿將監出る。將「子の上刻か」紋、左「左樣でござりまする」與「將監殿、かの勝負只今でござりまするか」將「只今でござりまする、幸ひ皆これに居るわ」與「見物仕りませうかい」將「双方ともに呼出せ」紋「ハア」ト竹刀しなへを向ふへ直し。紋「關口平太殿」左「神道源八殿」紋、左「立合の刻限でござるぞ」平、源「ハア、、ツ」ト双方より弟子多勢連れ出る。將「源八平太、改めて申聞かすには及ばねど、鎌倉より仰渡された淀川普請、兩人に申付けたれども、互に意趣を拒んで延引する故、鎌倉への聞え御朱印を預る此家の疵になる、夫故しなへ打の勝負、勝たる方へ家の師範、淀川筋の役目一時に申付ける、左樣心得い」兩人「ハア」與「源八平太が爭ひは承り及んだ、堤も築かず渡も渡さず、さし當つての難儀は當家でござりまする」將「左樣でござりまする」みゆき「凡そ二三年も普請放つてござりまするゆゑ、誰いふともなしに源八の渡し平太の堤と申します」縫「大切な勝負ぢや、打負けぬやうにしやれ」ト平太を見て睨む、平太總角を見る、嫌がる。平「エ、ウ、ン〳〵」紋、左「双方共にお立合なされい」ト是より身繕ひする、弟子兩方へ別れ急度見て居る。兩人立合ふ、是より兩人將監方に目禮して、それより竹刀打にかゝる、双方の弟子より掛聲、此立さま〳〵あるべし、つまりに平太源

な」與「大騙めが、何もぬかすな、じつとして居れば事により歸してくれまいものでもない、いらぬ頤を利くと、直に首が飛ぶぞ」小「アイ〳〵、何にも物は申しませぬが、是は又迷惑な事ではある、覺てござりませえ」みゆき「合點のゆかぬ事ばかりぢや、篤と詮議しや」十「大騙め、おのれ仔細のあるやつぢや、先づ懷中を詮議して」小「何なとなされませ」ト十內懷中をさがし。十「さして仔細もない」ト守袋を取り。小「何の爲に」十「懷中に此守袋がござります」ト渡す、みゆき守りを取つて。みゆき「これは」十「何ぞ仔細がござりまするか」みゆき「與三右衛門樣、あの繩付には些と詮議致したい事もござりまする、私にお預けなされて下さりませ」與「イヤ此館へ仕掛に參つた騙りめ、いかやうにともなさりませう」みゆき「そんなら預りましてござりまする」與「いかやうとも〳〵」みゆき「ソレ片脇へ引据ゑて置け」十「サア立たう」小「立たう、何の事ぢや、ひとつも合點がゆかぬ」經「與三右衛門樣何も申しませぬ、エヽ有難うござりまする」小「何の事ぢや」與「いよ〳〵妹めが儀を賴み存じまする」經「千年も添ひまするでござりませう」小「壺被つたやうな」久「イヤ與三右衛門樣、少し詮議が殘りました」與「みどもにの」久「何とやら氣味のわるい物のいひやう、最前あの男めがいひかはした證據と起請を出しました、則ち是にござります」與「妹自筆で一筆書け」經「ハイ」ト左近硯箱持つて行く、總角書く。與「久馬見やれ」ト久

みゆき「お侍、いひ交した覺がないと有るからは、約束の通りそなた騙ぢやぞや」小「えゝ」與「二腰を差ながら、一國の大名に無實を云ひかけ、それなりにしておかうか、身が妹を何いふのぢや」小「ハイ。コレ縫之助樣、よいやうに云うて下さりませいのう」與「縫之助樣、いかう馴々しい物のいひやうする浪人ぢやが、部屋住なれど左衛門殿の舍弟、彼等しきの素浪人に、知人あらう筈がない、ハテ知人なれば妹喜蝶がな、何やかやさし構ひになりさうなものぢやなア、よもや知人ではござるまい」小「イエ〳〵知人の段ぢやない」縫「ヤイ〳〵、ついぞおのれ見た事もない奴ぢやが、何故騙りをいうて來た、まつすぐにいへ」小「それは何いふのぢやいなア」縫「何者に頼れたか有やうにいへ、いはぬと骨をひしいでもいはさにや置かぬぞ」小「イヤ是もすさまじいわ、コレお前頼んで私に斯せいと」縫「ヤイ〳〵そりや何をぬかす、エヽ聞えた、扨はおのれ身が熱うなつたによつて、樣々僞をいうて、此場を遁れう〳〵とする大盗人め」小「是はきようがる、いかに面々ばつかりすつくりと旨い目に逢うたというて、コレ主はぬしとも思ふが、此方がしよらしんとして居る所ではないわいの」縫「よう私にいひ掛をしに來てたな、何やら怖い男では有るわいのう」小「そう〳〵寄つてたかつておれを獨りはね出しものにしたは、アイ、あの喜蝶と申しますはあれは島」與「そいつくゝれ」十内「捕つた」ト小市を縛る。小「是は迷惑

右衛門様どうでござります」與「イヤこれ縫之助殿、御親父將監殿と緣組いたした喜蝶はそれでござる、不調法ものでござれども、こなたを戀こがれまする故、取急いで嫁入致させた、天下晴れて夫婦にするのぢや程に、必ず粗相のないやうに頼み存じまする」縫「ねつから合點がゆかぬ」小「おれも合點がゆかぬ」與「但し不得心にござるか」縫「めつさうな、これが不得心でたまるものでござりまするか」與「然らば添うてくだされうか」縫「添はいで何と致しませう」小「何のことぢや」みゆき「お侍サア喜蝶殿の出やしやんした程に、詮議さつしやれ」小「いえ〳〵、コリヤ喜蝶ぢやない、本の喜蝶を呼出して下さりませ」縫「これ〳〵粗相いはしやんすな、淀與三右衛門が妹の喜蝶はわしでござんする」小「何をこなたは、喜蝶ではないもせぬもの」縫「きてふでござんす」小「何程でも喜蝶ぢやない」縫「喜蝶ぢや〳〵」小「喜蝶ぢやない〳〵」トせり合ふ。與「妹、何をせり合ふことがある、ひかへて居いサ」みゆき「お侍、其喜蝶殿とはいひかはしては居やつしやらぬか」小「イヽエ、こりや何ぢやいなア」縫「何ぢやの斯ぢやのといふ事はない、俺や嬉しうて堪らぬわい」小「各自ばつかり嬉しがつて」久「不義ではないの」小「ちよつと往んで參じませう」みゆき「浪人まつた」十内「御意ぢや待たう」小「ハイ」みゆき「喜蝶さん、お前はいひ交した覺は有まいのう」縫「めつさうな、其樣な事が有つてたまるものでござりまするか」

ば永介とやら、妹喜蝶にわけが有るとやら、其浪人はあれか」小「いかにもえらふ永介は身共さ」みゆき「お覺がござりますか」與「ハテ藥袋もない、淀與三右衛門が妹に其樣な事が有つてよいものか」縫「與三右衛門樣、何とやら私も心惡うござります、喜蝶殿をアノ侍におあはせなされましたらばようござりませう」小「オヽ逢はう〳〵」與「ハテ貴殿の面晴れに、逢ひたくば逢してやらう、妹喜蝶あの侍にあへさ」嫁「アイ」ト縫之助の傍へゆく。縫「コレ大事ない、なにもかも諸事は味よう呑込んで居る程に、ちやつと傍へいて、すつぱりと有樣にいはつしやれ」小「喜蝶か合點がゆくまい、何であらうと餘の筋はいらぬ、云交して居る事を、すつぱりといひさへすりやよい、サアいうて了へ」トふり切つて縫之助傍へ行く。縫「ハテ扨何であらうど有樣にいひさへすりやよい、ちやつといはつしやれ」ト突やる。小「諸事は跡で知れる程に」ト又縫之助方へくる。縫「ハテ扨面妖な」小「怖い事はないわいのう」トつれて來る、もぢ〳〵する。縫「マア此帽子を取つて」ト取る、總角なり。總角「縫之助樣」縫「ヤアわがみは」小「ヤアこなさんは」與「與三右衛門が妹喜蝶、曇り霞のない妹でござる、とつくりと詮議なされい」小、縫「コリヤどうぢや」縫「マアわがみは何して」總「もう〳〵縫之助樣、わたしや淀與三右衛門が妹の喜蝶でござんす、嫁入して來てお前の女房ぢや程に、かはいがつて下さんせえ」縫「是はマア夢ではないか、與三

うも知れぬ」小「千も萬もない喜蝶を爰へ出せ、喜蝶に逢うて喜蝶が身共を見知らぬといふたらば、身共は騙りぢや、又いかにも女夫でござるというたらば、縫之助貴様間男ぢやぞよ」縫「面白い、喜蝶を呼出して詮議する、左近喜蝶を爰へ引ずつて來い」左「畏つてござりまする」みゆき「左近まて〳〵」縫「なぜお止なされまする、是へ呼出し詮議致しまする」小「早う出せ〳〵」みゆき「まてマアまていやい、縫之助様、喜蝶を爰へ呼出して、もし覺がないと云はしやんすればよけれども、もしいかにも私が夫でござると云はつしやると、いかう詮義がむつかしうなつてくるぞえ」縫「何の難かしい事はござりませぬ」みゆき「難かしいわいなア、ア丶氣の毒な」小「何の氣の毒な事がある」縫「大事ない左近、早う連れて來い」左「畏りました」ト入る。久「ウム紋之丞、そちは此通りを與三右衛門様へ委細に申上げて、是へお出なされといやれ」紋「畏りました」小「だんない與三右衛門怖うないぞ」みゆき「コレお侍、大事のことを云うてござつたが、いよ〳〵夫に相違はないかや」小「えらふ永介武士でござる」ト小市縫之助目くばせする所へ、嫁綿帽子白無垢にて、淀與三右衛門社袴にて、紋之丞、左近付き出る。みゆき「ハテそれは合點の行かぬ」トいひ〳〵出る。みゆき「與三右衛門殿」與「扨今日は種々の御馳走、將監殿にも殊ない御悦、こなたにも別して御取持でござる」みゆき「イヤもう風情もない仕合でござりまする」與「時に今奧で承れ

此縫之助には何誤が有つて繩掛ける」小「わりや不義者ぢや」縫「不義とは」小「ヤアしら〴〵しい、身が事は、八幡の邊に蟄居する、えらふ永介といふ浪人ものさ」縫「其えらふ永介が何故繩をかけうとはいふ」小「今宵此館へ嫁入して來た淀與三右衛門が妹喜蝶は、身共が夫婦の契約をして居る所に、其主のある喜蝶を嫁にとるは不義密夫、スリヤ身は先の馴染、我は後のなじみ、不義間男といふが、此えらふ永介が誤か、返答は有るまいがなア」縫「スリヤ嫁入して來た喜蝶とそちは懇して居るか、スリヤ被せられたな」久「まつた何とも合點の行かぬ、お聞なされましたか」みゆき「淀の城を預る程の與三右衛門、男のあるものをよもや縁組なされう筈がない」久「コリヤ聞えた、扨はお大名の縁組を見かけて、強請込み金錢をむさぼりに來たかたりものぢやな、侍衆こいつ引出さつしやれ」十内「大がたりめ」ト立かゝる。小「聊爾せまい、聊爾すると腕に覺は有明櫻、はら〳〵はつと散りめされうか、お笑止な一ッのあんどを蹴破つて、明日の晩から事を缺かすぞ」縫「アヽラをこがましや、いかに永介、喜蝶と汝女夫ぢやといふには、何ぞ慥な證據があるか」小「證據のない事をいはうか、喜蝶が直筆の二世も三世も言交した起請が證據、是を見い」縫「誠にコリヤ起請、皆粗相すな、慥な證據が有るは、荒立てると此方の武士が立ぬぞ」小「なんと是が證據になるまいか」皆々「ハテナア」久「イヤ〳〵其起請は僞物であら

アゝまゝよ、さうせずばなるまい」ト小首傾け入る、唄になる、ト橋懸より小市尻からげ奥へ忍びこみ。小「イヤサ申す事は申さにやならぬてや」侍「無禮な侍がある」小「逢はにや置かぬ置かぬ」ト せり合ひ出る、久馬みゆき紋之丞出る。久馬「奥へひよくが何ぢや」十内「イヤ此侍が若殿縫之助様に逢うとお座敷へ通りまするゆゑ、右の仕合でござりまする」久「お聞あられましたか」みゆき「どうやら見たやうなお侍、何の用があつて此屋敷へは參つた」小「然いふ女性はどなたでござる」久「花滿左衞門の奥方サ」小「奥方も口方でも大事ない、縫之助殿に逢へば様子の知れるものでござる」みゆき「縫之助殿にあへば様子が知れる、縫之助様をよびや」久「縫之助様〳〵」ト縫之助出る。縫「何ぢや何事ぢや」みゆき「あのお侍がお前に逢ひたいといはれまする」縫「ヤ來たか、先刻にから」小「ウヽン〳〵」縫「ムウ、貴殿にはつひぞお目にかゝつた儀もござらぬが、手前縫之助でござる」小「さては御自分が縫之助殿でござるナ、つひぞお目にかゝらねば近付であらう筈もなし、近付でござらねばつひぞお目にかゝらうやうもなし、近頃無念残念の對面を仕るなア」縫「して御用とはナ」小「成程えらう用がござる、ちよつと夫へ出やッしやれ」縫「拙者にナ」小「いかにも」ト向ふへ出る。縫「御用とはナ」ト小市取縄を出したぐる。小「縫之助腕廻しやれ、異儀に及ぶと、踏付けて縄かける返答は何と」縫「まて〳〵つひぞ逢うた事もない奴が、

なされませ」縫「イヤ退け〳〵、聞かぬ〳〵」源「マア待つしやりませ、遂にない血相して、何處へお出でなされまする」縫「平太めを切つておれも腹切る」ト行うとする。源「サアようござります、最前からの様子は物蔭から見てをりましたれど、日頃意趣ある平太、私が出てはなほ意地つようなりをつて、お身の妨げにならうと態と控へてをりました」縫「源八モウ堪忍がならぬ」源「さればサ彼方は抜きさしのならぬ證文を持つてをれば、お腹を立てられまする程事の破れになつて、お家に疵が付きまするがや」縫「というてあれを」源「取返して上げませう」縫「ヤ」源「取返しさへしたら手の下の罪人どうせうと儘、私次第になされませ」縫「そんなら取返してたもるか」源「お前は何も知らぬ顔で、うつくしうしてござりませ」縫「イヤもう取返してさへたもればよい」源「其事を必ず色目にもお出しなされますな」縫「合點ぢや〳〵」ト内より。みゆき「縫之助様縫之助様、將監様がお召遊ばす、縫之助様」縫「ハイそれへ參りまする」源「ちやつとお出なされませ」縫「そんなら頼んだぞや」源「私が呑込んでをりまする」ト内より。みゆき「縫之助様〳〵」縫「それへ參りまする、頼むぞや〳〵」トいひ〳〵入る。源「追付私が。せうどもない事仕出さつしやれた、急に取返さねば大事になる。時にかうつ、是では戻しをりさうなものぢやが」ト思案して。「かうつ。さうぢや」紋「源八殿〳〵お召なされまする、源八殿」源「それへ參ります、

居ると、手討にするぞ大盜人め」平「サア〳〵ようござりまする、それ程お腹の立つことなら貰ひますまい」縫「なんの爲に」平「ア、そんならせう事もなし」ト立つて往かうとする。縫「コリヤ待て今の證文おこせ」平「アノ此證文を、ヤレ折角こつちへ取つたものを、マア止に致さう」縫「ヤイ其證文持つて居てどうしをる」平「何も致さぬ、大切な廻船の御朱印を書入れた證文ぢやによつて、物ぢやて〳〵、太夫が起請くれてさつぱりと退いでしまつしやれば上げます、いやぢやと云はつしやると物ぢやて」縫「そんなら汝いふ氣ぢやな」平「何のお主の難儀になる事私が申しませう、總角さへ下さるれば申しませぬ、起請下さりまするか、下さりますであらう」縫「エヽおのれはナア」平「下されますか」縫「ならぬわい」平「ならずば物ぢやて」縫「おのれそれを」ト取にかゝるを突飛す。縫「モウおのれ」ト拔いて切かゝる、刀もぎ捨て。平「ものぢやて」縫「エ、汝を」ト又小刀を拔いて切かゝる、もぎ取つて捨て突飛し。平「下さりませぬか、否ならものぢやて」縫「おのれ」ト捕へ。平「こなたの身體の一大事になる事ぢや、篤りと思案して下さりませい、下さるであらう、遲なると物ぢやて」縫「おのれ」ト平太寄つて當る。平「物ぢやて、イヤハヤ結構なものぢやて」ト入る、唄になる、ト縫之助起きて無念のこなし有つて大小差し、身繕ひして切込まうとする、神道源八出で。源「お待なされませお待

切なお家の柱、此様な事が聞えるとお國の大事になりますが、ァ、薬袋もない」縫「おれもさうは思うたけれど」平「こなたは一向夢中ぢやで」縫「サア今の證文早うたも」平「此證文をくれいか」縫「オイのう」平「縫之助様こなたに平太めが一生の御無心があるが聞いて下さりませうか」縫「イヤもう今の難儀を救うてたもつたわが身、何なりとも聞くわいのう」平「先以て有難う存じまする、別の儀でもござりませぬが、お前の深ういひ交してござる島原の傾城總角、私に下さりませい」縫「ヤ」平「モウぞつこん惚れぬいてをりまするゆゑ、廓へ通ひましても、お前と腐り合うて居るゆゑ、ねから手に廻りませぬ、お前が主ぢやに依ていはれもせず、忌々しう思うてをつたが、幸ひの所ぢや、私にさつぱりと下されい、總角が起請を持つてござるであらう、ドレ下されませい」縫「平太、われは氣が違ひはせぬか」平「何がどう致しましたとえ」縫「イヤもう興もあすも覺はてた奴ぢや」平「なんにも覺める事もないがな」縫「ヤイ太夫と深う馴染んで居るは廓中にかくれはない、其主の思込んで居る者に惚るさへあるに、何ぢや廓へ通うた、大方其位なら、常の客のやうな顔でかつて取つたも知れまい、汝れはく\ようおれに向つて起請をおこせのくれいのと、そんな事よういふなァ」平「ハテ惚れたものぢやに依て下さりませい、惚る事はなりませぬかな、ドレ起請を下さりませい」縫「まだく\ならぬ、今度からそんな事いひ

金受取りまするわいの」縫「それをいうて堪るものか」太「サア嫌なら二百兩の金今受取りませう」縫「サア二百兩の金は」太「金がなけりやアイ若殿樣に御朱印を」縫「シツ〳〵ヤイ大きな聲すると爲にならぬぞ」太「ヤア切刀を廻して切る氣か」縫「さうではなけれど」太「御大名の弟御が町人に金を借りて殺しても大事ないか、切られませう」縫「其樣に沒義道に物をいふなやい」太「奥へいてめつきしやつきする」縫「それをいうて」ト取付く。太「ハテ面倒な」ト突飛す、立廻りある所へ關口平太取つて放り、當る。縫「平太かよい所へ來てくれた」平「サア〳〵ようござります」縫「彼奴マア」ト平太、太郎右衞門が懷中の證文を取つて懷中へ入れる」ト太郎右衞門起きて懷中いろ〳〵搜し。太「コリヤ今手酷い目に逢したはわれか」平「われかとは素町人の分でうぬうぬ」ト睨む。太「イヤサ強い顏すない、今の證文はどこへやつた」平「おれが取つた」太「ヤア其證文を」ト取にかゝる、手を捩ぢ上げる。太「アイタ、、」平「大盜人めが、御朱印〳〵と澤山さうに、大切な物を證文へ書入さして、うぬ、表向で詮議すると首が飛ぶぞよ」太「アイタアイタ」平「此證文は闕所だ、命から〳〵去るを有難いと思うてうせう」ト投る。太「コリヤ又餘まり」平「イツソ打放してのきよ」太「ア、御許されませ」ト遁げて入る。縫「でもよい所へよう來てくれたなア」平「お前もお前ぢや、上樣よりお預けなさるゝ所の、廻船往來の御朱印は大

ようござりまする」侍「憎い奴の」縫「コリヤ〳〵待て〳〵、そちは京都の町人山家屋太郎衛門ぢやないか」太「縫之助様お前は」縫「コリヤ四邊へ目を利かせい、コリヤ此者には用事がある程に、苦しうない次へ行け」侍「畏つてござります」ト入る。縫「よう來たなア」太「よう來たなア縫之助様、コリヤどうなされまする、何して下さりますのでござりまする」ト關口平太聞て居る。縫「コリヤ聲が高い、聞えるわいやい」太「イヤ聞えるやうにいふのでござりまする、お前が廓通ひの揚代に詰つて、どうもならぬ程に金二百兩貸せと仰やる、大盡金は一文もなりませぬというたれば、金は濟す違ひのない證據に、お上から預りの廻船往來の御朱印を預けうといふて、コレ〳〵此證文、右二百兩の金子、來る晦日迄に相濟み申さず候はゞ廻船往來の御朱印其方へ質物に差入れ申すべく候所實正明白なり」縫「大きな聲をすないやい」太「かういふ證文を書いて置いてモウ幾月になりまする、今日はやらう明日は渡さうというて、御朱印もおこさず金もおこさず、こりやマア何するのでござりまする」縫「サア〳〵尤ぢや、けれど其御朱印の事は、急なに依てつい書入れたのぢや、なか〳〵わいらに渡す物ぢやない、金は追付濟さう程にモウ二三日」太「ヤこれ〳〵其大事の物を書入さして置いたがこちのこみづぢや、千も萬もないか可よござりまする」ト大ういふ。縫「わりや何處へ行く〳〵」太「奥へ往て親御様に此證文を見せて、

太殿」平「源八殿」源「勝負は子の刻」平「後刻」源、平「御意得ませう」ト唄になり、侍を連れ双方へ入る。みゆき「左近紋之丞懸物みな取片付けい」兩人「畏つてござりまする」ト入る、花滿縫之助出る。縫「扨も〳〵急に來た程にの、エヽみゆき樣」みゆき「縫之助樣、もう嫁御は見えたかえ」縫「見えた段か與三右衛門が附いてをられ、親父樣と目出たい盡しの咄、まぜかへして居る」みゆき「そんなら又お前も、ナゼ嫁御の傍に居やしやんせぬぞいなア」縫「何をよい氣らしい。モウ來さうなものぢや」みゆき「誰がいな」縫「イヤサよもや彼奴も、あれ程に稽古した事ぢやによつて、來ぬといふ事はない筈ぢやが、エヽ此方の身請もエヽつゝと俺ばつかりに氣を急しをる」みゆき「お前もきよろ〳〵と嗜ましやんせ、女子といふものはさうしたものぢやないぞえ、祝言の夜さりは、大體恥かしい怖いものぢやない、それでもあたまから聟のしなつこらしう物いふは甚うせいになるものぢや、傍に居てやらしやんせ」縫「モウ來さうなものぢやが」みゆき「エヽおよそな聟樣ではある、ドレ私も喜蝶樣の顏見て來う、けうとい縹緻ぢやけな、エヽあやかりものめ」ト脊中をたゝき入る。縫「ホウ何のあやかり物な事があろ、よもや小市めに如才もあるまいが、辨之作はモウ太夫が事をいうて寄越さうなものぢやが」ト山家屋太郎右衛門町人の形にて出る。太「縫之助樣に逢ひさへすりやよござりまする」侍「ぢやというて不作法な、何處までうせる」太「サア

ヤ全く」みゆき「殊に廻船往來の御朱印を預る此屋敷、淀川往來の普請延引に及ぶゆゑ、今宵子の刻に兩人立合の勝負を決し、打勝つた方へ一人に云付けいと親殿の仰せ、兵衛も役目も打勝つた方が承る筈でないか、それに家中を騒すは、主を蔑にする不屆者、但し左衛門様のお留守の内と見かけての我儘か」平、源「サアそれは」みゆき「不所存もののめが」源、平「段々誤り入りましてござりまする」みゆき「目出度い祝言の夜なれば聞捨にして今はゆるす、皆以來は嗜め」源、平「ハア」みゆき「子の刻までは魚と水の交り、上下にも篤といひつけて、將監様の御機嫌を伺がや」源、平「畏つてござります」文「誠に主人といふ重石がなくば、つい口論にも取結びませうもの、武骨の段は御用捨下されませう」平「イヤもう時のはずみで、ふら〳〵と過言を申した、御了簡なされて下されい」源「イヤもう今更面目次第もござらぬ」平「結構な流義を輕蔑致したは、下拙が誤りでござる」源「イヤ手前から手を突きまする」源「いや手前が不調法」平「イヤ重々不調法」平「イヤ手前が」源「イヤ手前が」兩人「ハヽヽヽ」久馬「長柄の百姓共、渡し舟の大工共、其方達も子の刻迄はたまりへ參つて控へてをれ」大工百姓「畏つてござりまする」百「ドレたまりで待つて居よう」大「そんなら待つてをりまする」大「源八様の勝に極つて有る」百「平太様の勝に極つた」大「サア皆ござれ〳〵」ト兩方へ入る。左、紋「イザ先づ奧へお出なされい」源、平「各も奧へ」△皆々「ハアヽヽヽ」源「平

雀ら、アノ猿といふ物はナ、己れが面の赤いゆゑに、箔のぬつた佛の顔を見て笑ふといやい」源「アノ蟹といふ奴はナ、己れが横に行くに依て、直に歩く人間を笑ふといやい」ト平太が方をこづく。平「オヽ澁い柿めは甘い柿の人に食はるゝを笑ふといやい」源「磔が獄門を見て、足がないといふて笑ふといやい」平「スリャ獄門の鹽梅、よう知て居るか」源「知らずばちつと知らさうかい」平「知らうわい」源「知らさうわい」平、皆々「知らうわい」源、皆々「知らさうわい」ト兩方より喧しういふ。みゆき「双方共にまてといふに待たぬか」左近「御意を背くか」みゆき「女子と思ひ侮つての仕方か」源、皆々「ハア」みゆき「源八平太それへ出い」平、源「ハア」みゆき「そち達は主人の禮儀を知つてをるか、イヤ知りやせまい、そち達兩人は兵術の御師範も、貴き身を以つて鎌倉より仰渡された淀川の普請の儀も、かたみ怨みのないやうに、源八には渡、平太には堤と仰せつけられたではないか、それに源八が渡成就する事を憎んで堤を築かず、渡さへ渡さずば堤の往來叶はぬと、互ひに拒み、兵法の流義、私の宿意に主の用事を缺すさへあるに、今宵は何ぢや、縫之助樣へ淀與三右衞門樣の妹喜蝶殿を婚禮の最中、夫左衞門は鎌倉の使者に京都へお上りなさるゝお留守の内、親殿將監樣も今宵の婚禮、わしまで上下に氣を付けるに、もし口論に及んで、双方の武士が拔放したら何とする、目出度い夜も家中に亂を起して主をのろふのか」源、平「イ

盲ではござらぬか」△皆々「ちつと眼が開きましたかな」源「イヤもう四書五經 詩文章 位は心得てござる」△皆々「シテ外のはナ」源「ハテよその文盲さ」○皆々「さやうでござりまする」平「皆よく聞つしやれ、アノ大鵬でござる、兵術に取つては片羽がいが九萬里づつ伸びまする」△皆々「左樣でござりまする」平「其大鳥の前で雀侍が、ちやらくちや〳〵と、ハヽヽヽ」△皆々「ハヽヽヽ」源「アノ烏といふ奴は、月などが冱えると夜が明けたかと思うて、ガア〳〵と吼えまする、是をあはう烏といふ、扨からすどもがカア〳〵よう啼くぢやござらぬか」○皆々「左樣でござりまする」源「魚の腸でも引かけさせて往なしたらようござらう、ハヽヽヽ」○皆々「ハヽヽヽ」平「どれ烏の因緣承はらうか」ト立つ。△皆々「お聞きなされざなりますまい」源「烏の因緣聞かうとあるに、雀の因緣聞かいでもつまらぬものぢや」ト立つ。○皆々「コリヤお聞きなされませい」ト兩人向ふへ出。平「なんと神道流は關口流よりはよい物かなァ」源「サアレバ何れも何と思召す」○皆々「イヤ拔群の違ひでござる」源「あの通りでござる」平「ヘヽヽヽ雀どもが囀るは」○皆々「雀とは」平「イヤ貴樣達の事ぢやない、雀の事サ、ごくにも立ぬ事を貧乏雀共が、アヽ不便な事ぢやノウ何れも」△皆々「不便な事でござる」源「ハア烏がなくは」○皆々「烏とは」源「イヤ各方の事ぢやない、烏めが事ぢや、扨よう啼く烏ぢやござらぬか」○皆々「よう啼きまするて」平「ヤイ

と普請して取す、暫く待つてをれサ」百姓「ハイ何卒頼上げまする」源「ヤイ大工共、わいらも難儀であらうが、今聞く通り意地づくに隙どる渡しの普請、今宵のうちに何方へなりともかためたらば、急に取いそいで致してくれう、暫くまて」大工「ハイ先刻にから承りまして、何卒お前の利潤になりまする様に致したうござります、私共大工も仕掛けて今に放てござりますゆゑ、棟梁受取りました私一人の迷惑でござりまする」源「追付善悪が知れる、待つてをれ」平「ハヽヽ、何やらしやうにもならぬ事を、いか様盲目千人目明き千人だの、日本開山の關口平太が弟子になるといふは、其元たちの目があいてあるといふもの、割木をもつて狗子追へ歩く様な事いうて信仰するは、大きなべら坊といふものさ」△皆々「左様〳〵でござりまする」久馬「平太殿善悪は小口からでも知れさうな物でござるが、現に善い方をしらずに悪い方を指南受るは、何したものでござるぞいのう」平「イヤもう何の斯のと申して、マアいうて見れば生付いた福と貧乏との違ひでござる、ハヽヽヽ」△皆々「ハヽヽヽ」源「人間は水と見れど天人は瑠璃と見る、又餓鬼は炎と見る、劍術も其通り、邪を以て向はゞ、流義よくても刃金なまれば無刀も同然、正道をむねに納め、道を以て向ふを神道流、かの同じ目明でも、いろはも得書かぬ者を文盲と申す程に、各も隨分流義に眼を見開いて居たがよい」○皆々「ハア」久馬「源八殿其方のお弟子は文

れこれ弟子衆、何をざわ〳〵といふ事がある、關口流神道流何方がよい何方がわるいといふ事は今取だちをする子供迄知つた事、貴様達がわや〳〵いうても、勝つ所で勝にや役に立たぬ、仰渡された刻限に、竹刀打の勝負を決し、打勝つた者に渡津も堤も、淀川筋は皆平太が普請、お手前たちがざわ〳〵いふと、何ぞ後の勝負が危いやうにも人が思うてわるい、控へさつしやれ」源八「是々弟子衆、御前もこゝにござるに不作法な、何した事でござる、仰付けられた竹刀打の勝負、刻限までは餘程間がある、神道流か關口流か、印可を申受けた方が渡津堤共に淀川の普請承る、まだ勝劣も知ぬうちに、ざわ〳〵と囂しい、控へさつしやれ」○皆々「餘りと申せば」源「ハテ理非は勝負にあるわさ」平「囂しういふとかさから出るやうでわるい、皆控へさつしやれ控へさつしやれ」△皆々「餘りと申せば」平「ハテちやは〳〵いふなら、いはして置いたがよい」左、紋「双方共にお引なされい」ト引く。大「汝れらもかしましくいふなサ」百姓「お國へ直に參りましたも、堤の普請を早うして貰ひませぬと、又しても淀川の水がくへこんで田畑が流れて、南長柄の百姓は乞食になりまする、源八樣と意地づくをお立てなされまするは、私共の迷惑でござりまする」平「ハテ扨最前からの事を聞かぬか、俤等が其泣ごとを吐すによつて、今宵竹刀打の勝負して、打勝つた方へ堤も渡もかためて取るむねのわるい事を片付けて、追付ばた〳〵

役
一奥方みゆき　大吉
一花満将監　介十郎
一熊本辨之作　治郎三
一淀與三右衛門　四郎五郎
一侍、百姓、舟大工、門弟大勢

○

造物向ふ一面の金襖惣二重舞臺、君は千代ませの謠、二重舞臺の中に奥方みゆき立つて居る東の方に神道源八、西の方に關口平太裃にて手を組みゐる、玉淵久馬裃にて並び居る、雙方の武士大勢裃にて反打ち詰合ゐる、志賀左近、吉川紋之丞まん中へ入り止めて居る、源八方に舟大工、平太方に百姓大勢並び居る幕開く。

大工「どうなされて下さりまする」百姓「どうなされて下さりまする」△皆々「ぬけ」○皆々「ぬけ」

左近「待つたまたつしやれ」ト喧しういふ、此見えにて幕開く。みゆき「わしが聲を掛けぬに待たぬか」口「奥樣の御意ぢやが鎭らぬか」左「善にもせよ惡にもせよ、奥樣が待てと聲をおかけなさるに、尾籠の振舞却て落度でござらうぞ」紋之丞「源八殿平太殿の詞も出されぬに、ちと我儘かと存じまする、控へさつしやれ」△皆々「ぢやと申して」紋「御意でござる」百姓、大工「どうなされて下さりまする」久馬「喧しい引かぬとくゝし上るぞ」左「汝らも囂しい控へぬか」百姓大勢「はい」平太「こ

負ふ、此間侍下座、橋懸りより、鑓を持ち狙ふ、みふね尻目にて屹度見付思入有つて知らぬ風にて態と鑓先へ向ふ、兩方そろ〳〵付寄つてみふねをはさみ一時に突く、みふねひらく、兩人芋ざしになる、又突だす、みふね切倒し行かうとする、圖書熊手にてみふねを引かけ立ある、圖書長刀に懸り首場の中へ飛ぶ、山口又立ふさがる、顏を切る、くわへめんにて死ぬる、此模樣の立有りてみふね向ふへ走り入る、與三右衛門始終見て頭巾を取り、みふねを遥に眺め思入あつて。圖「ハテなア」ト手を打つ。よろしく幕

第二幕目　劍術仕合の場

役人替

役	俳優	役	俳優
一吉川紋之丞	菊松	一みふね	喜世三
一志賀左近	吉太郎	一津田伴之進	春五郎
一彌五原三平	清藏	一志方角兵衛	友十郎
一古川十内	友藏	一玉淵久馬	東九郎
一まき山新治	新藏	一ゑろふ永助本名小市	來介
一山家屋太郎右衛門	彦十郎	一喜蝶	小伊三
一花滿縫之助	三十郎	一關口平太	大五郎
一傾城總角	金作	一神道源八	文七

て、是より冠装束脱ぎ、前に眞の太刀土器を置く、與三右衛門隱れて見て居る、憲法身づくろひして腹へ突込む所へ、みふね鉢巻大小にて出る、憲法見て恟り。みふね「ヤア憲法様か」憲「神道源八が女房みふねか」み「まそつと早う駈付けたら、やみ〳〵と御生害はさせますまいもの」憲「イヽヤ悔むな、大内を騒したれば牛裂釜入にも遭ふべき身體、切腹するは我本懐」み「委細の様子は承りました、川浦遊軒が奥様にむたいの戀慕、それゆゑの邪」憲「無念は無念とこたようが、眞の太刀天盃の土器は此通り、鎌倉への申わけ、どうも堪へられぬ」み「併し遊軒を打漏しなされてさぞ残念にござりませう」憲「シテ遊軒は」み「疵養生に二條の館へ歸りました」憲「エエ」ト無念がる。み「お道理でござりまする」憲「そちは身が首に此天盃眞の太刀を添へ、鎌倉へ有の儘を訴へて指圖を待て」み「有の儘に言上せば、理非は立つても大内を騒せた咎、もしお國を沒收せられれば、奥様縫之助様は門前拂ひ、親殿様はいづくの大名へぞお預け」憲「花滿の家は斷絶」み「憲法様、お國も城も身のなる果」憲「エ、無念なはやい。サア介錯せい」み「ハッ」ト後へ廻る。憲「此腹へ突込んだる刀を源八に渡し、遊軒を打漏したを無念なといへ、關口平太は遊軒が弟ぢやぞよ」み「エヽ」憲「あれら風情に目はかけな、志す怨みは川浦遊軒一人ぢやぞよ」み「畏りました」憲「介錯」み「エヽ」と首切り、是より裝束に包み、右の太刀土器を包み脊中に

つたは〳〵」ト少し立廻り有つて追廻す、憲法冠をしめ直し、裝束まくり上げ、用意して又きりに懸るをいろ〳〵有つて追込む、道具元へ戻る、ト大内ざわ〳〵仕出し、いろ〳〵迯廻る。中「サア〳〵大體の中ではないぞ」圖「中將樣〳〵」ト圖書中將行當り。中「遊軒は何とした」圖「遊軒殿は今出川口より二條の館へ迯りました」中「女中方や上樣はなんとした」圖「皆關白樣のお指圖で、夜のおとゞへ入れましてござりまする」中「淀伏見ぜゞの屋敷へも早打遣したれば、追付加勢が來るであらう」圖「いやモウ淀の與三右衞門早打でおひ〳〵駈付けまして、日の御門まで參つたれど、迂濶にもえ入らず、御門に待つてをりまする。中「膳所の火消屋敷へもおひおひに駈付る、憲法がもし手に餘らば、與三右衞門を加勢に入れう」圖「關白樣へ伺ひませう」ト走り入る、半素袍につゆ取つた侍掛烏帽子にて長道具を持ち八人憲法を取卷き出る、憲法冠著ながら裝束をまくり大立あるべし、圖書中將等かゝる、立有つて。憲「卑怯な川浦遊軒、出ぬか〳〵出やァがらぬか」ト遊軒を尋ねる內、右の人數取付く事あるべし、此うち遠攻、大勢組付くを切倒し井戸へ入る。侍「南無三寶、空井戸へ取迯した、水門を搜せ〳〵」ト皆々入る。道具一面の惣築地になる、淀與三右衞門花道より早馬にて出る。與三「憲法は空井戸へ逃こんだとある、拔みちは此水門」ト窺ひ居る、憲法向ふの水門より出る、あたりを見

は是ぢや」ト土器出して見せる。「欲しかろ、さつきに土器割て置いたも身共ぢや」憲「成程よくよく腹の立事があるものでがなあらう、いかやうになと腹の癒るやうにした上で、其土器を下さりませ、頼みます是遊軒どの頼みまする」遊「これ皆御覧じ、此ほえる面はいのう」圖「其ほえ面へ笏ふるまはふ」ト笏で叩く。中「ドレおれがのも一つ喰さう」ト又叩く。△「俺も喰さう」×「これもくらへ」皆々「是を〳〵」ト皆々憲法を散々に叩く、憲法きつとなる。皆々「何ぢや何ぢや〳〵」遊「無念なか」憲「何の此位な事が無念にござらう」遊「夫ならば又土器やるまいものでもない」憲「どうぞ下さりませい」遊「オヽやらう」ト柄にて叩く憲法見て悔り、額血少々流るゝ。遊「無念なか」憲「何の無念にござりませう」△「ドレもう貰ふやうにしてやらう」ト蹴る。圖「俺も貰うてやらう」ト蹴る。中「あばらて貰うてやらう」ト蹴倒す、憲法思入。遊「もうやるぞ〳〵」憲「どうなりとなされませい」遊「オヽ何なりとせうわい〳〵」ト蹴倒し踏む、憲法遊軒が傍へ行き。憲「サアもう大概腹が癒たであらうなう」遊「オヽ其位にしたらモウよい、今こそ土器やらうと云うたらよからうがならぬ」憲「此様にしてもならぬか」遊「コリヤ是でもならぬ」ト狀を出す、憲法讀んでびつくり。憲「スリヤ此狀を見たによつて」遊「うぬが絶體絶命ぢや、土器もかうぢや」ト打破る。憲「モウさうすりや是非に及ばぬ」ト遊軒を一かせ切る。皆々「ヤア切

ぬる盃を鎌倉へやるのか」皆々「金で買うといふのか〳〵」盡「イヤ全く左樣ではござりませぬ」中「まづ第一見た事もないざまで、大柄さうに遊軒殿と、餘り大柄にぬかすと、青侍に云付ておとがひ蹴はなすぞ」盡「夫は又あまり」中「餘りとは〳〵」皆々「餘りとは〳〵」ト此間に遊軒出て上の方へそろ〳〵歩み立て居る長社衵にて。盡「サア〳〵成程どなたも〳〵、お近付ではござりませぬが、うや〳〵しい大内へはいり、少し逆上せましたか、轉顚致したさうにござります、まつぴらごめん下さりませう」中「さういへばまだしもぢやが、けふの無禮式法は皆破れた、後日にお咎め行くほどに、さう思うて居よ」盡「斯なる上からは後日のお咎は覺悟の前でござる、が遊軒殿、是は又餘り酷いと申すもの、たつた宵までは式禮作法殘る所もなう念頃に指南して、今更此樣になさるゝは、なんぞ一物あるのでござらう、淀川筋通路の儀も、貴殿の敎のやうに七里半の堤築く事を自筆に認め、天奏へさし上げたれども、今に何の御沙汰もなし、此樣にわるう横に出さつしやるといふは」皆々「横にとは〳〵」盡「サア横と申すは拙者が事、遊軒殿、私は絞り首に逢ふとても厭ひはいたさぬが、天盃の土器と眞の太刀は鎌倉へ納めねば末代鎌倉將軍の疵になりまする、爰をどうぞ聞わけて下されい」遊「オヽ笑止な事ぢやなア、いかにも天盃土器は二枚、一枚は遊軒が持つて居る、これ雲の内に關白の御判をすゑられたの

つと所望しやうかい」憲「イヤ武骨ものでござりまする」倉「ハア歌はいかぬか、歌よむ術をしらいで大納言の兼官するとはふとい奴ではあるわいのう」高尾「面の皮の厚い奴ぢや」岩倉「イヤあついものぢや」ト皆々よつて憲法が顔をこづく。憲「どのやうになされても知ぬ事は存ぜぬ、が中將様圖書様、コリヤ又遊軒殿も酷いしやうぢやぞや」中「むごいとは」憲「イヤサ宵迄は」中「よひ迄とは、上使が宵に公家と對顔しても大事ないか」憲「イヤサそれは」中「大事の上使が天子へお目見せぬ内に、我等へ内通しても大事ないか」皆々「逢うたがぢやうか、宵迄とは〳〵」憲「イヤサ遂にお目には懸りませぬ」皆々「其筈〳〵」ト憲法遊軒が傍へゆき。憲「遊軒殿段々御造作お禮はゆるりと申さう、差當つて土器が破れました、直に鎌倉へ下しませねばならぬ、彼のかへ土器をどうぞ所望させて下され、夫程の事は相違なうなされ下され」中「替土器とは何の事ぢや」憲「ハテ此間から教へさつしやれた替土器」中「天盃は其儘で鎌倉へ遣しあの方で頂くものぢやが、ア、天子のお上りなされた土器は捨て了うて、下々らの呑む盃を鎌倉へ下すか」憲「イヤさやうではなけれども」中、遊「あはう盡したら鎌倉まで祟りが行かうぞよ」憲「ハヽアよう思へば是は何ぞ足らぬ物があるによつて、俄に此様になされたと見える、後日謝禮はいかほどでも致さう程に」中「コリヤノ〳〵何ぢや、謝禮とは天子の土器は塵芥場へ捨て、金で買うてい

ト中將顏を見てぎつくりする。中「御座近うあがらつしやれ」憲「ハア」ト又階を渡る、向ふのみす少し上る。中「出御」皆々「シイ」ト辭宜する。中「每度の格にまかせ御太刀を下さるゝ、頂戴」憲「ハツ」ト中將みすの内より黃金作りの太刀を出す、鞘を殘して身ばかり出す、憲法見て恟りして柄の方より取る。中「玉座が近い、白刃をかくせ〳〵」憲「ハツ〳〵」ト袖の下へ入る。中「頂戴のもの隱す事緩怠」憲「ハツ」ト出す。中「眞劍狼藉」ト憲法腰へ差うとする。中「天子の下されもの腰に差す慮外もの」憲「ハツ〳〵」ト憲法思案して襟を裂き白刃を隱す。中「古格の獻上ものはどうぢや」憲「先達て天奏方へそなへ置きましてござりまする」中「不調法千萬な、天奏に受取つたもの一人もない、直に持つて上るはしれた事、不念法外な」憲「ハツ〳〵」ト此内より無念のこなし有る。中「天盃頂戴」憲「ハツ」ト中將三寶に大土器のせ、みすの内より持出、憲法があたまの傍へ置く、土器破つて置く、憲法土器取上げる、破つてある故ちやつと膝へ入れる。中「此度の使甚だ法外の至りなれども、其儘にさし赦す下れ〳〵」憲「ハツ」ト憲法階を下り少し思入れ有つて跡ふり歸りゆく、向ふより青山、山口立塞る、通さぬゆゑ附舞臺の方へゆく、又岩倉、高尾立塞る、其外みな〳〵憲法をまん中へ取卷く。憲「コリヤいづれも方は何となさるゝ」山「イヤ何ともせぬ、大納言の兼官で大内へ來るからは、歌もなるであらう、ち

誰ぢや」憲「ハテ私でござりまする」中「私とは、聞ば鎌倉よりの使とあるが、武士に心安うものいはるゝ覺ない、夜前とは何の事ぢやしらぬぞよ」憲「成程御尤、ついにお目にかゝりました事もござりませぬが、ちとお尋ね申上たい儀がござりまする、紫宸殿へはどれから參りまする、敎へさつしやつて下さりませ」中「紫宸殿はわが足の向く方へゆけ、大だわけめ」ト下座の方へゆく、憲法呆れて居る。憲「コリヤ餘程喰違つたわいのう、併し石橋中將樣が斯ゆかれるからは、此方が紫宸殿であらう」ト見て「櫻と橘が見える、斯ぢや〳〵」とゆく、是より引道具御簾のある所へゆく、圖書こちらに居る、憲法みす低う懸りあるを揚げ行うとする。圖「コリヤ〳〵御簾上げる事はならぬ、くゞれ〳〵」憲「さう仰やるは圖書樣か、餘りみすが低うござります、モそつとお上げなされて下さりませい」圖「ヤイ〳〵みす上げいとは慮外なやつめ、大内の事さはいするか」憲「差配は致しませぬが、此約束では」圖「約束とは何が約束、御簾へ手をさへると後日に鎌倉へ急度申付るぞよ」憲「ハア」ト憲法思入有つて、みすの内へくゞる處、圖書冠の纓を以て引く、冠落る。圖「不吉もの、冠落した天奏へ申上げる、待つて居ろ」ト走り入る、憲法是より思案して胸を極める思入にて冠を著て、しほ〳〵とゆく、紫宸殿の道具引出す、圖書、中將、公家四人、遊軒居る、憲法階のそばへ來る。中「鎌倉の使御座どころぢや」憲「ハア」

東へ引込む、花道より兩方へ御簾のかゝりたる屋體せり上る、舞臺所々に御簾かゝりたる御殿引出す、花道より憲法一人出る、山口右辨向ふへ行き、すれ違ひけつまづく。山「不作法なやつの」憲「御免なされませい」山「わりやたれぢや」憲「イヤ御免なされませい」山「見しつたぞ覺えてるよ」ト云捨にして右辨はいる、憲法本舞臺へ來る、青山侍從つか〳〵と行當る。青「アイタアイタ」トこける、憲法抱起し。憲「是は不調法な、御了簡下さりませい」青「ヤイわりや見馴ぬ者ぢやが誰ぢや」憲「私は鎌倉よりの上使」青山「ムウ侍が禁中へ來るに、疊ざはりの作法も知らずに來るか、但し鎌倉から斯せいと云付たか」憲「イヤ眞つ平不調法でござりまする」青「後日に屹度云付る程にさう思へ」ト行うとする。憲「イヤ申し夫は」青「エヽ」ト突飛し入る、憲法思入有て。憲「遊軒殿はどこへ往つしやつた」ト岩倉宰相通る。憲「申し〳〵」岩「なんぢや〳〵」憲「紫宸殿へはどうさんじまする」岩「ハヽヽ、大納言の裝束を著て、紫宸殿を知ぬとはハヽヽ、」憲「イヤちと便りにする人を見失ひました、敎へて下さりませ」岩「紫宸殿はかう行くのぢや」ト頤ぐるりと廻す。憲「どう參じまする」岩「さう行くのぢや」憲「どう」岩「さう、エヽどんな」ト笏で頤つき入る。憲「何を云つても便りにする人が居ぬによつて」ト憲法思入ある、中將出るを見つけ。憲「イヤ石橋中將樣ではござりませぬか、夜前はお目に」中「ヤイ〳〵こりやわりや

今迄こなた樣を僞り金錢をかたり取つたかとの思召し、どうも濟ぬ、サア打はなして下さりませ」ト遊軒ふり返り切らうとする。遊「ぶちはなすぞよ」辨「今の狀の文句、國へいねば逆礫、どちらでものがれぬ命」遊「にツくい憲法め」辨「彼奴らには構はぬ、大恩はこなた樣」ト遊軒思入。遊「もう何時ぢや」圖「おつ付夜が明けまする」遊「己れそれ程に思ふならば云付ける用がある」辨「何なりとも」遊「コリヤ」ト耳語く。辨「畏つてござりまする」遊「いけ」ト辨之作走り入る。圖「遊軒殿」中「其方が心は」遊「これ」兩人に耳語く。中、圖「がつてんぢや」遊「先へ廻つて」圖「今出川口の門からござれ」ト兩人入る。

返し

造物一面の築地公家門の體、橋懸より雜式二人、其跡へ仕丁黑裝束の公家二行に並ぶ、其跡へ對黑裝束にて花滿憲法出る、其跡へ諸太夫二人、仕丁多勢靜に出る、西の方公家門にて立留る。

先公家二人「おかげで四位の侍從に兼官致し有難う存じまする」憲法「町支配の御兩所御苦勞、取わけ槇田佐衞次殿御苦勞」新公家「鎌倉より京都御館を預りをりまする武家に納言の兼官有難う存じまする」ト四人目禮する、雜式より段々門の內へ入る、ト公家門引道具にて、大臣柱ともに

辨「所に又々家來辨之作を頼み、色々と口說き申候、遊軒はべら坊とも阿呆ともぞんじ候が、辨之作めが仕方、より〳〵手討とぞんじ居申候ところ」遊「サア跡を讀め」ト氣色だつていふ。辨「ハイ」トうぢ〳〵する。遊「よめいやい」トぐつといふ。中「讀んで了へやい」ト引たくり讀む。中「惡緣ちぎり深しと、今度の御上使遊軒に大内の作法御習ひ、諸事御頼みなさらねばならず、私に遊軒への文遣し候樣に、こま〴〵仰せ下され候故、筆も墨もけがれじように存じ候へども、あはうが氣に入るやうに道ならぬ文遣し申候」圖「ドレちつと讀まう。御申越の通りあの文にてはいかな遊軒も腰を打ぬき申すべく、御上使の首尾もよく致し候はんと存じ〳〵、跡は思召の通り上使の役目さへ御しまひ候はゞ、遊軒を引出し赤恥を御かゝせなされ候御事、御尤に存じ候、いつたい慾深き佞人にて候間その御心得、また國へ御歸りの節早々辨之作を逆磔に御上げ御尤にぞんじ〳〵。ヤア」ト顫ふ。「御機嫌にて早々御歸國まち入り〳〵、火中へ、花滿憲法樣まゐる、みゆきより」圖「そんなら花樣は、はなみつの花であつたか」中「こりやどうぢや」ト右のうち遊軒腹の立つこなしいろ〳〵あり、辨之作が持つて居る金を引たくる。辨「これは」ト遊軒だまつて懷へ入れる、辨之作思入。遊「ウヌ〳〵。今迄くれた金はかたられたと思うて濟す、うせう」ト辨之作鐺を取つて。辨「まつた」遊「ものぬかすと打はなすぞ」辨「成程御立腹は御尤、

きながらいふ。小「拙者はでんつく彌五右衛門といふ浪人ものでござる」鍵「ハヽヽコリヤえいえい」小「不義もの遁れまい」鍵「まつた不義とは何を以ておいやる」小「ヤア旨い〳〵」ト臺詞、花道の眞中に立留りいふ。いろ〳〵こなし有り、舞臺よりほめる、みな〳〵入る、合方唄になる。

辨「サア是から戀君の文が承りたい」遊「さつきの狀の上に、引續きておこしたはじつが來たわいのう」中「エヽあやかりものめ」圓「ちつともあやかる爲ぢや、われら讀みかけうか」遊「ひけらかすではないが、聲を上げて讀んでくれ」遊、中「さらば聽聞仕りませう。いよ〳〵御きげんよく御わたりなされ候と悅びまゐらせ候、さ候へば辨之作に文遣はし候、大方御覽も候はんと存じまゐらせ。見たく〳〵。隨分いやらしく書つらねまゐらせ故、お前が御覽なされたらばお笑ひ草とぞんじまゐらせ」遊「隨分いやらしいのがよい、何の笑はうぞいのう」中「てもきつい好ぢやなア」圓「まへ方京にをりし時分より、いろ〳〵口說き候へ共、身しんたえて遊軒はいやにて候ゆゑ、七りけんぱい願籠いたし候かげにて、お前樣と連添ひ朝夕有がたくぞんじまゐらせ」辨「ヤア」遊「モ一度讀んでみい」圓「身しんたえて遊軒はいやにて候ゆゑ七りけんばい」中「どれ。願ごめいたし候かげにて、おまへ樣とつれ添ひ朝夕に有難くぞんじまゐらせ。何のことぢや」ト狀を辨之作の前へ投る。遊「大事ない其跡ずか〳〵とよめ」辨「ハイ」遊「よめいやい」辨「ハイ」ト辨之作氣味わるさうによむ。

何と夫婦になられるではないか」皆々「したり」辨「智恵もあれば有るものぢや」縫、小「是より外に思案はないぞ」縫「何かに付けて結ぶの神さま、忝ない」遊「拜まつしやれ〳〵」縫「さて汝は侍になつて來るか」小「參りまする」縫「よう仕組みして往かざなるまい」小「やるものぢやござりませぬ、若殿縫之助樣に一寸逢はうなどとくらはすぢや」縫「さうぢや、コリヤみち〳〵云合さゞなるまい、でたらめにやつて見やうかい」小「でたらめ〳〵」ト侍一人出て。侍「旦那これにござりまするか、みゆきさまより御狀が參りました」辨「エヽ早う戾れであらう」ト狀を見る。侍「イヤわざ〳〵の飛脚で參りました、竊に御覽なされませい、跡は火中なされとの儀でござる」縫「はてなア六ヶ敷いなんぢや、花樣まゐる御存じ」ト遊軒とり。遊「よし〳〵覺ある〳〵」縫「花さま御存じ、覺えがござりますか」遊「人に見せなといふ筈ぢや、コリヤもう夕を脫いで花樣ぢやわいやい」辨「しやれるは〳〵」中、圖「いまのか〳〵」遊「今のとも〳〵」縫「お前のか」遊「世話をやくりませう」縫、小「結ぶの神樣有難うござりまする」遊「これは御慇懃の御禮いたみ入ります」ト根本根元ぢやわいやい」小「サア早う往かうぢやあるまいか」縫「いなう〳〵」辨「追付身請してやしかつべらしくいふ。才「サア太夫樣方お出なされませい」皆々「後から戾らしやんせえ」圖「お歸りかいなア」中「さらば」辨「ようお出たえ」ト唄になり。縫「是は見なれぬお方でござる」ト步

落ちても添ひまする、胴をするゑましたのでござりまする、御得心なくばいつそ爰で殺して下さりませい」辨、圖「サアえらい事いひ出した」小「お大名の嫁御に疵付けました、殺して下さりまするか去つて下さりまするか、返事なされて下さりませい、爰は動きは致しませぬ」縫「よう念比してくれたなア、いかにもやらうと云うても親父が得心せねばやらうともいはれず」辨「きつう思ひ込んだ顔付ぢや」小「命は捨てをりまする」圖「不便な事ぢやなア」縫「遊軒どうぞしやうはあるまいか」遊「イヤなか／＼器量のものぢや、すつかりとよう云うた、其代りには添れるやうに思案してやらう」小「エヽ」縫「去るやうの分別がござりますか」遊「ある／＼」皆々「どうでござりまする」遊「小市われは人の見知らぬを幸ひに武士になつて、縫之助殿の國へ往て祝言の中へねだりこめ」皆々「さうして何ぢやな」遊「こゝに有るぢや、まづ汝がいふには、手前は何の某と申すもの、則ち淀與三右衛門が妹喜蝶は二世までといひかはしてをる某、夫のあるもの娶るは不義もの間男ぢやと強請かけるのぢや」皆々「面白い／＼」遊「そこでこなたが、扨は左樣か、其樣なみだらな女を女房にもつて惡名とる事ならぬ、去つたといふ」皆々「去らにやならぬ」遊「かぶせ物しられた事ぢやに依て、親將監殿もぐつとも云分ない、さつぱりと去つてしまへ、其跡が驅落、與三右衛門ぢやというて、指がきたないとて切つても捨られず、夫なりにして了へば、

つた大泥坊めが」ト侍一人出て。「花満憲法様に、追付七ツでござりまする、お歸りあられませう」遊「憲法殿〳〵」ト憲法出る。憲「最前より一ぺん尋ねてをりました」遊「イヤもう貴樣は念を入れて稽古なさるゝ事はござらぬて」憲「オヽ迎ひに來たか」侍「ハア」憲「私はモウ參じませう」遊「お出なさるゝか」憲「弟、どなたも皆送つて行け」中「イヤ〳〵夫には及ばぬ、おれも直に跡から參内する」圖「明後日嫁御がお入ある、直に歸らしやれ」憲「いかさま親共より度々の使でござる、そんならお暇申して國へ歸りませう」縫「イヤもう今日ほど嬉しい事はない」遊「然らば諸事は先達て申した通り、明朝大内でお目にかゝりませう」憲「いよ〳〵頼み存じまする」遊「イヤもう一面に味方さ」憲「あなた是にござりませい」中「オヽ明日逢ひませう」圖「明日〳〵」憲「廓のもの共太儀ぢや」皆々「ようお出なされました」憲「紋之丞、サア供せい」紋「ハア」憲「明朝御意得ませう」ト七ツの鐘なる、憲法入る。遊「サア〳〵廓の者共をつれて、縫之助も歸らしやれ、國元に將監殿が待かねてゐられう」縫「そんなら身請の事お頼み申しまする」辨「私が呑込んでをりまする」縫「つゝと此嫁入はひよんな事ではあるぞ」ト小市出て。小「申し旦那」縫「小市か」小「其嫁御をどうぞお去りなされて下さりませ」縫「ヤア」小「私は喜蝶樣と云交してをりまする」皆々「ヤア」小「あの子も往ともなし、お前も持ともなし、去つてさへ下さりますれば、私は首が

いふがどうして無法者ぢや」遊「二百兩ある受取れ」才「オヽ受取らいでは」ト遊軒才兵衞をむね打に打すゑる。才「アイタ〳〵」遊「身の程を知らぬ奴、おのれ高位を客にした事を知らぬ顏なれば其通り、うぬが口から申上げると、うぬが首が飛ぶが、うぬ最前のやうな事、今一言いうて見よ、ぶち放すぞ」才「アイ〳〵あやまり入りましてござりまする」遊「金は身がつゞける程に、辨之作何方へなりといけ」辨「アヽ有難うござりまする、今迄段々お金を貰ひましたに依て、いひかねて居りまする」中「才兵衞これから居續ぢやぞ」才「何程なりともお出なさりませい」縫「エヽ慾面のひッぱつたやつぢや」遊「コレ縫之助殿氣の細いどうした事ぢや、ソレ五百兩」ト投り出す。縫「エヽ」遊「明後日は嫁御の輿が入ると有て、家中か迎ひに參つて居る、將監殿の機嫌の損ねぬやう早う歸らしやれ、太夫は跡より身請してやるわいのう」縫「スリャ身請して下さりますか」遊「辨之作五百兩くるわへ持つていて、總角が身請して國へ連れてゆけ」縫「エヽ忝うござりまする」辨「若殿お嬉しうござりませう」縫「嬉しい段か生々世々、此御恩忘れおきませぬ、有難うござりまする」遊「まだ〳〵金は何程うでも用に立つ、もう一家同然ぢやわいのう」總「日本晴がしたやうな」中「此勢ひにどつと呑あかさうではあるまいか」才「か程小判の山をつくからは、太夫樣方を引連れて、すぐに廓へ押かけ山の郭公」辨「たつた今迄惡たいを吐きくさ

い」杉「金はナ」縫「サア金は」杉「金持つてお出なされませい、サアござれ、コレござれといふのに」縫「ハテ是は何もならぬわいやい」皆々「申しどうで生きて居る氣はござんすまいぞえ」小「アア何處も色事の生粹ぢやなア」ト辨之作、石橋中將、圖書、才兵衛出る。辨「其樣にいふ事もないわサ」才「イヤいはにやなりませぬわいのう」中、圖「サアよいわいやい」才「イヤようないわいのう、コリヤ何して下さりまする」小「また一組はじまつたわ」辨「やるといふのに」才「サア今貰はう、あるかえ有るまいが、頭から斯なるを知つてゐるに依て、マア第一お公家を客にする事はいやぢやと云ふのに、何もかも引受ける大事ない、なんのと言うておいて、毎日太夫樣を揚げてこなさん達三人で外の客をせぬによつて、身上は上つたりぢや、今日の明日のと引ずられて、橋の寮へこい合點ぢや、來て見ればどこへ金、首筋押へて戻らにやならぬ、わたさつしやれぬと代官所へ斷るぞや」辨「其やうに大形にいふ事はないわいやい」才「イヤいふ、石橋中將樣と圖書樣と辨之作樣とぢやと」圖「辨之作コリヤ何するぞいやい」辨「モウ了簡がならぬわいやい」ト刀を拔く、皆々止める。才「何ぢや切るのか、切れう〳〵」辨「己れ眞つ二つに」才「切つて貰はうわい」ト川浦遊軒出る。遊「まて」辨「イヤお退きなされませ」遊「まて何も皆聞いた、町人の無法者を相手にして不調法ものめが」才「イヤ遊軒樣、町人の無法者とは、金受取らうと

エヽ」ト抓る。子供「さうぢや〳〵ぐつと云はんせ〳〵」縫「さいのう、おれも其事に如才はないけれども、兄貴の御上使で金の向はたゞき上げて、掛屋へ云うてやつても根から取合ぬが、氣遣しやんな、夜明に金拵へて身請する」總「イエ大事ござんせぬ、高が彼地へ往たら死ぬる分の事ぢや」縫「其やうに短氣にものを言やつてはどうもならぬ」總「いへ〳〵何なとお前の心次第にさしやんせ」縫「さいのう、どのやうにしてなりと」ト花車一人出る。花車「總角さん、先刻にから駕を待して置いたが何をしてござんす、今夜中に往ねば、身請の時が切れると又叱られる、ちやつと戻らしやんせいのう」總「エヽ欺された、私やモウ往にやせぬ」花「往ないでつまるものか、太夫さん方明日は身請の惣揚ぢや程に、早う戻らしやんせ、サア〳〵早う〳〵」縫「コリヤ杉ぢやないか、マア待てくれ、太夫はおれが身受するのぢや程に、ちつとの間」杉「申し申し是申し、いつぞやから揚代の算用もせずに置いて、私らへの紙花もくれずに、五百兩といふ身受の金が出來るもので」縫「さればいやい、金はナ」杉「いえ〳〵〳〵お前ぢやといふては親方が身顫ひ立てゝ忌がる、待つことはマアなりませぬ、身請なさるゝなら、今夜中に五百兩の金を持つてお出なされませ、サア太夫樣ござりませいのう」總「殿樣モウ逢ふことはござんすまい、さらばでござんす」縫「コレ夫をやつては」杉「アヽなりませぬといふのに」縫「さいや

はござりませぬ」ト此内喜蝶小市のそばへより。喜「何せうぞいの」小「サア何しようとてマア一旦は嫁入なされずばなりますまい、其思案といつぱ」記「ヤイ〳〵汝は㨿間ぢやないか、御寮人の傍へ寄て、嫁入なされずばなりますまいとは汝が指圖受けぬ、びらしやらした事があると汝が首が飛ぶぞ」小「ハイ〳〵」喜「便を待つてゐるぞや」記「何の便を、サアお出なされませい」喜「來てたもや」ト小市にいふ臺詞、記内間違うていふ事あり。記「お供仕りまする」喜「必ずおじやえ」記「是はしつこい、お供致しますワイのう」ト總角縫之助皆々出る。總「ござんせござんせ」縫「何ぢやいやい」小「そりやモ一口はじまつたわ」總「何でお前は女房持んす」縫「誰がいやい」總「アノ喜蝶さんは云號で、淀から嫁入さしやんすを、今迄私によう祕して居さんしたのう」子供「さうぢや〳〵急度云はんせ」縫「其樣におだてゝくれな」總「イヤおだてる事も何もいらぬが、急に身請の客が有つて今日か明日かには埒が明く筈、夫ではどうもならぬによつて思案して下さんせと、云うて置くのに構はずに、放つて置かしやんすによつて、遣手の杉がモウ今夜のあけ迄に身請の相談が出來た、早う戻れと今迎ひの駕が來てあるわいなア」縫「ヤア」總「ヤア所か、モウ私に飽が來たによつて、喜蝶樣を女房に持つて、身受のあるを幸ひ、私を突放すのぢやな、お前ばかりはさういふ心ではあるまいと思うたに、こちや聞かぬ〳〵エヽ

附たり、其方の顔見にきたのぢやわいのう、縁組も何も兄さんがさしやんした、私や何にも知らぬわいのう、何した物であらうぞ、思案して貰はうと思うて、胸は板になつてるわいのう、夫々今のやうな事、ようも〳〵いはれたのう」ト泣く。小「何程泣しやましても其手はくはぬ、コリヤ下地から知れてあること、態とはなうて高が此方がやうなものぢやと思うてけつぶすのか、さう旨うは乗るまいわいのう、と斯いふと腹が立たう、私やとうから疑うてゐやせぬわいのう」喜「そんなら疑ひは晴ましたかや」小「お前の心は私がよう知つてをるもの」喜「それに人を術ながらしくさつて」小「よう術ながらしくさツたなア」ト寄添ふ。小「時に嫁入の事はひよんな事ぢやなア」喜「どうぞ思案してたもいのう」ト記内出る。記「喜蝶様〳〵、コレ喜蝶様」喜「オ、何ぢやいのう」記「何ぢや所ぢやござりませぬ、與三右衛門様からお人が参りましてござります、ちと仔細があれば一兩日の内に輿を入れねばならぬ、喜蝶を早く歸してくれいと、お迎ひが参つてござりまする、お供廻りは表に待せ置ました、拙者がお供仕りまする、サア〳〵お出遊されませい」喜「さいのう往ぬるわいのう」記「若殿様も夫故に急にお國へお歸りなされねばならぬ、御供廻りの用意はよいか」橋懸りより「ハア」喜「これは又急な嫁入ではある」記「何が急な事がござりませう、殿様もお前も御婚禮は御一緒になされねばなりませぬ、斯様にお目でたい事

遣しまする、自然破れましては」遊「サそこでござる、その通りの土器は二枚ござる、一枚は拙者が持つてをる、天盃頂戴して鎌倉へ下すは身共が替の土器御下しなされ、破ても少しも苦しうない、同じ土器でさへあれば、ほんの京都鎌倉との儀式をするのサ」憲「さやうなれば重疊の仕合でござる」遊「マアそこを日の御門にして、此方へかう廻る、と兩方へ雜式が出る、此方へお出なされい」ト敎へるうち、始終かげをうつ、あとめりやすになる。遊「扨さう〲しうて物音も聞えませぬ、奥へ往て窃に申しませう」憲「左樣がようござりませう、いはゞ今晩が惣稽古ぢや」遊「たとへ惣稽古がないとても、始終手前がひつ添うて居るから、氣遣のきの字もござりませぬ、サア〱御出なされい」憲「マア〱御出なされませい」ト入る、唄になり、喜蝶小市が胸ぐら取り出る。小「エヽはなさつしやりませいのう」喜「イヤはなさぬわいのう」小「コレお前は近江の國縫之助樣へ一兩日のうちに嫁入なされますぢやないか、そんなら主あるお方ぢや、太鼓持風情が傍へおよりなされますな」喜「エ、其方はのう」小「おつと口舌は筋ばかりいうたり」喜「去年の正月智恩院の御忌に參つた時、わらは忍びの徒歩詣で、戀に上下の隔はない、可愛らしい男ぢやと、思うたが戀の始め」小「淀へせき〱通ふにも、餘ほどに思はにや行かれぬ、大ていや大かたの事ではござりませぬ」喜「それぢやによつて今度京都へ來たも、見舞といふは

て、七里半に京大坂の通路がなりまする、もう渡ぢやのなんのと、面倒いことは打やつて、其利法を申上げさつしやつたらば、莫大の御はうびでござらう」兼「サア其儀を存じつかぬでもござらね共、川の眞中へ堤をつく事は御咎があらうかと存じて」遊「ハテ扨淀川は手前が切落しました、拙者が何とも申さぬに、誰がなんと申しませう」兼「サア二筋に川がなりましては、また水が緩漫まして、土砂がとまつて埋れませうと存じて」遊「ハテ川が埋れたらなんの事、其元の御用にさへ立ば、皆埋ても大事ござらぬて、明朝すぐに天奏へ書付をお出しなされい、手前よろしく申して手柄にさせませう」兼「兎角よろしく頼上げまする、明日持參致しませう」遊「式禮は昨日御指南申せし通り、鎌倉の御名代なれば、門より内は大納言の兼官でござる、裝束お著なされたか」兼「夜前石橋中將樣がお著なされてとくと承知致しましてござる」遊「あの圖書などが非藏人の役で、御簾を卷上げまするに、得てしくじらさうと思へば、よう／＼疊から二尺ばかり上げて置きまする、御簾へ冠をあてぬが故實ゆゑ、四ツ這にはなられず、いやはや態とした事が」兼「明日は高う上げたいものでござるが」遊「いや其元のは御簾一ぱいに上げまする、邪魔にもならば引ちぎつてなりと置きませう」兼「眞の太刀土器拜領はやはり紫宸殿でござるナ」遊「いかにも天盃頂戴の時是非かの土器が破れるものでござる」兼「直に土器を鎌倉へ早飛脚で

し下されし御事、御嬉しさ限りなう、飛立つばかりにて御座候。飛立つばかりでござります」

憲「飛立つばかりぢや〳〵」遊「ばかりで〳〵」ト辨之作又讀む。辨「前かたつれなく申せしは、すでの殿御の心の飛鳥川、とくと見申さんため、思はずも憲法様に受出され、國へ參じ候へども、すかぬ事故つひに傍へ寄つた事も御座なく候」遊、憲「なんと〳〵あとは〳〵」辨「お前の志嬉しいと思ふ魂が、現にも通ひし可愛さは舊にまして早う夫婦になりたいと存じ候」遊「サア堪らぬ堪らぬ」ト又讀む。辨「どうぞ表向のわけ御立下され、御へんもじの程待入こがれり〳〵、花夕様御事今はいうけん様まゐる、こがるゝ身より。サアこがるゝ身よりぢや、ハツ」ト狀を投る遊軒頂く。憲「よう花夕さま」ト遊軒狀を顏にあて耻しがる。遊「さま〴〵と今迄は疑ひましたは眞平ごゆるされませう、もう〳〵神八幡そこ元の事なら命でも進上いたす」憲「それは忝なう存じまする、さつぱりと進上いたす」遊「手をつきまする」憲「ハテきつい嬉しがりな」ト内にて多勢、「やらぬぞ」圖、中「どつこい」ト立て所作の三味線太鼓鳴る、内より。才「辨之作様〳〵」

辨「オイもう所作になつたさうな。私はちよつと參りまする」圖「往てこい〳〵」才「辨之作様辨之作様」辨「オイ〳〵まて〳〵、合點のゆかぬ女めが振舞」ト臺詞いひ〳〵入る。遊「扨淀川の事はかうなされい、彼の川筋のまん中へ、眞直に堤を築くと、十三里の所がさし渡しになされ

る、辨之作〳〵」ト内より。辨「三種の神器をこなたへ渡せ」小市「ならばとつて見よやい」辨「其寶劍を」トばた〳〵蔭にていふ。憲遊「辨之作〳〵」ト呼ぶ。辨「ハイ〳〵」小「勝負は戰場」兩人「それ迄は、さらば」ト跡めりやすになる、辨之作書拔持つて出る。辨「とんとモウ結び際でござりました、ア丶しんどい役ぢや」遊「辨之作逢ひたいといふは餘の事でもない、內々そちに口說いてもらうたみゆき殿の事」辨「ア丶申しこれ〳〵」トいひ消す。遊「大事ない〳〵」辨「夫でも憲法樣が」遊「一ツも苦しうない、憲法殿に貰うたてや」憲「さても辨之作に今まで口說したのぢやなア」遊「面目次第もない」憲「こゝなすつぱの皮め」辨「ウ丶主人憲法樣には御合點でござりますか」憲「われが取もちは俺がためぢや、出來した〳〵」辨「夫でよめた、申し遊軒樣お返事が參りました」遊「ヤア」辨「折を見て渡しませうと存じて、ぢつと持つてをりました」憲「今まで見せぬといふ事があるものか」遊「ちやつとくれ〳〵。花夕樣みゆきより、昔の花夕をまだ覺えてゐてくれたかやい」憲「花の夕べとはいやな變名ぢや」遊「エ丶弄らしやるないのう、辨之作讀でくれ」辨「主人の前ではあんまり」憲「エ丶氣の弱い、其根性で今までよう取持つた、大事ないわいやい」辨「それもさうかい」ト讀む。辨「とくより御返事と存じ候へ共人目の關にさし控へり〳〵、誠に御無事の樣子、風の便に聞まし嬉しさの御事に候、數ならぬ身を左程迄思召

扨憲法殿、只今禮式を御指南申すによつて申しまするが、今の儀はどうでござる」憲「今の儀とは何の事でござる」遊「ハテ夫内々申した彼事な」憲「エヽ夫は何時なりとも掛屋方より」遊「イヤサ金でなしに御内室の事で」トロのうちにていふ、内よりどろ〳〵。國「エヽ口惜やはらたちやなア」トどろ〳〵にて合方になりめりやす。憲「エヽ狂言の稽古であやちがしれぬ、もそつと大きな聲でお聞せ下されい」遊「イヤサ大きな聲もしにくい、御内方のみゆき樣のことさ」憲「エヽみゆきが事な、サアお望みならば進ぜませう、といふたぢやござりませぬか」遊「恥をいはねば理が聞えぬ、みゆき樣はもと此京都の舞子、恥しながら拙者命も身も投打つて惚れましたれども、イヤすつたのもぢつたのと申す内に、こなたが國元へ伴れて歸らしやつたといふ事を聞くと、其時はきつゝう遺恨を含みました、今度大内への御上使、何でもしくじらせてくれうと思ひの外、みゆき樣をやらうと仰やる、夫で頓と腰が拔けて、扨つきあつて見ればきつい粹、けうといものぢや」憲「そんならみゆきをやらうと申したを、まだ噓言ぢやと思うてござりまするか」遊「イヤ噓とは思はぬけれど、又女房をくれうと申す事ぢやによつて」憲「愚痴ぢや、きつい愚痴、一たいマア表面は女房で、ついど一所に寐た事もない」遊「噓、けうとい噓、夫は今度の事があるに依て身共への」憲「イヤ〳〵ほんの事〳〵」遊「ほんの事か」憲「アヽ疑ひ深い」遊「そんなら問ふ事があ

之助總角と話して居る。縫「オヽ何ぢやいな」記「何をなされてござりまする」縫「イヤ是は何を、オヽ跡狂言は淺間が嶽、其けいこしてゐるのぢや」辨「イヤ申し喜蝶樣を淀へ歸しませうと申す事でござります」縫「オヽ早う往んだがよからう」喜「イエ／＼私や矢ツ張こゝにをりまする」小市「イエ／＼早う御歸りなされて、嫁入の拵へなされたがよからう」喜「私や往にやせぬ、否ぢやワイのう」總「往んで貰はうぞえ、こゝらあたりに居て貰うまいぞえ」小「サア／＼往んだ／＼」喜「構やんな、私や往ぬ事は否ぢや／＼、やつぱりをる」總「いやおくまい」縫「我がまた何で其やうに」總「じたいこなさんが」喜「わが身はわしを」小「こなたはマア」ト四人爭ふ皆々とめる。記「これはマア何でござる」縫「是は」記「何でござりまする」縫「やつぱり狂言の稽古ぢやワイやい」記「稽古ならばもそつと靜にしたいものナ」憲「是は何をざは／＼と、喜蝶もゐたくばもそつとゐたがよい、稽古ならば奧へ往てしやれ」中將「サア皆奧へ往かう、縫之助奧へおじやいのう」縫「そんなら奧へ往てこまそ」喜「わしも往かう」小「俺もゆく」總「申し／＼」縫「勝手にせい」四人「エイ／＼／＼」トせり合ひ入る。圖「何の事ぢや、俺も奧へいてこまそ」才「俺も奧へ往てこまそ」辨「俺も奧へ往てこまそ」ト才兵衛、記内、辨之作入る。中「どりや奧へいて稽古せう」圖「御兩人これにござれ」ト皆々入る。憲「ハテさう／″＼しい」遊「イヤ淺間嶽見物でござらう、

いと存じまする」鑑「此兩人の中のわるいは、兵術の流義を爭ひまする故でござりまする、なれども武士の身では不屈な儀とも申されず、一方に片付きますれば生害にも及びまする、外に致し樣もなし、お上へ對しては延引に及びまする、背中に腹とやら、何れ一人はすてねばなりませぬ、何とも困つた物でござりまする」遊「其平太と申すは拙者が弟でござる」鑑「ハテナア」遊「拙者は算術に妙を得ましたる故、大内に相勤めまする、弟めは武藝に心掛けまする故、其元のお屋敷を勤めまする、狀通の使ばかりを致しまする」鑑「左樣とも存ぜず粗相な儀申しましてござる」遊「なんの〱、此上は平太源八兩人にはお構ひなく共、關西往來を致しまする用には、拙者割出し置きましてござる、明日參內の折から書付を以てさし上げさつしやつたらば、こなたの拔群のお手柄になりませう、拙者がよろしう仕りませう、お氣遣ひなされますな」鑑「是はあまりのお志、然らば宜しうお賴み申しまする」縫「然らば中將樣、また跡の狂言の稽古、此間に奥で致しませう」虫「さうしよう〱」鑑「きてふコレサ喜蝶、何をうつかりとして居る、河原町の屋敷から送らさう、早う往にやれ」ト喜蝶小市耳語き居る。喜「イヤ私はもそつと居りませう」記「お前が左樣仰るは、殿縫之助樣に名殘を惜まつしやれてが、殿にも一兩日の內には此方のお國へお入りなさるゝ、マアお歸りなされたがようござりまする、ナア縫之助樣」ト縫

明日の儀を宜しうなされて遣されませい」中「なさらいでよいものか、諸事金でふいてあるもの、イヤナニ憲法、昔から使者にたつた首尾のよい天上はわが身であらうワイなう」憲「夫は有難うござります」遊「ちつと口廣い申分ぢやが、大内の事は立てうと伏せうと拙者が儘でござる、しくじらさうと思ふと、是に中將樣がござるが、夫は〳〵酷い目に合はせまする」憲「兎角遊軒樣宜しくお指圖を頼みまする」遊「拙者が其元の領分、獅子飛を切落し、淀川へ流しましたゆゑに、五畿内とも水損とんとござらぬ、其元には關西往來の朱印を頂戴してござる故、定めて往來の御工夫でござらうのう」憲「サア其儀に就きまして、私家内の騷動、記内一通り話しやれ」記「いやモウ遊軒樣が獅子飛をお切なされてより、湖は淀川へ落ちまする、只今まではより十倍の水の早さ、艪を立てましても櫂を立てましても、一向舟は上りませぬ故、長柄堤に舟を拵へ、あれより往來致させまするつもり、主人存じ付きましてござる」憲「時に家中に關口平太、神道源八と申して屈強の若者二人ござりまするが、兩人ともに兎角火を摺つて中がわるうござりまする」中、圖「ハテなア」記「それゆゑ源八方には渡しを渡したらば、平太方の堤が成就致しまする故に、渡し普請を引延しまする、まつた、平太方には堤を築かば、源八方の渡しが自由致しまする、故堤の儀を引延しまする、兩方挑み爭ひますから、自由に普請成就はいたしますま

ほいふが、憲法聞てたも、此間も和泉式部の梅山が所へ楊弓にいたれば、役人共に逢うて何がいぢつてこました、此方がやうな公家はさむしい、ちつと遊ばねばたのしみがない」中將「最前ちらりと見れば、淀の城預り與三右衛門が妹の喜蝶でないか、此東山へは何してお來やつた」喜蝶「アイお前は今度鎌倉より室町様へ、御參内にお立なされまする、定めし道中何かと御苦勞にござりませう、殊に縫之助様もお供に上京なさると有る、ちよつと御見舞にゆけと、兄與三右衛門殿の云付られまして、河原町へ參りましたれば、此東山へお出と承りました」中將「見舞に來た所を直にひつ捕へて狂言に遣うたぢやまで、酷いものぢや」縫「何のむごい事がござりませう、廓の者さへ呼よせまするもの、コリヤ貴方への御馳走でござります」喜「ぢやと云うて、明日か明後日此方へ嫁入する大事の花嫁を、ハヽヽイヤ御引合せ申しませう、是は喜蝶と申して、淀與三右衛門が妹でござります、則弟縫之助と娶せまして、一兩日のうち此方の國へ嫁入いたしまする、箱入の娘を狂言に出して御目に懸けました」遊「イヤハヤもう此間から種々の御馳走、今日は祇園町、明日は島原のと御馳走にあきみちましてござる」中將「さやう仰つて下さると結句迷惑に存じまする」圖「いやモウ拙者も山岡新田開發ぢやの、錢座名目錢などさまぐ\のねがひを取次いたしましたれども、此様な御馳走に逢うた事はござりませぬ、其代りには中將様、

も、ねからいくものぢやござりませぬ、イヤ夫はさうと、太夫様がたの唐子踊、皆出來ました出來ました」○「ほんにこちの兄様はようものをいはんす、私やモウ恥しうてなるこつちやなかつたワイな」才「何を吐すやら、千代菊さんや禿共をみやい」傾城花浦「いやモウ餘りほめて下さんすな、冷汗が出るワイなア」同今「モウ今度の狂言は、かるい役に使うて下さんせ」記「ひよつと若し仕損はうと存じて、手に汗を握りましてござります」圖書「扨かの辨之作が敵役はしぶとうてえらふ可い」辨「何圖書様のいやがらすやうな事仰りまする、私が主人縫之助殿さへなされますもの、己れやれ當ててくれうと存じましても、とんと出ると夢中でござりまする」圖「いやわれはわれとも思ふが、中將様にはいつの間に稽古なされました」中將「何とえらいものであらうがな、自由に芝居は見にゆく事ならず、茶屋へ往て役者を招びよせ、芝居事ばかりはさす物ぢやないて」記內「惣じてお前様は常平生に、斯様な遊所へお出なさるゝ事はならぬでござりませう」中將「イヤもう近年は役人どもが詮議してどうもならぬ、それを無理に遊びにゆくと、おいらには得構はず、先の茶屋へ祟りをるに依て、いつぞやのやうに川東のものになろてや」富「イヤ折々にはチト遊興にお出なされたがようござりまする」遊「いやモウ貴方がたを手ばなしますると、一向方圖がござりませぬ」中將「あれ御所の內から彼のやうに云ふによつて、外の者はな

い」辨「家來ども合點か」侍「畏まつた」トみな〳〵立になる、三味線太鼓入皆々おひ込みおうて出て敵役を押へて。縫「國の敵覺えたか」小「若殿めでたうお國入り、先づ此場はおたち」

トわき幕になる、内よりしやぎり太鼓、みな〳〵道具片付ける、内に打ませうしやん〳〵と手を打ち黑幕引くト一面の障子屋たい揚屋の座敷の體、殘らず衣裳著流し、東山はしの寮座敷のてい、向ふより川浦遊軒、花滿憲法出て。

憲「出來た〳〵、けうといものであつた」遊「イヤモウけうといの何のと、かやうなものではござらなんだ」憲「お銚子わつさりと是で一ッ呑みませう」遊「さて〳〵皆々きつい名人、わけて縫之助殿はなか〳〵あぢをおやりなさるよ、本の役者と見えまする」憲「弟はえらうようござりまする、ハヽヽヽ」遊「今の妻菊になつたは傾城の總角ぢやな」總「オヽ恥し」遊「なんの恥しい事はない、身は禁裏の御用相勤める、川浦遊軒といふもの、折々は廓へ行くであらう、よく見知つたがよいぞよ」總「かね〴〵お名は噂してをりやんす、ちつと廓へもお出なさんせえ」才兵衞「イヤもうやつて見やうと思へども、サア狂言にかゝるが否や、一口もいける物ぢやござりませぬ、小市〳〵」小市「エヽ」才「貴樣は太鼓持程行つて、面の皮が厚うてえらうえい」小市「何を才兵衞さんのいはんすやら、私やモウお前のぱち〳〵とものをいはんすやうに云つて見やうと思うて

ませうならば、有難う存じまする」縫「ムウ扨は先年勘當したる谷坂兵内が倅和田右衞門で有つたよな、勘當ゆるさいで何とせう、隨分忠義を勵んでくれよ」小「エヽ有難うござりまする」總、喜「樣子は殘らず承りました」ト兩人出る。縫「ヤア二人の衆か」喜「たとへいかやうに思召ましても、姫君樣をお心根不便と思召し、お止りなさらねば武士の道は立ませぬ」總「其上お前が國へお入なされませぬゆゑ、後室樣の惡心、里の子戸根五郎樣を世に立てんとさま〴〵の企、お前のお心一ッで國が亂れまする、サアなんと」縫「成程姫の心といひあやまつて、姫と夫婦になつて此家國を治めうワイの」總「スリヤ御得心でござりまするか」花「エヽ嬉うござりまする」小「若殿御得心の上からは、御祝言の壽き御祝儀〳〵」トすりがね太鼓。「女房よんだ川へほつこめ」ト辨之作家來多勢引連れ、水あぶせのなり、もみの頭巾にて手桶持出る。總「戸根五郎樣、心得ぬてい何故これへお出」辨「何ゆゑでもない、若殿藤太郎殿と姫と祝言めさるゝと聞いたによつて、祝うて水をさし上る」縫「まつた藤太郎是にをりまするぞ」辨「さう見たによつて家來共」侍「女房よんだ川へほつこめ〳〵」小「まつた最前より、若樣を附廻し何とする、寄つたら爲にならぬぞ」辨「よい推量、姫と夫婦になつて家を繼がうと思うた所に、思ひよらぬ藤太郎、打殺して家國治める、早く殘らず腹を切れ〳〵」小「さう有らうと思うた、遁れぬ所覺悟せ

今の内に落したさうにござります、こつちへ下さりませ」花「此守袋にて藤太郎樣參る陸奥と書いてあるから、そんならお前は藤太郎樣ぢやナ」縫「夫をしつたこなたは」花「云號の生駒姫でござんすワイなア」縫「南無三寶」ト遁んとする。花「それをソレ止めてたも〳〵」皆々「マア〳〵お待なされませ」花「エヽ聞えませぬ藤太郎樣、お前がお館へお入なされませぬゆゑ、母樣がさま〴〵の惡逆、お前をのけて私や外に男を持つ氣はござんせぬ、是ほどに思うてゐるものを、胴慾なお心入でござりますなア」縫「身持放埓ゆゑに國を出奔して、所々方々とさまよふうち、言かはした陸奥も死る、何面目に妹脊山の家へ世繼に入らうぞと、心は出家になつて居る、何面目にと存じたに、恥かしい對面をしますワイのう」花「かうお目に懸りますからは、何ぼうでも離しは致しませぬ、お止りなされて下さりませ、但し死にませうか」縫「サアそれは」花「死にませうか、サア〳〵〳〵」皆々「何でござりまする」圖「扨は櫻木藤太郎殿ぢやよナ、此通り戶根五郎樣へ注進」ト かけ出る、小市圖書を切り止め刺す。皆々「これは」小「御不審御尤、私儀は先年御勘當を蒙りし谷坂兵内が倅、和田右衞門と申す者でござりまする。若殿出奔なされたと承り、所々方々を尋廻り、何卒勘當お詫の願ひ、父が存念を立てんと存じて、若殿とも存じませず、只今まで附添ひをりましてござるも武運を開くべき瑞相、何卒昔の勘當御赦免下さり

圖「コリヤ〳〵姫君へのお慰に、曲持を致してお目にかけい」縫「畏りした」侍「お氣にさへ入れば褒美はいか程でも下さるゝ、早く〳〵」縫「東西〳〵、是迄力持はあまたござれども、重い物をさし上げますばかり、此度は曲ざしでござりまする、ハリトウヽ」ト輕業の三味線になり、小市後にて使ふ。圖「よいよ〳〵」縫「と留めました處が野中の一本杉、返して參りますとあまの釣舟、ハリトウ〳〵」ト三味線にてとめる。「御はうびにどつと褒めた」圖「よいよ〳〵」縫「是より山がらの餌おとし、鶯の谷わたり、あなたこなたへ通うて參る、ハリトウ〳〵」ト是よりいろ〳〵樽を使ふ、トいろ〳〵をかしき事あるべし、縫之助女形にぬれる、小市一人にて曲持してゐる、圖書悧りして反打ちにらむ、小市三味線に合せ顫ひ〳〵樽をつかふ、力持女形に突飛され、圖書に抱つく。圖「何ひろぐ大盗人め」縫「ごゆるされませ〳〵」ト橋懸りへ遁る。圖「おのれらは人をうつけにした奴ぢや」縫「力持でごんすワイの」圖「まだ〳〵めんえうふしぎな事をすると思へば、後から黑いものを著て遣ひをる、あれで何でもなる筈ぢや、大盗人めが、こゝには叶はぬ出てうせう、うせぬか、まつ二ッにするぞよ」縫「アイ〳〵さつぱりとしくじつた」花「これアノ男にちよと尋ねたい事がある、爰へ招でたも」圖「お召なさるゝ、ずつと出ませい」縫「ハイ〳〵御用でござりますか」花「此守袋はそなたのか」縫「ハイ私がのでござりまする、エヽ

付ぢやと、自に譲らん爲であらうがナ、怖いやつぢやなア、去ながら身に取つて覺えのない事、必ず疑ふてばし下さるなや」喜「そりやさうありさうなものぢやてや」ト兩人顔見合せ。紋「こりや〳〵兩人、餘り強う詮議して、姉様某を不孝ものに致すなよ」花浦「兎にも角にもみづからがある故、多勢の難儀、さらば」ト自害せうとする、靭負留める。圖「おまちなされ妻菊どの、姫君様が自害なされますと、忠臣かへつて不忠となりますぞ」記「オヽさうぢや、強う詮議すると姫は死る、そちは主殺となるがや」縫「エヽ槇の戸さん、コリヤまあ何とせうぞいナ」喜「現在しれてある事を、ハテ仕合な後室様ぢやなア」記「やれ嬉しやの」ト侍走り出て。侍「申上げまする、珍しきぼうのし力持を致しまする、中々面白い事でござりまする、お姫様のお慰にと存じ、ひかへさし置ましてござりまするが、返しませうか、いかゞ仕りませう」圖「幸ひ〳〵、姫君のよいお慰み、是へ通さつしやい」侍「ハア」圖「靭負之丞様後室様には奥へお入あられませう」記「ヲヽ足元の明いうちに奥へ行きませう」喜「エヽ仕合な」記「コリヤたつていふと姫は死るぞや」皆々「先お入なされませう」ト神樂になりみな〳〵入る、花浦唐子殘りゐる。子供「アレ今の力持がくるワイなア」子供「ほんになア」ト輕業の三味線になる、ト縫之助力持の形、小手脚半にて樽をかたげ、其後に黒き衣裳を著け小市出る。縫「サア〳〵評判の力持ひやうばんの〳〵」

ト向ふへ出る。「何の用ぢや」總「縄懸ける、手をまはしや」中「だまれ、此玄妙院には何の咎あつて縄かける」總「いふまい里の子戸根五郎と同腹になつて、お家を呑うとする大悪人、遁れぬ覺悟」、喜「黒い此目でにらんで置いた」中「此玄妙院には悪逆といふ何ぞ證據があるか」總「神主右京、さいぜんの箱是へ」圖「ハア」ト神主右京箱を持出る。總「此箱覺があらうがの」中「此箱を」ト立廻り行る。總「掛奉る願主玄妙院」中「もううぬを」ト切懸ける、箱にて受る、箱しかけにて破る、中より藁人形願書出る。總「ソレ槇の戸さん」喜「合點でござんす」ト願書を取る、才「夫を」ト槇の戸にかゝる、立廻あつて軍藏を押へ。喜「敬つて申す願書、櫻木藤太郎を三七日の間に命を取りたまへ、玄妙院是を承る、願主何某」才、中「夫を」ト立廻あつて、二人を見事に押へ括る。記「まて〳〵、大切な玄妙院になぜ縄を懸けたぞ」喜「後室様、あまり賢人だて仰るな、若殿様をのろうた玄妙院、夫に組する軍藏縄かけたが誤りか」圖「スリヤ御詮議を其元がなさるゝぢやまで」喜「急度いたしてお目に懸ませう、此詮議したら、此何がしと書いてある願主も大かた知さうなもの、ナア後室様」記「されば」ト氣味わるくいふ。總、喜「サア有様にいへ」中「しらぬ」總、喜「しらねば斯ぢや」ト刀の鞘にてこじる、兩人苦しき思入。記「やれまて〳〵、エ、憎い奴らぢやなァ、此様な大それた事を企むやつらぢやによつて、事あらはれたらコリヤ後室様の云

な」今「なぜ其やうに覺召ます、其お氣をおいさめ申しませう爲、皆も神慮を祈りまするではござりませぬか」終「それ〳〵主水が申しまする通り、皆神慮を祈りまするも、御氣色がわるうござれば母様への不孝、姉様なぜお氣をいさめさつしやりませぬ」記「いやモウとかく姫の歎きやるが悲しきゆゑ、先達て玄妙院を頼み、祈禱を誂へ置いたが、玄妙院は怠らず祈禱をしやるで有らうの」中「仰の通り、三七日が間壇を飾り、大聖不動明王に祈をかけ、姫君安全家繁昌の御祈禱を致します」記「オヽ大儀〳〵」オ「イヤ何ほう若殿の行方が知れても、傾城ぐるひに國を出奔する程の大だはけ、何の神も納受ござらうぞ、コリヤやはり玄妙院の勸の通りになされたがよからう」總「軍藏殿今のお詞のはし何とやら藤太郎様を蔑したる一言、何すればお家が治りまするな」オ「妻菊女のしつた事でない、すッこんでゐやれ」總「外記之進が娘妻菊、申す事は申さねばなりませぬ」オ「いうて聞さう、若殿が此お家繼さしやつたというて、役に立たぬ藤太郎殿、さつぱりと縁を切り、後室様の里の子、大藏様をつがすが上分別さ」總「そりやどなたの御捌で」中「此玄妙院が申上げた」喜「玄妙院殿、スリヤこなさんがお家の指圖さつしやるのぢやの」中「御家が大切さに申上げたが何んとした」喜「妻菊さん」鳥「槇の戸さん」喜「モウ詮議せにやならぬワイな」總鳥「大方様子が知れて來た」喜「玄妙院殿」總「ちよつとお目に懸りませう」中「身どもにか」

恵比須の心にて出る、總角は唐子打連れ、はうろく頭巾、袋かたげ槌を持ち、大黒の形にて、少しえびす大黒三社の樣な歌にて所作事有りて仕舞かぐらになる、ト内より「後室樣のお入」ト喜「いざお入遊ばされませう」ト記内後室の形、中將は山伏立妙院、才兵衛上下にて出る、花浦紋之丞上へ通り次第に並ぶ。總「後室樣には御參詣でござりまする」記「一家中のもの大儀にこそあれ」ト圖書神主の形にて出向ひ、圖「後室樣若殿樣姫君樣御參詣でござりまするか」紋「神主右京今日は神事勤大儀にこそあれ」圖「ハア」喜「誠に今日の御神事、私共まで斯樣な悦ばしい儀はござりませぬ、追付御願が成就致しませうと存ずる故、たゞ〳〵御目出たう存じます」總「槙の戸さんの云はしやんす通り、わけて此の度の御神事は、一しほ神も納受と存じまする、若殿樣の御行方も追付知れませうと存じまして、お目出度う存じまする」記「誠に此妹脊山の家の事は、外に並びなき歌道の家、櫻木の家の藤太郎殿を聟に取り、是なる生駒姫に娶はせ、家を繼がせんと思ひし所に、藤太郎には傾城狂ひに身持放埒、北上國を出奔なされたとある、何卒行方を尋ね出し、家を繼がせん爲神いさめ、皆も神慮を仰いでたも、賴むぞよ」花「廓通ひなさるゝとあつて悋氣する氣はなけれど、見ぬ戀にあこがれた藤太郎樣、なんぼう神樣を祈つたとても、自らに添うては下さんすまいと思うて、私や悲しうござりますワイ

三十石艠始

狂言作者　並木正三

序幕　御殿の場

役人替名

一傾城花浦	市松	一幇間小市	来助
一揚屋才兵衛	友十郎	一圖書	岩五郎
一やりて杉	文十郎	一熊本辨之作	次郎三
一淀與三右衛門	四郎五郎	一記内	彌平次
一小性紋之丞	かつま	一石橋中將	貫藏
一志賀左近	吉太郎	一川浦遊軒	大五郎
一與三右衛門妹喜蝶	小伊三	一花滿憲法	新九郎
一傾城總角	金作	一みふれ	喜世三
一花滿縫之助	三十郎	一其外仕出し	

○座敷狂言

造物三間の間に社壇一面の玉垣、前に櫻幕引くと太鼓打ち懸る、面白や三保の津の浪といふ歌になる、

向ふより紋之丞花浦唐子大勢太鼓にて踊り出る、跡より總角喜蝶ふり袖にて、喜蝶は烏帽子釣鯛持ち

脚本傑作集 上 目錄

姉妹達大礎　辰岡萬作、　寛政七年。
伊勢音頭戀寐刃　近松半二門下近松德三、　寛政八年。
猿曳門出諷　作者未詳、或は奈河龜助の孫弟子たりし篤助、寛政十年の頃の作か。
これら脚本中には、所謂善良の風俗を亂し、文敎に害ある語句の隨所に散見するものあり。今本書を刊行するに當りては、原文の特色を損ぜざる程度に於て、悉くそれら不穩の文詞を削除若しくは改訂せり。加之假名遣を一定し、宛字の妥當を缺くものを改め、又會話に劇中人物の名字を冠する等、努めて讀者の理解に便ぜん事を期したり。

大正三年七月　校訂者　南　茂　樹

脚本も亦他の多くの德川文學と等しく、先づ大阪に興り、後江戸に榮えたるものにして、淨瑠璃作者の泰斗たる近松門左の如き、亦其始め筆を脚本に染めたり。然れども淨瑠璃芝居に於ける作者の位置が遠く人形遣を凌駕せるに反し、歌舞伎にありては、狂言作者が常に役者の下風に立ちて其頤使に任ずるの風なりしを以て、心ある文士の之が作者を以て自ら喜ぶ者殆んどこれ無く、從つて其作品も亦夫の淨瑠璃に比して甚だ遜色あるを免れず。其稍〻見るべきものを得たるは、後期の初に當りて西に並木正三あり、東に津打治兵衛出でたる後也。今本文庫に收むるに當りては、それら幾多の脚本中、最も人々に膾炙せるもの、其脚色の讀みものとして喜ぶべきもの等十種を選び、之を上下二卷となす。而して上卷には大阪もの五種、下卷には大阪より江戸に下れる並木五瓶の所作二種と共に、江戸作者の作品三種を載す。今上卷に收むる所のもの左の如し

三十石艠始　並木正三、　寶暦九年。

伊賀越乘掛合羽　正三門下奈河龜助、　安永六年。

緒　言

脚本は歌舞伎に伴ふ狂言の特稱にして、演劇の仕組、舞臺の模樣、役者の臺詞等を詳記せるもの、卽ち所謂臺帳なり。蓋し夫の操芝居に於ける淨瑠璃院本と其性質を同じうし、而して更に一層西洋のドラマに類似せるものといふべし。

脚本の筋は之を狂言の世界と稱し、分つて四となす。王代、時代、御家、世話物これなり。王代とは禁中公卿等凡て雲上の事件を脚色せるもの、時代とは專ら源平、北條、足利、菊池、大友等の軍記に基き、それら武將の名に假るもの、御家とは當時の武家に起れる騷動、復讐等の大事件を仕組めるもの、然して世話物とは男達、角力、心中等、材を平民社會の三面記事的方面に取りたるもの也。それらの脚本中には、特に歌舞伎の爲に創作せられたるものあると同時に、丸本物と稱して、操芝居の淨瑠璃を歌舞伎劇に轉用せるもの亦尠なからず。脚本が單に芝居の臺帳として俳優の手控に備へられたる境遇より脫出し、更に一般の讀み物として刊行せらるゝに至れるは、蓋し西澤一鳳に始まれり。世に之を正本と稱す。

脚本集　上